

四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

第五十四冊

成 重 遺 跡 II

第 一 分 冊

2005年3月

香 川 県 教 育 委 員 会
日 本 道 路 公 団

四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

第五十四冊

成 重 遺 跡 II

第 一 分 冊

2005年3月

香 川 県 教 育 委 員 会
日 本 道 路 公 団

序 文

成重遺跡は四国横断自動車道建設に伴い発掘調査が行われた、香川県東かがわ市白鳥に所在する遺跡です。

調査は、香川県教育委員会からの委託で、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが平成9～11年度に用地内の埋蔵文化財の発掘調査を実施し、弥生時代から近世にかけての遺構が多数検出されました。特に弥生時代の遺構の中で、全国的にも珍しい集石遺構が多数検出されたことは注目されます。この他にも竪穴住居跡が多数検出され多量の遺物が出土するなど、この地域の弥生時代集落の研究を進めるうえで大変貴重な資料を提供しました。

このたび、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが平成14年4月から平成16年3月まで実施しておりました整理事業が終了し、財団法人の解散に伴い、これを引継いだ香川県埋蔵文化財センターが『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第五十四冊 成重遺跡Ⅱ』として刊行することになりました。

本報告書が、本県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心を一層深める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土文化財の整理・報告にいたるまでの間、日本道路公団四国支社や関係機関及び地元関係各位には多大なご協力とご指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともご支援賜りますようお願い申し上げます。

平成17年3月

香川県埋蔵文化財センター

所 長 中 村 仁

例 言

1. 本報告書は、四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で、香川県東かがわ市白鳥（旧大川郡白鳥町）に所在する成重遺跡（なりしげいせき）の報告を収録した。本報告では調査区中央部を縦断する国道318号より西側の調査区（Ⅲ区・Ⅳ区・Ⅴ区）の弥生時代の遺構・遺物について収録している。国道318号より東側の調査区（Ⅰ区・Ⅱ区）全体と、西側調査区（Ⅲ区・Ⅳ区・Ⅴ区）の古墳時代以降については『成重遺跡Ⅰ』として報告済みである。

2. 発掘調査は、香川県教育委員会が日本道路公団・香川県土木部から委託され、香川県教育委員会が調査主体、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3. 発掘調査の期間および発掘調査担当は以下のとおりである。

予備調査 期間 平成9年2月～3月

担当 中西昇、北山健一郎、吉田智、住野正和、松本和彦、福西由美子、森川歩

本調査 期間 平成9年4月1日～平成10年3月31日

担当 長元茂樹、西岡達哉、森格也、池田道雄、多田愼、松岡宏一、豊島修、信里芳紀、長井博志、乗松真也、森澤千尋、徳永（東条）貴美、香川直孝、山坂浩樹

期間 平成10年4月1日～平成11年3月31日

担当 長元茂樹、森格也、多田佳弘、多田愼、信里芳紀、松本和彦、森澤千尋、香川直孝、大屋敷慶子、藤澤正則

期間 平成11年6月1日～平成12年3月31日

担当 片桐孝浩、多田佳弘、溝渕大輔、長井博志、多田歩、正山泰久

4. 調査にあたって、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略、名称は平成8年度～平成11年度当時のもの）

香川県土木部横断自動車道対策総室、香川県長尾土木事務所横断道対策課、白鳥町横断道対策課、白鳥町教育委員会、四国横断自動車道白鳥町成重地区対策協議会、地元自治会、地元水利組合

5. 報告書の作成は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。

本報告書の執筆は森、長井が担当し、編集は森が担当した。執筆分担は以下のとおりである。

第1章、第2章第1節～第3節、第4章第1・3・4節 …………… 森

第2章第1節（ST、集石遺構の部分）、第4章第2節 …………… 長井

なお、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが平成15年度末に廃止となったため、報告書刊行業務は香川県埋蔵文化財センターが実施した。

6. 発掘調査・報告書の作成にあたっては、下記の方々の御教示を得た。記して謝意を表したい。(五十音順、敬称略)

石野博信、甲斐昭光、角張淳一、菅原康夫、副島和明、平井美典、湯浅利彦

7. 本報告書で用いる方位の北は、国土座標第Ⅳ系(平成9～11年度当時)の北であり、標高は東京湾平均海水面(T.P.)を基準としている。

また、遺構は下記の略号により表示している。

S B 掘立柱建物跡 S D 溝状遺構 S H 竪穴住居跡 S K 土坑 S P 柱穴
S R 自然河川 S T 埋葬遺構 S X 周溝墓・不明遺構

8. 本遺跡の報告にあたっては、下記のとおり鑑定、分析を委託した。(敬称略)

別府大学(平成14年度)本田光子(赤色顔料分析)、元香川大学谷山讓(石材鑑定)、独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所 松井 章(骨鑑定)、パリノ・サーヴェイ株式会社(土壌分析)、株式会社アルカ(石器実測)

9. 遺物観察表の中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1998年度版』による。

10. 本報告書の石器実測図の網目は摩滅痕を、輪郭線の周囲の実線のうち矢印のものは摩滅・擦痕、使用痕の範囲を、実線の先端部が矢印でないものは敲打痕の範囲を示している。

11. 遺物観察表の中の残存率は、図化した部分についての残存率であり、遺物全体に対するものではない。

12. 遺構断面図の水平線上の数値は、水平線の標高を示している。単位はメートルである。

13. 本書で使用する「第1面」「第2面」の用語は、調査時における検出面の意味で、正確な遺構面ではない。

本文目次

(第1分冊)

第1章 調査に至る経緯と経過	
第1節 調査の経過	1
(1) 発掘調査の経過	1
(2) 整理作業の経過	2
(3) 発掘調査及び整理作業の体制	2
第2章 調査の成果	
第1節 Ⅲ区の調査成果	5
(1) 調査区の概要	5
(2) 弥生時代の遺構・遺物	6
(3) 包含層出土遺物	62
第2節 Ⅳ区の調査成果	68
(1) 調査区の概要	68
(2) 弥生時代の遺構・遺物	74
(3) 包含層出土遺物	204
第3節 Ⅴ区の調査成果	208
(1) 調査区の概要	208
(2) 弥生時代の遺構・遺物	218
(3) 包含層出土遺物	463

(第2分冊)

第3章 自然科学分析の成果	
第1節 成重遺跡出土の赤色顔料	1
第2節 成重遺跡の植物珪酸体分析	4
第4章 まとめ	
第1節 Ⅲ区～Ⅴ区の遺構変遷	9
第2節 Ⅲ区集石遺構について	16
(1) 集石遺構形成の人為性について	16
(2) Ⅲ区集石1、2とST01～03の関係	16
(3) Ⅲ区集石遺構の出土遺物について(補足)	20
(4) 周辺遺構との関係	26
(5) 集石遺構の性格とその形成	26
第3節 集石遺構について	41
(1) 集石遺構の特徴について	41
(2) 弥生時代中期の集石遺構について	41
(3) 弥生時代後期の集石遺構について	42
(4) 集石遺構の性格について	42
(5) 集石遺構の分布状況について	44
第4節 成重遺跡の評価	48

挿 図 目 次

(第1分冊)

第1図	遺跡位置図	1	第44図	Ⅲ区第2面集石2・5平・立・断面図	48
第2図	調査区割図と旧調査区割図	3	第45図	Ⅲ区第2面集石2・5遺物分布図	49
第3図	Ⅲ区新旧調査区割り図	5	第46図	Ⅲ区第2面集石2・5平・立面図	50
第4図	Ⅲ区第2面遺構配置図	7、8	第47図	Ⅲ区第2面集石2・5接合関係図	51
第5図	Ⅲ区(旧E1・2区)南壁・東壁土層図	9	第48図	Ⅲ区第2面集石2出土遺物(1)	52
第6図	Ⅲ区第2面SD03出土遺物	10	第49図	Ⅲ区第2面集石2出土遺物(2)	53
第7図	Ⅲ区第2面SK01平・断面図, 出土遺物	10	第50図	Ⅲ区第2面集石2出土遺物(3)	54
第8図	Ⅲ区第2面SK02平・断面図, 出土遺物	11	第51図	Ⅲ区第2面集石2出土遺物(4), 集石2付近包含層出土遺物	56
第9図	Ⅲ区第2面SK03・07平・断面図	11	第52図	Ⅲ区第2面集石5出土遺物(1)	58
第10図	Ⅲ区第2面SK04平・断面図	11	第53図	Ⅲ区第2面集石5出土遺物(2), 集石5付近包含層出土遺物	59
第11図	Ⅲ区第2面SK06平・断面図, 出土遺物	12	第54図	Ⅲ区第2面集石5下位SK01平・断面図, 位置図, 出土遺物	60
第12図	Ⅲ区第2面SK08・09・10平・断面図	13	第55図	Ⅲ区第2面集石2・5付近包含層出土遺物	61
第13図	Ⅲ区第2面SK11平・断面図, 出土遺物	13	第56図	Ⅲ区第2面包含層出土遺物(1) (旧E1区)	62
第14図	Ⅲ区第2面SK12平・断面図	13	第57図	Ⅲ区第2面包含層出土遺物(2) (旧E1区)	63
第15図	Ⅲ区第2面SK13平・断面図	14	第58図	Ⅲ区第2面包含層出土遺物(3) (旧E2区)	63
第16図	Ⅲ区第2面SK14平・断面図, 出土遺物	14	第59図	Ⅲ区第2面包含層出土遺物(4) (旧E2区)	64
第17図	Ⅲ区第2面SK15平・断面図	14	第60図	Ⅲ区第2面包含層出土遺物(5) (旧E2区)	65
第18図	Ⅲ区第2面SX01・02平・断面図	15	第61図	Ⅲ区第2面包含層出土遺物(6) (旧E2区)	66
第19図	Ⅲ区第2面SX01・02墳丘地形図	17	第62図	Ⅲ区第2面包含層出土遺物(7) (旧E2区)	67
第20図	Ⅲ区第2面SX01・02遺物出土状況図	18	第63図	Ⅳ区新旧調査区割図	68
第21図	Ⅲ区第2面SX02出土遺物(1)	19	第64図	Ⅳ区第2面遺構配置図	69
第22図	Ⅲ区第2面SX02出土遺物(2)	20	第65図	Ⅳ区第2面北壁土層図	71
第23図	Ⅲ区第2面SX02出土遺物(3)	21	第66図	Ⅳ区(旧F2区東橋脚部) 東壁・南壁土層図	72
第24図	Ⅲ区第2面SX01-D01, SX02-D02, SX01-K01出土遺物	22	第67図	Ⅳ区(旧F2区西橋脚部) 西・南・東壁土層図	73
第25図	Ⅲ区第2面ST01・02平・断面図	24	第68図	Ⅳ区第2面SH01平・断面図	74
第26図	Ⅲ区第2面ST03平・断面図	25	第69図	Ⅳ区第2面SH01出土遺物(1)	75
第27図	Ⅲ区第2面ST01・03出土遺物	26	第70図	Ⅳ区第2面SH01出土遺物(2)	76
第28図	Ⅲ区第2面集石1・3平・立・断面図, SD03平・断面図	28	第71図	Ⅳ区第2面SH01出土遺物(3)	77
第29図	Ⅲ区第2面集石1・3遺物分布図	29	第72図	Ⅳ区第2面SH02平・断面図, 変遷図	79
第30図	Ⅲ区第2面集石1・3平・立面図	30	第73図	Ⅳ区第2面SH02出土遺物(1)	80
第31図	Ⅲ区第2面集石1・3接合関係図	31	第74図	Ⅳ区第2面SH02出土遺物(2)	81
第32図	Ⅲ区第2面集石3遺物分布図	32	第75図	Ⅳ区第2面SH02出土遺物(3)	82
第33図	Ⅲ区第2面集石1出土遺物(1)	33	第76図	Ⅳ区第2面SH02出土遺物(4)	83
第34図	Ⅲ区第2面集石1出土遺物(2)	34	第77図	Ⅳ区第2面SH02出土遺物(5)	84
第35図	Ⅲ区第2面集石1出土遺物(3)	35	第78図	Ⅳ区第2面SH03・05平・断面図	85
第36図	Ⅲ区第2面集石1出土遺物(4)	36			
第37図	Ⅲ区第2面集石1出土遺物(5)	37			
第38図	Ⅲ区第2面集石1付近包含層出土遺物	39			
第39図	Ⅲ区第2面集石3出土遺物(1)	41			
第40図	Ⅲ区第2面集石3出土遺物(2)	42			
第41図	Ⅲ区第2面集石3出土遺物(3)	43			
第42図	Ⅲ区第2面集石3出土遺物(4)	44			
第43図	Ⅲ区第2面集石3付近包含層, 集石1・3付近包含層出土遺物	46			

第79図	IV区第2面SH03出土遺物	86	出土遺物(3)	114	
第80図	IV区第2面SH04平・断面図, 出土遺物	86	第124図	IV区第2面集石群(旧F1区)	
第81図	IV区第2面SH05出土遺物	87	出土遺物(4)	115	
第82図	IV区第2面SH06平・断面図	88	第125図	IV区第2面集石群(旧F1区)	
第83図	IV区第2面SH06出土遺物	88	出土遺物(5)	116	
第84図	IV区第2面SD01出土遺物(1)	90	第126図	IV区第2面集石群(旧F2区)	
第85図	IV区第2面SD01出土遺物(2)	91	出土遺物(1)	117	
第86図	IV区第2面SD01出土遺物(3)	92	第127図	IV区第2面集石群(旧F2区)	
第87図	IV区第2面SD01出土遺物(4)	93	出土遺物(2)	118	
第88図	IV区第2面SD01出土遺物(5)	94	第128図	IV区第2面集石群(旧F2区)	
第89図	IV区第2面SK01平・断面図	94	出土遺物(3)	119	
第90図	IV区第2面SK02平・断面図	95	第129図	IV区第2面集石群(旧F2区)	
第91図	IV区第2面SK03平・断面図, 出土遺物	95	出土遺物(4)	121	
第92図	IV区第2面SK04平・断面図	95	第130図	IV区第2面集石群(旧F2区)	
第93図	IV区第2面SK05平・断面図	96	出土遺物(5)	122	
第94図	IV区第2面SK06平・断面図, 出土遺物	96	第131図	IV区第2面集石群(旧F2区)	
第95図	IV区第2面SK07平・断面図	96	出土遺物(6)	123	
第96図	IV区第2面SK08平・断面図	97	第132図	IV区第2面集石群(旧F2区)	
第97図	IV区第2面SK09平・断面図	97	出土遺物(7)	124	
第98図	IV区第2面SK10平・断面図	97	第133図	IV区第2面集石群(旧F2区)	
第99図	IV区第2面SK11平・断面図	97	出土遺物(8)	125	
第100図	IV区第2面SK12平・断面図	98	第134図	IV区第2面集石群(旧F2区)	
第101図	IV区第2面SK13平・断面図	98	出土遺物(9)	127	
第102図	IV区第2面SK14・15平・断面図	99	第135図	IV区第2面集石群(旧F2区)	
第103図	IV区第2面SK16平・断面図	100	出土遺物(10)	128	
第104図	IV区第2面SK17平・断面図, 出土遺物	100	第136図	IV区第2面集石群(旧F2区)	
第105図	IV区第2面SK18平・断面図	101	出土遺物(11)	129	
第106図	IV区第2面SK19平・断面図	101	第137図	IV区第2面集石群(旧F2区)	
第107図	IV区第2面SK20平・断面図	101	出土遺物(12)	130	
第108図	IV区第2面SK21平・断面図	102	第138図	IV区第2面集石群(旧F2区)	
第109図	IV区第2面SK22平・断面図	102	出土遺物(13)	131	
第110図	IV区第2面SK23平・断面図, 出土遺物	102	第139図	IV区第2面集石群(旧F2区)	
第111図	IV区第2面SK24平・断面図	102	出土遺物(14)	132	
第112図	IV区第2面ST01平・断面図	103	第140図	IV区第2面集石群(旧F2区)	
第113図	IV区第2面ST01出土遺物	103	出土遺物(15)	133	
第114図	IV区第2面SX01平・断面図, SX01-K01 平・断面図, SX01遺物出土状況図	105	第141図	IV区第2面集石群(旧F2区)	
第115図	IV区第2面SX01出土遺物	106	出土遺物(16)	134	
第116図	IV区第2面SX02平・断面図, SX02-K02平・断面図	107	第142図	IV区第2面集石群(旧F2区)	
第117図	IV区第2面SX02-K02上面遺物・ 礫出土状況図	107	出土遺物(17)	135	
第118図	IV区第2面SX02出土遺物	108	第143図	IV区第2面集石群(旧F2区)	
第119図	IV区第2面SX03平・断面図	108	出土遺物(18)	136	
第120図	IV区第2面SX04平・断面図, 出土遺物	109	第144図	IV区第2面集石遺構(旧F1区)	
第121図	IV区第2面集石群(旧F1区) 出土遺物(1)	112	グリッド割図	137	
第122図	IV区第2面集石群(旧F1区) 出土遺物(2)	113	第145図	IV区第2面集石遺構(旧F2区)	
第123図	IV区第2面集石群(旧F1区)		グリッド割図	137	
			第146図	IV区第2面集石4平・立面図	139、140
			第147図	IV区第2面集石4測量図	141、142
			第148図	IV区第2面集石4土層断面図	143、144
			第149図	IV区第2面集石4遺物出土状況平・ 立面図	145、146

第150図	IV区第2面集石4出土遺物(1)……………	148			
第151図	IV区第2面集石4出土遺物(2)……………	149	第193図	IV区第2面集石19出土遺物……………	190
第152図	IV区第2面集石4出土遺物(3)……………	150	第194図	IV区第2面集石20平・立面図……………	191
第153図	IV区第2面集石4出土遺物(4)……………	151	第195図	IV区第2面集石20測量図……………	191
第154図	IV区第2面集石4出土遺物(5)……………	153	第196図	IV区第2面集石20遺物出土状況平・ 立面図……………	192
第155図	IV区第2面集石4周辺出土遺物(1)………	154	第197図	IV区第2面集石20出土遺物……………	192
第156図	IV区第2面集石4周辺出土遺物(2)………	155	第198図	IV区第2面集石21平・立面図……………	192
第157図	IV区第2面集石4周辺出土遺物(3)………	156	第199図	IV区第2面集石21平・断面図……………	193
第158図	IV区第2面集石6平・立面図……………	157、158	第200図	IV区第2面集石21測量図……………	193
第159図	IV区第2面集石6測量図……………	159、160	第201図	IV区第2面集石21下部土坑平・断面図…	193
第160図	IV区第2面集石6, 集石6周辺出土遺物	161	第202図	IV区第2面集石21出土遺物……………	194
第161図	IV区第2面集石7測量図……………	162	第203図	IV区第2面集石22平・立面図……………	194
第162図	IV区第2面集石7平・立面図……………	163、164	第204図	IV区第2面集石22測量図……………	195
第163図	IV区第2面集石7遺物出土状況平・立面図 ……………	165、166	第205図	IV区第2面集石22平・断面図……………	196
第164図	IV区第2面集石7出土遺物……………	167	第206図	IV区第2面集石22出土遺物……………	197
第165図	IV区第2面集石8平・立面図……………	169	第207図	IV区第2面集石23平・立面図……………	198
第166図	IV区第2面集石8, 集石8上部包含層 出土遺物……………	170	第208図	IV区第2面集石23測量図……………	198
第167図	IV区第2面集石9平・立面図……………	171	第209図	IV区第2面集石23遺物出土状況平・ 立面図, 土層断面図……………	199
第168図	IV区第2面集石9遺物出土状況平・ 立面図……………	172	第210図	IV区第2面集石23出土遺物……………	199
第169図	IV区第2面集石9出土遺物(1)……………	173	第211図	IV区第2面集石24平・立面図……………	200
第170図	IV区第2面集石9出土遺物(2)……………	174	第212図	IV区第2面集石24測量図……………	200
第171図	IV区第2面集石9出土遺物(3)……………	174	第213図	IV区第2面集石24平・断面図……………	201
第172図	IV区第2面集石10平・立面図……………	175	第214図	IV区第2面集石24下部遺構(SK01・02) 平・断面図……………	202
第173図	IV区第2面集石10遺物出土状況平・ 立面図……………	176	第215図	IV区第2面集石24出土遺物……………	202
第174図	IV区第2面集石10出土遺物(1)……………	177	第216図	IV区第2面集石25平・立面図……………	203
第175図	IV区第2面集石10出土遺物(2)……………	178	第217図	IV区第2面集石25測量図……………	203
第176図	IV区第2面集石10出土遺物(3)……………	179	第218図	IV区第2面集石25平・断面図……………	204
第177図	IV区第2面集石10上部包含層出土遺物…	179	第219図	IV区第2面包含層出土遺物(1) (旧F1区)……………	205
第178図	IV区第2面集石11平・立面図……………	180	第220図	IV区第2面包含層出土遺物(2) (旧F1区)……………	206
第179図	IV区第2面集石11遺物出土状況平・ 立面図……………	180	第221図	V区新旧調査区割図……………	208
第180図	IV区第2面集石11出土遺物……………	181	第222図	V区第2面遺構配置図……………	209、210
第181図	IV区第2面集石12平・立面図……………	182	第223図	V区(旧G1・4・5区)北壁土層柱状図	212
第182図	IV区第2面集石12遺物出土状況平・ 立面図……………	182	第224図	V区(旧G4区)北壁土層図……………	213
第183図	IV区集石12出土遺物(1)……………	183	第225図	V区(旧G5・6・8区)西壁土層柱状図	214
第184図	IV区集石12出土遺物(2)……………	184	第226図	V区(旧G3区)西壁土層図……………	215
第185図	IV区集石12周辺出土遺物……………	184	第227図	V区(旧G3区)南壁土層図……………	216
第186図	IV区第2面集石13平・立面図……………	185	第228図	V区第2面SH01平・断面図……………	219
第187図	IV区第2面集石13遺物出土状況平・ 立面図……………	185	第229図	V区第2面SH01内SK01・02平・断面図	220
第188図	IV区第2面集石13, 集石13周辺出土遺物	186	第230図	V区第2面SH01炭化材出土状況……………	220
第189図	IV区第2面集石14平・立面図……………	187	第231図	V区第2面SH01石器分布図……………	221
第190図	IV区第2面集石19平・立面図……………	187	第232図	V区第2面SH01グリッド番号図……………	222
第191図	IV区第2面集石19測量図……………	188	第233図	V区第2面SH01剥片出土量分布図……………	223
第192図	IV区第2面集石19遺物出土状況平・ 立面図……………	189	第234図	V区第2面SH01変遷図……………	224
			第235図	V区第2面SH01出土遺物(1)……………	225
			第236図	V区第2面SH01出土遺物(2)……………	226

第237图	V区第2面SH01出土遺物(3)	227	第285图	V区第2面SH06出土遺物(6)	277
第238图	V区第2面SH01出土遺物(4)	228	第286图	V区第2面SH06出土遺物(7)	278
第239图	V区第2面SH01出土遺物(5)	229	第287图	V区第2面SH07平·断面图	279
第240图	V区第2面SH01出土遺物(6)	230	第288图	V区第2面SH08·SD19·20·21平·断面图, SH08内土坑平·断面图, SD20出土遺物	280
第241图	V区第2面SH01出土遺物(7)	231	第289图	V区第2面SH08出土遺物(1)	281
第242图	V区第2面SH01出土遺物(8)	232	第290图	V区第2面SH08出土遺物(2)	282
第243图	V区第2面SH01出土遺物(9)	233	第291图	V区第2面SH08出土遺物(3)	283
第244图	V区第2面SH01出土遺物(10)	234	第292图	V区第2面SH09平·断面图	284
第245图	V区第2面SH01出土遺物(11)	235	第293图	V区第2面SH09内SP断面图	285
第246图	V区第2面SH01出土遺物(12)	236	第294图	V区第2面SH09遺物· 炭化材等出土状況图	285
第247图	V区第2面SH01出土遺物(13)	237	第295图	V区第2面SH09出土遺物(1)	286
第248图	V区第2面SH01出土遺物(14)	239	第296图	V区第2面SH09出土遺物(2)	287
第249图	V区第2面SH01出土遺物(15)	240	第297图	V区第2面SH09出土遺物(3)	288
第250图	V区第2面SH01出土遺物(16)	241	第298图	V区第2面SH09出土遺物(4)	289
第251图	V区第2面SH01出土遺物(17)	242	第299图	V区第2面SH09出土遺物(5)	290
第252图	V区第2面SH01出土遺物(18)	243	第300图	V区第2面SH10平·断面图, SH10内SK01 平·断面图, SH10内SP断面图	292
第253图	V区第2面SH01出土遺物(19)	244	第301图	V区第2面SH10内SK02·03平·断面图	293
第254图	V区第2面SH01出土遺物(20)	245	第302图	V区第2面SH10出土遺物(1)	293
第255图	V区第2面SH01出土遺物(21)	246	第303图	V区第2面SH10出土遺物(2)	294
第256图	V区第2面SH01出土遺物(22)	247	第304图	V区第2面SH10出土遺物(3)	295
第257图	V区第2面SH01(古)出土遺物	248	第305图	V区第2面SH11平·断面图, SH11内 SK01·02平·断面图	296
第258图	V区第2面SH02平·断面图	249	第306图	V区第2面SH11内SP断面图	297
第259图	V区第2面SH02変遷图	250	第307图	V区第2面SH11遺物出土状況	297
第260图	V区第2面SH02出土遺物(1)	251	第308图	V区第2面SH11出土遺物(1)	298
第261图	V区第2面SH02出土遺物(2)	252	第309图	V区第2面SH11出土遺物(2)	299
第262图	V区第2面SH02出土遺物(3)	253	第310图	V区第2面SH11出土遺物(3)	300
第263图	V区第2面SH02出土遺物(4)	254	第311图	V区第2面SH09·10·11平面图	301
第264图	V区第2面SH02出土遺物(5)	255	第312图	V区第2面SH12平·断面图, 出土遺物	302
第265图	V区第2面SH03平·断面图	257	第313图	V区第2面SH13平·断面图	303
第266图	V区第2面SH03出土遺物(1)	258	第314图	V区第2面SB01平·断面图, SP01·02出土遺物	304
第267图	V区第2面SH03出土遺物(2)	259	第315图	V区第2面SB02平·断面图, SP01出土遺物	305
第268图	V区第2面SH04平·断面图	260	第316图	V区第2面SB03平·断面图, SP01出土遺物	306
第269图	V区第2面SH04出土遺物(1)	261	第317图	V区第2面SB04平·断面图, SP01出土遺物	307
第270图	V区第2面SH04出土遺物(2)	262	第318图	V区第2面SB05平·断面图	309
第271图	V区第2面SH04出土遺物(3)	263	第319图	V区第2面SB06平·断面图	310
第272图	V区第2面SH05平·断面图, SH05内土坑平·断面图	264	第320图	V区第2面SB07平·断面图, SP01~03出土遺物	311
第273图	V区第2面SH05出土遺物(1)	265	第321图	V区第2面SB08平·断面图	312
第274图	V区第2面SH05出土遺物(2)	266	第322图	V区第2面SB09平·断面图	313
第275图	V区第2面SH05出土遺物(3)	267	第323图	V区第2面SB10平·断面图, SP01出土遺物	313
第276图	V区第2面SH03·04·05配置图	268			
第277图	V区第2面SH06平·断面图, SH06内土坑平·断面图	269			
第278图	V区第2面SH06内SP断面图	270			
第279图	V区第2面SH06変遷图	271			
第280图	V区第2面SH06出土遺物(1)	272			
第281图	V区第2面SH06出土遺物(2)	273			
第282图	V区第2面SH06出土遺物(3)	274			
第283图	V区第2面SH06出土遺物(4)	275			
第284图	V区第2面SH06出土遺物(5)	276			

第324图	V区第2面SD01·10平面图	315	第373图	V区第2面SK20平·断面图, 出土遺物	351
第325图	V区第2面SD01断面图	316	第374图	V区第2面SK21平·断面图, 出土遺物	351
第326图	V区第2面SD01出土遺物	316	第375图	V区第2面SK22平·断面图	352
第327图	V区第2面SD02断面图, 出土遺物	316	第376图	V区第2面SK23平·断面图	352
第328图	V区第2面SD03~06·08断面图	317	第377图	V区第2面SK24平·断面图	352
第329图	V区第2面SD07断面图, 出土遺物	317	第378图	V区第2面SK25平·断面图	353
第330图	V区第2面SD09断面图, 出土遺物	318	第379图	V区第2面SK26平·断面图, 出土遺物	353
第331图	V区第2面SD10断面图	319	第380图	V区第2面SK27平·断面图	354
第332图	V区第2面SD10出土遺物(1)	320	第381图	V区第2面SK28平·断面图	354
第333图	V区第2面SD10出土遺物(2)	321	第382图	V区第2面SK29平·断面图	354
第334图	V区第2面SD10出土遺物(3)	322	第383图	V区第2面SK30平·断面图	355
第335图	V区第2面SD10出土遺物(4)	324	第384图	V区第2面SK31平·断面图	355
第336图	V区第2面SD10出土遺物(5)	325	第385图	V区第2面SK31出土遺物	356
第337图	V区第2面SD10出土遺物(6)	326	第386图	V区第2面SK32平·断面图	356
第338图	V区第2面SD10出土遺物(7)	327	第387图	V区第2面SK33平·断面图, 出土遺物	357
第339图	V区第2面SD10出土遺物(8)	328	第388图	V区第2面SK34平·断面图, 出土遺物	357
第340图	V区第2面SD10出土遺物(9)	329	第389图	V区第2面SK35平·断面图	358
第341图	V区第2面SD10出土遺物(10)	331	第390图	V区第2面SK36平·断面图	358
第342图	V区第2面SD10出土遺物(11)	332	第391图	V区第2面SK37平·断面图, 出土遺物	358
第343图	V区第2面SD10出土遺物(12)	333	第392图	V区第2面SK38平·断面图	358
第344图	V区第2面SD11断面图, 出土遺物	334	第393图	V区第2面SK39平·断面图	358
第345图	V区第2面SD12断面图, 出土遺物	334	第394图	V区第2面SK40平·断面图	358
第346图	V区第2面SD13~18断面图	335	第395图	V区第2面SK41平·断面图	359
第347图	V区第2面SD14出土遺物	335	第396图	V区第2面SK42平·断面图	360
第348图	V区第2面SD22平·断面图, 出土遺物	336	第397图	V区第2面SK43平·断面图	360
第349图	V区第2面SD23出土遺物(1)	338	第398图	V区第2面SP01~12平·断面图	360
第350图	V区第2面SD23出土遺物(2)	339	第399图	V区第2面SP01·02·10出土遺物	361
第351图	V区第2面SK01平·断面图, 出土遺物	340	第400图	V区第2面SP13~17平·断面图	361
第352图	V区第2面SK02平·断面图, 遺物出土狀況图	340	第401图	V区第2面SP20平·断面图, 出土遺物	362
第353图	V区第2面SK02出土遺物	341	第402图	V区第2面SP21平·断面图, 出土遺物	362
第354图	V区第2面SK03·SP18平·断面图	341	第403图	V区第2面SP22出土遺物	363
第355图	V区第2面SK04平·断面图	342	第404图	V区第2面SP23·24·25·26·27·28·29 出土遺物	364
第356图	V区第2面SK05平·断面图	342	第405图	V区第2面ST01平·断面图, 出土遺物	365
第357图	V区第2面SK06平·断面图	342	第406图	V区第2面ST02平·断面图, 出土遺物	365
第358图	V区第2面SK07平·断面图	342	第407图	V区第2面ST03平·断面图, 出土遺物	366
第359图	V区第2面SK08·SP20平·断面图	343	第408图	V区第2面ST06平·断面图, 出土遺物	366
第360图	V区第2面SK09平·断面图, 出土遺物	343	第409图	V区第2面ST07平·断面图	367
第361图	V区第2面SK10平·断面图	343	第410图	V区第2面ST08平·断面图, 出土遺物, 使用狀況	368
第362图	V区第2面SK11平·断面图	343	第411图	V区第2面SX01, SX01-D01平·断面图, 出土遺物	369
第363图	V区第2面SK12平·断面图	344	第412图	V区第2面SX02, SX02-D02平·断面图, 出土遺物	371
第364图	V区第2面SK13平·断面图, 出土遺物	345	第413图	V区第2面SX03, SX03-D03平·断面图	372
第365图	V区第2面SK14平·断面图	345	第414图	V区第2面SX04, SX04-D04平·断面图, 出土遺物	373
第366图	V区第2面SK15平·断面图	346	第415图	V区第2面SX05, SX05-D05平·断面图	374
第367图	V区第2面SK16平·断面图	346			
第368图	V区第2面SK17平·断面图	347			
第369图	V区第2面SK18平·断面图	347			
第370图	V区第2面SK19平·断面图	348			
第371图	V区第2面SK19出土遺物(1)	349			
第372图	V区第2面SK19出土遺物(2)	350			

第416図	V区第2面SX06, SX06-D06平・断面図	375	第461図	V区第2面集石29平・立面図	420
第417図	V区第2面SX06-D06出土遺物	376	第462図	V区第2面集石29平・断面図	420
第418図	V区第2面SX07, SX07-D07 平・断面図, 遺物出土状況図.....	377	第463図	V区第2面集石29・集石29上部包含層 出土遺物.....	421
第419図	V区第2面SX07-D07出土遺物(1) ...	378	第464図	V区第2面集石30平・断面図	422
第420図	V区第2面SX07-D07出土遺物(2) ...	379	第465図	V区第2面集石31平・立・断面図、 中央立石平・立・断面図.....	423
第421図	V区第2面SX08平・断面図	380	第466図	V区第2面集石30・集石31出土遺物(1)	424
第422図	V区第2面SX09平・断面図	381	第467図	V区第2面集石30・集石31出土遺物(2)	425
第423図	V区第2面SX09断面図	382	第468図	V区第2面集石32平・立・断面図	426
第424図	V区第2面SX09出土遺物	383	第469図	V区第2面集石32測量図	426
第425図	V区第2面SX10平・断面図	383	第470図	V区第2面集石32平面図	427
第426図	V区第2面SX11平・断面図	384	第471図	V区第2面集石32下部・ST04・05平・ 断面図, 出土遺物.....	427
第427図	V区第2面SX11礫出土状況	385	第472図	V区第2面集石32出土遺物	428
第428図	V区第2面SX11出土遺物(1)	386	第473図	V区第2面集石33平・立面図	429
第429図	V区第2面SX11出土遺物(2)	387	第474図	V区第2面集石33・SX12平・断面図	430
第430図	V区第2面SX11出土遺物(3)	388	第475図	V区第2面集石33出土遺物(1).....	432
第431図	V区第2面南東部集石群配置図 ...	389、390	第476図	V区第2面集石33出土遺物(2).....	433
第432図	V区第2面南東部集石群遺物 出土状況平面図.....	391、392	第477図	V区第2面集石33出土遺物(3).....	434
第433図	V区第2面南東部集石群グリッド割図 ...	393	第478図	V区第2面集石33出土遺物(4).....	435
第434図	V区第2面南東部集石群出土遺物(1)	394	第479図	V区第2面集石33出土遺物(5).....	436
第435図	V区第2面南東部集石群出土遺物(2)	395	第480図	V区第2面集石33出土遺物(6).....	437
第436図	V区第2面集石15出土遺物(1).....	396	第481図	V区第2面集石33出土遺物(7).....	438
第437図	V区第2面集石15出土遺物(2).....	397	第482図	V区第2面集石30・31・32・33出土遺物	438
第438図	V区第2面集石16出土遺物	399	第483図	V区第2面集石34平・立面図	439
第439図	V区第2面集石17出土遺物	399	第484図	V区第2面集石34出土遺物(1).....	440
第440図	V区第2面集石18平・立面図	401	第485図	V区第2面集石34出土遺物(2).....	441
第441図	V区第2面集石18測量図	401	第486図	V区第2面集石34出土遺物(3), 集石34上部包含層出土遺物.....	442
第442図	V区第2面集石18平・断面図, 下部土坑平面図.....	402	第487図	V区第2面集石34出土遺物(4), 集石34上部包含層出土遺物.....	443
第443図	V区第2面集石18遺物出土状況 立面図.....	403、404	第488図	V区第2面集石35平・立・断面図	444
第444図	V区第2面集石18出土遺物(1).....	405	第489図	V区第2面集石35北側礫群平・立面図 ...	445
第445図	V区第2面集石18出土遺物(2).....	406	第490図	V区第2面集石35出土遺物(1).....	446
第446図	V区第2面集石18出土遺物(3).....	407	第491図	V区第2面集石35出土遺物(2).....	447
第447図	V区第2面集石18出土遺物(4).....	408	第492図	V区第2面集石35出土遺物(3).....	448
第448図	V区第2面集石18出土遺物(5).....	409	第493図	V区第2面集石35出土遺物(4).....	449
第449図	V区第2面集石18出土遺物(6).....	410	第494図	V区第2面集石35上部包含層出土遺物 ...	450
第450図	V区第2面集石18出土遺物(7).....	411	第495図	V区第2面集石36平・立・断面図	451
第451図	V区第2面集石18出土遺物(8).....	412	第496図	V区第2面集石36出土遺物(1).....	452
第452図	V区第2面集石26出土遺物	412	第497図	V区第2面集石36出土遺物(2).....	453
第453図	V区第2面集石27出土遺物	413	第498図	V区第2面集石36上部包含層出土遺物(1)	454
第454図	V区第2面集石28平・立・断面図	413	第499図	V区第2面集石36上部包含層出土遺物(2)	454
第455図	V区第2面集石28出土遺物(1).....	414	第500図	V区第2面集石35・36間土層断面図	455
第456図	V区第2面集石28出土遺物(2).....	415	第501図	V区第2面集石37平・立・断面図	456
第457図	V区第2面集石28出土遺物(3).....	416			
第458図	V区第2面集石28出土遺物(4).....	417			
第459図	V区第2面集石28出土遺物(5).....	418			
第460図	V区第2面集石28出土遺物(6).....	419			

第502図	V区第2面集石37下層遺物出土状況平面図、 垂直分布図……………	457	(第2分冊)		
第503図	V区第2面集石37出土遺物(1)……………	458	第522図	V区(旧G4区)南壁の分析層位……………	4
第504図	V区第2面集石37出土遺物(2)……………	459	第523図	V区(旧G4区)南壁の植物珪酸体群集と 組織片の産状……………	5
第505図	V区第2面集石37出土遺物(3)……………	460	第524図	植物珪酸体……………	8
第506図	V区第2面集石37出土遺物(4)……………	461	第525図	Ⅲ区～V区弥生時代遺構変遷図(1) ……………	13、14
第507図	V区第2面集石37出土遺物(5)……………	462	第526図	Ⅲ区～V区弥生時代遺構変遷図(2)……………	15
第508図	V区第2面包含層出土遺物(1) (旧G1区)……………	464	第527図	広島県高平遺跡A号墓平・断面図……………	17
第509図	V区第2面包含層出土遺物(2) (旧G1区)……………	465	第528図	Ⅲ区第2面集石1遺物出土状況平・断面図 (ST01・02直上)……………	18
第510図	V区第2面包含層出土遺物(3) (旧G1区)……………	466	第529図	Ⅲ区第2面集石2遺物出土状況平・断面図 (ST03直上)……………	19
第511図	V区第2面包含層出土遺物(4) (旧G3区)……………	467	第530図	集石1、3、2、5の土器組成……………	21
第512図	V区第2面包含層出土遺物(5) (旧G4区)……………	468	第531図	集石1、3、2、5の石器組成……………	23
第513図	V区第2面包含層出土遺物(6) (旧G4区)……………	469	第532図	集石1・3、集石2・5出土チップ、 フレイクの重量分布……………	24
第514図	V区第2面包含層出土遺物(7) (旧G4区)……………	470	第533図	Ⅲ区第2面の墓域……………	25
第515図	V区第2面包含層出土遺物(8) (旧G4区)……………	471	第534図	成重遺跡東部(Ⅰ、Ⅱ区)における 弥生時代の遺構変遷……………	28
第516図	V区第2面包含層出土遺物(9) (旧G5区)……………	472	第535図	稲木遺跡C地区遺構配置図……………	30
第517図	V区第2面包含層出土遺物(10) (旧G6・8区)……………	473	第536図	稲木遺跡C地区第4号集石墓遺物 出土状況図……………	31
第518図	V区第2面包含層出土遺物(11) (旧G6・8区)……………	474	第537図	桜ノ岡遺跡(Ⅰ)遺構配置図……………	32
第519図	V区第2面包含層出土遺物(12) (旧G6・8区)……………	475	第538図	桜ノ岡遺跡(Ⅰ)SK1008平・立・断面図……………	33
第520図	V区第2面包含層出土遺物(13) (旧G7区)……………	476	第539図	桜ノ岡遺跡(Ⅰ)SK1008遺物出土状況図……………	34
第521図	V区第2面包含層出土遺物(14) (旧G7区)……………	476	第540図	土成町北原遺跡東地区遺構配置図……………	35
			第541図	集石土壙1上部集石検出状況、 下部土坑平・断面図……………	36
			第542図	集石土壙3検出状況、断面図……………	37
			第543図	集石土壙3内土器棺平・断面図、 出土遺物……………	37
			第544図	東地区土壙3平・断面図……………	38
			第545図	集石遺構検出状況図……………	45、46

図 版 目 次

- 図版 1 遺跡遠景（南から）、遺跡遠景（東から）
- 図版 2 IV区（旧F1区）第2面遠景（東から）
- 図版 3 IV区（旧F2区）第2面集石群検出状況（東から）
- 図版 4 IV区（旧F2区）第2面東壁土層（奥の盛り上がり）が集石25、西から
IV区（旧F2区）第2面南壁土層（隅の盛り上がり）が集石19、北から
- 図版 5 IV区第2面集石24下部遺構（SK01）断面（南から）
IV区第2面集石群出土遺物
V区第2面出土遺物
- 図版 6 III区第2面ST01・02検出状況（南東から）
III区第2面集石1・3土層断面（東から）
- 図版 7 III区第2面ST01土層断面（南東から）
III区第2面ST01土層断面（西部、南東から）
III区第2面集石1土層断面（東部、北から）
III区第2面集石1・3土層断面（北部、東から）
III区第2面集石1・3土層断面（南部、東から）
III区第2面集石1・3土層断面（西部、北から）
- 図版 8 III区第2面ST03検出状況（西から）
III区第2面ST03検出状況（南西から）
III区第2面ST03土層断面（南から）
III区第2面ST03南北ベルト除去後土層断面（南から）
III区第2面集石2・5土層断面（南部、南東から）
III区第2面集石2・5土層断面（北部、東から）
III区第2面集石5下位SK01検出状況（西から）
III区第2面集石5下位SK01土層断面（南東から）
- 図版 9 III区（旧E1区）第2面全景
- 図版 10 III区第2面ST01・02検出状況（北西から）
III区第2面ST01・02完掘状況（南東から）
- 図版 11 III区第2面ST03検出状況（北から）
III区第2面ST03検出状況（東から）
- 図版 12 III区第2面ST03検出状況（南から）
III区第2面ST03土層断面（西から）
- 図版 13 III区第2面集石1・3検出状況（北から）
III区第2面集石1・3検出状況（中央に集石3、西から）
- 図版 14 III区第2面集石1・3検出状況（手前に集石1、土層ベルト内に集石3、東から）
- III区第2面集石1・3土層断面（東から）
- 図版 15 III区第2面集石1遺物出土状況（南から）
III区第2面集石1遺物（184）出土状況（東から）
- 図版 16 III区第2面集石2・5検出状況（南から）
III区第2面集石2・5作業風景（東から）
- 図版 17 III区第2面集石2遺物出土状況（中央部で土器が集中、東から）
III区第2面集石2遺物（440）出土状況（南から）
- 図版 18 III区第2面集石5中央礫検出状況（南西から）
III区第2面集石5検出状況（中央礫の除去後）
- 図版 19 III区第2面集石5遺物（450・451）出土状況（南から）
III区第2面集石5遺物（476）出土状況（南から）
- 図版 20 III区（旧E2区）第2面全景（西から）
III区第2面周溝墓SX01・02完掘状況（西から）
- 図版 21 III区第2面周溝墓SX01主体部完掘状況（北から）
III区第2面周溝墓SX02-D02遺物出土状況（北から）
- 図版 22 III区第2面周溝墓SX02墳丘と古墳時代中期の堅穴住居跡（西から）
III区第2面周溝墓SX02頂部遺物出土状況（東から）
- 図版 23 IV区（旧F1区）第2面全景
- 図版 24 IV区（旧F1区）第2面遠景（東から）
IV区（旧F1区）第2面遠景（南から）
- 図版 25 IV区（旧F2区西橋脚部）第2面東壁土層（西から）
IV区（旧F1区）第2面北壁土層（西半部、南から）
- 図版 26 IV区（旧F1区）第2面北壁土層（東半部、西から）
IV区第2面SH01・02（西から）
- 図版 27 IV区第2面SH01遺物出土状況（東から）
IV区（旧F2区東橋脚部）第2面東壁土層とSH02（西から）
- 図版 28 IV区第2面SH03~05と集石群（東から）
IV区第2面SH06（北から）
- 図版 29 IV区第2面SH06断面A-A'（南から）
IV区第2面SD01（南から）
- 図版 30 IV区第2面ST01土器棺出土状況（北から）
IV区第2面ST01下部礫出土状況（西から）
- 図版 31 IV区第2面周溝墓SX01完掘状況（南から）

- IV区第2面周溝墓SX02完掘状況(西から)
 図版32 IV区第2面周溝墓SX02主体部礫出土状況(西から)
 IV区第2面集石4全景
 図版33 IV区第2面集石4全景(東から)
 IV区第2面集石4北東部(北から)
 図版34 IV区第2面集石4北西部(南から)
 IV区第2面集石4西部(南から)
 図版35 IV区第2面集石4南部(南から)
 IV区第2面集石4遺物(775)出土状況(東から)
 図版36 IV区第2面集石4A-A'ベルト土層(南から)
 IV区第2面集石4D-D'ベルト土層(北から)
 図版37 IV区第2面集石4E-E'ベルト土層(西から)
 IV区第2面集石4埋戻し風景(東から)
 図版38 IV区第2面集石6全景
 IV区第2面集石6(南から)
 図版39 IV区第2面集石6中央部(西から)
 IV区(旧F1区)第2面集石群検出状況
 図版40 IV区第2面集石7全景(東から)
 IV区第2面集石7頂部礫・土器出土状況(南から)
 図版41 IV区第2面集石8~10検出状況(南から)
 IV区第2面集石8~10検出状況(北から)
 図版42 IV区第2面集石9~13検出状況(北東から)
 IV区第2面集石12遺物出土状況(東から)
 図版43 IV区第2面集石12遺物出土状況(東から)
 IV区第2面集石13検出状況(西から)
 図版44 IV区(旧F2区)第2面集石群検出状況
 図版45 IV区(旧F2区)第2面集石群検出状況(東から)
 IV区(旧F2区)第2面集石群検出状況(南から)
 図版46 IV区第2面集石19~25全景(東から)
 IV区第2面集石19・20全景(東から)
 図版47 IV区(旧F2区西橋脚部)第2面集石19部分調査区南壁土層(北東から)
 IV区第2面集石20断面(南から)
 図版48 IV区第2面集石21全景(西から)
 IV区第2面集石21断面(南から)
 図版49 IV区第2面集石21下部遺構検出状況(西から)
 IV区第2面集石21下部遺構断面(南から)
 図版50 IV区第2面集石21下部遺構完掘状況(南から)
 IV区第2面集石22全景(西から)
 図版51 IV区第2面集石22断面(南から)
 IV区第2面集石23全景(北から)
 図版52 IV区第2面集石23断面(南から)
 IV区第2面集石24全景(西から)
 図版53 IV区第2面集石24断面(南から)
 IV区第2面集石24下部遺構検出状況(南から)
 図版54 IV区第2面集石24下部遺構(SK01)断面(南から)
 IV区第2面集石24下部遺構(SK01・02)完掘状況(南から)
 図版55 IV区第2面集石25全景(北西から)
 IV区第2面集石25部分東壁土層(西から)
 図版56 IV区(旧F2区)第2面グリッド21土器(353)出土状況(北から)
 IV区(旧F2区)第2面グリッド6勾玉(745)出土状況(南から)
 図版57 V区(旧G1区南半部)第2面全景
 図版58 V区(旧G1区南側)第2面全景(西から)
 V区(旧G3区)第2面全景(北から)
 図版59 V区(旧G3区)第2面西壁土層(北側半分、東から)
 V区(旧G3区)第2面南壁土層(北から)
 図版60 V区(旧G4区)第2面東側完掘状況、手前にSB07(南から)
 V区(旧G4区)第2面北壁土層(南東から)
 図版61 V区(旧G5区)第2面北壁土層(西から)
 V区(旧G6・8区)第2面遺構検出状況(南西から)
 図版62 V区(旧G6・8区)第2面全景(北東から)
 V区第2面SH01遺物出土状況(南から)
 図版63 V区第2面SH01内SK02焼失木材出土状況(北から)
 V区第2面SH01完掘状況(南から)
 図版64 V区第2面SH02完掘状況(東から)
 V区第2面SH02居住状況復元(東から)
 図版65 V区第2面SH03・04(西から)
 V区第2面SH03(東から)
 図版66 V区第2面SH05中央土坑・両端ビット検出状況(西から)
 V区第2面SH05完掘状況(西から)
 図版67 V区第2面SH06完掘状況(東から)
 V区第2面SH08完掘状況(東から)
 図版68 V区第2面SH09炭化物検出状況(南から)
 V区第2面SH09・10全景(東から)
 図版69 V区第2面SH10完掘状況(東から)
 V区第2面SH11完掘状況(東から)
 図版70 V区第2面SH12完掘状況(北から)
 V区第2面SH13・SB10完掘状況(南から)
 図版71 V区第2面SB01・02全景(南から)
 V区第2面SB03全景(南から)
 図版72 V区第2面SB07全景(西から)
 V区第2面SB08全景(東から)
 図版73 V区第2面SB09全景(東から)
 V区第2面SD10土器出土状況(北から)
 図版74 V区第2面SK19断面A-A'(南から)
 V区第2面SK19完掘状況(東から)

- 図版75 V区第2面ST02完掘状況(西から)
V区第2面ST07土層断面(南から)
- 図版76 V区第2面ST08検出状況(西から)
V区第2面周溝墓SX01~04全景(北西から)
- 図版77 V区第2面周溝墓SX05~07全景(西から)
V区第2面周溝墓SX07-D07遺物出土状況(西から)
- 図版78 V区第2面周溝墓SX01全景(北から)
V区第2面周溝墓SX02と集石18の頂部全景(北から)
- 図版79 V区第2面周溝墓SX03全景(南から)
V区第2面SX09C-C'ベルト土層断面(東から)
- 図版80 V区第2面SX09西半部底面検出状況(北から)
V区第2面SX09東半部底面検出状況(北から)
- 図版81 V区第2面SX11上面礫検出状況(西から)
V区第2面SX11土層断面(西から)
- 図版82 V区第2面SX11全景(西から)
V区第2面南東部集石群(集石15~17・26・27)全景(西から)
- 図版83 V区第2面南東部集石群(集石15~17・26・27)検出状況(北から)
V区第2面集石15断面、遺物出土状況(東から)
- 図版84 V区第2面集石18検出状況(南から)
V区第2面集石18全景(西から)
- 図版85 V区第2面集石18東西ベルト土層断面(南から)
V区第2面集石18下部遺構検出状況(南から)
- 図版86 V区第2面集石18下部遺構検出状況(南から)
V区第2面集石18下部遺構完掘状況(南から)
- 図版87 V区第2面集石28・33検出状況(南から)
V区第2面集石29全景(南から)
- 図版88 V区第2面集石29南半分検出状況(南東から)
V区第2面集石29北半分検出状況(南から)
- 図版89 V区第2面集石29上部土層断面(南から)
V区第2面集石29土層断面(南から)
- 図版90 V区第2面集石30土層断面(南から)
V区第2面集石30・31東西土層断面(南から)
- 図版91 V区第2面集石31検出状況(南西から)
V区第2面集石31立石検出状況、断面(南から)
- 図版92 V区第2面集石31立石全景(南から)
V区第2面集石32検出状況(北西から)
- 図版93 V区第2面集石32南北土層(西から)
V区第2面集石32中央部(北から)
- 図版94 V区第2面集石32下部ST04・05検出状況、土層断面(北東から)
- V区第2面ST04完掘状況(北から)
- 図版95 V区第2面ST05完掘状況(北東から)
V区第2面集石33検出状況(東から)
- 図版96 V区第2面集石33南北土層断面(西から)
V区第2面集石33南北土層断面(西から)
- 図版97 V区第2面集石33南北土層断面(東から)
V区第2面集石33とSX12(南から)
- 図版98 V区第2面SX12完掘状況(南から)
V区第2面集石34全景(北西から)
- 図版99 V区第2面集石34検出状況(南西から)
V区第2面集石34中央部分(南西から)
- 図版100 V区第2面集石35検出状況(東から)
V区第2面集石35南北土層断面(東から)
- 図版101 V区第2面集石36検出状況(西から)
V区第2面集石36南北土層断面(東から)
- 図版102 V区第2面集石37全景(北東から)
V区第2面集石37遺物出土状況(西から)
- 図版103~図版112 Ⅲ区出土遺物(1)~Ⅲ区出土遺物(10)
- 図版113~図版146 Ⅳ区出土遺物(1)~Ⅳ区出土遺物(34)
- 図版147~図版225 V区出土遺物(1)~V区出土遺物(79)

付 図 目 次

付図1	成重遺跡Ⅳ区第2面遺構平面図	付図19	成重遺跡Ⅳ区第2面集石19平・立面図
付図2	成重遺跡Ⅴ区第2面遺構平面図	付図20	成重遺跡Ⅳ区第2面集石20平・立面図
付図3	成重遺跡Ⅲ区第2面集石1・3平面図	付図21	成重遺跡Ⅳ区第2面集石21平・立面図
付図4	成重遺跡Ⅲ区第2面集石1平・立面図	付図22	成重遺跡Ⅳ区第2面集石22平・立面図
付図5	成重遺跡Ⅲ区第2面集石3平・立面図	付図23	成重遺跡Ⅳ区第2面集石23平・立面図
付図6	成重遺跡Ⅲ区第2面集石2・5平面図	付図24	成重遺跡Ⅳ区第2面集石24平・立面図
付図7	成重遺跡Ⅲ区第2面集石2平・立面図	付図25	成重遺跡Ⅳ区第2面集石25平・立面図
付図8	成重遺跡Ⅲ区第2面集石5平・立面図	付図26	成重遺跡Ⅴ区第2面集石18平・立面図
付図9	成重遺跡Ⅳ区第2面集石4平・立面図	付図27	成重遺跡Ⅴ区第2面集石28平・立面図
付図10	成重遺跡Ⅳ区第2面集石6平・立面図	付図28	成重遺跡Ⅴ区第2面集石29平・立面図
付図11	成重遺跡Ⅳ区第2面集石7平・立面図	付図29	成重遺跡Ⅴ区第2面集石31平・立面図
付図12	成重遺跡Ⅳ区第2面集石8平・立面図	付図30	成重遺跡Ⅴ区第2面集石32平・立面図
付図13	成重遺跡Ⅳ区第2面集石9平・立面図	付図31	成重遺跡Ⅴ区第2面集石33平・立面図
付図14	成重遺跡Ⅳ区第2面集石10平・立面図	付図32	成重遺跡Ⅴ区第2面集石34平・立面図
付図15	成重遺跡Ⅳ区第2面集石11平・立面図	付図33	成重遺跡Ⅴ区第2面集石35平・立面図
付図16	成重遺跡Ⅳ区第2面集石12平・立面図	付図34	成重遺跡Ⅴ区第2面集石36平・立面図
付図17	成重遺跡Ⅳ区第2面集石13平・立面図	付図35	成重遺跡Ⅴ区第2面集石37平・立面図
付図18	成重遺跡Ⅳ区第2面集石14平・立面図		

表 目 次

第1表	V区第2面SH01グリッド別剥片 出土量一覧……………	222	第5表	新旧遺構名対照表(1)……………	50
第2表	分析結果一覧表……………	2	第6表	新旧遺構名対照表(2)……………	51
第3表	V区(旧G4区)南壁の植物珪酸体 分析結果……………	5	第7表	新旧遺構名対照表(3)……………	52
第4表	掘立柱建物跡一覧表……………	10	第8表	新旧遺構名対照表(4)……………	53
			第9表	新旧遺構名対照表(5)……………	54

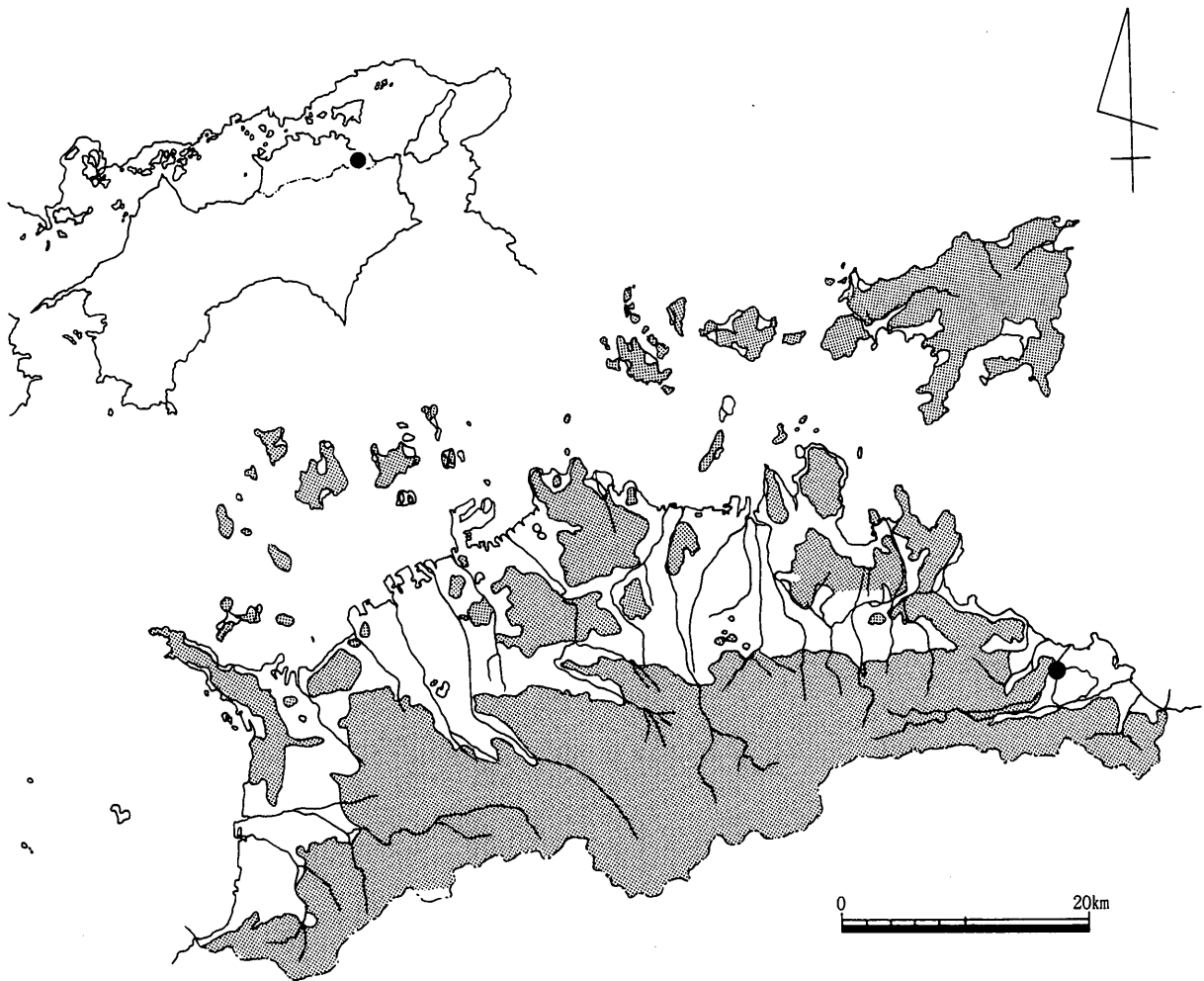
第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査の経過

(1) 発掘調査の経過

調査に至る経緯については、すでに『成重遺跡Ⅰ』において報告している。その経緯に基づき平成8年度に遺跡の広がりや内容を把握するために予備調査を実施した。

その予備調査の結果を受けて、平成9年4月から調査事務所の建て上げや発掘作業員の雇用などの条件整備を行い、用地買収が終了した部分から発掘調査を開始した。調査は2班体制(1班は調査員3名)で開始した。成重遺跡は調査面積が広いことから、作業の効率化・迅速化を図るために国道318号より東側の調査区を担当する班については、工事請負方式による調査を実施した。国道より西側を担当する班については直営方式で調査を行った。調査開始後まもなく、国道のすぐ西側のⅢ区で弥生時代の土器を含み、礫を盛り上げて塚状になった集石遺構を2基検出した。墳墓の可能性が高いとして「集石墓」として調査を行った。この集石遺構は掘り込みや図化に手間がかかり調査に困難を極めた。また隣接する調査区のⅣ区でも次々と同様な集石遺構が検出され、これに対応するために10月からさらに1班を加



第1図 遺跡位置図(1/6000)

えて合計3班体制とした。この集石遺構に加えて方形周溝墓や竪穴住居跡、さらに横穴式石室をもつ古墳までが検出されるなど、多種多彩な遺構が所狭しと検出された。このような状況のなか可能な限りの調査員を投入し、多いときには14名もの調査員が成重遺跡の調査を担当した。また調査の迅速化のため航空測量に加えて集石遺構の写真測量による図化も導入した。

このような状況のなか、弥生時代の集石遺構が墳墓の可能性が強く、他に類例の極めて少ない貴重な遺構であるとして、香川県教育委員会は日本道路公団に対してこの集石遺構の保存を要請した。その後、文化庁文化財鑑査官と文化財調査官を成重遺跡に招き御指導を賜った。そして香川県教育委員会と日本道路公団との度重なる協議の末、平成10年6月には日本道路公団の協力によりこの集石遺構が集中するⅢ区とⅣ区の部分を従来の盛り土工法から橋脚工法に変更して集石遺構の保存を図ることとなった。これに伴いⅣ区は橋脚が建つ部分のみの調査に変更となった。Ⅳ区は保存協議を開始してから基本的に掘り込みを行わず上面の検出にとどめた。そして保存が決定された後は、橋脚建設部分以外の遺構の上面を砂で保護した後に埋め戻した。

平成10年度当初は3班体制で調査を行ったが、保存が決定し調査面積の縮小に伴い7月からは2班体制で調査を行った。平成11年度には6月から1～2班体制で調査を行い、平成12年3月31日に成重遺跡のすべての調査が終了した。全期間を通して、本体工事と調査工程との調整、横断道建設に付帯する国道318号改良工事、ほ場整備、排水路工事、町道改良工事との協議・工程調整の連続であった。

この間、平成9年7月と平成10年4月の2回、現地説明会を開催したのに加えて、地元白鳥町（現東かがわ市）の広報誌に毎月成重遺跡の調査速報を連載した。また町内の小・中学校の体験学習の場としても活用していただいた。

(2) 整理作業の経過

成重遺跡の整理作業は合計42月の予定で、平成14年度から開始した。平成14年度には通年で2名の調査員が、10月からさらに1名の調査員が整理作業を実施した。平成14年度には国道318号から東側の調査区であるⅠ区・Ⅱ区についてのすべてと、国道318号より西側のⅢ区～Ⅴ区の前時代以降について整理作業を行い、その成果は平成15年度に『成重遺跡Ⅰ』として刊行した。平成15年度には昨年度からの継続で1名の調査員によりⅢ区～Ⅴ区の前時代の整理作業を実施し、平成16年度に『成重遺跡Ⅱ』として報告書を刊行することができた。

平成15年度の整理箇所は成重遺跡で検出された集石遺構の中心部分にあたり、加えて周溝墓や土壇墓・土器棺墓などの墳墓や竪穴住居跡、掘立柱建物跡といった多種多様な遺構と、多量の土器・石器などの遺物が出土している。遺構では集石遺構という特殊な遺構の図面作成に難渋し、遺物では多量の土器・石器の実測に時間がかかった。このため石器の一部について実測・トレースを外部委託することにより作業の迅速化を図った。

(3) 発掘調査及び整理作業の体制

平成9～11年度の発掘調査及び平成14年度の整理作業の体制は『成重遺跡Ⅰ』に記載している。平成15年度の整理作業は、香川県教育委員会事務局文化行政課の指導の下、以下の体制で実施した。

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括 所 長 中村 仁



第2図 調査区割図と旧調査区割図 (1/4000)

	次 長	渡部 明夫
総務	副 主 幹	野保 昌弘
	係 長	多田 敏弘
整理	主任文化財専門員	真鍋 昌宏
	文化財専門員	森 格也
	整 理 員	西山佳代子
	整理補助員	鈴木奈穂子
	整理作業員	池内 妙子・西本英里香・木下基公美・信里 里美・森澤 千尋・ 木下 祐美・田井 景子

なお報告書の刊行業務は財団法人香川県埋蔵文化財調査センターの解散に伴い、平成16年度にその業務を引き継いだ香川県埋蔵文化財センターが行った。

第2章 調査の成果

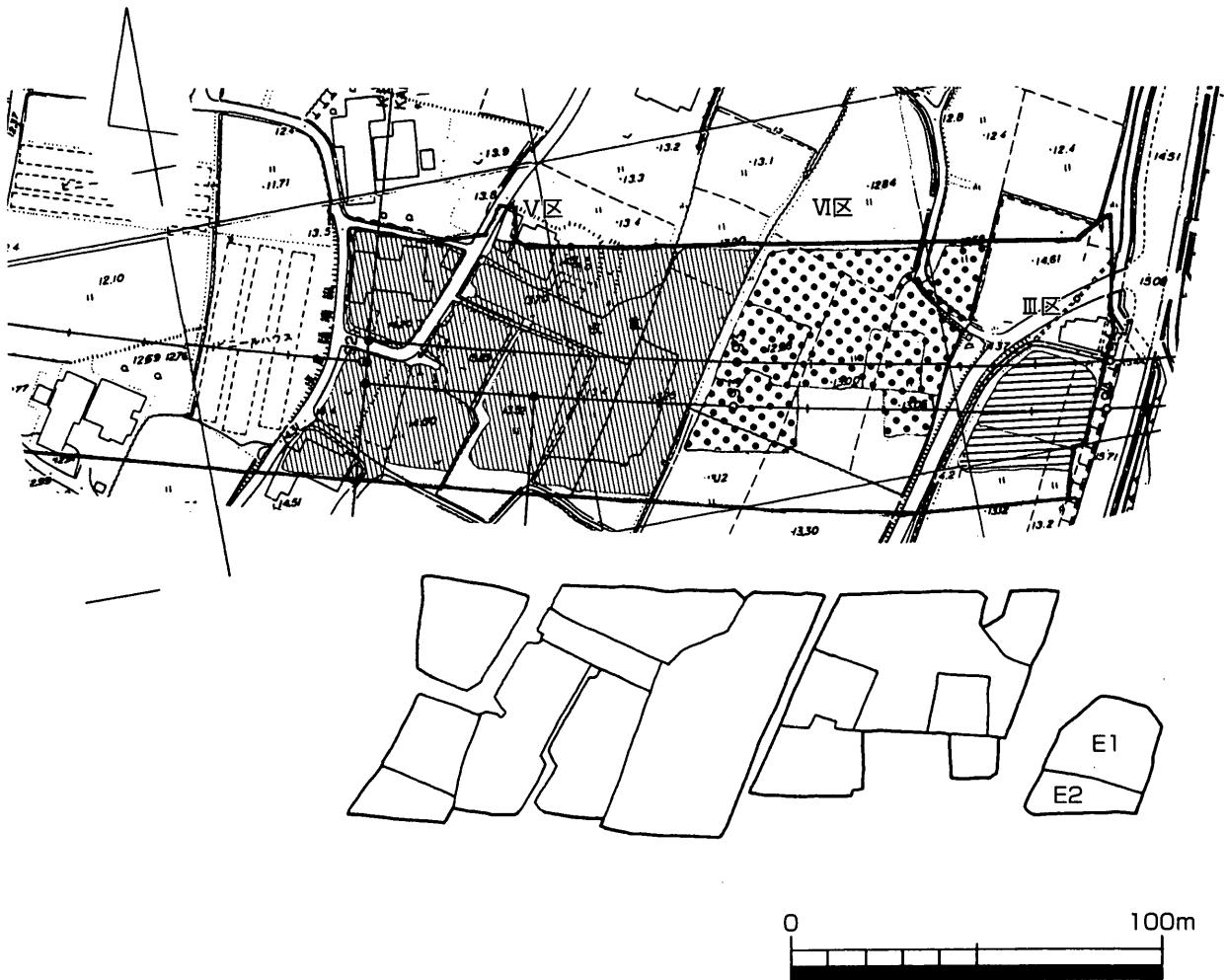
第1節 III区の調査成果

(1) 調査区の概要 (第4～5図)

国道318号のすぐ西側に隣接し、国道に取り付く町道に挟まれた狭い調査区で、調査区の面積は1028㎡である。地表面は13.0m前後で平坦である。地表面から70cmほどは古い時期の耕作土が厚く堆積している。この耕作土の下部に沈着したマンガン層の直下に灰褐色砂質土層があり、この層の上面が古墳時代以降の第1遺構面となっている。標高12.3m前後で南側から北側に向かって僅かに下っている。

厚い耕作土の直下で第1遺構面となるため、包含層は部分的に残っていたが基本的には削平されている。包含層からは少量の中世土器が出土しているにとどまる。古墳時代以降の遺構は、上部が削平された状況で検出された。検出された遺構は古墳時代中期の竪穴住居跡が4棟、土坑1基、落ち込み状の遺構1基のみで、遺構密度は低い。竪穴住居跡は調査区の南半分に集中しているが、いずれも調査区の壁際にあり、全体を検出するには至っていない。

第1遺構面の40～50cmほど下の標高11.7～11.9m前後のにおい黄褐色砂質土層の上面に、弥生時代中



第3図 III区新旧調査区割り図 (1/2000)

期を中心とする第3遺構面が形成されている。第1遺構面と第3遺構面との間には黄褐色粘質土・砂混じり粘質土、褐色系の砂混じり粘質土がほぼ水平に堆積していた。これらの層からの遺物の出土は少ない。第3遺構面も第1遺構面と同様に南側から北側に向かって10～15cm程度下っている。また北東～南西方向部分にかけて浅い低地部分が認められる。遺物包含層は遺構面の上10～15cmに形成されているが、遺物の出土は少ない。第3遺構面では遺構は南半部に集中しており方形周溝墓、土坑に加えて集石遺構を2基検出している。

調査時には土質の判別が困難であったため、集石遺構以外は遺構面より10～20cm程度下げたところで遺構を検出している。これに対して集石遺構はマウンド状に盛り上がっているため、その頂部は第1遺構面で確認している。

また調査時には土層識別の困難さと遺構の稀少さ、整理作業における集石1・2の中での後期集石3・5の分離から、正確には第1遺構面と第3遺構面との間の標高11.9m前後に弥生時代後期の遺構面である第2遺構面が設定できる。報告では第2遺構面である弥生時代後期の遺構と第3遺構面である弥生時代中期の遺構の両者とも、調査時の検出面である第2面の呼称を使用する。

なお本調査区は調査時にはE1区・E2区と呼称していた調査区である。

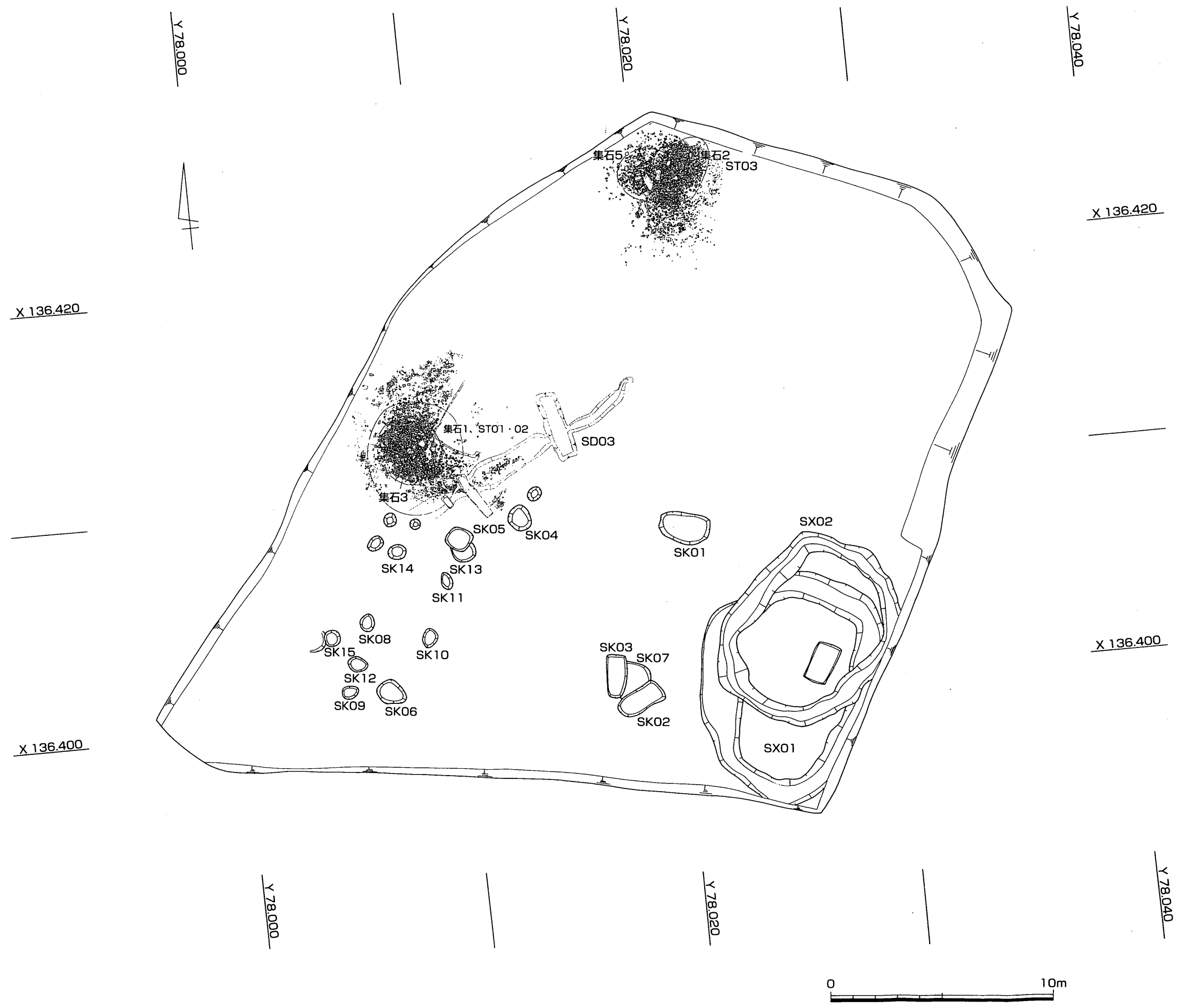
(2) 弥生時代の遺構・遺物

SD03 (第6・28図)

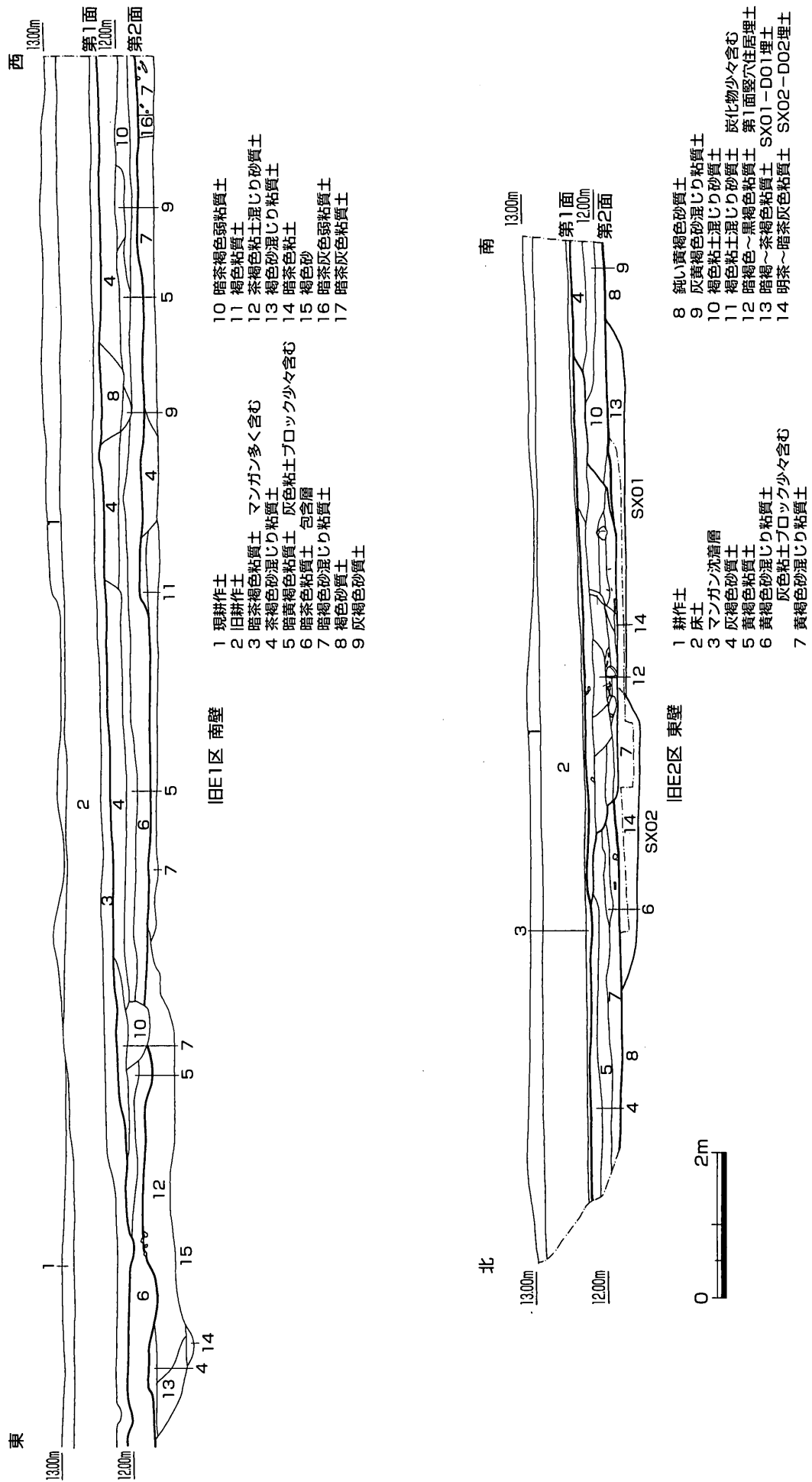
調査区西部で検出した溝である。土層の識別が困難であったため南部の状況は推定であるが、集石1南北ベルト南端より南には延びない。最大幅1.4m、深さ0.32mを測る。主軸方向はN-78°-Eであり周囲の等高線に平行する。埋土は茶褐色系の粘質土であり、上下2層に細分できる。

出土遺物は弥生土器の壺(2～4)、甕(1、5～10)、甑?(11)、高杯(12)、台付鉢(13)、石鏃(14)などがある。1は丸みを帯びた胴部から緩やかに屈曲する口縁部をもつ。胴部内面はヘラケズリを施す。2はやや外に開く頸部から屈曲し短い口縁部に至る。口縁部の内外面は横ハケ調整する。3は口縁端部に凹線文を施す。5は口縁部が緩く外反する、6は水平気味に屈曲し端部を上下に肥厚させる口縁部を持つ。また内面の頸部直下までヘラケズリが見られる。11はほぼ丸底化しており穿孔?が見られる。外面にはタタキが観察できる。12は水平口縁を持つ。外面には顕著な指押さえ、内面には縦方向の板ナデが見られる。13は外面にタタキを施す。14は凹基式である。鋸歯状を呈し全体に丁寧な調整剥離を加える。時期は3、7、12などが弥生中期、1、2、5、6、11、13が弥生後期(11は後期後葉～末)に位置づけられる。出土遺物は28リットル入りコンテナ1箱程度あるが未実測遺物もあわせると弥生中期土器が圧倒的に多い。だが集石1を切ることによる混入と考えられるため溝の時期は弥生後期後葉～末と考えられる。

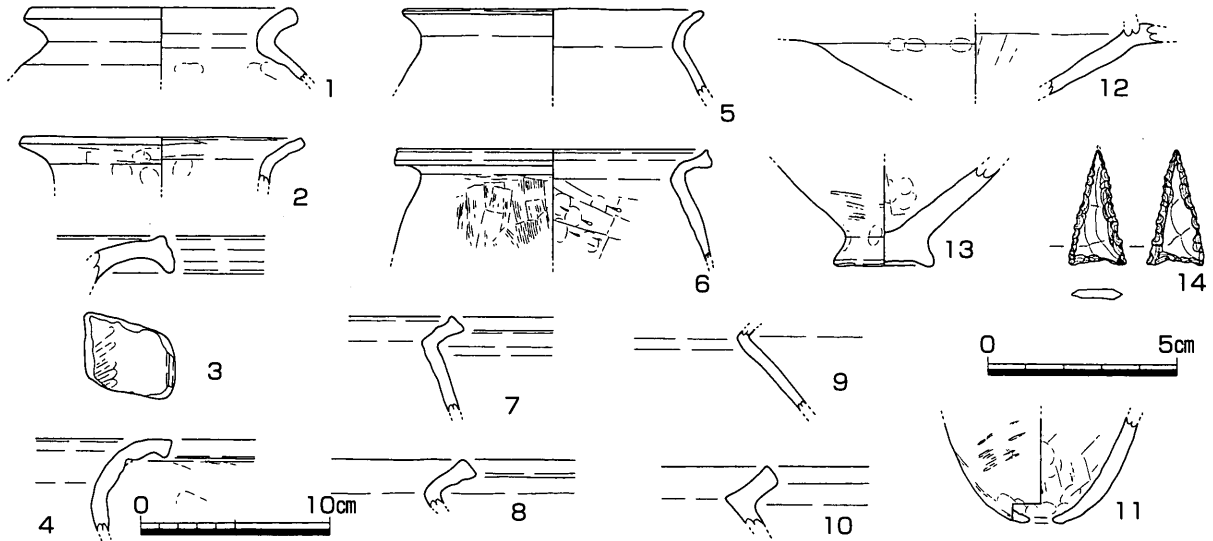
なお調査時にはSD03の掘り込み面を第1面と考えていた。だが、集石の検討により弥生時代後期遺構面を確認できたためSD03についても再検討した。結果、調査時の検出位置から外れた溝の延伸部(集石1南北ベルト南端)で後期遺構面に掘り込まれた遺構を確認した。これは推定幅、形状、埋土の色調、質感がSD03と類似する。底場レベルも土層図作成位置の11.6mに対し南北ベルトが11.65mと近似するためこれがそうであると判断する。



第4図 Ⅲ区第2面遺構配置図 (1/200)



第5図 III区(旧E1・2区)南壁・東壁土層図(1/80)

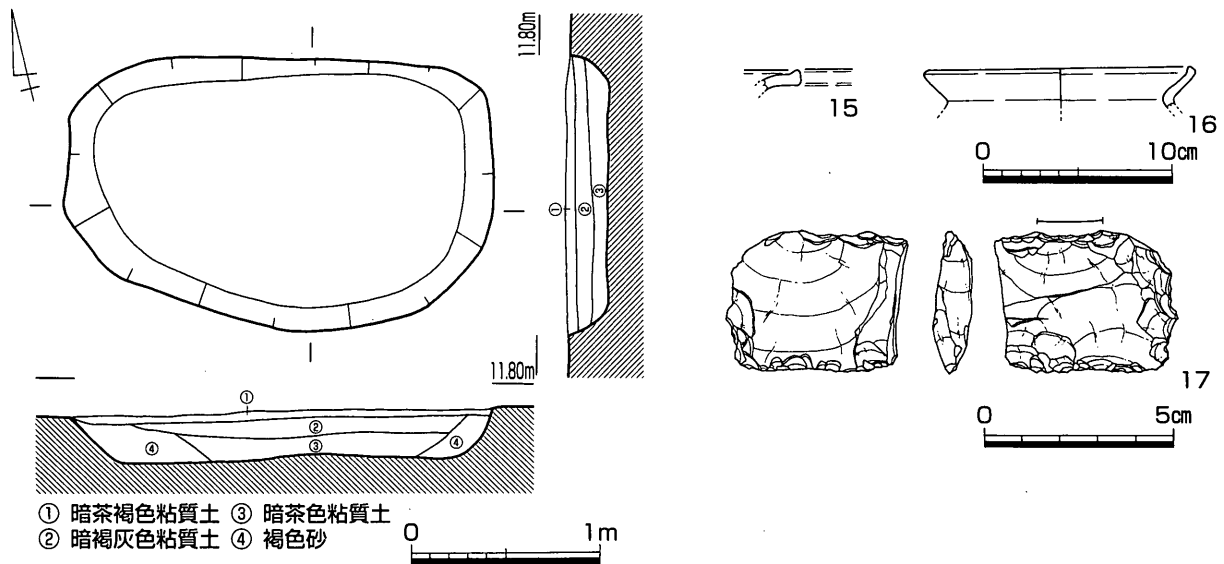


第6図 III区第2面SD03出土遺物 (1/4、1/2)

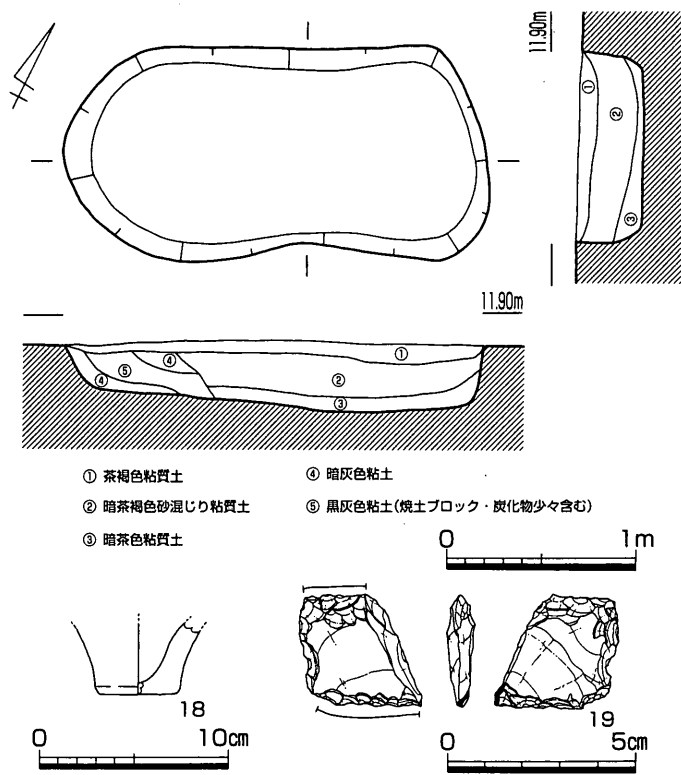
SK01 (第7図)

調査区の中央部分で検出した土坑である。平面形は隅丸の長方形であるが全体に丸みを帯びている。長辺2.25m、短辺1.4m、深さは25cm前後である。東西の壁際に褐色砂が堆積している他は、粘質土が堆積している。

遺物の出土は少ない。17は楔形石器で截断面に両極打撃の痕跡が見られる。



第7図 III区第2面SK01平・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4、1/2)



第8図 Ⅲ区第2面SK02平・断面図(1/40)、出土遺物(1/4、1/2)

SK02 (第8図)

調査区の南東部で検出した土坑である。平面形は短辺が丸みを帯びた長方形で、長辺2.2m、短辺1.0~1.1m、深さ35cm前後である。断面から再掘削したことが伺える。古い段階の埋土には焼土と炭化物が混じる部分がある。

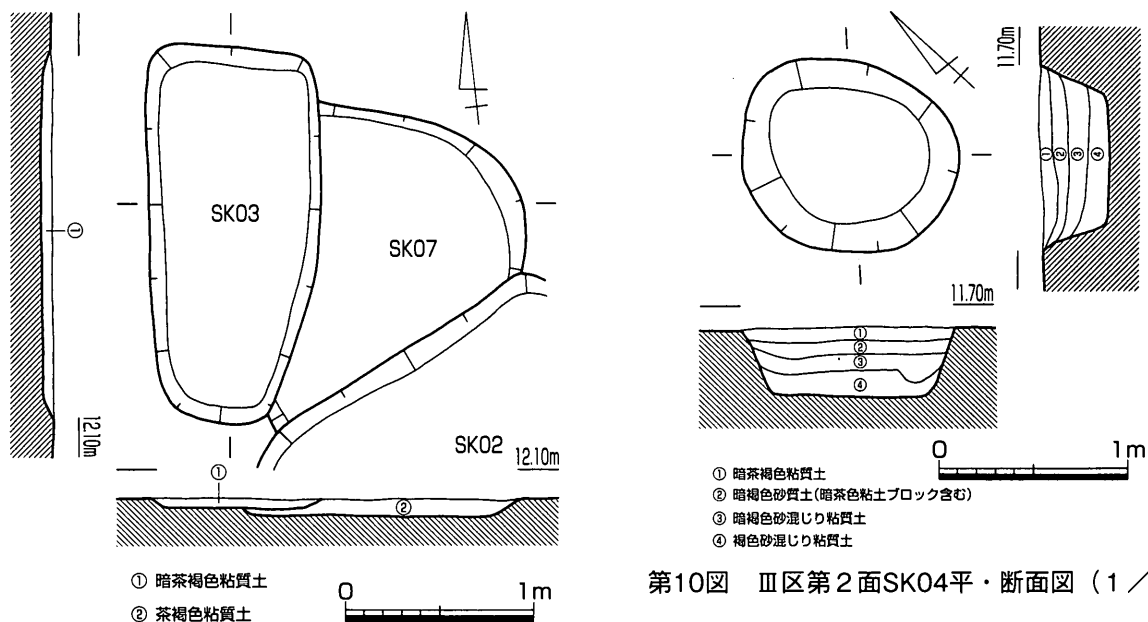
18は甕の底部と考えられ、19は楔形石器で両極打撃の痕跡が見られる。

SK03 (第9図)

調査区の南東部でSK02に隣接して検出した土坑である。平面形は長方形であるが南側が狭くなっている。長辺1.95m、短辺0.6~0.9mで、深さは6cmと浅い。遺物は出土していない。

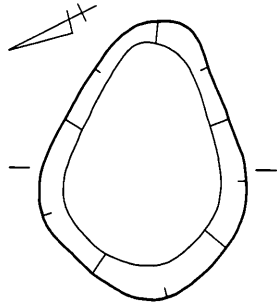
SK04 (第10図)

調査区中央のやや西寄りで検出した土坑である。平面形は円形であるが、直線的な部分もある。直径1.0~1.1m、深さは35cmほどで褐色系の土が堆積している。微細な遺物が少量出土しているが図化は出来なかった。



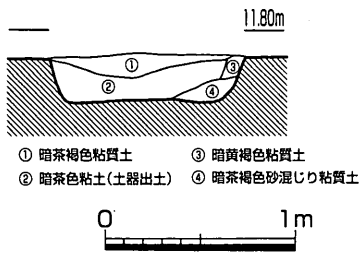
第9図 Ⅲ区第2面SK03・07平・断面図(1/40)

第10図 Ⅲ区第2面SK04平・断面図(1/40)



SK05

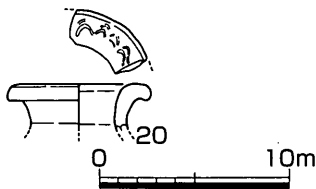
調査区中央のやや西寄りで検出した土坑である。平面形は隅丸の正方形で1辺1.0mほどである。掘り込みは垂直に近く深さは40cmである。暗茶色～暗褐色系の粘質土が堆積している。遺物は出土していない。



SK06 (第11図)

調査区の南西部で検出した土坑である。平面形は歪な楕円形で長径1.4m、短径1.1m、深さは25cmである。下層には暗茶色粘土が堆積しており土器が出土している。

20は壺で、口縁部内面にはヘラ描波状文が2条ある。



SK07 (第9図)

調査区の南東部で、SK02とSK03により壊されている土坑である。全体の形は不明であるが幅広の長方形に近くなるものと考えられる。検出部分で南北方向1.7m、東西方向1.1m、深さは10cmである。埋土は茶褐色粘質土の単一層である。微細な遺物が少量出土している。

第11図 Ⅲ区第2面SK06平・断面図
(1/40)、出土遺物(1/4)

SK08 (第12図)

調査区の南西部で検出した土坑である。平面形は楕円形で、長径0.8m、短径0.65m、深さ26cmである。茶褐色系の粘質土が堆積しているが遺物は出土していない。

SK09 (第12図)

調査区の南西部で検出した土坑である。平面形は楕円形で、長径0.75m、短径0.6m、深さ24cmである。埋土は粘性の強い粘土で、上層には20cm大の礫がある。遺物は出土していない。

SK10 (第12図)

調査区の南西部で検出した土坑である。平面形は楕円形で、長径0.9m、短径0.6m、深さ16cmである。暗茶褐色～暗褐色の粘質土が堆積するが下層は砂が少々混じる。遺物は出土していない。

SK11 (第13図)

調査区の南西部で検出した土坑である。平面形は楕円形で、長径0.8m、短径0.5m、深さ30cmである。埋土は暗茶褐色粘質土の単一層である。

21は甕の底部と考えられ、外面にはヘラミガキが施されている。

SK12 (第14図)

調査区の南西部で検出した土坑である。平面形は楕円形で、長径0.9m、短径0.7m、深さ16cmであ

る。埋土は暗茶褐色粘質土の単一層である。微細な遺物が少量出土している。

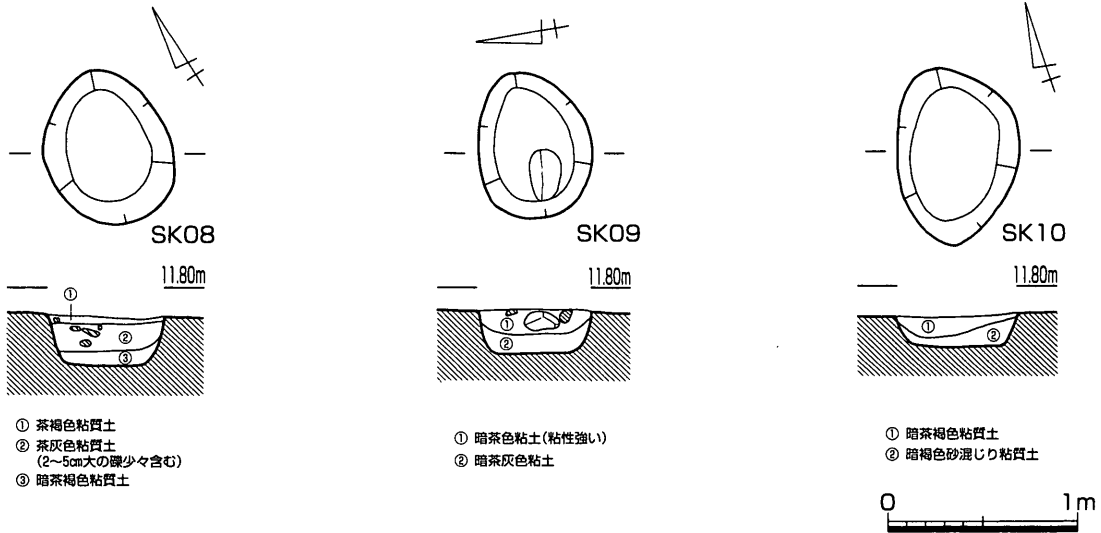
SK13 (第15図)

調査区中央のやや西寄りで検出した土坑で、北側部分をSK05により壊されている。平面形は残存部分から楕円形と考えられる。残存部での長径は1.15m、短径は0.95mで、深さは18cmである。埋土は暗茶褐色砂混じり粘質土の単一層である。微細な遺物が少量出土している。

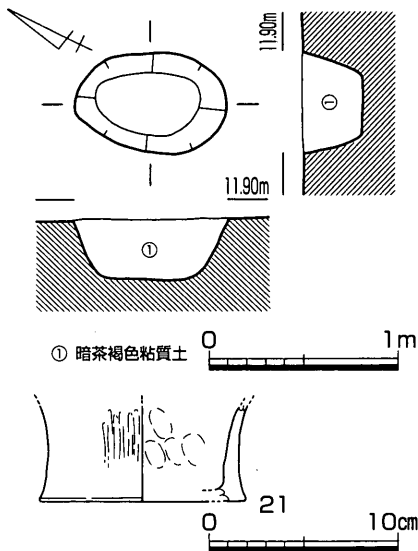
SK14 (第16図)

調査区の南西部で検出した土坑である。平面形は円形で、直径0.6mであるが南北方向が若干短い。深さは30cmで、埋土は黒褐色粘質土の単一層である。

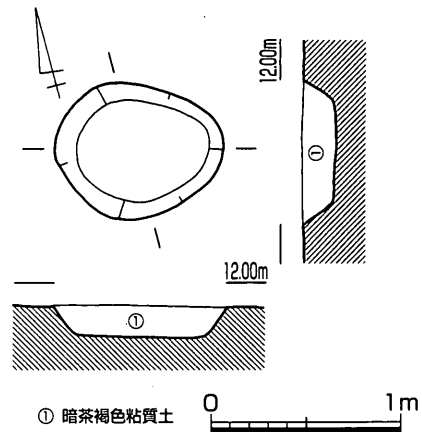
22は台付鉢の台部と考えられ、内・外面に指押さえが顕著である。端部付近はナデのため僅かに内湾している。



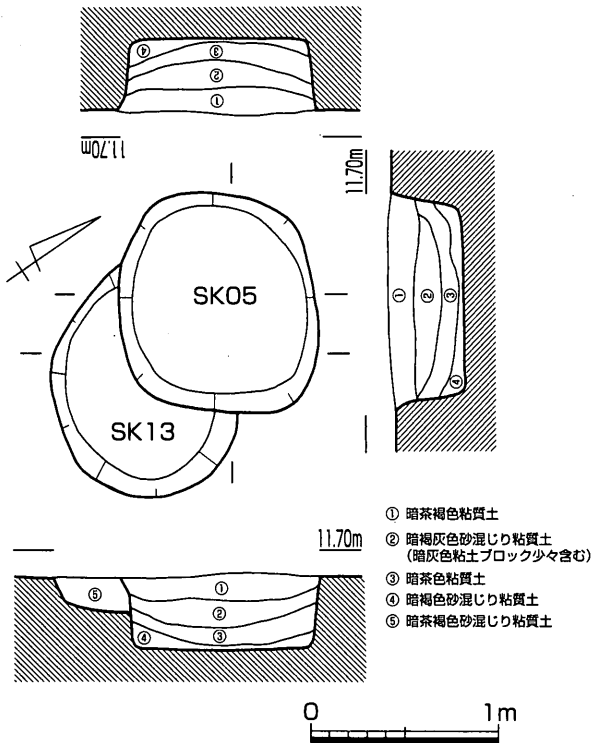
第12図 Ⅲ区第2面SK08・09・10平・断面図 (1/40)



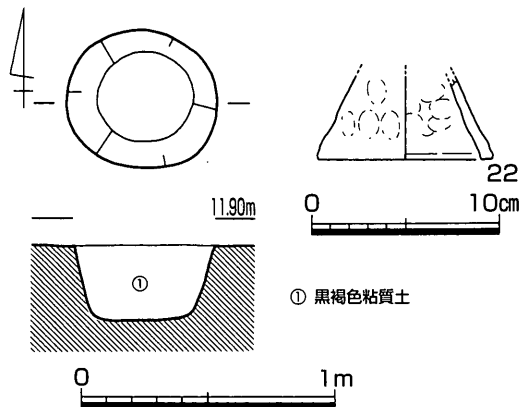
第13図 Ⅲ区第2面SK11平・断面図 (1/40) 出土遺物 (1/4)



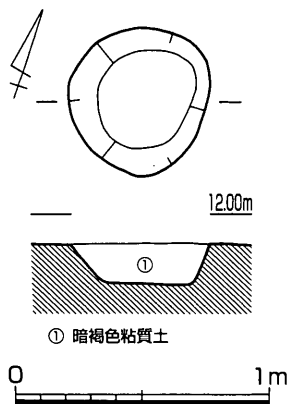
第14図 Ⅲ区第2面SK12平・断面図 (1/40)



第15図 Ⅲ区第2面SK13平・断面図 (1/40)



第16図 Ⅲ区第2面SK14平・断面図 (1/30)、出土遺物 (1/4)



第17図 Ⅲ区第2面SK15平・断面図 (1/30)

SK15 (第17図)

調査区の南西部で検出した土坑である。平面形は円形で、直径0.55m、深さ15cmである。掘り込みは西側が緩やかであるが、東側は急になっている。埋土は暗褐色粘質土の単一層で、微細な遺物が少量出土している。

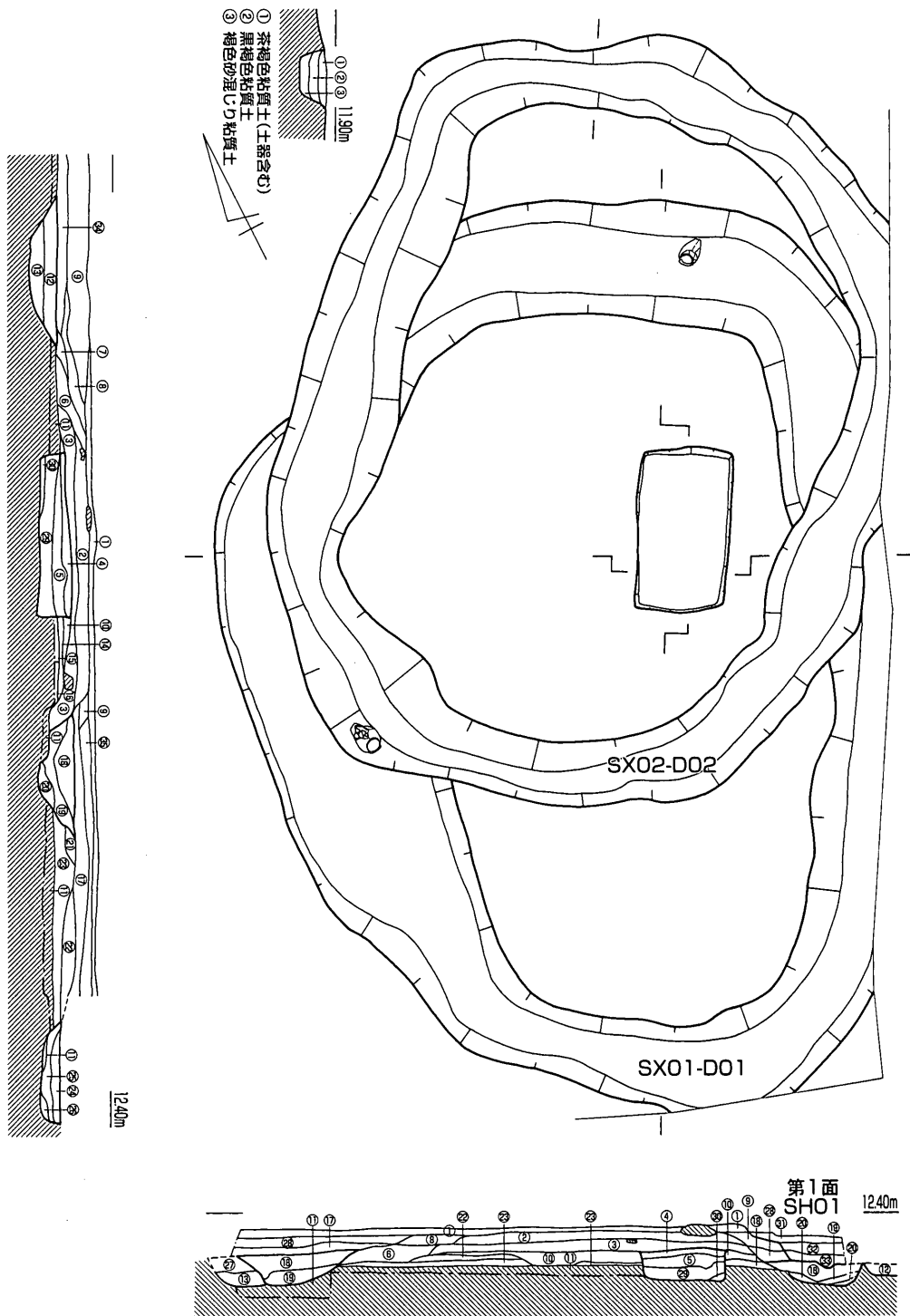
SX01、SX01-D01 (第18~20・24図)

調査区の南東隅で検出した方形周溝墓 (SX01) 及びその周溝 (SX01-D01) である。調査当初は集石遺構に類似するものとして調査したためと、土質の判別が困難であったため周溝を検出することが出来なかった。しかし墳丘の断ち割り土層観察用ベルトの精査により溝の存在が判明し、今一度平面を精査したところ、溝が巡ることが判明したところから方形周溝墓として認識するに至ったものである。

墳丘の規模は、周溝の内側で測って南北8.1m、東西は後述するSX02-D02により周溝が壊されているため正確な値は不明であるが5.5m前後と考えられる。墳丘は大部分が失われているが、第18図の土層図の10・14・18・22・23層は方形周溝墓SX01の盛土と考えられ、20cm前後が残っている。特に23層は白色長石粒を含む暗褐色砂質土で硬く締まっている。

周溝はその東側と南側が部分的に調査区外となったが、ほぼ全体が検出された。北側部分は幅1.3~1.4m、深さ30cmほどである。西側部分は幅1.9m前後とやや広く35cmほどの深さである。南側部分は他に比べて狭くなっており、幅0.75~1.1mで深さは20cmほどである。底部の標高は北側部分が最も低く11.43m前後で、逆に南側部分が最も高く11.64mになっている。周溝の埋土は褐色系の粘質土が中心となっている。北側部分の周溝内からほぼ完形の底部に穿孔された甕 (69) が1点出土している。周溝を含めた全体の規模は、調査区外の周溝を復元して南北10.4m前後、東西8.3m前後である。

墳丘の中心よりやや北東部ずれた部分で、埋葬



- | | | | | |
|-----------------------------|-----------------------|------------------------------|-------------------------------|---------------|
| ① 褐色砂質土(固くしまる) | ⑧ 茶褐色砂質土(少々粘性を帯びる) 盛土 | ⑬ 暗茶色粘土 | ⑳ 暗茶灰色粘土 | ㉑ 褐色砂質土 主体部埋土 |
| ② 暗褐色砂混じり粘質土
(白色細砂含む) 盛土 | ⑨ 茶褐色砂質土(固くしまる) | ⑭ 褐色砂礫土(0.1~3mm程度の細礫多く含む) | ㉒ 褐色砂混じり粘質土 | ㉒ 暗茶褐色粘質土 |
| ③ 明茶褐色砂混じり粘質土 | ⑩ 暗黄褐色弱粘質土 | ⑮ 明茶色粘質土 | ㉓ 暗茶灰色砂混じり粘質土 | ㉓ 黒褐色粘質土 |
| ④ 茶褐色砂混じり粘質土 主体部埋土 | ⑪ 褐色砂(粘質土ブロック少々含む) | ⑯ 暗茶灰色粘質土 | ㉔ 暗黄褐色砂混じり粘質土
(灰色粘土ブロック含む) | ㉔ 黒褐色粘土 |
| ⑤ 茶灰色粘質土(土器含む) 主体部埋土 | ⑫ 暗黄褐色粘質土 | ⑰ 暗褐色砂混じり粘質土 | ㉕ 褐色粘質土 | ㉕ 暗黄褐色粘質土 |
| ⑥ 暗茶色砂混じり粘質土 盛土 | ⑬ 茶褐色砂混じり粘質土 | ⑱ 暗黄灰色砂混じり粘質土 | ㉖ 暗茶褐色粘質土
(灰色粘土ブロック少々含む) | ㉖ 暗黄褐色粘質土 |
| ⑦ 暗茶灰色粘質土(灰色粘質土ブロック含む) | ⑭ 暗灰褐色粘質土 | ㉗ 暗褐色砂質土
(固くしまり白色長石粒多く含む) | ㉗ 暗褐色砂混じり粘質土 主体部埋土 | ㉗ 茶褐色砂質土 |

0 1 2 3m

第18図 III区第2面SX01・02平・断面図 (1/80)

主体部と考えられる土壌を検出した。平面形は長方形で、長辺1.9m、短辺1.05m、深さは40cmである。ほぼ垂直に掘削されており、埋土は暗茶褐色粘質土が主体となっているが、埋土に大きな差はない。この主体部は現状では10層の暗黄褐色弱粘質土層から掘り込まれているが、この10層より上部は後述する方形周溝墓（SX02）により削られており、さらにその盛土に覆われている。そのため本来はもう少し上部から掘り込まれており、主体部ももう少し深いものであったと考えられる。

69は甕で底部には焼成後に穿孔が施されている。口縁部は短く鋭く屈曲し、端部を上方に拡張している。体部は上半部に最大径があり外面にはヘラミガキが、内面下半にはヘラ削りが施されている。76～78は主体部から出土した土器である。76・77の甕は口縁部端部を上方に摘み上げている。78の鉢は口縁部上面に面をもつ。口縁部外面には刻み目の後に凹線を巡らせている。体部の内・外面にヘラミガキが見られ丁寧な作りである。79は調査時に主体部上面巨石付近として取上げているが、後の検討から直接この方形周溝墓に伴うものではない。

以上から、SX01、SX01-D01は弥生時代中期中葉のものと考えられる。

SX02、SX02-D02（第18～24図）

調査区の南東隅で検出した方形周溝墓（SX02）及びその周溝（SX02-D02）である。SX01と同様の調査経緯により周溝の検出が遅れたため、調査の早い段階で墳丘の北側部分を必要以上に掘り下げてしまっている。そのため北側の周溝付近の土層図が欠如してしまっている。

墳丘の規模は、周溝の内側で測って南北7.2m、東西4.8～5.1mである。墳丘の高さは現存で35cmほどである。墳丘はSX01の盛土の一部を利用してその上に盛っている。第18図の土層図の10層以下のSX01の盛土の上に新たに2・3・6・7・8層を盛っている。さらに北側には34層でSX01-D01を覆っている。また南北土層で6・8層が上面で不自然に切れていることから、墳丘の上部は削平されていることが分かる。また墳丘の南東部ではその最上面2層上に、長辺が40cmほどで厚さ約30cmの直方体の巨石と、それよりやや小さい最大長35cmの不定形の巨石が並ぶように据えられていた。この巨石の直下には盛土を挟むとはいえ、SX01の主体部がある。SX02の造営に伴って、SX01の盛土を整地する際にこのSX01の主体部を認識し、その標石として据えたのではなかろうか。この巨石は第1遺構面検出時にはすでに見えており、本来このSX02の盛土によって隠れていたか、あるいは見える状態であったのかは不明である。さらに墳頂部を中心に土器が出土した。しかしこれらの土器は墳丘が削平された後のものが含まれている。丁度墳丘頂部あたりが弥生時代後期の遺構面と第1遺構面に近いことから、周溝内の土器よりも後出する遺物も含まれていたと考えられる。また南側の墳丘の斜面部の盛土内から10～20cm大の礫がやや集中して出土した。長さにして2mほどの部分であるが、これは墳丘の強度を増し盛土が流出しないためのものかも知れない。

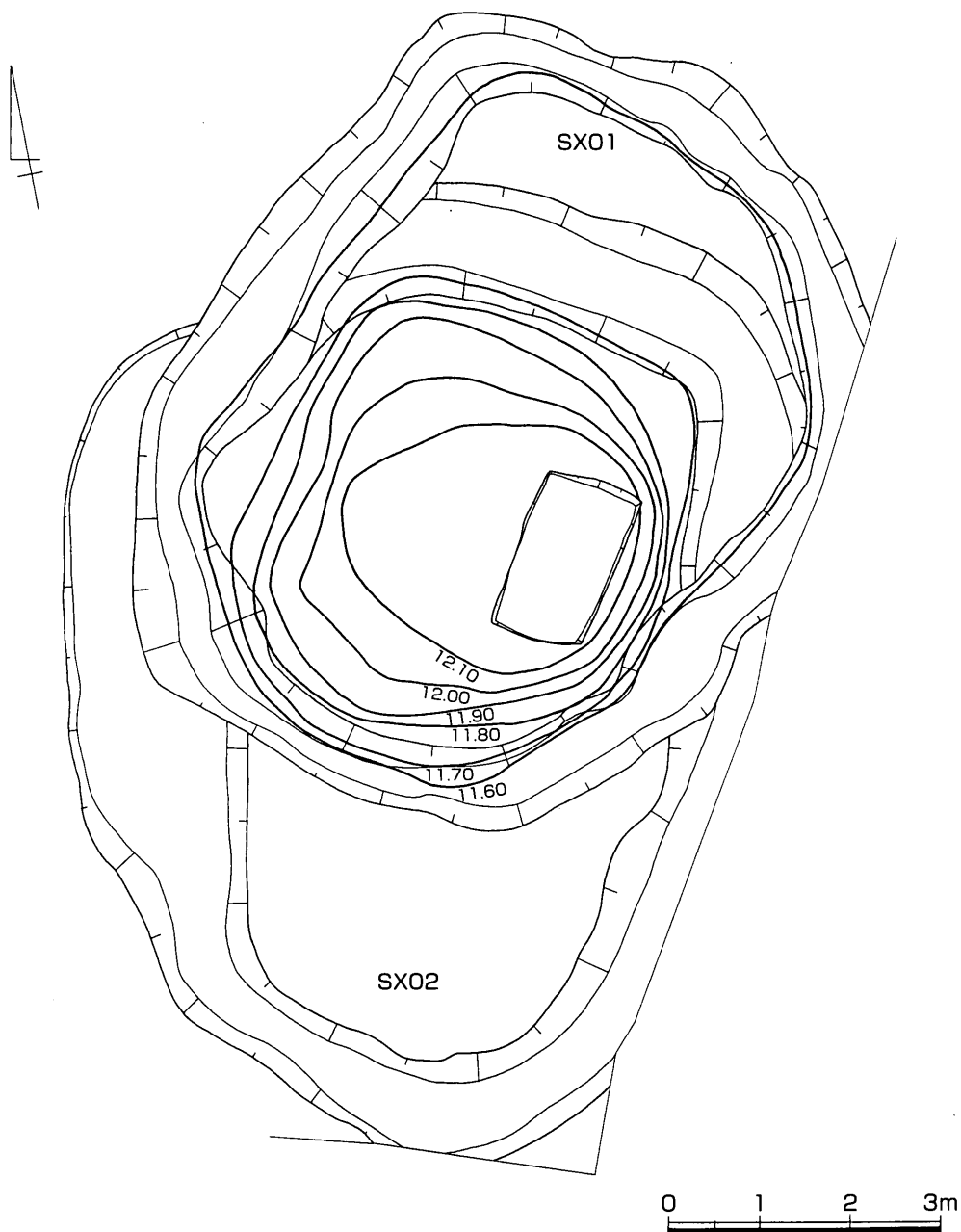
周溝はその東側が部分的に調査区外となったが、全体が検出された。幅0.65～1.3m、深さ25～45cmである。北側は全体的に狭くなっており、南西部は狭い部分と広い部分の差が大きい。周溝の底部の標高は北側が11.48m、その他の部分が11.55m前後で、全体的にはほぼ同じ高さである。東西方向の断面図から分かるように、周溝は外側のほうが掘り込みが急になっている。埋土は暗茶色系の粘質土が主体となっている。周溝の南西部の幅が最も広い部分で、ほぼ完形の底部に穿孔された甕（70）が1点出土している。周溝を含めた全体の規模は南北8.7m、東西7.0mである。

墳丘の上面が削平されているためか、主体部は検出されなかった。

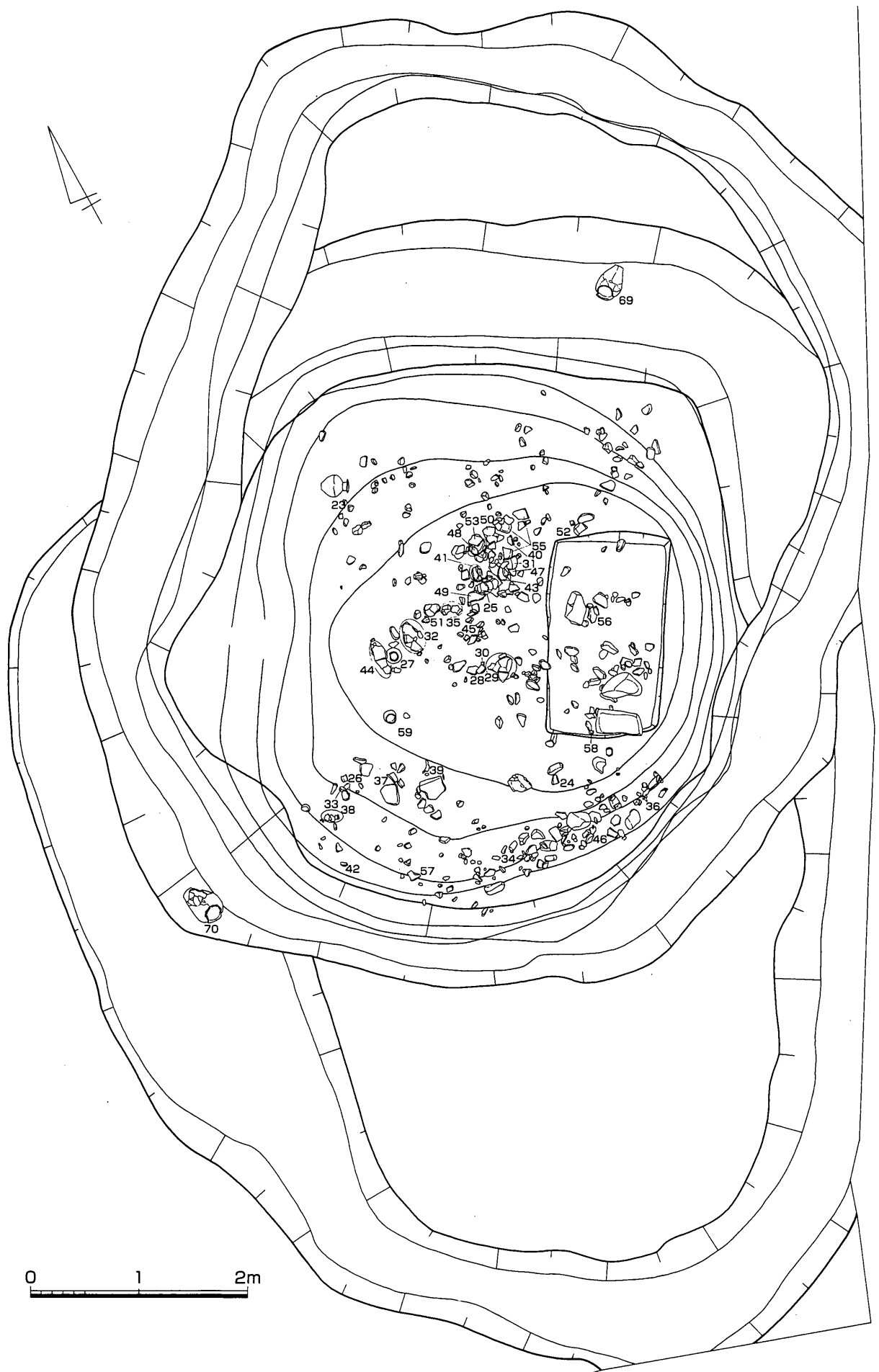
23～68は墳丘上で、70～75は周溝から出土した遺物である。

23～31は壺である。23は底部に焼成後に穿孔している。口縁部は大きく外反し端部は上下に拡張している。頸部と体部中央にヘラ圧痕文を施す。内・外面にハケ目を施した後に体部外面下半にヘラミガキを加える。24も口縁部端部を上下に拡張する。25は細長い頸部から口縁部が外反する。29の体部上半は張りが強い。

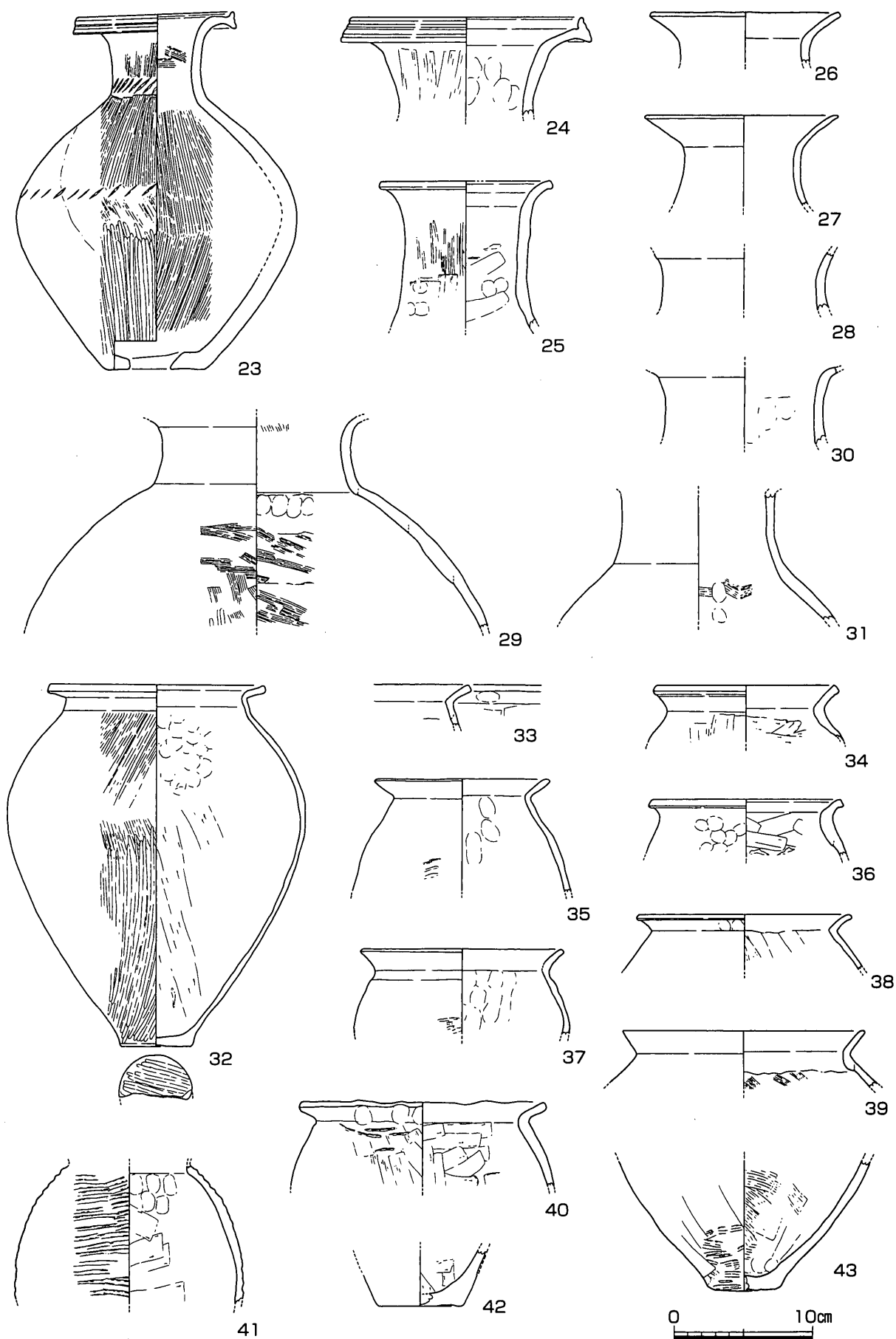
32～41は甕である。32の口縁部は短く屈曲する。体部最大径は中央より上にある。体部外面はハケ目の後に下半にヘラミガキを施し、内面は下半にヘラケズリを施す。底部外面にも丁寧にヘラミガキを施している。36は口縁部から体部上部にかけて肥厚している。35・37・40・41は体部外面にタタキがあるが、41のタタキは幅広である。40は強い指押さえのため口縁部が部分的に歪んでいる。



第19図 Ⅲ区第2面SX01・02墳丘地形図 (1/80)



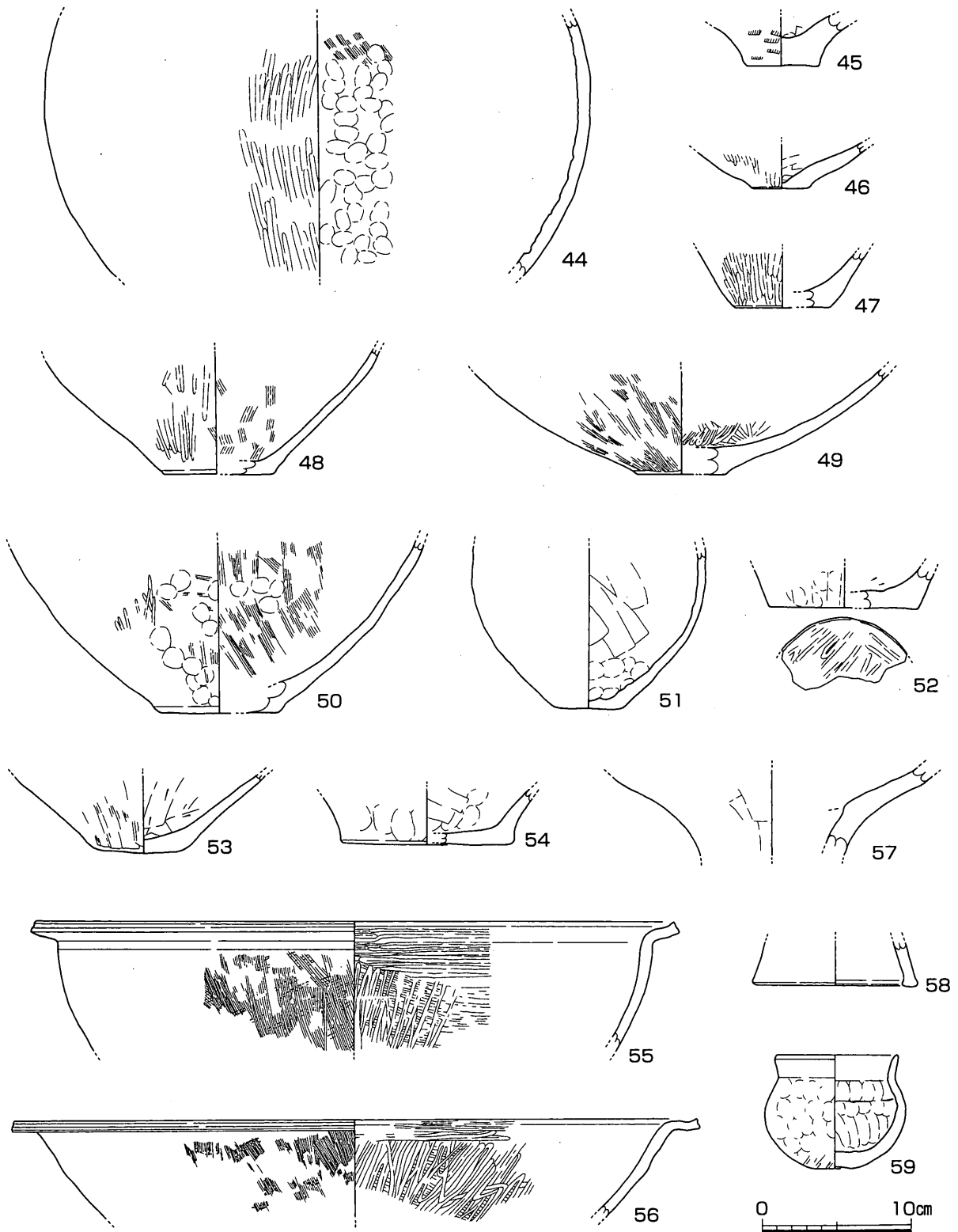
第20図 Ⅲ区第2面SX01・02遺物出土状況図 (1/50)



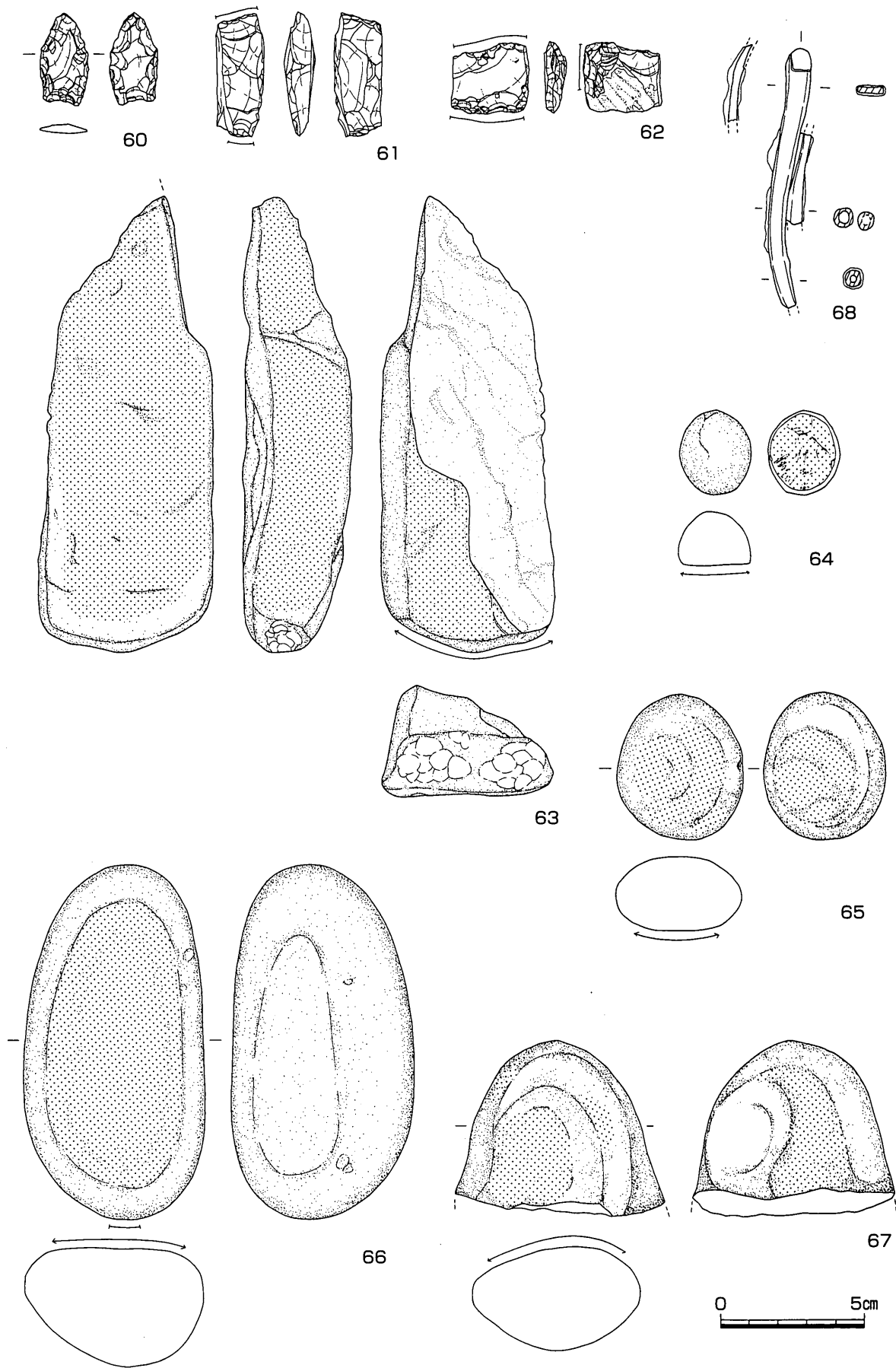
第21图 Ⅲ区第2面SX02出土遺物 (1) (1 / 4)

42~54は壺および甕の体部~底部である。43は体部下部にタタキが残る。44は外面にヘラミガキを施すが、内面には指押さえが顕著である。49は底部内面にヘラミガキを施す。52は底部外面にヘラミガキを施している。

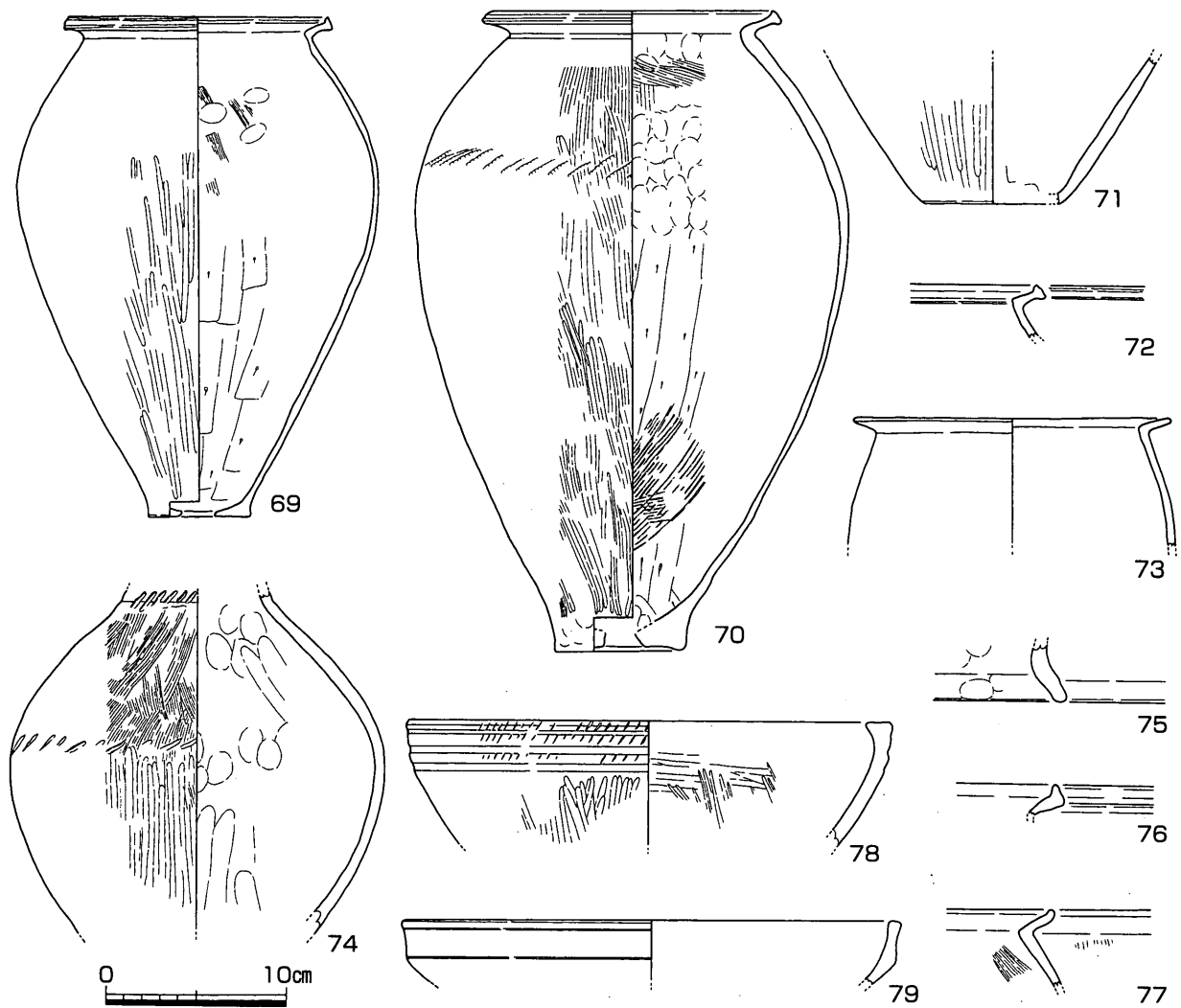
55・56は大形の鉢で、口縁部はいずれも短く外反する。外面はタタキの後にハケ目を施し、内面はハ



第22図 Ⅲ区第2面SX02出土遺物(2)(1/4)



第23图 Ⅲ区第2面SX02出土遗物 (3) (1/2)



第24図 Ⅲ区第2面SX01-D01、SX02-D02、SX01-K01出土遺物（1/4）

ケ目の後に丁寧にヘラミガキを加える。

57・58は台付鉢で、57は円盤充填の剥離痕が見られる。

59は小形丸底壺で、第1面の古墳時代中期の竪穴住居跡からの混入品と考えられる。

60は凹基の石鏃である。61・62は楔形石器で敲打痕が顕著で、両極打撃の痕跡が認められる。63は下部の小口部分を敲石として使用しているが、主要な面は砥石として使用している。64～67は磨石であるが、66は端部に弱い敲打痕があり、部分的に被熱赤変している。

68はヤリガンナであるが、身の部分が曲がっている。第1面の古墳時代中期の竪穴住居跡からの混入品と考えられる。

70～73は甕である。70は底部外面に焼成後に穿孔している。口縁部は短く屈曲し、体部最大径は上半にある。体部外面はハケ目の後にヘラミガキを施し、上半部にハケ目原体による圧痕文を巡らせている。内面は下半にはヘラケズリを施した後に上部と下部に部分的にハケ目を加えている。

74は壺の体部で、球形に近い。外面はハケ目の後に下半部にヘラミガキを施す。頸部と体部中央にヘラ圧痕文を巡らせている。内面は指押さえと指ナデである。

75は台付鉢の台部と考えられる。

以上のことから、SX02は弥生時代後期と一部古墳時代中期の遺物が混じるが、SX02-D02の遺物が

ら考えると弥生時代中期中葉のものと考えられる。

ST01 (第25・27図)

調査区西部の集石1下位で検出した木棺墓である。棺痕跡は平、断面の両方で確認できた。墓坑は平面形が南側でやや広がる長方形である。断面形は概ね壁が直立するが東西断面の東側では2段掘りである。床面はほぼ平坦であるが北側でやや下がる。規模は長径2.3m、短径1.08m、掘り込み面である中期遺構面からの深さ0.24mを測る。主軸方向はN-16°-Wを測る。

掘り込み面に関して調査時の状況を述べておく。ST01、02はともに集石1南北ベルトの下部にある。これらの正確な位置はベルト除去後(図版6上写真)に判明したがベルトを残した時点で概ねの位置は把握していた。また集石遺構形成土の下位がこれに伴う整地土などであればこの層の上面から墓坑が掘り込まれる可能性は考慮していた。よってベルト9、10層で墓坑付近と考えていた部分は精査を繰り返し、これらの層内に墓坑の可能性をもつ立ち上がりがないことを確認していた。これは整理作業に伴う写真の再検討でも改めて確認した。

木棺痕跡の平面形は墓坑と同様に南側でやや広がる。規模は長径1.42m(下場1.27m)、短径0.34mを測る。棺内の埋土は3層に分けられるがほぼ水平堆積している。3層は棺側板が腐朽し粘土化した可能性があるものの平面的にはベルトのごく一部でしか見られない。また床面に側板、小口板を据えた掘り込みは見られない。頭位方向は南側で平面形が広がり床面も高くなっていることから南と考えられる。

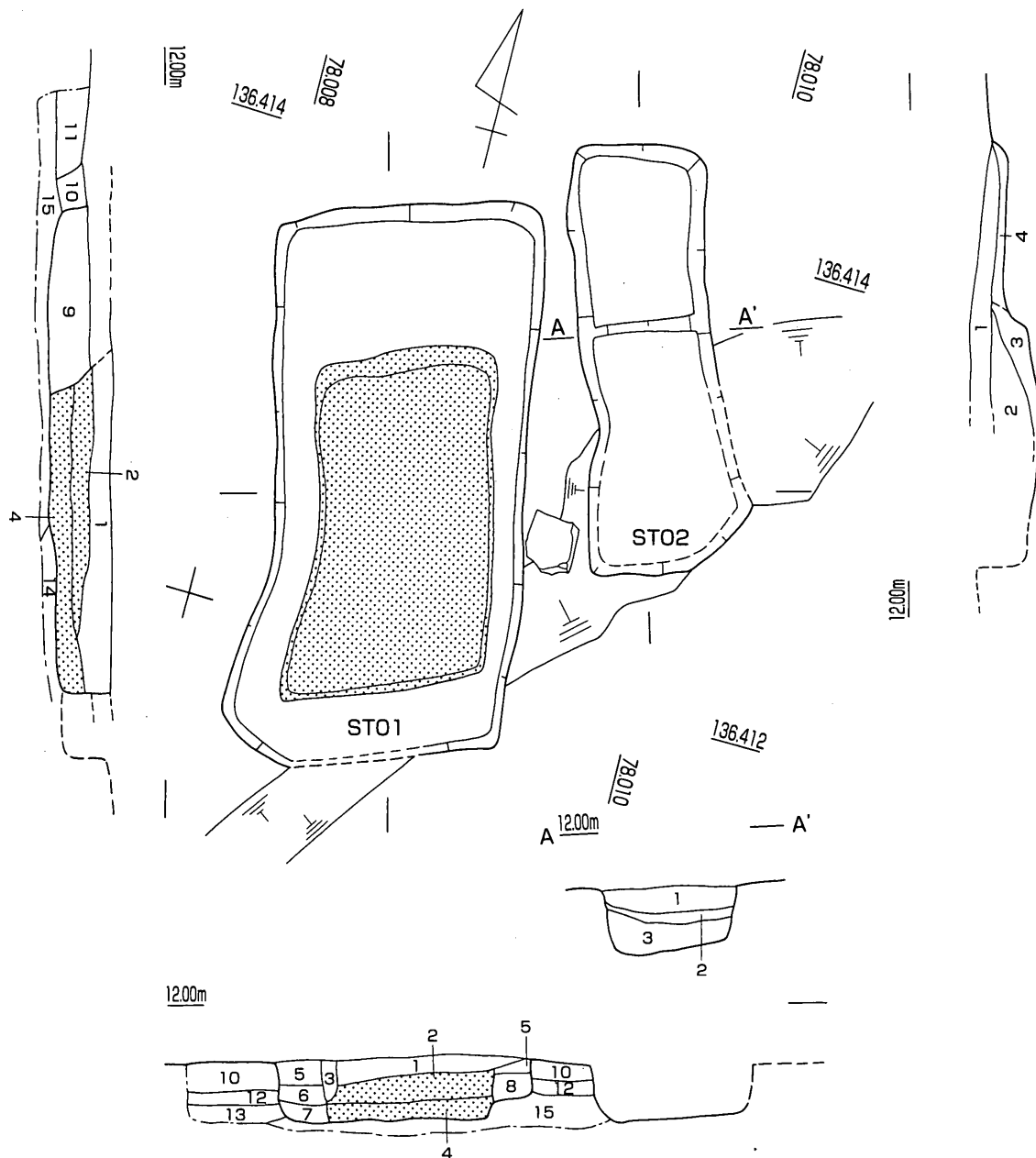
出土遺物のごく少量であり弥生土器の甕(80)、底部(81)などがある。80は口縁部が体部から強く屈曲し水平気味に延びる。口縁端部は内面が弱い横ナデによりわずかに隆起するが、つまみ上げておらず凹線文も見られない。81は平底であり外面は直線的に外上方に延びる。内面は摩滅が著しいが、ヘラケズリを施す。なお詳細は後述するが、ST02との間の部分のST01掘り込み面より結晶片岩製板状剥片(192)が出土している。集石1との関係についてはまとめて触れる。墓の時期は出土土器、後述するST02との関係から弥生中期中葉と考えられる。

ST02 (第25図)

集石1下位で検出した土壙墓である。墓坑は平面形が南側で幅広になる長方形であり、断面形はA-A'断面で壁がほぼ直立するが床面は西へやや下がる。南北断面では北側で深さ0.15m、南側で0.30mを測り、2段掘りとなっている。南北両側の床面はほぼ平坦であるが南側では中央でややくぼむ。規模は長径1.78m(下場長約1.0m)、短径0.58m、掘り込み面である中期遺構面からの深さ0.35mを測る。主軸方向はN-16.5°-Wである。南側で平面形が広がるため頭位方向は南と推定される。

出土遺物には鉢(82)を含めごく少量の弥生土器がある。82は口縁部外面の上端に凹線文を、内外面にヘラミガキを加える。墓の時期は82から弥生中期中葉と考えられる。

以上のように人骨、副葬品、棺(痕跡)など墓であることを直接示すデータは得られなかった。だが平、断面形および2段掘りになる形状から木棺墓の可能性もある。またST01とは10~30cmの間隔をあげ、主軸方向を揃えており、北側の短軸がほぼ列状になる。このように相互を意識したと見られる配置も墓であることを示し、基数から短期間に形成された墓群であると考えられる。なお集石1との関係についてはまとめて触れる。



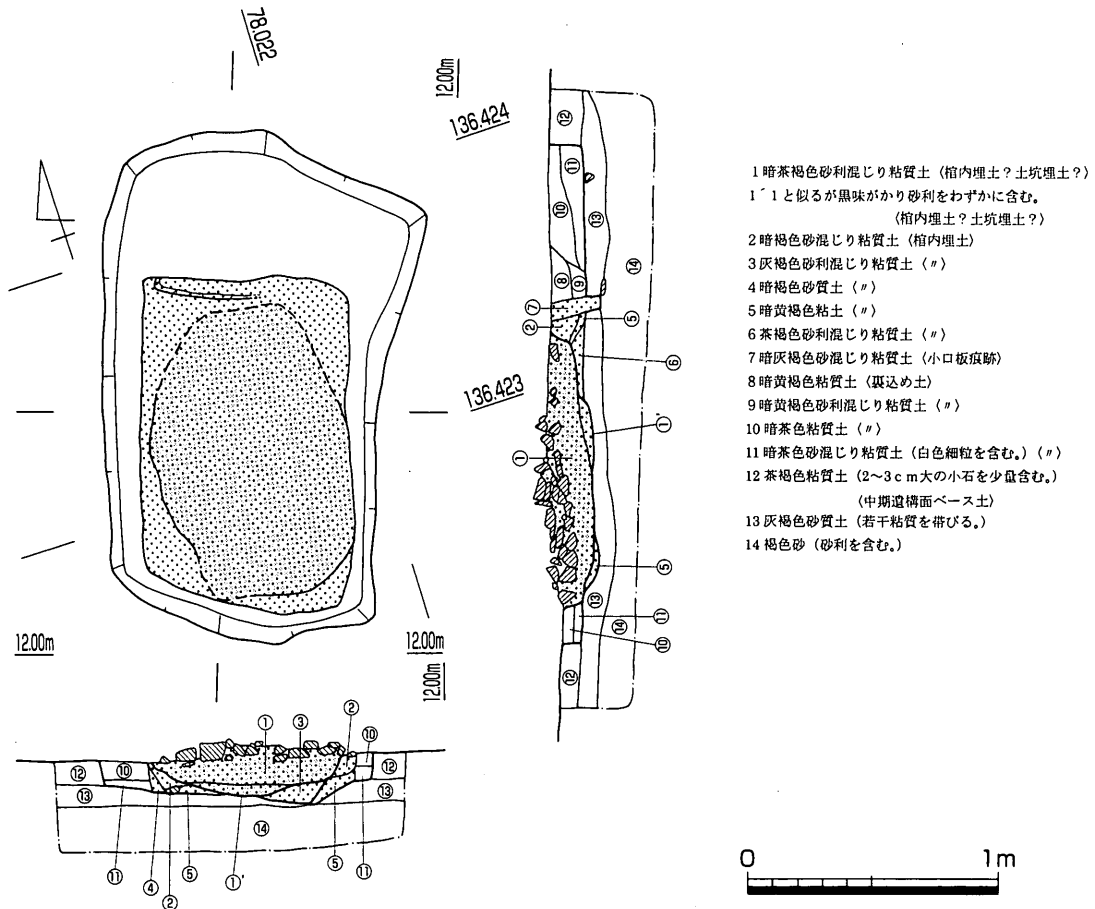
〈ST01〉

- 1 黒褐色粘質土
- 2 暗茶褐色粘質土 2、3mm大の砂利を含む。(棺埋土)
- 3 黄茶色粘質土 やや砂質がかる。(棺痕跡?)
- 4 暗黄褐色粘質土 砂、暗灰色粘土ブロックを含む。(棺埋土)
- 5 暗茶色粘質土
- 6 暗茶褐色砂質土 固くしまる。
- 7 暗茶褐色砂質土
- 8 黒褐色粘土
- 9 褐色粘土混じり砂礫土 0.5~3cm大の砂利、小石を多く含み、固くしまる。(ST01)
- 10 明茶褐色粘質土 (弥生中期遺構面。集石1ベルト21層)
- 11 茶色粘土混じり砂礫土 0.5~3cm大の砂利、小石を多く含み、固くしまる。(弥生中期遺構面。集石1ベルト22層)
- 12 茶色粘質土 (集石1ベルト24層)
- 13 暗褐色粘質土 2、3mm大の砂利を含む。
- 14 暗黄褐色粘質土 少量の砂を含む。(集石ベルト23層)
- 15 褐色砂礫土 0.5~1cm大の砂利を多く含む。

〈ST02〉

- 1 暗茶褐色粘土
- 2 暗褐色粘質土 2~4cm大の小石を少量含む。
- 3 暗灰褐色砂質土
- 4 暗灰褐色細砂礫土 1cm以下の砂利を多く含む。

第25図 Ⅲ区第2面ST01・02平・断面図 (1/30)



- 1 暗茶褐色砂利混じり粘質土 (棺内埋土? 土坑埋土?)
- 1' 1と似るが黒味がかり砂利をわずかに含む。
(棺内埋土? 土坑埋土?)
- 2 暗褐色砂利混じり粘質土 (棺内埋土)
- 3 灰褐色砂利混じり粘質土 (＃)
- 4 暗褐色砂質土 (＃)
- 5 暗黄褐色粘土 (＃)
- 6 茶褐色砂利混じり粘質土 (＃)
- 7 暗灰褐色砂利混じり粘質土 (小口板痕跡)
- 8 暗黄褐色粘質土 (裏込め土)
- 9 暗黄褐色砂利混じり粘質土 (＃)
- 10 暗茶色粘質土 (＃)
- 11 暗茶色砂利混じり粘質土 (白色細粒を含む。) (＃)
- 12 茶褐色粘質土 (2~3cm大の小石を少量含む。
(中期遺構面ベース土))
- 13 灰褐色砂質土 (若干粘質を帯びる。)
- 14 褐色砂 (砂利を含む。)

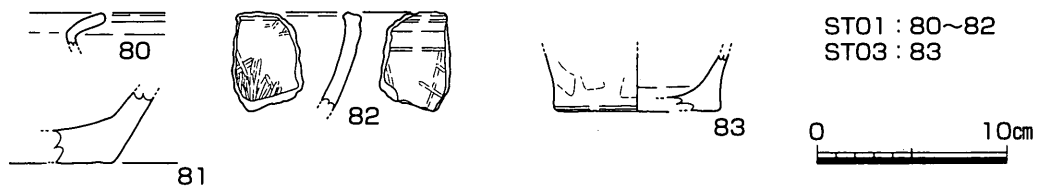
第26図 III区第2面ST03平・断面図 (1/30)

ST03 (第26~27図)

集石2下位で検出した木棺墓である。棺痕跡は平、断面の両方で見られる。墓坑は平面形が北側でやや膨らむ長方形を呈する。床面は東西断面の東側、南北断面の中央と南側でくぼみや凹凸がある。規模は長径2.01m、短径1.08m、検出面からの深さ0.21mを測る。主軸方向はN-19°-Eである。

木棺痕跡の平面形は整った長方形で規模は長径1.2m、短径0.84mを測る。床面の北西隅では小口板を据えた掘り込み溝がある。棺内の埋土は1~6層が該当する。このうち1、1'層はレンズ状を呈しており木棺の木蓋腐朽に伴う崩落土と考えられる。1層上部には多量の礫が含まれるが、これを上位にある集石2形成礫が崩落したためと考えれば集石2とST03が有機的な関係にあることを示す。1、1'層の落ちのラインは棺痕跡と重なる南部以外でも急である。また1'層の底が墓の床面に達していることは棺の下部の地山層が砂質~砂で柔らかいため、崩落の圧力によって沈下したと考えられる。楕円形を呈する平面形はほぼ棺痕跡と重なる。

なおこの問題とも関係するが集石2南北ベルトにおいてST03付近の土層観察ができていない。平成9年度概報ではこれを呈示せず推定線を実線で記載した。このため集石遺構に伴う木棺墓であるのに棺埋土上面が直線的であるという不自然な状況を生じたので第44図で未観察部分を明示した。ただ分層した部分も集石1のように下部遺構の存在を意識したものではない。このためST03の掘り込み面認定についてあいまいさを否定できない。ただ南北ベルトで集石5下位SK01部分付近を分層する際に、ST03及び木棺陥没坑が弥生時代後期遺構面までの層から掘り込まれていれば、第44図のライン①、②のよう



第27図 Ⅲ区第2面ST01・03出土遺物（1 / 4）

に両者とも南端の立ち上がりラインが確認されるはずである。しかし確認されなかったことから両者とも中期遺構面より上位には延びないものと判断する（図版8右下写真参照）。

またST03は深度が浅く、集石2に伴うなら平成9年度概報で指摘しているように棺上部が盛土中に突出するか、あるいは棺自体が低いものと考えられる。

土層図の不備があるものの、木棺木蓋陥没坑が認められることから、ST03と上部の集石2と有機的に結びついていると考えたい。

出土遺物には甕底部（83）を含むごく少量の弥生土器がある。墓の時期は直上にある集石2が弥生中期中葉と考えられること、近接した位置にあるST01、02が弥生中期中葉に位置づけられること、付近の遺構には弥生中期前葉まで遡るものがないことから弥生中期中葉と考えられる。

Ⅲ区集石遺構について

Ⅲ区では4基の集石遺構（集石1、2、3、5）がある。だが冒頭の調査区の概要で述べられたとおり調査時には弥生時代後期の遺構面を把握できておらず集石遺構は2基（旧集石1、2）であると考えていた。このため調査時には上下の集石遺構が一体という前提で、また遺物の分布を土層と整合させて分層した部分があった。だが平成11年度のV区の調査、昨年度のⅠ、Ⅱ区の整理作業などにより時期差をもつ複数基の重複という可能性が生じたため土層断面を写真で再検討し、これに集石遺構内外の遺物出土状況、出土レベルを加味して妥当性を検証した。

この作業の一環として実測遺物の平面的な出土位置、レベルをドット分布図に集計した。この結果ほとんど全ての弥生後期土器が旧集石1で12.0m、旧集石2で11.95mより上位にしか見られないことが判明した。

これと対応する土層は旧集石1で調査時に南北ベルト、西ベルトにおいて12.0m付近で水平に分層していたためこのラインを弥生後期遺構面と判断した。上記のベルトでは集石東部の状況が確認できないが調査区東端からSD03までを図化した旧E1区南壁土層図（第5図）でも後期面ベース土上面はほぼ平坦であり、西端では約12.0mとなる。南壁の西端と南北ベルトの至近部は4m弱しか離れていないためこの部分の遺構面レベルも同様であると推定した。旧集石2は南北ベルトしか土層図を作成できていないが旧集石1付近から連続する後期面ベース土の上面が約11.95mであり、中期、後期土器の分布もきれいに分かれるためこのレベルと判断した。こうして旧集石1を集石1・集石3に、旧集石2を集石2・集石5という時期差を持つ遺構として上下に分離した。

なお、旧集石1付近の後期遺構面は11.95~12.0mなので付図においてこの範囲の遺物はどちらにも加え破線で表記した。

さらに先述したST01~ST03と後述する集石1、集石2との関係は「第4章まとめ」の第2節で詳しく述べる。本文中で記述が分断して読みにくくなってしまったことをお詫びしたい。

集石 1 (第28～31・33～37図)

〈立地と平、断面形、規模〉

Ⅲ区第2面遺構配置図(第4図)を見ると西側が浅い谷状に窪んでいるが集石1はこの谷の中央部に位置する。付近の中期遺構面レベルも約11.6～11.7mと周囲よりやや低い。

集石1は成重遺跡で初めて検出した集石遺構であり当初遺構と認定しがたかったため機械掘削時に北東部を損壊した。だが土層断面による裾部把握、遺物の分布状況の粗密から平面形は楕円形であると推定される。断面形はマウンド状を呈し、頂部がほぼ平坦で、裾が緩やかに広がる扁平な台形である。規模は土層図作成部で南北5.7mを測り、東西は4.8mと推定される。高さは約25cmである。

なお平面的な推定範囲の外側でも北東部以外で遺物の密集が見られる。これらは推定範囲内のそれとの間に空白部がある。南西部、南東部の密集は小範囲で小振りの礫で構成される。また遺構面からもやや浮くため集石1からの崩落と考えられる。北西部では15cm前後と大きめの礫が円弧状に連なって分布する。このうち北部の6、7石はほぼ遺構面上で出土しているが西側の礫は全て10cm前後浮いており、底面レベルも一定しない。よって同様に崩落と考えられる。

〈土層堆積状況〉

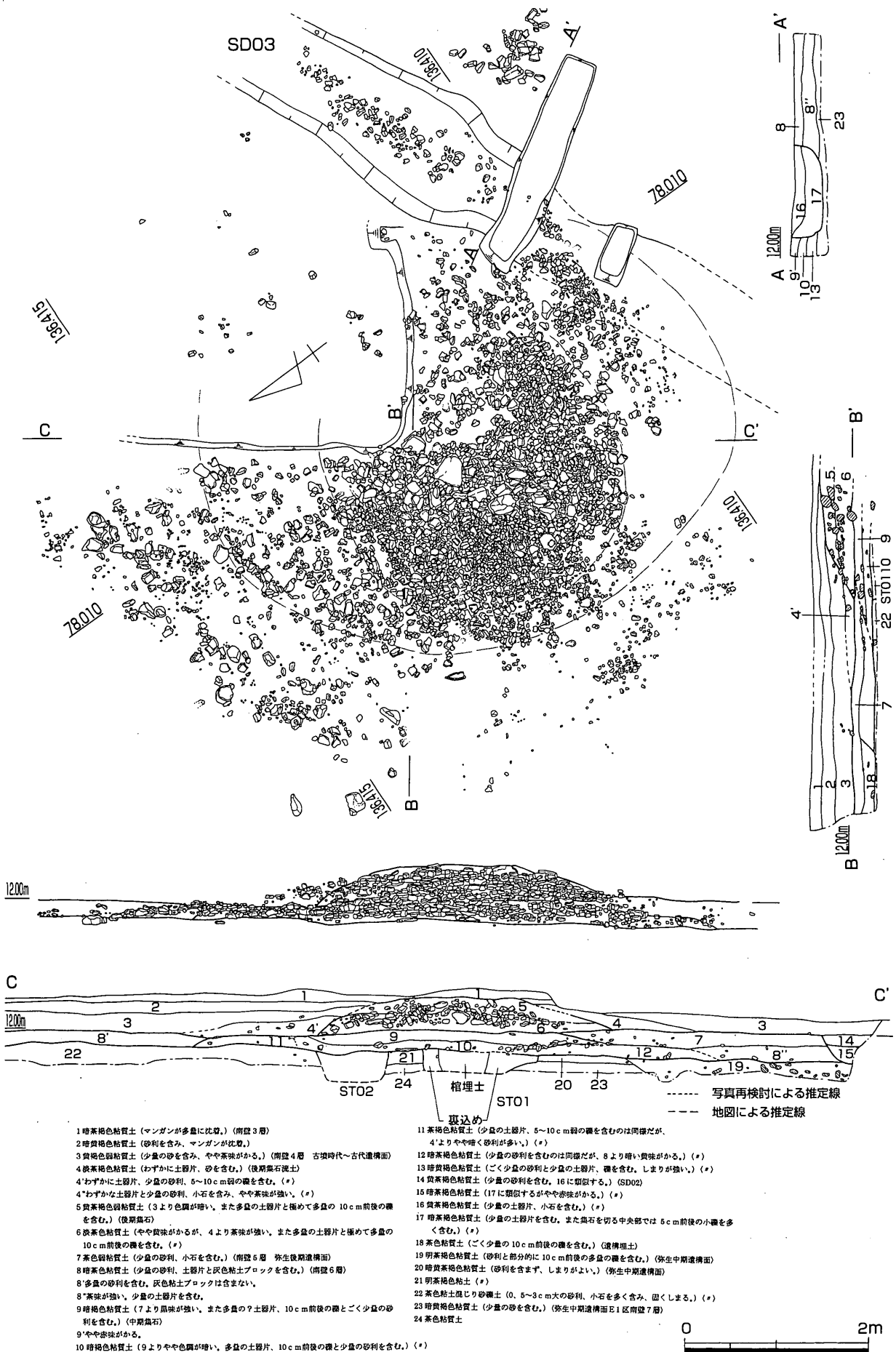
遺構形成土は5層(集石1ベルト9～13層)に分層できる。暗茶褐色～暗黄褐色系でいずれも砂利を含む粘質土である。土器片、礫は中央にある9、10層で多く見られる。それぞれは10cm前後の層厚でほぼ水平堆積する。なお集石3と比べると遺物に対する土砂の量が多く9、10層でも遺物が希薄な部分が目立つ。

〈遺物出土状況〉

遺構を構成する遺物には多量の土器、礫と少量の石器がある。これらは推定範囲のほぼ全面に混在して分布するが、細かく見るとST01北部、南西部の2ヶ所付近で東西2m強、南北約1mの範囲に集中している。ただ下位に位置するST01、02とは主軸が異なり、遺物の面を揃えた痕跡もないためこれらを意識した分布とは言いがたい。

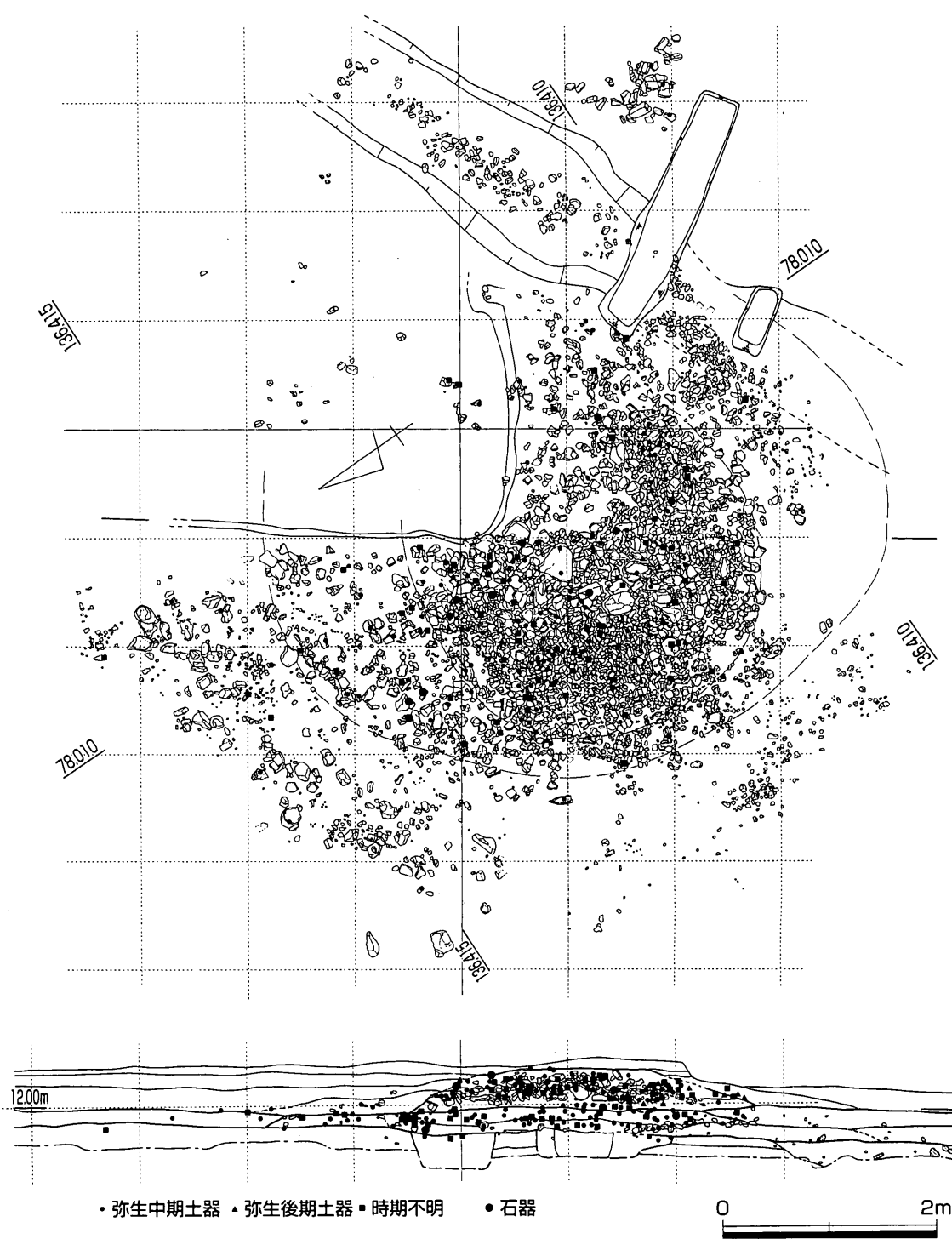
土器は壺、甕、高杯、鉢といった器種からなり甕が多いが器種別での分布に偏りは見られない。残存率は半身の甕(105)が最大で破片ばかりである。また非日常的な器種、穿孔を施したり赤色顔料を塗布したりする土器は出土していない。ただし赤色顔料についての分析で示されるとおりスリップを塗布し赤化させた土器はごく少量含む。礫は南部で10cm前後と小振りのものが、中央部から北部にかけて15cm前後とやや大振りのものが目立つものの基本的に大小が混在する。多くは砂岩類であるが花崗岩なども含む。砂岩、花崗岩は遺跡近辺で採取可能であり、ともに地山内に含む。石器の内容は後述するが多岐に渡る器種が出土している。これらは散らばって出土している。

接合資料は8セット見られる。位置的に離れて接合した95、107、109で約2mの間隔を空ける。レベル的には107、109がそれぞれ15、17cmの差がある。資料数はさほどないが基本的に近接した位置にありレベル差も小さいことから集石遺構形成土は土器片が混じった後、激しく攪拌されることなく盛り上げられたと考えられる。ただわずかながらレベル差をもつものも含むことは遺構形成土の大半を占める9、10層が酷似する土層であること、出土遺物に時期差がないことと合わせ集石遺構が限定された期間に構築されたことを示唆する。



- 1 暗茶褐色粘質土 (マンガンが多量に沈着。) (南壁3層)
- 2 暗茶褐色粘質土 (砂利を含み、マンガンが沈着。)
- 3 黄褐色粘質土 (少量の砂を含み、やや茶味がかる。) (南壁4層 古墳時代～古代遺構面)
- 4 赤褐色粘質土 (わずかに土器片、砂を含む。) (後期集石土)
- 4' わずかに土器片、少量の砂利、5~10cm程度の礫を含む。(*)
- 4'' わずかに土器片と少量の砂利、小石を含み、やや茶味が強い。(*)
- 5 黄褐色粘質土 (3より色調が暗い、また多量の土器片と極めて多量の10cm前後の礫を含む。) (後期集石)
- 6 赤褐色粘質土 (やや茶味がかるが、4より茶味が強い、また多量の土器片と極めて多量の10cm前後の礫を含む。)(*)
- 7 赤色粘質土 (少量の砂利、小石を含む。)(南壁5層 弥生後期遺構面)
- 8 暗茶褐色粘質土 (少量の砂利、土器片と灰色粘土ブロックを含む。)(南壁6層)
- 8' 多量の砂利を含む、灰色粘土ブロックは含まない。
- 8'' 茶味が強い、少量の土器片を含む。
- 9 暗褐色粘質土 (7より風味が強い、また多量の土器片、10cm前後の礫とごく少量の砂利を含む。)(中期集石)
- 9' やや赤味がかる。
- 10 暗褐色粘質土 (9よりやや色調が暗い、多量の土器片、10cm前後の礫と少量の砂利を含む。)(*)
- 11 赤褐色粘質土 (少量の土器片、5~10cm程度の礫を含むのは同様だが、4'よりやや暗く砂利が多い。)(*)
- 12 暗茶褐色粘質土 (少量の砂利を含むのは同様だが、8より暗い黄味がかる。)(*)
- 13 暗黄褐色粘質土 (ごく少量の砂利と少量の土器片、礫を含む、しまりが強い。)(*)
- 14 黄褐色粘質土 (少量の砂利を含む、16に類似する。)(SD02)
- 15 暗茶褐色粘質土 (17に類似するがやや赤味がかる。)(*)
- 16 黄褐色粘質土 (少量の土器片、小石を含む。)(*)
- 17 暗茶褐色粘質土 (少量の土器片を含む、また礫石を切る中央部では5cm前後の小礫を多く含む。)(*)
- 18 赤色粘質土 (ごく少量の10cm前後の礫を含む。)(遺構埋土)
- 19 明茶褐色粘質土 (砂利と部分的に10cm前後の多量の礫を含む。)(弥生中期遺構面)
- 20 暗黄褐色粘質土 (砂利を含まず、しまりがよい。)(弥生中期遺構面)
- 21 明茶褐色粘質土 (*)
- 22 赤色粘土混じり砂礫土 (0.5~3cm大の砂利、小石を多く含む、固くしめる。)(*)
- 23 暗黄褐色粘質土 (少量の砂を含む。)(弥生中期遺構面E1区南壁7層)
- 24 赤色粘質土

第28図 Ⅲ区第2面集石1・3平・立・断面図 (1/60)、SD03平・断面図 (1/60)



第29図 Ⅲ区第2面集石1・3遺物分布図 (1/60)

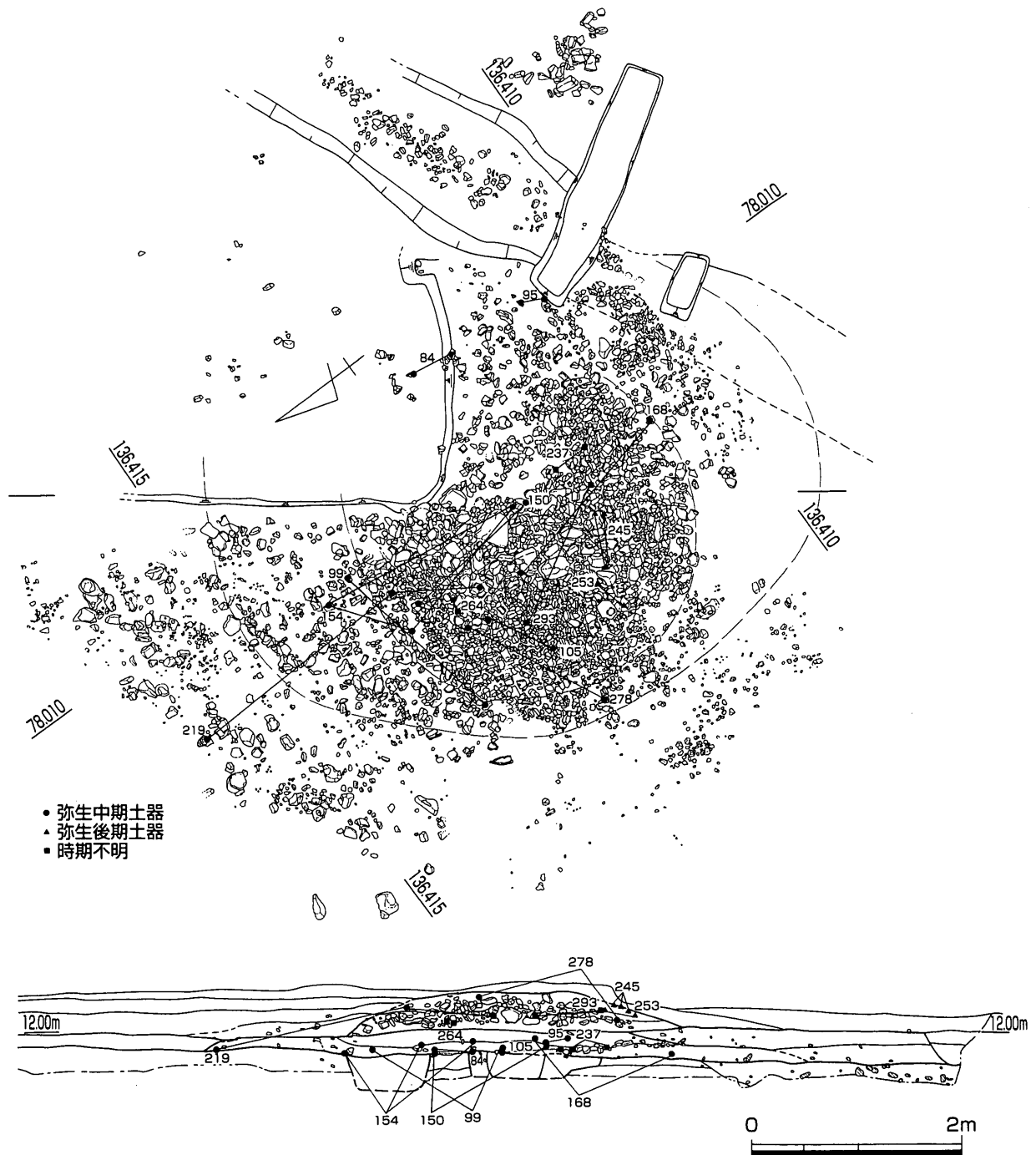


第30図 III区第2面集石1・3平・立面図 (1/60)

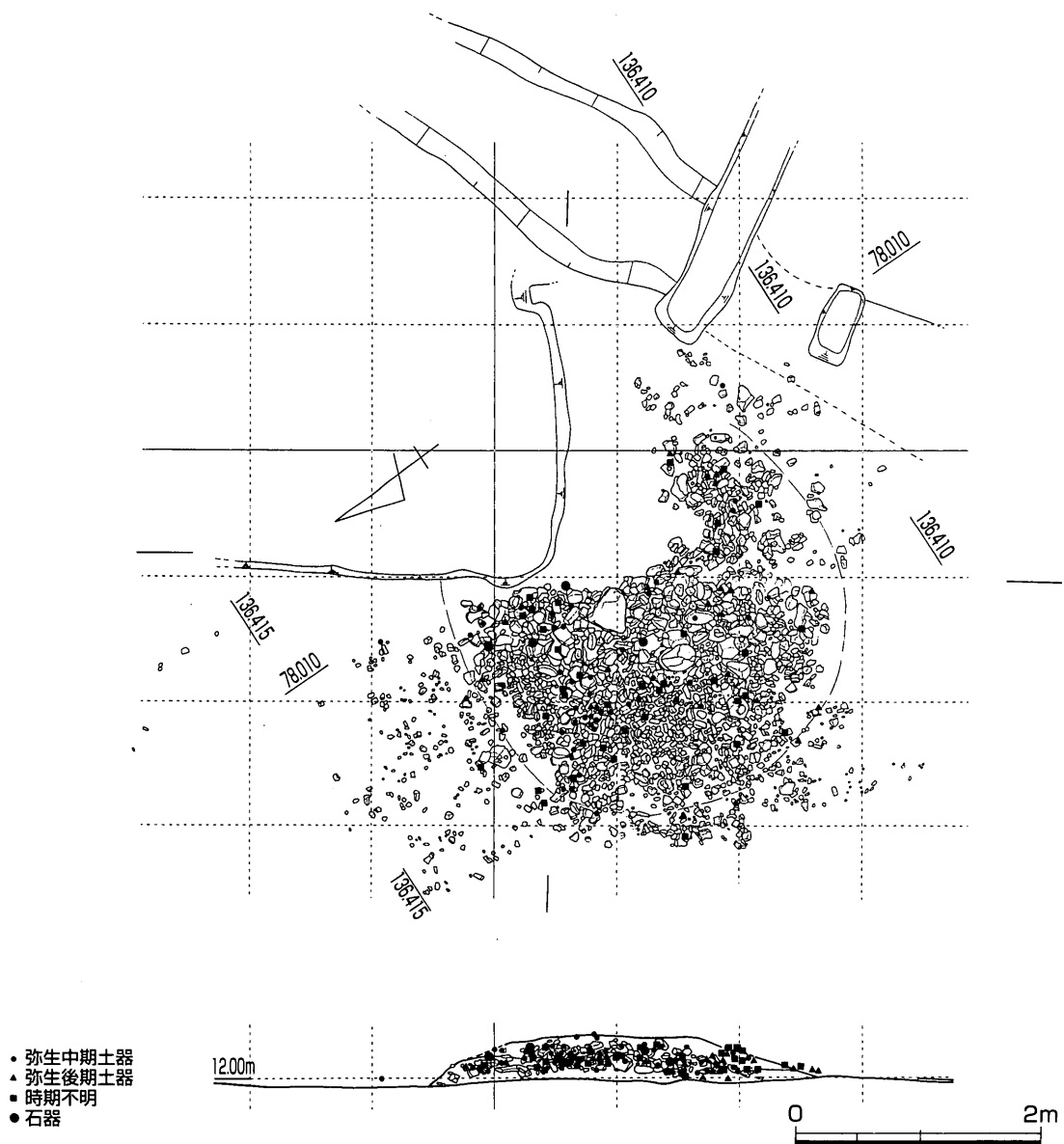
〈出土遺物と形成時期〉

図化した出土遺物には弥生土器壺 (84~107)、甕 (108~157)、甑 (158)、高杯 (159~167)、鉢 (168、169)、把手 (170、171)、蓋 (172)、土玉 (173)、支脚? (174)、打製石鎌 (175~181)、打製石錐 (182)、打製石鎌 (183)、打製石庖丁 (184)、打製石庖丁転用石器 (185)、楔形石器 (186~188)、緑色片岩製柱状片刃石斧 (189)、扁平片刃石斧 (190)、砂岩製敲石 (191)、結晶片岩製板状剥片 (192) がある。

84~87は頸部に粘土紐を貼り付け、84、87は刻み目を、85、86は押圧を加える。89は直立させた口縁端部に刻み目、凹線文を施し、棒状浮文を貼りつけ、押圧を加えている。90~94は頸部に粘土紐を貼り



第31図 III区第2面集石1・3接合関係図 (1/60)

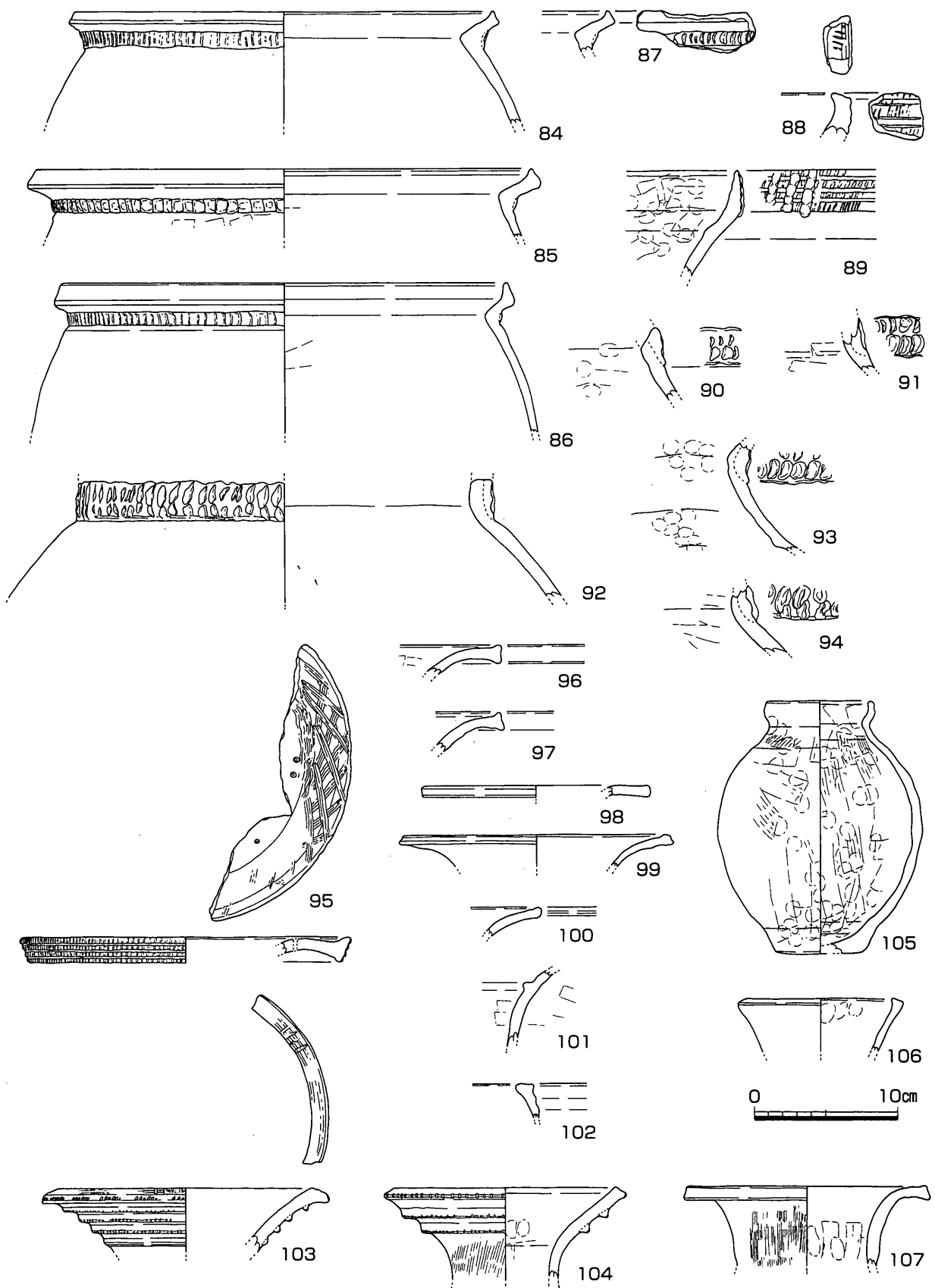


第32図 III区第2面集石3遺物分布図 (1/60)

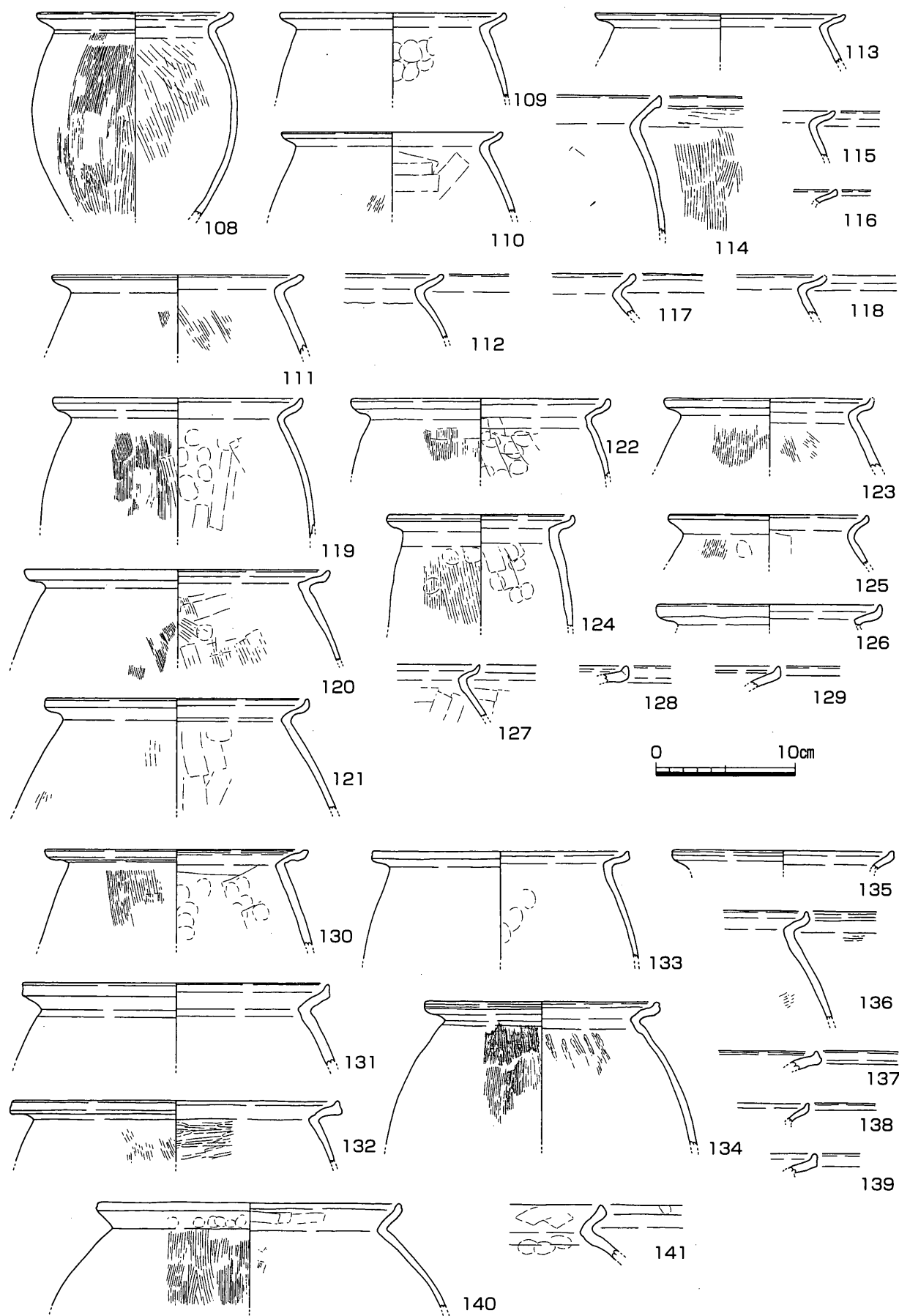
付け上下2列に押圧を施す。95は口縁端部に刻み目、凹線文が、口縁部内面に斜格子文、櫛描波状文が見られる。101は内面に突帯を貼り付ける。102は無頸壺であり口縁端部を肥厚させる。103、104は口縁部が外方に大きく開く。貼り付けられた突帯には密に刻み目を加える。103は口縁部を拡張し上面にも刻み目を施す。104は頸部を縦ハケ調整する。105は肩の張りの弱い体部から口縁部が延び、上部で直立する。外面端部には凹線文を施す。調整は内外面上半にハケ目が見られる。106は口縁部を内面に肥厚させる。107はやや外傾する頸部から口縁部が水平気味に大きく開く。口縁端部に退化した凹線文が見られ、頸部に丁寧な縦ハケを加える。

108は体部の内外面上半にハケ目、外面下半にヘラミガキ、内面下半にヘラケズリを施す。

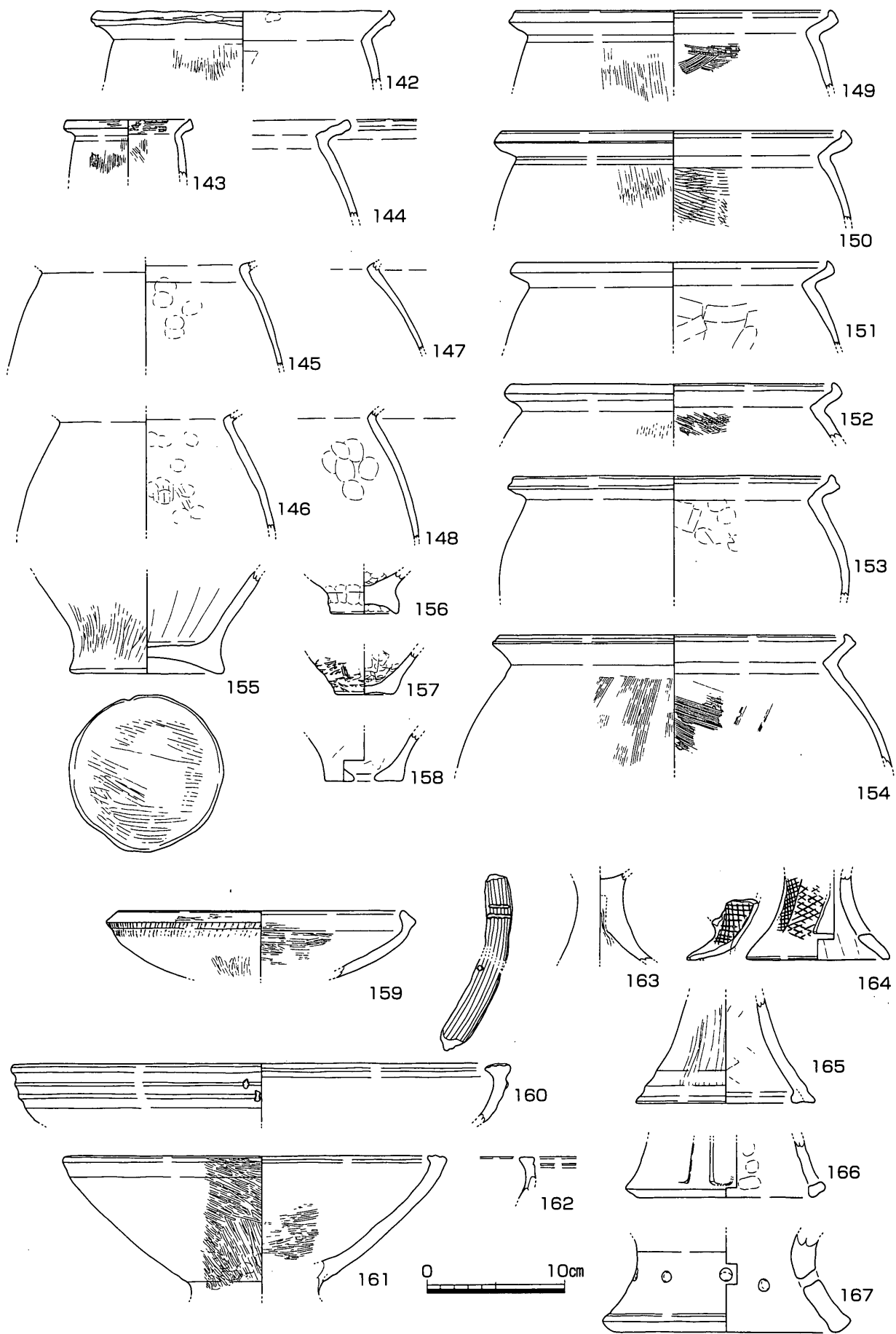
以下148までは薄作りで口径も小振り、内外面上半をハケ目調整するものが多い。132は口縁端部を上下に拡張し内面上位をヘラミガキする。140、141は口縁部が直立気味で体部上半の張りが強い。149～154は口径が大振りのものである。口縁端部を上方に肥厚させ、作りが分厚い。調整は胴部上半の外面に縦ハケ、内面に横ハケが見られるものが多い。153、154は口縁部外面に凹線文を施す。155～157は底



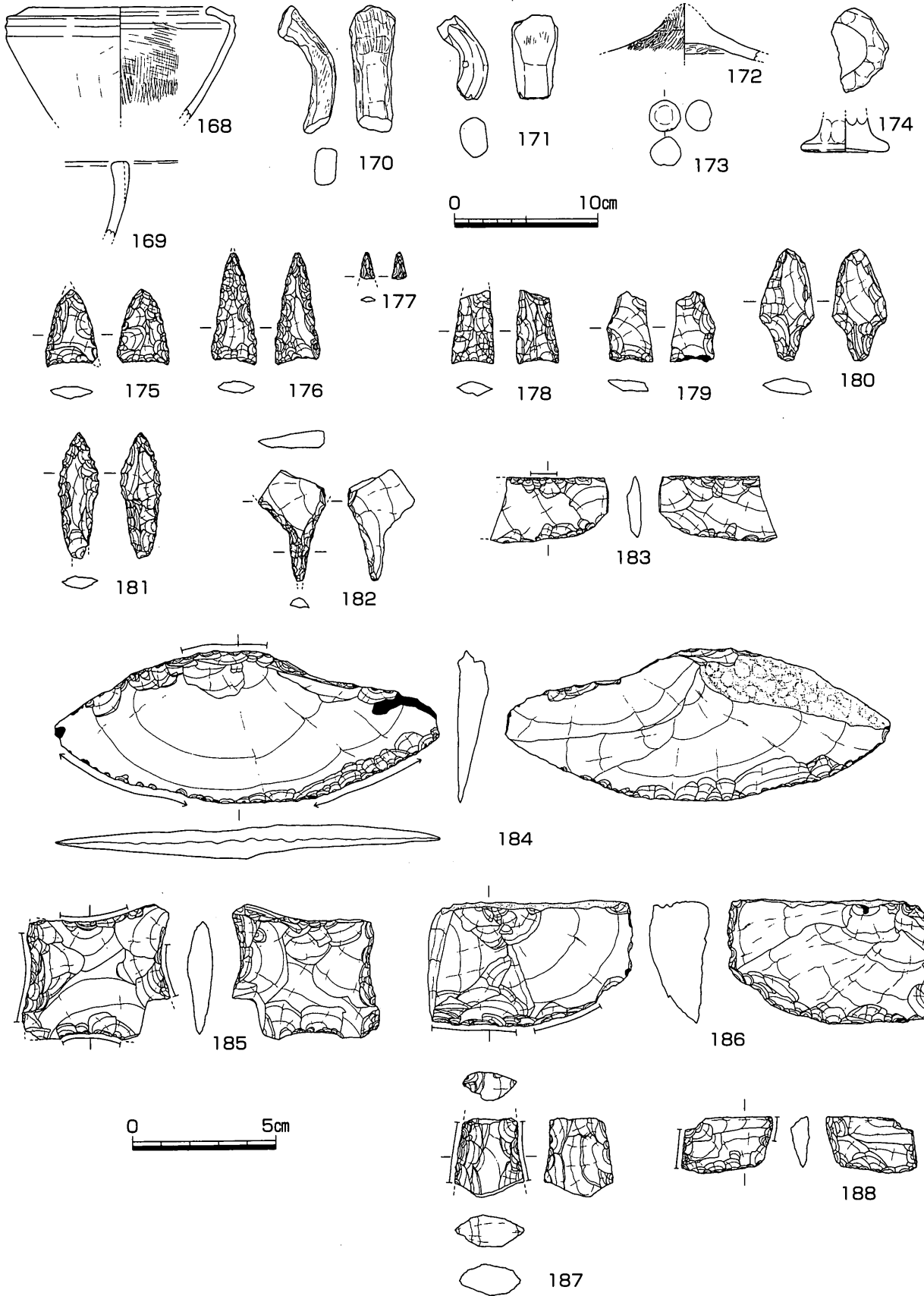
第33图 Ⅲ区第2面集石1出土遺物 (1) (1/4)



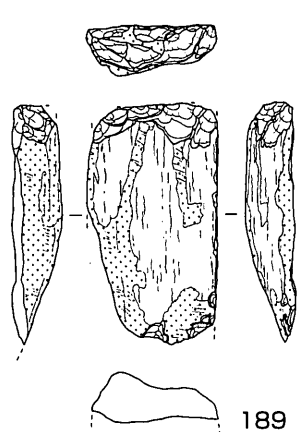
第34图 Ⅲ区第2面集石1出土遺物(2)(1/4)



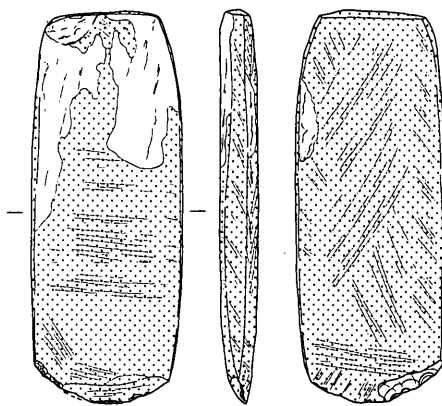
第35图 Ⅲ区第2面集石1出土遺物(3)(1/4)



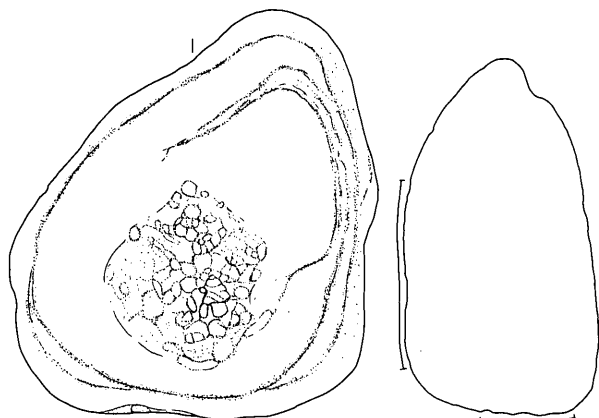
第36图 Ⅲ区第2面集石1出土遺物(4)(1/4、1/2)



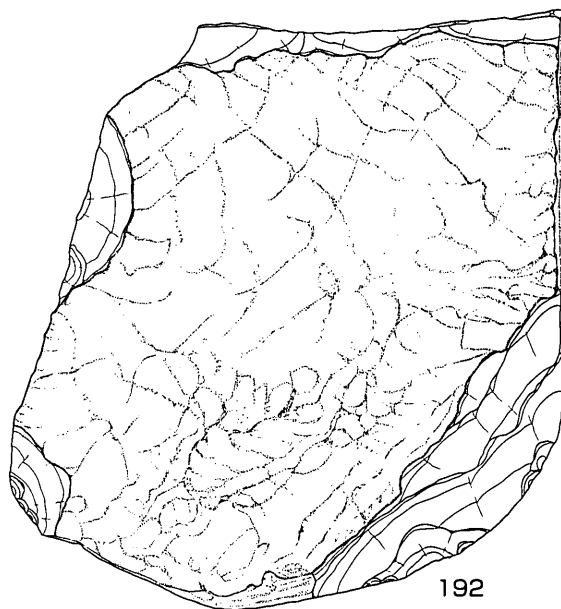
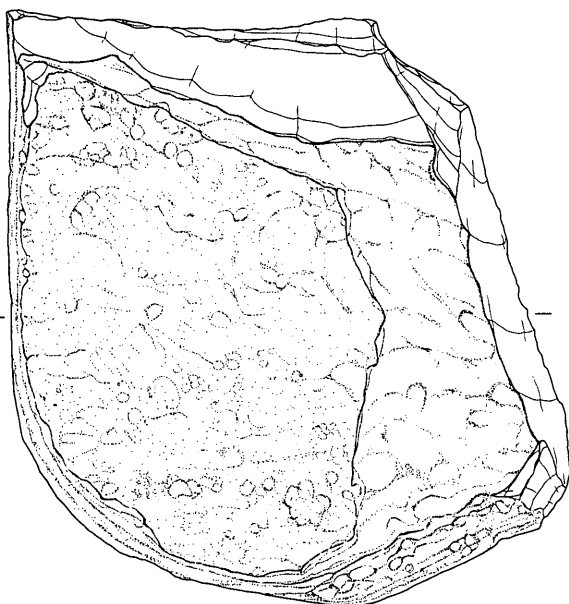
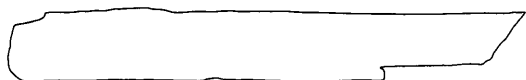
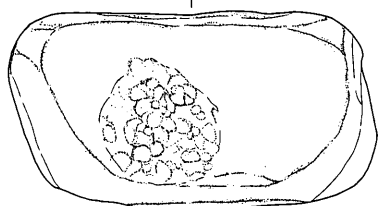
189



190



191



192

第37图 Ⅲ区第2面集石1出土遺物 (5) (1/2、1/3)

部である。155は外面に密にヘラミガキを施す。156は外面の屈曲部に顕著に指オサエが見られる。台付鉢の底部かもしれない。157は外面の下端までにタタキが見られる。158は焼成後に穿孔している。

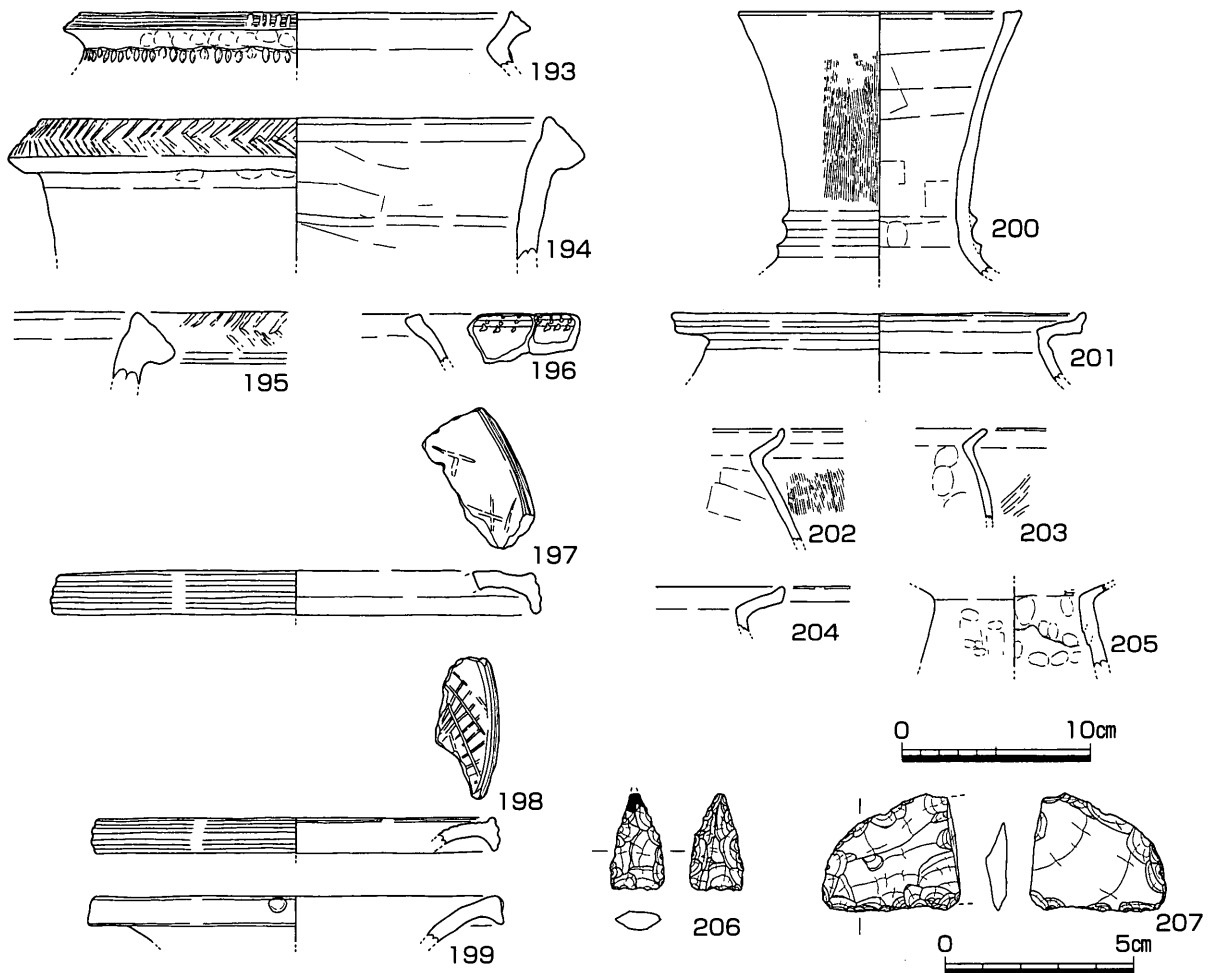
159は口縁部外面に刻み目、凹線文を施す。また杯部外面下位で縦方向に、内面で横方向に細密なヘラミガキ調整する。160は口縁部上端、外面に凹線文、棒状浮文を加える。161は内外面全体に丁寧なヘラミガキが見られる。163～167は高杯の脚である。164は三角形の透かし孔をもち、その間を斜格子文で充填する。また焼けひずみにより脚部下端、中位が大きく反る破片があり、土器焼成時の失敗品と考えられる。166は現存2ヶ所の透かし孔をもつ。167は台付鉢とするべきかもしれない。現存6ヶ所の穿孔が見られる。168は口縁部上端を内側に強く屈曲させる。屈曲部直下には2条の凹線文を施す。内面は縦ハケ調整した後上端部に横ハケを加える。170は外面上部にヘラミガキが延びる。172は内外面にヘラミガキを施すが外面では上部を縦、下部を横方向にミガク。174は強く指押さえし多角形状を呈する。

175～179は凹基式である。175、176は丁寧な細部調整を加えるが178は調整剥離がまばらで作りは粗い。179は未製品である。抉り以外はあまり加工されていない。180は有茎式の未製品である。抉りを中心に形状を整える程度の調整しか施されていない。181は柳葉形であり鋸歯状を呈する。182は左図側は丁寧な細部調整を施すが右図側は刃部以外ほとんど未加工である。183は上部を一部背つぶしている。刃部の作りは粗い。184は完形品で横長剥片から製作している。左図側には上部中央に剥片採取時の打点が残る。刃部は左右で小さくへこむため中央部が突出しているように見える。この部分では両面に細密な調整が加えられることから使用頻度が高いことによる目減りや刃部再生に起因すると考えられる。185は抉り状のものが見られること、大きさから打製石庖丁の転用品と考えられる。4つの縁辺部に抉りを加えた後つぶしている。186は下部に微細な剥離の集中、つぶれが見られる。小型石器製作時の剥片採取に伴うと考えられる。187、188も縁辺部に186と同様な状況が観察できる。187は紡錘形を呈する断面から石槍の転用品と考えられる。188はスクレイパーの転用でなく単なる楔形石器かもしれない。189は刃部片であるが刃部から外れる部分は敲打のみの部分が目立つ。190は左図側の刃部の左右端部が丸みを帯び、刃こぼれしている。191は2ヶ所に敲打痕が見られる。192は20cm大、約2.3kgと大形である。剥片が採取された痕跡はないが打製石庖丁製作などに利用可能な遺物である。

以上の土器には口縁部に少条の凹線文を施すものが目立ち、壺の口縁部内面に斜格子文が見られる。また甕は砲弾型の肩の張らない器形を呈し、口縁部を小さく摘み上げる。こうした特徴から弥生中期中葉に位置づけられる。弥生後期土器も2点(107、157)混じるが出土レベルが上位でごく少量であるため集石3下位に位置するための混入と考える。よって集石遺構の時期は弥生中期中葉と考える。石器は打製石庖丁(184)、砂岩製敲打石(191)、結晶片岩製板状剥片(192)が使用可能なものであり2点の石鏃(179、180)が未製品である以外は破損品である。

集石1付近包含層出土遺物(第38図)

出土位置、レベルから本来集石1に伴う可能性が高い遺物である。弥生土器壺(193～200)、甕(201～205)、石鏃(206)、スクレイパー(207)を図化した。193は口縁端部に凹線文と棒状浮文、頸部に粘土紐を貼り付け刻み目を施す。194、195は口縁端部を上下に拡張し綾杉文を加える。196は無頸壺であり口縁部に貝殻腹縁による押圧文を加える。197、198は口縁部内面に斜格子文が見られる。200は直立気味の口縁部外面を縦ハケ調整し頸部に2条の突帯を貼り付ける。201は口縁端部に凹線文を施し、ごく短い頸部をもつ。202は外面に縦ハケ、203はヘラミガキを加える。205は内面に粘土紐接合痕、顕著



第38図 Ⅲ区第2面集石1付近包含層出土遺物（1/4、1/2）

な指押さえが見られる。206は平基式である。以上の遺物のうち203、205は弥生後期に位置づけられるがその他は集石1の時期と違和感はない。2点の後期土器についてはやはり上位の集石3に由来する混入の可能性が高い。

集石3（第28～32・39～42図）

〈平、断面形と規模〉

集石3は集石1の上位に位置する。同様に北東部を損壊しているものの土層断面による裾部把握、遺物分布状況の粗密と出土レベルから第30図のようなほぼ円形を呈すると推定される。断面形はマウンド状に隆起する。頂部はほぼ平坦で、裾は北側でやや急に南側と西側で緩やかに下る。規模は土層図作成位置で南北3.3m、東西も推定3.3m、高さ38cmを測る。

範囲については集石遺構の西側において礫の大きさや出土レベルに関して、集石遺構縁辺部と推定範囲の外側とあまり差が無い。だが推定範囲の外側では、遺物がやや疎らになるため粗密で主に判断した。

〈土層堆積状況〉

集石3の形成土は2層に細分できる。ともに茶色系粘質土であり、土器片、礫を多く含む。層厚は10～20cmを測り、ほぼ水平堆積する。

〈遺物出土状況〉

遺物は推定範囲の全面に土器、礫が混在して高い密度で分布する。土器は壺、甕、高杯、鉢などがあるが器種ごとに分布の偏りは見られない。残存率は低く破片ばかりである。また穿孔を施したり赤色顔料を塗布したりする特殊な土器は出土していない。礫は中央上位で15～35cmと大振りのものが偏って、これより下位および縁辺部では5～10cmと小振りのものが見られる。ただこれらに意図的な配置は見出せない。多くは砂岩類であるが花崗岩なども含む。石器はサヌカイト製石鏃、石錐、スクレイパー、チップ、緑色片岩製の柱状片刃石斧、安山岩質斑岩製の敲石、砥石類がある。出土地点に偏りは見られず散在する。

集石3のドットレベル図、実測遺物を見ると含まれる土器は弥生後期より中期のものが目立つ。特に中央部西側では中期土器が密集する。よってこの範囲では集石1の頂部が弥生後期遺構面より上位に突出していたとも考えうる。だが至近部にある集石1、3西ベルトの断面観察では上下2層にしか分層されなかった。また遺構の範囲内および近接した位置で後期土器の上位から多くの中期土器が出土している。よってこの可能性は考えられず中期土器を多量に含んだ土が集石3形成土に混じったと見られる。仮に土を伴わないとすると周囲に散在する中期土器、礫だけを拾って盛り上げたことになるが、これは包含する土器の量から見て不自然である。

付近で多量の中期土器を含んでいるのは集石1と至近部の包含層のみである。また土層断面の観察で集石1の頂部がほぼ平坦であること、集石1の中央頂部に集石3が重なることも合わせて考えると集石3形成時に後期遺構面上に隆起していた集石1の頂部が破壊、整地され、その際の土砂も集石3形成土に混ぜられ、盛り上げられたと考えられる。

接合関係については集石1との遺構間接合資料を合わせ6セットある。中期土器の19、143と後期土器の14が位置的にやや離れる以外は近接する。また19、143以外はほとんどレベル差がない。このため遺構形成土は後期土器が混じった後激しく攪拌されることなく盛り上げられたと考えられる。また中期土器は先述のような状況から集石1より混入したと見られる。19は3点が接合しているが北端の1点が集石1の流土から、他2点が集石3から出土している。

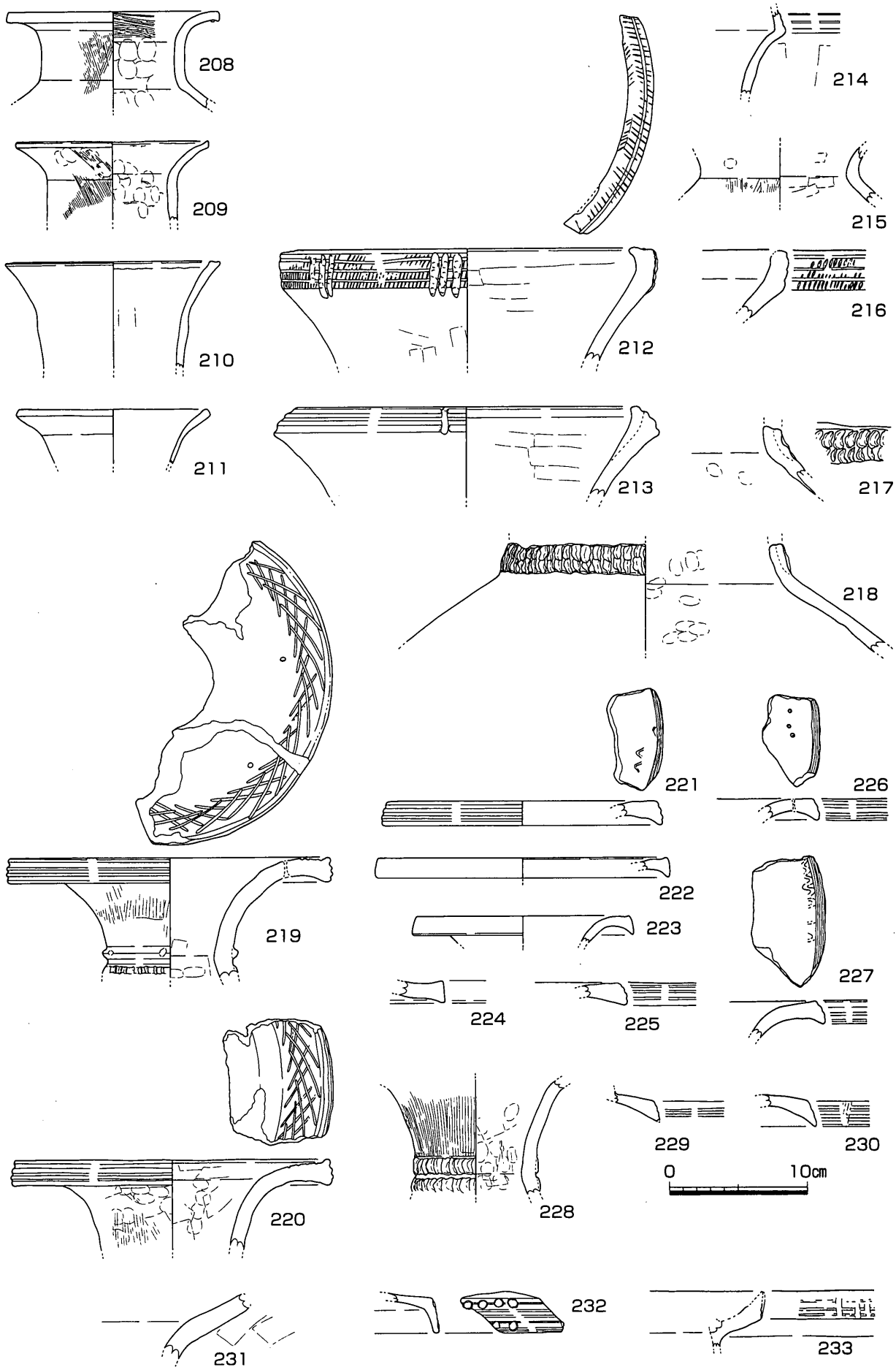
〈SD03との関係〉

SD03との配置については集石3の北東部を欠くためやや不明瞭であるが近接する。SDの掘り込み面は集石3と同じく後期遺構面であるため掘削時には集石3が隆起しており意識されたと考えられる。時期的にも集石3が弥生後期後半、SD03が弥生後期後葉～末に位置づけられ近接する。またSD03は付近の等高線に平行する。以上から集石3とその東部を区画していた可能性もあるがその他の集石遺構でこのような溝を伴うものはなく性格は不明である。

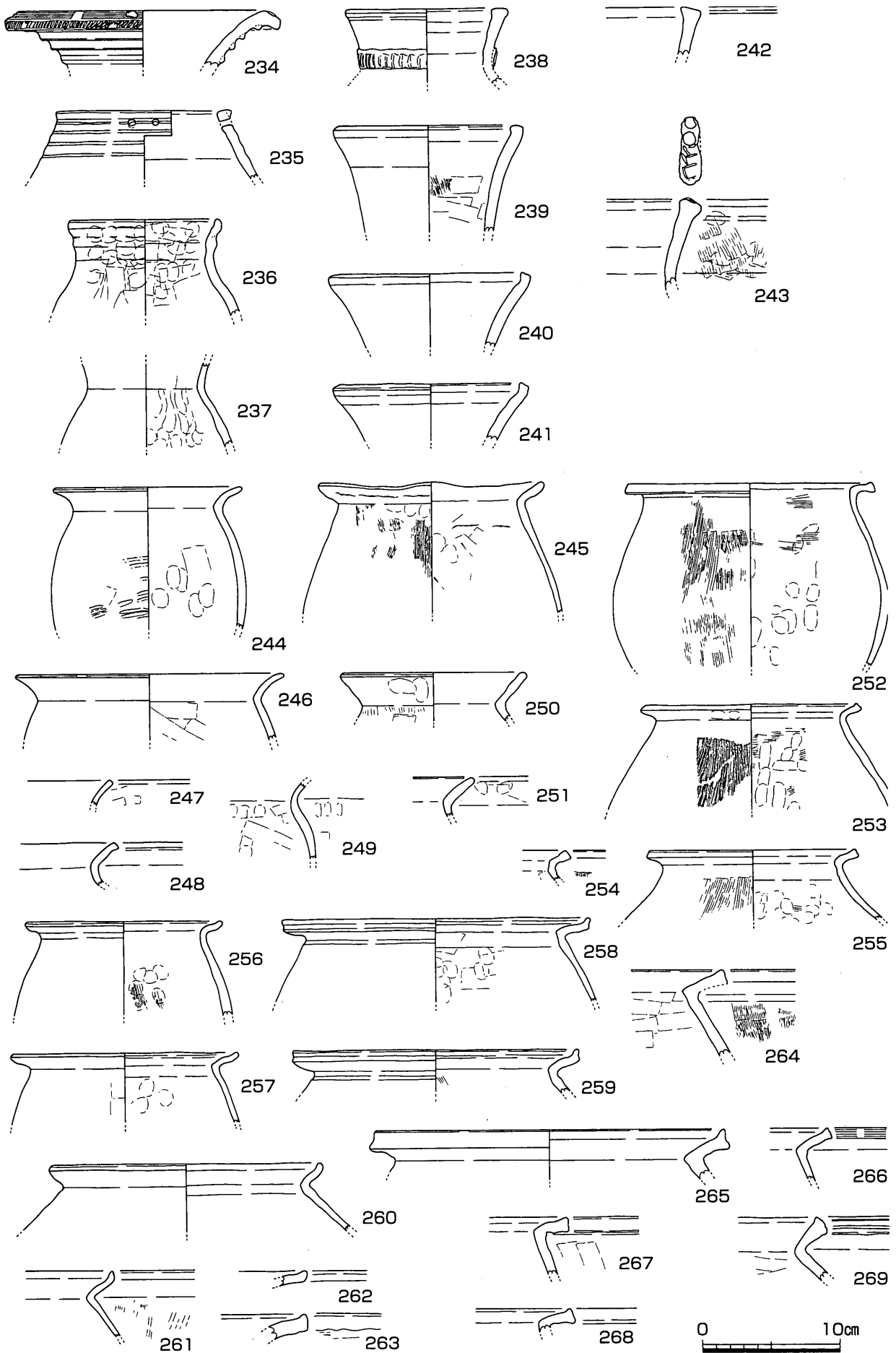
〈出土遺物と形成時期〉

図化した出土遺物には弥生土器壺(208～243)、甕(244～269)、底部(270～274)、高杯(275～296)、鉢(297～302)、打製石鏃(303、304)、打製石錐(305)、スクレイパー(306、307)、緑色片岩製柱状片刃石斧(308)、安山岩質斑岩製敲石(309、311)、砂岩製敲石(310、312)、同砥石(313)がある。

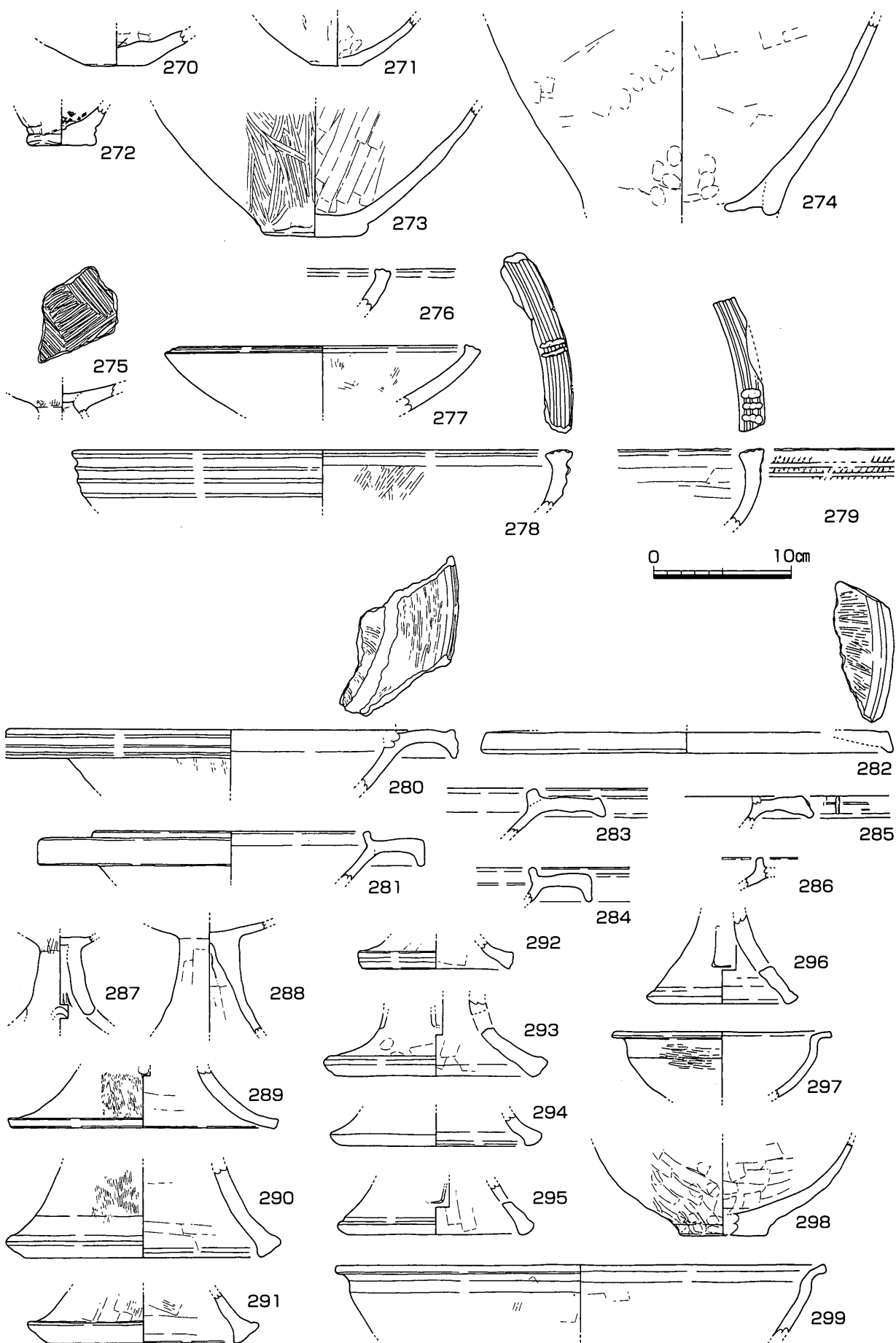
208、209はほぼ直立する頸部から延びる口縁部が大きく外方に開く。頸部外面に縦ハケ、内面に指オサエが見られる。208は口縁端部をわずかに肥厚させる。210、211はやや外傾する頸部から弱く外反する口縁部に至る。210は口縁部上端に凹線文を施す。212は直立する口縁部外面に刻み目、凹線文、棒状



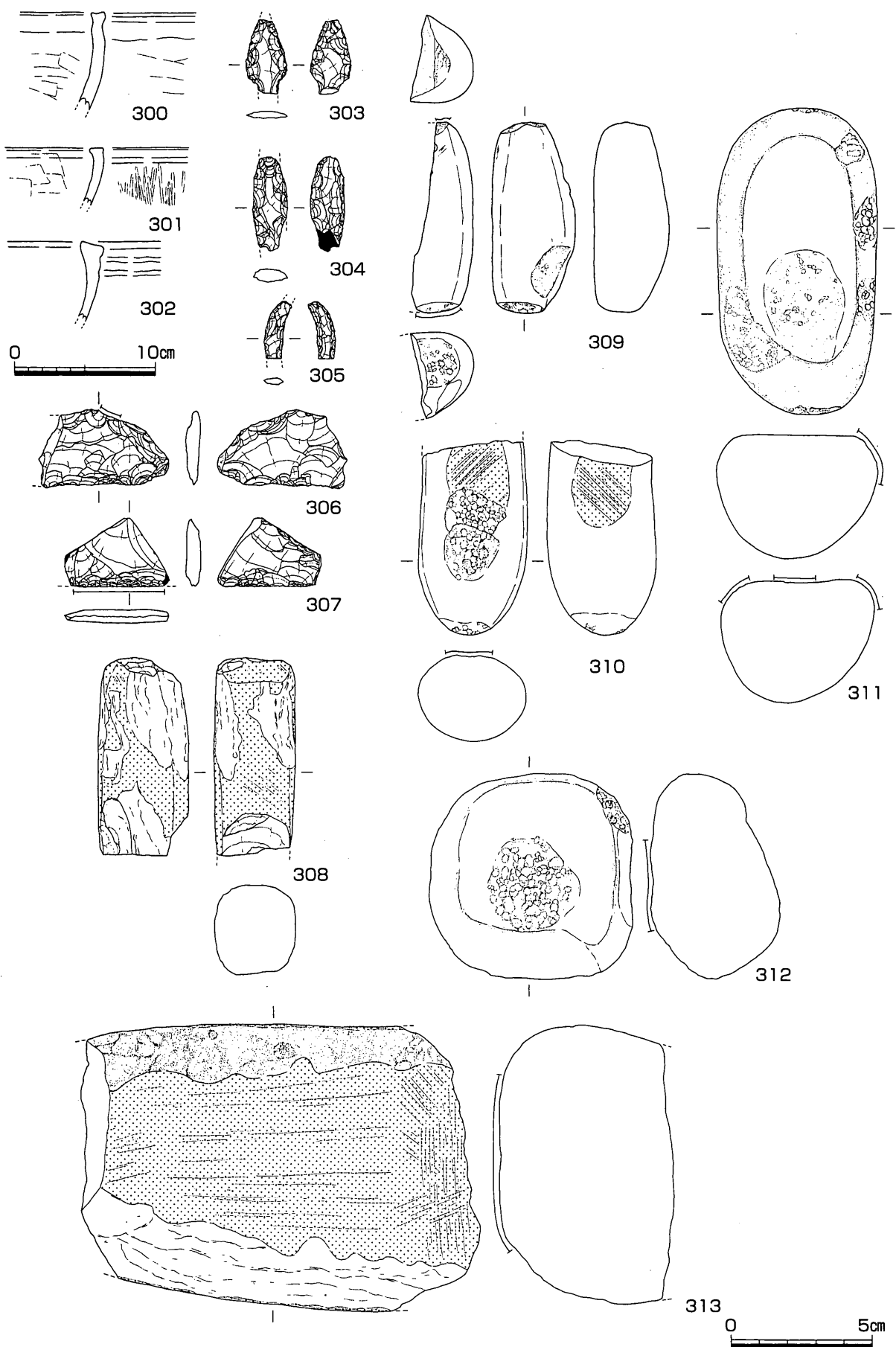
第39图 Ⅲ区第2面集石3出土遺物 (1) (1/4)



第40图 Ⅲ区第2面集石3出土遺物(2)(1/4)



第41图 Ⅲ区第2面集石3出土遺物 (3) (1/4)



第42图 Ⅲ区第2面集石3出土遗物(4)(1/4、1/2)

浮文を加え上端にも綾杉文を施す。217、218は頸部に粘土紐を貼り付け上下に押圧を加える。219、220は口縁部内面に斜格子文、221、227は櫛描波状文が見られる。219はまた頸部の突帯2条に刻み目を加える。228は頸部と体部の境界に粘土紐を2条貼り付け押圧する。その上部外面は丁寧な縦ハケ調整する。232は口縁端部を大きく垂下させ円形浮文を配する。234は口縁部がラッパ状に大きく開く。端部には円形浮文、刻み目を加える。235は口縁部に穿孔2個が見られる。236は短くほぼ直立する口縁部をもつ。内外面に板ナデと顕著な指押さえを施す。238～243は口縁部が直立気味であり端部を小さく拡張する。238は頸部に粘土紐を貼り付け刻み目を加える。

244は外面にタタキを施す。245は外面に縦ハケ、内面の胴部上半にヘラケズリを加える。また口縁部外面と体部内面上位に粘土紐接合痕が明瞭に見られる。246、249は内面の胴部上半をヘラケズリ調整する。250は口縁部が外上方にまっすぐ伸び頸部にハケ目を加える。252～255は下川津B類である。口縁部を小さくつまみ上げ外面の体部上半に細密な縦ハケ、内面に横ハケ、顕著な指オサエが見られる。256～262は口縁端部を小さくつまみ上げ器壁が薄い。258、259は口縁端部に弱く凹線文を加える。263～269はやや分厚い作りである。口縁端部に凹線文を施すものが多い。270、271はかろうじて平底であるが丸底化が進行している。272、273は外面下端に板ナデの工具痕跡が顕著に残る。273は外面に丁寧なヘラミガキ、内面にヘラケズリを施す。

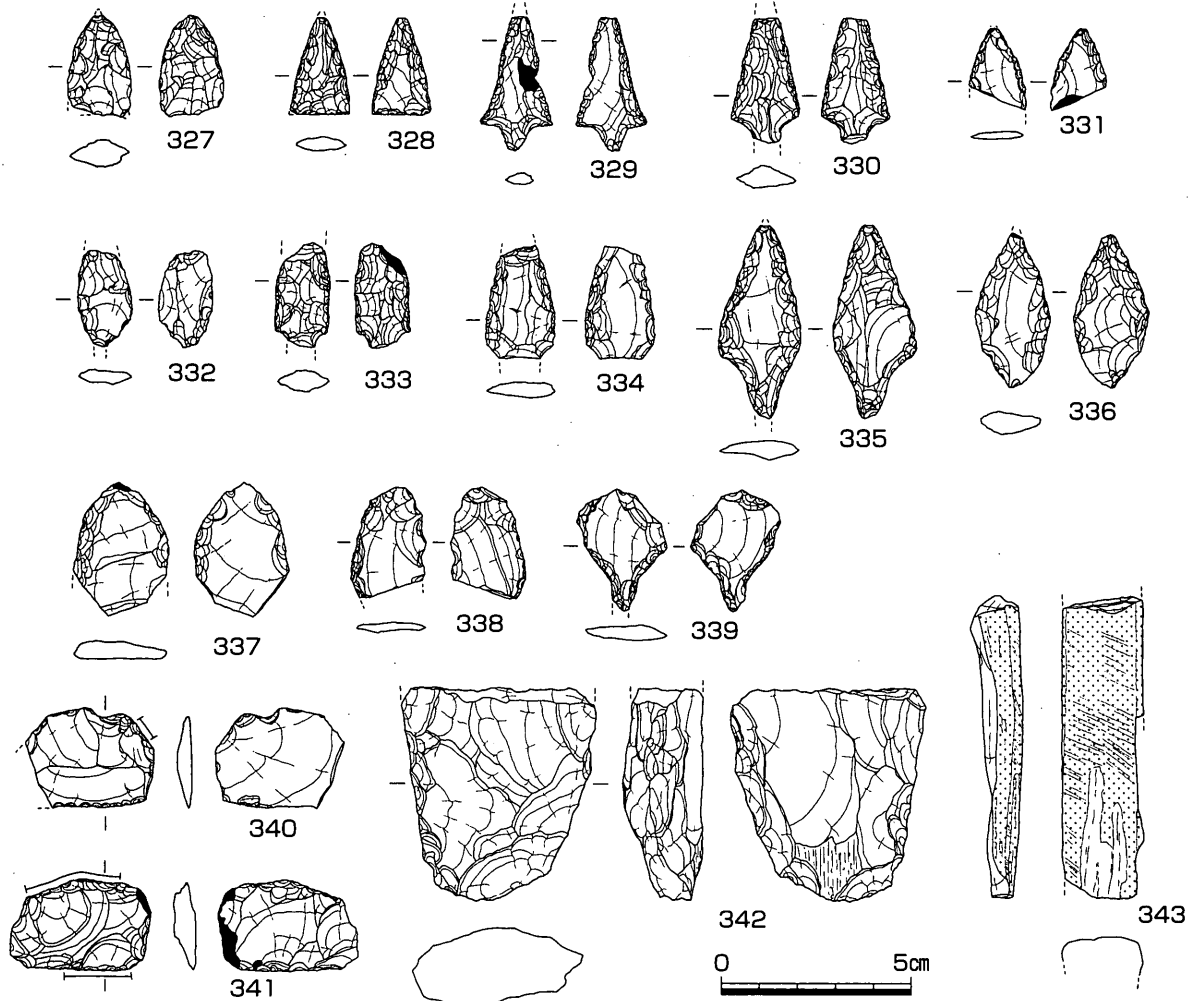
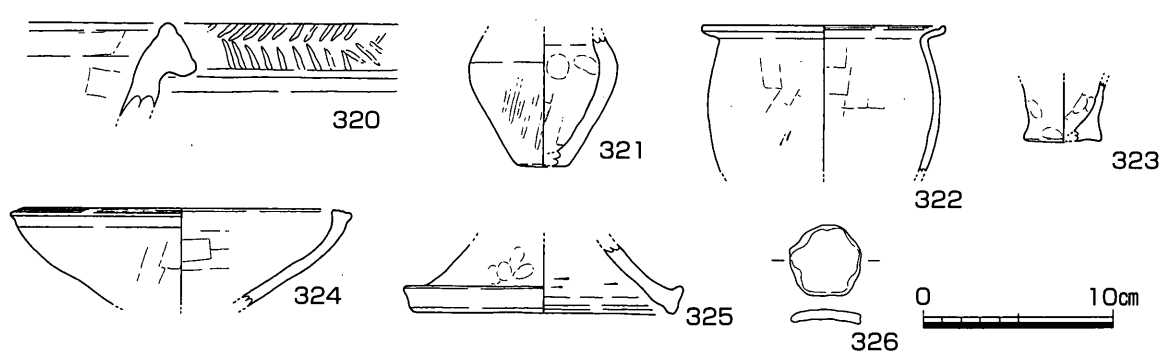
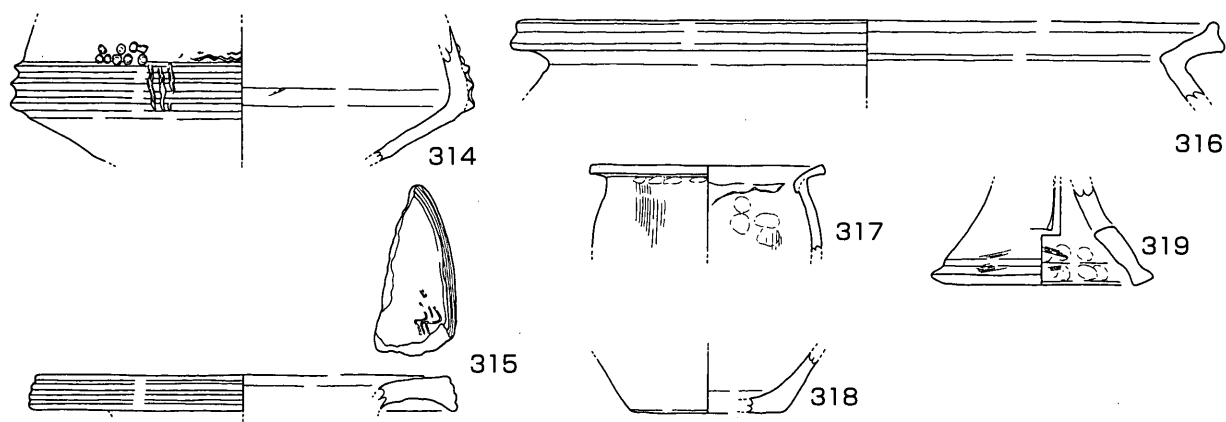
275は下川津B類であり杯部内面を分割ヘラミガキする。276～279は口縁端部上面に凹線文が見られる。278、279は外面にも凹線文を加え棒状浮文、円形浮文、刻み目などを施す。280～286は水平口縁の高杯である。282、283、285は口縁端部を小さく、281、284は大きく垂下させる。また280、282は内面をヘラミガキする。方向は280が縦、282が横である。287は杯部外面にヘラミガキ、脚部に穿孔が見られる。289は下端が水平気味になり外面にヘラミガキを加える。290、291が外面にハケ目、293、295、296は透かし孔が見られる。脚部下端外面にスリップを塗布し、赤化させている。297は体部からほぼ水平に折れる口縁部を持ち体部上半にヘラミガキを施す。298は外面は指オサエが顕著であるが内面は丁寧に板ナデを加える。299は大形の鉢で浅めの体部から短く外反する口縁部をもつ。300、301は内面に横方向の板ナデを加える。また301は外面に細かいヘラミガキを施す。

303は有茎式であり縁辺部は鋸歯状を呈する。304は先端部と基部を欠損するが、柳葉形と推定される。両面に粗い調整剥離を加える。305は上端で弱く折れる。307は刃部でつぶれが見られ楔形石器とすべきかもしれない。308は刃部が形成された右図側の上部は丁寧に研磨するがその他は敲打のままの部分が多い。309は上下端で、311は4カ所で敲打痕が見られる。また全体で研磨痕が見られる。310は図の下端と左図中央に敲打痕が、両面の中央に研磨痕が見られる312は中央部と右上部の2ヶ所であばた状の敲打痕が見られる。313は全体で研磨痕が見られる。また直線的に細長く溝状の抉れが見られ、石器製作時の台石としても利用されたと考えられる。

以上のうち弥生後期（後半が目立つ）に位置づけられる土器は208～211の壺、244～255の甕、270、271の底部、275の高杯、299の鉢などでありその他は弥生中期と考えられる。だが先述の状況から後者は集石1からの混入と考える。よって集石3の時期は弥生後期後半と考えられる。石器は安山岩質斑岩製敲石（311）、砂岩製敲石（312）以外は破損品である。

集石3付近包含層出土遺物（第43図）

出土位置、レベルから本来集石3に伴う可能性が高い遺物である。弥生土器壺（314、315）、甕（316、



第43图 Ⅲ区第2面集石3付近包含層，集石1·3付近包含層出土遺物（1/4、1/2）

317)、底部(318)、高杯(319)を図化した。314は外面に櫛描波状文、突帯、円形浮文、棒状浮文が見られ装飾的である。315は口縁部内面に櫛描波状文を施す。317は端部を上下に小さく肥厚させた口縁部をもつ。外面にハケ目、内面に粘土紐接合痕が見られる。319は透かし孔をもつ。以上の遺物のうち317が弥生後期、318が時期不明である以外は弥生中期に位置づけられる。これは集石3の組成と同様であり同じ脈絡で説明できる。

集石1・3付近包含層出土遺物(第43図)

出土位置から集石1、3に伴う可能性が高い遺物である。弥生土器壺(320)、甕(321~323)、高杯(324、325)、紡錘車未製品(326)、石鏃(327~338)、石錐(339)、スクレイパー(340、341)、緑色片岩製扁平片刃石斧未製品(342)、同柱状片刃石斧(343)を図化した。320は口縁端部に綾杉文を施す。321は体部外面下半をヘラミガキ調整する。324は口縁端部に凹線文が見られる。327は凹基式、328は平基式、329、330、332~335は有茎式、336は柳葉形である。側縁部にのみ調整を加える個体が目立つが、329、330、333は鋸歯状を呈している。332、337、338は未製品である。332は基部のみ、337、338は側縁部のみ調整を加えている。340は左図側の刃部に細密な調整を加え片刃状にする。上部には挟りが見られるため打製石包丁の転用品と考えられる。341は上下端につぶれが見られ、楔形石器とするべきかもしれない。342は粗割工程の未製品である。刃部形成を意図した調整が下部で見られる。343は全体が丁寧に研磨されている。石器のうち石鏃未製品以外は破損品である。

集石2(第44~51図)

〈立地と平、断面形、規模〉

集石2は集石1と同じ浅い谷の中央部に位置する。北部が調査区外に延びるものの南北土層断面による裾部把握、遺物の分布状況の粗密、出土レベルから細長い楕円形を呈すると推定される。断面の形態はマウンド状を呈し、南部では裾が比較的急に下る。規模は土層図作成部で南北4.5m以上を測り、東西は1.4mと推定される。高さは27cmである。

平面図を見ると推定範囲の外側、特に南東部で遺物が密集しており、推定範囲の内外で分布に切れ目がない。だが第45図(集石2遺物出土状況図〈ST03直上〉)で窺えるとおり範囲外の遺物は遺構面から10cm以上浮いたものばかりであり、集石遺構からの崩落と考えられる。このように捉えると立面図の南側で空白部が生じているのは崩落土であるため遺物が希薄で浮いていることによるとも見える。だが7層の南端部は比較的急に下ること、立面図上位にある礫の平面分布が集石範囲内に収まることから集石遺構を構成すると考える。

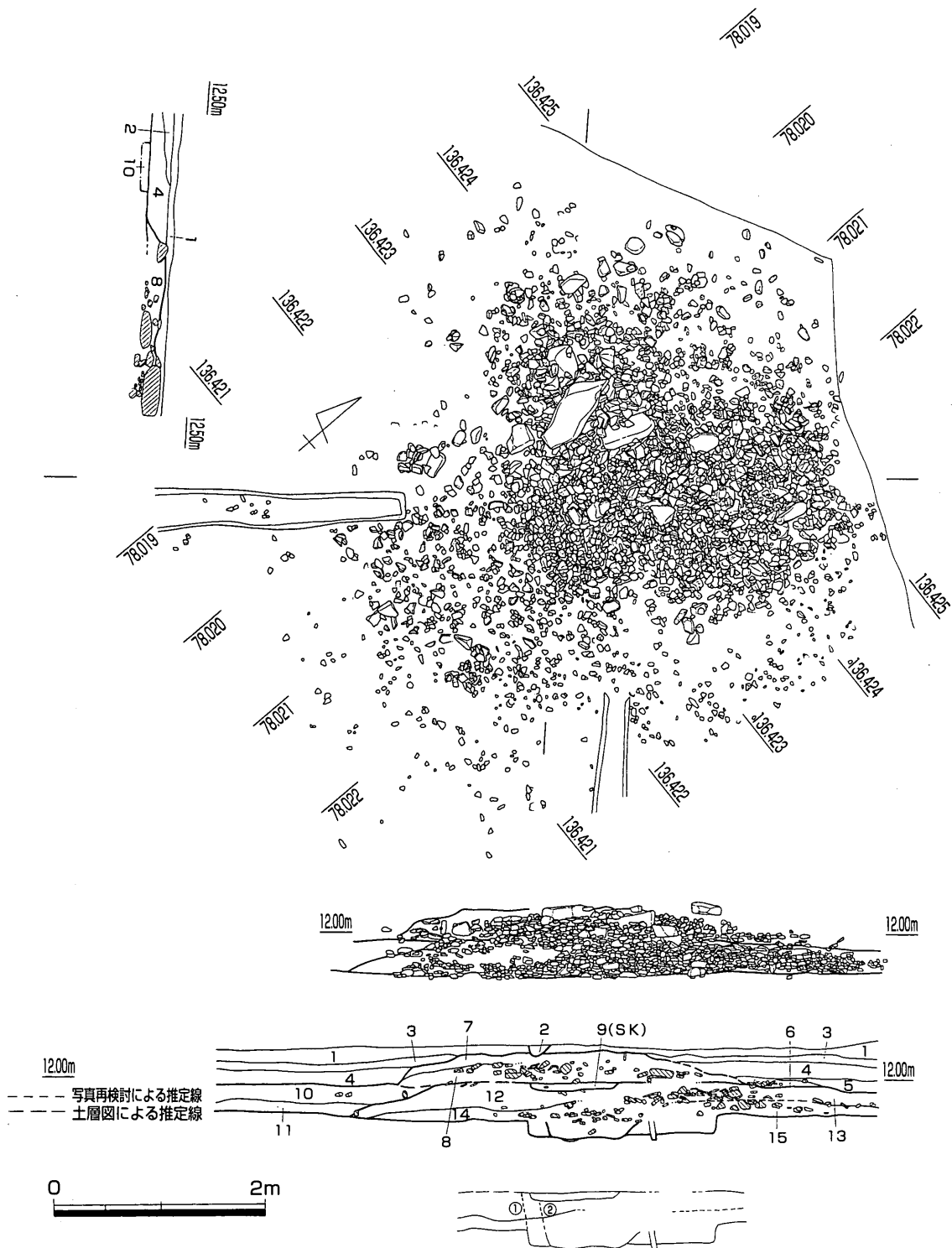
〈土層堆積状況〉

集石遺構形成土は4層に分けられる。暗茶褐色~暗褐色系粘質土で15層では砂利が目立つ。土器片、礫は12層で希薄であるが他では多量に含む。いずれも層厚10cm前後を測り水平堆積する。

〈遺物出土状況〉

集石2からは多量の土器、礫と少量の石器が出土している。これらは推定範囲の中央部で細長い楕円形状に密集する。北東部では土器が集中する部分があるが、その他では集石1と同様にやや礫が多い。

土器は壺、甕、高杯、鉢、蓋などが見られ甕が多いが器種別での分布に偏りは見られない。これらのうち流土から出土した壺(440)はほぼ完存するものの他は最大で1/3程度が残存する破片しかない。

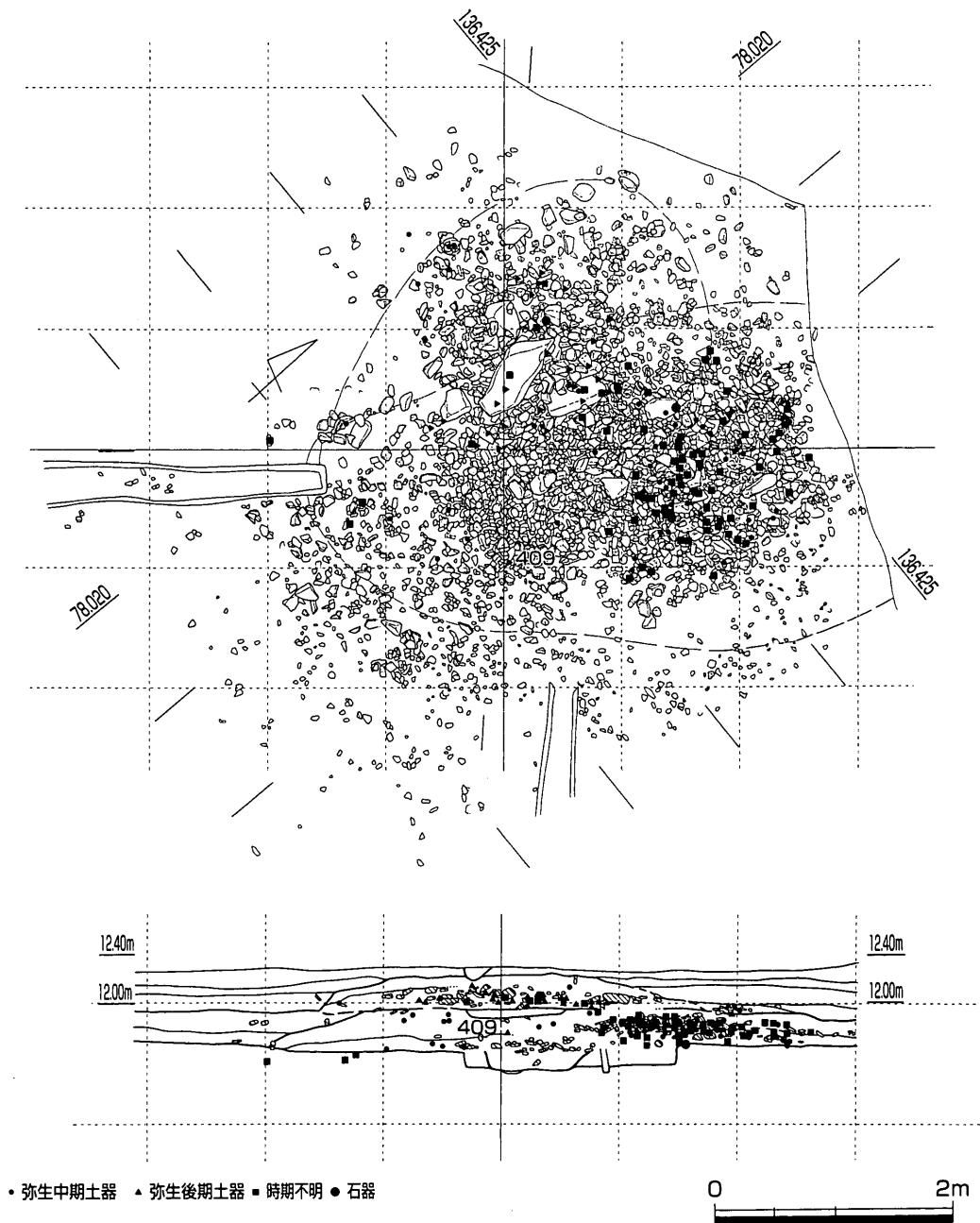


- | | |
|---|---|
| 1 暗茶褐色粘質土 (マンガンが多量に沈着。) (集石 1、3 土層 1層) | 9 茶褐色粘質土 (砂を含む。) (集石 5 下位 SK01) |
| 2 灰褐色粘質土 (ピット) | 10 暗茶色粘質土 (多量の砂利を含む。) (集石 1、3 土層 8 層 弥生後期遺構面) |
| 3 暗黄褐色粘質土 (砂利を含み、マンガンが沈着。) (集石 1、3 土層 2層) | 11 暗褐色粘質土 (14より黒味が強く、砂利は含まない。) |
| 4 黄褐色弱粘質土 (少量の砂を含み、やや茶味がかかる。) | 12 暗茶褐色粘質土 (土器片、礫を含む。) (集石 2) |
| 5 黄褐色粘質土 (わずかに砂利を含む。) | 13 暗茶色粘質土 (多量の土器片、礫を含む。) (集石 2) |
| 6 明茶褐色粘質土 | (12と類似するがやや黄味がかかる。) |
| 7 暗褐色粘質土 (黄色味が強い、多量の土器片、礫を含む) (集石 5) | 14 暗褐色粘質土 (多量の土器片、礫、少量の砂利を含む。) (集石 2) |
| 8 暗黄褐色粘質土 (多量の土器片、礫を含む。)(*) | 15 暗黄茶褐色粘質土 (多量の土器片、礫、砂利を含む。) (集石 2) |
| | (14と類似するがやや茶色味が強い。) |

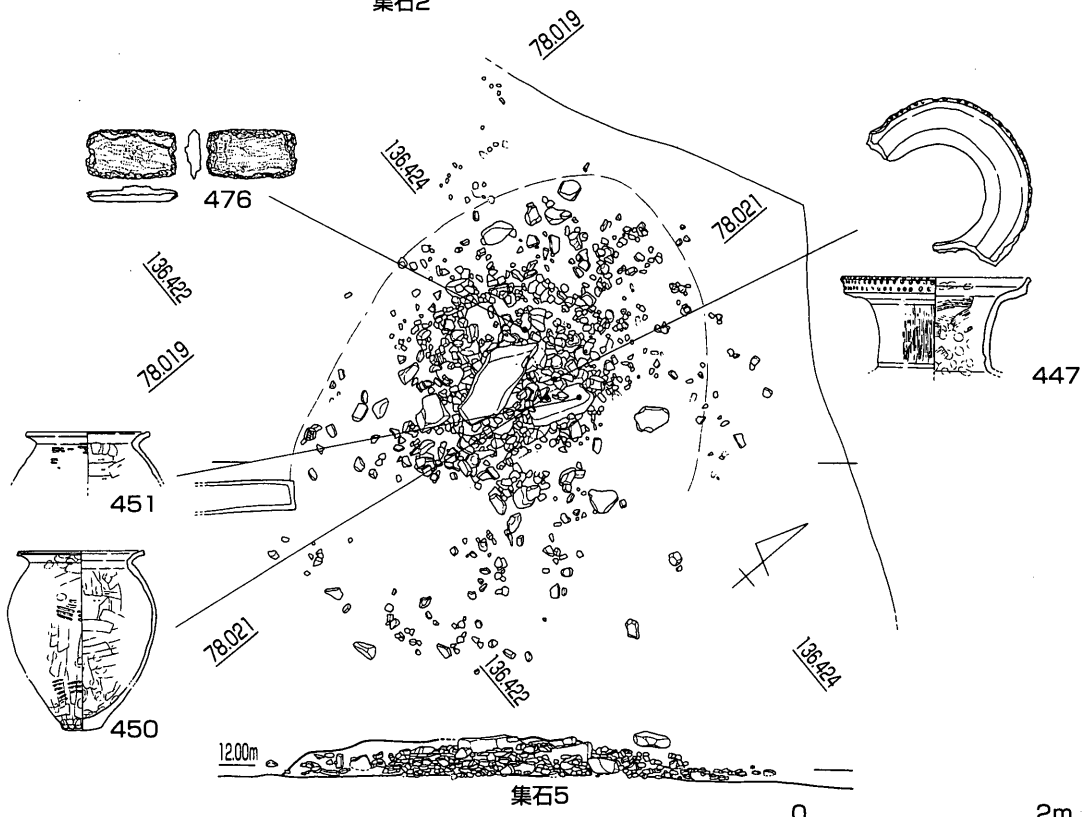
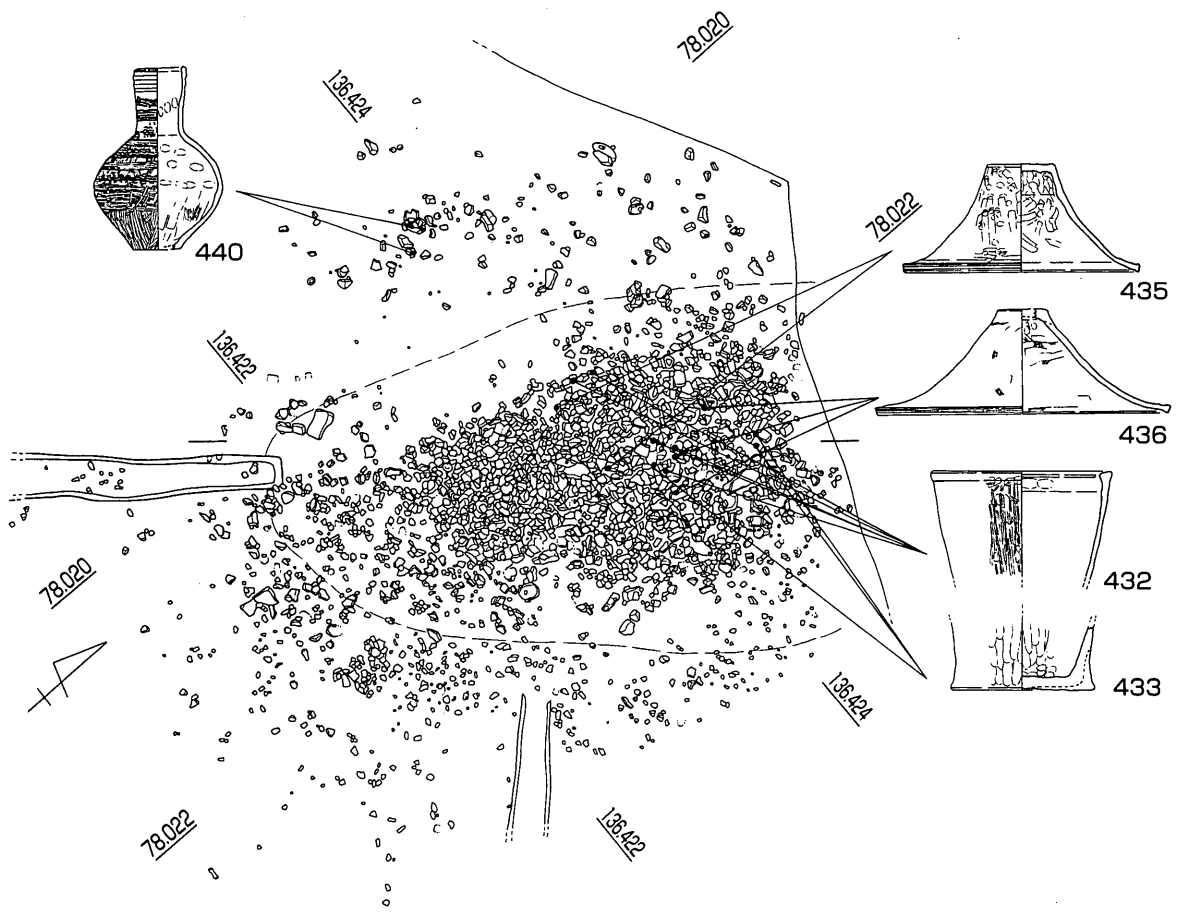
第44図 III区第2面集石2・5平・立・断面図 (1/60)

また特殊な土器（非日常品、赤色顔料塗布、甑以外の穿孔品など）は見られない。なお弥生後期土器（409）が1点出土しているが上位に集石5が位置することによる混入と考えられる。第45図でわかるとおり位置的にはST03と関わる坑の上位縁辺部である。仮に坑が後期遺構面からの掘り込みであればこれに伴う可能性もある。だが先述のとおり中期遺構面から掘り込んでいると判断している。また坑上部に隆起する礫群内でなくその頂部がわずかに見えるレベルでやや外れて出土しており、関わらないと考える。

礫は10cm前後と小振りのものが大半を占めるが、わずかに20cm前後のものが混じる。多くは砂岩であるが花崗岩なども含む。なお被熱による可能性をもつ赤化した礫が少量混じる。石器にはサヌカイト製石鏃、スクレイパー、緑色片岩製の柱状片刃石斧、砂岩製の磨石が出土している。



第45図 III区第2面集石2・5遺物分布図（1/60）

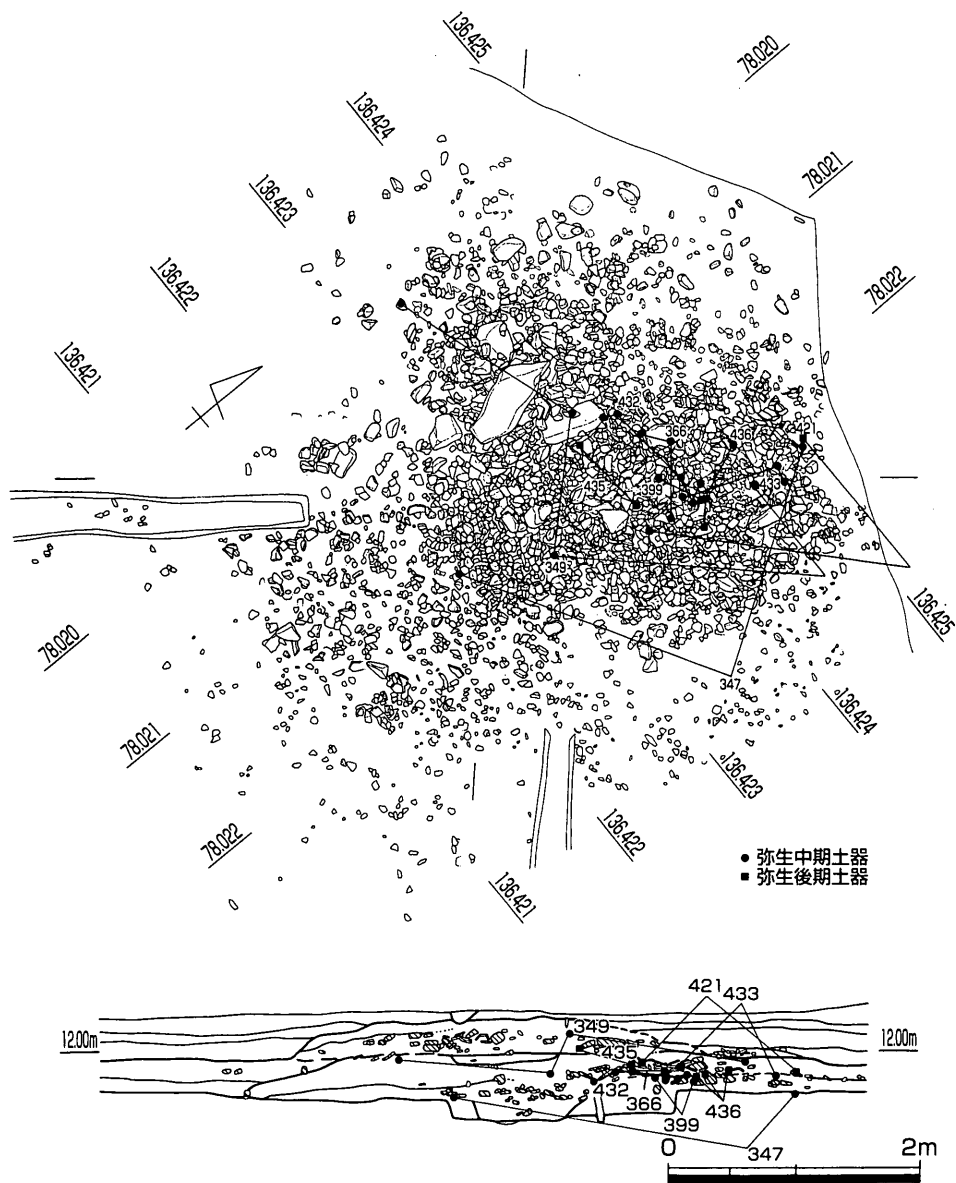


第46图 Ⅲ区第2面集石2·5平·立面图 (1/60)

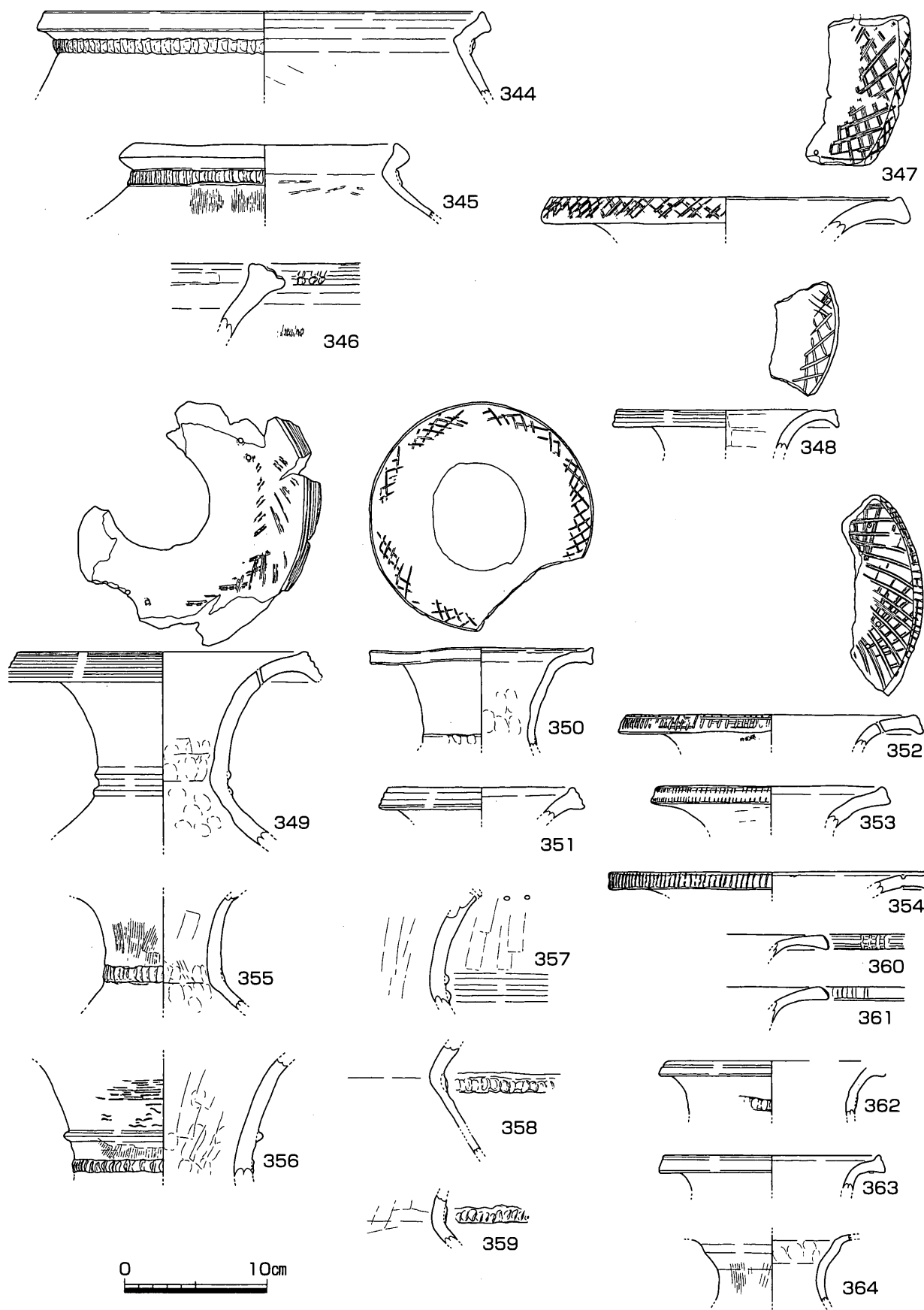
接合関係については集石5と遺構間接合するものを含めて9セットある。このうち平面的には234、311が約3m、レベル的には234が30cm、315が15cm開けて接合している。234、315の破片は集石5に混入するが、これはその形成時に集石2頂部が埋没しきっておらず、破壊されたことに由来する可能性もある。だが集石3のように下位の集石1から多量の弥生中期土器が混入する状況はなく推測の域を出ない。上記の3セット以外は近接した位置で接合しレベル差も小さいため土器片が集石遺構形成土に混じった後、激しく攪拌されることなく盛り上げられたと考えられる。

〈出土遺物と形成期間〉

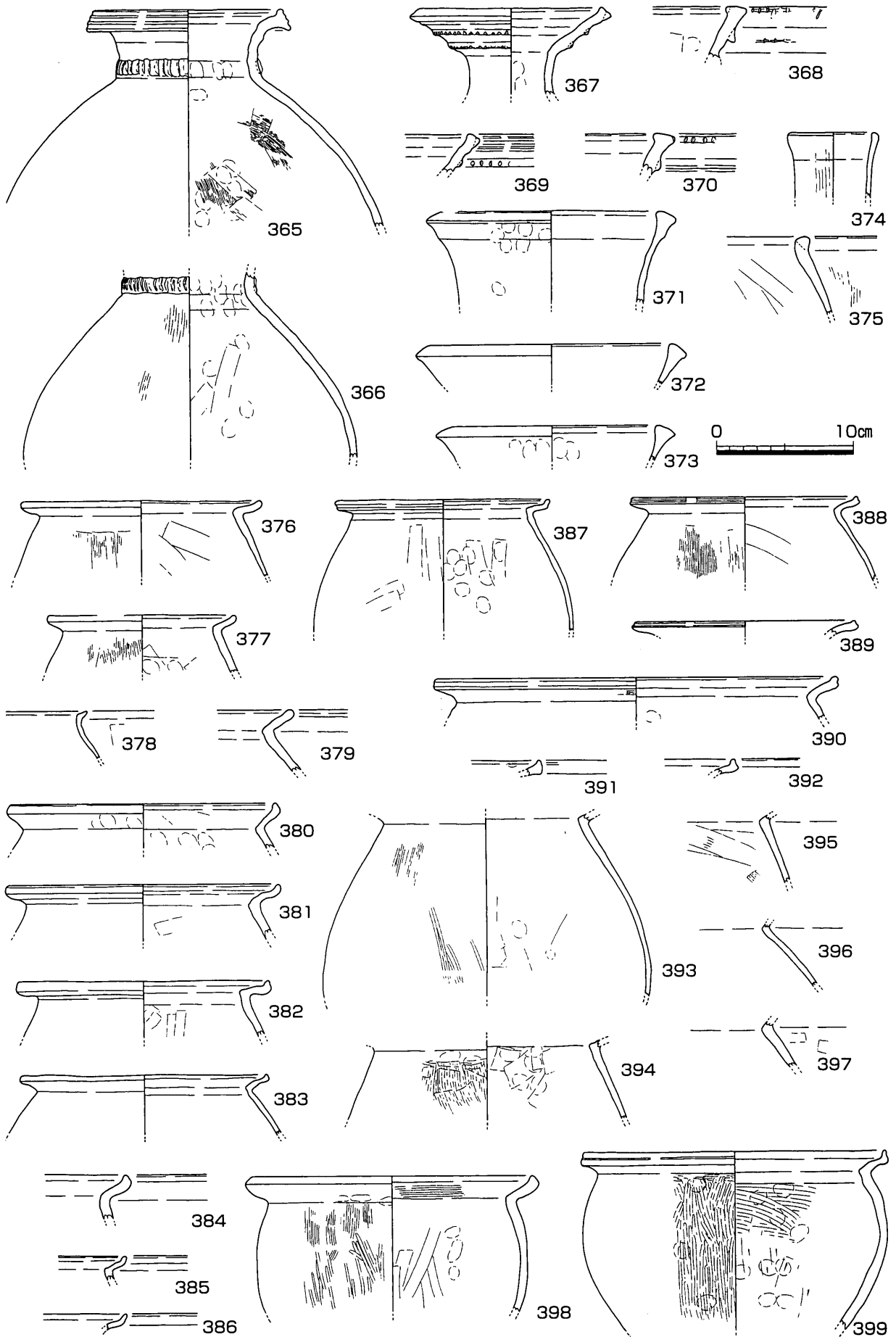
出土遺物には弥生土器壺(344~375)、甕(376~409)、底部(410~413)、甑(414、415)、高杯(416~429)、鉢(430~433)、紡錘車(434)、蓋(435、436)、スクレイパー(437)、緑色片岩製柱状片刃石斧(438)、砂岩製磨石(439)がある。344、345は短く屈曲する口縁部から延びる頸部に粘土紐を貼り付け押圧を加える。347~350、352は口縁部内面に斜格子文を施す。353、354は別個体として図化したのが同一個体である。口径、傾きは354が正確である。口縁端部に刻み目を加える。349、357は頸部に突



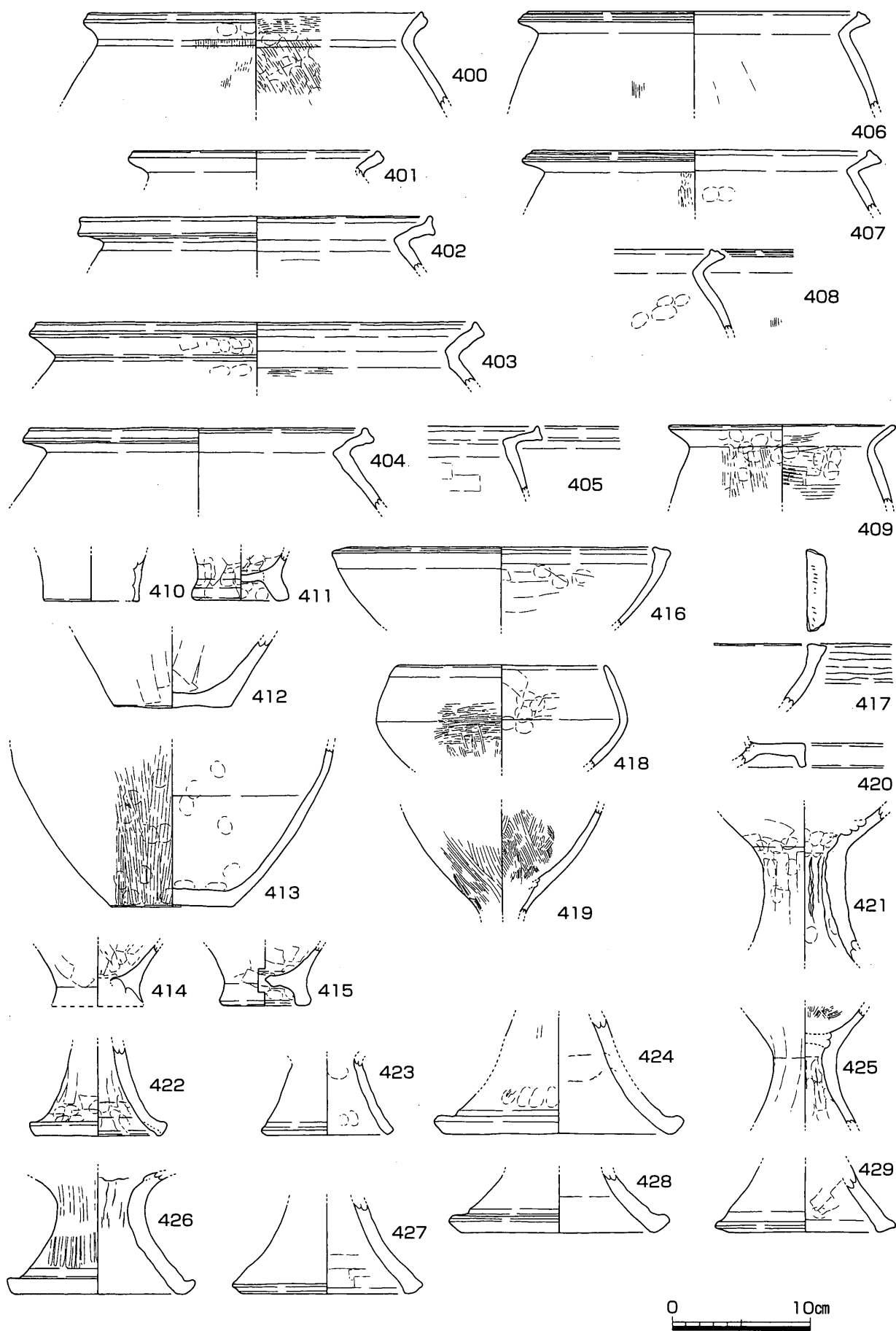
第47図 III区第2面集石2・5接合関係図(1/60)



第48图 Ⅲ区第2面集石2出土遺物 (1) (1/4)



第49图 Ⅲ区第2面集石2出土遺物(2)(1/4)



第50图 Ⅲ区第2面集石2出土遺物 (3) (1/4)

帯を、350、355、358、359、362、365、366は粘土紐を、356は両方を施す。360、361は口縁端部に棒状浮文が見られる。365は体部内面を、366は体部外面をハケ目調整する。367～370は口縁部が大きく開き拡張した口縁端部と突帯に刻み目を加える。371～373は同一個体の可能性が高い。口縁端部を内外に大きく肥厚させる。374は口縁部がほぼ直立し端部をわずかに肥厚させる。375は外面をハケ目、内面を板ナデ調整する。376～392は器壁が薄く口縁端部を小さくつまみ上げる。調整が摩滅した個体が多いが外面にハケ目、内面に板ナデを施すものが見られる。393～397は口縁部を欠くが同様な器形と考えられる。胴部外面上半に393はハケ目後ヘラミガキ、394はハケ目を施す。398～408は口縁端部を肥厚させて小さくつまみ上げ、器壁がやや厚いものである。398、399は胴部上半がほぼ直立し外面に縦方向の密なヘラミガキを加える。400、406、408は体部外面に縦ハケを施す。409は細い口縁部がくの字状に外反する。外面に縦ハケ、内面に横ハケが見られる。413は外面を縦方向にヘラミガキする。415は焼成後穿孔している。416、417は口縁部を内外に小さく肥厚させる。417は口縁部上面に刻み目を加える。418は杯部がワイングラス状を呈する。外面上半で横方向の、下半で縦方向のヘラミガキを施す。419は外面をヘラミガキ、内面をハケ目調整する。420は水平口縁の高杯である。421～429は脚部である。421、425、426には円盤充填の痕跡が残る。424は脚部外面に425は杯部内面にヘラミガキが見られる。

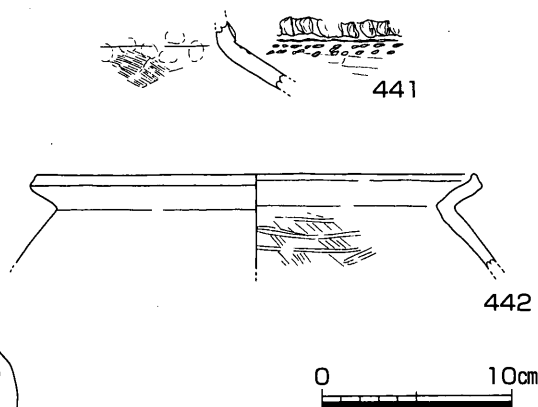
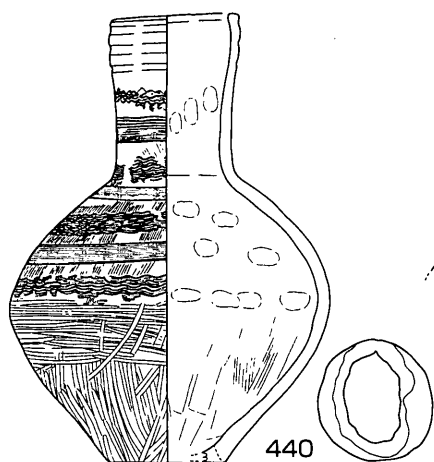
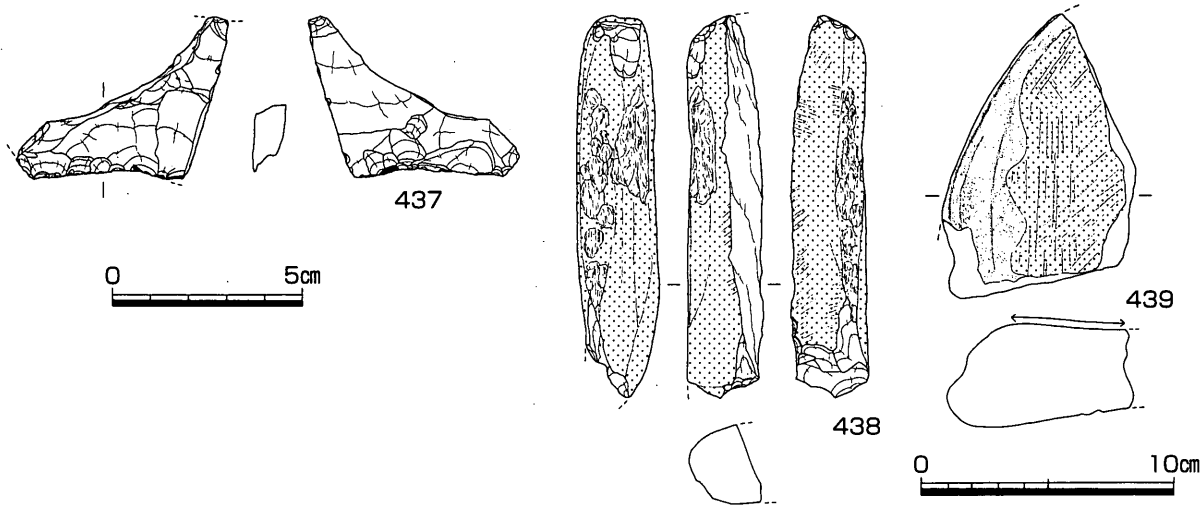
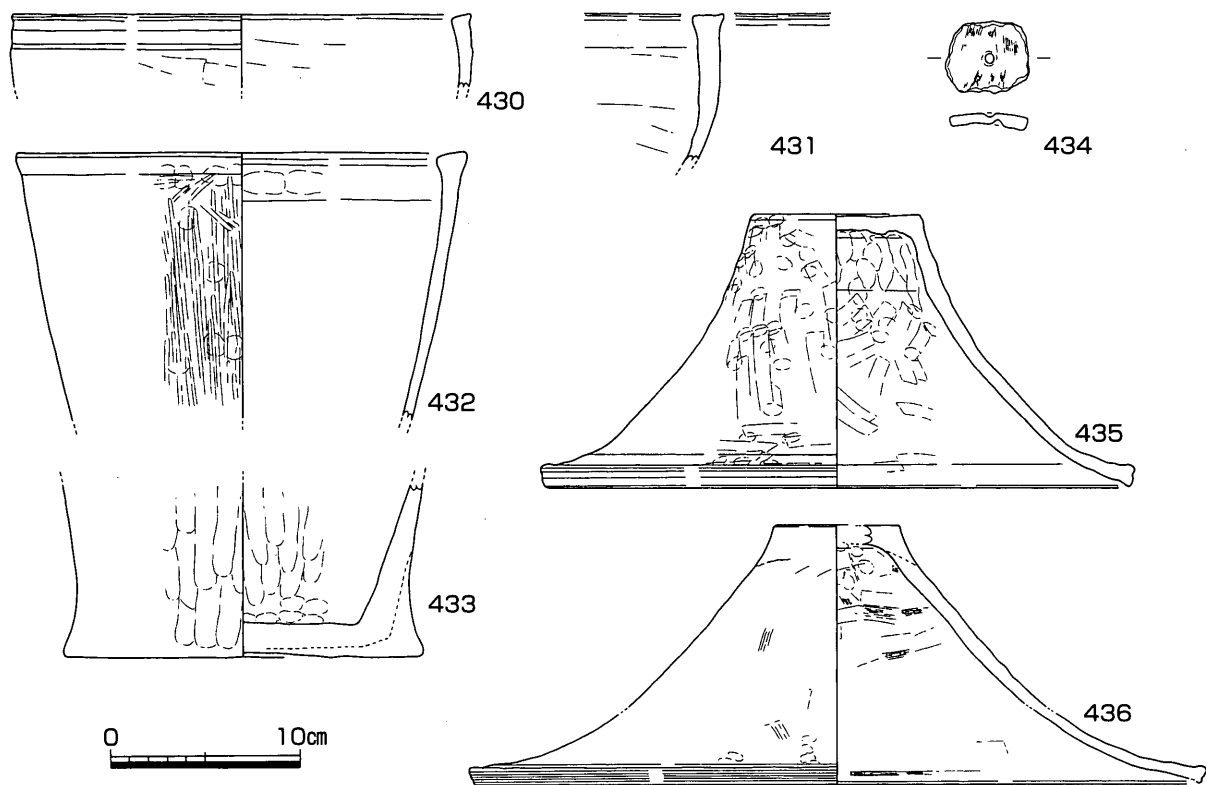
432、433は大型の鉢である。別個体として提示しているが法量、色調、胎土から見て同一個体の可能性が高い。両方を合わせた残存量は全体の1/3程度である。432は口縁部を内外に拡張し、外面を縦方向にヘラミガキする。433は底部の下端が踏ん張る形状であり内外面を指ナデする。434は両面から穿孔しているが未貫通であり位置もずれる。435、436は大型の蓋である。法量、形状はやや異なるが、ともに拡張した口縁端部に凹線文を施す。調整は435で内外に板ナデ、内面上端には粗い指ナデを、436で内外にハケ目、内面上端に顕著な指オサエを加えており類似する。

437は右側面を下端部に大きな剥離を加えた後両面に調整剥離を施し、刃部を形成する。中央で窪んでおり刃部再生が行われた可能性がある。438は刃部を欠損するがほぼ全体を丁寧に研磨している。439は上面の平坦面に研磨痕が見られる。図化していないが裏面には小さく溝状の抉れが見られ、台石としても使用されたと考えられる。

以上の土器は弥生後期土器を1点(409)含むものの集石1のそれと同様な器種組成、特徴を示す。弥生後期土器は集石5が上位にあることによる混入と考えられるため集石2の時期は弥生中期中葉と考える。石器はいずれも破損品である。

集石2付近包含層出土遺物(第51図)

出土位置から集石2に伴う可能性が高い遺物である。弥生土器壺(440、441)、甕(442)を図化した。440は直立する細長い筒状の頸部に球形の体部がつく。調整、文様は外面に口縁部で凹線文、頸部から胴部上半で櫛描き波状文と直線文を交互に施す。胴部下半は上位で横方向の、下位で縦方向のヘラミガキを加える。内面は胴部下半に縦ハケが見られる。底部は破損しているが穿孔にも見える形状を呈する。だが破損部の縁辺は製作時の底部貼り付け位置にほぼ一致する。壊れやすい部分であるため積極的に意図的な行為によるとしがたい。441は頸部に粘土紐を貼り付け押圧を加える。直下には貝殻腹縁押圧文が見られる。442は口縁部がくの字状に折れ、端部を上方につまみ上げる。これらの遺物は弥生中期に位置づけられ集石2の時期と違和感はない。



第51图 Ⅲ区第2面集石2出土遺物(4)、集石2付近包含層出土遺物(1/4、1/3、1/2)

集石5（第44～47・52～53図）

〈平、断面形と規模〉

集石5は東側の状況が不明であるが土層断面による裾部把握、遺物の分布状況の粗密から第46図のようなほぼ円形を呈すると推定される。集石2の上位に位置し、それぞれの推定範囲は一部が重なる。断面形はマウンド状に隆起する。頂部はほぼ平坦で、裾は南側で急に北側と西側で緩やかに下る。規模は土層図作成位置で南北が推定3m以上、東西が推定2.9m以上、高さ30cmを測る。

〈土層堆積状況〉

集石遺構形成土は2層に分けられる。ともに暗褐色系粘質土であるが、8層が主体となり土器片、礫を多く含む。

〈遺物出土状況〉

遺物は推定範囲の中央部に円形に密集する。土器は壺、甕、高杯、鉢などがあるが器種ごとに分布の偏りは見られない。最も残存率が高い甕（450）でも1/2弱、これに次ぐのが壺（447）と破片ばかりである。また穿孔を施したり赤色顔料を塗布したりする特殊な土器は出土していない。ドットレベル図、出土遺物実測図で見られるとおりほとんどが弥生後期に位置づけられる。

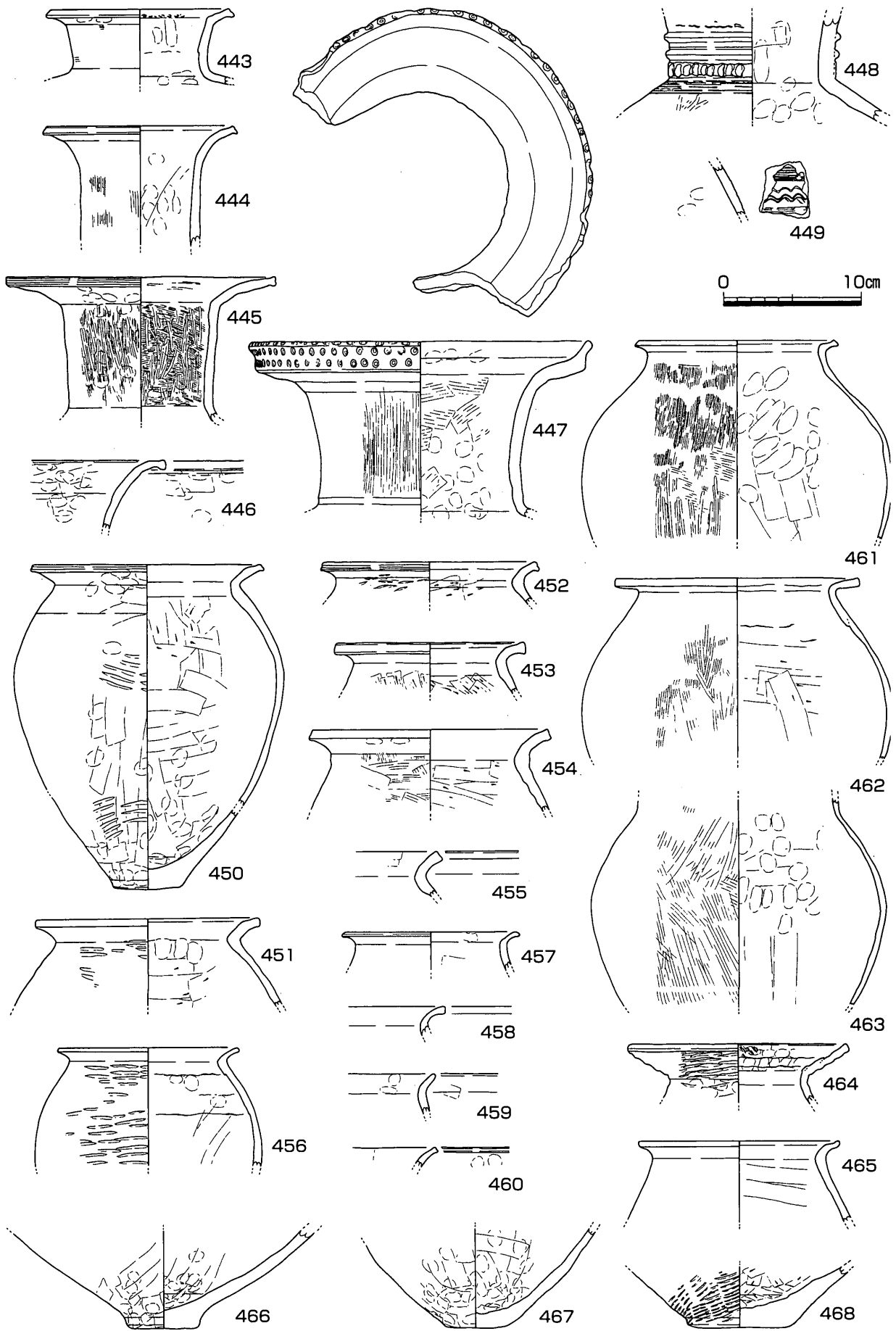
礫は中央部上位で2つの大きな砂岩（以下では中央北礫、南礫と仮称。）が見られる。それぞれ75×30×29cm、54×24×9cmを測る。この周囲には10cm前後の小振りのものがあり、遺物密集の東西縁辺部で20cm大と大きめの礫が数個ずつ見られる。ただ人為的な配置というほど整っていない。多くは砂岩類であるが花崗岩なども含む。石器は結晶片岩製の打製石庖丁、砂岩製の磨石・敲石類がある。

なお調査時には中央北礫の直下で写真図版19のように礫と主軸を揃えて横位の甕が完形に近い状態で出土しているように見えた。また近接する打製石庖丁（476）が完形品であることも注目された。だがこの口縁部は451であり450の口縁部は20cmほど西側で出土した。このため特殊な出土状況を示す土器はない。だが中央北、南礫については検出位置、規模から標石などの特別な意味を込めていると考えられる。

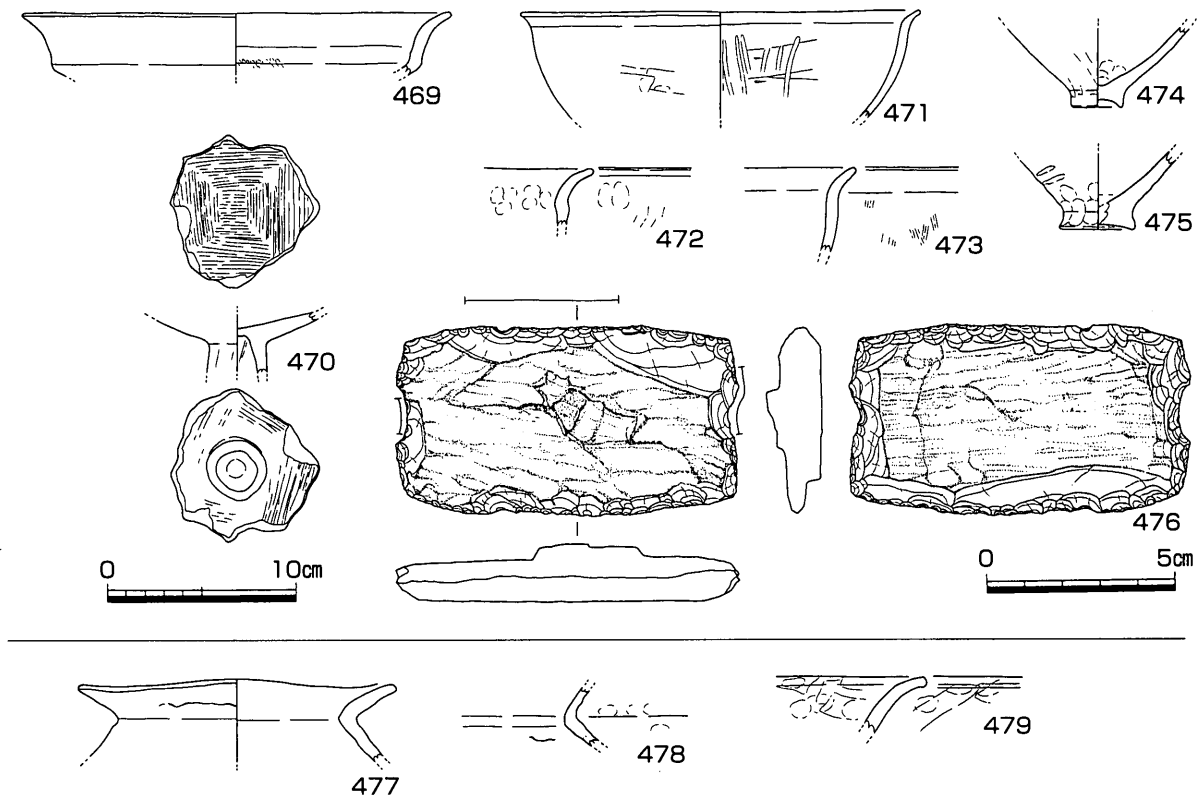
〈出土遺物と形成時期〉

出土遺物には弥生土器壺（443～449）、甕（450～468）、高杯（469、470）、鉢（471～475）、結晶片岩製打製石庖丁（476）がある。443～447は直立気味に延びる頸部から強く屈曲する口縁部をもつ。443～446は口縁端部を下方に小さくつまみ出す。447は口縁端部を上方に大きく拡張し竹管文を3列施す。448はごく弱く外反する頸部に櫛描波状文、突帯、櫛描直線文などを施し装飾的である。449は櫛描直線文、波状文を交互に加える。450は肩の張りが弱い体部からくの字状に屈曲する口縁部が延びる。肥厚しない口縁端部には退化した凹線文が見られる。調整は体部外面にタタキ、内面に頸部直下までヘラケズリを施す。451、452、456も外面にタタキが、451～454も内面に頸部直下までのヘラケズリ調整が見られる。461～463は下川津B類である。外面を縦ハケ、内面の胴部最大径下位までをヘラケズリする。また461、463では胴部内面の上位で顕著な指オサエを加える。464は口縁部外面に顕著なタタキが、内面に指オサエと粘土紐接合痕が見られる。466、467は平底であるが前者は矮小化し、後者は丸味を帯びる。468は下端までタタキを施す。469は杯部の上端が強く外反し、内面下部にヘラミガキを加える。470は下川津B類である。杯部の内外面を分割ヘラミガキする。

471は内面をヘラケズリ後まばらにヘラミガキを施す。472は内外面に指オサエが顕著である。474、475は台付鉢である。475は外面にタタキ、指オサエが見られる。476は刃部に細かい調整剥離を加え丁



第52图 Ⅲ区第2面集石5出土遺物(1)(1/4)



第53図 Ⅲ区第2面集石5出土遺物(2), 集石5付近包含層出土遺物(1/4、1/2)

寧な作りである。刃部は使用により丸味を帯びる。

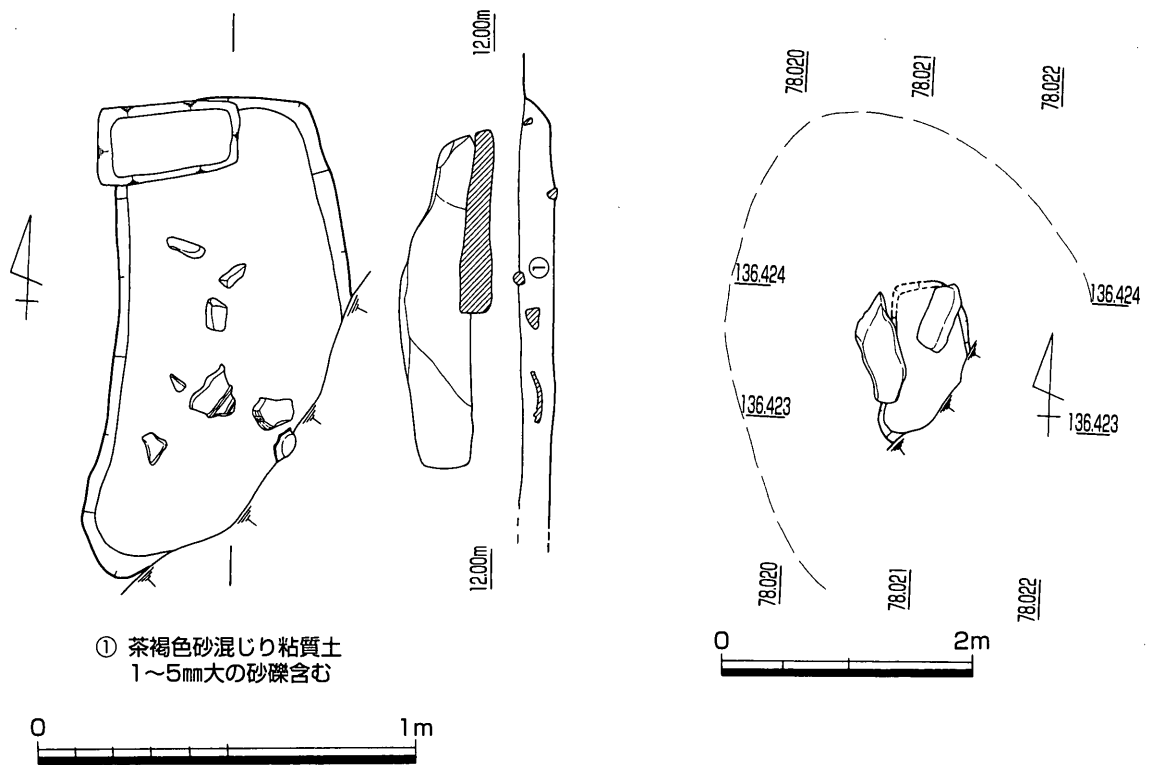
以上のうち弥生中期の土器(448、449、465)もごく少量見られるが、その他は弥生後期(後半に比定できるものを一定量含む。)に位置づけられる。よって集石5の時期は弥生後期後半と考えられる。石器は打製石庖丁(476)が完形品である。

遺構の性格については後述するが標石状の礫をもつこと、集石2の存在を意識し時期を隔てて同様な遺構を形成していることが注目される。

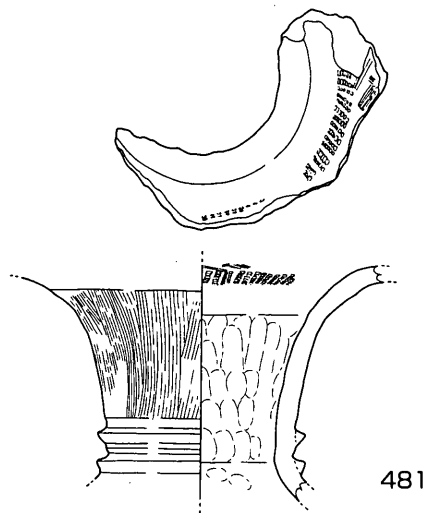
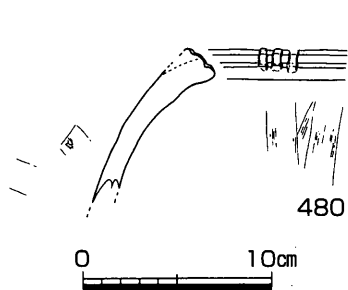
集石5下位SK01(第54図)

集石5下位で検出した土坑である。北東部が検出できていないが平面形はややいびつな長方形を呈すると推定される。断面形は壁がほぼ直立し床面は平坦である。規模は長径約1.2m、短径0.63m、深さ0.09mを測る。主軸方向はN-5°-Wである。出土遺物には弥生土器壺(480、481)などがある。480は肥厚させた口縁端部に凹線文、棒状浮文を加える。481は頸部外面に縦ハケ、口縁部内面に斜格子文、刺突文が見られる。ともに弥生中期中葉に位置づけられる。

検出位置、出土遺物からは集石2上部に掘り込まれた弥生中期中葉の遺構と見ることも可能である。だが中央北、南礫の下位に位置することから遺物は集石2の掘削による混入であり、集石5に伴うと判断する。これが妥当であれば墓と考えるには浅く、性格は不明である。中央礫を立石状にした際の掘り方である可能性も考えたが掘り込み面が弥生後期遺構面であり礫の下場が浮くこと、礫の規模に対し浅すぎることからこの可能性はない。



① 茶褐色砂混じり粘質土
1~5mm大の砂礫含む



第54図 Ⅲ区第2面集石5下位SK01平・断面図(1/20)、位置図(1/60)、出土遺物(1/4)

集石5付近包含層出土遺物(第53図)

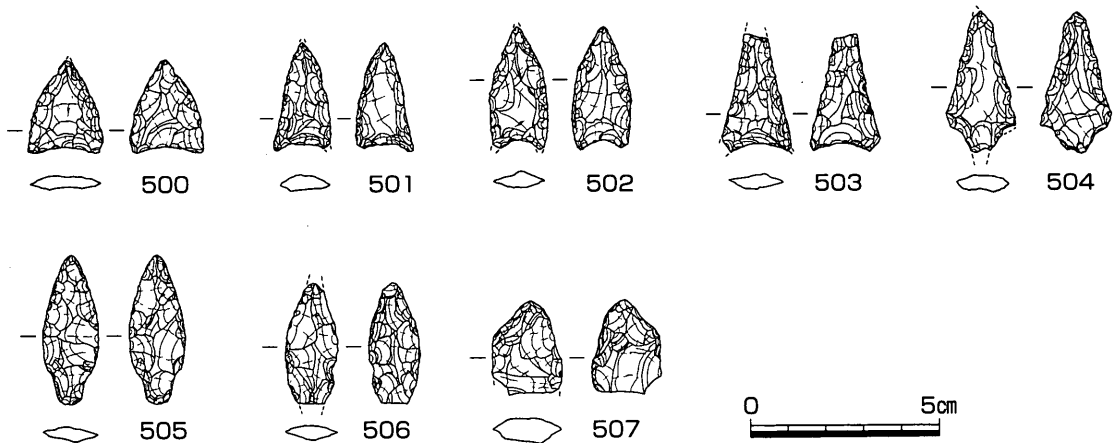
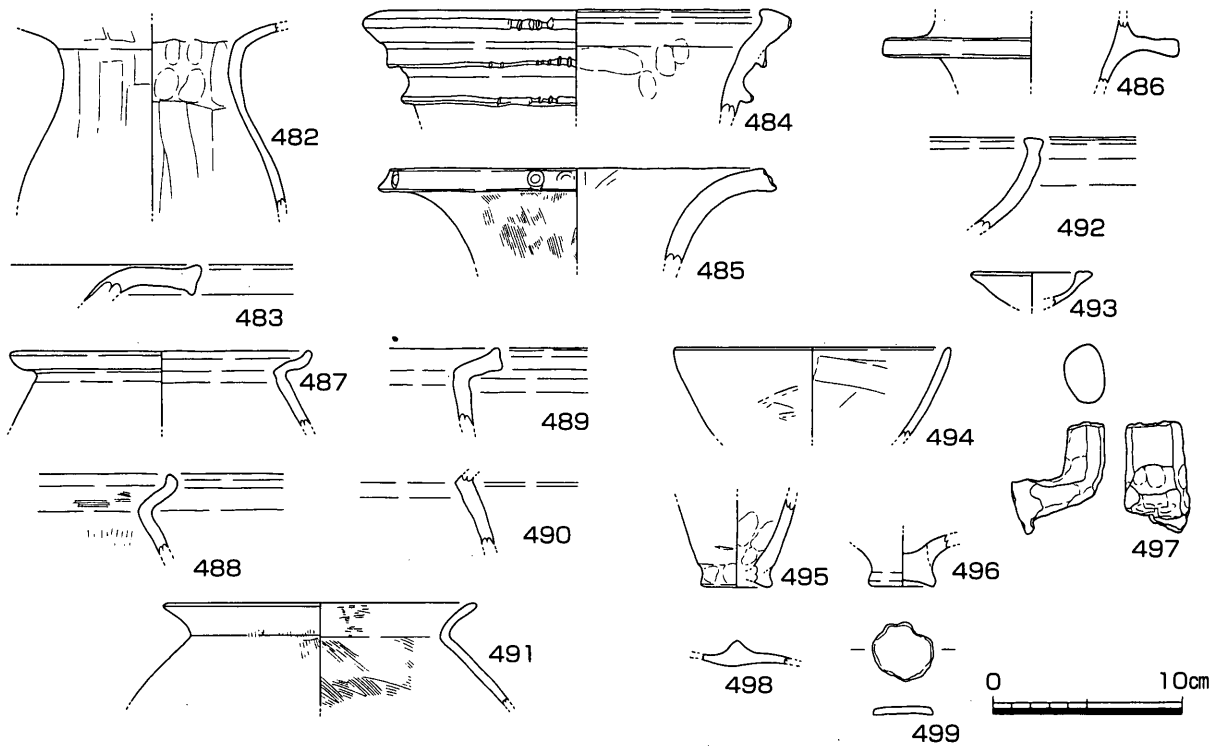
出土位置、レベルから本来集石5に伴う可能性が高い遺物である。弥生土器甕(477、478)、鉢(479)を図化した。477、478は、くの字状に屈曲する口縁部をもち、粘土紐接合痕が見られる。479は内外面を板ナデする。これらは弥生後期に位置づけられ集石5の時期と違和感はない。

集石2・5付近包含層出土遺物(第55図)

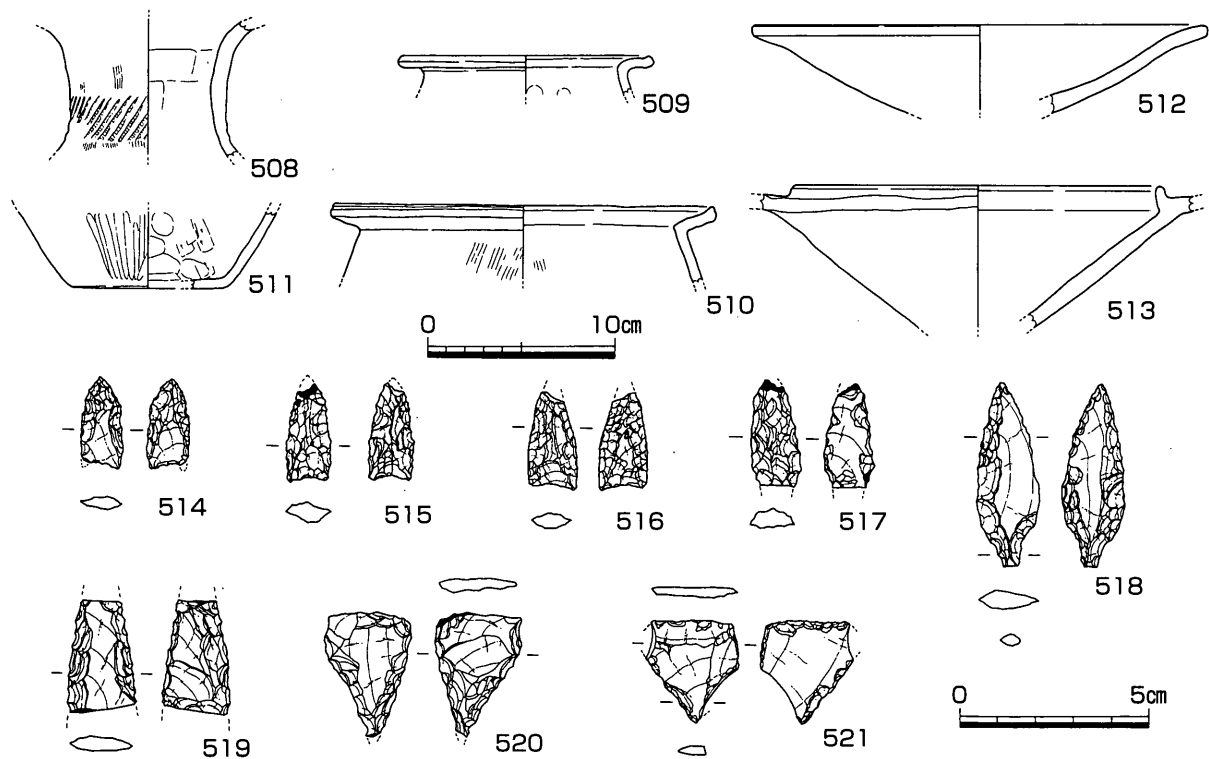
出土位置から集石2、5に伴う可能性が高い遺物である。弥生土器壺(482~486)、甕(487~491)、高杯(492、493)、鉢(494~496)、把手(497)、蓋(498)、紡錘車末製品(499)、石鏃(500~507)を図化した。482は肩が張らない形態としたが接合部分が不明瞭であるためこれより張るかもしれない。

484は口縁端部外面、突帯2条に刻み目を加える。485は下方に小さく肥厚させた口縁部に竹管文を施す。486は複段口縁壺である。段の先端部は小さく肥厚させ、丸く収める。487~489は、くの字状に屈曲する口縁部をもち、端部を小さくつまみあげる。490は外面にスリップを塗布し赤化させている。弥生中期に位置づけられ、本来は集石2に伴う可能性が高い。491は口縁部を肥厚させず肩の張りが強い。内外面にハケ目を加える。493はミニチュア土器である。外面は剥離しているが内面は丁寧にナデている。弥生中期に位置づけられ、本来は集石2に伴う可能性が高い。495、496は台付鉢である。内外面に顕著な指オサエが見られる。499は未穿孔である。

500~502、505は先端部、基部をごく小さく欠損する。505は風化度が高く白色を呈する。507は未製品である。つぶれが見られるため楔形石器を石核とした剥片採取を示唆する。



第55図 Ⅲ区第2面集石2・5付近包含層出土遺物 (1/4、1/2)



第56図 Ⅲ区第2面包含層出土遺物 (1) (旧E1区) (1/4、1/2)

(3) 包含層出土遺物 (第56~62図)

508~521は旧E1区で出土した遺物である。

508は壺の頸部で板状工具の小口部分による圧痕文があり、小口部分の木目が残っている。509・510は甕で、509の口縁部は真横に開く。512は浅い鉢状の杯部の高杯である。直線的な杯部で僅かに屈曲して口縁部に至る。513の杯部は直線的で内面に立ち上がりをもつ。

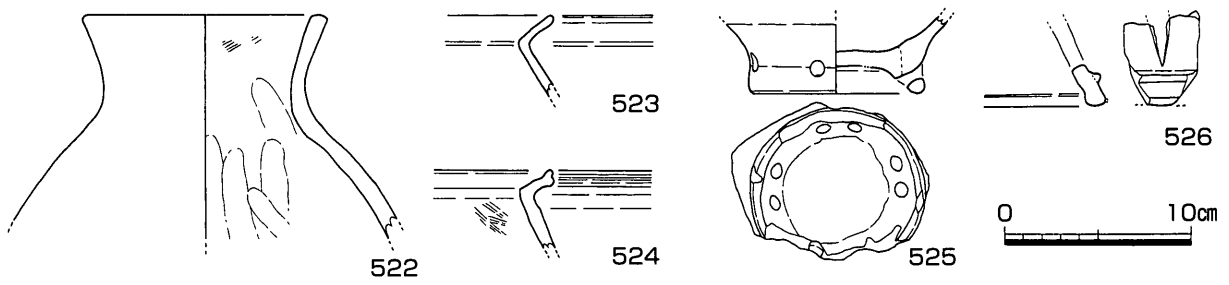
514~518は石鏃で、514~516は凹基、517は基部欠損、518は凸基有茎式である。519は石槍で、側縁部に大振りな調整剥離を行っている。520・521は石錐である。

522~526は旧E1区の調査区南東部のいくぶん窪地状に低くなっている部分から出土した遺物である。

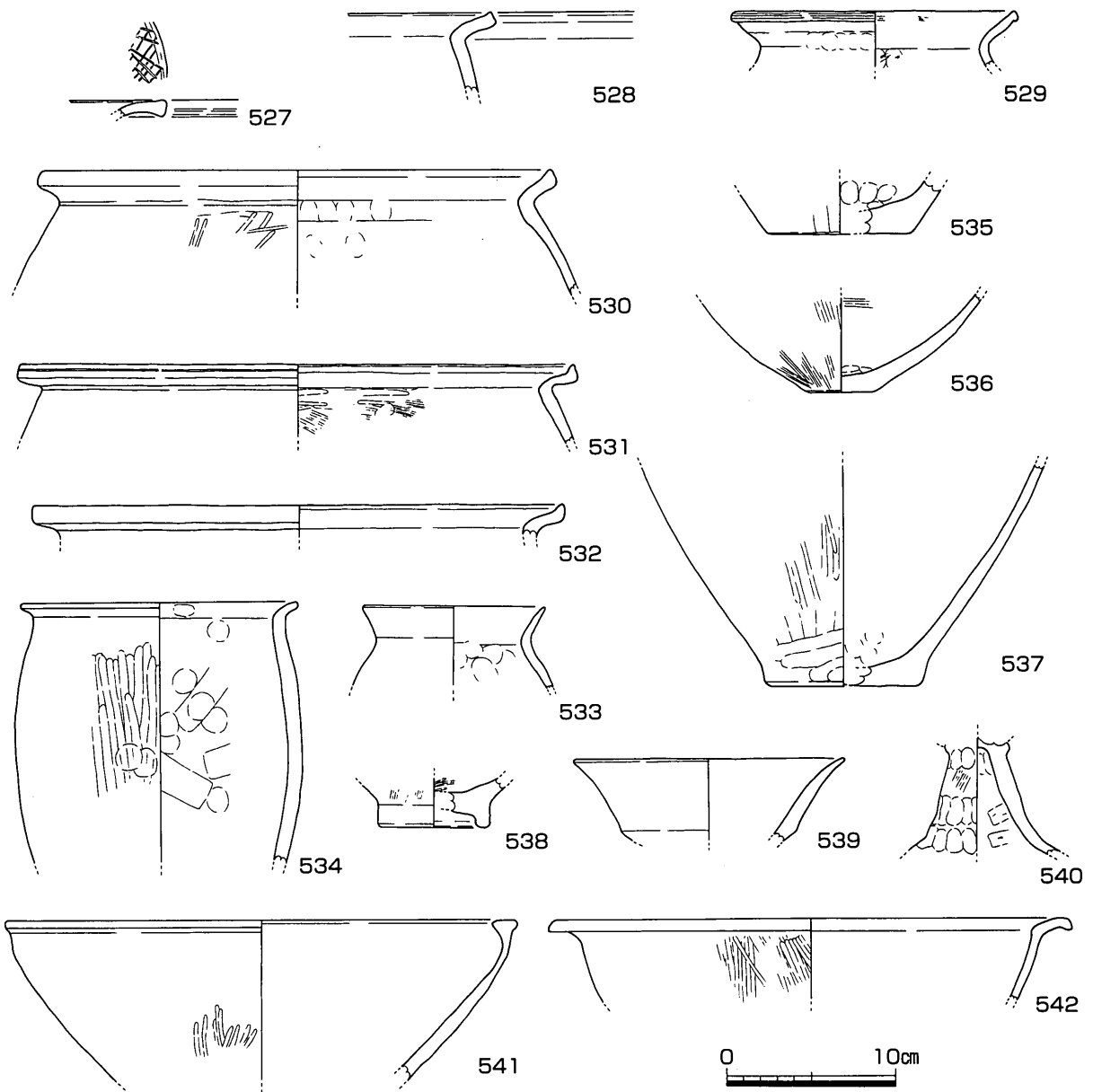
522は壺で直線的な口縁部で、体部上半の張りは弱い。523・524は甕で口縁部は鋭く屈曲する。525は甕の底部と考えられ、高台状の低い脚に2個1単位の穿孔が向かい合う位置に施されている。526は高杯の脚部と考えられ、三角形の透し穴がある。

527~542は旧E2区で出土した遺物である。533・539・540のように古墳時代による遺物も含まれており、本来は第1遺構面の遺物であったものである。

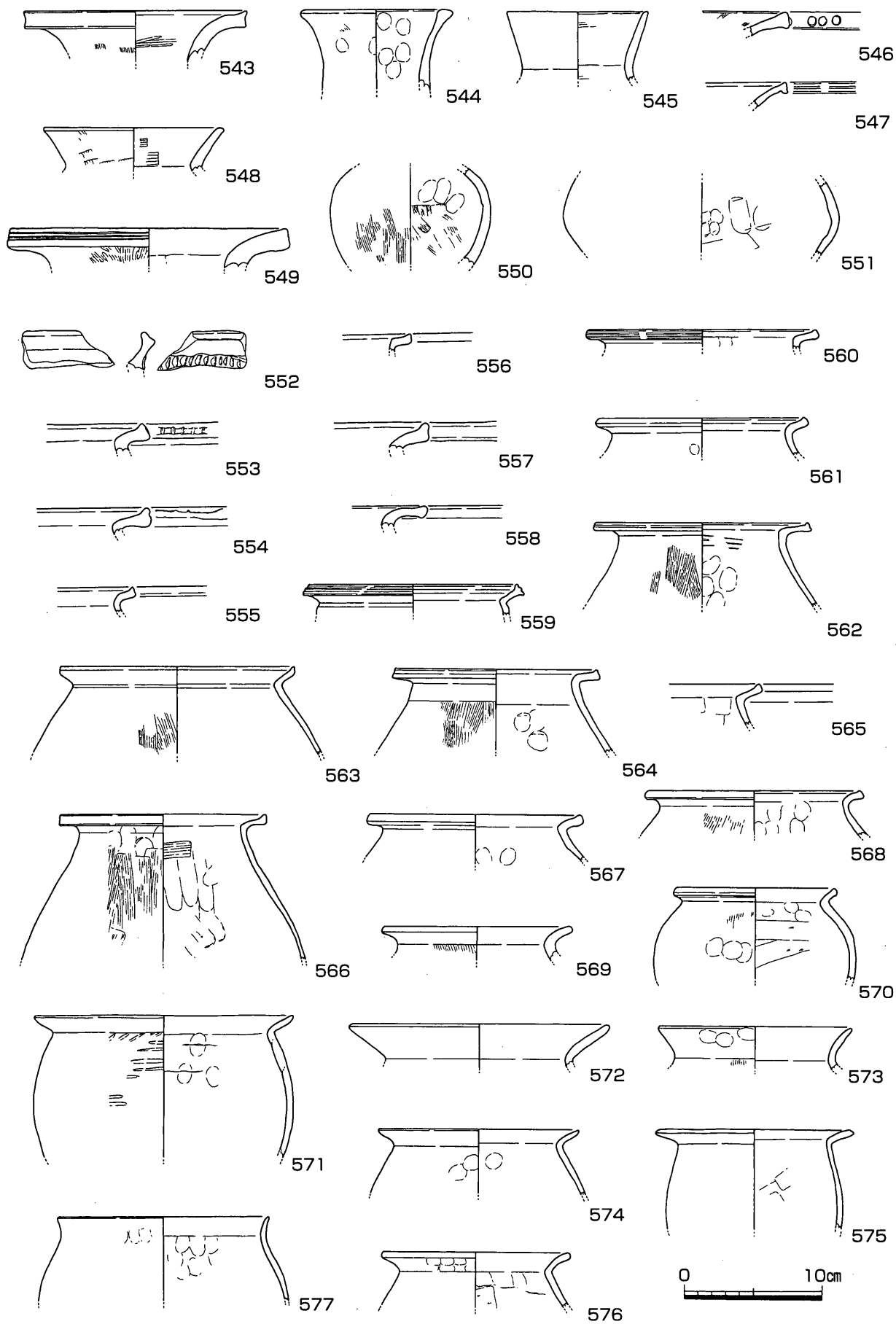
527は壺の口縁部で内面に斜格子文をもつ。528~534は甕である。529は口縁部付近の内・外面に指押さえが顕著である。530は体部外面にヘラミガキを施している。531は口縁部端部を上方に拡張している。体部外面はナデているが、内面にはハケ目の後にヘラミガキを施している。533は直線的で先細りの口縁部をもつ。534は短く外反する口縁部をもつ。体部は僅かに膨らむ程度である。外面にはヘラミガキを施し、内面は指押さえの後に板ナデとなっている。537は壺の体部~底部と考えられ、外面にヘラミガキを施した後に底部付近の外面を指でナデている。539は高杯の杯部で外面に稜をもっている。540は高杯の脚部で外面には指押さえが顕著で、内面はヘラケズリである。541・542は鉢である。541は



第57图 Ⅲ区第2面包含層出土遺物 (2) (旧E1区) (1/4)



第58图 Ⅲ区第2面包含層出土遺物 (3) (旧E2区) (1/4)



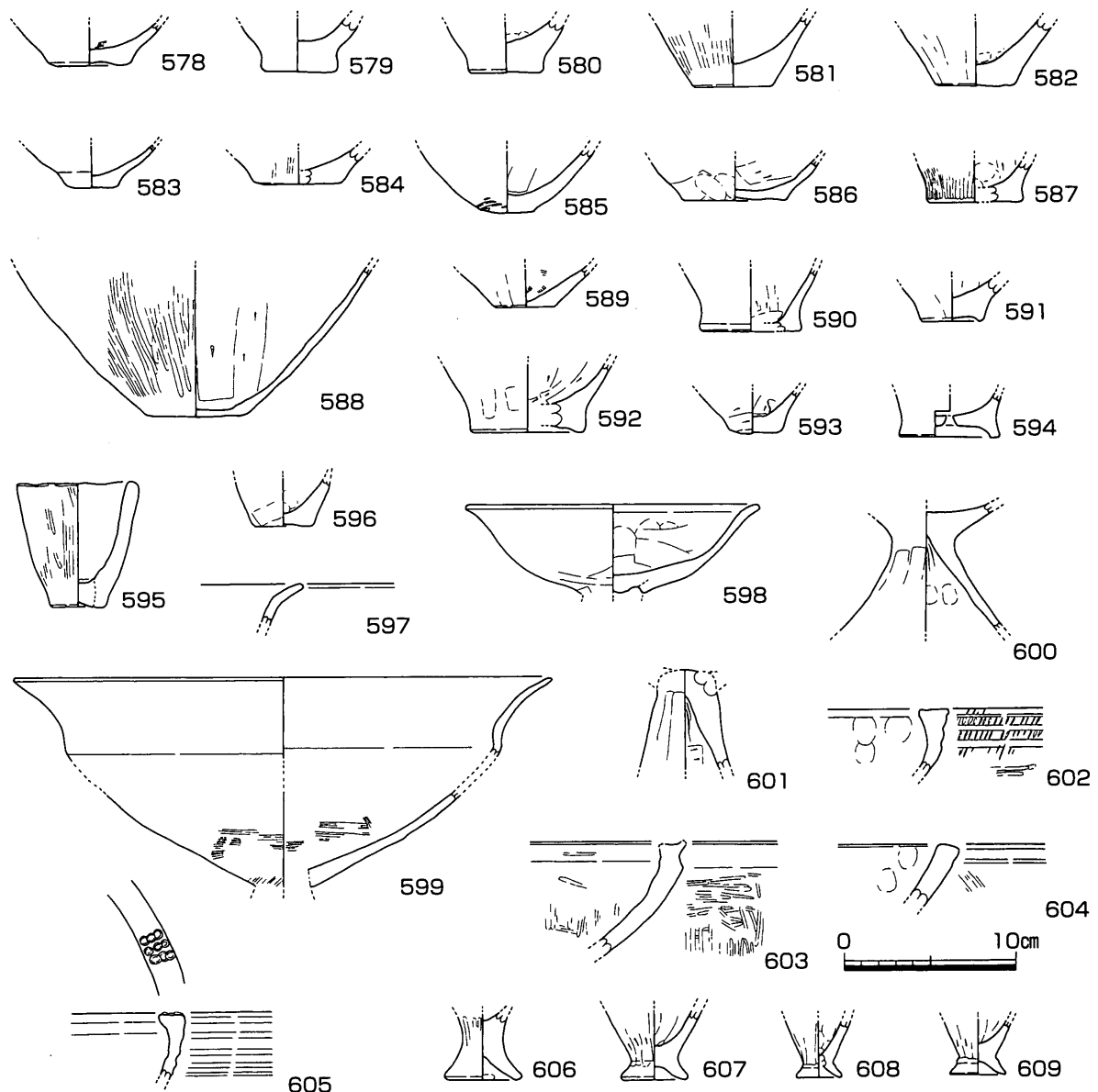
第59图 Ⅲ区第2面包含层出土遗物 (4) (旧E2区) (1/4)

口縁部付近で内湾し、端部は上面に平坦な面を持つ。体部外面にはヘラミガキが見られる。542の口縁部は鋭く屈曲して外反する。体部外面にはヘラミガキを施している。

543~609は旧E 2区のSX02周辺で出土した遺物である。

543~551は壺である。543は口縁部端部を強くナデている。外面はハケ目の後にナデており、内面にはヘラミガキが見られる。544は口縁部端部が肥厚しており、内面には指押さえが顕著である。546の口縁部端部外面には円形浮文が貼り付けられている。548は甕に近い。口縁部の内・外面にハケ目が見られる。549は厚手の口縁部で、端部外面に細い沈線が巡っている。外面にはヘラミガキが施されている。550は球形の体部で、内・外面にハケ目を施している。

552~577は甕である。552は口縁部屈曲部に刻目突帯を貼り巡らせている。553は口縁部端部に刻目を施している。554・555・557は口縁部端部を上方に、559は上下に拡張している。560~562・564~566・568の口縁部は鋭く屈曲し、真横に近く開くものもある。いずれも胎土に角閃石を含んでいる。体



第60図 Ⅲ区第2面包含層出土遺物 (5) (旧E 2区) (1 / 4)

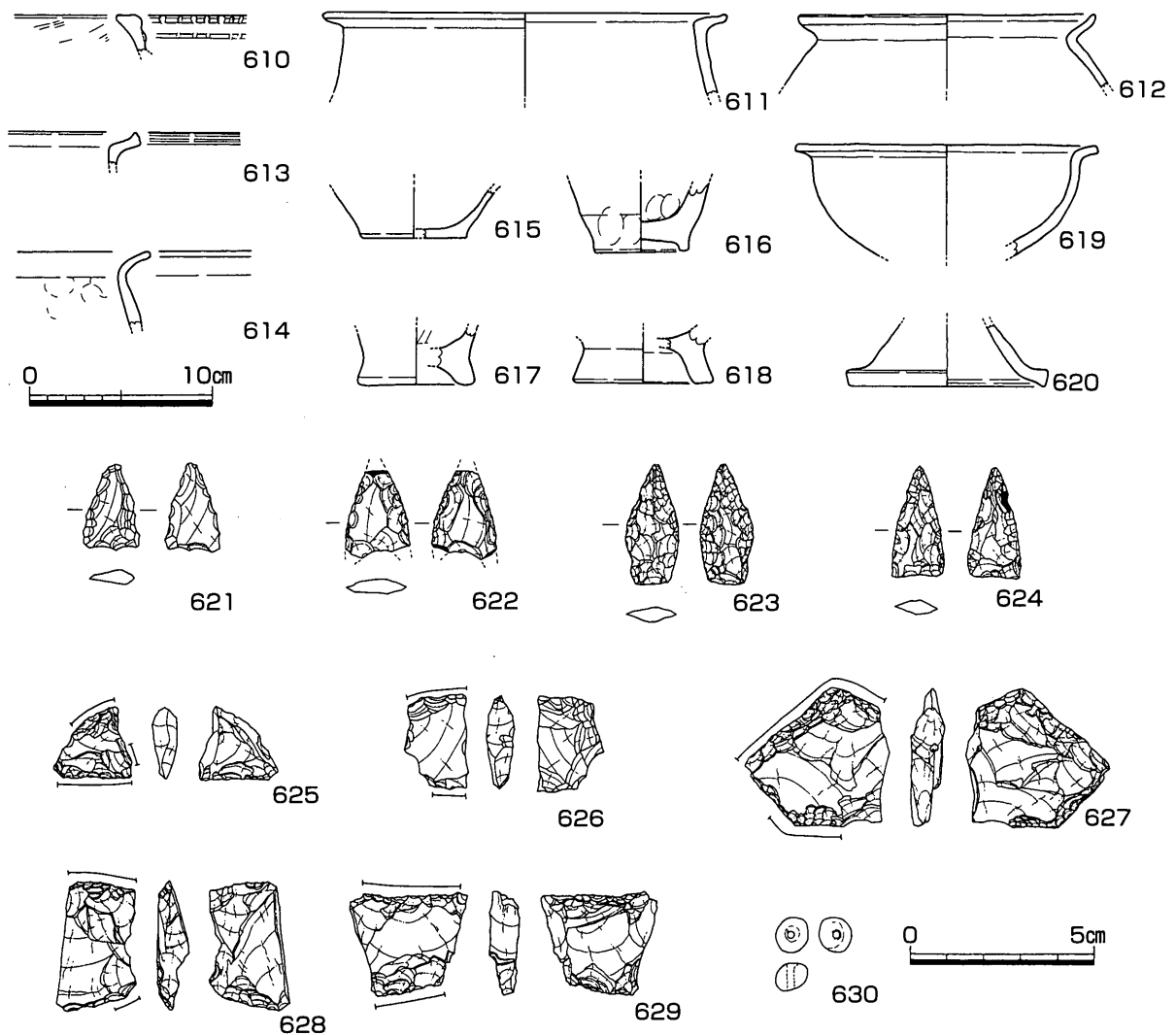
部外面はマメツしていないものはハケ目が見られる。570は体部上半の張りが強く、内面はヘラケズリである。571の口縁部は薄手で先細りになっている。体部は外面にタタキの後にナデている。572・575の口縁部は長い。577の口縁部は体部から緩やかに湾曲するのみで先細りになる。

578～593は壺および甕の底部である。582・586・592の底部外面にはヘラケズリを施している。583の底部は突出している。588の外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリである。591・592は上げ底である。594は短い脚台をもつ甕の底部に穿孔して甑としている。

595は器高7.1cmのミニチュア甕でコップのような形である。全体に厚手で口縁部は体部からそのまま収束する。体部外面にはハケ目の後にヘラミガキを施し、内面は全体にナデている。底部外面に強く指押さえを行い上げ底になる。596もミニチュア甕と考えられ、595と同様に底部に指押さえを行い上げ底にしている。

598～601は高杯である。598の杯部は緩やかに外反する。599の杯部は大きく、口縁部は稜を形成して屈曲し外反する。全体的にマメツしているが、杯部下部の内・外面にハケ目が残る。

602～605は鉢である。いずれも口縁部付近で内湾しているが、604の湾曲の度合いは低い。603は口縁部端部の上面と側面を強くナデている。605は口縁部端部を内側に拡張し、上面に面を作り9個1単位の円



第61図 Ⅲ区第2面包含層出土遺物(6)(旧E2区)(1/4、1/2)

形浮文を貼り付けている。606は小形の脚台部分で鉢と考えられる。外面にヘラミガキを施している。

607～609はいずれも小さな脚台をもち、外面はヘラケズリないし板ナデで、いずれも体部が粗いことから製塩土器と考えられる。

610～630は旧E2区の集石1の南側一帯で出土した遺物である。

610は無頸壺で、口縁部端部と突帯に刻み目を施している。611～614は甕である。611の口縁部は鋭く屈曲して横に開く。612の口縁部は内湾気味に立ち上がる。614の口縁部屈曲部内面は丸みを帯びている。619は鉢で丸みを帯びた体部から大きく外側に屈曲する口縁部をもつ。

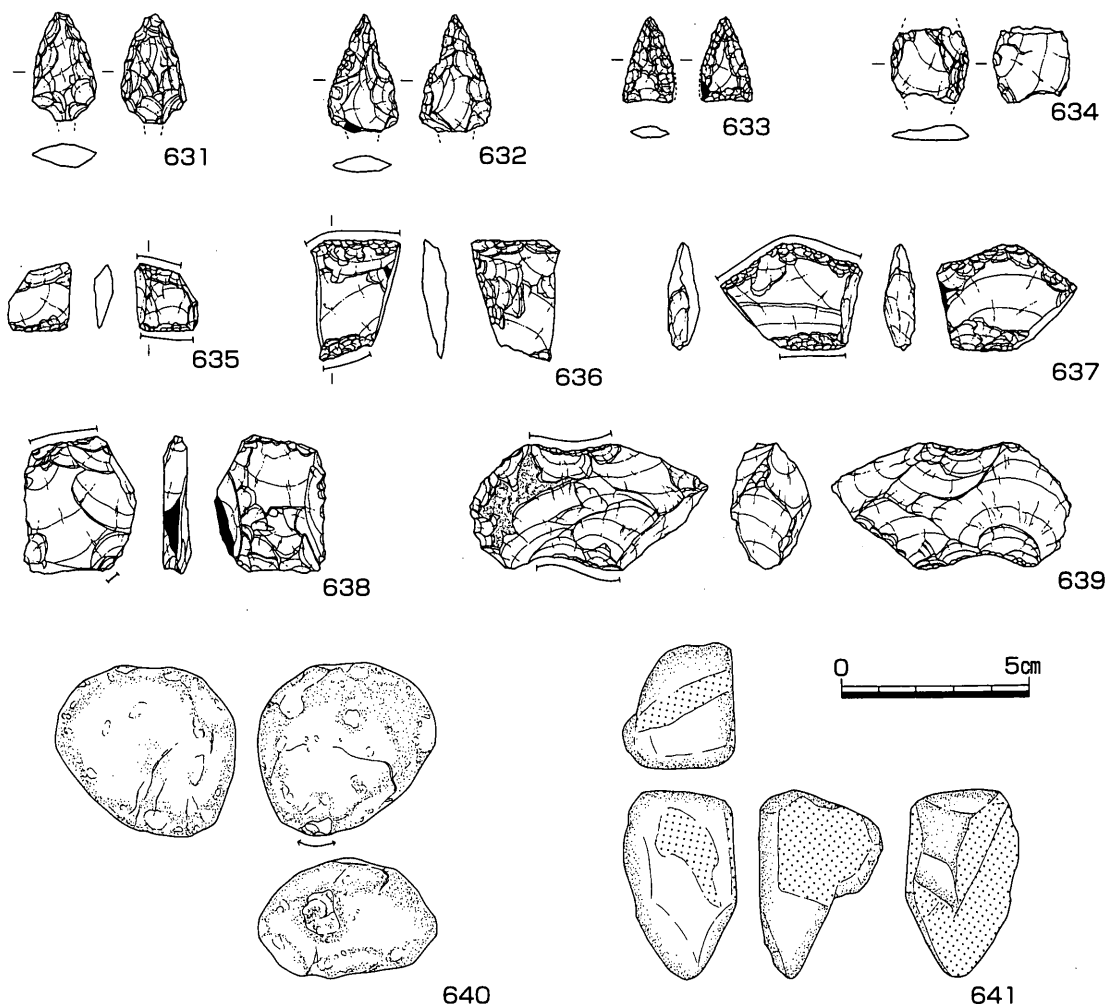
621～624は石鏃である。621・622は凹基、623・624は平基である。625～629は楔形石器である。いずれも両極打撃の痕跡が顕著である。

630は土玉であるが、歪んでいる。

631～641は旧E2区で出土した遺物である。

631～633は石鏃で、631は凸基有茎式、632は基部が欠損しているが凸基有茎式か。633は凹基である。634は石鏃未製品である。

635～641はSX02周辺で出土している。635～639は楔形石器である。639は厚手で一部に自然面を残す。640は敲石、641は砥石である。



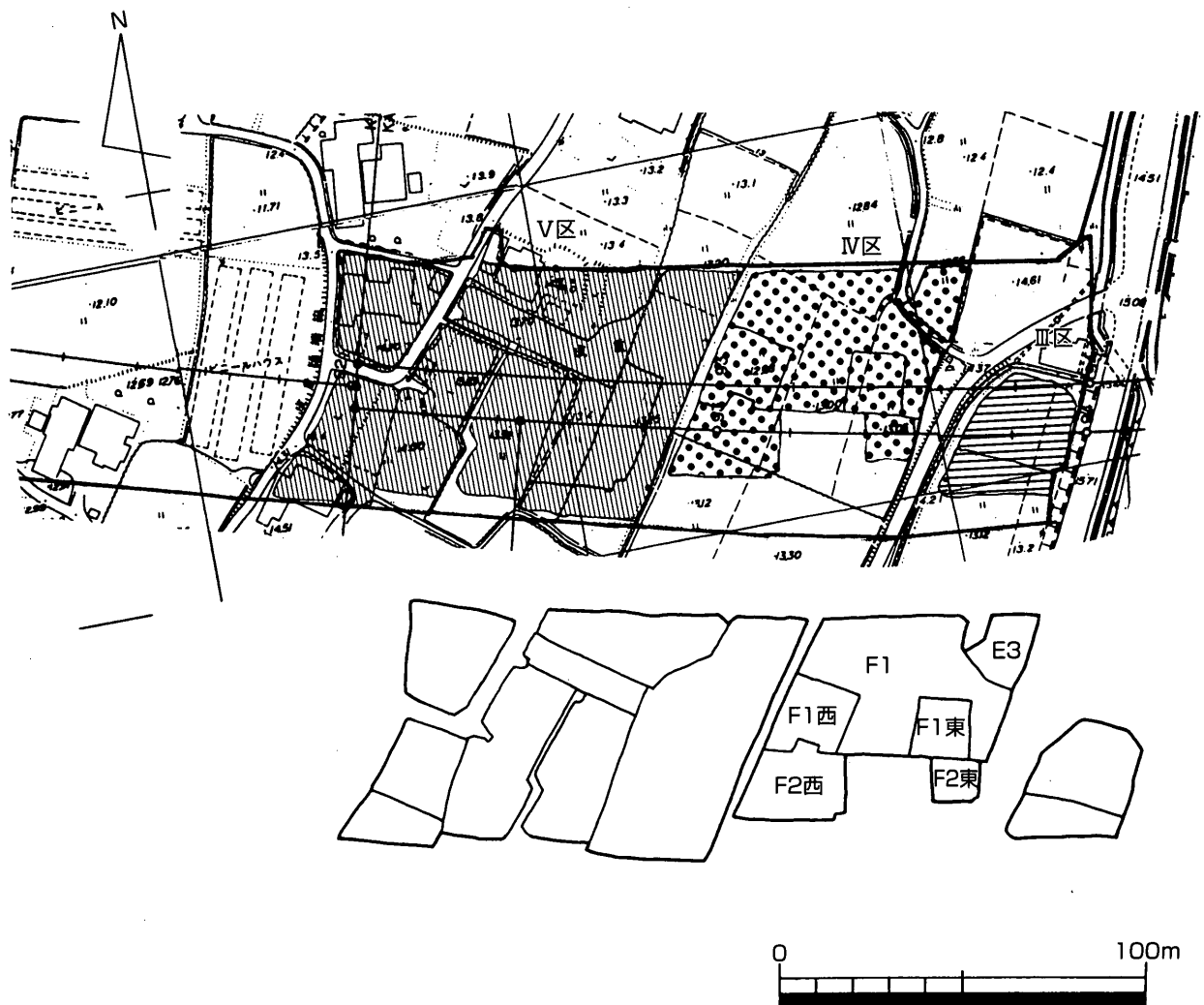
第62図 Ⅲ区第2面包含層出土遺物(7)(旧E2区)(1/2)

第2節 IV区の調査成果

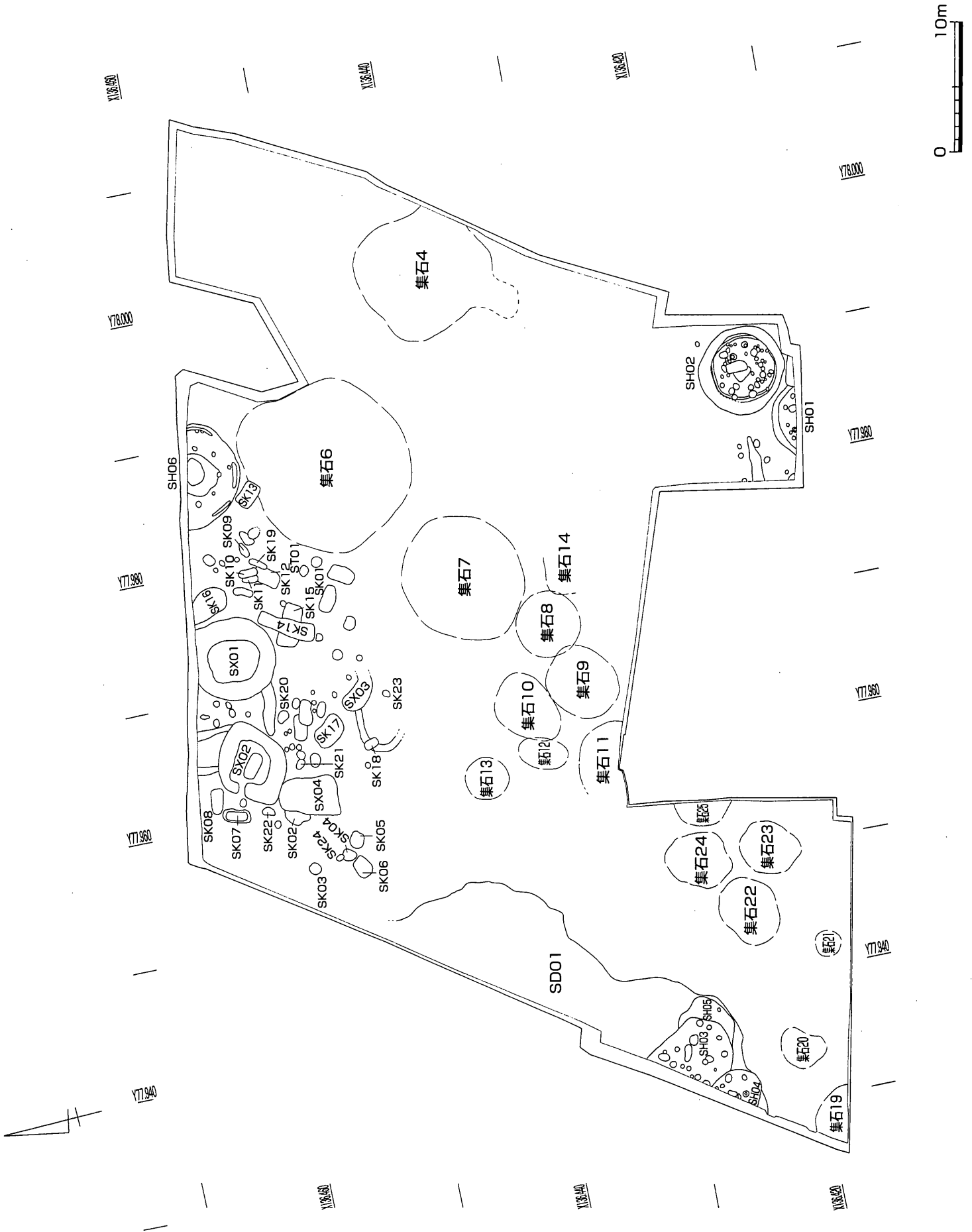
(1) 調査区の概要 (第63~67図)

Ⅲ区の西側の調査区で、間には町道を挟んでいる。調査区の面積は3,150㎡である。本調査区は北側半分(旧F1区)から調査を開始したが、集石遺構が多数検出されたためその保存を図るために、道路の設計変更により盛土工法から橋脚工法に変更となった。従って調査区の南半分(旧F2区)については、橋脚の部分のみの調査となったため、変則的な調査区となっている。

現地表面は東西方向で西側が13.0m前後、東側が12.8m前後と緩やかに東に向かって下っている。南北方向は南側が13.2m前後、北側が12.8~13.0mと緩やかに北に向かって下っている。また現地表面の等高線から見ると、調査区の南西から北東方向に向かって浅い谷状の微地形になっている。



第63図 IV区新旧調査区割図 (1/2000)



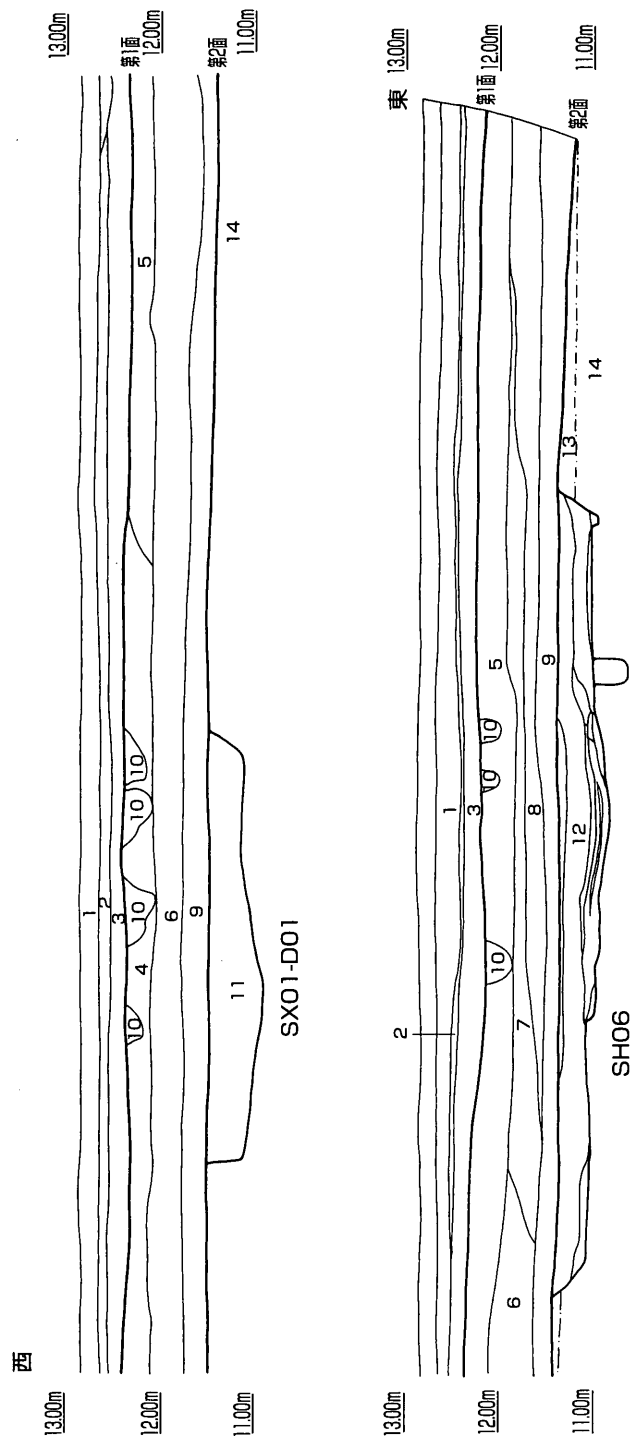
第64図 IV区第2面遺構配置図 (1/400)

北側の旧F 1区では現地表面の耕作土・床土の下部に厚さ20cmほどの0.5～2.0cm大の細礫を含む黒褐色粘土混じり砂礫土が堆積している。この層の直下の褐色～暗褐色砂質土層の上面で古墳時代以降の第1遺構面となる。標高12.2～12.4mで現地表面と同様に西側から東側に向かって緩やかに下る。南側の旧F 2区では耕作土・床土・その下のマンガン沈着層の直下の西側では暗茶褐色砂混じり粘質土層、東側では暗黄褐色粘質土層の上面が第1遺構面となる。標高12.4～12.6mで南側から北側に向かって緩やかに下っている。

北側の旧F 1区では第1遺構面から黄褐色～暗黄褐色系の粘質土を挟んで90cmほど下の褐色粘質土層の上面の標高11.4～11.5mで第2遺構面となる。この面で弥生時代後期の竪穴住居跡や周溝墓が形成されており、東西方向では若干東側が低いほぼ平坦である。そして北東部分ではこの10～20cm下の11.2～11.3mの部分で集石遺構を中心とした(集石6を基準とした)弥生時代中期の遺構が形成されるが、北西部分では中期の遺構面が上がり、標高11.4～11.5mで後期の遺構と同一面で形成される。10～20cmほどの高低差の中で、厳密には弥生時代後期の第2遺構面と中期の第3遺構面が分かれる部分がある。反対に東壁に近い部分では弥生時代中期・後期の遺構面が標高11.6～11.7mまで上がっており、そのままⅢ区に続いてゆく。

これに対して旧F 2区の東側部分では第1遺構面から茶褐色系の粘質土を挟んで60cmほど下の暗黄褐色砂混じり粘質土層の上面の標高11.7～11.8mで遺構面となる。この部分は微高地になり安定した面が形成されており、調査では中期の遺構のみが検出されたが、後期の遺構面と同一面になると考えられる。旧F 2区の西側部分では第1遺構面から暗茶色・茶灰色系の粘質土及び褐色系の砂質土を挟んで60cmほど下の褐色砂混じり粘質土層の上面の標高11.8～12.0mで遺構面となる。ここでも中期の遺構のみが検出されたが、後期の遺構面と同一面になると考えられる。

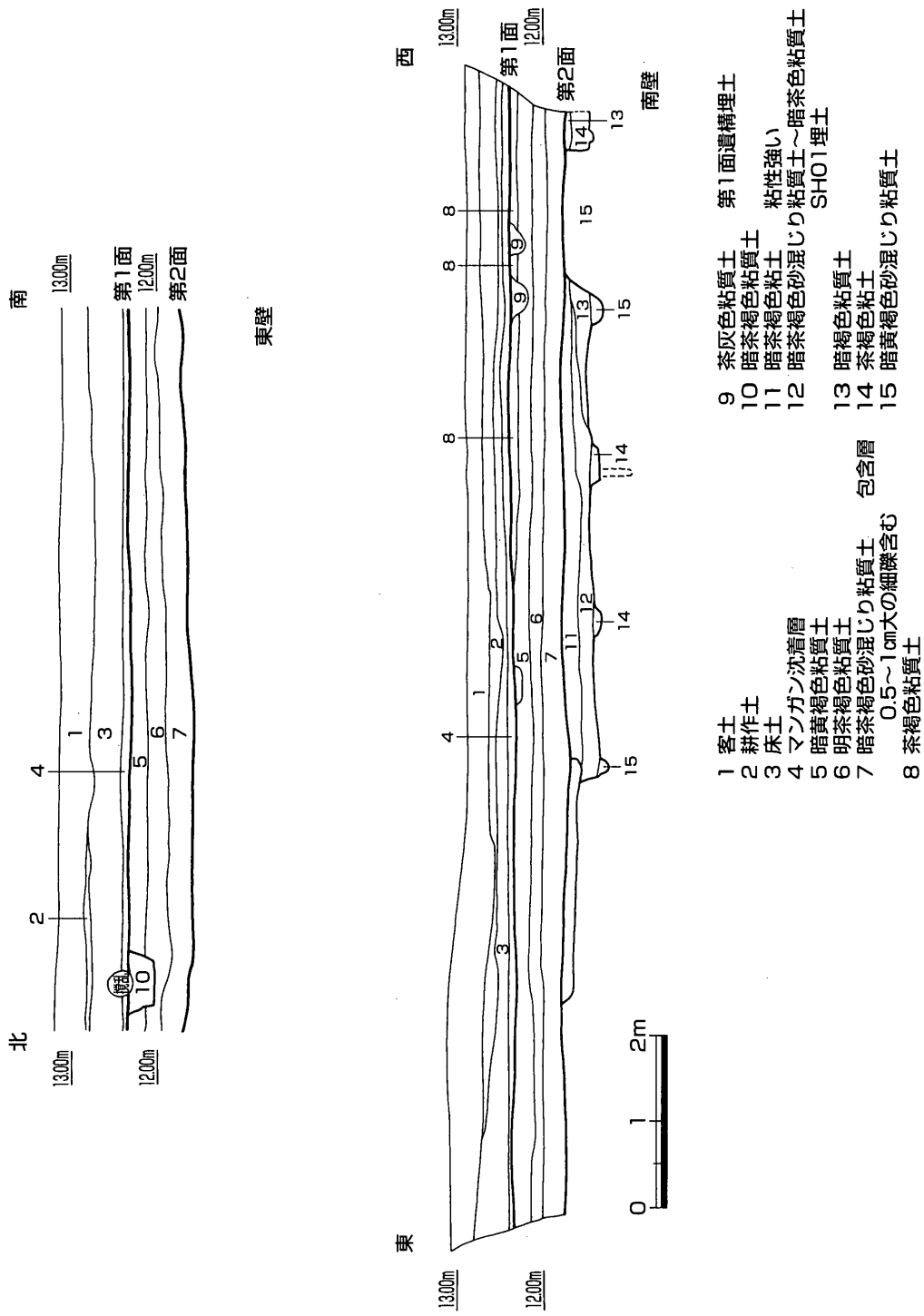
全体で見ると調査区の南側が高く、北側に向かって緩やかに下り、弥生時代中期の遺構面で見ると概ね60cmの比高差がある。東西方向は東側に向かってやや下っているが、調査区東壁付近で上っている。遺物包含層はあまり形成されておらず部分的である。南東部分を中心に遺構面の上部10～20cm程度が認められるが、遺物の出土は少ない。弥生時代の遺構面は南側の部分では高くなることにより同一面に形成されるが、北側部分は10～20cmほどの高低差で中期と後期の遺構面が分離できる部分がある。しかし調査としては土質の識別が困難なこともありやや下げ気味で遺構検出を行ったため、弥生時代の遺構はすべて同一面で検出している。また南側を中心として中期と後期の遺構が同一面で検出される部分もある。従って報告では検出面という意味で第2面という用語を使用する。



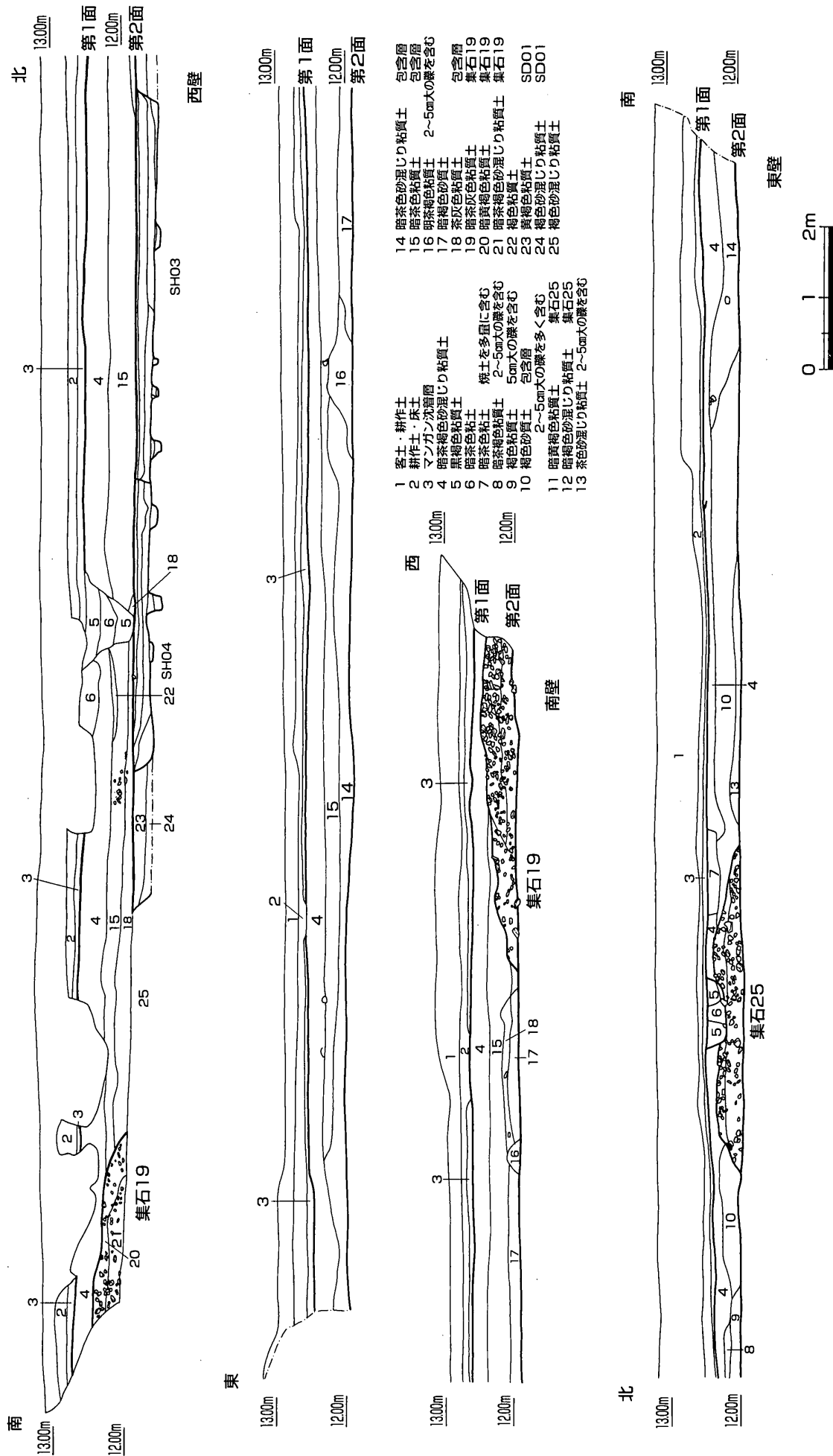
- | | |
|---------------|---------------|
| 1 耕作土 | 8 暗黄褐色粘質土 |
| 2 床土 | 9 暗黄褐色砂混じり粘質土 |
| 3 黒褐色粘土混じり砂質土 | 10 黒褐色粘質土 |
| 0.5~2cm大の細礫含む | 11 褐色~暗褐色粘質土 |
| 4 褐色砂質土 | 12 暗茶灰色粘質土 |
| 5 暗褐色細礫混じり砂質土 | 13 濁褐色粘質土 |
| 6 にぶい黄褐色粘質土 | 14 褐色粘質土 |
| 7 黄褐色粘土 粘性強い | |
| | 包含層 |
| | 第1面遺構埋土 |
| | SX01-D01埋土 |
| | SH06埋土 |



第65図 IV区第2面北壁土層図 (1/80)



第66図 IV区 (旧F2区東橋脚部) 東壁・南壁土層図 (1/80)



第67図 IV区 (旧F2区西橋脚部) 西・南・東壁土層図 (1/80)

(2) 弥生時代の遺構・遺物

SH01 (第68~71図)

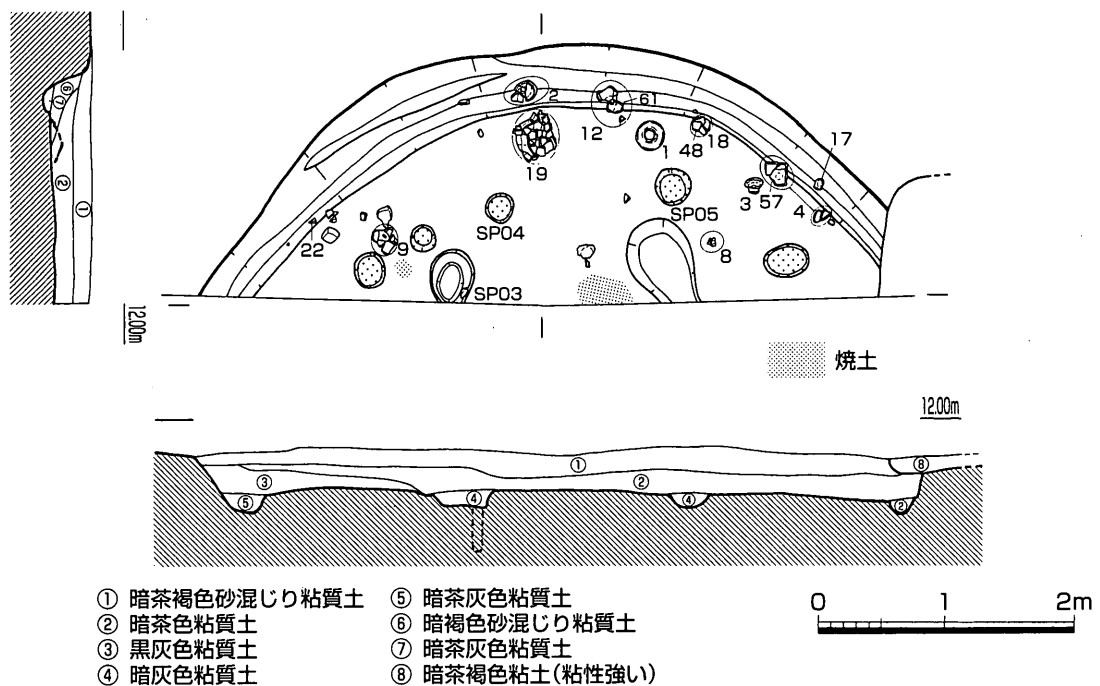
旧F2区東橋脚部の調査区南壁際で検出した竪穴住居である。大部分は調査区外となっているため全体形と規模は不明であるが、直径5.8mほどの円形の竪穴住居と考えられる。東側の部分は僅かではあるが土坑により壊されている。床面の壁際には幅15~20cm、深さ10~15cmの壁溝が巡っている。壁溝から50~60cmほど内側には同一円周上にある柱穴が5基あり、主柱穴と考えられる。土坑は検出してないが、部分的に床面が焼けている。壁は西側部分が緩やかであるが、他の箇所は比較的急勾配である。また検出面から床面までは30cmほどあり、埋土は暗茶~暗褐色系の粘質土が中心である。遺物は床面のやや上から多く出土している。

1~5は壺である。1の口縁部は大きく真横に開き、端部を上方に拡張している。口縁部内面には全体に斜格子文を巡らせており、2個1単位の穿孔が3単位ある。外面はハケ目を施し、内面は指や板でナデている。頸部には刻目突帯を貼り巡らせている。2の口縁部も大きく開き、内面全体に斜格子文を巡らせている。2個1単位の穿孔が3単位ある。頸部は内・外面にハケ目を施すが、内面にはさらにヘラミガキを加えている。体部は最大径が中央にあり上半部の張りは弱い。外面にヘラミガキを施し、内面には一部にハケ目が見られる。3も口縁部内面に斜格子文を巡らせており、2個1単位の穿孔が現存で1単位ある。頸部は外面にヘラミガキを施し、刻目突帯を貼り巡らせている。4は体部のみであるが、最大径は中央にある。外面はハケ目の後に下半部にヘラミガキを施す。

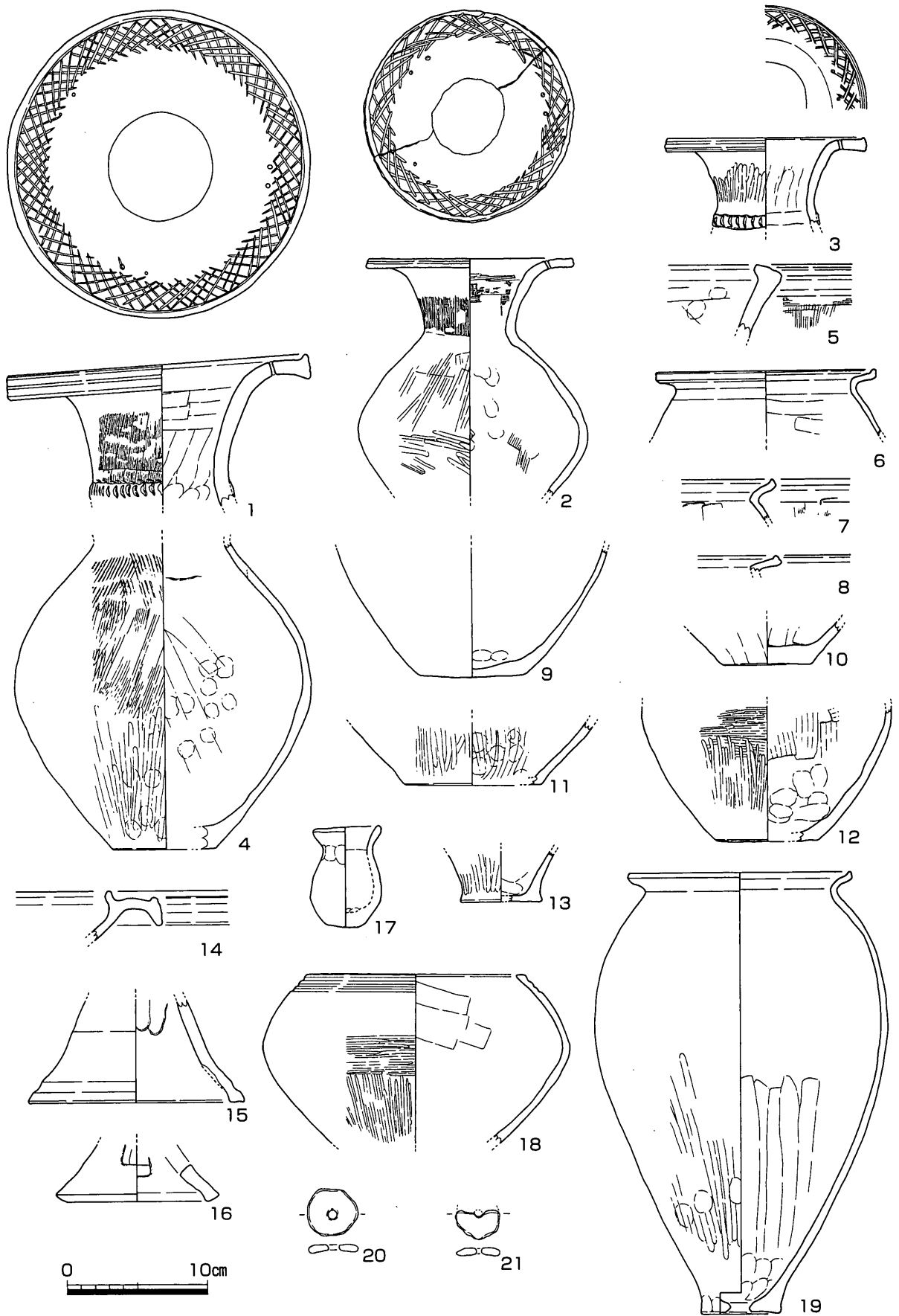
6~8は甕である。いずれも口縁部端部を上方に拡張する。

9~13は壺および甕の底部~体部である。12の外面はヘラミガキを横方向と縦方向に丁寧に施している。

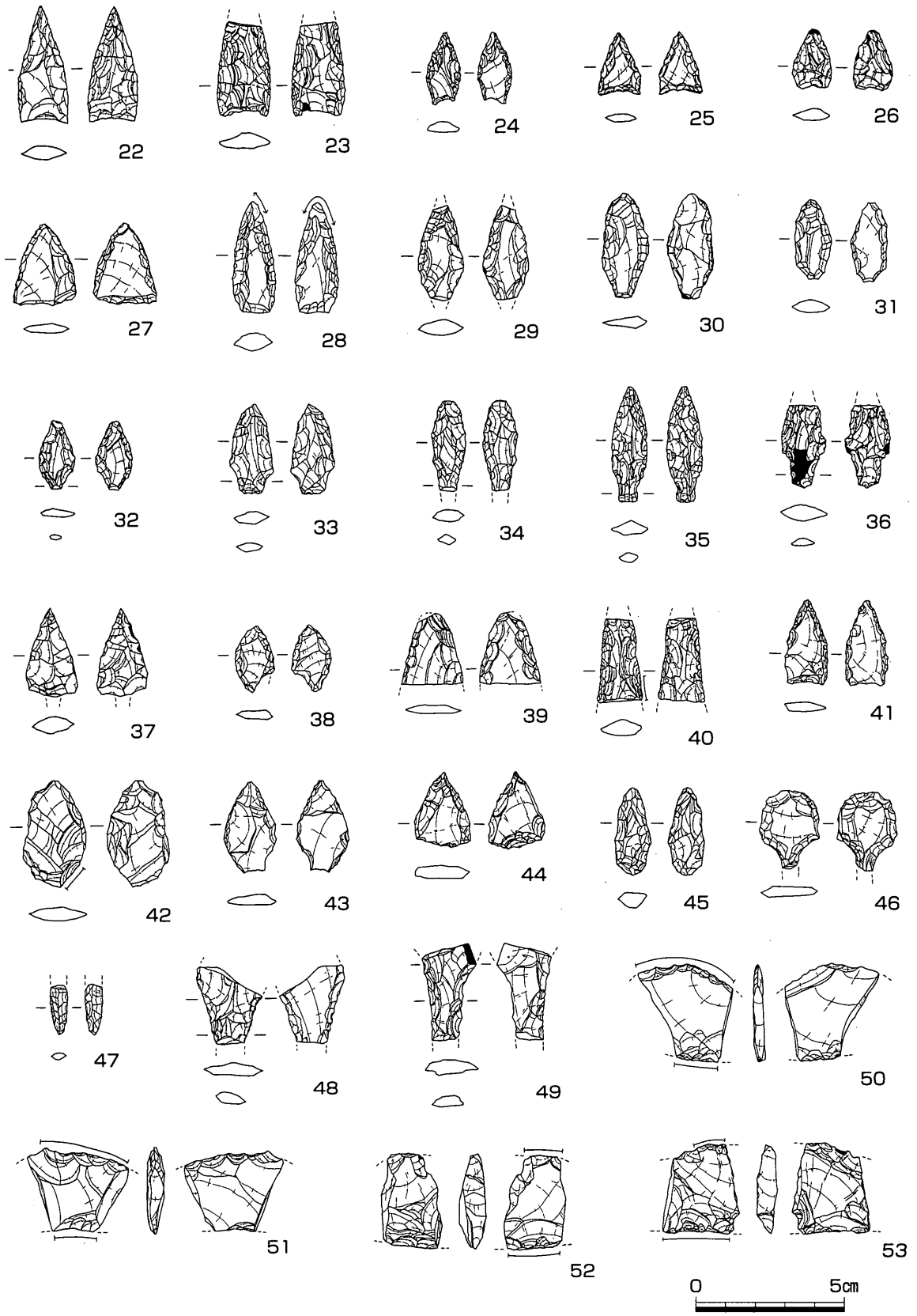
14は高杯の杯部であるが、口縁部は横に湾曲気味に開き端部は上下に拡張している。内面には斜め上



第68図 IV区第2面SH01平・断面図 (1/60)



第69图 IV区第2面SH01出土遺物 (1) (1 / 4)



第70图 IV区第2面SH01出土遗物 (2) (1/2)

方に立ち上がる突帯がある。15・16は台付鉢の台部と考えられるが、16は高杯の脚部かもしれない。16には透し穴の一部が2箇所認められる。

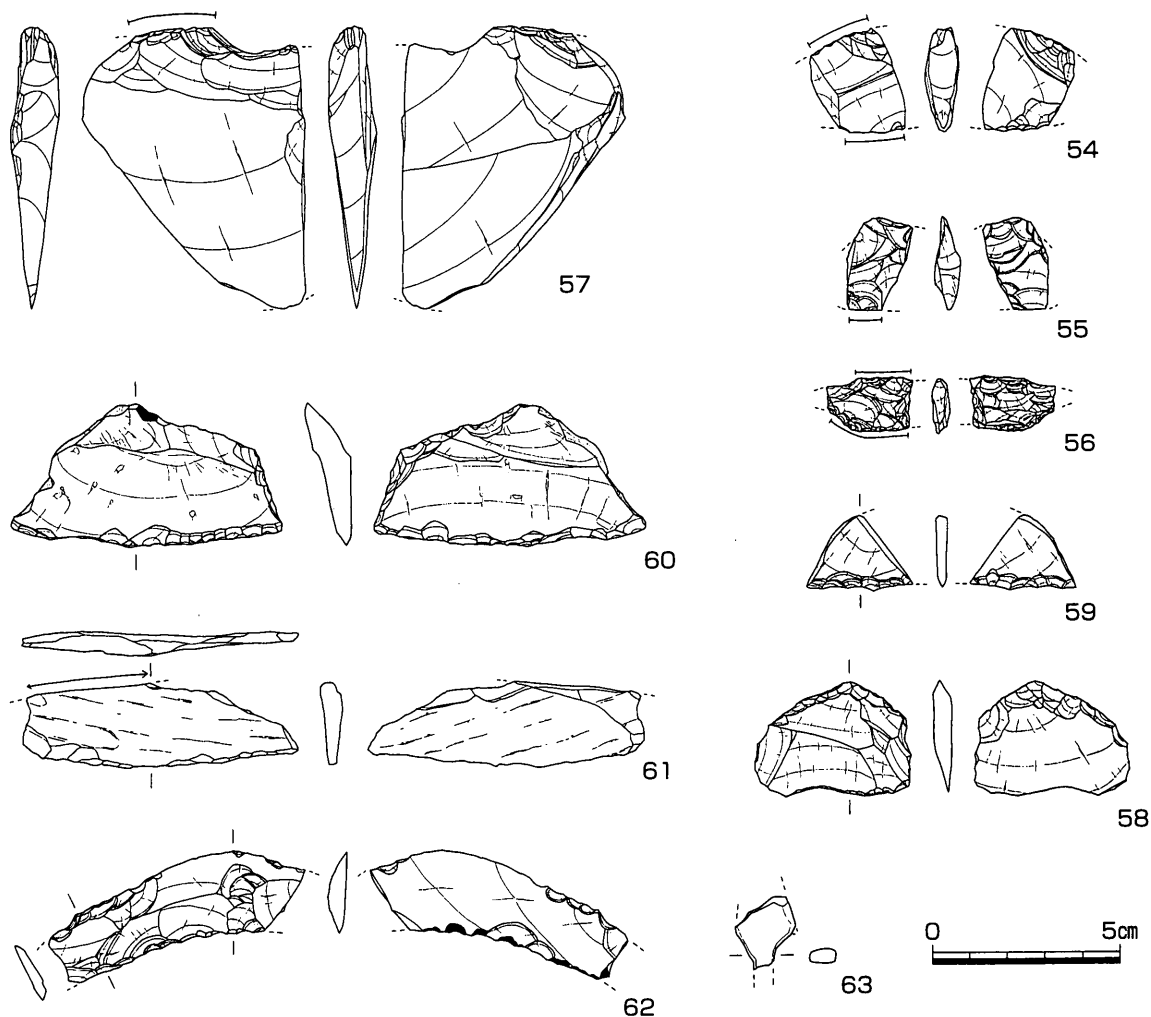
17はミニチュア土器で口縁部立ち上がり部の外面には指押さえを行っている。底部は不安定な平底である。18は無頸壺で口縁部外面に凹線が3条巡る。体部外面は中央部に横方向の、下半部を縦方向のヘラミガキを施している。19は甑で底部に焼成前に穿孔している。体部は細長く最大径は上半にある。外面下半部にはヘラミガキが認められる。20・21は紡錘車である。

22～40は石鏃で、このうち22～26は凹基、27・28は平基、29～32は凸基、33～38は凸基有茎式である。27は素材剥片の縁辺に両面とも押圧剥離を加えただけのもので、基部の調整が雑なことから未製品かもしれない。28の先端部は一部に研磨痕が認められる。石錐に転用したものか。32は有茎式に近い。

41～45は石鏃の未製品である。42は基部の一部に敲打痕があり、楔形石器の打撃分割が進んだものを転用しているようだ。45は調整は進んでいるが、まだ厚みが取れていない。

46～49は石錐である。46はつまみ部が大きく、つまみ部の下端を大きく抉って錐部を作り出している。

50～56は楔形石器である。52・53・55・56は截断面に両極打撃の痕跡が認められる。52・53は両極打撃時の剥離痕が下縁部付近に多く見られる。



第71図 IV区第2面SH01出土遺物 (3) (1/2)

57は大形の剥片で、上部には自然面が残るが敲打痕も認められる。端部は鋭い。58は下部は微細な剥離痕があるものの基本的に剥離時のままである。上部には調整を加えている。スクレイパーかもしれない。

59～61はスクレイパーである。61は結晶片岩製で、背部には研磨されている部分があり、柱状片刃石斧の欠損品を転用したものと考えられる。

62は湾曲した素材の内側と外側に刃部を作り出そうとしており、石小刀の未製品ではないかと考える。

63は鉄鏃の篋被部分の破片で、関は鈍い。

以上の出土遺物から、SH01は弥生時代中期中葉のものである。

SH02（第72～77図）

旧F 2区東橋脚部で、SH01の北東に隣接する竪穴住居である。平面形は円形で、直径6.4～6.9mである。床面に壁溝が2条、中央部に土坑が2基あり、それぞれが前後関係をもつことから、この竪穴住居は建て替えが行われていることが分かり、検出時の平面形と規模は建て替え後のものである。壁面の掘り込みは途中で段になっている箇所が多い。

建て替え後の新しい段階では壁溝は北西部分で一部検出されなかったがほぼ全体に巡り、直径5.4mの円を描く。壁溝は幅15～25cm、深さは10cm弱で埋土は暗灰褐色粘質土である。支柱穴は直径40～50cmの円形で30cm程度の深さをもち、土坑の外側に東西2.5m、南北2.0mの間隔で4基配置されている。埋土は暗灰褐色粘質土である。その外側には直径4.5～4.6mの円周に乗る柱穴が7基あり、壁溝の内側10～30cmの箇所に古い壁溝に重なるようにして配置されている。北側と南東側には空白部分があるが、おそらくここにも柱があったものと考えられる。中央には長辺1.6m、短辺0.8mの長方形の土坑がある。深さは30cmほどで下層には炭化物を含む暗灰色粘土が堆積していた。

これに対し古い段階のものは、直径4.8～5.0mの円を描く壁溝をもつ。壁溝は幅10～20cm、深さは10cm弱で埋土は暗灰褐色粘質土である。柱穴は土坑を中心にして直径3.5mの円周に乗るものが8基ある。このうちの直径40～50cmの大きめな柱穴4基が支柱穴と考えられる。柱痕を確認できたものもあり、それによると直径20cm程度の柱材である。支柱穴の深さは30cm程度であるが、深いもので65cmあった。中央の土坑は新しい段階の土坑により壊されているため全体の形は不明であるが、不整形な長方形になるものと考えられる。検出部分で長辺1.4m、短辺1.0m、深さは30cm程度である。土坑の内側は不規則な段が多く、下層には炭化物を含む暗灰色粘土が堆積していた。

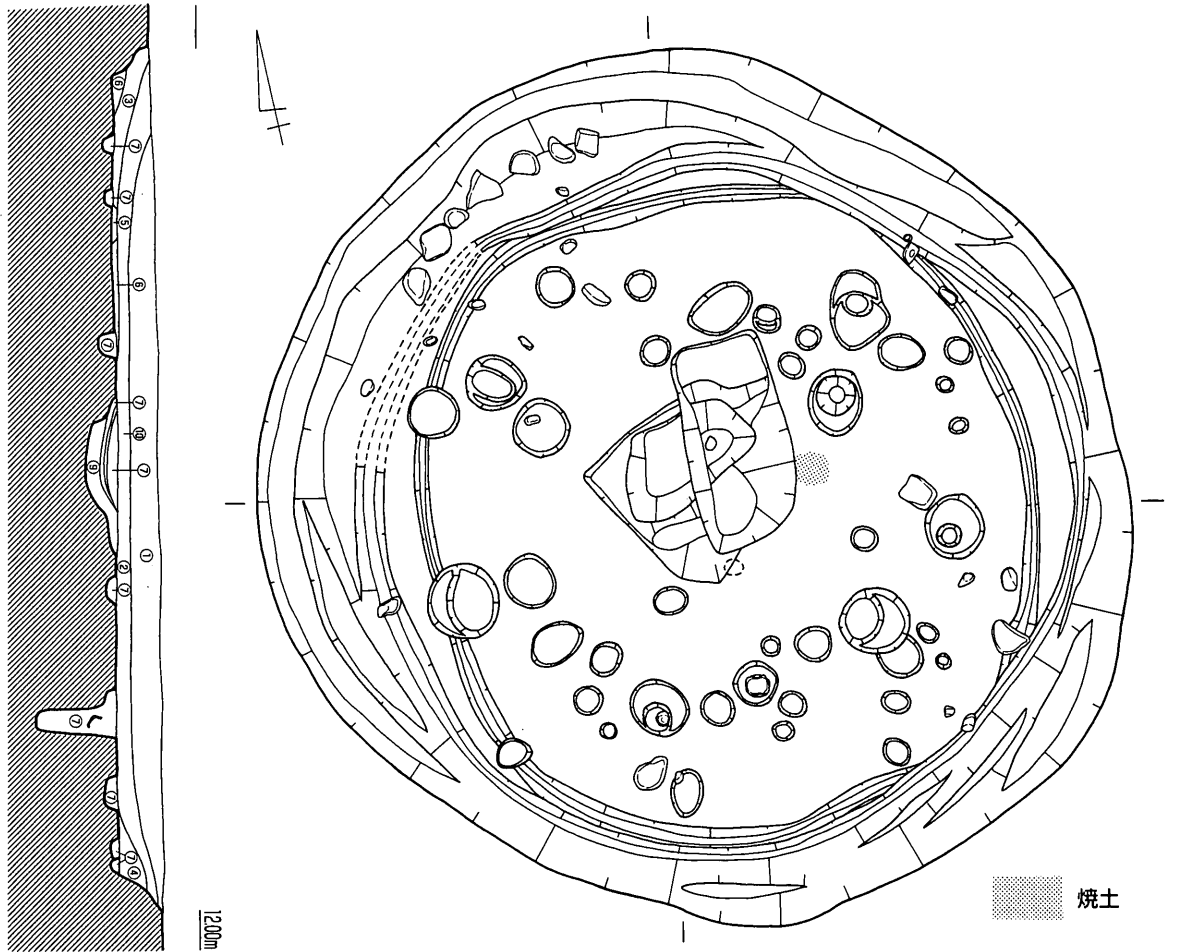
この竪穴住居の北西部分の新しい壁溝と壁面との間に、20～30cmの石が7個並んでいた。これは砥石や台石に適するもので、いずれも使用はされていなかったが、砥石や台石用のストックではなかろうか。

全体の埋土は大きく上下2層に分かれ、上層には暗茶褐色砂混じり粘質土が、下層には暗茶色粘質土が堆積していた。

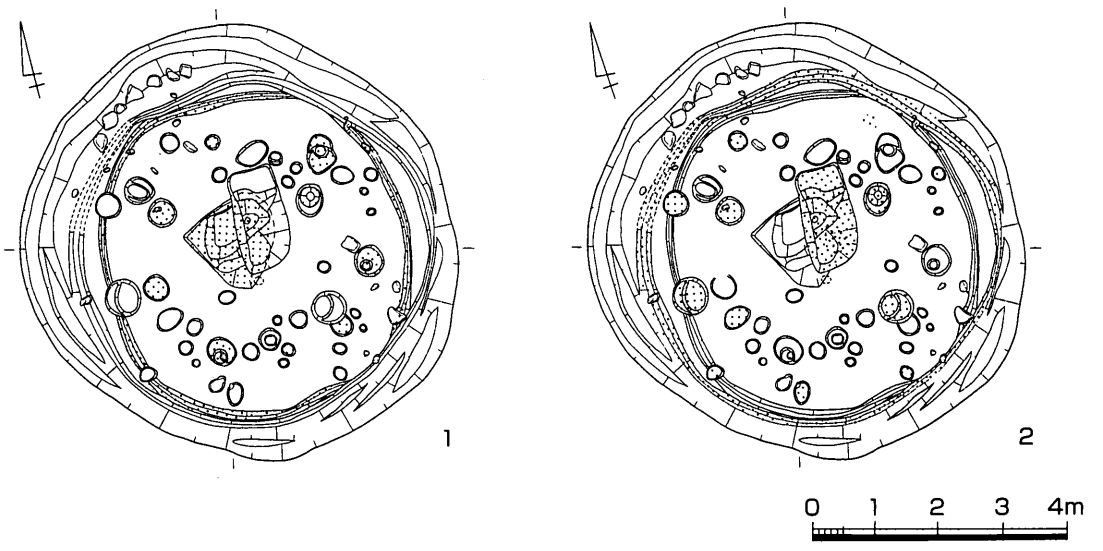
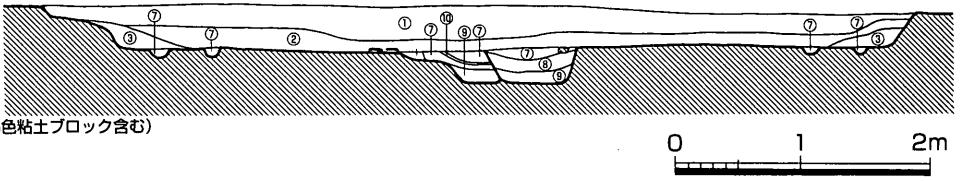
遺物は下層を中心に出土しており、特に土坑の西側部分で多く出土した。しかし住居の規模の割には土器の出土は少なかった。

64は壺の体部の破片である。外面に粗いハケ目の後に櫛描直線文と櫛描波状文を施している。

65～74は甕である。マメツしているもの以外はいずれも体部外面はハケ目を施している。67・70・73は



- ① 暗茶褐色砂混じり粘質土
- ② 暗茶色粘質土
- ③ 暗褐色砂混じり粘質土
- ④ 暗灰褐色粘質土
- ⑤ 暗黄褐色粘土ブロック含む
- ⑥ 暗黄褐色砂混じり粘質土
- ⑦ 灰褐色粘質土
- ⑧ 暗灰褐色粘質土
- ⑨ 暗茶褐色粘質土
- ⑩ 暗灰色粘土(炭化物、黄褐色粘土ブロック含む)
- ⑪ 黄褐色粘質土



第72図 IV区第2面SH02平・断面図 (1/60)、変遷図 (1/120)

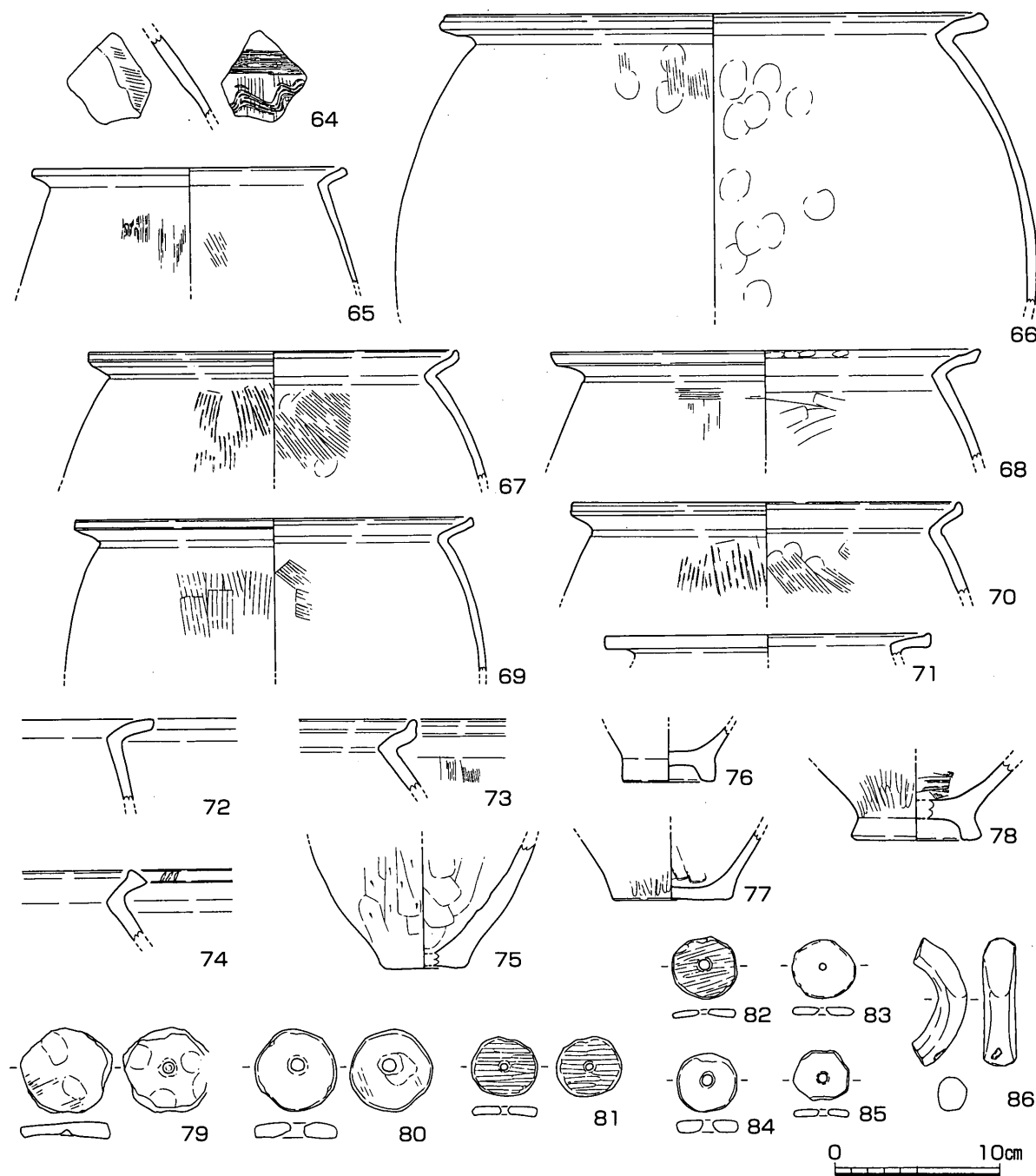
口縁部端部を上方に拡張している。68は口縁部内面に指押さえを行っている。74は口縁部端部外面に刻み目を施している。

75～77は甕の底部と考えられ、76は低い台が付く。

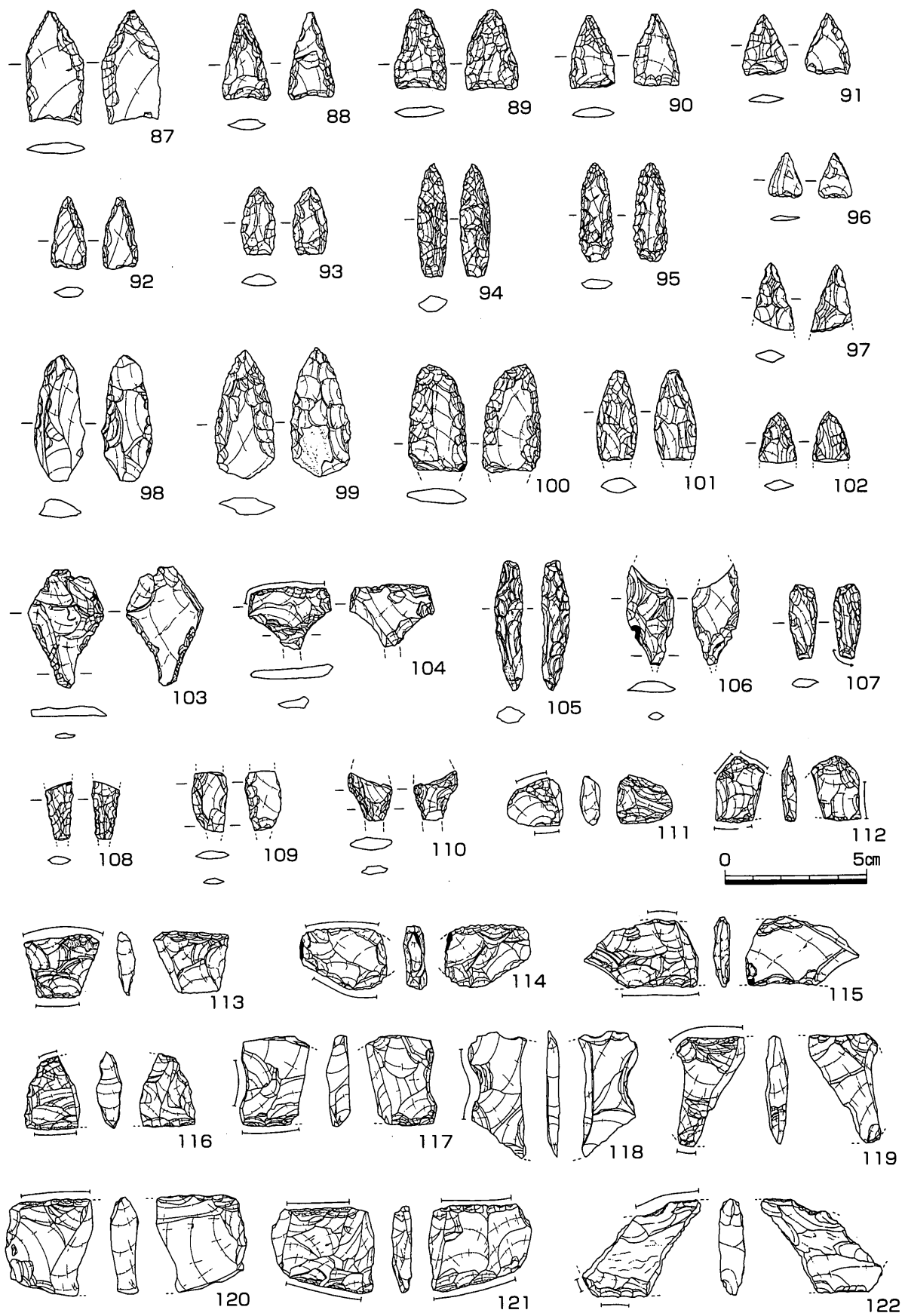
78は体部下半の形状から台付鉢と考えられる。外面にはヘラミガキを、内面にはハケ目を施している。

79～85は紡錘車である。79は穿孔途中の未製品である。ヘラミガキやハケ目があるものも多く、土器片を利用していることが分かる。

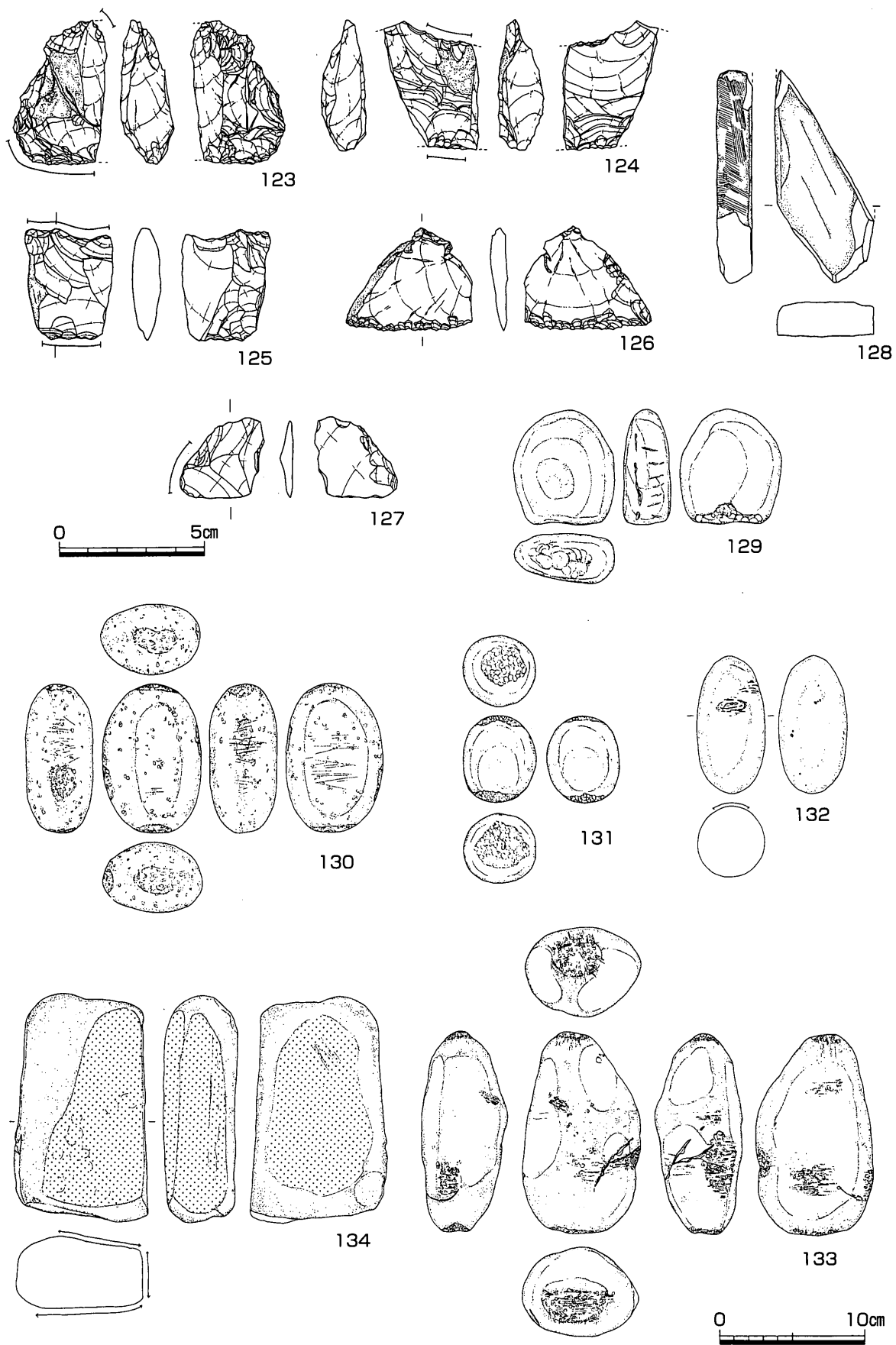
86は水差しの把手部分と考えられる。



第73図 IV区第2面SH02出土遺物 (1) (1 / 4)



第74图 IV区第2面SH02出土遗物(2)(1/2)

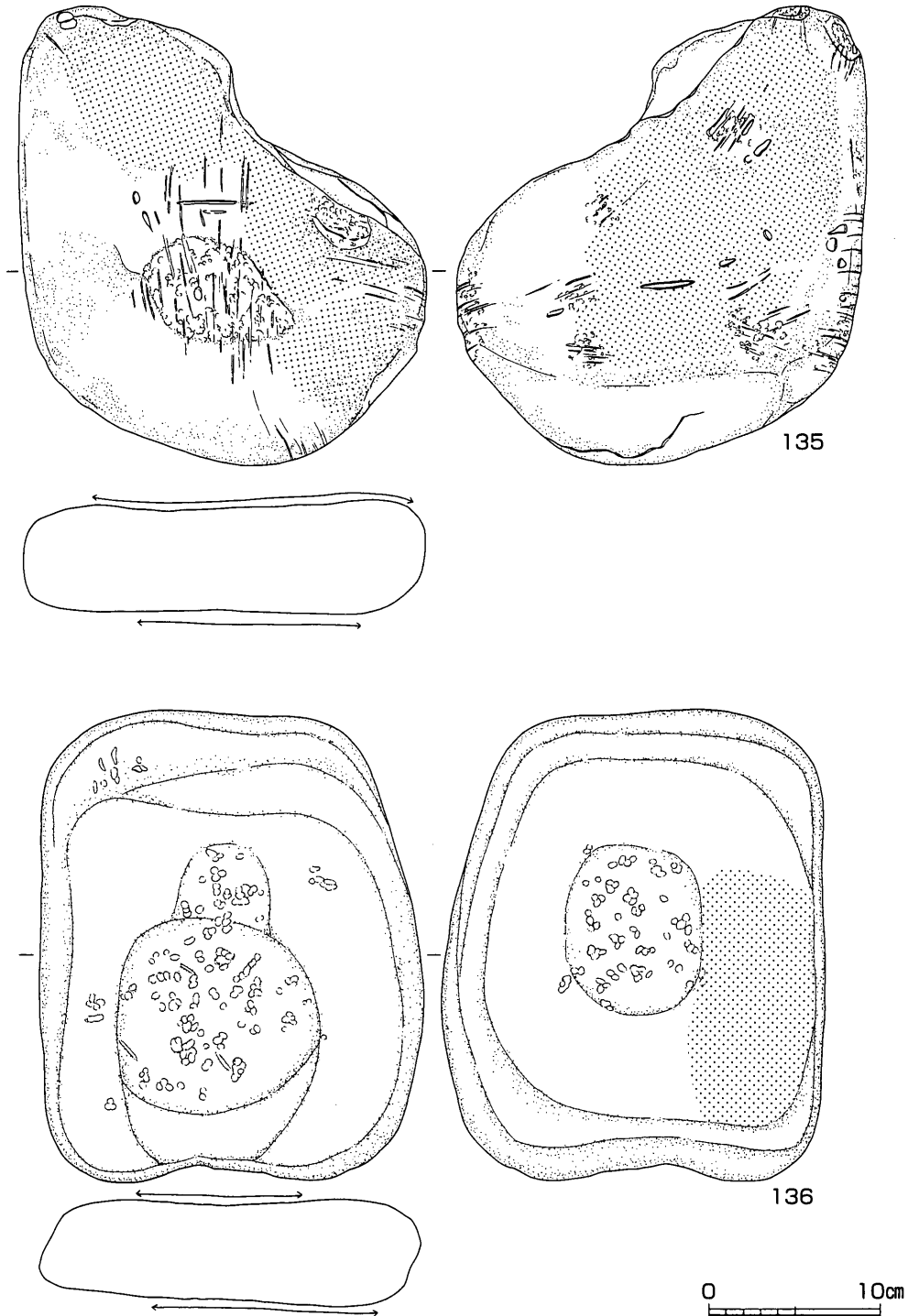


第75图 IV区第2面SH02出土遗物(3)(1/2、1/4)

87～102は石鏃およびその未製品である。88～89は凹基、90～94は平基である。95は不明瞭であるが凸基である。94は石鏃に近いが、先端部の剥離が浅いので石鏃とした。101は側縁部に研磨痕が認められる。87・96・98・99は未製品である。87は側縁と基部の調整が不十分である。99は基部がまだ未調整である。

103～110は石鏃である。使用時に折れたものが多い。104はつまみ部の上に敲打痕がある。

111～125は楔形石器である。111・112・115・117・118・119・122・124は截断面に両極打撃の痕跡が認められる。122は結晶片岩製で上下に敲打痕があることから楔形石器としたが、元々は石庖丁であったと考えられる。



第76図 IV区第2面SH02出土遺物(4)(1/4)

126は石匙に似ているが、加工しておらず自然面であることからスクレイパーと考えるものである。

127は一部に敲打痕と加工痕がある剥片である。

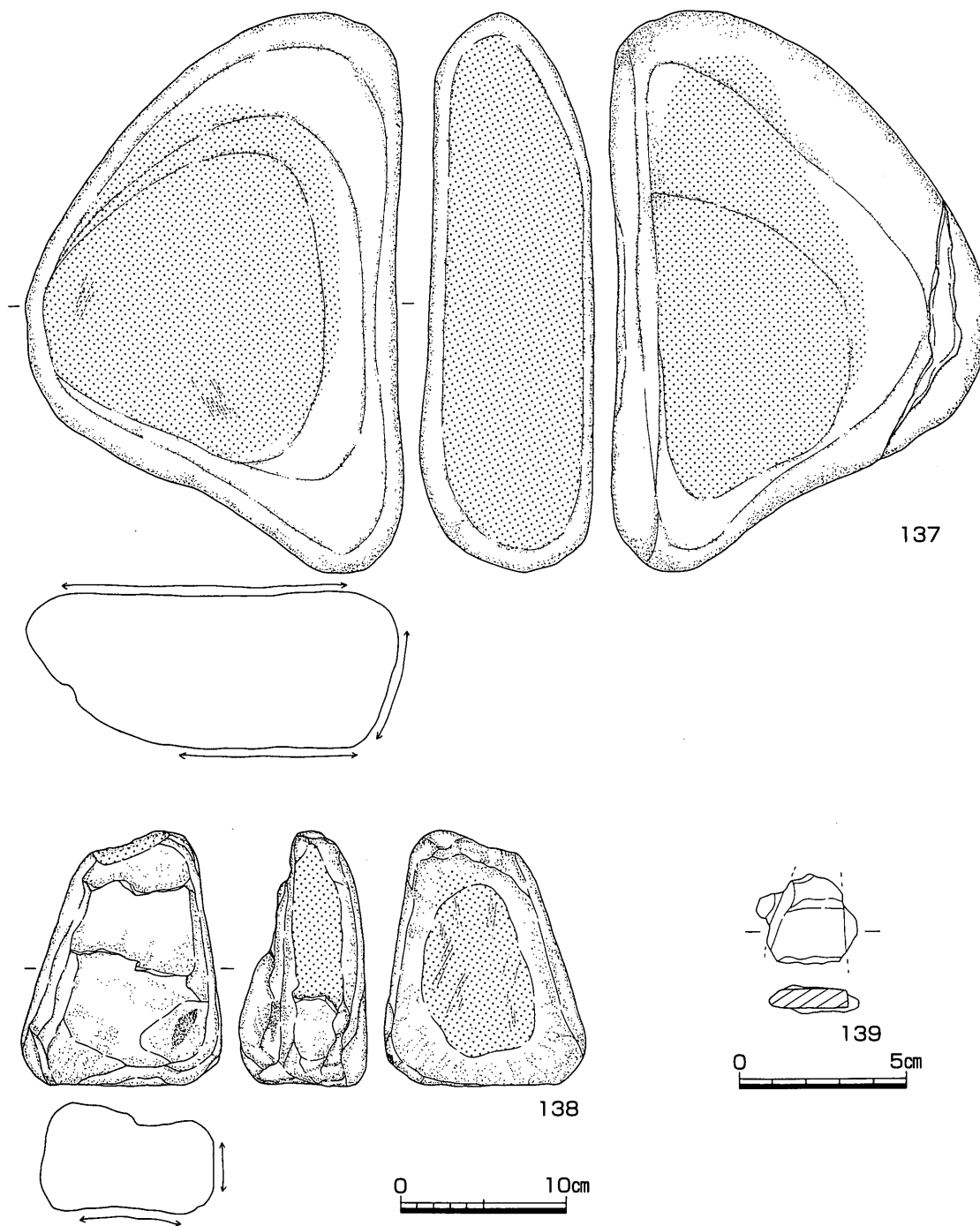
128は結晶片岩製の柱状片刃石斧の破片である。

129～133は敲石である。132は端部の敲打痕は認められない。

134～138は砥石であるが、135・136は台石を兼ねているが、136は台石としての使用のほうが多い。

139は鉄器の破片であるが刀子であろうか。

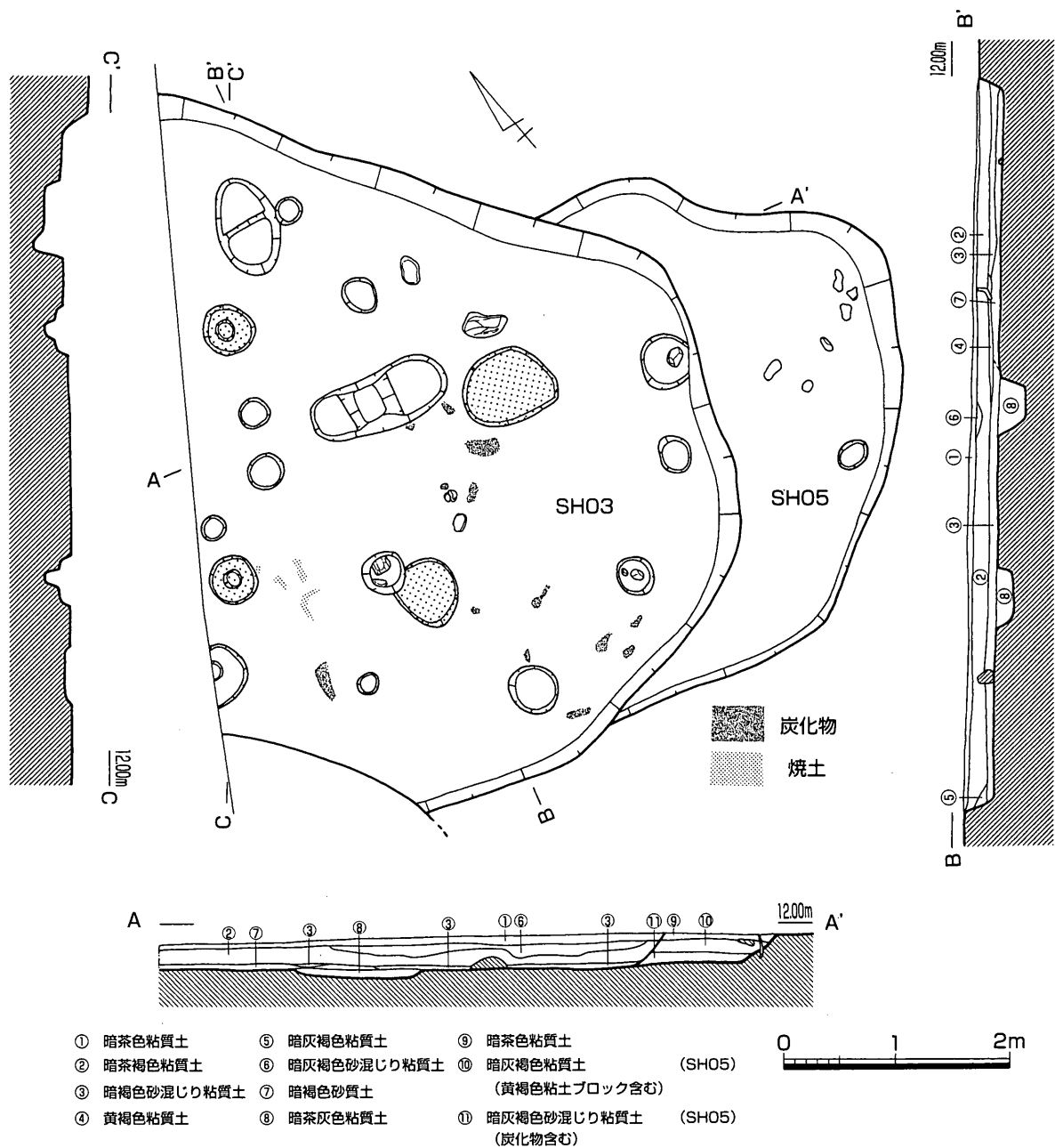
以上の出土遺物から、SH02は弥生時代中期中葉のものである。



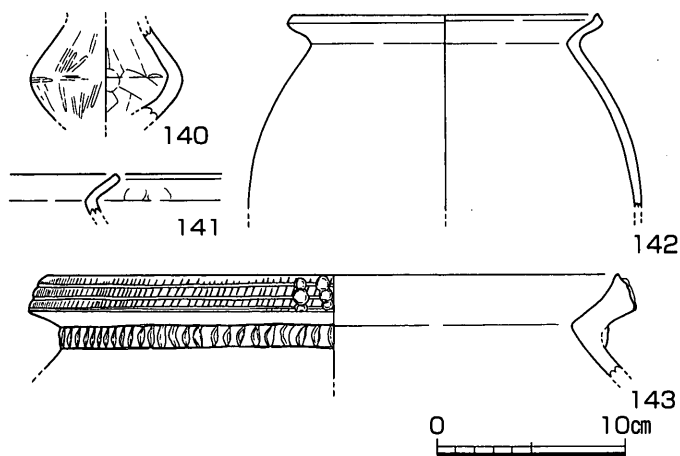
第77図 IV区第2面SH02出土遺物 (5) (1/2、1/4)

SH03 (第78~79図)

旧F 2区西橋脚部の調査区西壁沿いで検出した竪穴住居である。西側は調査区外になり、南西部をSH04により壊されているため、全体の形は不明である。平面形は検出した部分では不整形で円形と方形の中間形態となっている。検出部分での規模は北西-南東方向で5.0m、北東-南西方向で5.1m、検出面から床面までの深さは30cm前後である。床面には壁溝は無く、柱穴と浅い土坑がある。中央部に2.0m間隔で方形に配置された4基の柱穴が主柱穴と考えられる。主柱穴のうち西側の2基は直径45cmの円形であるが、特に北東部の柱穴は直径15cm程度の柱材を据えるには大きすぎる。中央部に浅い皿状の土坑がある。直線的な長楕円形で長径1.3m、短径0.55mで、深さは10cmに満たない。埋土は暗茶灰色粘質土である。床面には焼土と炭化材が見られたが、住居全体が焼失したという感じはしない。



第78図 IV区第2面SH03・05平・断面図 (1/60)



第79図 IV区第2面SH03出土遺物 (1/4)

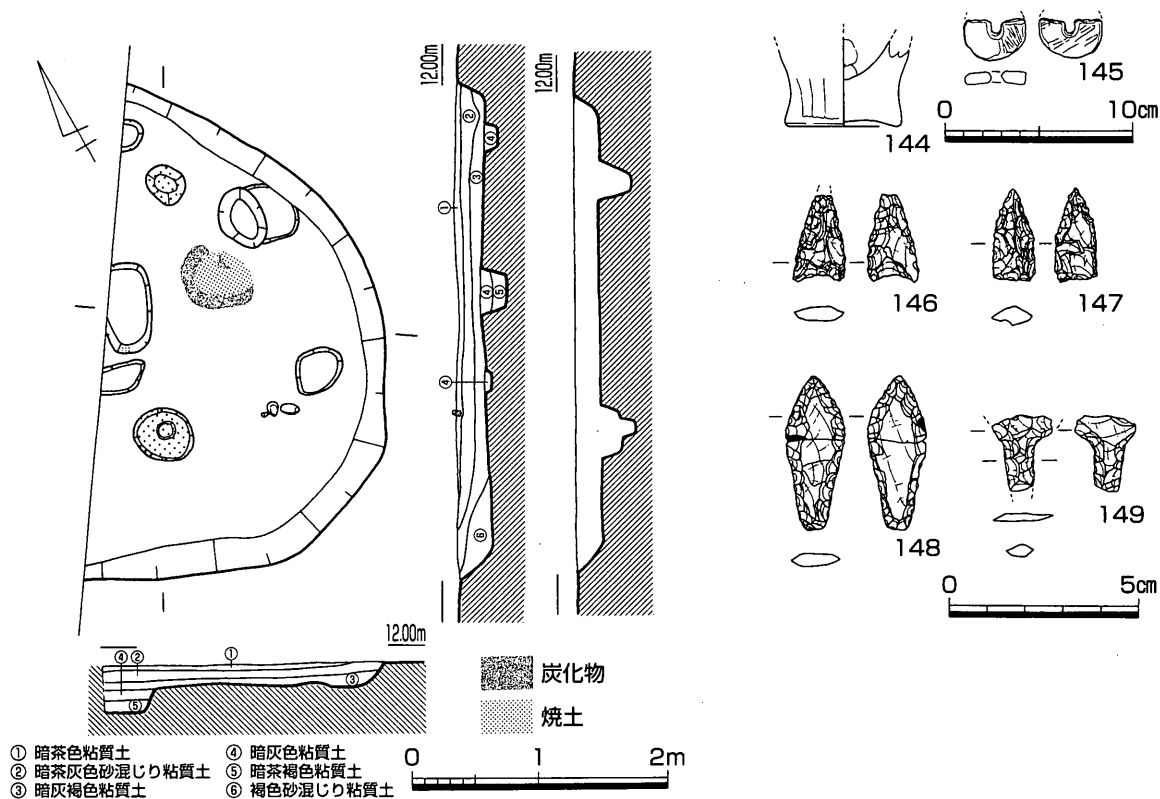
出土した遺物は少ない。140は小形の台付鉢あるいは脚が付いた小形の細頸壺かもしれない。体部は扁平で算盤球のような形で、外面にはヘラミガキを施す。

141~143は甕である。143は頸部に刻目突帯を貼り巡らせている。口縁部端部外面には刻み目を施した後に弱い凹線を引き、最後に6個1単位の円形浮文を貼り付けている。丁寧な装飾を施していることから、壺としていたのかもしれない。

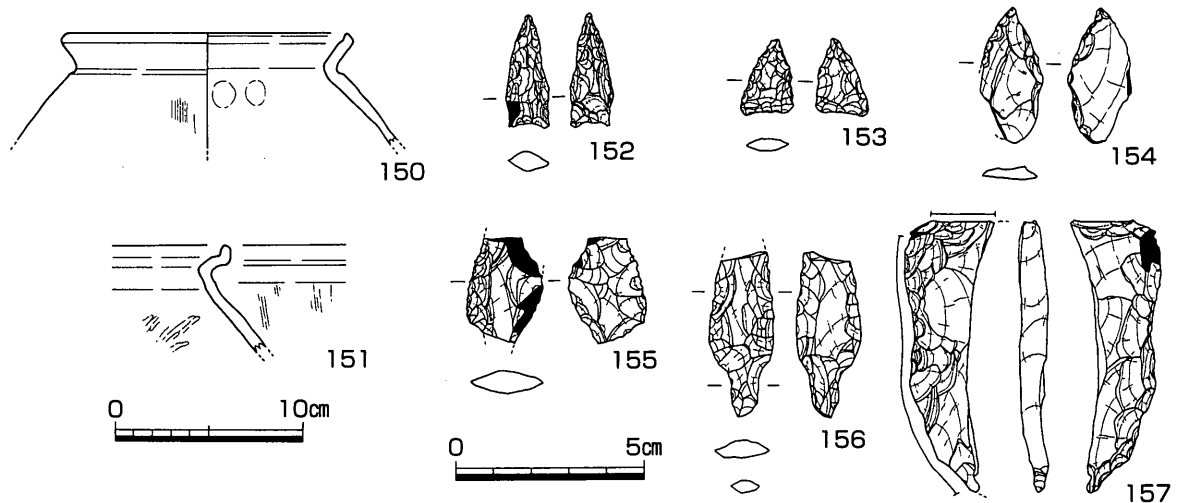
以上が出土遺物であるが、140は最上層で出土しており混入品とすれば、甕から見てSH03は弥生時代中期中葉のものである。

SH04 (第80図)

旧F 2区西橋脚部の調査区西壁沿いで検出した竪穴住居である。西側は調査区外になるため全体形は不明であるが、幾分歪んだ円形になるものと思われる。直径は調査区西壁部分で3.9mとなり、検出面から床面までの深さは20~30cmである。床面には壁溝は無く、柱穴と土坑がある。全体の半分ほどしか検出されていないため主柱穴の配置は正確ではないが、おそらく主柱は4本になろう。主柱穴は直径30~40cmの円形で埋土は暗灰色粘質土である。土坑は長方形で、長辺0.7m、短辺0.4m程度で、深さは



第80図 IV区第2面SH04平・断面図 (1/60)、出土遺物 (1/2、1/4)



第81図 IV区第2面SH05出土遺物 (1/2、1/4)

20cmある。土坑の東側の床面には炭化物が広がっていた。土坑の埋土は暗灰色粘質土と暗茶褐色粘質土である。住居全体の埋土は暗茶～暗灰色系粘質土である。

出土遺物は少ない。144は厚手の底部であるが、壺か甕か不明である。145は紡錘車である。

146～148は石鏃で、146は凹基、147は平基、148は凸基である。148の最大幅は上半部にある。149は石錐である。

出土遺物から時期決定は困難である。SH03～SH05の中では最も新しいが、SH03と住居の構造が似ており、144の遺物からみても弥生時代中期中葉頃ではなかろうか。

SH05 (第78・81図)

旧F 2区西橋脚部の調査区西壁沿いで検出した竪穴住居である。大部分はSH03によって壊されているため全体形は不明である。検出した部分では不整形で円形と方形の中間形態である。南北方向で4.4mあり、検出面から床面までの深さは25cmである。床面には壁溝は巡らず、柱穴も検出部分で1基のみである。住居埋土の最下層は暗灰褐色砂混じり粘質土で炭化物が少し含まれている。また中層の暗灰褐色粘質土層には黄褐色粘土ブロックが含まれており、埋め戻したような感じである。床面の柱穴の少なさからも仮設的な建物であったのかも知れない。

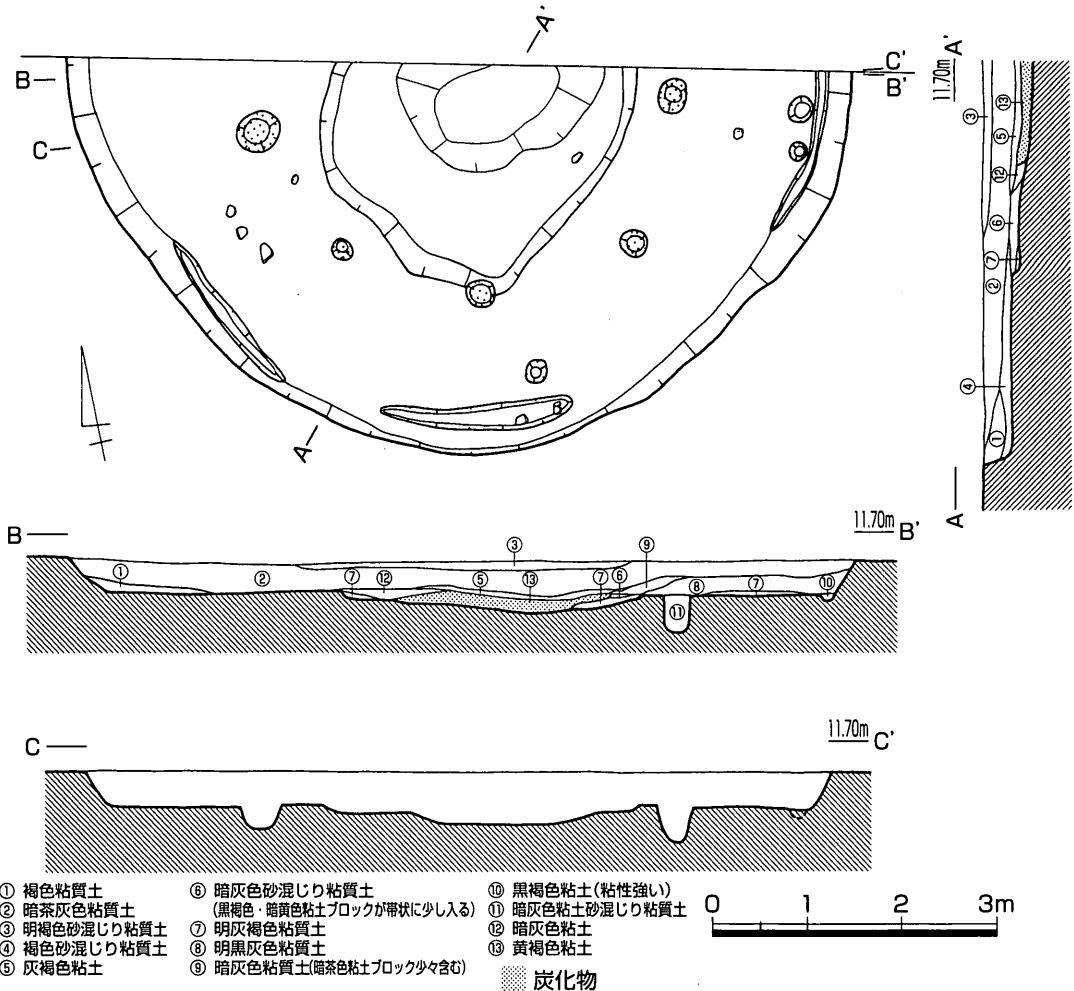
150・151は甕である。151は口縁部端部を上方に拡張している。体部外面にはハケ目を施し、内面はヘラミガキとなっている。

152～156は石鏃およびその未製品である。152は凹基、153は平基、155・156は凸基有茎式である。154は未製品で凸基になると思われる。157は楔形石器で截断面に両極打撃の痕跡が認められ、上部と側縁に敲打痕が認められる。

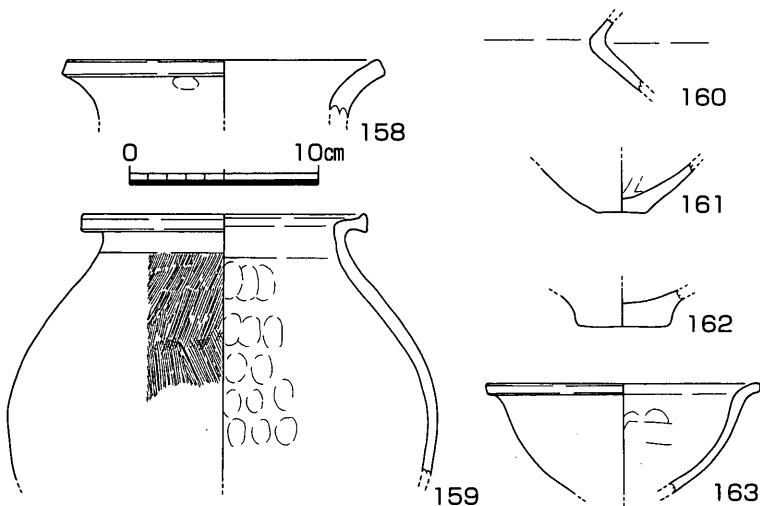
出土遺物からSH05は弥生時代中期中葉のものである。

SH06 (第82～83図)

旧F 1区の北東部の調査区北壁部分で検出した竪穴住居である。円形のものであるが、その半分は北側の調査区外になる。直径8.3m、検出面から床面までの深さは35cmである。床面には壁溝が途切れながらも巡っている。幅10～25cm、深さ10cm前後で、埋土は粘性の強い黒褐色粘土である。中央の土坑



第82図 IV区第2面SH06平・断面図 (1/80)



第83図 IV区第2面SH06出土遺物 (1/4)

の外側に直径4.5mの円周に乗る柱穴が5基あり主柱穴と考えられる。直径20~40cmの円形で30cmほどの深さがあり、埋土は暗灰色粘土混じり砂質土~粘質土である。床面中央には隅丸方形の大きな土坑がある。検出した部分で南北2.3m、東西3.2m、深さ20cmあり、皿状に窪み中央が一段下がっている。一段下がった部分には炭化物が堆積しており、15cmほどの堆積の中で炭化物→黄褐色粘土

→炭化物→黄褐色粘土→炭化物と交互に堆積していた。また一段低くなる部分の傾斜部分には焼土が見られる。物を燃やしては粘土を貼り整えてからまた燃やすという状況である。そして土坑の最上部には灰褐色・暗灰色粘土層があり内部を密封しているようである。住居全体の埋土は暗茶灰色粘質土が中心

になっている。住居床面で中央土坑の占める割合が大きく柱の配置も考えると、居住するには不適な住居である。中央土坑での焼成状況を見ても、日常居住以外の用途をもった住居なのかも知れない。

158は壺である。口縁部は緩やかに開く。

159・160は甕である。159の口縁部は短く真横に開く。体部外面には細かいハケ目が多数施されており、内面は指押さえである。胎土には角閃石を含んでいる。

163は鉢で、口縁部は外反しており、端部は外側に面をもつ。

出土遺物からSH06は弥生時代後期後半のものである。

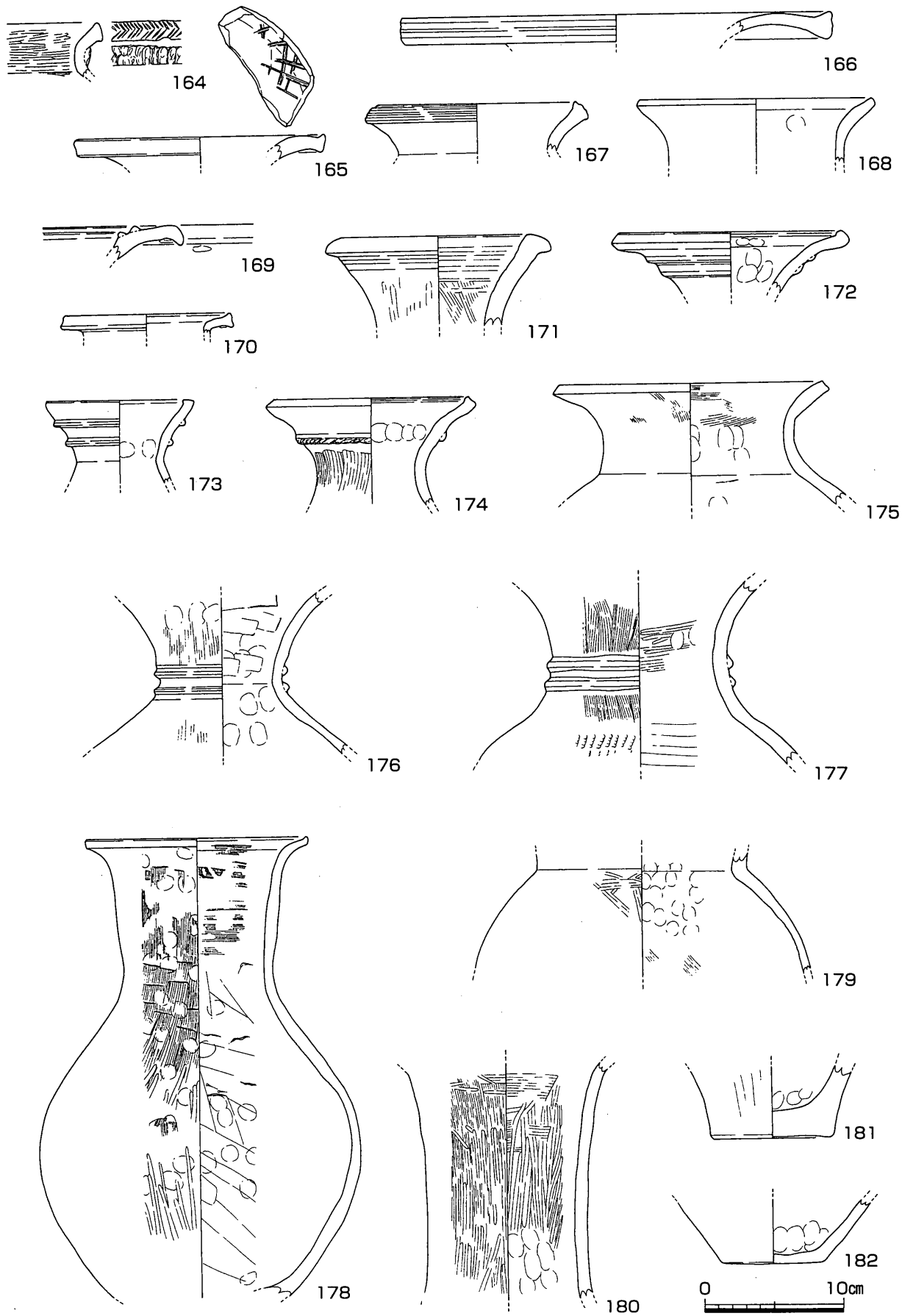
SD01（第84～88・324・325図）

調査区の西端部で検出したもので、調査区境の現有の水路を挟んで西側のV区に続いている。V区南東部の旧G1区の調査区南壁部分から北東方向に流れ、調査区境のベルトが中心にくるようにベルトに沿ってそのまま北東方向に抜けている。IV区ではその北東半分が検出されたことになる。調査区の北側の旧F1区部分では不明瞭になる。IV区で検出された部分で最大幅7.8m、V区部分を併せると幅18mほどになる。トレンチの掘削により下部を確認して遺物の出土する部分までの掘り込みで止めている。その深さは35cmほどである。掘り込み部分はなだらかであり自然流路と考えられるが、調査時のままSDとして報告している。下層には茶褐色粘質土が堆積し、上層は基本的に埋没後の窪み状の部分になる。SH03～SH05の時期、すなわち弥生時代中期中葉には埋没している。出土遺物は破片が多く規模の割には圧倒的に遺物が少なく、また大部分が最上層から出土していることから、これらの遺物は埋没後の窪地部分に入り込んだものと考えられる。弥生時代中期中葉の土器と共に後期の土器も含まれている。弥生時代中期中葉には埋没しているとはいえ、SD01部分の上面には遺構は少ない。このことは調査区の概要でも述べたようにSD01があったように低地部分となるためである。

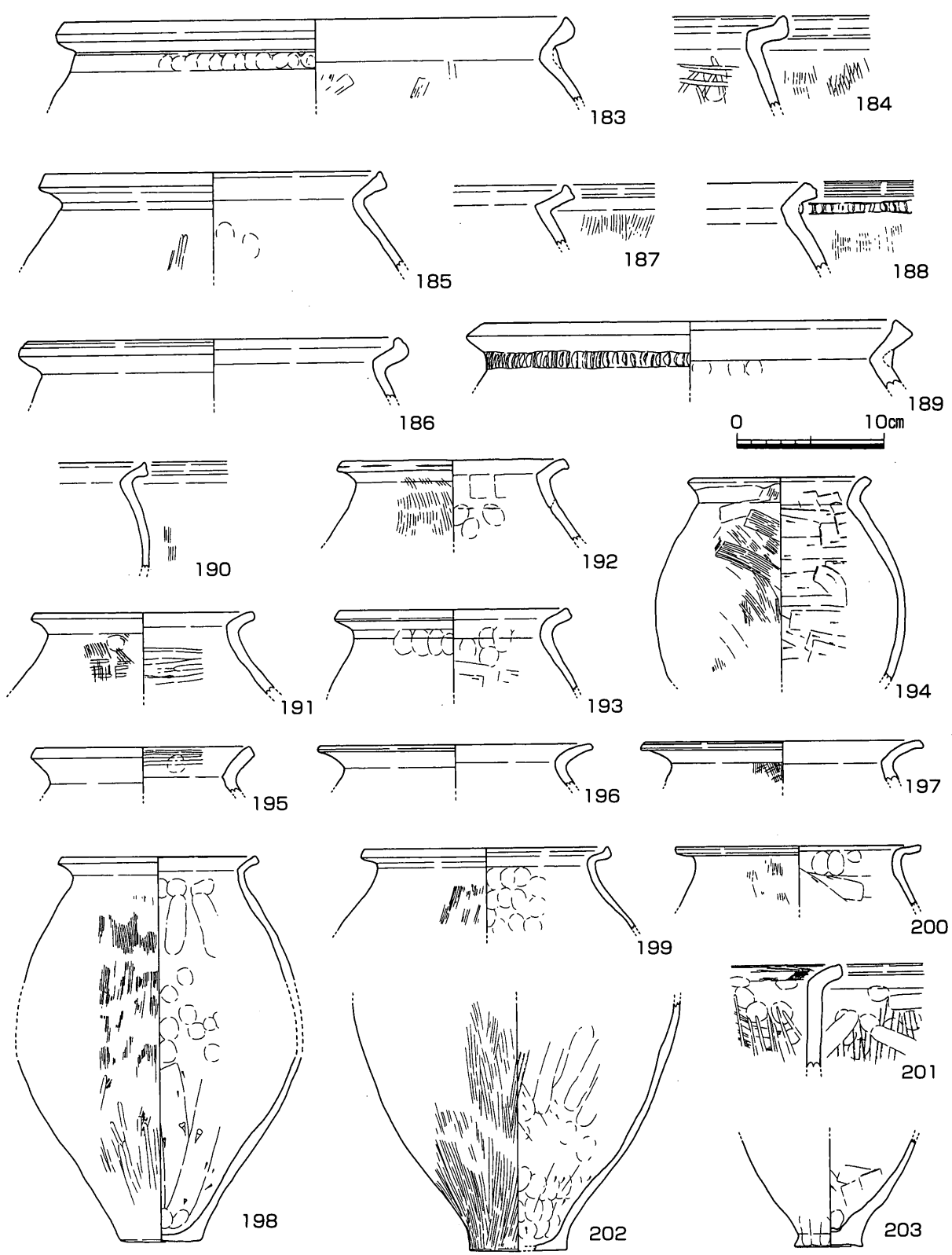
164～180は壺である。164は口縁部端部外面に方向の異なる刻み目を施し、頸部には指頭圧痕を連続的に加えた貼付突帯を巡らせている。内面は丁寧なヘラミガキを施している。165は口縁部内面に斜格子文を施し、169は内面に突帯を2条巡らせている。172～174は頸部から口縁部にかけてそのまま開き、口縁部端部を内側につまみ出している。いずれも外面には突帯を貼り巡らせている。176と177は頸部に突帯を2条貼り巡らせており、177はさらに体部外面に貝殻圧痕文と刺突文を加えている。178の頸部は長く口縁部は緩やかに開く。体部の最大径は中央にあり上半部の張りはない。外面は頸部から体部上半にかけてハケ目を施した後に体部下半にヘラミガキを加える。180は長頸壺の頸部である。

183～203は甕である。183～189の口縁部は厚手で鋭く屈曲しており、183・188・189は口縁部屈曲部に指頭圧痕を連続的に加えた貼付突帯を巡らせている。191・192の体部上半部は直線的である。191は外面にタタキの後に粗いハケ目を施し、内面には幅広のヘラミガキを施している。194の口縁部は端部付近で外反する。体部内面には全体にヘラケズリを施している。195の口縁部内面には粗いハケ目を施している。198の体部最大径は中央にあり外面はハケ目の後に下半部にヘラミガキを加える。内面下半部はヘラケズリである。199・202は胎土に角閃石を含む。200の口縁部は真横に開く。201は直線的な体部から口縁部は短く屈曲する。外面は粗いハケ目の後に指でナデている。内面はハケ目の後にヘラミガキを加えている。壺の頸部の可能性もある。

206～211は鉢である。206・207の口縁部は外反気味に開く。208～211は内湾し口縁部端部を内側に拡張し、外面には凹線が巡る。210以外は刻み目と棒状浮文をもつ。209は口縁部端部上面に凹線を巡らせ



第84图 IV区第2面SD01出土遺物 (1) (1 / 4)



第85图 IV区第2面SD01出土遗物 (2) (1/4)

る。212は台付鉢で円盤充填の剥離痕がある。

216は水差し、あるいは鉢の把手である。217は蓋。

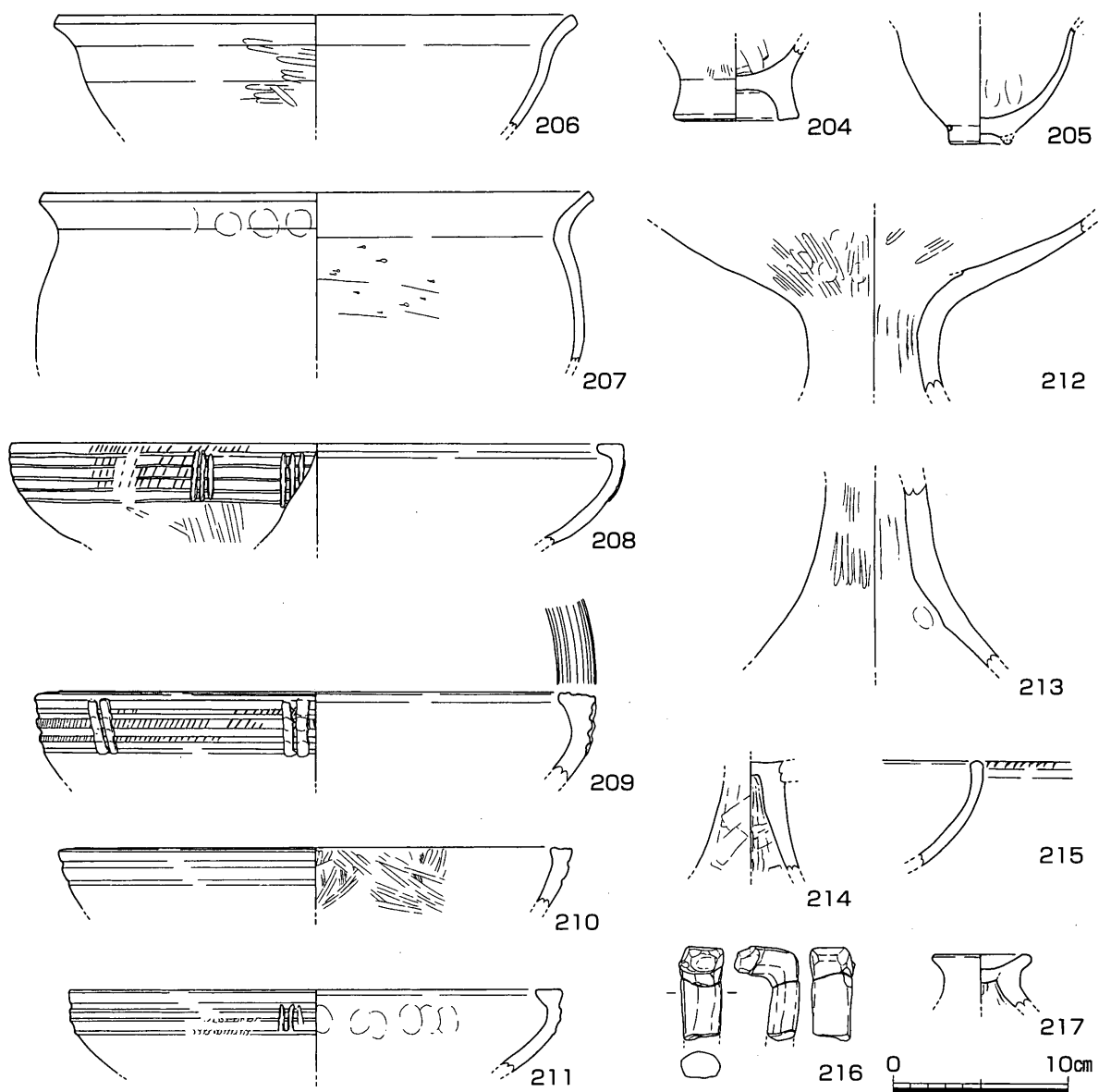
218～228は石鏝で、このうち218～222は凹基、223・224は平基、225・226は凸基である。226は基部に研磨痕がある。229は石鏝未製品で、基部に薄い突起状の部分が残っている。いずれ除去するものであろう。

230は石錐で端部は非常に鋭利である。

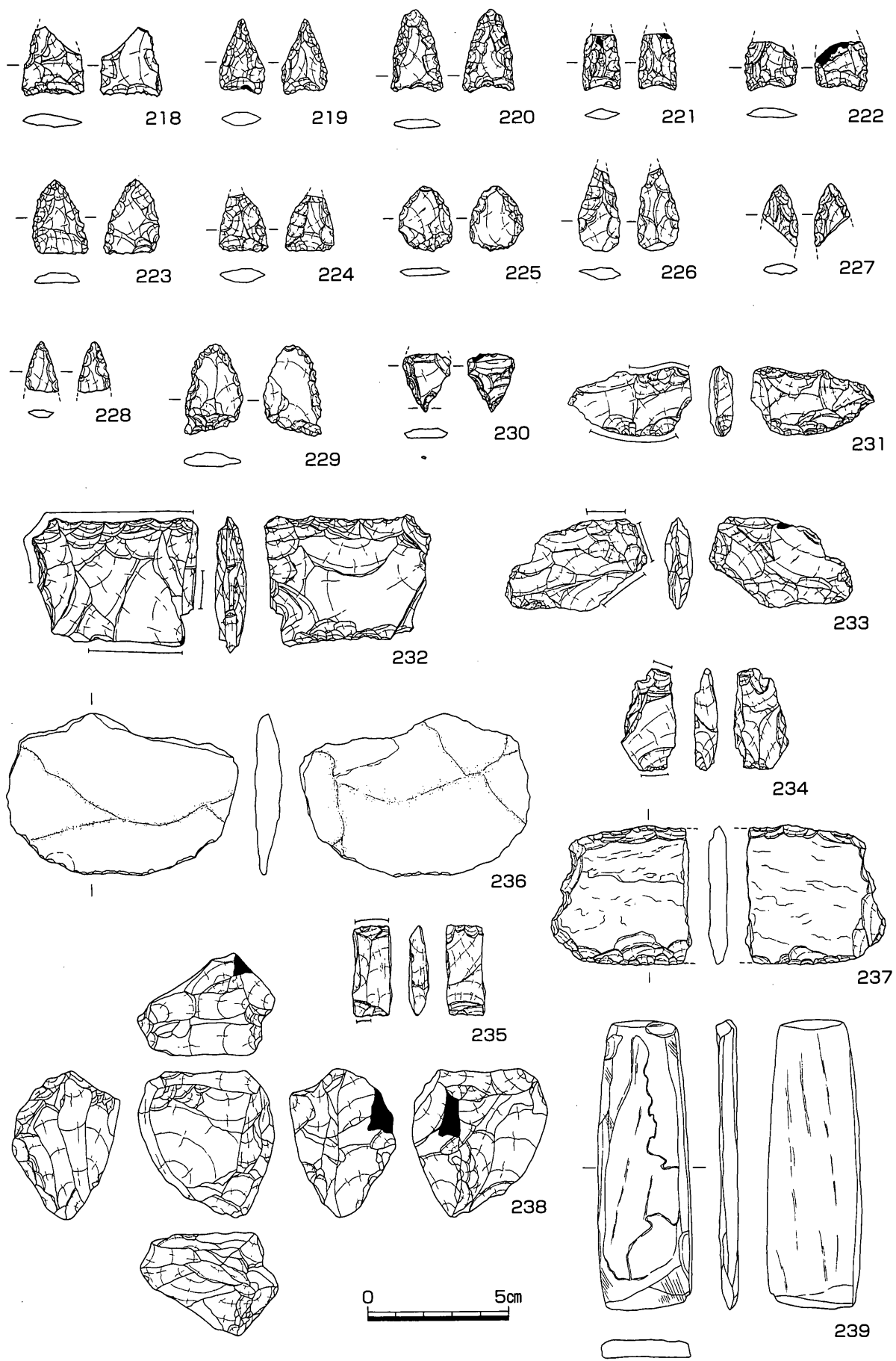
231～235は楔形石器で、233以外は截断面に両極打撃の痕跡が認められる。232は凹凸の激しい截断面の一部に敲打を行っている。

236は剥片の鋭利な部分に微細な調整を加えている。砂岩製である。237は結晶片岩製の打製石庖丁で、側縁に僅かながら抉りがある。

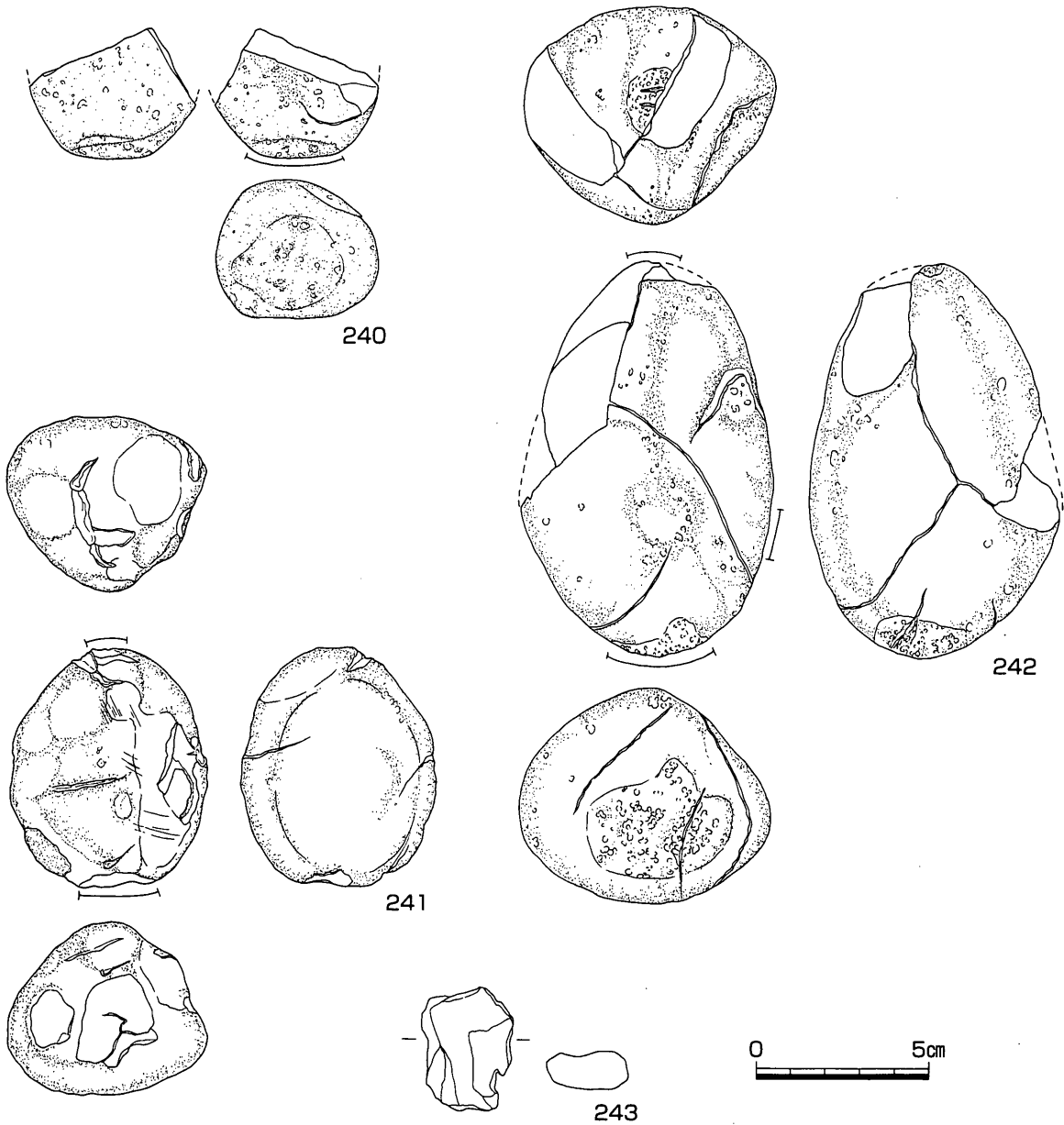
238は石核で打面を転移させながら剥片を剥離している。剥片の剥離痕の稜線部分に敲打痕が多数見られる。



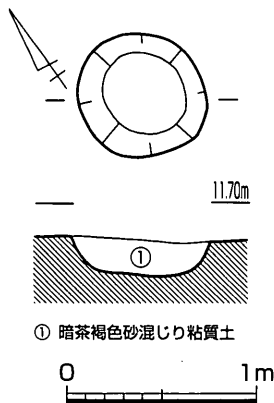
第86図 IV区第2面SD01出土遺物 (3) (1 / 4)



第87图 IV区第2面SD01出土遺物 (4) (1/2)



第88図 IV区第2面SD01出土遺物 (5) (1/2)



第89図 IV区第2面SK01平・断面図 (1/40)

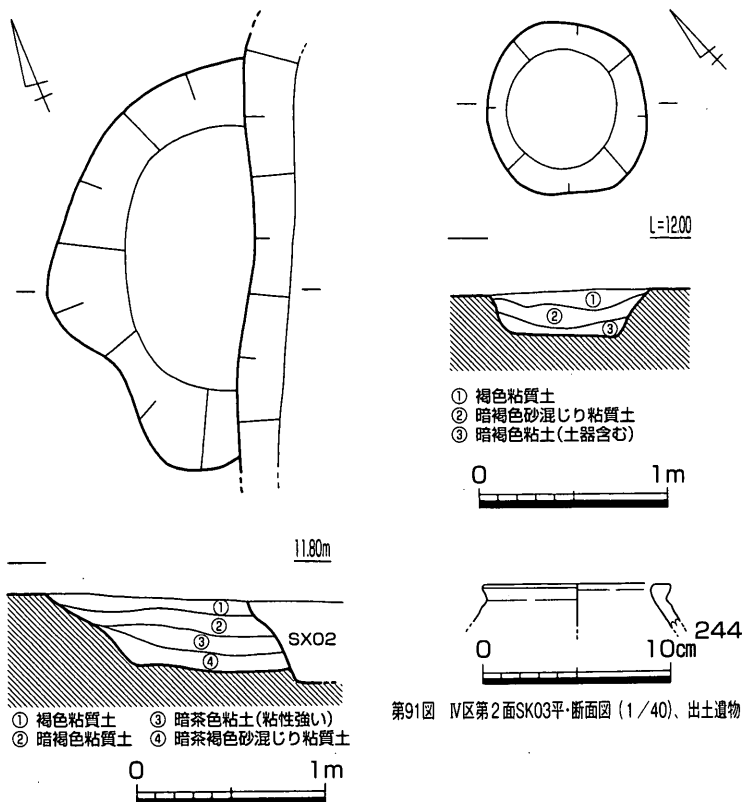
239は結晶片岩製の磨製の扁平石斧で刃部は両刃である。刃部は使用のため片側に偏って磨り減っている。

240~242は敲石である。241は磨石としても使用している。242の表面は部分的に赤変している。

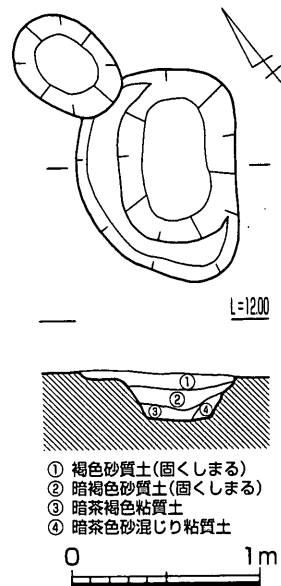
243は鉄器の一部であるが器種は不明である。厚手である。

SK01 (第89図)

旧F1区の東部で検出した土坑である。平面形は円形で、直径0.7m、深さ20cmである。埋土は暗茶褐色砂混じり粘質土の単一層である。遺物は出土していない。



第90図 IV区第2面SK02平・断面図(1/40)



第92図 IV区第2面SK04平・断面図(1/40)

第91図 IV区第2面SK03平・断面図(1/40)、出土遺物(1/4)

SK02 (第90図)

旧F 1区の西部で検出した土坑である。東側をSX04によって壊されており全体形は不明であるが、楕円形に近いものと思われる。検出部分で長径2.1m、短径1.1m、深さ40cmである。掘り込みの傾斜は緩い。埋土は暗茶～暗褐色系の粘質土が中心であるが、底部付近では粘性の強い暗茶色粘土が堆積している。微細な遺物が少量出土したのみである。

SK03 (第91図)

旧F 1区の西部で検出した土坑である。平面形は円形で、直径0.85m、深さ24cmである。埋土は暗褐色系の粘質土が中心であるが、最下層の暗褐色粘土層から遺物が出土している。

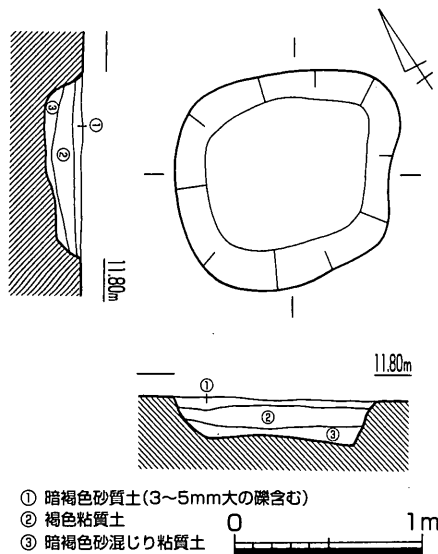
244は無頸壺である。内傾する体部から屈曲してそのまま口縁部に至り、端部は上方に面をもっている。

SK04 (第92図)

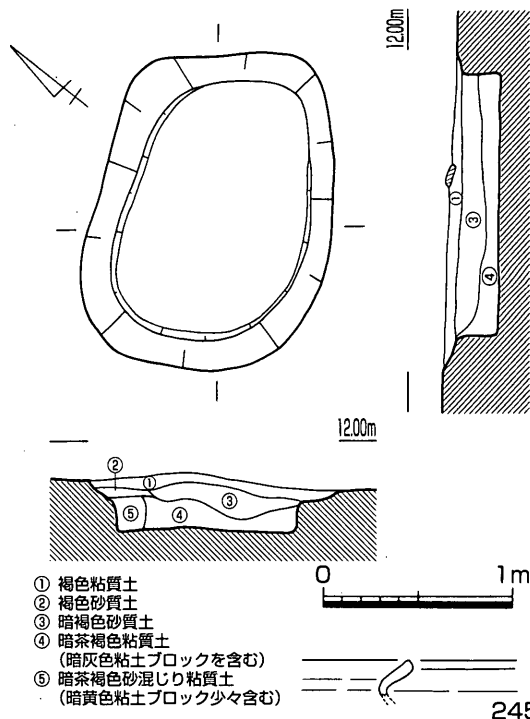
旧F 1区の西部で検出した土坑である。平面形は長方形に近いが西側部分は丸くなっている。また僅かであるが北側部分はSK24により壊されている。長辺1.1m、短辺0.8m、深さ25cmである。西側部分一帯はテラス状に段になっている。埋土の上半は褐色系の砂質土で硬く締まっている。微細な遺物が少量出土したのみである。

SK05 (第93図)

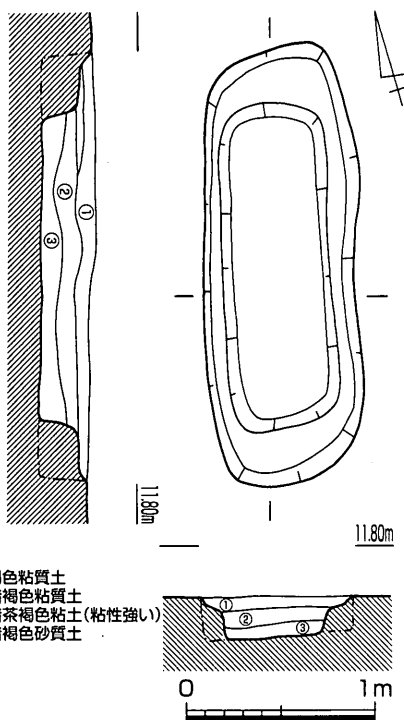
旧F 1区の西部で検出した土坑である。平面形は正方形に近い隅丸方形で一辺1.1m、深さ20cmであ



第93図 IV区第2面SK05平・断面図 (1/40)



第94図 IV区第2面SK06平・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4)



第95図 IV区第2面SK07平・断面図 (1/40)

る。底部は凹凸があり、埋土は暗褐色系の粘質土が中心である。微細な遺物が少量出土したのみである。

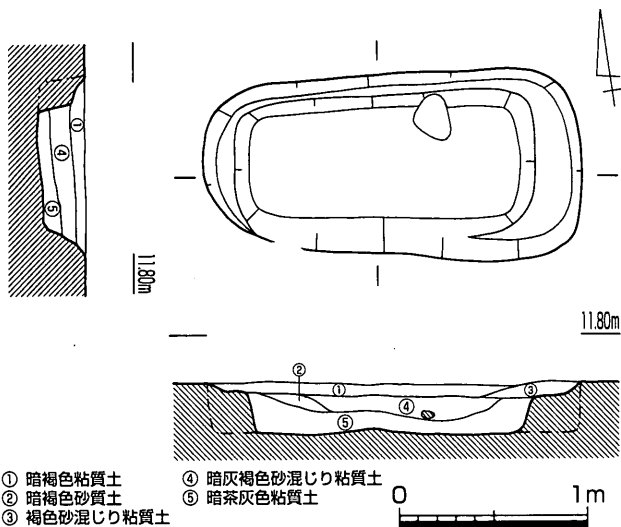
SK06 (第94図)

旧F1区の西部で検出した土坑である。平面形は隅丸の長方形で、長辺1.6m、短辺1.2m、深さ30cmである。段になった後にはほぼ垂直に掘り込んでいる。最下層には暗茶褐色粘質土が堆積しているが粘土ブロックを含んでいる。

遺物の出土は少ない。245は甕の口縁部である。

SK07 (第95図)

旧F1区の北西部で検出した土坑である。平面形は隅丸の長方形で、長辺2.25m、短辺0.8m、深さ30cmである。掘り込み面から1段下がってテラス状の面を作った後に、急角度で再び掘り込んでいる。下部の掘り込み部分も長辺1.7m、短辺0.55mの長方形になっている。最下層には粘性の強い暗茶褐色粘土が堆積している。下部の一段下がった部分の外側にはそこを取り囲むように、暗灰色粘土ブロックを含んだ暗黄褐色砂混じり粘質土が堆積している。この層が埋め戻し土と考えるならば、一段下がった部分を固定するようである。痕跡は認められないが木棺墓の可能性はある。微細な遺物が少量出土したのみである。



第96図 IV区第2面SK08平・断面図 (1/40)

SK08 (第96図)

旧F1区の北西部で検出した土坑である。平面形は隅丸の長方形であるが、西側は丸みが強い。長辺2.0m、短辺0.75~0.95m、深さ25cmで西側のほうが狭くなっている。南側部分以外は掘り込み面から1段下ってテラス状の面を作った後に、急角度で再び掘り込んでいる。下部の掘り込み部分も長辺1.6m、短辺0.7mの長方形になっている。SK07と同様に下部の一段下がった部分の外側にはそこを取り囲むように、暗灰色粘土ブロックを含んだ暗黄褐色砂混じり粘質土が堆積している。この層が埋め戻し土と考えるならば、一

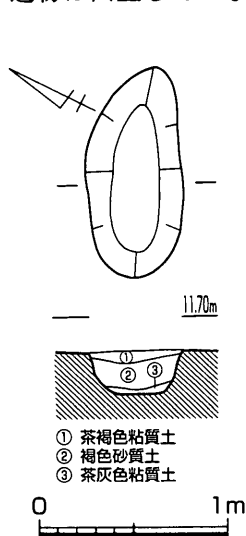
段下がった部分を固定するようである。痕跡は認められないが木棺墓の可能性はある。微細な遺物が少量出土したのみである。

SK09 (第97図)

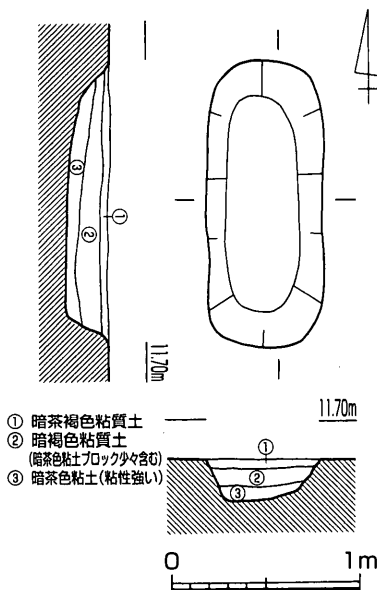
旧F1区の東部で検出した土坑である。平面形は長楕円形で、長径1.1m、短径0.5m、深さ24cmである。間に砂質土を挟んで上下に粘質土が堆積している。遺物は出土していない。

SK10 (第98図)

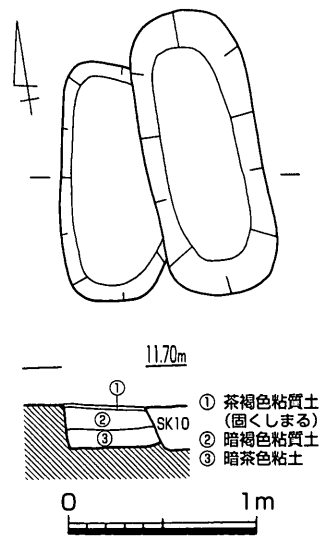
旧F1区の東部で検出した土坑である。平面形は隅丸の長方形で、長辺1.5m、短辺0.6m、深さ22cmである。底部は北から南に向かって緩やかに下っている。最下層には粘性の強い暗茶色粘土が堆積している。遺物は出土していない。



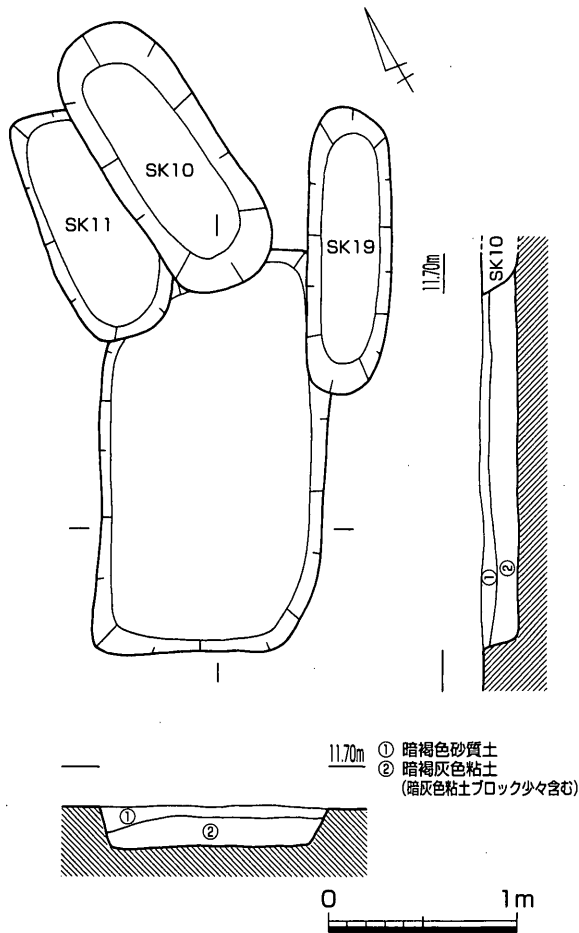
第97図 IV区第2面SK09平・断面図 (1/40)



第98図 IV区第2面SK10平・断面図 (1/40)



第99図 IV区第2面SK11平・断面図 (1/40)



第100図 IV区第2面SK12平・断面図 (1/40)

SK11 (第99図)

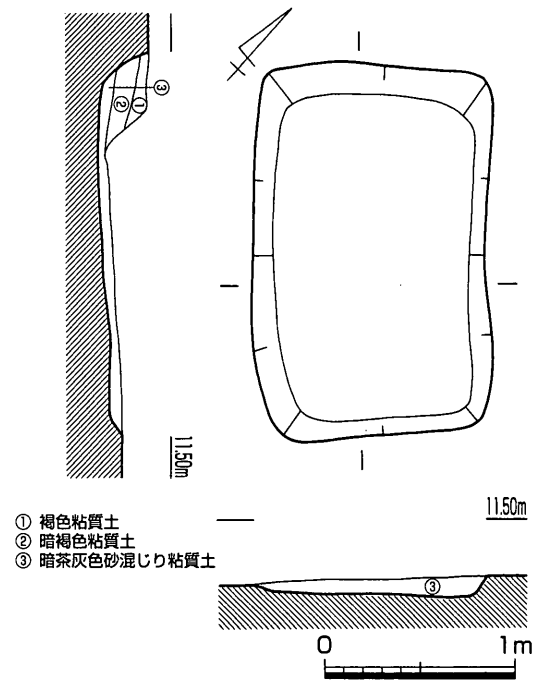
旧F1区の東部で検出した土坑である。東側部分をSK10によって壊されているが、平面形は隅丸の長方形になると考えられる。長辺は1.2m、短辺は検出部分で0.5m、深さ22cmである。最上層には茶褐色砂質土が薄く堆積しているが、硬く締まっている。遺物は出土していない。

SK12 (第100図)

旧F1区の東部で検出した土坑である。北側部分はSK10・11・19に壊されている。平面形は長方形で、長辺2.0m、短辺1.2m、深さ22cmである。下層には暗灰色粘土ブロックを含む暗褐色粘土が堆積している。遺物は出土していない。

SK13 (第101図)

旧F1区の東部で検出した土坑である。平面形は長方形で、長辺1.9m、短辺1.2m、深さ25cmである。集石遺構の検出時にその上部を掘削してしまったため、大部分が最下層の一部を残すだけになっている。最下層には暗茶灰色砂混じり粘質土が堆積しており、上部は褐色～暗褐色粘質土が堆積している。遺物は出土していない。



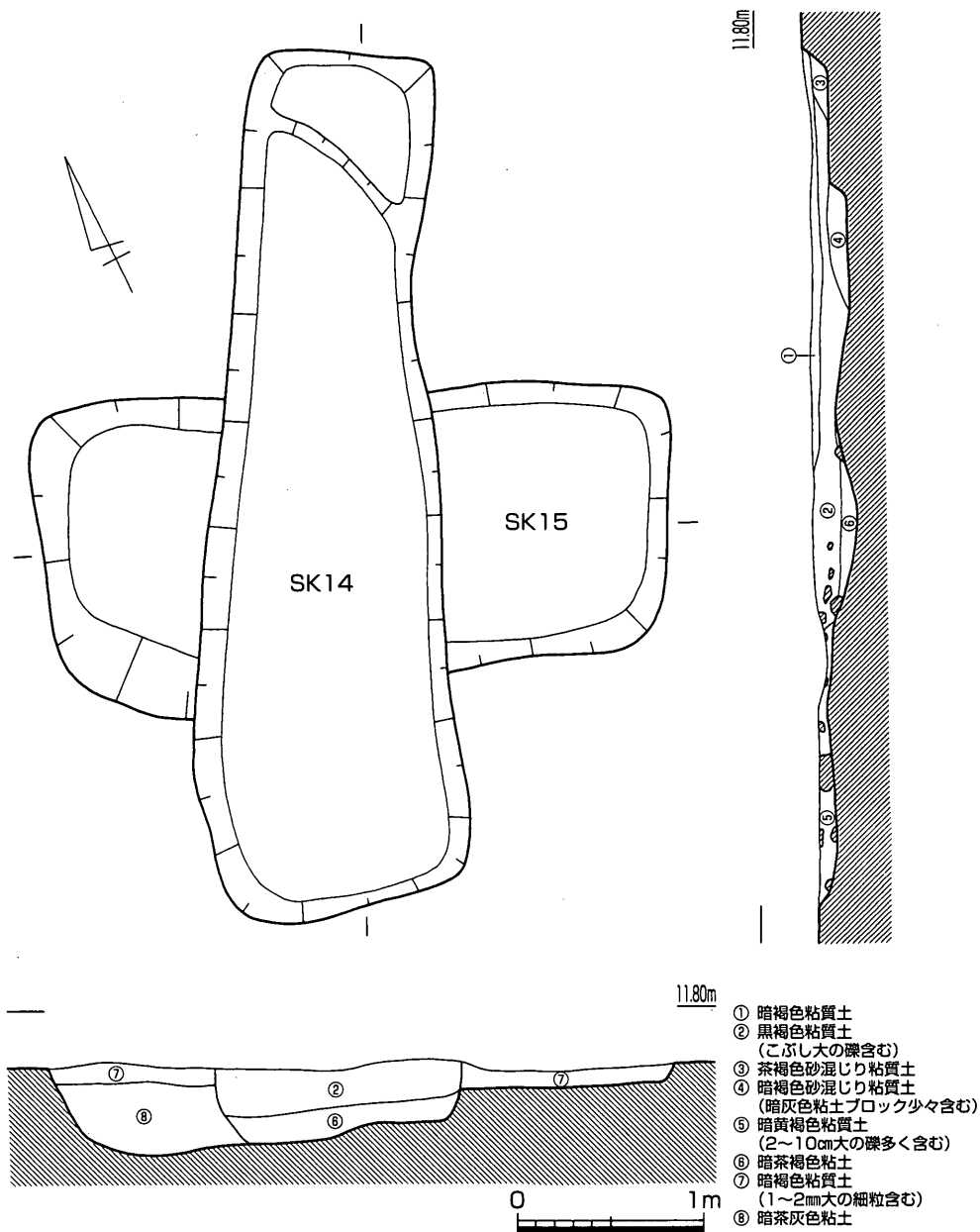
第101図 IV区第2面SK13平・断面図 (1/40)

SK14 (第102図)

旧F1区の中央やや東寄りで見出した土坑である。平面形は細長い長方形で、長辺4.6m、短辺0.95~1.4m、深さ10~40cmである。北側はテラス状の段になっており中央部分が深く、南側は浅くなっている。埋土は黒褐色粘質土が中心であるが、中央の深い部分には暗茶褐色粘土が堆積している。南側の浅くなっている部分には拳大の礫が多く見られる。微細な遺物が少量出土したのみである。

SK15 (第102図)

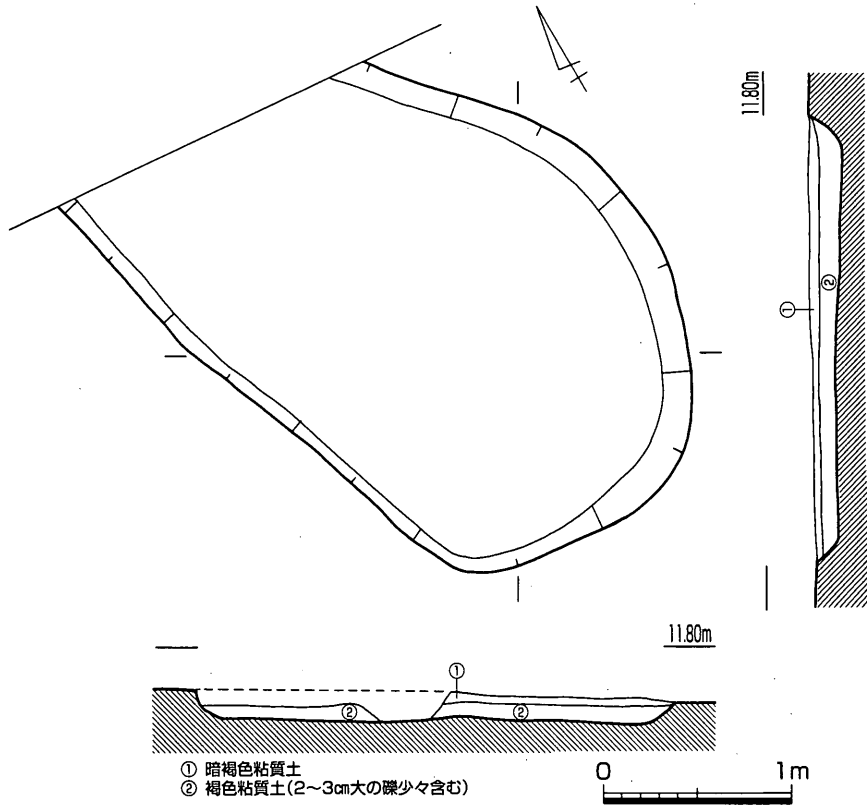
旧F1区の中央やや東寄りで見出した土坑である。SK14と直交して重なっており、中央部分をSK14により壊されている。平面形は長方形で、長辺3.4m、短辺1.4~1.7m、深さ10~50cmで、東側部分が浅くなっている。上層には暗褐色粘質土が、下層には暗茶灰色粘土が堆積している。遺物は出土していない。



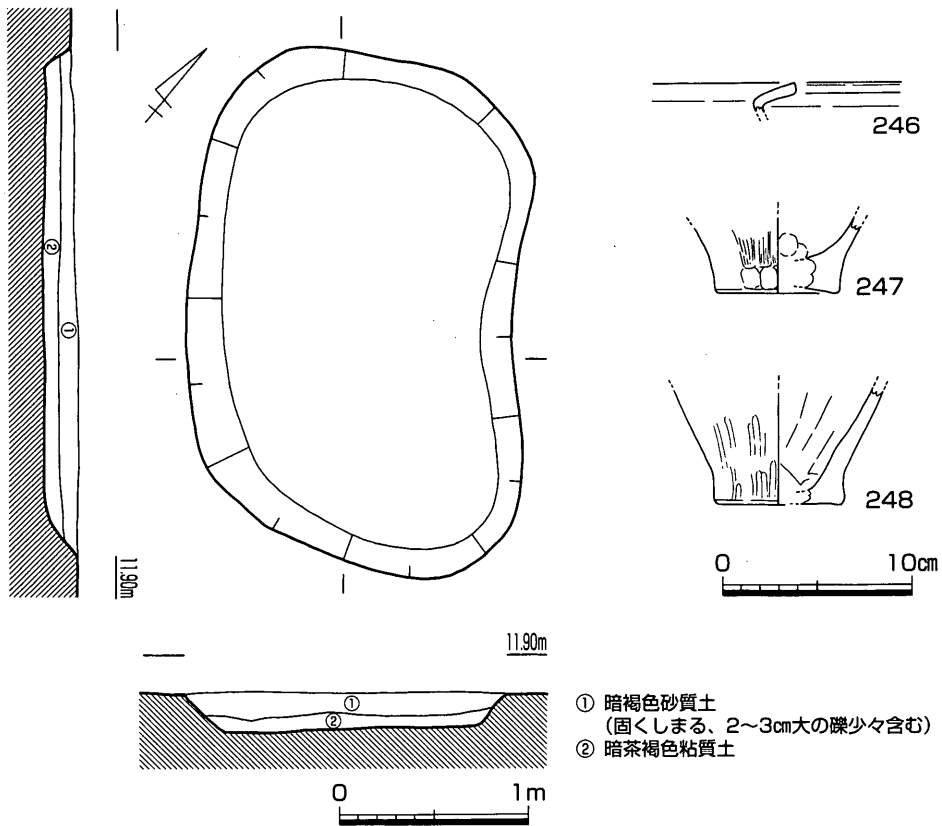
第102図 IV区第2面SK14・15平・断面図 (1/40)

SK16 (第103図)

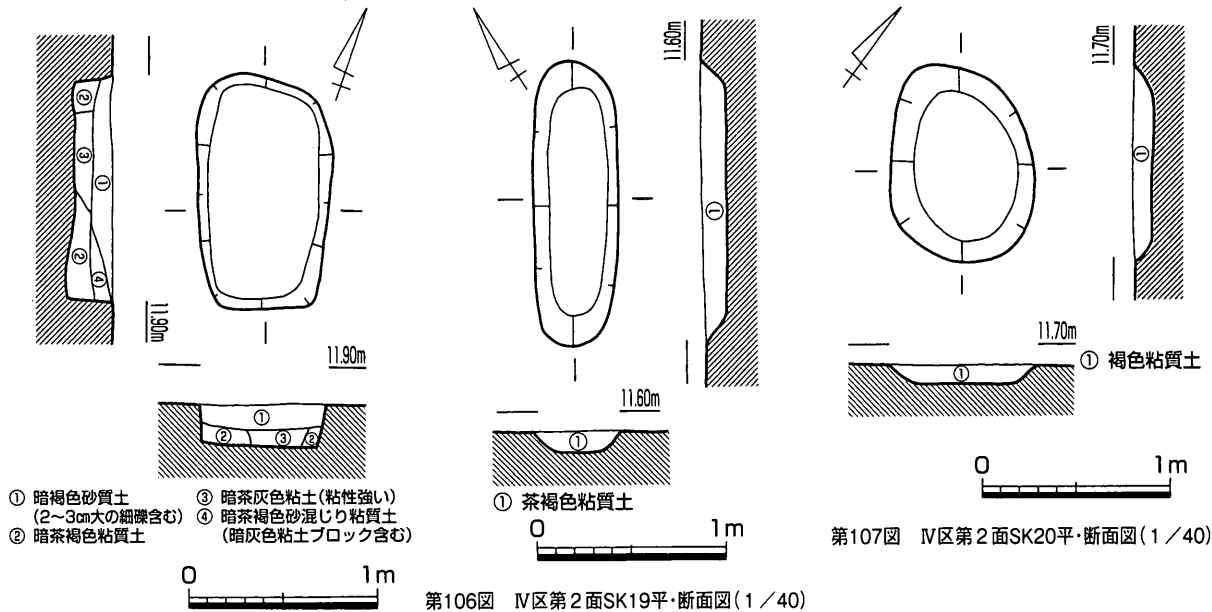
旧F1区の中央やや東寄りの調査区北壁際で検出した土坑である。平面形は不整形であるが長方形に近い。東側は丸みを帯びているが、西側は直線的である。北側は調査区外になる。検出部分での長辺2.9m、短辺1.7~2.1m、深さ18cmである。西側部分の上面は削平されている。褐色系の粘質土が堆積している。微細な遺物が少量出土したのみである。



第103図 IV区第2面SK16平・断面図 (1/40)



第104図 IV区第2面SK17平・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4)



SK17 (第104図)

旧F1区の中央やや西寄りで見出した土坑である。平面形はやや不整形な隅丸の長方形で、北東側の長辺が湾曲している。長辺2.6m、短辺1.7m、深さ20cmである。上層には暗褐色砂質土が堆積しており硬く締まっている。

246は甕の口縁部である。247・248は甕の底部と考えられる。247は外面にハケ目を施し、若干の上げ底になっている。248は外面にヘラミガキを施している。

SK18 (第105図)

旧F1区の中央やや南寄りで見出した土坑である。平面形は長方形で、長辺1.2m、短辺0.7m、深さ20cmである。掘り込みは急で、下層には暗茶褐色粘質土層に割って入るような粘性の強い暗茶灰色粘土が堆積している。微細な遺物が少量出土したのみである。

SK19 (第106図)

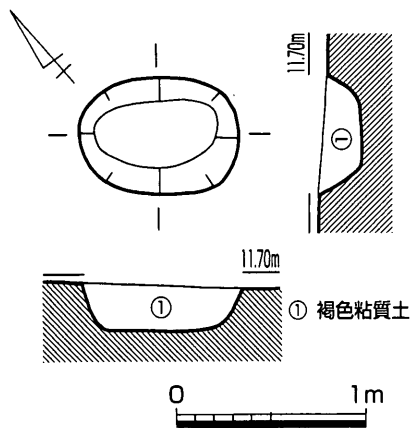
旧F1区の東部で見出した土坑である。平面形は長楕円形で細長く、長径1.45m、短径0.45m、深さ12cmである。埋土は茶褐色粘質土の単一層である。微細な遺物が少量出土したのみである。

SK20 (第107図)

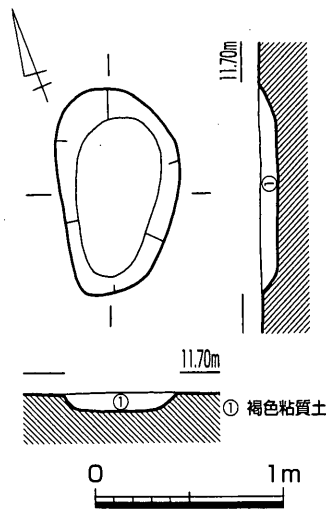
旧F1区の中央やや北寄りで見出した土坑である。平面形は楕円形に近い。長径1.0m、短径0.75m、深さ10cmで、埋土は褐色粘質土の単一層である。微細な遺物が少量出土したのみである。

SK21 (第108図)

旧F1区の中央やや西寄りで見出した土坑である。平面形は楕円形で、長径0.85m、短径0.6m、深さ22cmで、埋土は褐色粘質土の単一層である。微細な遺物が少量出土したのみである。



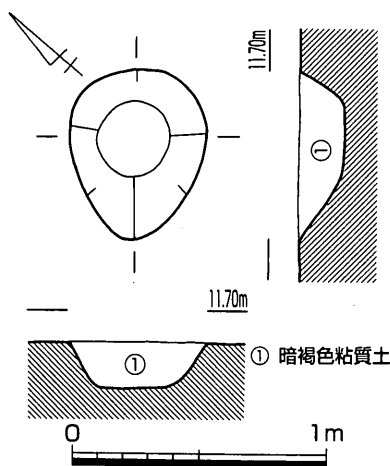
第108図 IV区第2面SK21平・断面図 (1/40)



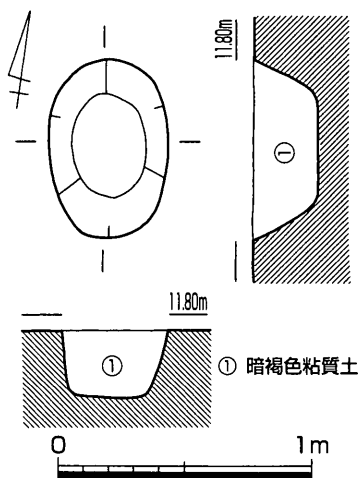
第109図 IV区第2面SK22平・断面図 (1/40)

SK22 (第109図)

旧F1区の北西部で検出した土坑である。平面形は楕円形で、南側が狭くなっている。長径1.0m、短径0.6m、深さ10cmで、埋土は褐色粘質土の単一層である。微細な遺物が少量出土したのみである。



第110図 IV区第2面SK23平・断面図 (1/30)、出土遺物 (1/4)



第111図 IV区第2面SK24平・断面図 (1/30)

SK23 (第110図)

旧F1区の中央やや南寄りで検出した小形の土坑である。平面形はやや潰れたような楕円形で、長径0.65m、短径0.55m、深さ18cmである。南西部分の掘り込みは緩やかである。埋土は暗褐色粘質土の単一層である。

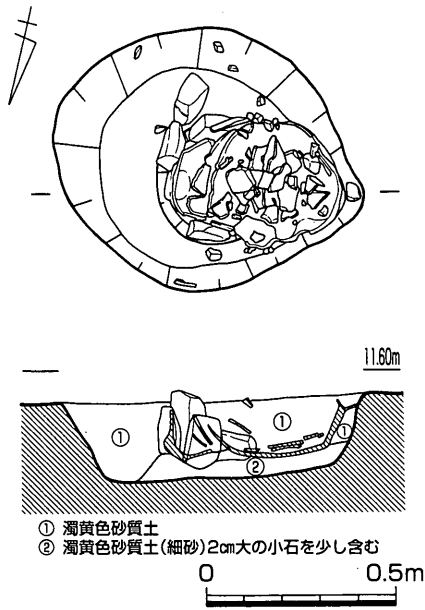
249は甕で、口縁部は鋭く屈曲しており端部は上方に僅かに拡張する。体部外面にはヘラ状工具による刻み目があるが不規則である。

SK24 (第111図)

旧F1区の西部で検出した小形の土坑である。平面形は楕円形で、長径0.7m、短径0.45m、深さ25cmである。埋土は暗褐色粘質土の単一層である。微細な遺物が少量出土したのみである。

ST01 (第112～113図)

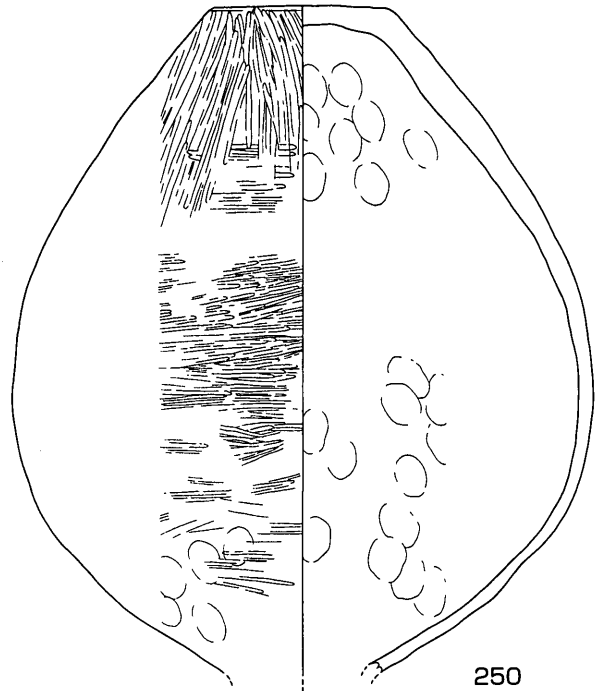
旧F1区の西部で検出した土器棺墓である。長径0.85m、短径0.67mの楕円形の土坑に東西方向に土器を重ねて棺としている。土器の上側半分は欠損していた。土坑の底部に15cmほど濁黄色砂質土で整地した後に、土器を設置させる場所を僅かに窪めている。そして20～30cmほどの塊石を「コ」字状に



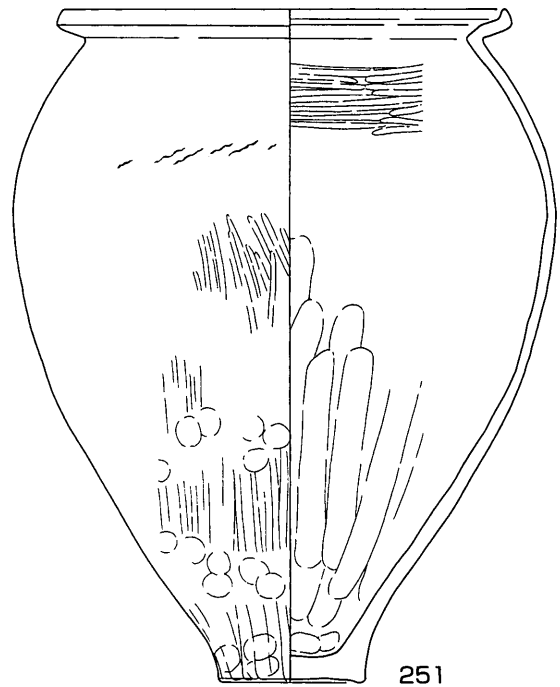
第112図 IV区第2面ST01平・断面図 (1/20)

配置してその間に251の甕を斜めに据えている。この塊石は土器が動かないように固定するものである。そして口縁部を打ち欠いた250の壺を底部を上にして、打ち欠いた口縁部部分を251の口縁部と合わせている。251の甕の底部は出土時には50°上を向いていた。また「コ」字状に配置した塊石の南側に接するように、長さ35cmの塊石を立てている。土器の固定に直接関係しないこの石の横に、合口にした土器以外の別個体の甕の口縁部252があった。立柱状の石と何か関係があるのだろうか。

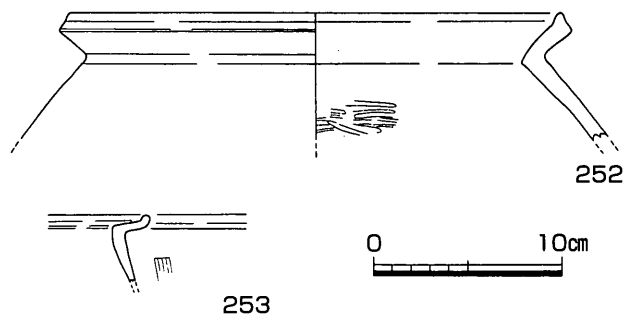
250は壺で、体部最大径は中央にある。外面下半には縦方向に、それ以外は横方向にヘラミガキを丁寧に施している。内面はナデており、指押さえが顕著である。体部は幅広の平底であるが、やや凹凸がある。251は甕で口縁部は鋭く屈曲し、内面を強くナデている。端部は上方に拡張させている。体部最大径は上半にあり、外面はヘラミ



250



251



252

253

第113図 IV区第2面ST01出土遺物 (1/4)

ガキを施し、上部には貝殻による圧痕文が見られる。内面は上半部にヘラミガキを施し、下半部は指で縦方向にナデている。底部は僅かに上げ底になっている。252は厚手の甕で、口縁部端部を上方に拡張している。体部内面にはヘラミガキが見られる。253は薄手の甕で、口縁部端部を上方に拡張している。

SX01、SX01-D01（第114～115図）

旧F1区の調査区北壁際の中央部で検出した円形周溝墓（SX01）及びその周溝（SX01-D01）である。周溝の北側の外側の部分は調査区外となっている。

墳丘の規模は周溝の内側で東西2.8m、南北3.5mの長方形であるが、北東部分がやや突出気味である。墳丘の上部は削平されて盛土は残っておらず、周溝の検出面と同じ高さである。

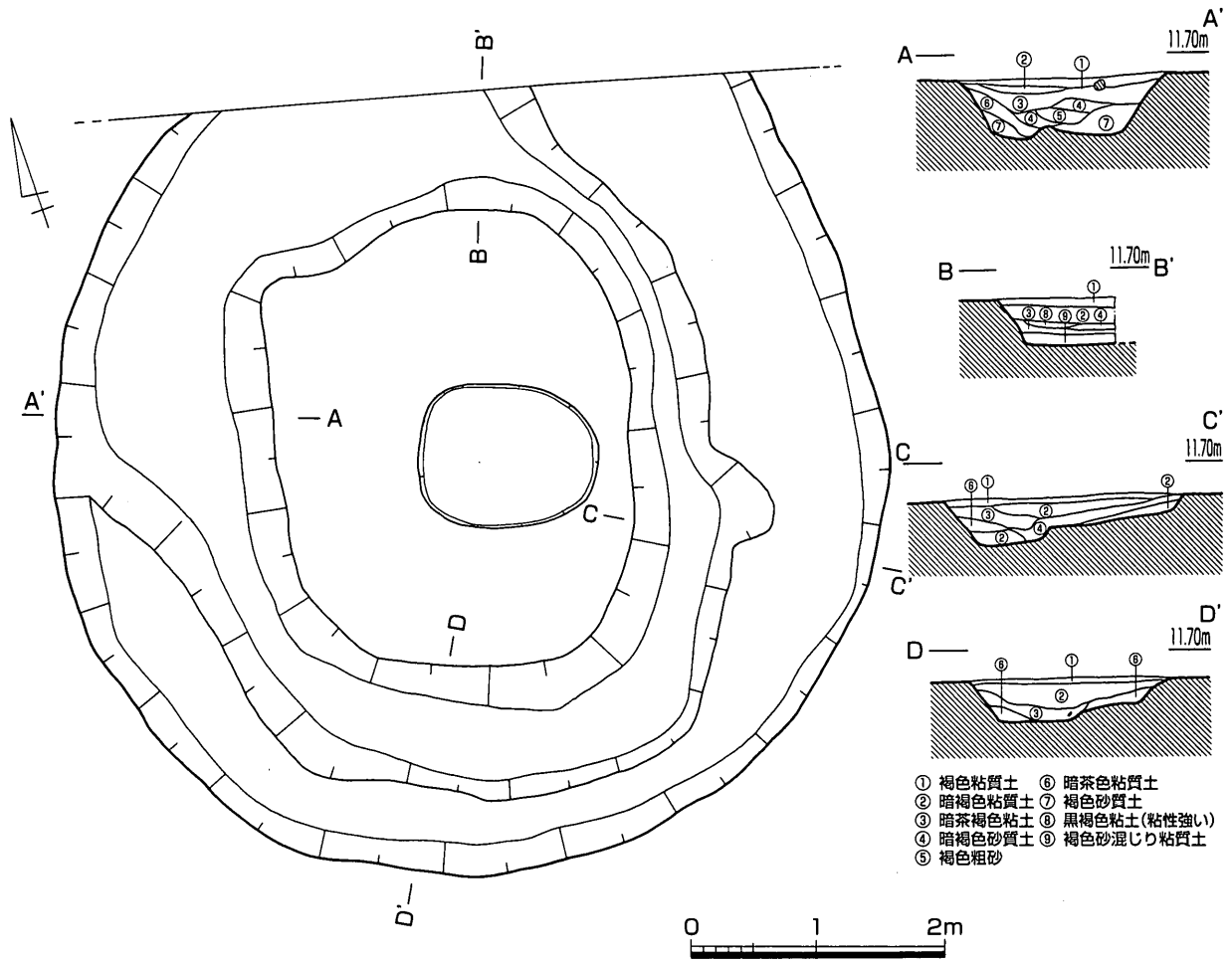
周溝は平面形が直径6.5mの円形であるが、東側がやや直線的である。幅は西側から南側にかけては1.6m前後、東側は1.8～2.0mで広がっている。北西隅が最も狭く、幅1.3mである。北側の幅は周溝の外側が調査区外となるため不明である。また北西部分を除いて掘り込み面から10～25cmの部分で、内側を下る幅0.3～1.3mのテラス状の段を形成している。このテラス状の段から10～15cm程度下って周溝の底になる。周溝の底は検出面から30～50cmほど下である。底部の標高は西側で11.0m、北側から東側にかけては11.1m、南側は11.2mで、南側は高めになっている。周溝の西側と南側で遺物が少量出土している。周溝を含めたSX01の全体の規模は6.5mである。

周溝のA-A'ラインを見ると底部が段になっており、埋土の状況から周溝は再掘削されているようである。周溝のテラス状の段は再掘削により生じたのかもしれない。周溝の下層には暗茶～暗茶褐色の粘土・粘質土が主に堆積しており、上層には暗褐色粘質土が主に堆積している。

墳丘の中央東寄りで埋葬主体部と考えられる土壙（SX01-K01）を1基検出した。平面形は東側が丸みを帯びた隅丸方形である。長辺1.45m、短辺1.1m、深さ30～35cmである。掘り込みはほぼ垂直で、最下層には暗茶褐色粘土が堆積している。また埋土の中ごろには炭化物を含む層が堆積しており、炭化物は部分的には帯状に堆積している。底部はほぼ平坦で、炭化物と焼土ブロックが薄く堆積している部分がある、底部や壁そのものは焼けていない。主体部の主軸はN-72°-Wである。

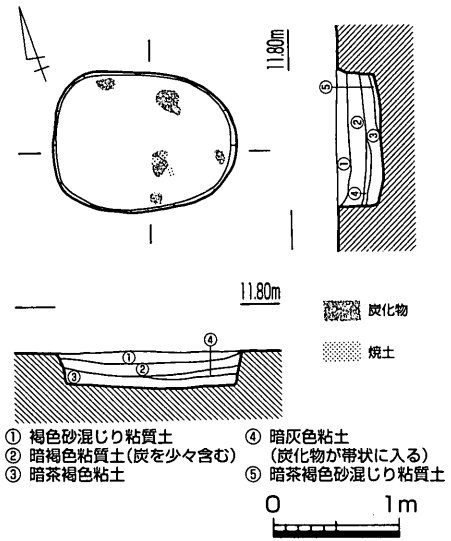
254・257は主体部から、それ以外は周溝から出土している。254・255は甕である。254の口縁部は内面に丸みをもって屈曲する。255の体部最大径は上半にある。外面はハケ目の後に丁寧にヘラミガキを加える。内面下半はヘラケズリである。胎土に角閃石を含んでいる。256は高杯である。杯部は鋭い稜を形成して屈曲し、口縁部は外反している。杯部の内・外面にはヘラミガキを格子状に施している。脚部は外面にヘラミガキ、内面はヘラケズリである。杯部と脚部の接合は円盤充填である。胎土に角閃石を含んでいる。257は口縁部屈曲部の細片で、屈曲部分で剥離している。内面にはハケ目が施されている。鉢と考えられる。258は鉢で、体部から緩やかに屈曲して口縁部に至り、口縁部端部は先細りになっている。体部外面にはハケ目の後にヘラミガキを施し、内面はヘラケズリと板ナデである。底部は安定した平底である。

出土遺物からSX01は弥生時代後期後半のものと考えられる。



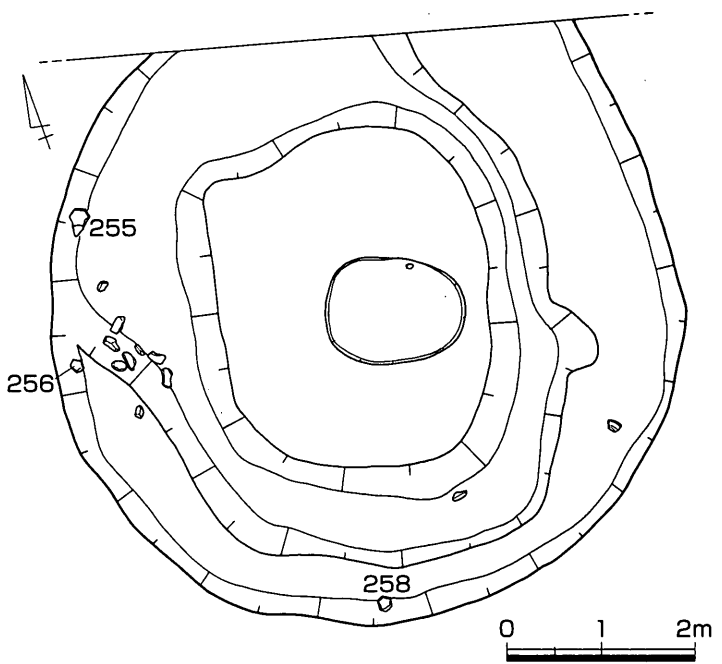
SX01 平・断面図 (1/60)

- ① 褐色粘質土
- ② 暗褐色粘質土
- ③ 暗茶褐色粘質土
- ④ 暗褐色砂質土
- ⑤ 褐色粗砂
- ⑥ 暗茶色粘質土
- ⑦ 褐色砂質土
- ⑧ 黒褐色粘土(粘性強い)
- ⑨ 褐色砂混じり粘質土

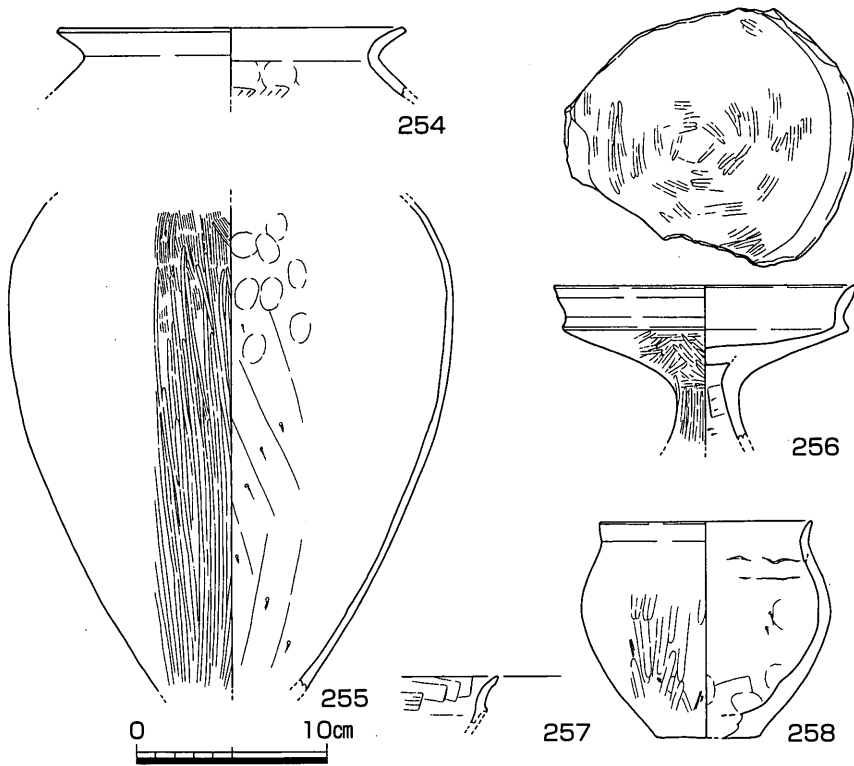


SX01-K01 平・断面図 (1/60)

- ① 褐色砂混じり粘質土
- ② 暗褐色粘質土(炭を少々含む)
- ③ 暗茶褐色粘土
- ④ 暗灰色粘土(炭化物が帯状に入る)
- ⑤ 暗茶褐色砂混じり粘質土



第114図 IV区第2面SX01平・断面図 (1/60)、SX01-K01平・断面図 (1/60)、SX01遺物出土状況図 (1/80)



第115図 IV区第2面SX01出土遺物 (1/4)

SX02、SX02-D02
(第116~118図)

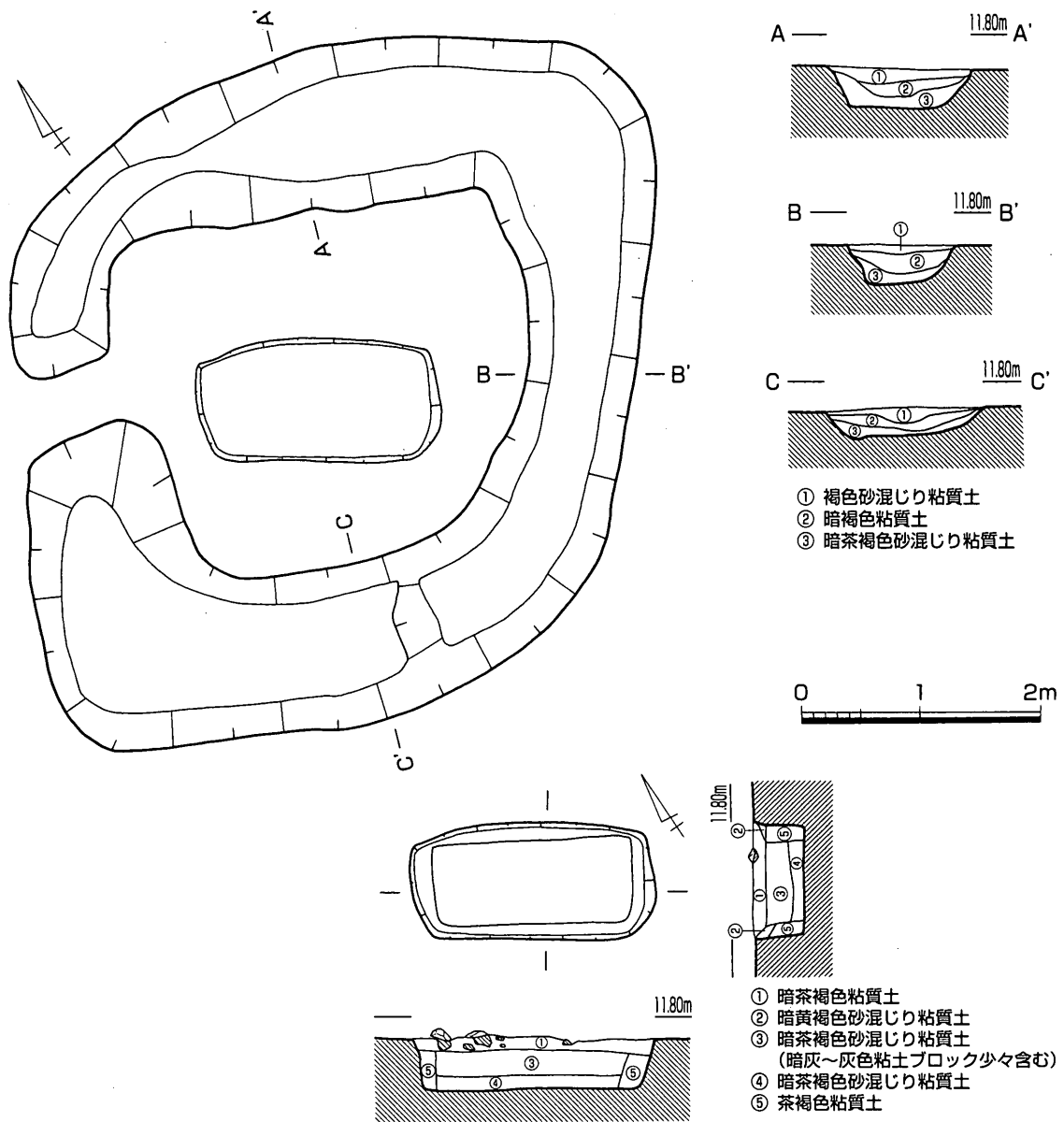
旧F1区の調査区北壁際の西部で検出した方形周溝墓(SX02)及びその周溝(SX02-D02)である。SX01の西側1.5mに隣接して築かれている。

墳丘の規模は周溝の内側で東西3.5m、南北2.9mの長方形であるが、南東部分は丸みを帯びている。墳丘の上部は削平されて盛土は残っておらず、周溝の検出面と同じ高さである。

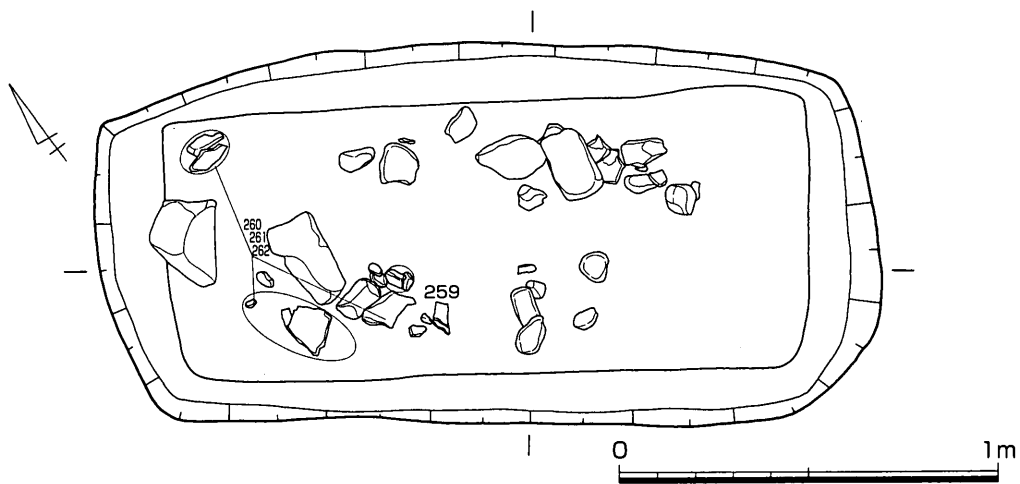
周溝は方形に巡るが、西側部分は幅0.5mを残して途切れており、墳丘と外部とをつなぐ陸橋部となっている。周溝はこの陸橋部のすぐ北側で幅0.8m、南側で幅1.2mで南側が広がっている。北側と南側の周溝は幅1.4~1.8mであるのに対して、東側は幅0.9mと狭くなっている。周溝の掘り込みはいずれも墳丘側が急になっている。底部の標高は北側から東側にかけてが10.6m、南側は10.95mと高くなっており、底部が段になっている。また北西のコーナー部分が最も深くなっており、標高は10.4mで底部の幅も狭く断面はV字形に近くなっている。周溝には暗茶~暗褐色系の粘質土が主に堆積している。周溝からは微細な土器片が少量出土したのみである。周溝を含めたSX02の全体の規模は、東西5.4m、南北5.7mである。

墳丘の中央部に埋葬主体部と考えられる土壙(SX02-K02)を1基検出した。平面形は長方形で長辺2.1m、短辺1.0m、深さ45cmである。主体部の主軸はN-58°-Wである。掘り込みは東側がやや緩やかであるほかは、垂直に近くなっている。主体部の上面には5~20cm大の礫が置かれ、礫に混じって供献と考えられる259・261の土器が共に出土している。また検出面から10cmほど掘り下げると長辺1.7m、短辺0.7mの暗茶褐色粘質土の長方形の平面を検出した。この面から底部までは32cmである。この長方形を取り囲むように茶褐色粘質土が堆積している。痕跡は残っていないが内側の長方形部分が木棺であったと考えられ、その周囲の茶褐色粘質土は木棺の裏込め土と考えられる。主体部の主軸の西側の延長に陸橋部がある。陸橋部は若干その方向を主体部と違えており、外から墳丘内に入り埋葬する際に、主体部の北側の長辺側に向かって歩きやすいようにしている。また主体部上の礫は、SX02の検出時には僅かに上面に見えていたことから、削平された墳丘の上面はそれほど高いものではなかったと考えられる。

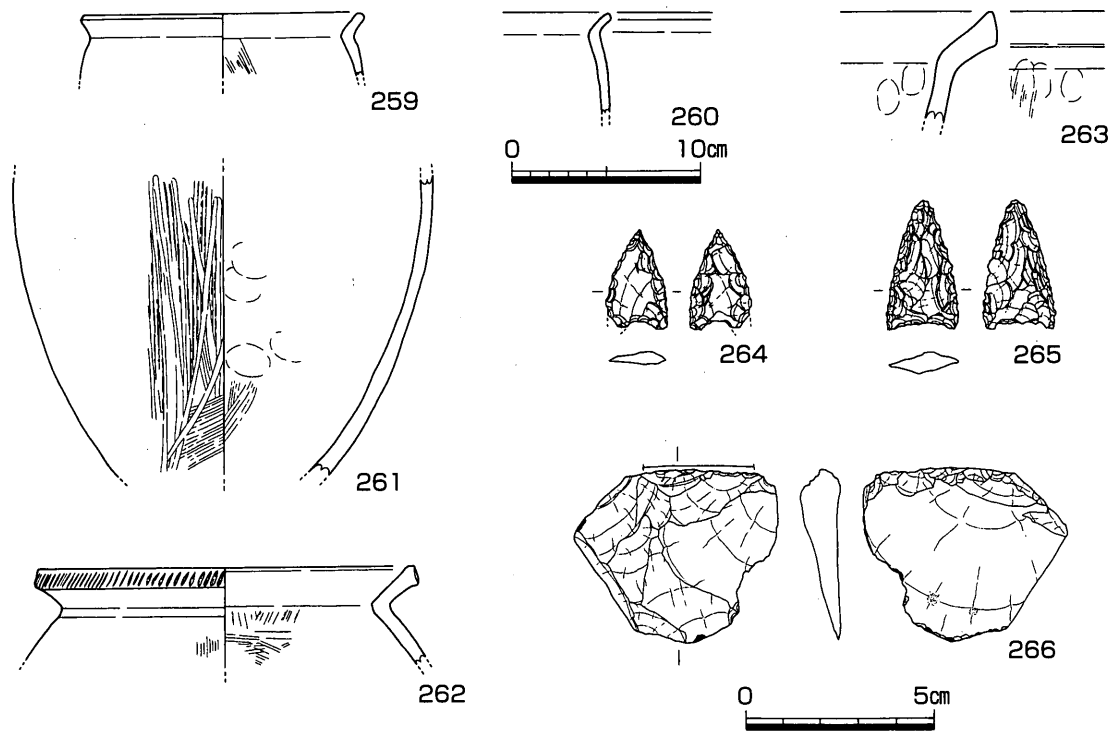
259~262は甕である。259・261は主体部上面の出土である。261は外面にハケ目の後にヘラミガキを施



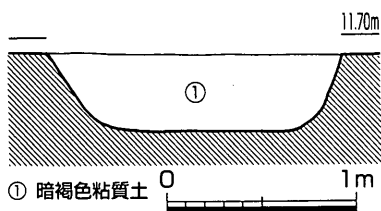
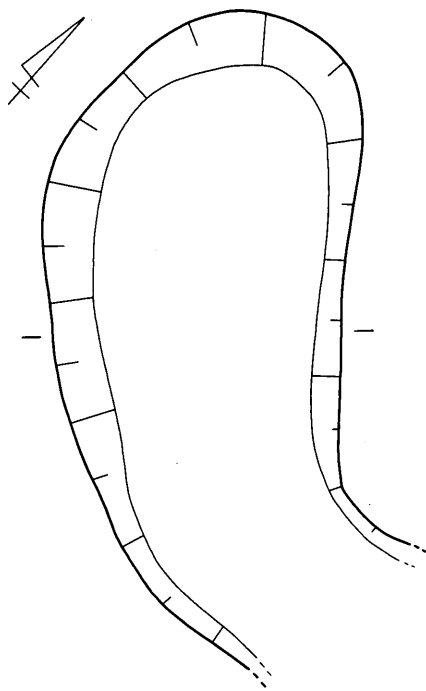
第116図 IV区第2面SX02平・断面図 (1/60)、SX02-K02平・断面図 (1/60)



第117図 IV区第2面SX02-K02上面遺物・礫出土状況図 (1/20)



第118図 IV区第2面SX02出土遺物 (1/2、1/4)



第119図 IV区第2面SX03平・断面図 (1/40)

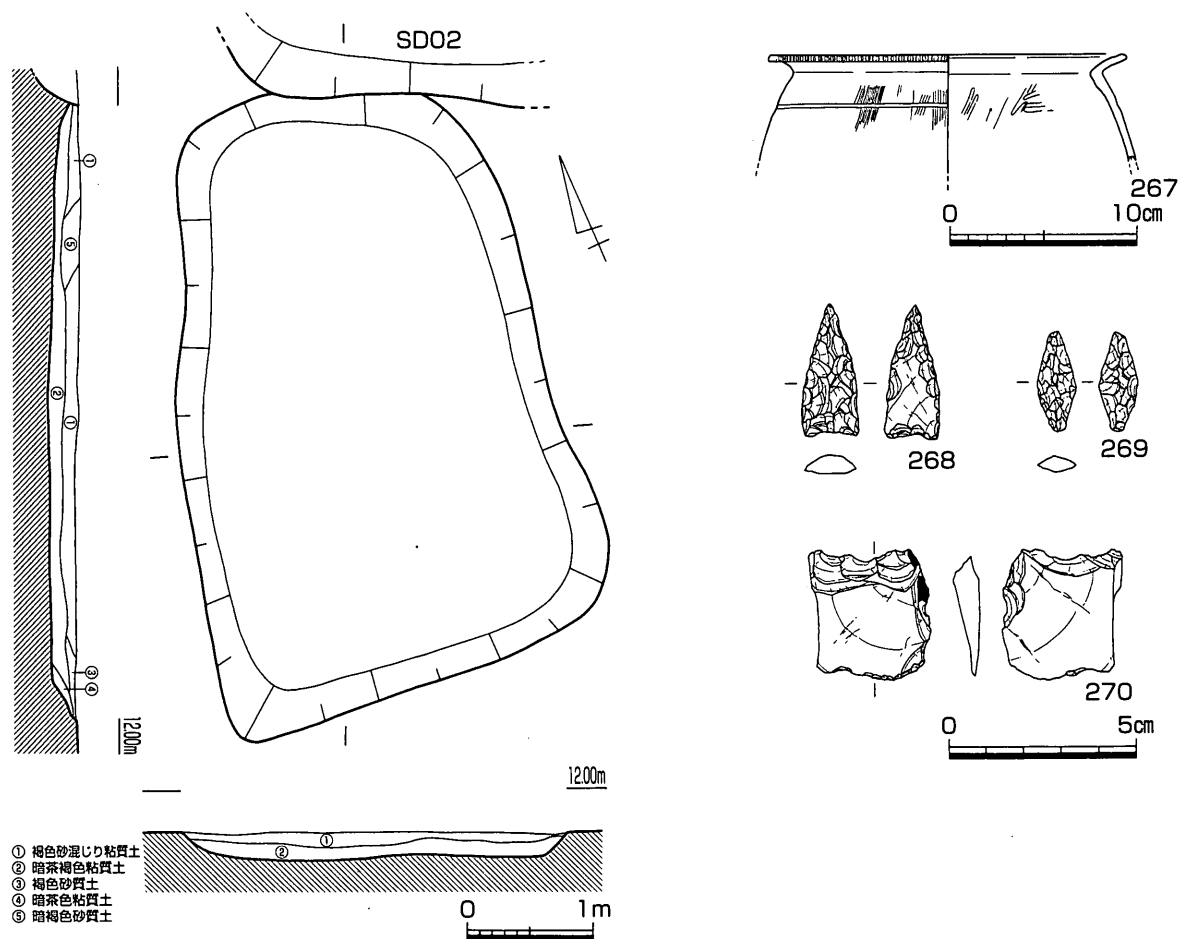
している。259・260の口縁部は短い。263は主体部埋土から出土した大形の鉢である。口縁部は屈曲し、外面に面をもつ。内・外面とも口縁部屈曲部に指押さえを行い、体部外面にはハケ目を施す。

264～266はいずれも主体部の下部で出土したものである。264・265は凹基の石鏃、266はスクレイパーで刃部に微細な剥離が認められ、背部には弱い敲打痕がある。側面には主要剥離面が残る。主体部の底部からの出土ではないので、副葬品かどうかは決めかねる。

262の土器は弥生時代中期まで遡るが、その出土状況から混入と考えられる。他の遺物からSX02は弥生時代後期後半と考えられる。

SX03 (第119図)

旧F1区の中央部で検出した遺構である。その東側の部分は浅くなり検出出来なかった。平面形は楕円形に近いが、東側の途切れた箇所近くで屈曲している。また北西側は丸みをもって収束している。検出部分の長さは3.2mほど、幅は1.0～1.7m、深さは40cmである。埋土は暗褐色粘質土の単一層で、北西部分では拳大の礫が混じっていた。微細な遺物が少量出土したのみである。遺構の性格は不明である。



第120図 IV区第2面SX04平・断面図 (1/60)、出土遺物 (1/2、1/4)

SX04 (第120図)

旧F1区の西部で、SX02の南側に隣接して検出した遺構である。平面形は長方形で長辺4.8m、短辺は2.4~3.3mで北側が狭くなっている。深さは20~25cmである。北側部分は僅かであるがSX02-D02によって壊されている。掘り込みは緩やかで底面は平坦である。下層には暗茶褐色粘質土が堆積している。平面の大きさの割には浅く、遺物の出土量も少ない。

267は甕で、口縁部は鋭く屈曲しており内面を強くナデている。端部には刻み目を施している。体部外面にはヘラケズリを施しており、さらに棒状工具でナデた凹線状の線が巡る。内面はヘラケズリの後にヘラミガキを加えている。

268は凹基、269は凸基の石鏃である。270はスクレイパーで刃部に僅かに調整を施す。側面には主要剥離面を残す。

集石遺構 (旧F1区部分) (第144図)

調査区中央部の旧F1区とF2区の境部分から北東方向に伸びており、旧F1区の調査区北東隅と東壁部分までで検出された集石遺構である。集石遺構の一部はすでに第1遺構面で確認出来ている。第2遺構面検出時には機械により慎重に上部の土を除去し、礫の一部が見え始めた段階で機械を止め、その後は人力による掘削を行った。調査区際にトレンチを設定するなど大まかに集石遺構の範囲を絞った後に、土層観察用のベルトを残しながら上部の土を除去して集石遺構の検出に努めた。なるべく土層観察

用ベルトの方向は同じに設定したが、調査の進行上、止むを得ず異なった方向に土層観察用ベルトを設定したのものもある。

またこの旧F1区で検出された集石遺構は現状保存されることとなったため、その上面を検出しただけで全体を検出していない。集石遺構の内部や下部、築かれた遺構面の標高の詳細については不明である。また遺物についても上面を検出した段階までで出土した遺物のみ取上げている。従ってこの部分で検出した集石遺構の規模や出土遺物は、それぞれの集石遺構の本来の形状ではなく、また遺物もその一部に留まる。

集石遺構の多くは、上部の検出面が標高12.2～12.3mで、第1遺構面の10cmほど下部で、第1遺構面を形成する褐色～暗褐色砂質土層中に含まれている。上面を面的に広げて集石遺構を検出したが、礫は確認した範囲内では全体に広がっていたが、同じ高さでも礫の集中度には濃淡があった。特に大形の礫が集中的に分布するとか、特別な配置で並ぶといったような傾向は見られなかった。遺物はこれらの礫に混じって出土した。全体的な遺物の出土状況は、集石12付近に幾分集中して出土した以外は特に特徴はなく、意図的に配置された様子もない。離れた位置から出土した遺物の接合関係も認められなかった。これら礫の分布状況により集石遺構を分離した。

旧F1区部分では集石4・6～14までの合計10基の集石遺構を検出した。集石遺構名はなるべく調査時のものを踏襲しているが、一部に変更や新たに設定したものもある。しかしこれらは上面を検出した段階での礫の分布の濃淡により分けているため、必ずしも正確ではないが、一応の傾向はつかめているものと思われる。遺物は土層観察用ベルトで囲まれた部分をグリッドとして番号を付与し、グリッドごとに取上げた。明らかに集石遺構としてのまとまり部分から出土した遺物はその集石遺構名で取上げ、後の整理作業で判明した集石遺構とグリッドとの対応により集石遺構名を付与した遺物もある。

また集石遺構の性格を考える上で、なるべく微細な遺物についても可能な限り図化に努めた。

集石遺構（旧F2区部分）（第145図）

旧F2区の西側調査区部分で検出した集石遺構群である。調査区を南西－北東方向に伸びており、調査区の北東部で旧F1区部分の集石遺構群とつながる。旧F2区の西側調査区部分では調査区の70%ほどが集石遺構で覆われている。この部分でも集石遺構の一部は第1遺構面ですでに確認出来ている。第2遺構面検出時には機械により慎重に上部の土を除去し、礫の一部が見え始めた段階で機械を止め、その後は人力による掘削を行った。この調査区では旧F1区部分の集石遺構群が続いてくることが予想されたため、調査区全体に、調査区の南壁に平行・直交するように土層観察用ベルトを残し、全体で22のグリッドに分割して調査を行った。遺物もこのグリッドごとに取上げた。上面の土を除去し集石遺構の上面を全体に検出して集石遺構の範囲を確定した段階で、集石遺構の上面の礫の平面図を作成した。

この調査区は道路の設計変更により橋脚が立つ部分に当たるため、全体を下部まで調査を行った。平面図の作成後に集石遺構群の中で明らかに遊離した状態の礫を除去し、さらに礫のない部分を弥生時代中期の遺構面まで掘り下げていった。その結果、最終的に集石19～25までの7基の集石遺構を検出することが出来た。この7基については後述するように、全体を調査している。また集石上面検出時から最終的に集石遺構を検出する過程で多量の土器・石器が出土している。

土層図（第67図）によると、集石遺構の頂上部は先述のように第1遺構面で確認できているものもあるが、大部分はその上面が第1遺構面を形成する、およそ標高12.3～12.6mの間に堆積する④層の暗茶

褐色砂混じり粘質土層中に含まれている。全体に検出された上面の礫はこの層に含まれている。そして隣接し合う集石遺構の間には、暗茶色粘質土～砂混じり粘質土、茶灰色粘質土、暗褐色～褐色砂質土が主に堆積しており、基本的に大きな乱れは無く水平に堆積している。そして標高11.8～12.0mで弥生時代中期の遺構面である褐色砂混じり粘質土層に至り、この面の上面に集石遺構は築かれている。

各々の集石遺構に分離する以前の、最初に全体を検出した上面の礫群は確認した範囲内では全体に広がっていた。またSH05の南東2mほどの位置には人頭大の大きな礫が10個集中していた箇所があった。しかしこれらの大形の礫は一面に出土した他の礫より高い位置で遊離した状態であり、その下部にも特に施設等は検出されなかったため、一連の集石遺構群とは無関係と判断した。この上面の礫群は特に著しい分布密度の濃淡は認められなかったが、それでも集石遺構に分離できた部分はこの段階でやや礫が集中する傾向が見られた。また礫が特別な配置をしているといったような状況もない。この礫群とともに土器・石器・サヌカイト片が出土している。遺物の出土状況には特徴はなく分散した状態での出土であるが量的には多い。遺物は破片が多く、意図的に配置された様子もなかった。

旧F1区部分と同様に集石遺構の性格を考える上で、なるべく微細な遺物についても可能な限り図化に努めた。

IV区の集石遺構

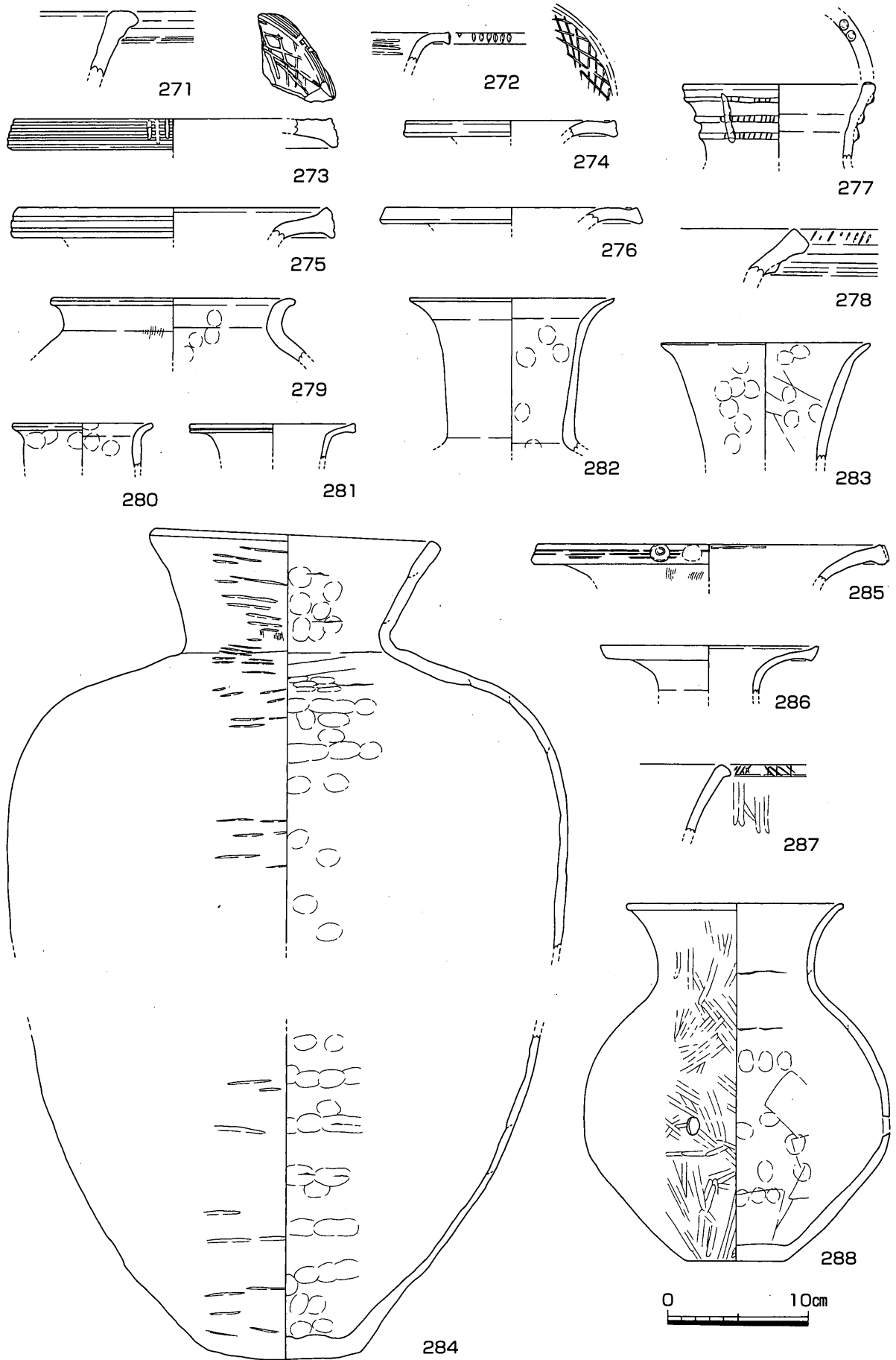
旧F1区と旧F2区を合わせたIV区全体でみると、上面検出時の集石遺構は、調査区の南西隅から北東隅まで帯状に80m続いており、北東隅の集石6から南西方向の集石4を連続すると見るかどうかは検討の余地があるが、調査区内では集石6部分でカーブして集石4に至っている。またこの集石遺構群はIV区とV区の境のIV区SD01を中心とする低地部分と一部接し最大25mほど離れており、SH01やSH02が位置する微高地の縁辺部に築かれている。

集石遺構（旧F1区部分）上面検出時出土遺物（第121～125図）

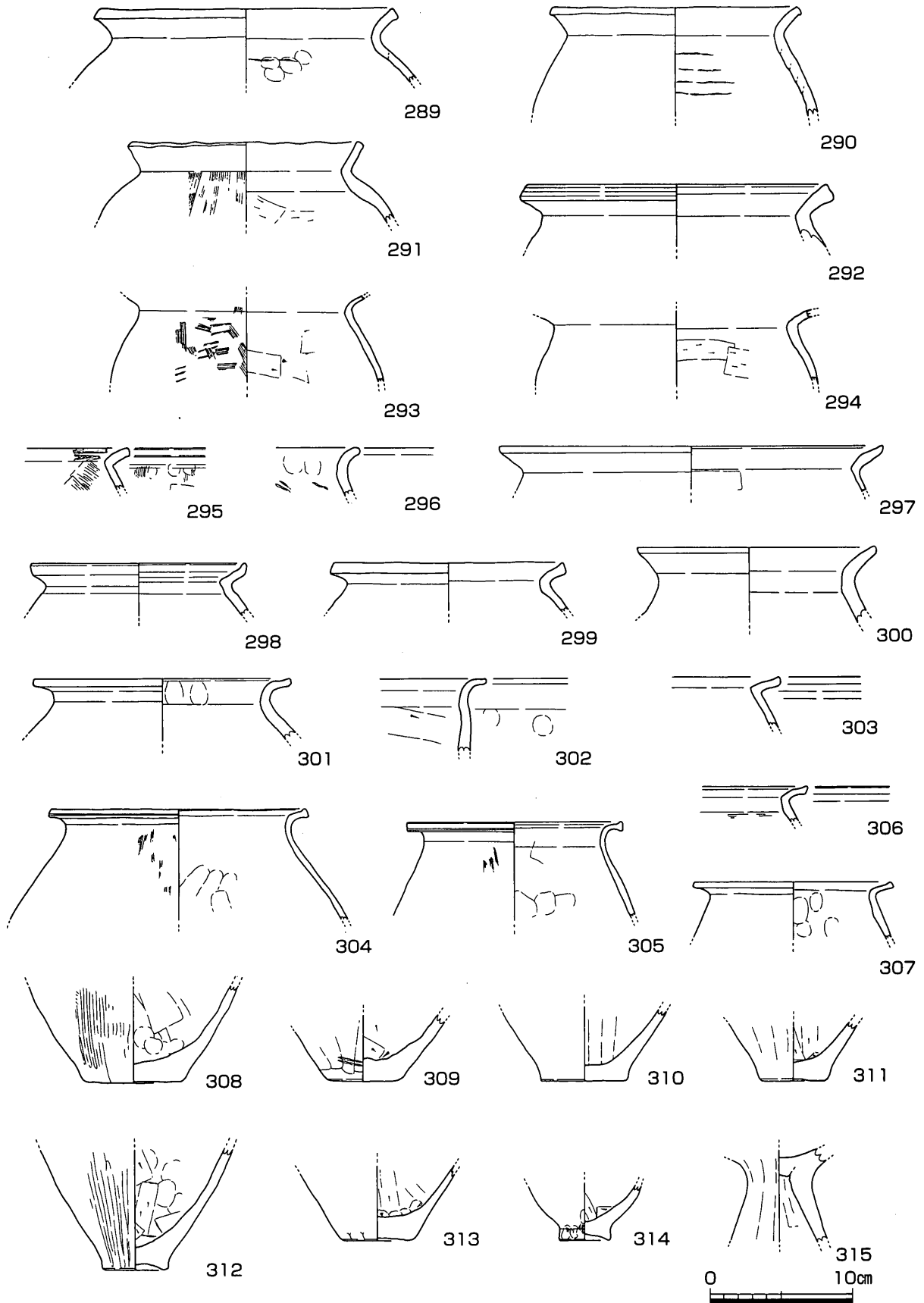
271～325は集石遺構(旧F1区部分)上面検出時に出土した土器、326～351は石器、352は鉄器である。

271～288は壺である。272は外傾する頸部から口縁部は真横に開き、端部には刻み目を施している。内面はヘラミガキである。273・274は口縁部内面に斜格子文を施す。277・278は頸部から外反してそのまま口縁部に至り、端部は平坦な面をもつ。両者とも外面に貼付突帯がある。277は貼付突帯に刻みを入れ、その上に棒状浮文を貼り付ける。また口縁部上面の平端部には円形浮文を貼り付けている。280～283の頸部は長く、口縁部は外反する。内・外面に指押さえが多い。284は大形の壺である。口縁部は直線的に立ち上がる。体部最大径は上部にあり、肩が張っている。体部は歪みが大きく接合の際に、片方を合わすと反対がずれ、うまく復元出来なかった。従って図でも間延びした体部に見えるが、実際はもう少し体部は短いと考えられる。口縁部から体部にかけての外面にはタタキが施されている。内面には指押さえが顕著である。底部はやや不安定である。285は口縁部端部を下方に拡張しており、端部外面に円形浮文を貼り付けている。288の口縁部は外反し、端部は丸く収めている。体部最大径は中央にあり、外面には全体にヘラミガキを施している。内面は指押さえと板ナデである。体部中央部分に焼成後に穿孔されている。

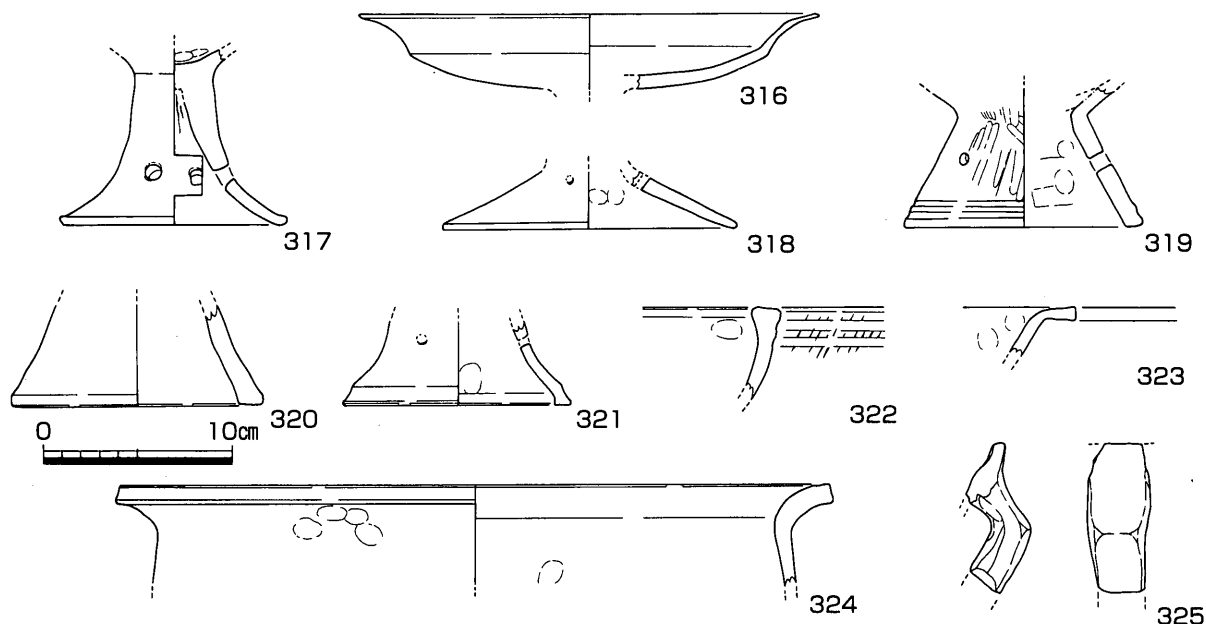
289～307は甕である。291は口縁部端部を指で押しているため凹凸がある。体部上半は肥厚しており、外面にはハケ目を、内面にはヘラケズリを施している。293は体部外面にタタキの後にハケ目を施して



第121图 IV区第2面集石群(旧F1区)出土遺物(1)(1/4)



第122图 IV区第2面集石群(旧F1区)出土遗物(2)(1/4)



第123図 IV区第2面集石群 (旧F1区) 出土遺物 (3) (1/4)

おり、内面はヘラケズリになっている。295の口縁部は鋭く屈曲しており、体部上半より厚手である。口縁部内面から体部内面にかけてハケ目を施している。297も体部上半より口縁部が厚い。298の口縁部は鋭く屈曲し、端部は上方に拡張している。300は体部から大きく外反して口縁部に至る。壺に近い。301の口縁部は横に開き、端部内面を強くナデている。302の口縁部は丸みを帯びて真横に開く。304～307は胎土に角閃石を含んでおり、口縁部は鋭く屈曲する。306は口縁部内面を強くナデている。

314は体部下半の形状から鉢と考えられる。底部は突出し、上げ底になっている。

315～318は高杯である。316は杯部であるが、杯部中央で屈曲して口縁部は外反する。317の脚部には2個1単位の透かし穴が向かい合って配置されている。318は直線的に開く脚部で、円形の透かし穴が現存で1個ある。

319～321は台付鉢の台部である。319の台部は直線的に開き、端部外面には凹線が巡る。外面にはヘラミガキを施し、円形の透かし穴を5個配置している。円盤充填の剥離痕が認められる。321は端部が内側に屈曲しており、端部外面を強くナデている。端部は平坦な面をもち、安定して接地している。円形の透かし穴が現存で2個ある。

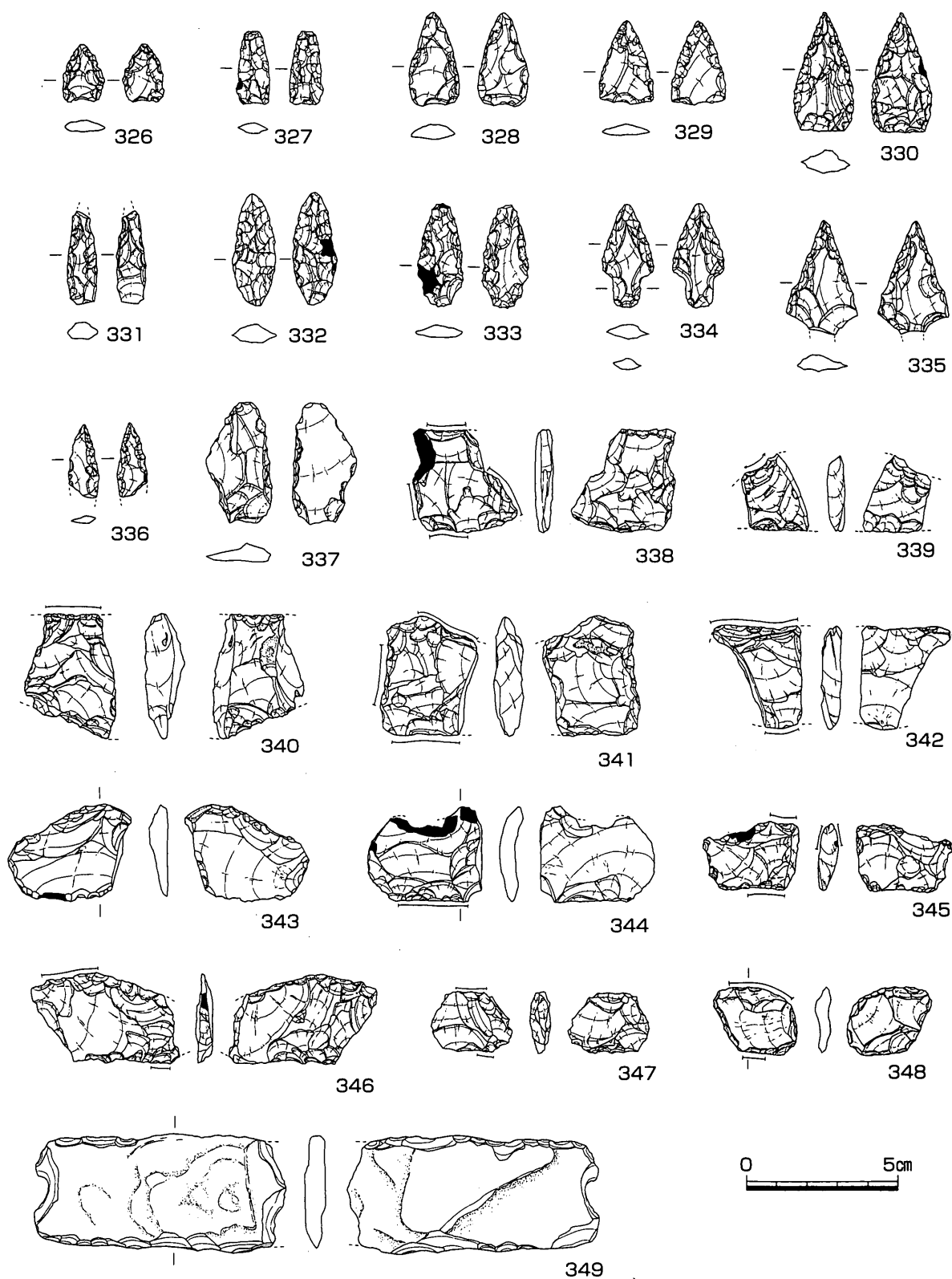
322～324は大形の鉢である。322は内湾しており、外面には刻み目を施した後に凹線を巡らせている。323の口縁部は真横に向かって屈曲している。324の口縁部は丸みを帯びて屈曲している。体部下半は欠損しているが大きく湾曲すると考えられる。あるいは大形の如意形口縁の甕かもしれない。

325は水差し、あるいは鉢の把手部分である。

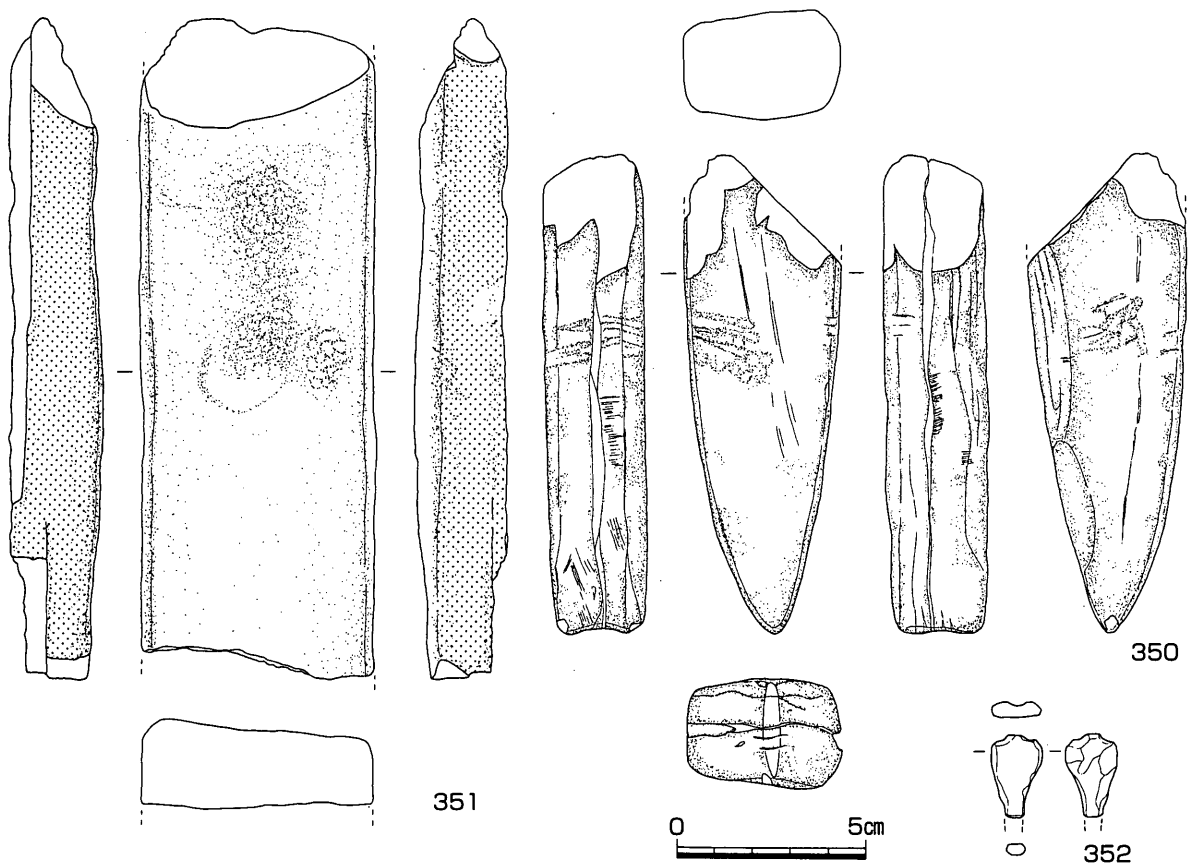
326～336は石鏃である。326～328は凹基、329・330は平基、331・332は凸基、333～335は凸基有基式である。330の側縁部の調整は丁寧であるが、中央部分の厚みが残ったままである。334の茎部は長い。337は石鏃の未製品で、側縁部に部分的に調整を施しただけである。

338～348は楔形石器である。340・345は截断面に両極打撃の痕跡が認められる。

349は結晶片岩製の石庖丁であるが、部分的に研磨されている。側縁には抉りがある。刃部は両面から作り出している。



第124图 IV区第2面集石群 (旧F 1区) 出土遺物 (4) (1/2)



第125図 IV区第2面集石群（旧F1区）出土遺物（5）（1／2）

350は結晶片岩製の柱状片刃石斧で、全体に研磨されている。基部には柄との装着痕が見られる。

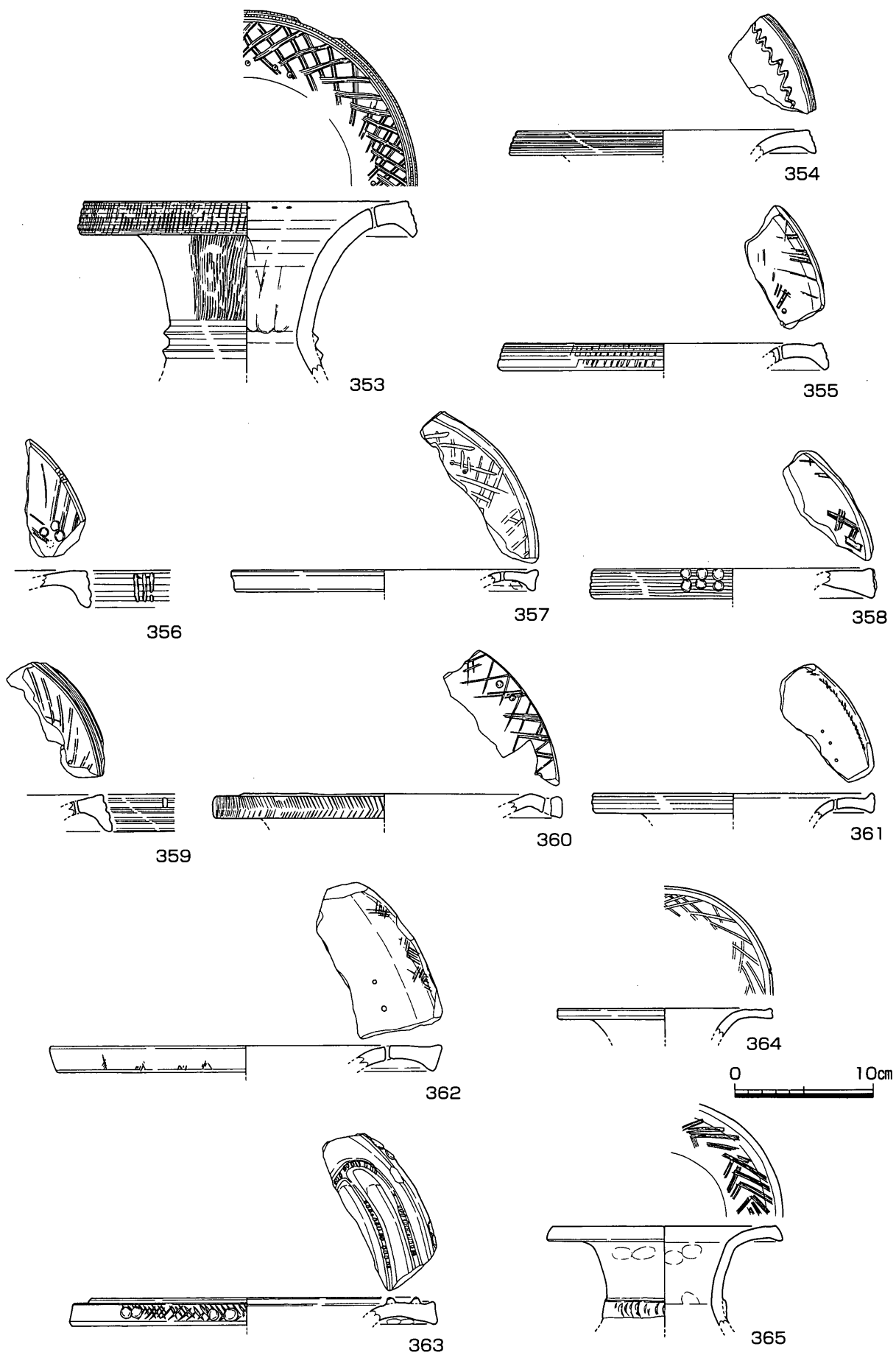
351は砂岩製の砥石兼台石である。両側面を砥石として使用しており、上面は台石として使用している。

352は鉄鏝の鏝身から茎部にかけての破片である。

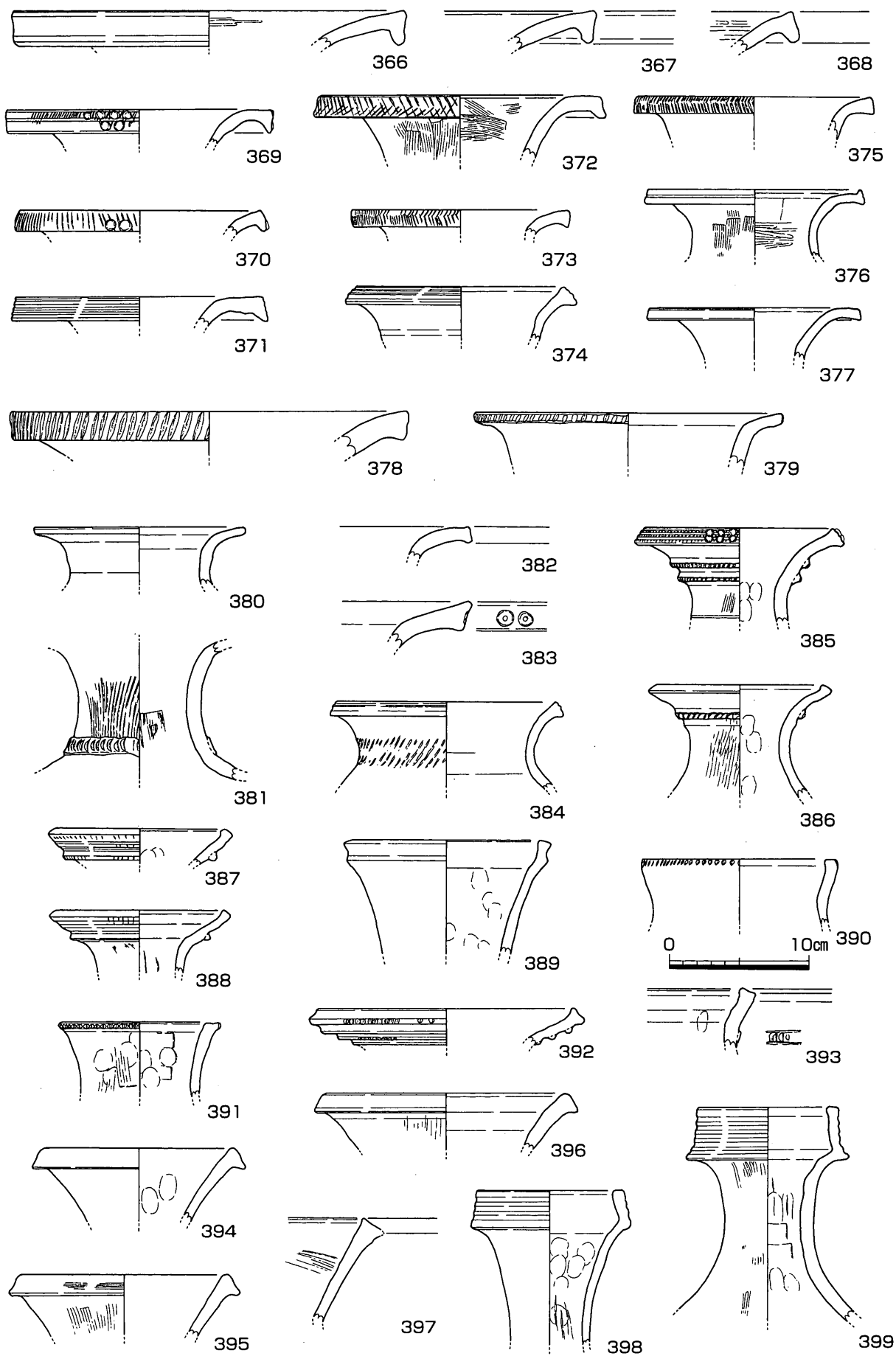
集石遺構（旧F2区部分）上面検出時出土遺物（第126～143図）

353～532は旧F2区部分の集石遺構の上面検出時と、集石遺構間の堆積層の掘り込み時に出土した土器、533～744は石器、745は玉である。

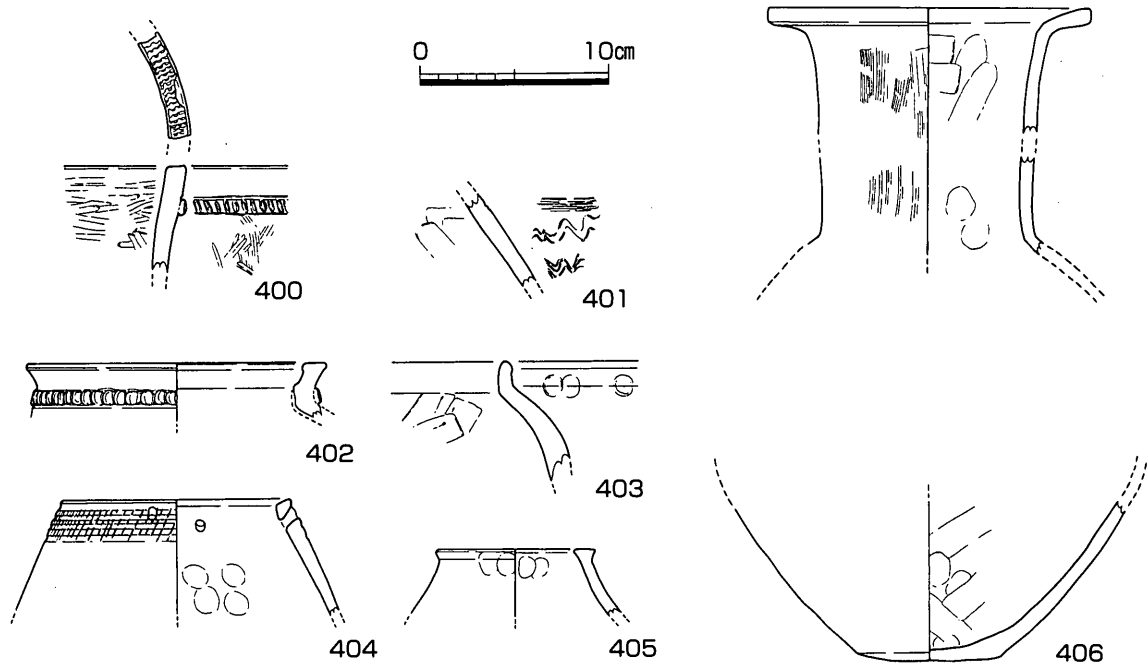
353～406は壺である。353～365は大きく開いた口縁部の内面に文様を施し飾るものである。353の口縁部端部は下方に拡張しており、端部外面には刻み目を施す。口縁部内面には半截竹管による斜格子文が施され、穿孔が現存で4個ある。頸部には突帯が2条巡っている。外面にはハケ目を施し、頸部上半の内面には回転台を使用したと考えられる連続した横ナデが見られる。354の口縁部内面には半截竹管による波状文が巡っている。356は口縁部内面に斜格子文に加えて4個1単位の円形浮文を貼り付けるが、1個は剥離している。口縁部端部外面には棒状浮文を3条貼り付けている。355・357・359・360・361・362の口縁部内面には穿孔が施されている。360の口縁部端部は屈曲部より下がっている。端部外面には刻み目を菱杉状に施している。363は口縁部内面に刻目突帯を貼って装飾している。口縁部端部外面には格子状に刻み目を施し、2個1単位の円形浮文を貼り付けている。365は外傾する頸部から屈曲して口縁部に至り、口縁部内面には半截竹管による斜格子文が施されている。頸部には爪により刻み目を付



第126图 IV区第2面集石群(旧F2区)出土遺物(1)(1/4)



第127图 IV区第2面集石群(旧F2区)出土遗物(2)(1/4)



第128図 IV区第2面集石群 (旧F2区) 出土遺物 (3) (1/4)

けた突帯を貼り巡らせている。366~374は口縁部端部を下方に拡張している。371・374以外は端部外面に刻み目を施し、369・370は円形浮文を加えている。376の口縁部は大きく開き、端部は上下に少し拡張している。外面はハケ目の後にナデしており、内面にはヘラミガキを加えている。378は厚手の口縁部で、端部外面にはヘラ状工具により大きめの刻み目を施し、刻み目には工具の木目が残っている。381は頸部に爪により刻み目を入れた突帯を貼り巡らせている。383の口縁部端部外面には竹管文を施している。384の頸部には細いヘラ圧痕文が巡っている。385~388・392は外傾する頸部からそのまま口縁部に至り、外面に刻目突帯を巡らせるものである。385は口縁部端部外面に刻み目を施した後に凹線を巡らせ、さらに6個1単位の円形浮文を貼り付けている。頸部外面にはハケ目を施し、ヘラ描沈線が1条巡っている。386~388は口縁部内面を強くナデることにより、端部を内側に拡張させている。389は口縁部端部の内・外面を強くナデている。390・391は口縁部端部外面に刻み目を施している。390・393は口縁部内面を強くナデている。394~396の口縁部は直線的に外傾し、端部を下方に拡張している。395は口縁部端部外面にもハケ目が認められる。397は直線的な口縁部の端部は肥厚し、端部は平坦な面となる。398・399は細長い頸部から鋭く屈曲して、やや内傾して立ち上がる口縁部をもつ。口縁部外面には凹線が巡っている。399の外面はマメツ気味であるが、ハケ目の後にヘラミガキを施している。400は直線的に外傾する口縁部の端部より少し下がったところに刻目突帯を貼り巡らせている。口縁部端部は平坦な面となり、貝殻の腹縁により施文している。外面はハケ目の後にヘラミガキを加えており、内面には丁寧にヘラミガキを施している。401は体部の破片で、外面に櫛描直線文と櫛描波状文が施されている。402は口縁部と頸部は短く、内面を強くナデている。頸部には幅広の刻み目をもった突帯を貼り巡らせている。403は厚手の体部から短い口縁部が立ち上がる。口縁部外面には指押さえを行い、体部内面にはヘラケズリを施している。404・405は内傾する体部からそのまま口縁部に至る無頸壺である。404は口縁部外面に刻み目を施した後に凹線を巡らせている。穿孔が現存で1個認められる。405の口縁部端部は内・外面に向かって拡張しており、上部に平坦な面を作る。口縁部の内・外面には指押さえを行っている。

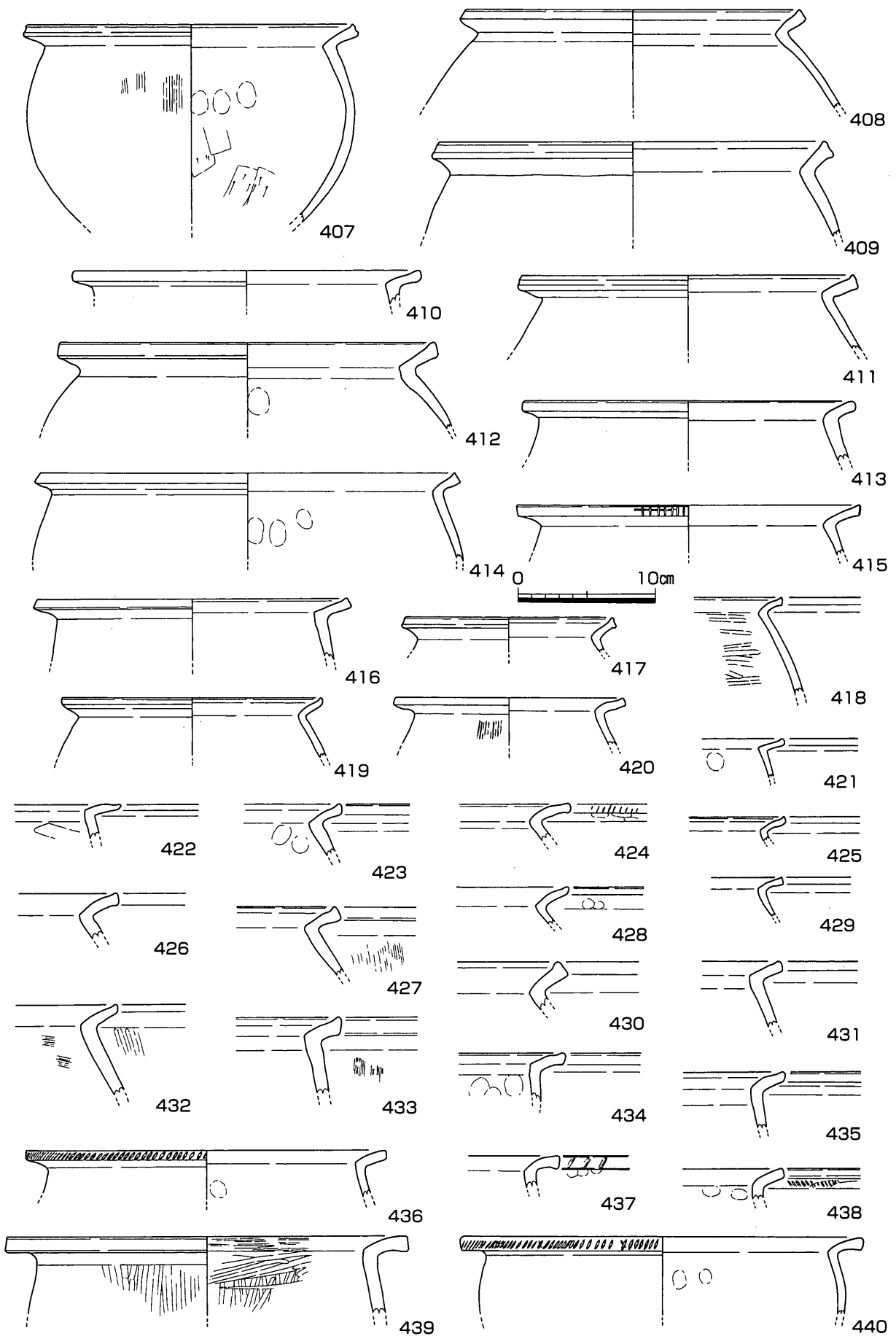
406は体部上半は細かく破損しており接合できなかったものである。直立に近い頸部から口縁部は屈曲して外側を向く。頸部外面にはハケ目を施している。体部最大径は中央付近にあると考えられる。体部下半内面は板ナデであるが、僅かに砂粒が動いている。底部は平底である。

407～473は甕である。407～417は厚手で長めの口縁部が鋭く屈曲するもので、端部は面を作っている。407の体部は湾曲の度合いが強く扁平である。あるいは鉢かも知れない。412は口縁部屈曲部内面を強くナデている。415は口縁部端部に刻み目を施す。418～426は口縁部内面を強くナデている。418の体部内面にはヘラミガキが施されている。424・436・437・440の口縁部端部には刻み目を施している。439は体部の内・外面と口縁部内面にヘラミガキを施している。440はあるいは鉢かも知れない。441～454は口縁部端部を上方に拡張している。444は口縁部端部の拡張部は丸みを帯びている。445は口縁部内面を強くナデている。446は口縁部屈曲部内面を強くナデている。また口縁部端部の下部は肥厚し、丸みを帯びている。体部内面にはハケ目を施している。447の口縁部内面は強くナデている。体部外面にはハケ目を施している。449は口縁部端部の拡張部の内面をナデた時に溝状に抉れが生じている。451の口縁部端部は強くナデてつまみ上げている。455～457の口縁部屈曲部は丸みを帯びている。456は口縁部内面を強くナデている。458～470の口縁部は端部を上下に拡張して幅広の面を作り、そこに凹線を巡らせている。459の口縁部端部外面にはハケ目原体により斜め方向に施文している。462・465・467には刻み目を、464には円形浮文を加えている。471～473は逆L口縁で口縁部端部に刻み目を施す。472の体部外面には櫛描直線文の施文のつなぎ目が認められる。口縁部内面に強く指押さえを行っている。473は体部外面にハケ目を施した後に櫛描直線文と櫛描波状文を巡らせている。体部下半にはヘラミガキを施している。

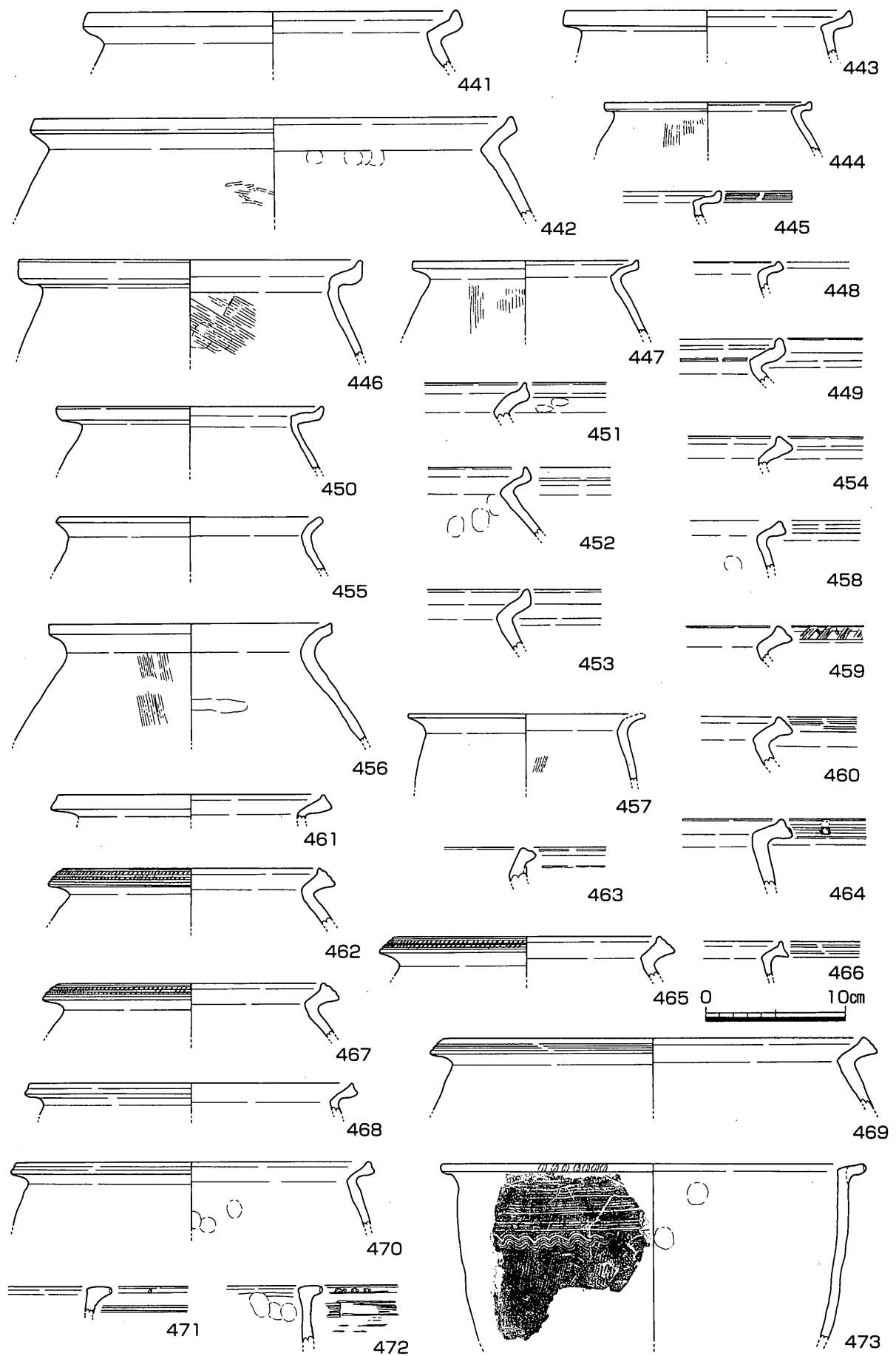
474～495は壺および甕の底部～体部である。474は壺の体部は強く湾曲している。外面にはヘラミガキを、内面にはハケ目を施している。475は底部の側面に指押さえを行っている。476の外面は板ナデであるが僅かに木目が認められる。481の底部は突出しており、外面にはハケ目を施している。484・485の外面のヘラミガキは幅広になっている。486は大形の壺で、体部外面はタタキの後にナデている。内・外面に指押さえが顕著で、内面の底部付近は指で縦方向にナデている。胎土には結晶片岩を多量に含んでいる。490は底部の側面から下部にかけての穿孔が現存で1個ある。491は底部側面に指押さえを行う。493の外面はヘラミガキと考えられるが、その単位は太い棒状工具か小石によるものと思われる。493～495は短い脚台が付く。

496～507は鉢であるが505・506以外は台付鉢になる可能性が高い。496・499は高杯に分類したほうが良いかも知れない。496の口縁部はほぼ直立して立ち上がり、端部は平坦な面をもつ。端面と口縁部外面には細かい刻み目を施した後に凹線を巡らせている。497の口縁部は丸みを帯びており肥厚している。外面に刻み目をもつ。498は口縁部端部上面に円形浮文を貼り付ける。499の口縁部は内湾しており外面に凹線を巡らせる。500の口縁部端部上面は内傾している。内・外面にはヘラミガキを施している。501は口縁部端部を内・外面に向かって拡張している。502は口縁部端部上面を強くナデた後に円形浮文を貼り付けている。503の口縁部は強く内湾し、外面側を拡張している。504の口縁部端部上面は幅広で凹線が巡っている。506の体部は全体に内湾している。口縁部外面には刻み目を施した後に凹線を巡らせている。508～510は口縁部が外側に向かって屈曲する鉢である。

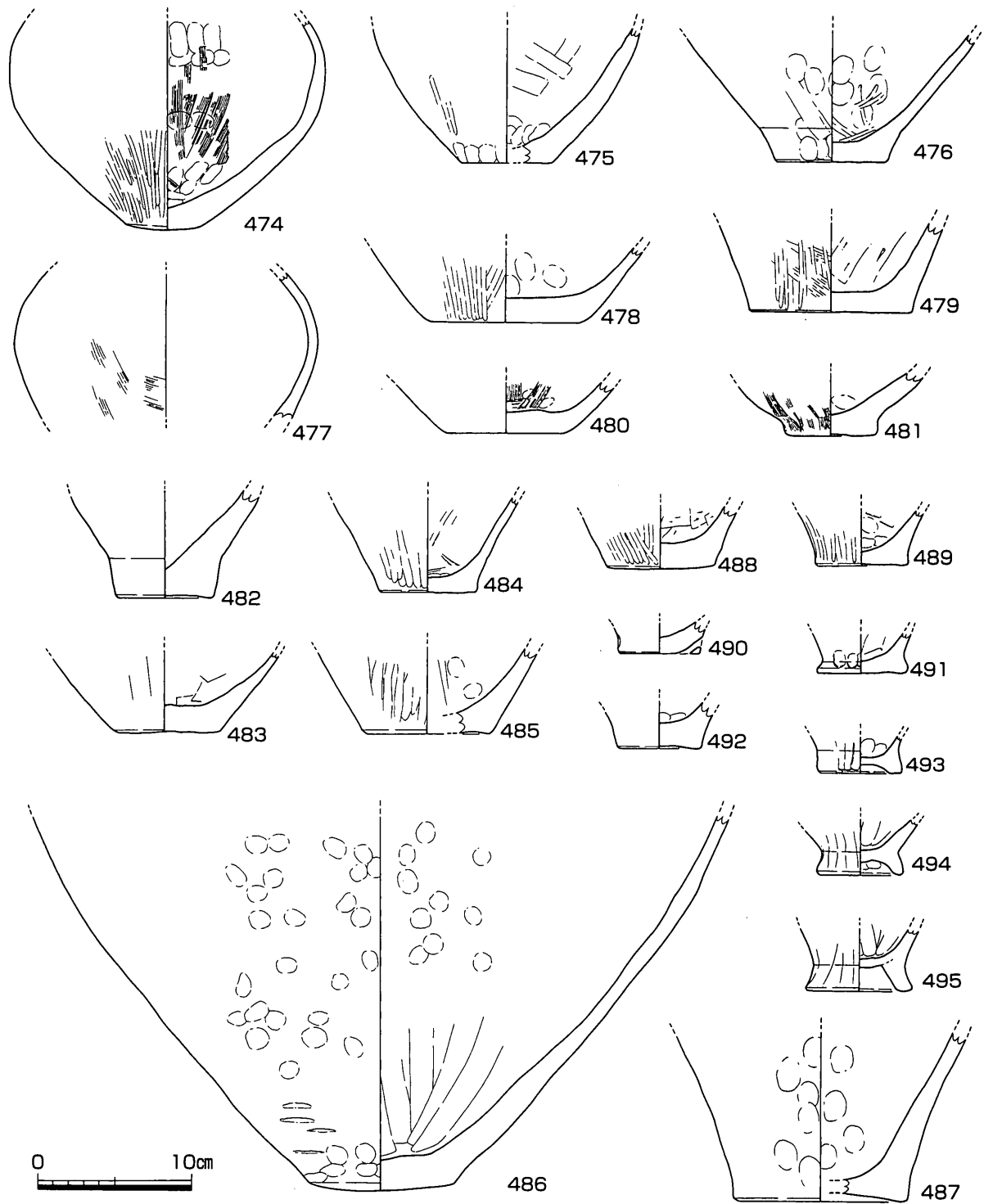
511～517は高杯の脚部あるいは台付鉢の台部である。511の外面のハケ目は彫りが深い。512は緩やかに外反する脚部で、外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリとなっている。端部付近に2個1単位の円形



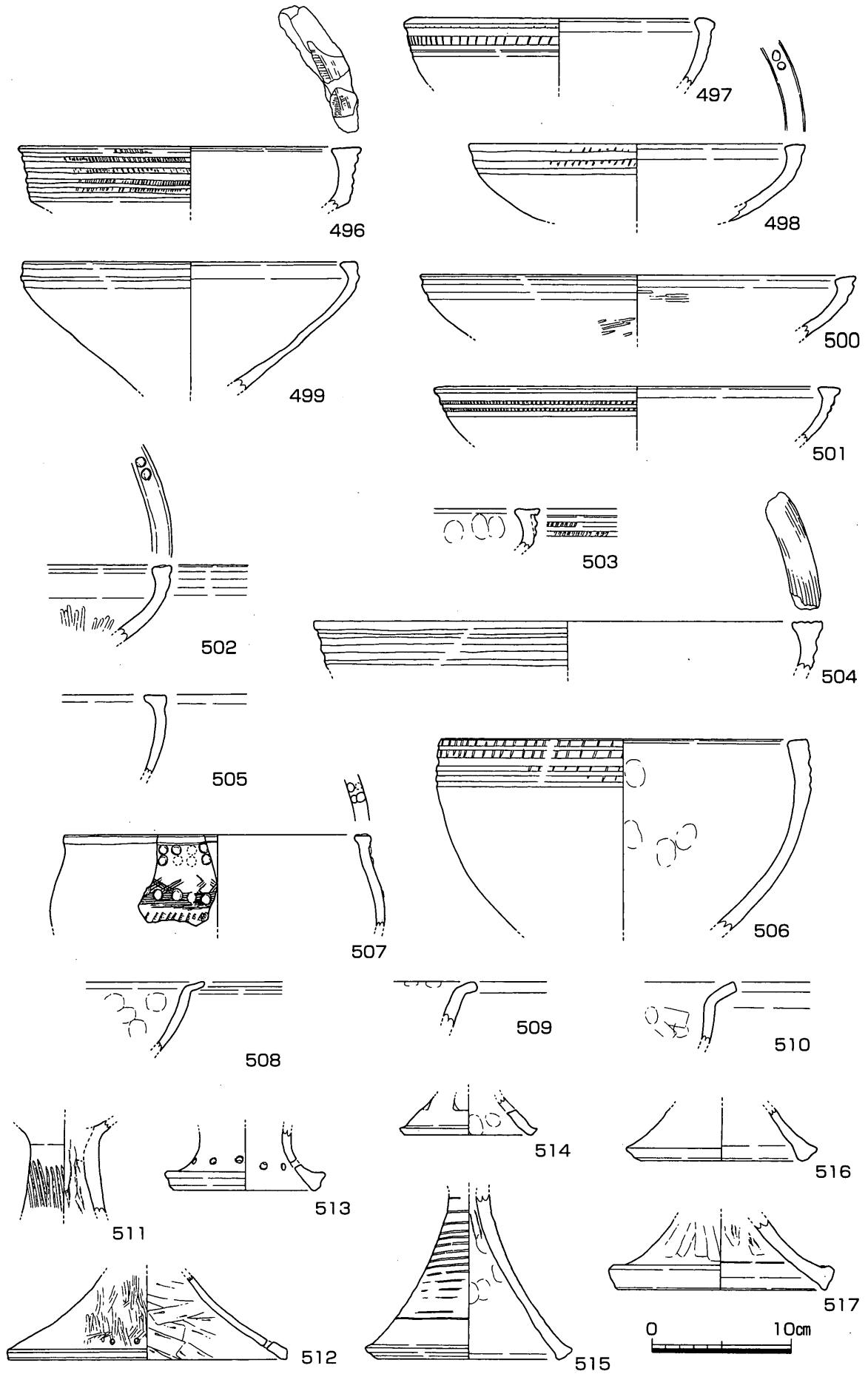
第129图 IV区第2面集石群(旧F2区)出土遺物(4)(1/4)



第130图 IV区第2面集石群 (旧F2区) 出土遺物 (5) (1/4)



第131图 IV区第2面集石群(旧F2区)出土遗物(6)(1/4)



第132图 IV区第2面集石群(旧F2区)出土遺物(7)(1/4)

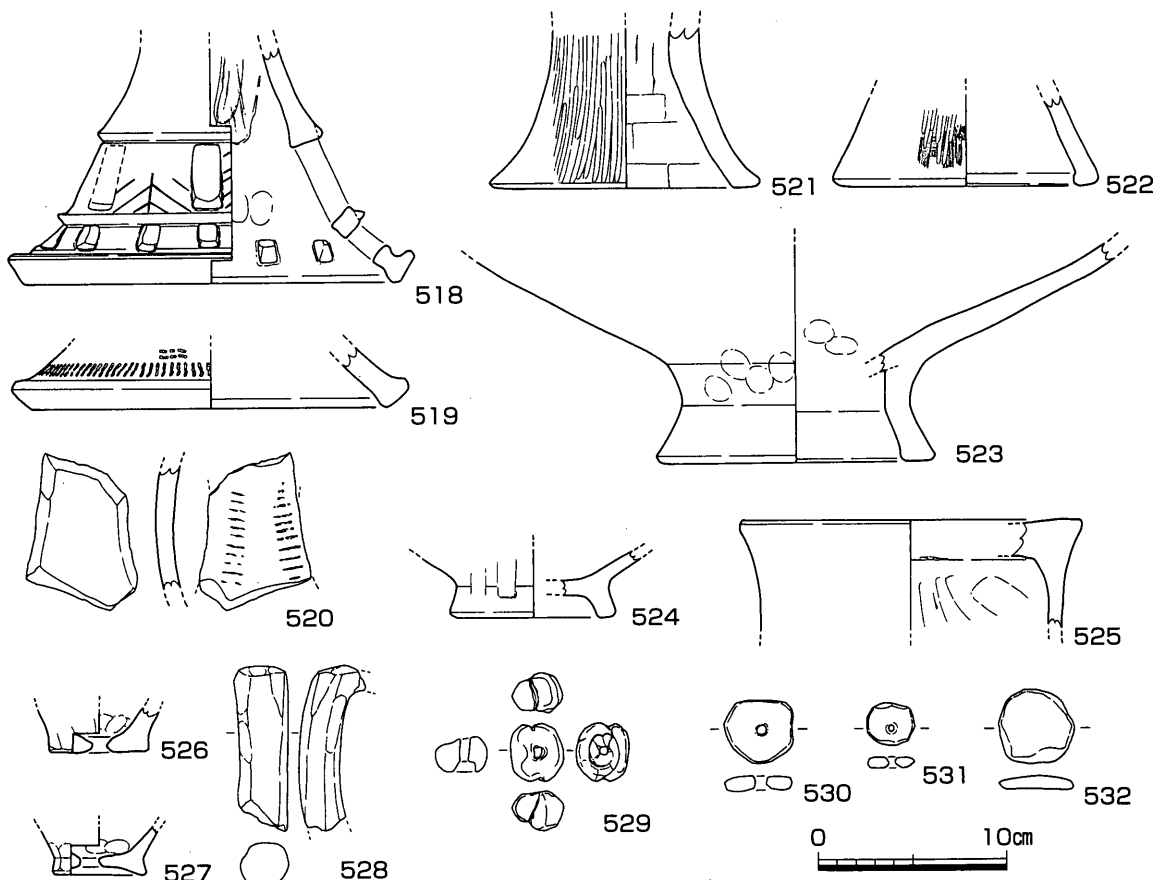
の透かし穴がある。513の端部は肥厚し外面に凹線を巡らせる。円形の透かし穴が現存で4個ある。514は三角形の透かし穴をもつ。515は長い脚部で外面にヘラ描沈線を15条巡らせている。516・517の端部は肥厚している。高杯か台付鉢になるか不明である。

518は台付鉢の台部ではなからうか。518は長方形の透かし穴が2段あり、上下の透かし穴の間には突帯を貼り付けている。上段の透かし穴の間には綾杉文に近い文様が施されている。端部は上方に大きく拡張しており、外面に幅広の面を作っている。

519・520は器台と考えられる。519の端部は肥厚している。端部外面には縦方向の櫛描列点文を施し、その上には同じ原体により横向きに櫛描列点文を加えている。520は体部透かし穴部分の破片である。外面には横向きの櫛描列点文が縦方向に施されている。519と同一個体の可能性がある。

521～523は台付鉢の台部である。521の外面にはヘラミガキを丁寧に施している。522の端部は内側に肥厚している。外面にはハケ目の後にヘラミガキを加えている。523は台部内側を強くナデている。円盤充填の剥離痕が認められる。

525は台である。上面は平坦な面をもつ。526・527は甌、528は水差し、あるいは鉢の把手である。529は土製の玉で、歪んでいる。中央部に穿孔されているが片面の穿孔部は広がっている。また側面には土錘のように切れ目を入れている。530・531は紡錘車、532は紡錘車の未製品でまだ穿孔を施していない。



第133図 IV区第2面集石群(旧F2区)出土遺物(8)(1/4)

533～656は石鏃で、533～574は凹基である。534・537は細長く平基に近い。540は不整形である。製作時に欠損したものを再加工したのかも知れない。541の基部は不揃いである。542は鏃身に主要剥離面を残している。543は片側に自然面を残している。545は寸詰りな感じを受ける。先端部付近には弱い敲打痕が認められる。546は製作時の欠損で、先端部が裂けている。547は基部の両端部が欠損している。548は先端部に敲打痕と研磨部分が認められる。これは楔形石器の上部の敲打部分を含んだ剥片を使用したため、敲打部分を研磨して尖らせようとしたためと考えられる。552は鏃身中央部分が厚い。554の先端部は丸みを帯びている。556の基部は僅かに凹基ながら、全体に丸みを帯びている。557の基部は細く突出している。560・561・563・572の基部は不揃いである。564の鏃身は幅広である。568の先端部は丸みを帯びている。570は片側に主要剥離面を残している。571の先端は鋭利さがなく、鏃身も厚手である。

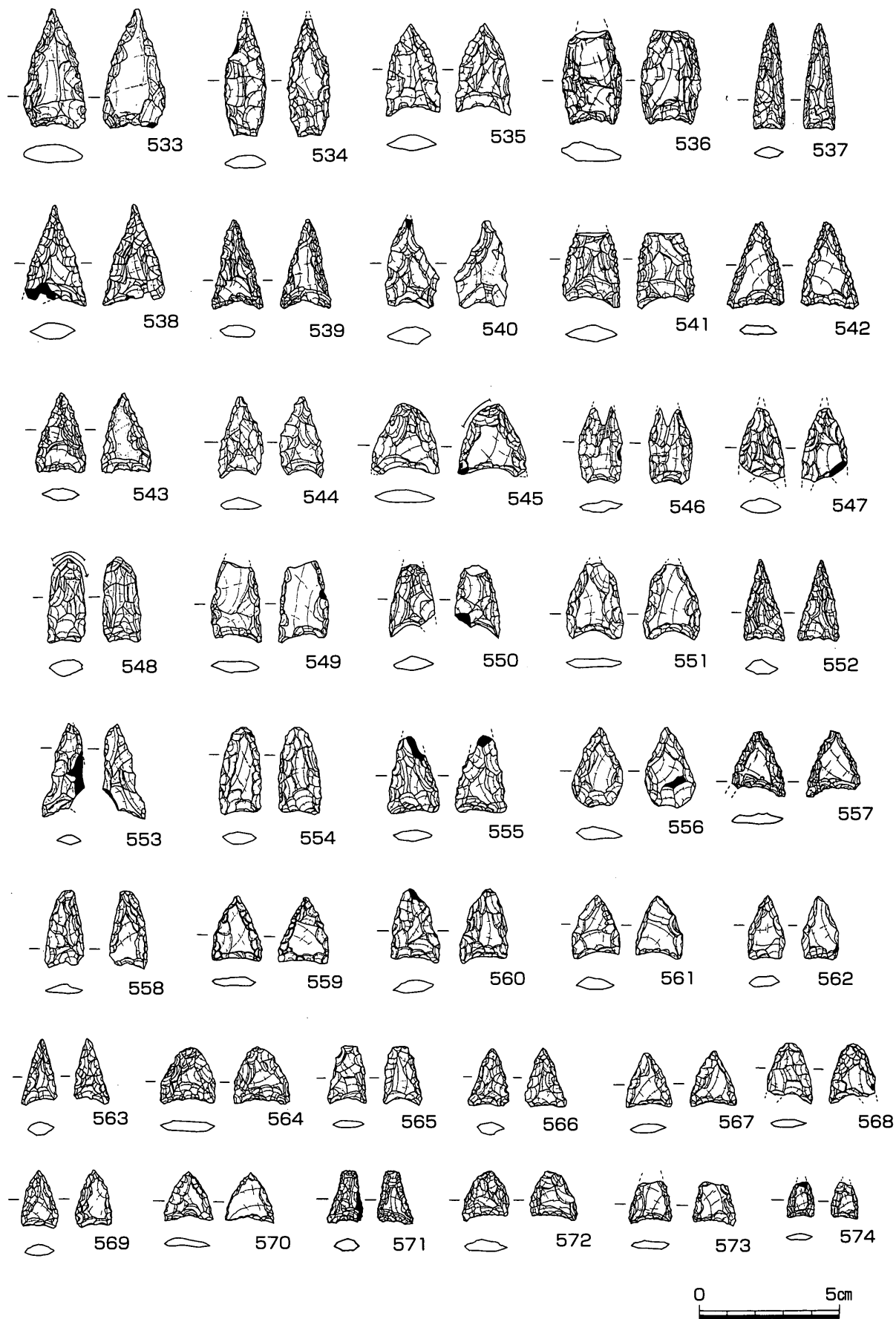
575～597は平基の石鏃である。575の基部は片側が少し突出している。576の鏃身は厚手である。580は片側に主要剥離面を残しており、調整も全体に雑である。582の側縁部は鋸歯状で鋭くなっている。586・589は先端部に鋭さがない。588の平面形は正三角形で側縁部も丁寧に調整加工している。590は側縁部の片側が直線的で、反対側は丸みを帯びている。591の片面の調整は粗い剥離のままである。593の鏃身は非対称形である。596の基部は平基に分類したが、若干丸みを帯びている。

598～609は凸基の石鏃である。598は全体に丁寧に調整を施している。599は鏃身の上半部の両側が欠損している。600・609の基部は欠損しているが、鏃身の残存部分の形状から凸基になると考えられる。601の基部は僅かに茎状に突出している。602は断面が三角形で細長い。片側は丁寧に調整しているが反対側は雑である。先端部は欠損している。石錐に分類したほうが良いかもしれない。603は大形のもので周囲を加工している。片側に主要剥離面を残している。607は基部の片側に敲打痕がある。608は鏃身下部の形状から凸基としたが、基部は平基に近い。

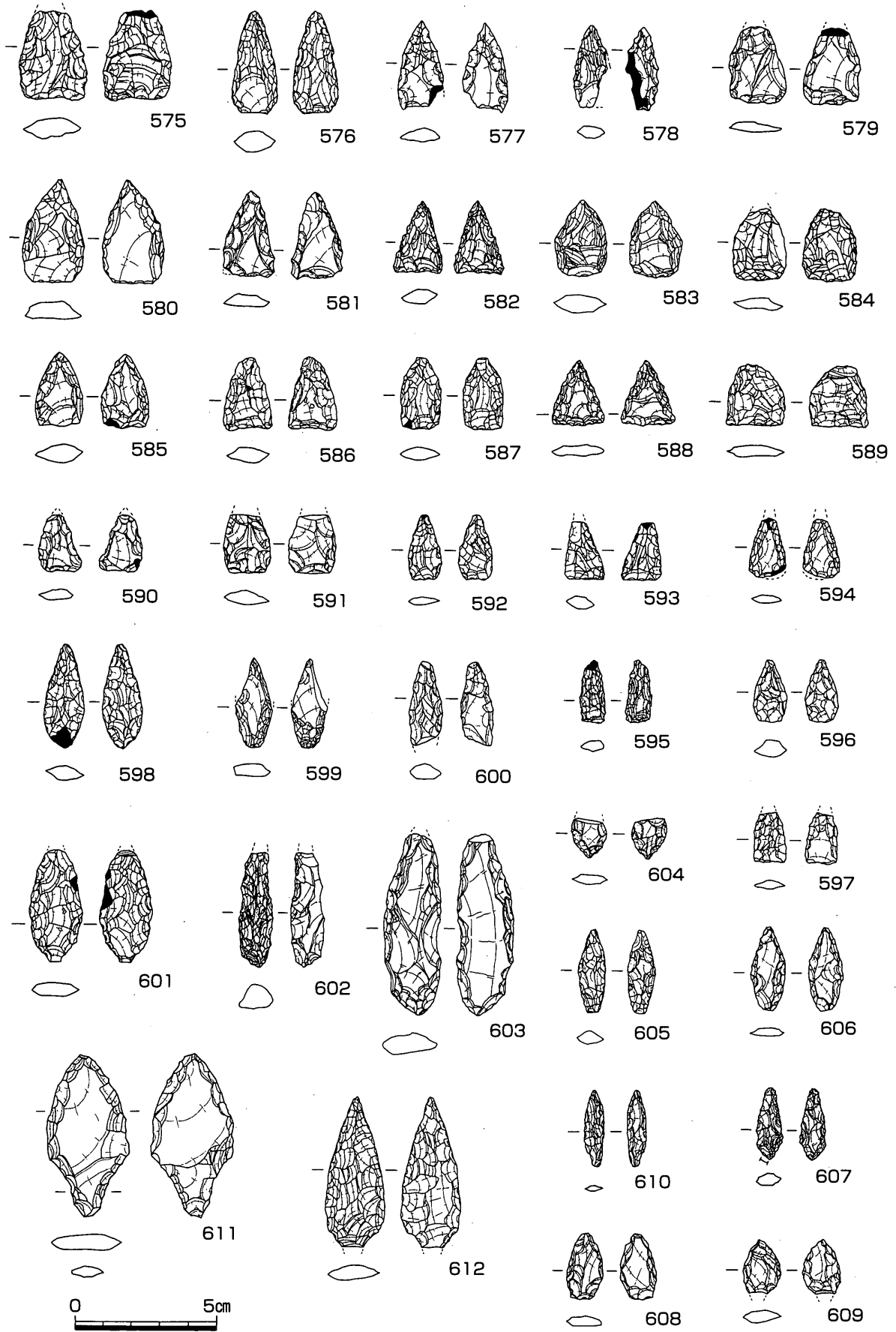
610～640は凸基有茎式の石鏃である。610・635は茎部と鏃身との境は片側が不明瞭である。611は鏃身から茎部の周縁のみを調整している。612の茎部は欠損しているが、鏃身は丁寧に調整を施している。613の鏃身から茎部を作り出している部分は左右不均等である。617は茎部が幅広である。618は基部を抉るようにして茎部を作り出している。621は両側を大きく剥離することによって茎部を作り出している。626・633は鏃身と茎部との境は不明瞭である。628は全体に不整形である。先端部が石錐の錐部とも考えられるが、特に磨耗痕などは観察出来なかったので石鏃とした。638は先端部と茎部の両側縁部に摩滅痕が認められる。形態的には凸基有茎式の石鏃であるが、あるいは両頭の石錐の可能性もある。639は細身で部分的に自然面を残す。

641～655は基部が欠損している石鏃である。641・643は細長いもので、凸基になりそうである。642は大形の石鏃で片面に主要剥離面を残している。644の基部は凸基有茎式のように見えるが、突出部分は欠損していない。この部分を茎部とするか、あるいはこの部分を最終的に除去して平基にする予定であったのかは不明である。647は先端部と鏃身の側縁部中央部分が研磨されている。先端部が研磨されていることから石錐とも考えられるが、側縁部も研磨されていることから、この研磨は先端部や側縁部を鋭利にするための研磨と考え、石鏃に分類しておく。651は側縁部が調整されているものの、全体的には未製品に近い。

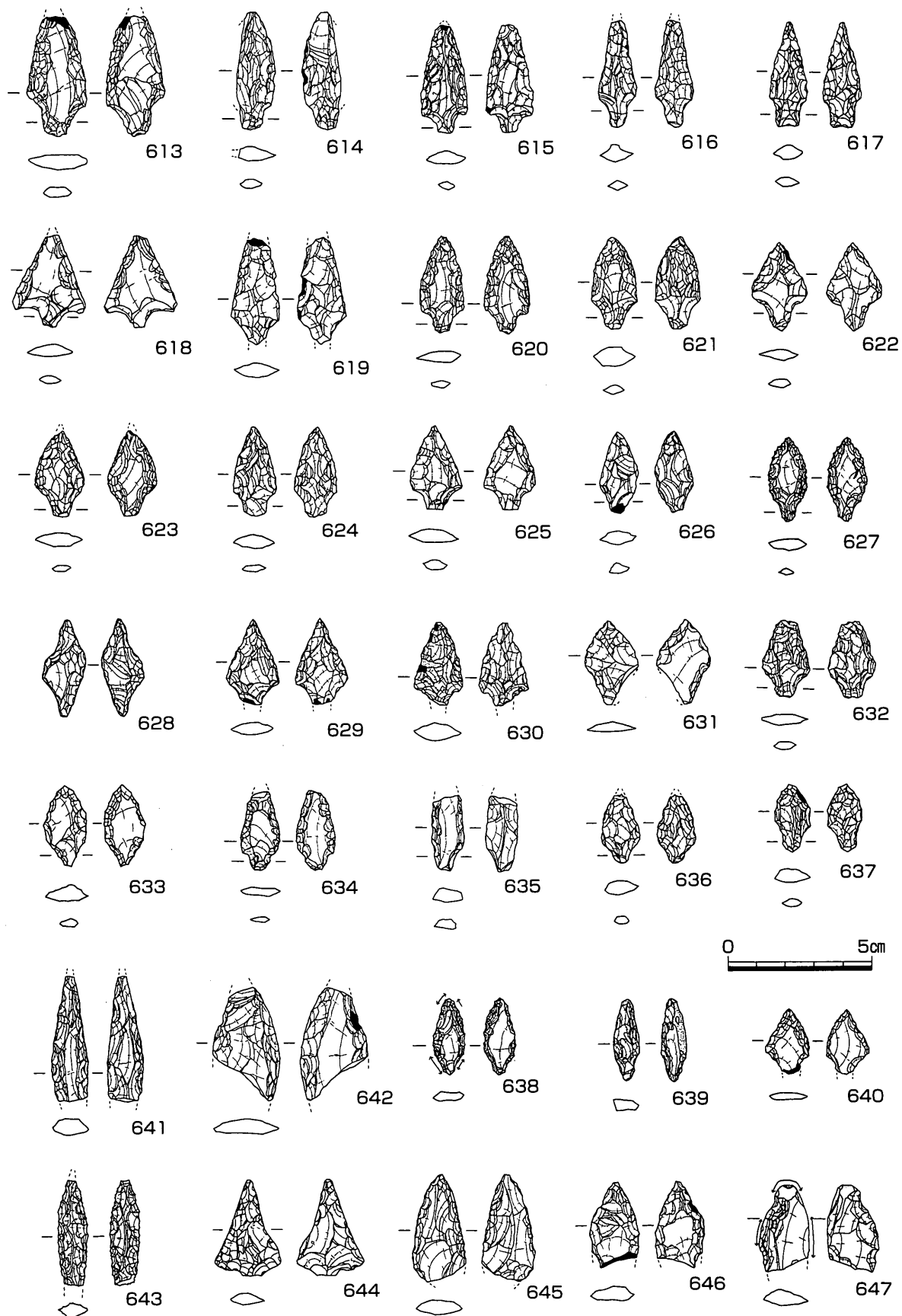
656～677は石鏃の未製品で、大部分は側縁部の一部に調整を施しただけの未製品で、調整はまだ片側だけのものが多い。659・662・663・665は平基になるものと考えられる。666～670・672は凸基になるもの



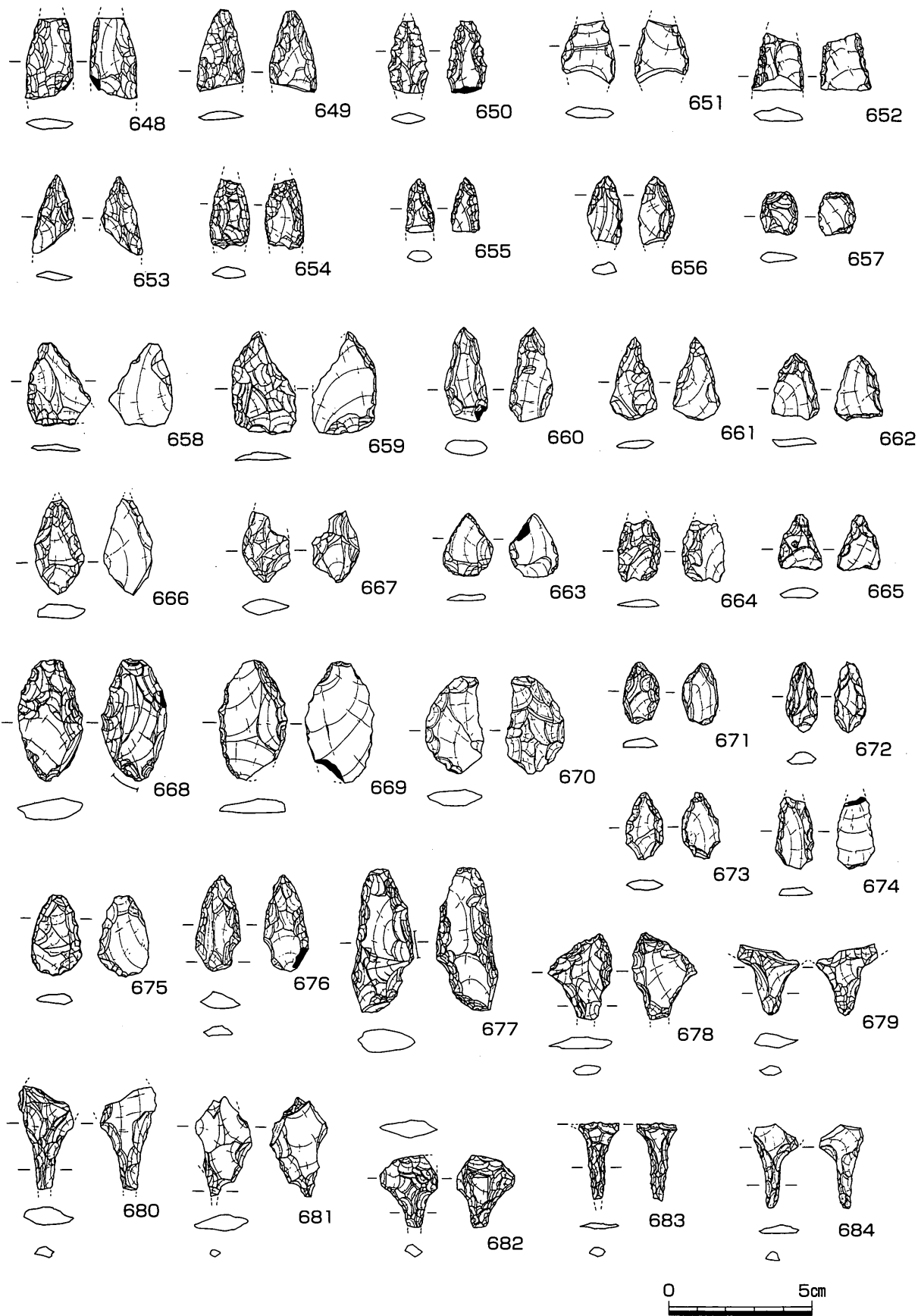
第134图 IV区第2面集石群 (旧F2区) 出土遺物 (9) (1/2)



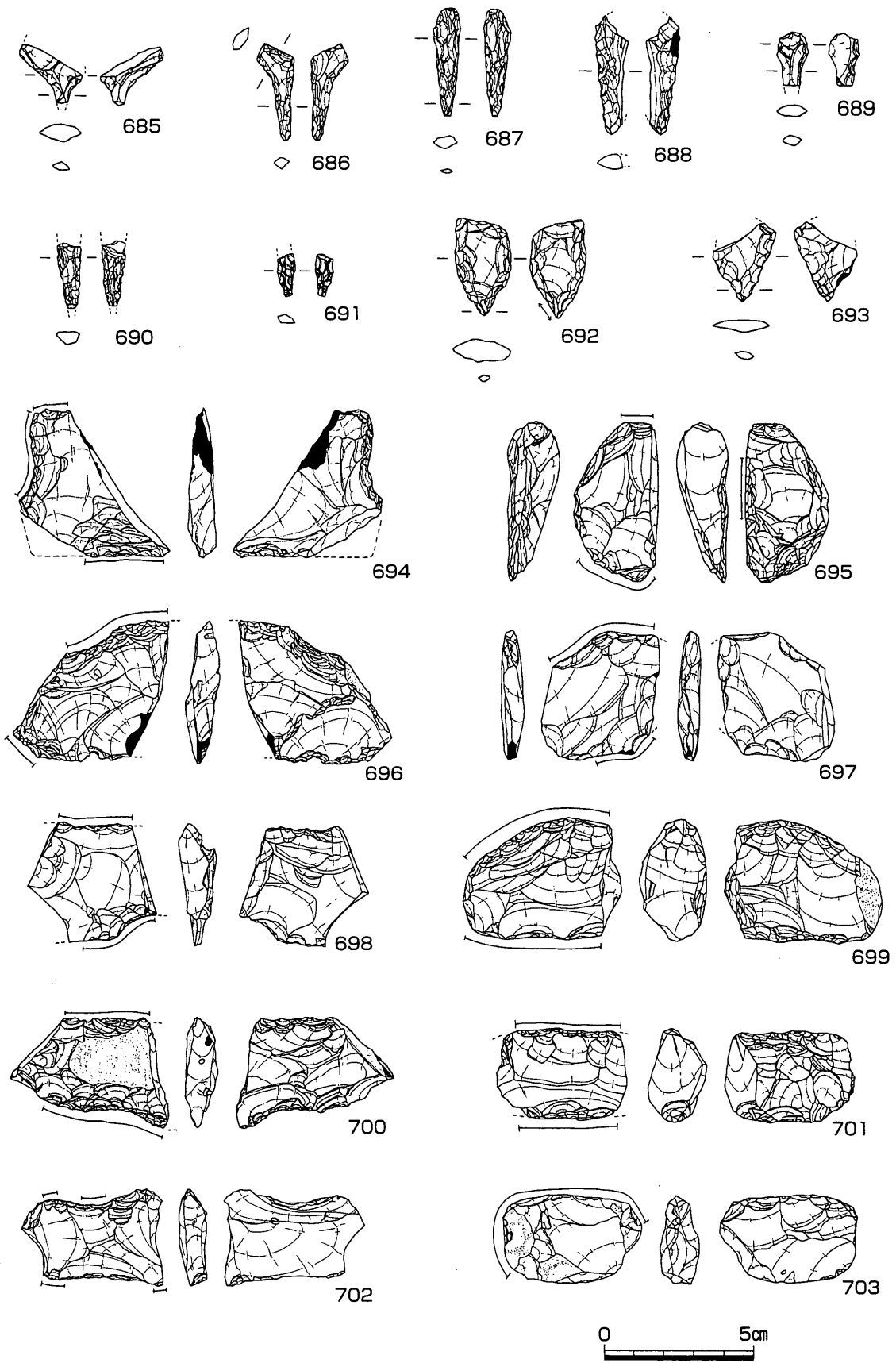
第135图 IV区第2面集石群(旧F2区)出土遗物(10)(1/2)



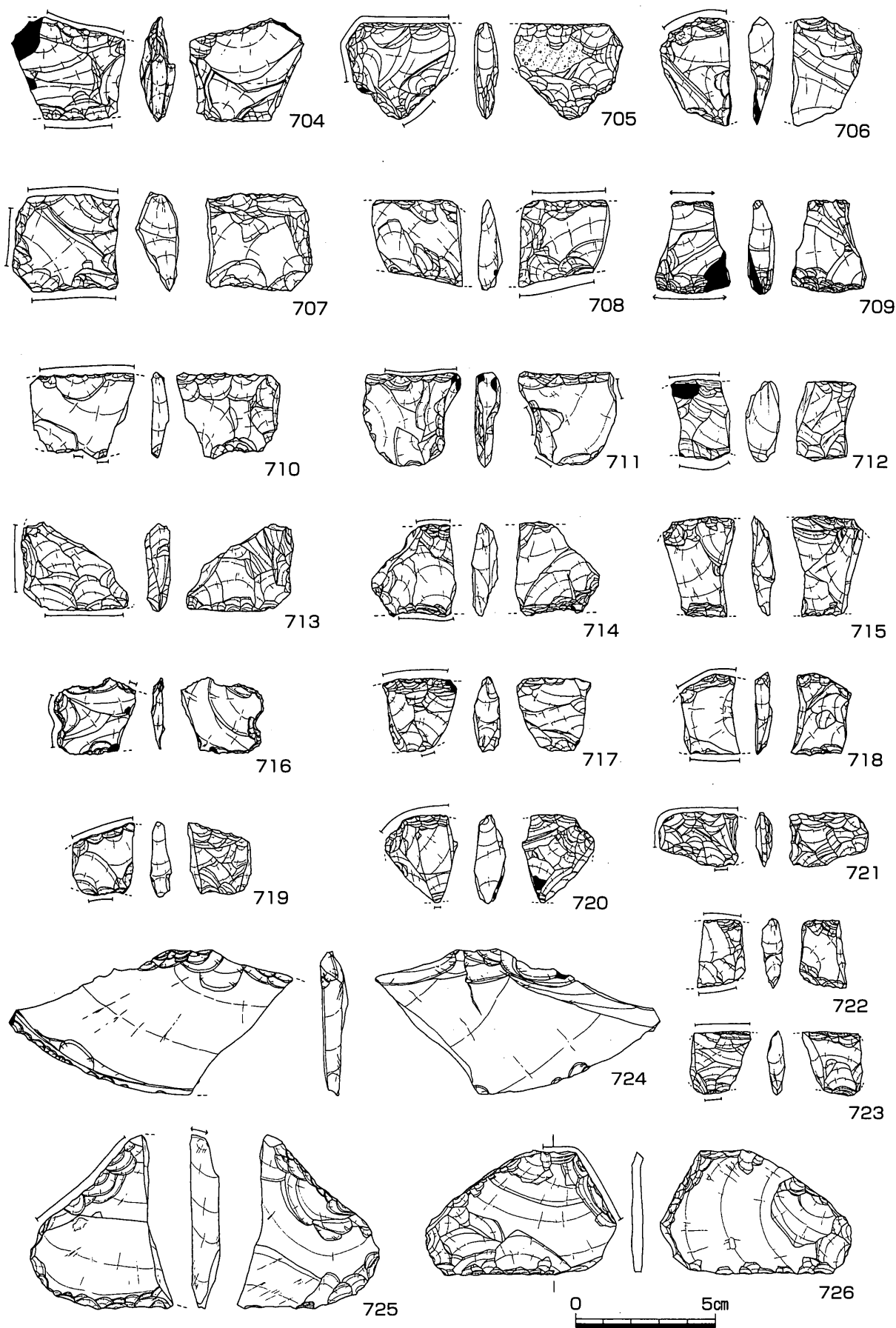
第136图 IV区第2面集石群 (旧F 2区) 出土遺物 (11) (1/2)



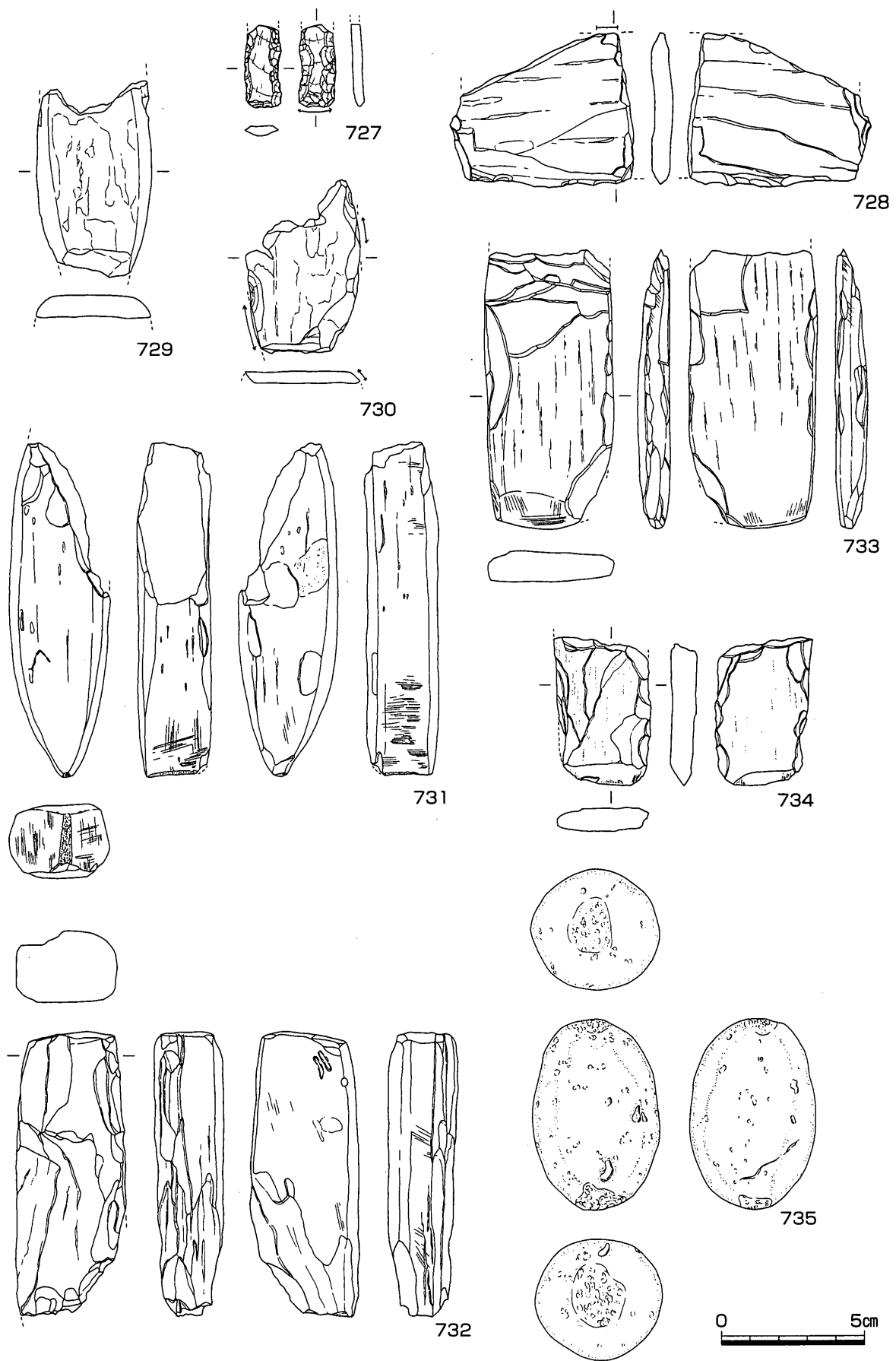
第137图 IV区第2面集石群 (旧F2区) 出土遗物 (12) (1/2)



第138图 IV区第2面集石群 (旧F 2区) 出土遺物 (13) (1/2)



第139图 IV区第2面集石群(旧F2区)出土遗物(14)(1/2)

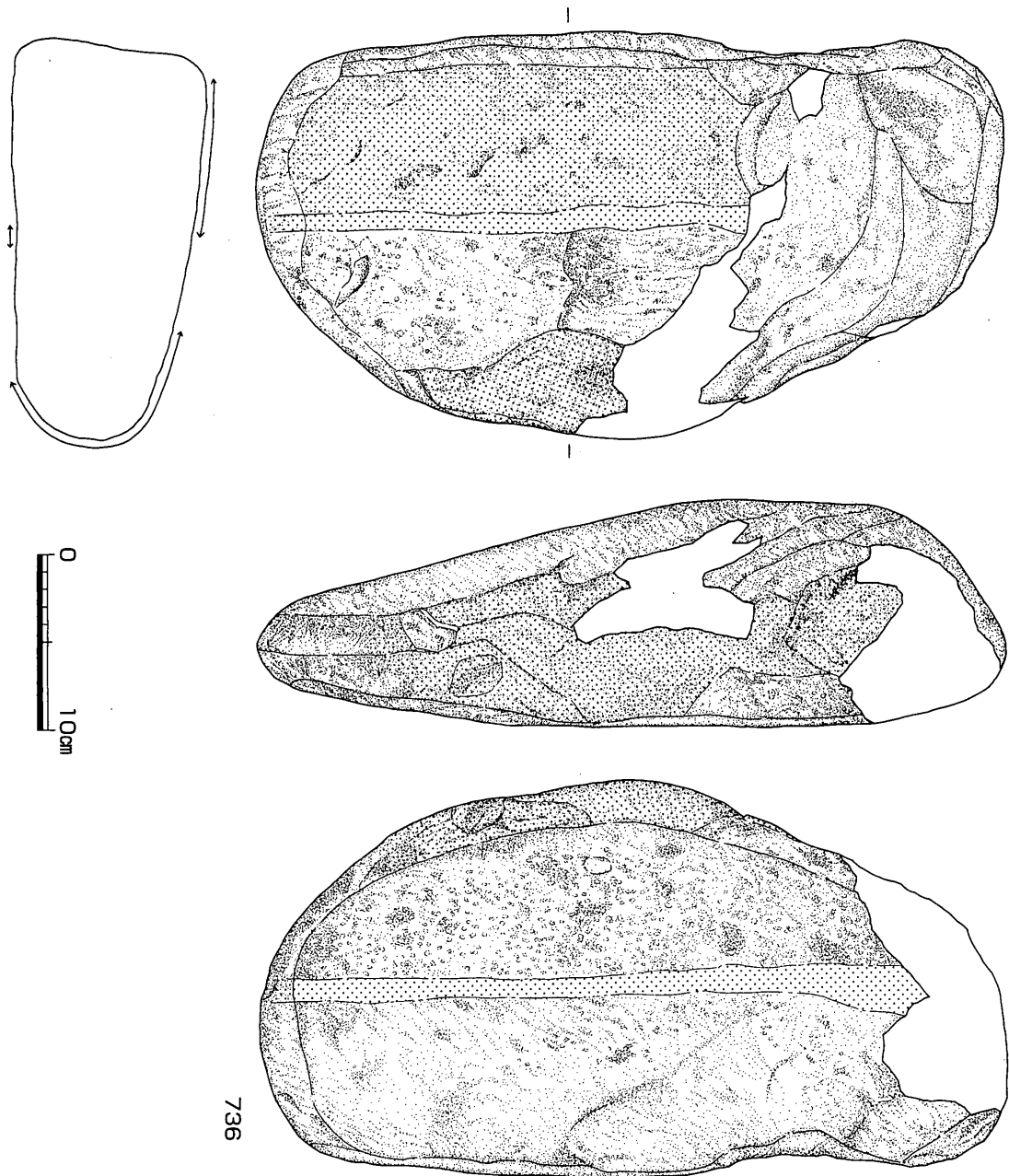


第140图 IV区第2面集石群(旧F2区)出土遺物(15)(1/2)

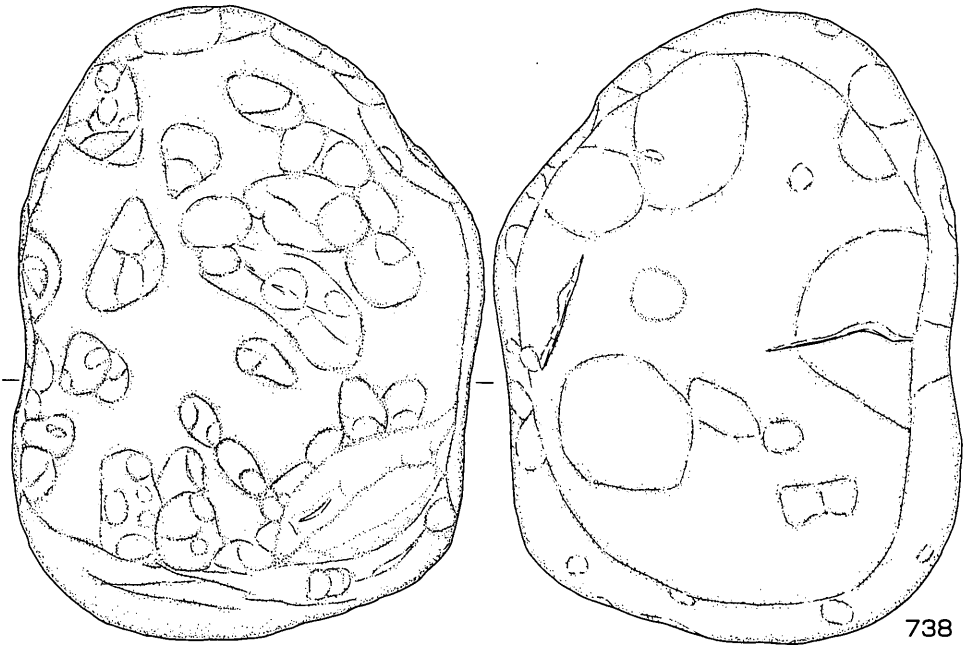
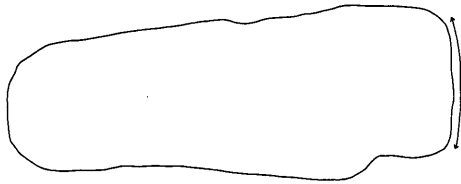
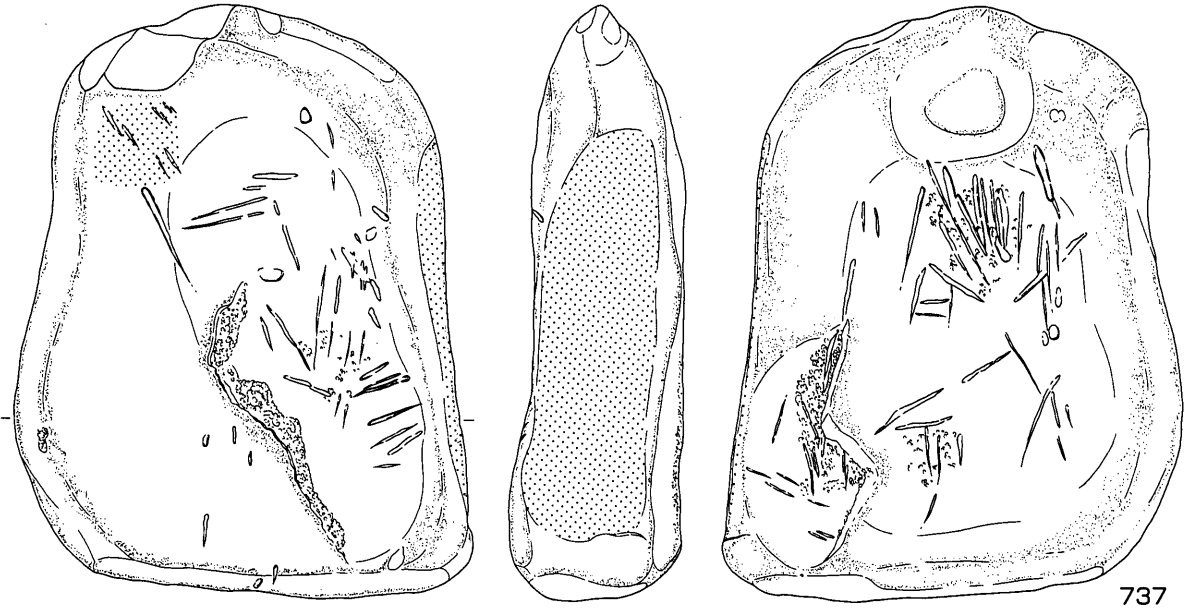
と考えられる。668は楔形石器をそのまま石鏃に転用しようとしているものである。基部の側縁部には敲打痕が残り、楔形石器時の截断面が認められる。石鏃を作成するための調整剥離はあまり行っていない。673・676・677は凸基有茎式の石鏃になると考えられる。674は縦長剥片を使用している。676・677の基部は片側が未完成である。

678～693は石錐である。681の錐部は小さく、角度のある剥離によって作り出している。683～686のつまみ部は小さい。687・688は棒状の石錐でつまみ部と錐部の境がない。692・693は石鏃のようなつまみ部の先端に小さな錐部が付いている。692の先端部は少し摩滅している。

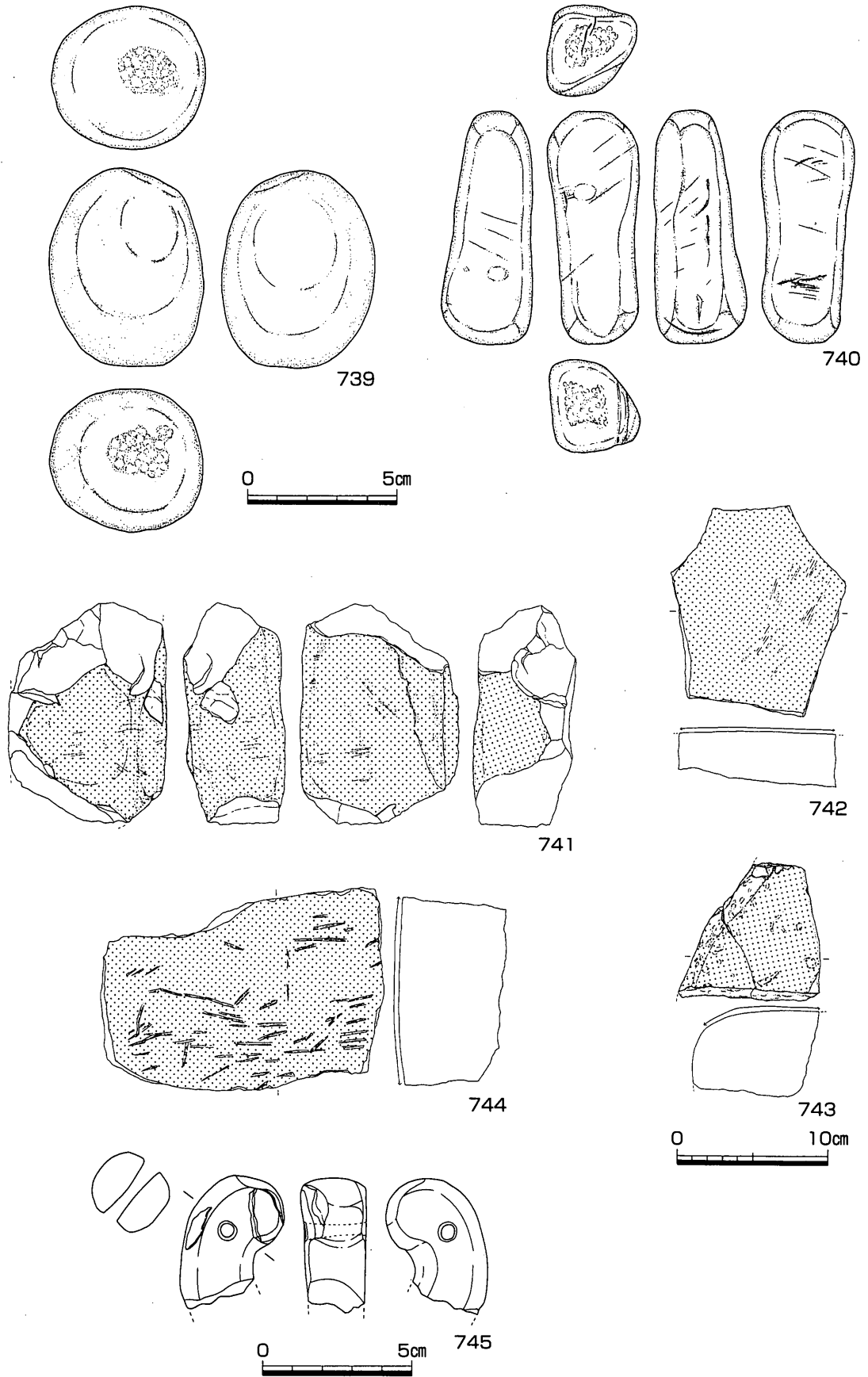
694～723は楔形石器である。基本的には上下に敲打痕を残している。截断面に両極打撃の痕跡が認め



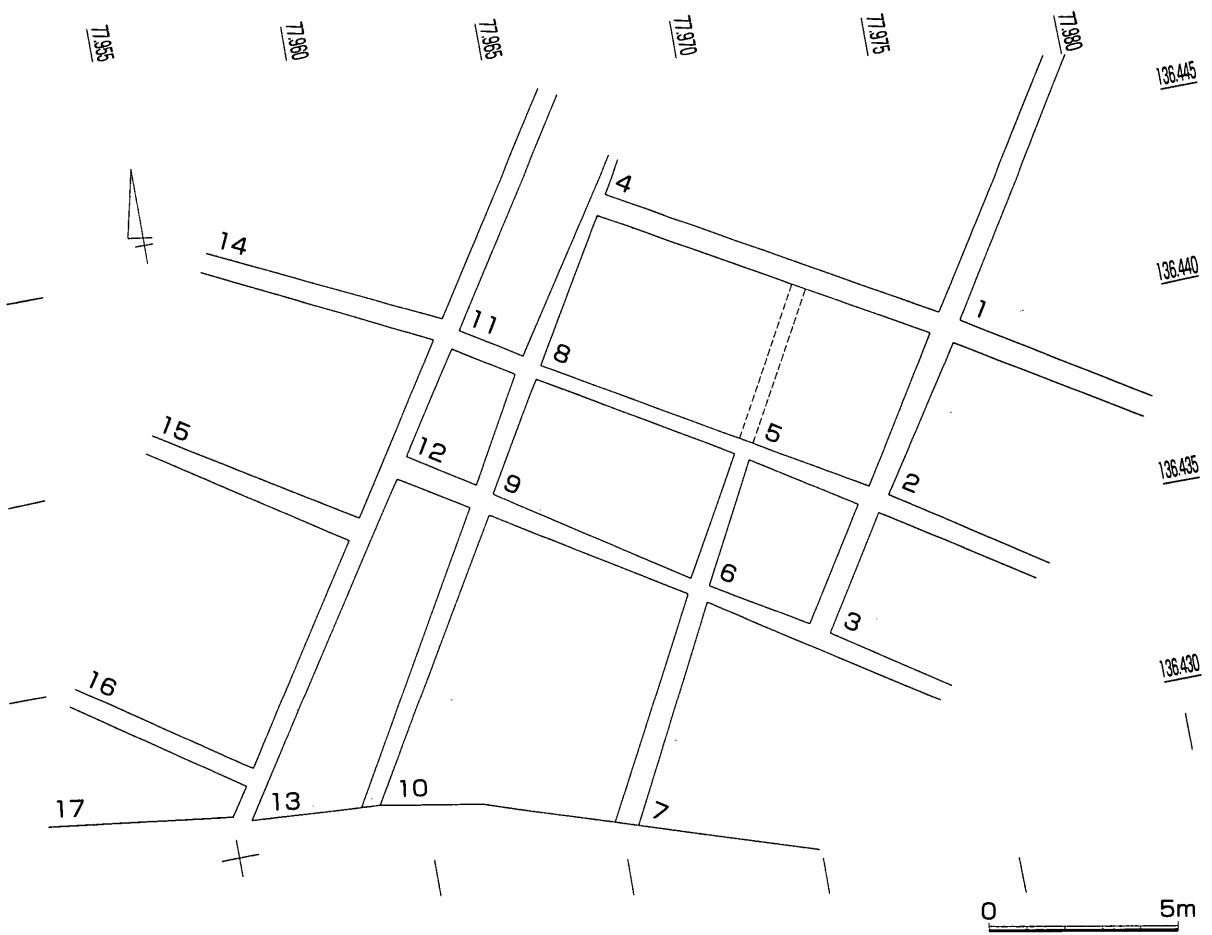
第141図 IV区第2面集石群(旧F2区)出土遺物(16)(1/4)



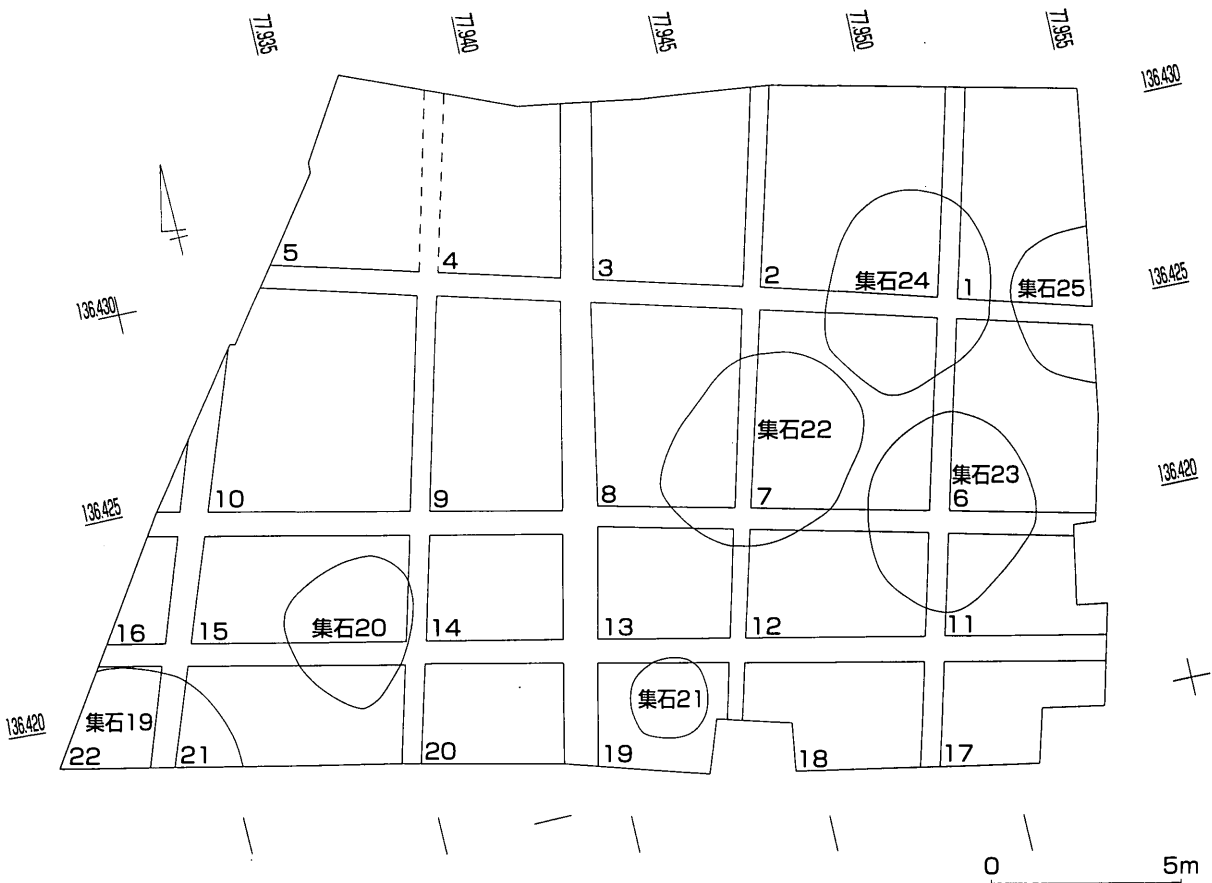
第142图 IV区第2面集石群(旧F2区)出土遗物(17)(1/4)



第143图 IV区第2面集石群(旧F2区)出土遺物(18)(1/2、1/4)



第144図 IV区第2面集石遺構 (旧F1区) グリッド割図 (1/200)



第145図 IV区第2面集石遺構 (旧F2区) グリッド割図 (1/200)

られるものが多くあり、中には一つの剥離面に上下からのリングがぶつかっているものもある。696は側面部に自然面が残っている。699・701は厚手である。713は截断面に前後関係があり、直交する辺に敲打痕があることから、加撃する部分を変えながら使用していたことが分かる。716は側縁部に挟りがあり敲打痕が認められる。石庖丁を転用したにしては小さすぎる。

724～726はスクレイパーである。724は主要剥離面を大きく残している。刃部の調整は少ない。側面は背部の調整の後に分割されたことが認められ、スクレイパーを楔形石器に転用しようとしているのかも知れない。725の刃部は片面側からであるが丁寧に調整している。726は全体に薄手で、背部には自然面が残り弱い敲打痕が認められる。

727は縦長剥片の側縁部と端部に調整を施したものである。端部は使用のためと考えられる磨耗痕がある。鑿のような形状である。

728は結晶片岩製の打製石庖丁で、側縁部上半は欠損しているが、挟りの一部が残っている。僅かに残る背部には敲打痕が認められる。

729～732は柱状片刃石斧である。731の刃部は潰れて平坦になっている。前面側の刃部付近には、使用時とは考えにくい横方向の擦痕がある。732の刃部は欠損している。

733・734は扁平片刃石斧である。733の刃部は潰れて鈍くなっている。734の刃部の研ぎ出し面の大きさには差があるが、両刃というべき形状である。

735・739・740は両端部を使用した敲石である。

736は砥石であるが、表裏の中央部分に筋状に研磨痕が続いている。737は台石兼砥石で、表裏を台石として使用し、一側面を砥石として使用している。744も台石兼砥石で、両者とも筋状の痕跡が多く認められるが、これは楔形石器を上置いて打撃を行った痕跡と考えられる。

745は結晶片岩製の大型の勾玉である。下半部は欠損しているが推定復元で8cm前後になりそうで、かなり大型であることが分かる。頭部には両面から穿孔されている。全体に丁寧に研磨している。

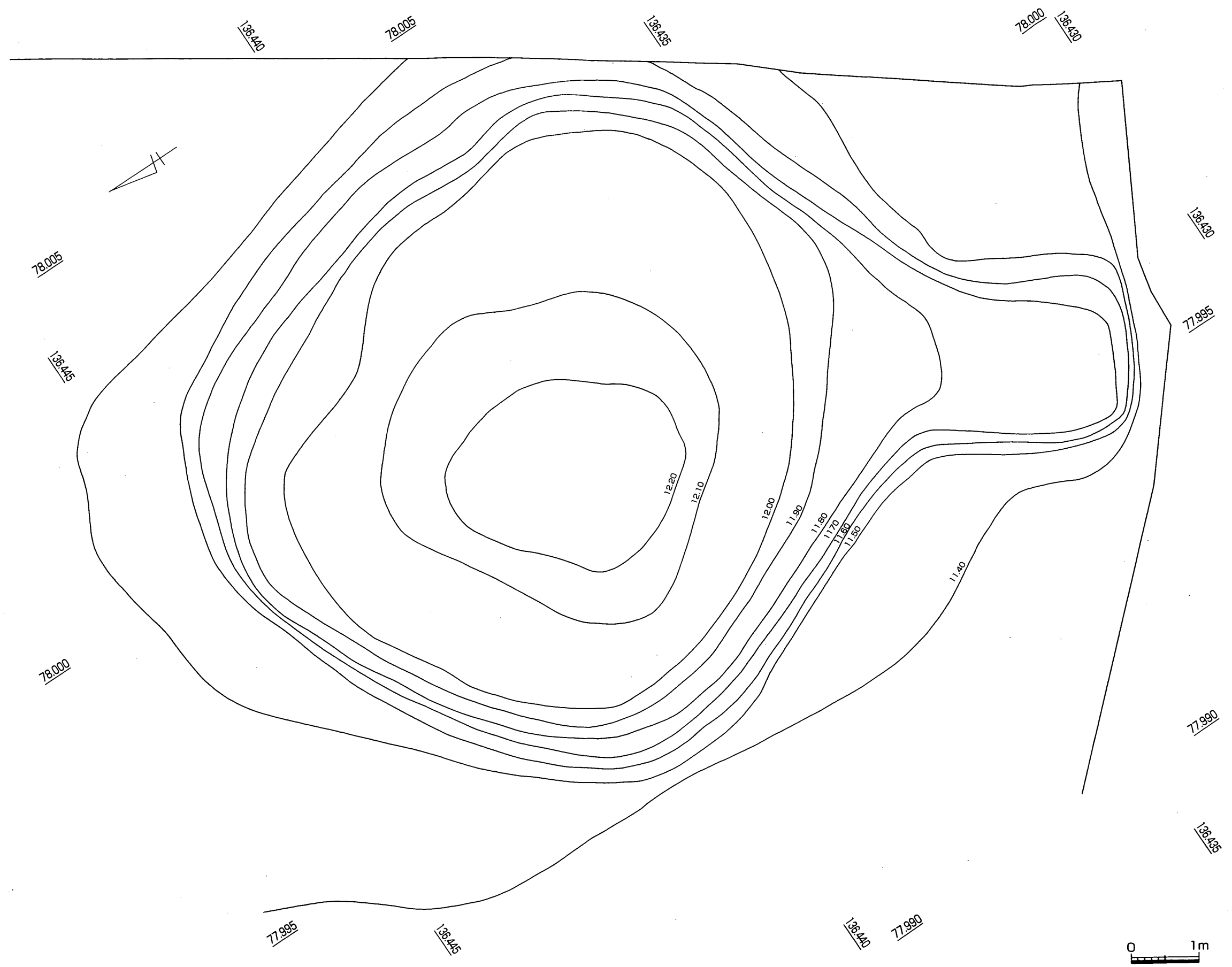
集石4 (第146～157図)

調査区北東部の旧F1区東側壁際で検出した集石遺構である。平面形は円形で、直径は8.0～9.4mで南北方向が少し長くなっている。頂部は第1遺構面ですでに確認していたもので、保存のため表面部分と端部の調査のみを行っている。集石4は全体に塚状に盛り上がり、その端部は標高11.7m前後である。西側部分の土層ベルトB-B'と交わる部分の端部は標高11.55mと他に比べて低くなっている。これに対して頂部は標高12.2～12.25mである。従って平均的な高さは60cmほどになる。

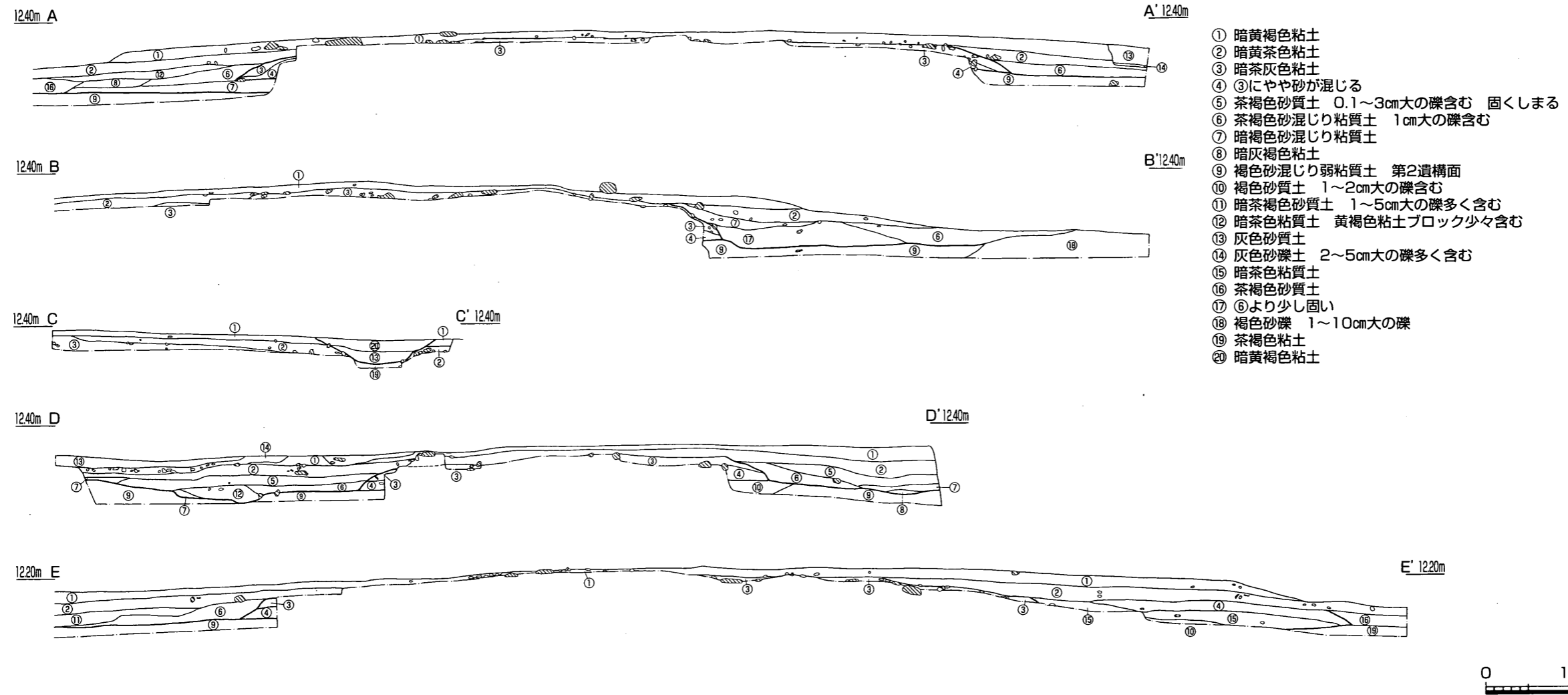
また土質の差により平面的に掘り下げていった結果、南西部で土層ベルトのE'方向に突出する部分が検出された。平面形は長方形で円丘部分から3.7m南西方向(E'方向)に伸びており、端部は標高11.6mになっている。幅は2.5mである。この突出部分の上面は端部方向(E'方向)に向かって緩やかに下っており、上面の礫は端部方向に半分ほどあるが、円丘部分に比べると少ない。土層ベルトで僅かに観察できた所見では、この突出部分は円丘部分の端部に④暗茶灰色粘土と⑤暗茶色粘質土を付け加えて一体のものとしているように見える。円丘部の盛土を覆う暗黄茶色粘土層に同時に覆われているが、流れ込みの堆積土とも考えられる。全体の断ち割り調査を行っていないので正確には分からないが、礫の分布状況から判断すれば付随する突出部の可能性は薄いのではなかろうか。礫の分布状況から見ると、むしろ調査区東壁際のC'部分に礫が密集しており、見方によってはこのまま南東方向の調査区外



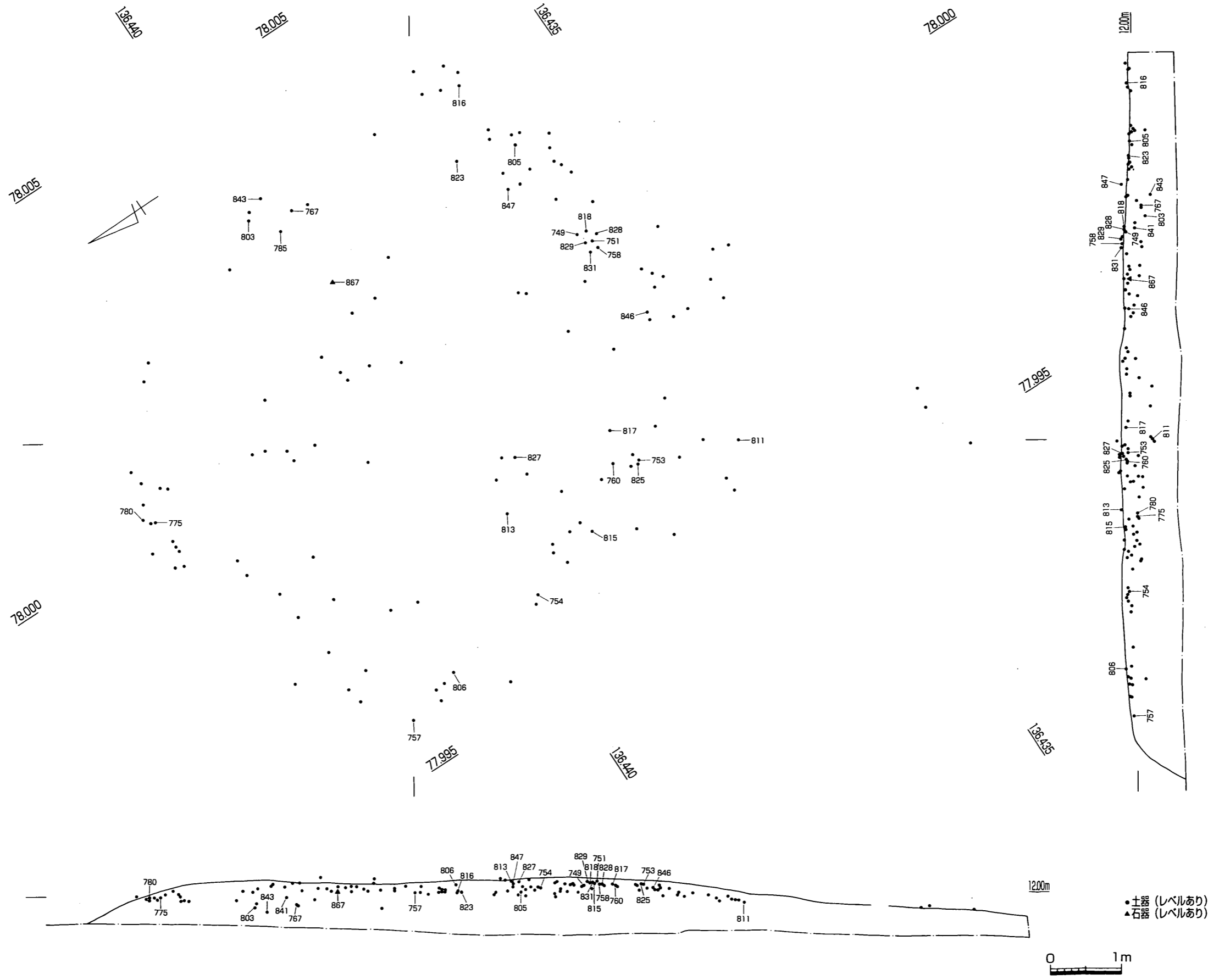
第146图 IV区第2面集石4平·立面图 (1/60)



第147図 IV区第2面集石4測量図 (1/60)



第148図 IV区第2面集石4土層断面図 (1/60)



第149図 IV区第2面集石4遺物出土状況平・立面図 (1/60)

に伸びて行くようで、突出部になるかも知れない。保存されているので今後の調査で突出部になるのか否か確認することが出来よう。

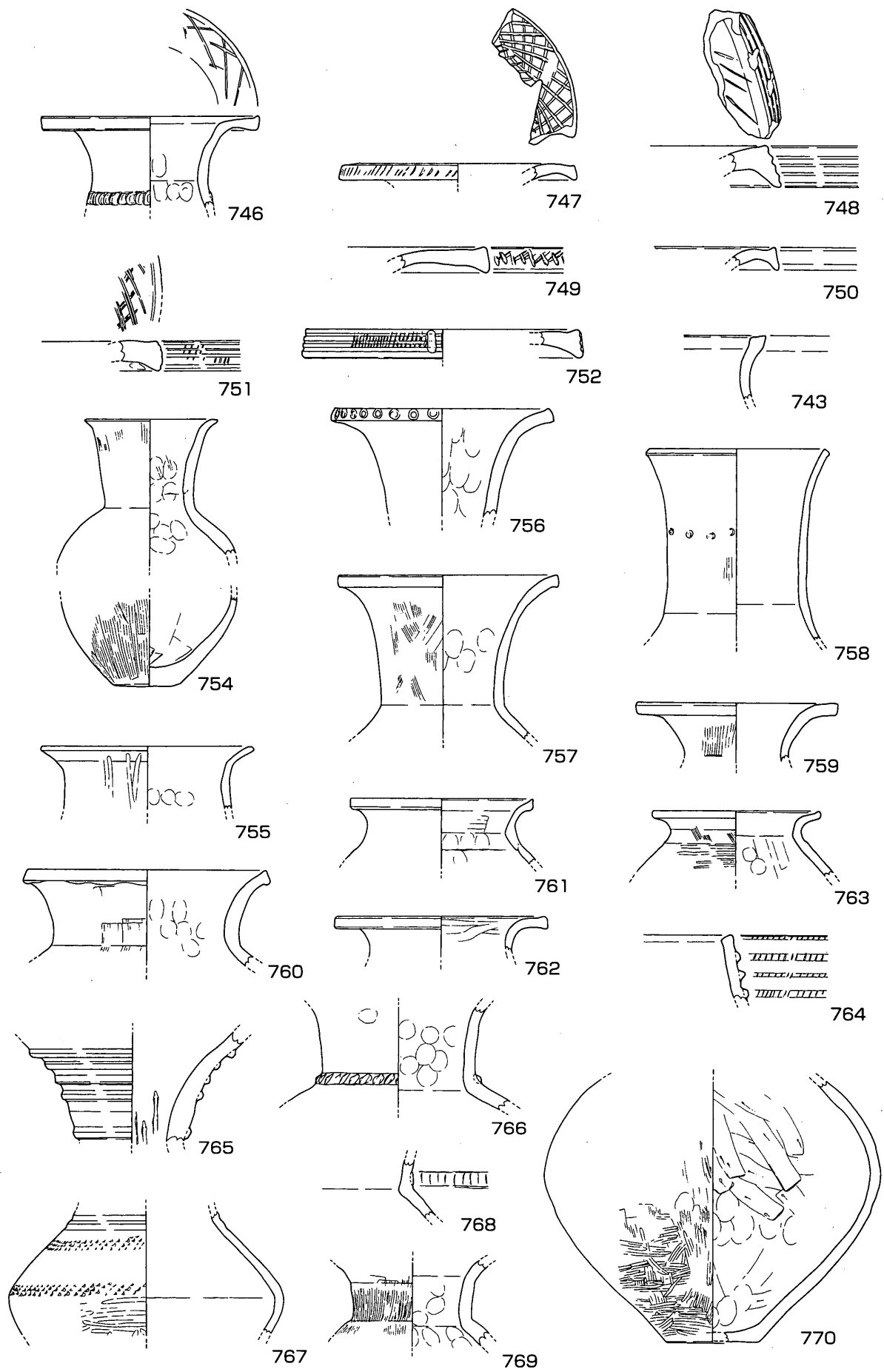
頂部はほぼ平坦であるが中央部分が僅かに盛り上がり、全体が礫で覆われている。礫の大きさは5～20cm大が平均で、大きいものは60cmほどになる。この一回り大きい礫は西側の縁辺部に多く見られる。一際大きい長さ60cmほどの礫を中心に、前後が縁辺部に沿って貼り巡らされているように見えるが、全体としては規則性に乏しい。また中央部分と北東部分には礫の少ない部分がある。礫がどれだけ堆積しているかは不明である。円丘部東側の調査区東壁から70cmほど内側に直線的に礫が疎な部分がある。これは第1遺構面の古代の溝によって壊されているためである。土層ベルトのA-A'、C-C'、D-D'の⑬・⑭・⑯層がそれに相当する。礫の大多数は砂岩で、花崗岩が少量伴っている。

断ち割り調査を行っていないが、盛土は暗茶灰色粘土とこれに砂を含んだ層の、概ね上下2層に大別出来そうである。また端部の傾斜は急な部分が多い。下部施設の有無は不明である。

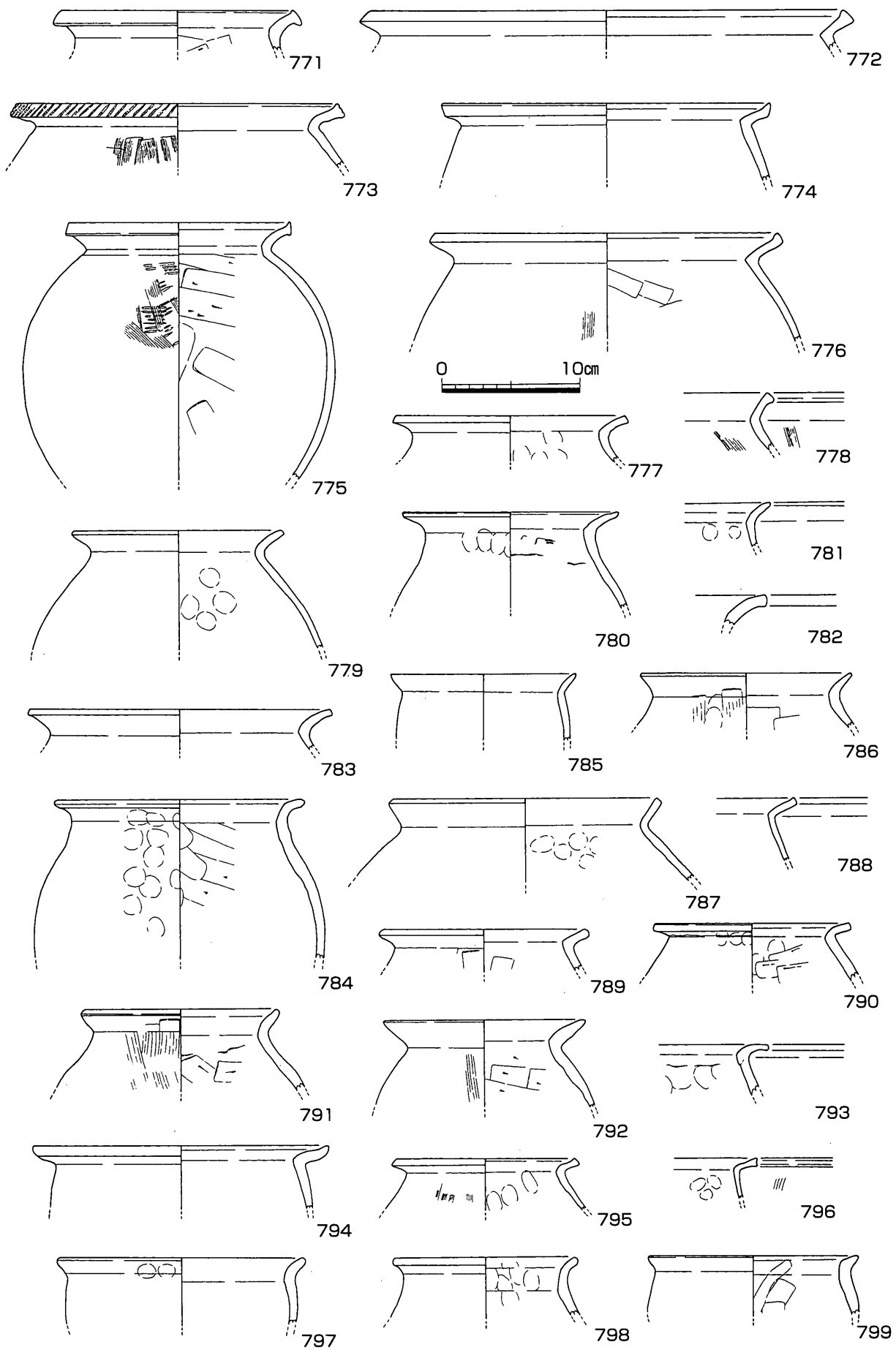
全体を調査していないためかもしれないが、遺物は頂部を中心に出土している。中央部分は少なめで周辺部分での出土が多い。出土遺物は土器・石器であるが石器の量は少ない。土器は完形に復元できたものではなく、775が北端部でそのまま潰れた状態で出土した以外は細片での出土が多い。異なった位置で出土した土器の接合関係は認められなかった。石器以外のサヌカイト剥片・碎片は157点、総重量352.7g分が出土している。

746～770は壺である。746の口縁部は外傾する頸部から真横に開き、内面にヘラ描の斜格子文を施している。頸部には指頭で窪みを付けた後に爪で刻み目を入れた突帯を貼り巡らせている。747の口縁部端部は屈曲部分より下になり、内面に斜格子文を施している。端部外面には刻み目を入れている。748は口縁部端部を下方に大きく拡張し、端部外面に凹線を巡らせている。749は口縁部端部外面に雑に刻み目を格子状に施している。752は口縁部端部を上下に拡張し、端部外面に刻み目の後に凹線を巡らせ、最後に棒状浮文を貼り付けている。754の口縁部は僅かに外反し、端部は先細りになっている。頸部の内・外面にはハケ目が施されている。体部は直接には接合しなかったが同一個体と考えられ、最大径は中央部分にある。体部下半の外面にはハケ目が施され、底部は厚手である。756の口縁部は外傾する頸部からそのまま外反して開く。端部には竹管文が巡っている。757の口縁部も頸部から大きく外反して開く。758は頸部中央部分に竹管文が巡っている。759の口縁部は頸部から大きく外反して真横に開き、口縁部は頸部より肥厚している。外面にはハケ目が施されている。761は口縁部端部は内面の強いナデにより尖っている。頸部内面の屈曲部は鋭く、内面には接合痕と指押さえが残る。762の口縁部内面には板ナデを施すが蛇行している。763は口縁部内面を強くナデている。頸部にはハケ目が施され、体部はタタキが認められる。764は無頸壺で外面に刻目突帯を巡らせ、口縁部端部にも刻み目を加えている。765は外傾する頸部の外面に貼付突帯が5条巡っている。766・768の頸部には刻み目突帯が巡っている。767の体部は大きく屈曲しており、外面の上部と中央部に貝殻による圧痕文が巡っている。下半にはヘラミガキを施している。770は体部最大径は中央部にあり大きく膨らんでいる。外面下半にはヘラミガキを何度も施し、内面はヘラケズリであるが部分的にハケ目状になっている。

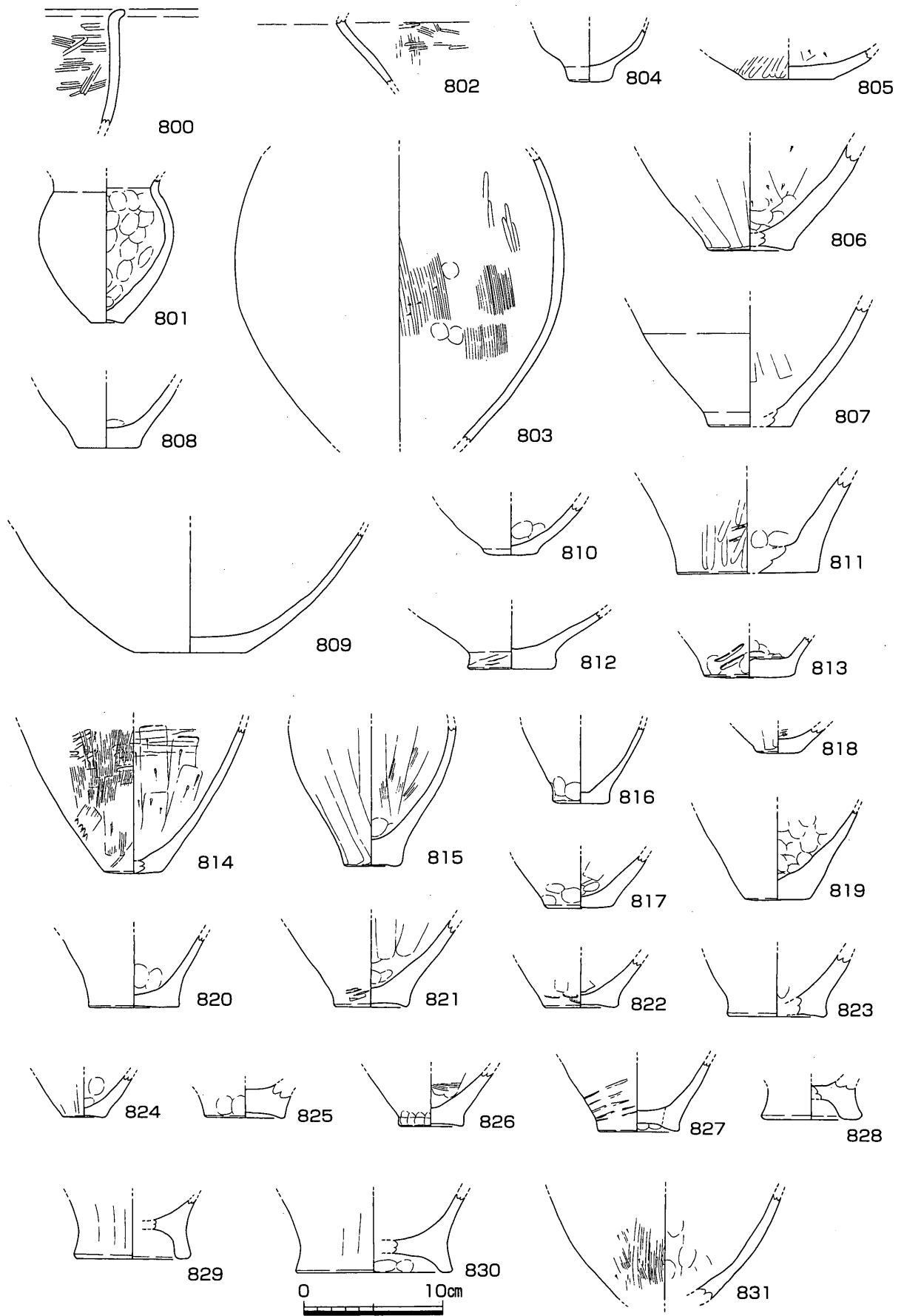
771～803は甕である。771の口縁部屈曲部分は肥厚している。773は口縁部端部外面に刻み目を施しているが、ヘラ状工具の木目が残っている。775の口縁部は外反し端部を上下に拡張している。体部は球形で、外面にはタタキの後にハケ目を加え、内面はヘラケズリになっている。780の口縁部は外反し端部内面を強くナデている。体部上半は張りが無く、口縁部直下に指押さえを行っている。784は口縁部



第150图 IV区第2面集石4出土遺物 (1) (1 / 4)



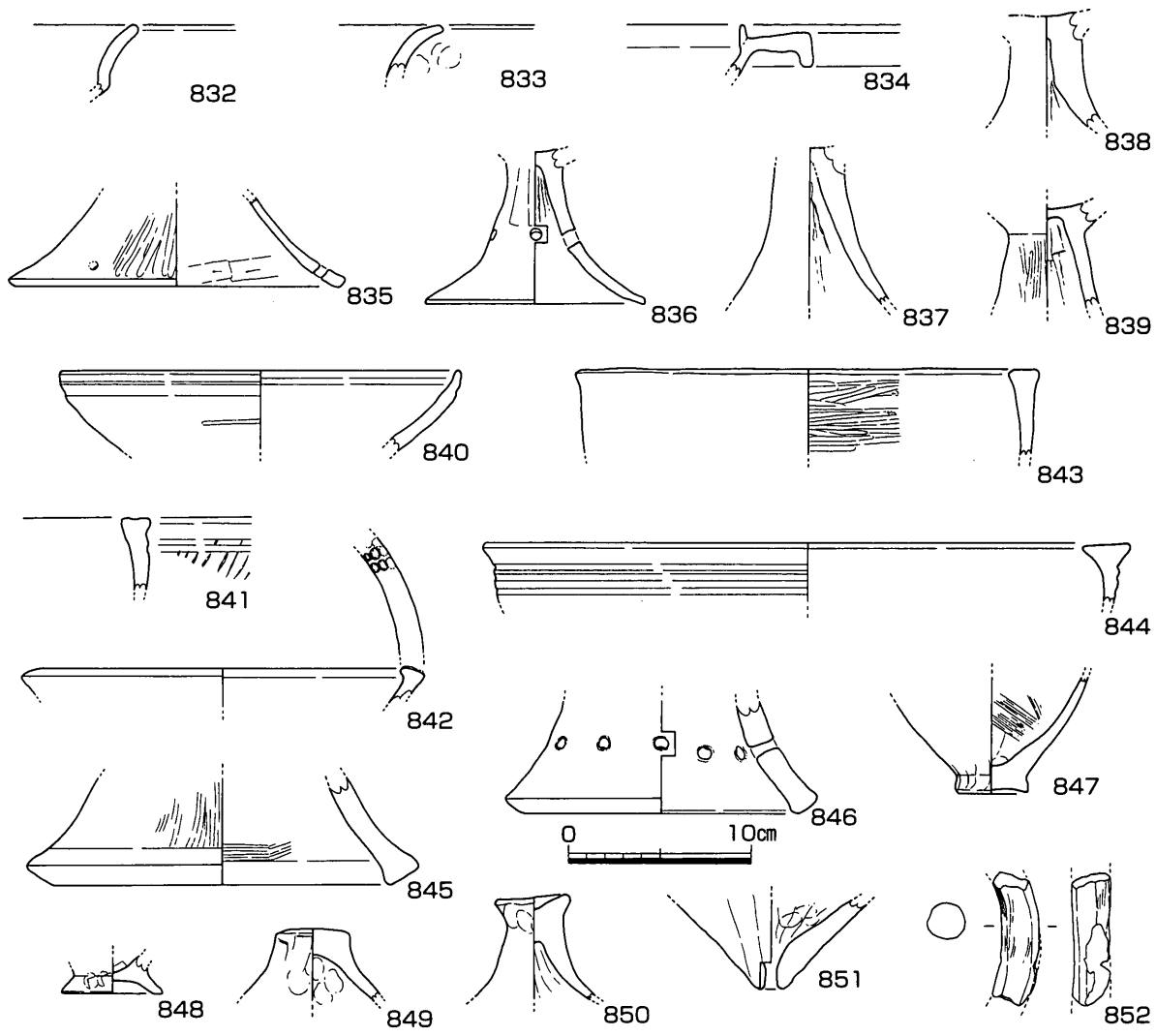
第151图 IV区第2面集石4出土遺物(2)(1/4)



第152图 IV区第2面集石4出土遺物 (3) (1 / 4)

屈曲部の内面を強くナデており、端部は丸く収めている。体部外面には指押さえが顕著で、内面にはヘラケズリを施している。785・786の口縁部は直線的に開き、端部は先細りになる。790は口縁部屈曲部の内面を強くナデている。屈曲部の外面には指押さえが顕著である。体部内面はヘラケズリになる。791の口縁部の開き方は弱く、端部内面を強くナデている。体部は外面にハケ目を施し、内面はヘラケズリになっている。792の口縁部は肥厚しているが直線的に開き、端部は先細りになる。体部外面には粗いハケ目を施し、内面には抉るようにヘラケズリを行っている。793の口縁部は真横を向き、端部内面を強くナデている。794の口縁部端部は内面の強いナデにより先細りで上向きになっている。795・796は胎土に角閃石を含み、796の体部は非常に薄くなっている。798～800の口縁部は短くつまみ出す程度である。799は口縁部をナデてつまみ出しており端部は先細りになっている。800は体部内面にヘラミガキを施している。801の体部最大径は上半にあり、内面には指押さえが顕著である。底部は上げ底である。803の体部内面の上半にはヘラミガキが部分的に見られ、下半にはハケ目を施す。また中央部分には砂粒が動いている部分がある。

804～831は壺および甕の底部である。804・812の底部は突出している。812の底部側面には粘土が乾かないときに重みで潰れた跡がある。814は体部外面にタタキの後にハケ目を加えている。内面はヘラケ



第153図 IV区第2面集石4出土遺物(4)(1/4)

ズリである。また内面にはタタキを行った際の板状の当て具痕が認められる。821～827は上げ底である。825・826は底部側面に指押さえを行う。827は底部外面の上げ底になっている部分に指押さえを行っている。体部外面にはタタキを施している。828～830は短い脚台が付いている。831は体部外面にヘラケズリを施した後にハケ目を加えている。

832～839は高杯である。834の口縁部端部は下方に拡張し垂下している。内面には上方に立ち上げる突帯を貼り付けている。835は大きく開く脚部で、外面にはヘラミガキを施し、内面はヘラケズリになっている。胎土に角閃石を含んでいる。836は下部で大きく開く。円形の透かし穴が5個ある。840は口縁部外面に凹線が2条巡る。椀形で鉢とも考えられるが、浅い作りであることから高杯の杯部としておく。

841～848は鉢である。841の口縁部外面には長い刻み目を施した後に凹線を巡らせている。842は口縁部端部を内側に拡張し、端部上面に円形浮文を貼り付けている。843の体部上半は直線的で、内面にはハケ目の後にヘラミガキを丁寧に施している。844は口縁部端部を内・外面側に大きく拡張している。845・846は台付鉢の台部と考えられる。845の端部は斜めに接地しており、外側に面をもつ。846は円形の透かし穴が現存で4個あるが、復元では12個巡る。847は突出した上げ底の底部の側面に指押さえを行う。

849・850は蓋、851は甌、852は水差しあるいは鉢の把手である。

853～864は石鏝である。このうち853は凹基、854～858は平基、859は凸基、860～863は凸基有基式である。853の鏝身の片側の側縁部には、敲打痕が認められる。857の基部は未調整の部分が多いが、矢と取り付ける部分にあたり、機能を働かせる鏝身の部分は丁寧に調整を施していることから、製品と考えるものである。861の基部は鏝身から僅かに内側に向かう剥離によって作り出している。

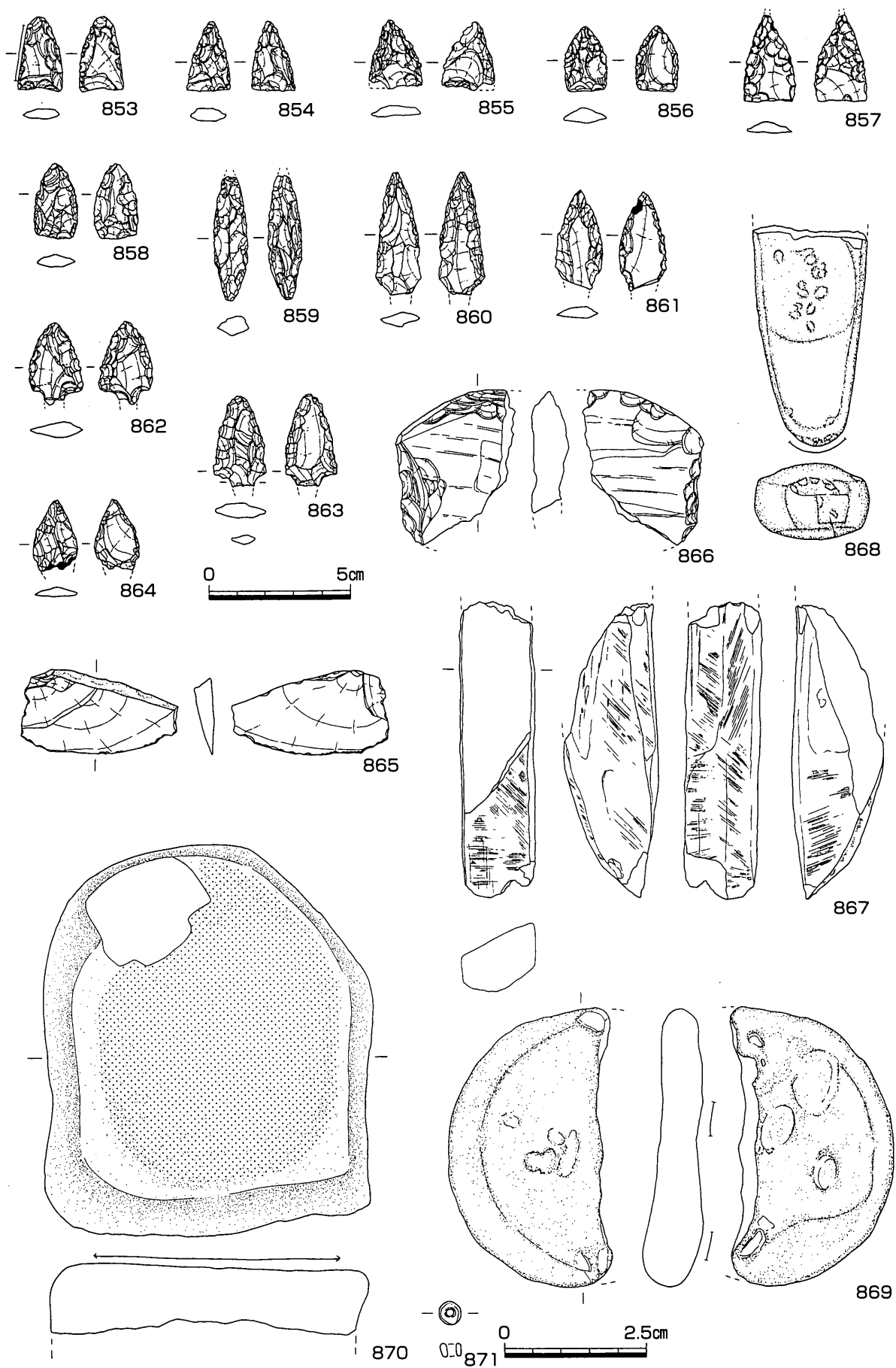
865の刃部には微細な剥離痕が認められ、背部には自然面が残る。866は結晶片岩製の打製石庖丁であるが、背部に部分的に弱い研磨痕が認められる。867は柱状片刃石斧で刃部の半分が欠損している。基部と刃部には主に横と斜め方向の擦痕が認められるが、使用時のものや柄との装着によるものではない。869は凹石であるが、部分的に台石として使用した痕跡がある。

871は滑石製の小玉で、古代の溝に壊された部分で出土したため、明瞭に集石4に伴うとは言い難いものである。

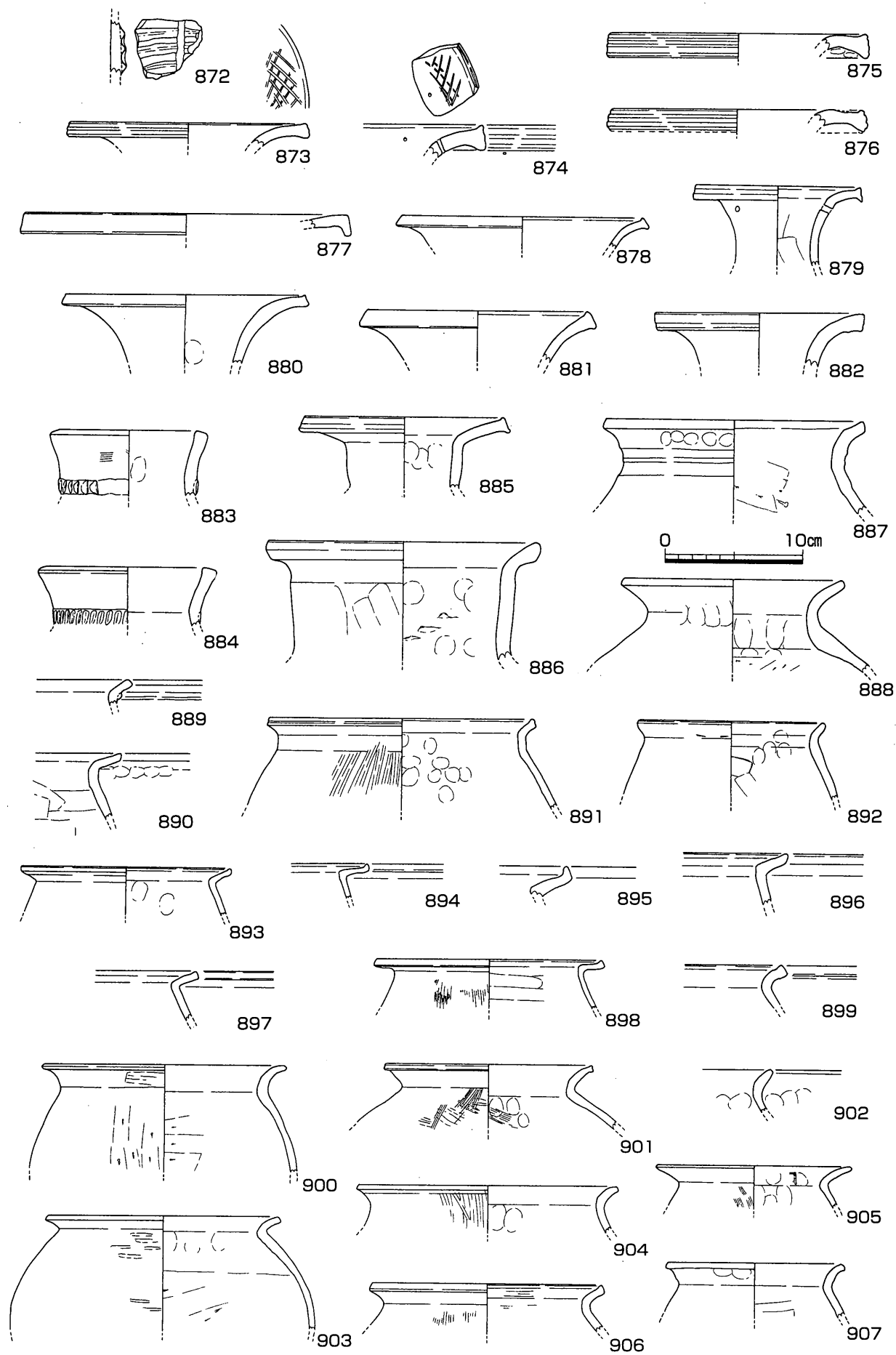
872～930は直接集石4に伴うものではないが、集石4を検出する際に出土したものや集石4に近接して出土した遺物で、本来は集石4に伴っていた可能性が高いものである。

872～888は壺である。873～876の口縁部は大きく真横に開き、口縁部端部外面には凹線を巡らせている。873・874は内面に斜格子文を施している。877は口縁部端部を下方に大きく拡張している。879は頸部に穿孔が現存で2個あり、口縁部端部は上下に拡張している。882は口縁部端部の下側に粘土を加えて肥厚させている。883・884は直立気味の口縁部で、頸部には刻目突帯を巡らせている。885・886は直立する頸部から口縁部は屈曲して開いている。887は口縁部内面を強くナデており、外面には指押さえを行っている。頸部には粗い凹線を2条巡らせている。888は頸部と体部の境部分が肥厚している。

889～908は甕である。890は口縁部屈曲部の外面に指押さえを行っているため、壺の頸部のようにになっている。891は体部外面にハケ目を施し、胎土には角閃石を含んでいる。893～897の口縁部は鋭く屈曲し893～895は端部を上方に拡張している。898の口縁部は真横に開き、体部上半は直線的である。胎土には角閃石を含んでいる。900の口縁部は外反し、外面には板ナデを施しているが部分的にハケ目



第154图 IV区第2面集石4出土遺物 (5) (1/2、1/1)



第155图 IV区第2面集石4周边出土遗物(1)(1/4)

状になっている。体部は外面にもヘラケズリを施している。901は口縁部端部を強くナデている。体部は大きく膨らみ、外面にはタタキの後にハケ目を加えている。903の体部は大きく膨らみ、外面にはタタキを施している。904は口縁部から体部にかけてそのまま外面にハケ目を施している。905・906の口縁部内面にはハケ目が認められる。908の口縁部端部は外側に丸めるように折り返し、玉縁状になっている。体部内面には指押さえが顕著である。

909～917は壺および甕の底部である。912は厚手で上げ底になっている。913の底部は小さい。915は非常に薄手である。916・917は短い脚台が付く。

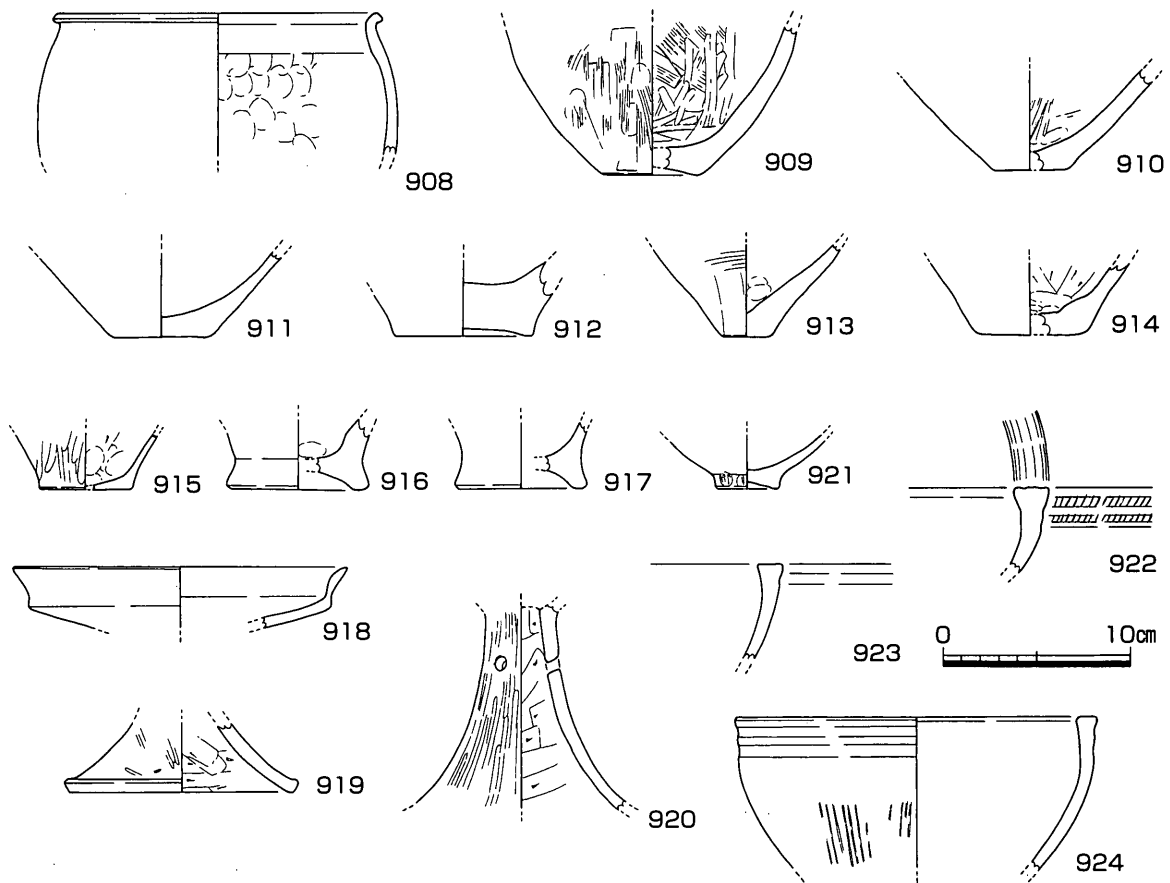
918～920は高杯である。919の端部は外側に面を持っている。920は長脚で外面には丁寧にヘラミガキを施し、内面はヘラケズリである。円形の透かし穴が3個ある。

921～924は鉢である。921は突出する上げ底の底部をもち、側面部に指押さえを行っている。924は直立する口縁部の外面に凹線を巡らせ、体部には粗いハケ目を施している。

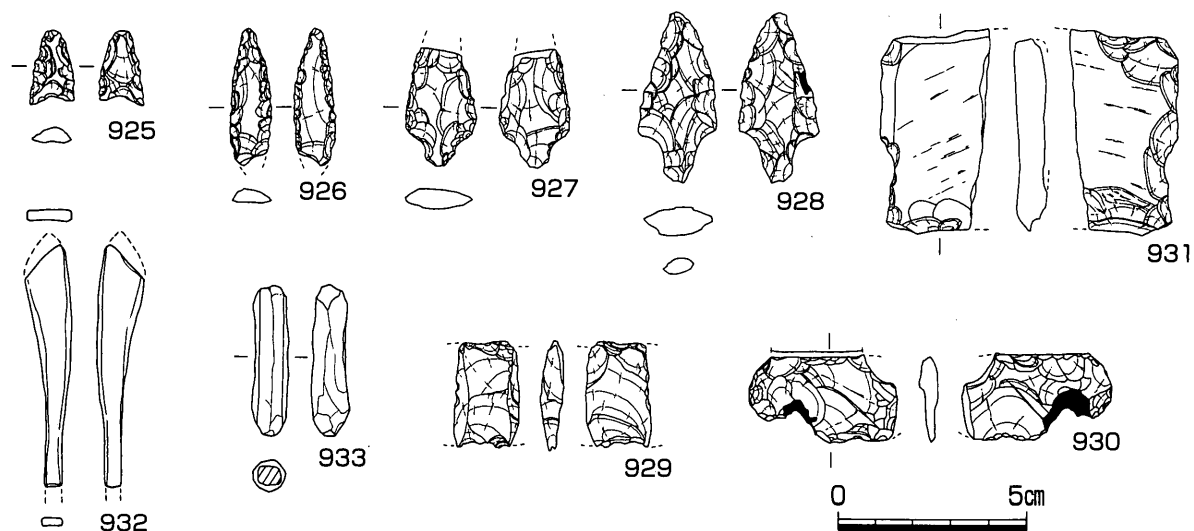
925～928は石鏃で、925は凹基、926は凸基、927・928は凸基有茎式である。929・930は楔形石器である。931は石庖丁で、表面は一部剥離している。裏側の刃部と側縁部は剥離のまま、表側の側縁部と背部は研磨している。

932・933は鉄鏃である。932の鏃身は歪んでいる。933は茎部分である。

以上、集石4出土の遺物と、直接ではないが伴っていた可能性が高い遺物を見てきたが、明らかに弥生時代中期中葉と後期の遺物が混在している。表面の調査のみで断ち割り調査を行っていないため正確なことは言えないが、礫の平面分布をみると西側の部分がきれいな円を描かずに、突出気味に膨らんで



第156図 IV区第2面集石4周辺出土遺物(2)(1/4)



第157図 IV区第2面集石4周辺出土遺物(3)(1/2)

いる。この部分に後期の遺物が多いという傾向から、Ⅲ区集石1-3、集石2-5のように中期と後期の集石が重なっている可能性もある。しかし集石4は旧F1区にあり、その構築面が標高11.7m前後であり、後述する集石6の構築面より高い。これも後述するが明らかに後期の所産と言える集石7と構築面の標高が同じである。これらのことから新しい方の遺物の年代観から、集石4は後期中葉の所産と考える。

集石6(第158~160図)

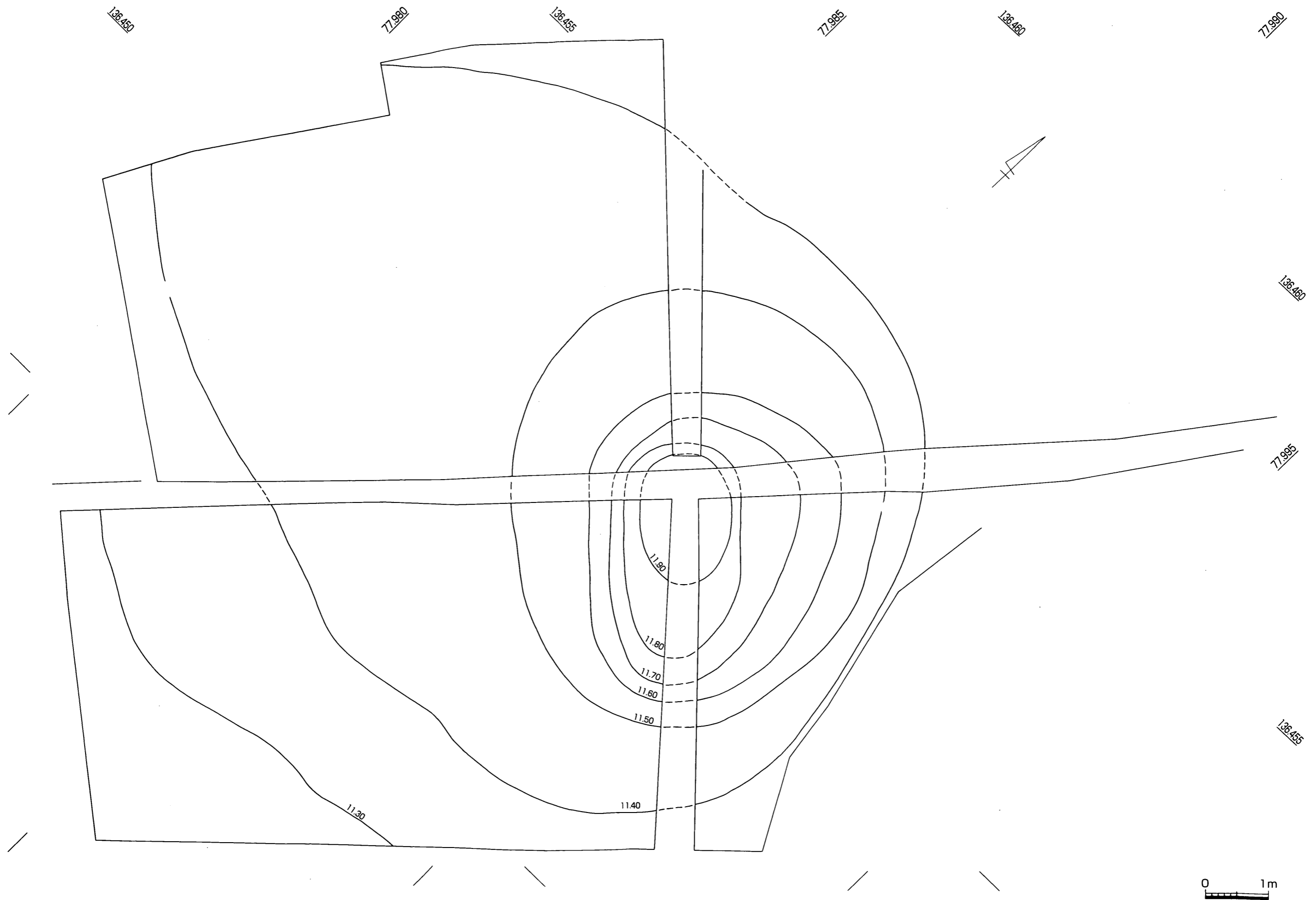
調査区北東部の旧F1区北壁近くで検出した集石遺構で、集石4の北西6mほどの所に位置している。集石6も保存のため、その上面を検出したにとどまる。東側部分は現有の水路と里道のため調査出来ていない。平面形は不整形で、検出部分では東西方向に長径をもつ楕円形に近いが、どこまでを集石6とするか境界は不明瞭である。標高11.4mの等高線部分で測ると東西方向で14.0m、南北方向で10.2mである。土層観察ベルトの交差部分を中心に塚状に盛り上がっている。検出した部分での端部は標高11.3m前後である。これに対して頂部は標高11.9mほどで概ね平坦になっている。このことから平均的な高さは60cm程度である。しかし礫を検出した部分で掘り込みを停止しているため、端部の標高と集石の高さは暫定的な値である。

土層観察ベルトの交差部分をピークにした部分では、直径2.3mほどの円形に礫が密集している。礫は5~40cmまでの大きさのものがあるが、10cm程度のものが多い。東側の部分に大きい礫が多くなっている。この礫が密集している部分の北西~南西部分にかけては、逆に礫の空白部分となっている。この空白部分は幅1~2mで標高11.6~11.7mの等高線に沿って全長6mほど伸びている。また北側の部分にも礫が疎な部分がある。これに対して先の空白部分の西側の一帯は礫が密集して広がっている。この密集部分は高低差が10cm以内で平坦になっている。5~30cm程度の礫があり、頂部に比べて15~20cm程度の礫が目立っている。この平坦な部分を土層ベルトの交差部分の盛り上がり部分と一体と見るか否かは断ち割り調査を行っていないので根拠に乏しいが、盛り上がり部分から崩落したにしてはその規模を考えると礫が非常に多いことから、ここでは一体のものとして取り扱っておく。礫は砂岩が主体となり、少量の花崗岩を含んでいる。

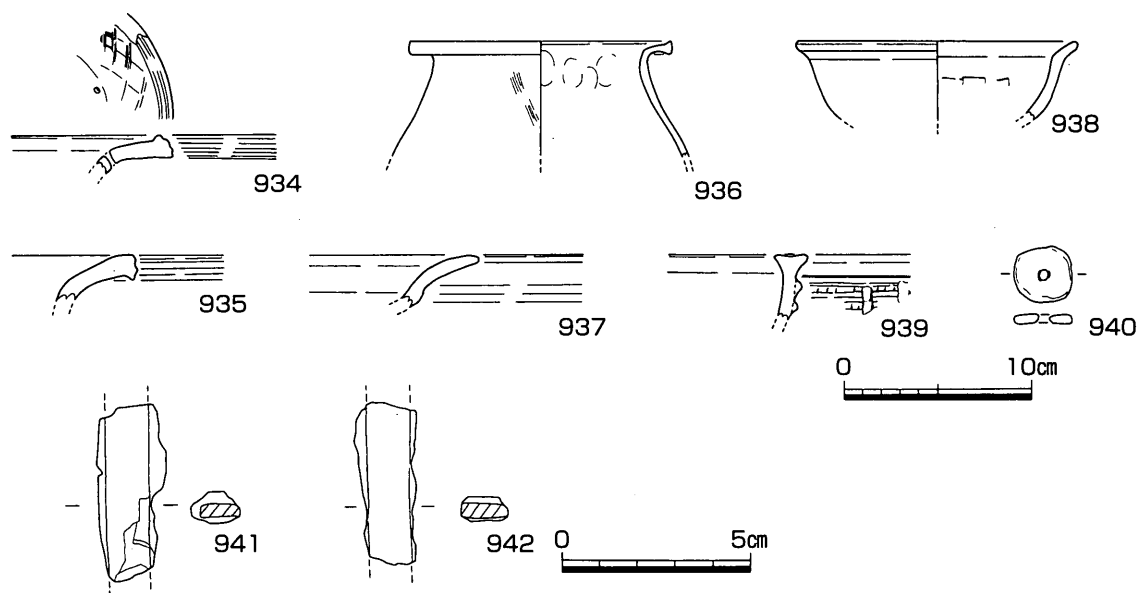
この集石6は弥生時代後期のSH06に隣接しているが、この第2遺構面を形成する濁褐色粘質土に全



第158图 IV区第2面集石6平·立面图 (1/60)



第159図 IV区第2面集石6測量図 (1/60)



第160図 IV区第2面集石6、集石6周辺出土遺物（1/4、1/2）

体を覆われている。SH06の作られた面から10~20cm下部が集石6の検出部分での端部になっている。

断ち割り調査を行っていないので、盛土の内容は不明であるが、平面的には褐色粘質土がその上面となっている。下部施設の有無は不明である。

出土遺物は少ない。集石遺構の規模に比べるとまさに微量と言える。出土した遺物も細片が多い。石器は結晶片岩製の石斧の細片が1点出土したのみで、サヌカイトは製品・剥片・碎片を含めて1点も出土していない。

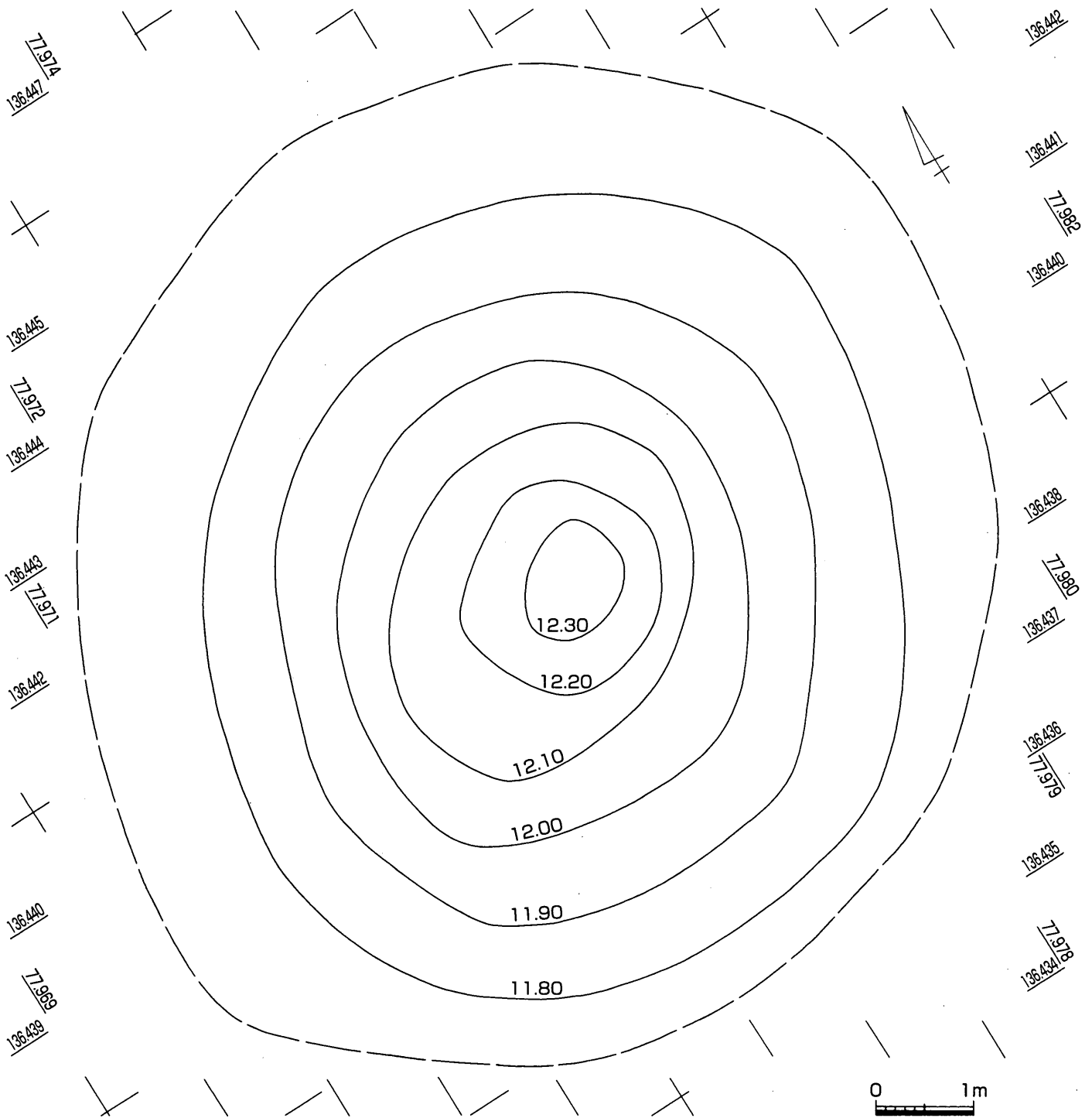
934・935は壺で口縁部は横に開く。934は内面に斜格子文を施し、穿孔が現存で1個ある。936は甕で、口縁部は真横に開く。体部外面はハケ目の後にナデている。937は高杯の口縁部である。938は鉢で口縁部は外側に屈曲する。939も鉢であるが、口縁部端部は内・外面に向かって拡張し、上面に幅広の面を作る。外面には刻目突帯を貼り巡らせた後に棒状浮文を貼っている。940は紡錘車である。941・942は細長い板状の鉄器で、ヤリガンナではなかろうか。

934・936は集石6検出時にその上部の包含層で出土したものである。941・942の鉄器は北側の調査区北壁に近い部分の礫群から80cmほど離れた箇所で出土しているため、集石6に積極的に伴うとは言い難い。それ以外は集石6の礫に伴って出土しているが、937・938は弥生時代後期後半、935・939は弥生時代中期中葉である。先述のように集石6の検出面は弥生時代後期のSH06より下部になることから、後期の遺物を上面からの混入と考えて中期中葉の所産と考えておく。

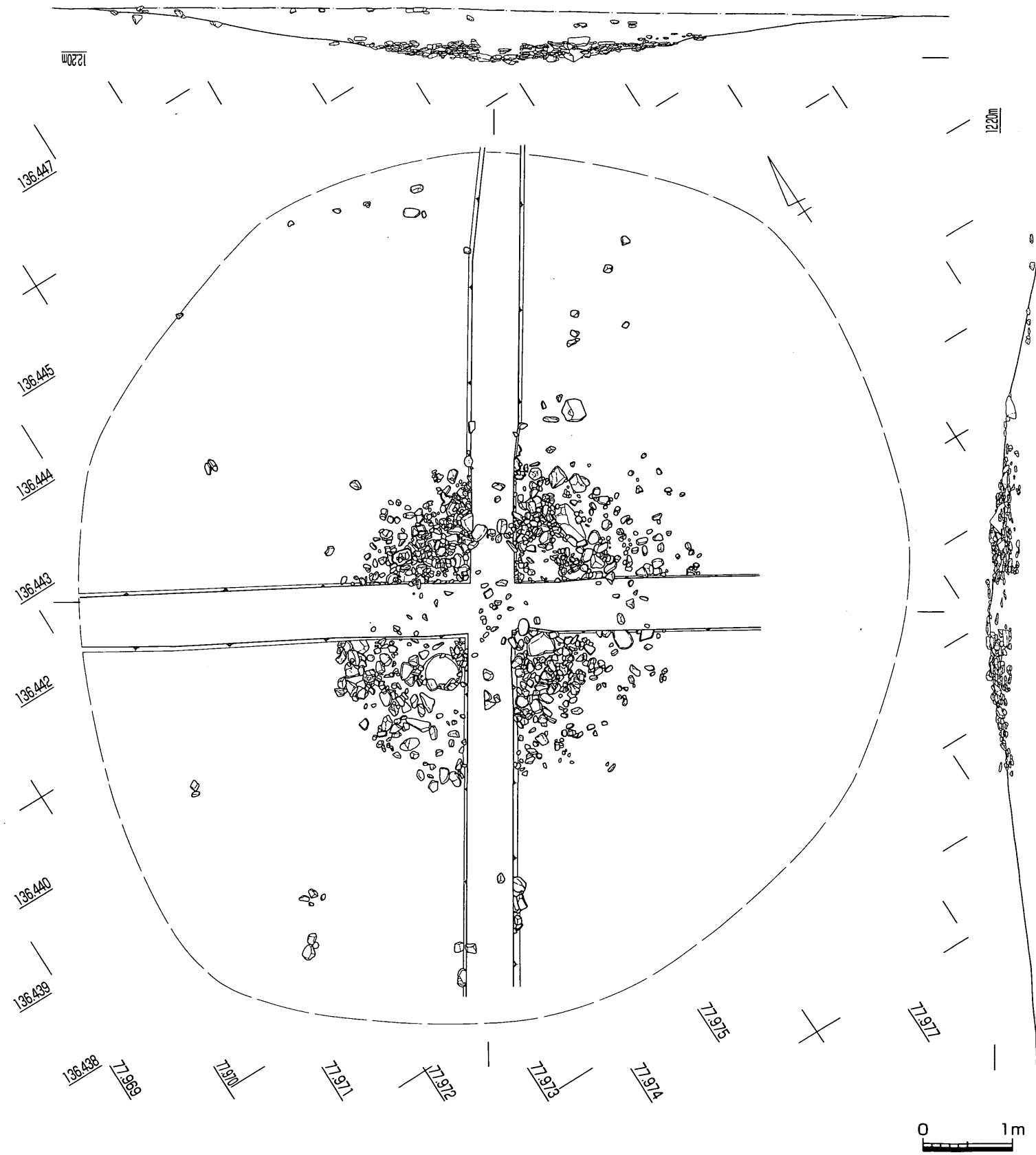
集石7（第161~164図）

旧F1区の中央部分で検出した集石遺構で、集石6の南西4mのところの位置している。集石7も保存のため、その上面を検出したにとどまる。平面形は円形で直径9.4~10.3mである。全体に塚状に盛り上り、均整の取れた山形になっている。端部の標高は11.7mほどで、頂部の標高は12.3m、高さは60cmになる。

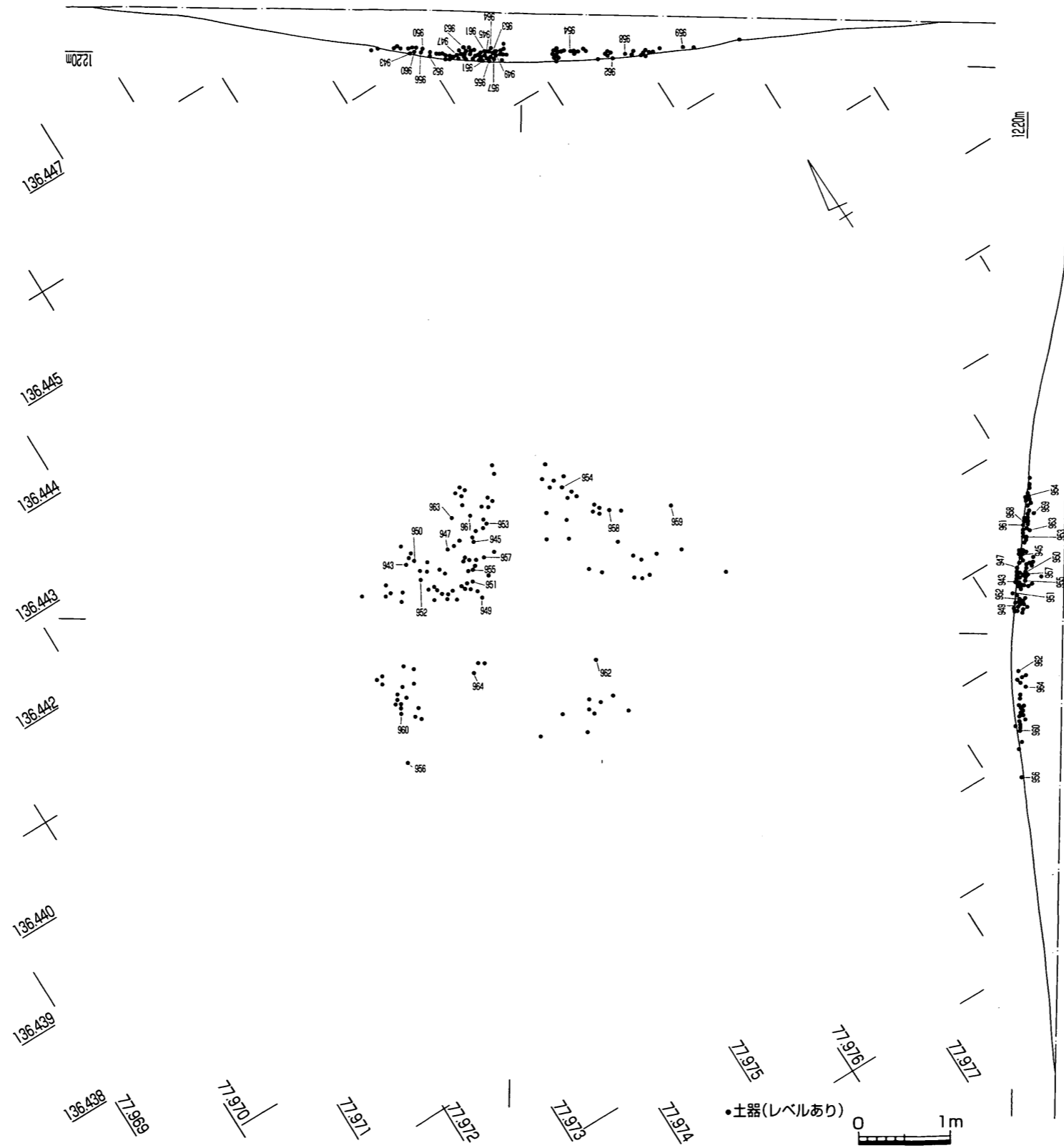
礫は頂部に分布しており、中央部から端部にかけて礫は無く土のままである。礫は標高12.1mから上の部分で、直径3.8mの円を描いて覆っている。礫は5~45cmほどであるが、10~15cm大のものが主と



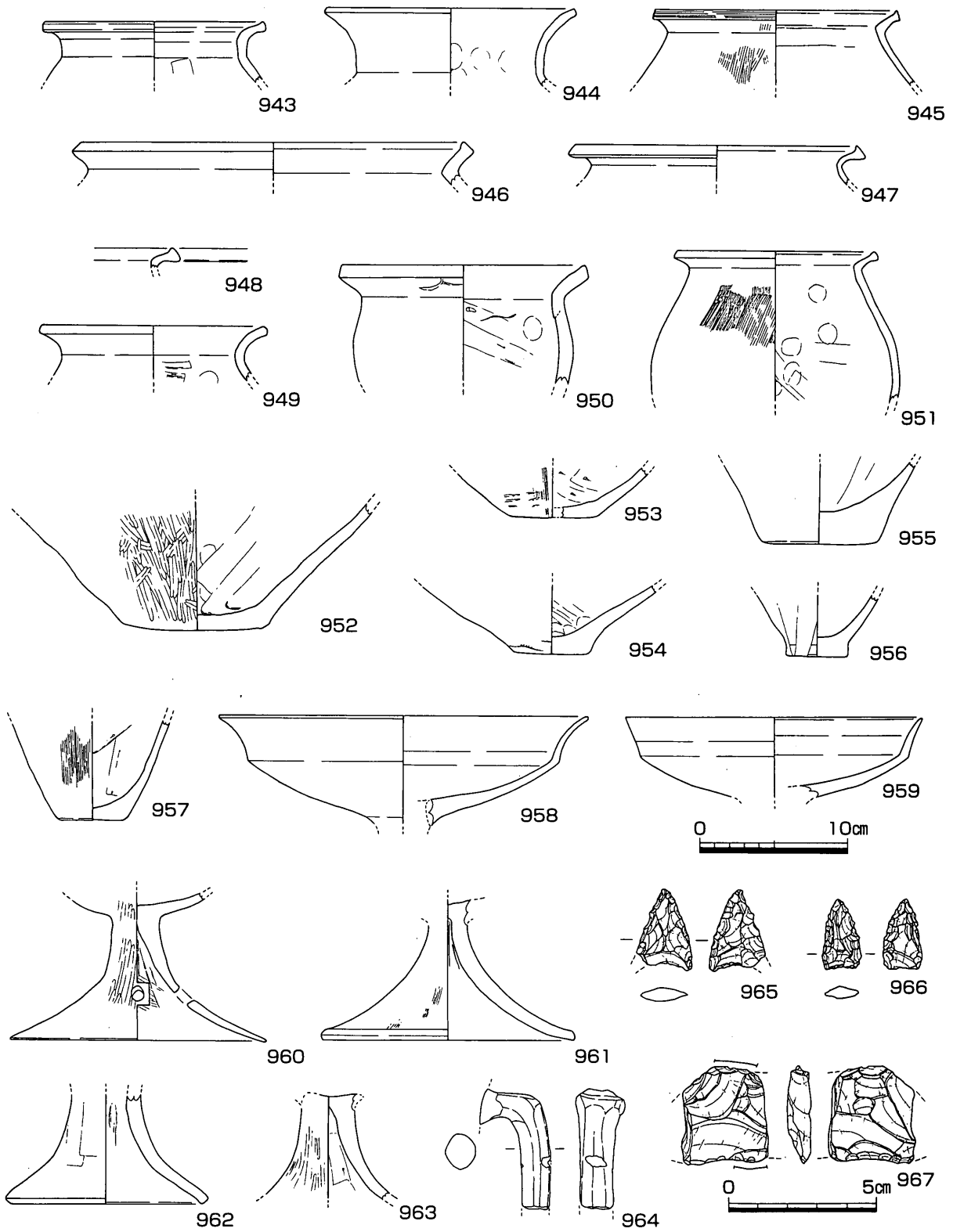
第161图 IV区第2面集石7测量图 (1/60)



第162图 IV区第2面集石7平·立面图 (1/60)



第163図 IV区第2面集石7遺物出土状況平・立面図 (1/60)



第164图 IV区第2面集石7出土遺物 (1/4、1/2)

なる。礫の配置には特に特徴は見られない。頂部に1箇所、円形の現代の攪乱孔がある。その攪乱の埋土を除去してみると攪乱の深さは30cmほどであったが、頂部の礫帯の下部にも礫が堆積している状況が伺えた。礫は砂岩が主体で、少量の花崗岩と微量の安山岩で構成されている。

集石7は第1遺構面を形成する褐色砂質土層に覆われている。断ち割り調査を行っていないので盛土の詳細は不明であるが、その上面は明褐色粘質土である。集石7の構築された面は、主に旧F1区の中央付近に見られる茶褐色粘質土で、この土と盛土上面の明褐色粘質土との差で端部を判断した。下部施設の有無は不明である。

遺物は頂部の礫の間で出土したが、北西部分での出土が多かった。土層観察用ベルトを除去しなかったため、頂部の遺物はもう少し多いものと考えられる。土器・石器が出土したが、土器は完形に復元できるものはなく、いずれも破片での出土である。異なった位置で出土した土器の接合関係は認められなかった。石器は製品が3点出土したが、サヌカイトの剥片・碎片は出土していない。

943・944は壺である。943の頸部は短い。944の口縁部は全体に外反する。

945～951は甕である。945の口縁部は鋭く屈曲し、端部を上方に拡張している。体部上半部は直線的で、外面にハケ目を施している。947・948は胎土に角閃石を含んでおり、口縁部は肥厚している。949の口縁部は外反し端部は丸く収める。950は全体に厚手になっており、体部は内面にヘラケズリを施している。951の口縁部は鋭く屈曲し強くナデている。体部外面にはハケ目を施すが摩滅している部分がある。胎土に角閃石を含んでいる。

952～957は壺および甕の底部である。952は外面に丁寧にヘラミガキを施している。954の底部外面の中央部にはヘラ描沈線で直線を描いている。955は底部の厚さに比べて体部は極端に薄くなっている。

958～963は高杯である。958の口縁部は体部から鋭く屈曲して外反する。959の口縁部は体部から鋭く屈曲するが直線的である。端部は先細りである。960の脚部は中央で屈曲して直線的に開き、端部は先細りになっている。外面にヘラミガキを施し円形の透かし穴が4個ある。杯部は僅かに残るが内・外面共にヘラミガキが認められる。961の脚部は緩やかに外反して開く。962の脚部は端部付近で僅かに内湾している。

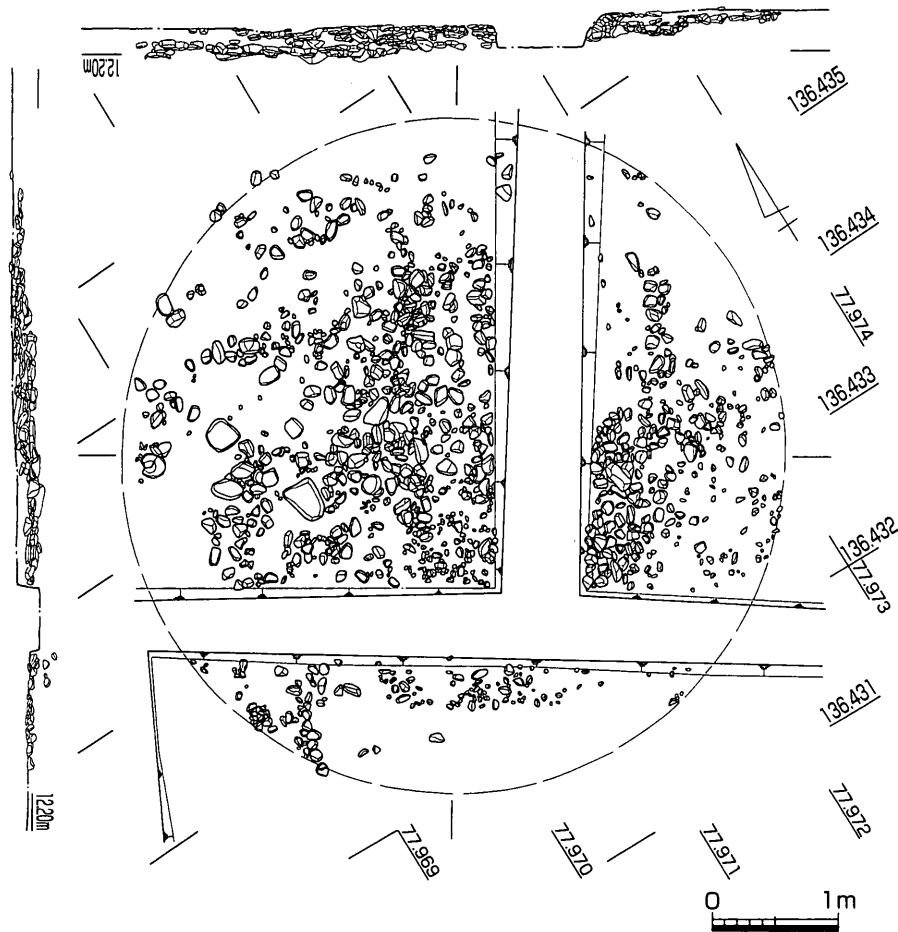
965は凹基、966は平基の石鏃である。965の基部の湾曲は大きな一つの剥離によって作り出している。967は楔形石器で、截断面には両極打撃の痕跡が認められる。

以上の出土遺物から、集石7は弥生時代後期中葉の所産と考えられる。

集石8（第165～166図）

調査区の中央部分で、旧F1区南側の集石遺構群に含まれる集石遺構で、集石7の南西部に隣接している。北東-南西の土層観察用ベルトは集石7のベルトの延長である。保存のため、その上面を検出したにとどまる。集石遺構が群集している箇所に位置している。上面だけで全体の調査を行っていないので、集石遺構の範囲は礫の分布の疎密により判断したが、不明瞭な部分が多々ある暫定的な範囲である。

全体に盛り上がりは少なく、平面的に礫が集中している。平面形は円形で直径は5.2mである。端部の標高は11.9～12.1mで東側が低くなっている。頂部は標高12.2mほどであるから、高さは最も低い端部からは30cm、高い端部からは僅か10cm程度である。礫を検出した部分で掘り込みを停止しているため、端部の標高と集石遺構の高さは暫定的な値である。



第165図 IV区第2面集石8平・立面図(1/60)

礫は北東-南西の土層観察用ベルト部分を中心に分布している。礫は5~30cm大であるが、10cm前後の比較的小振りなものが多く、20cmを超えるものは少ない。礫は砂岩が主体となり、花崗岩を少量含んでいる。

集石8は断ち割り調査を行っていないので盛土の詳細は不明であるが、その上面は褐色粘質土である。集石8は全体に第1遺構面を形成する褐色~暗褐色砂質土に覆われていた。この層を除去しながら、集石8の礫と盛

土である褐色粘質土を検出し、褐色~暗褐色砂質土の下部の茶色系の粘質土層の上面で掘り込みを停止した。暫定的な端部は盛土の褐色粘質土と茶色系粘質土との境界で設定した。下部施設の有無は不明である。

遺物は少なく、頂部を中心に破片で出土し、接合するものは無かった。979は集石8の検出途中で出土したもので、明瞭に伴うものではない。

968~970は壺である。968は口縁部端部を下方に拡張し、端部外面に刻み目を施している。穿孔が現存で1個ある。969は口縁部端部を強くナデている。970の体部の膨らみは強い。底部付近の内面にはヘラケズリを施している。

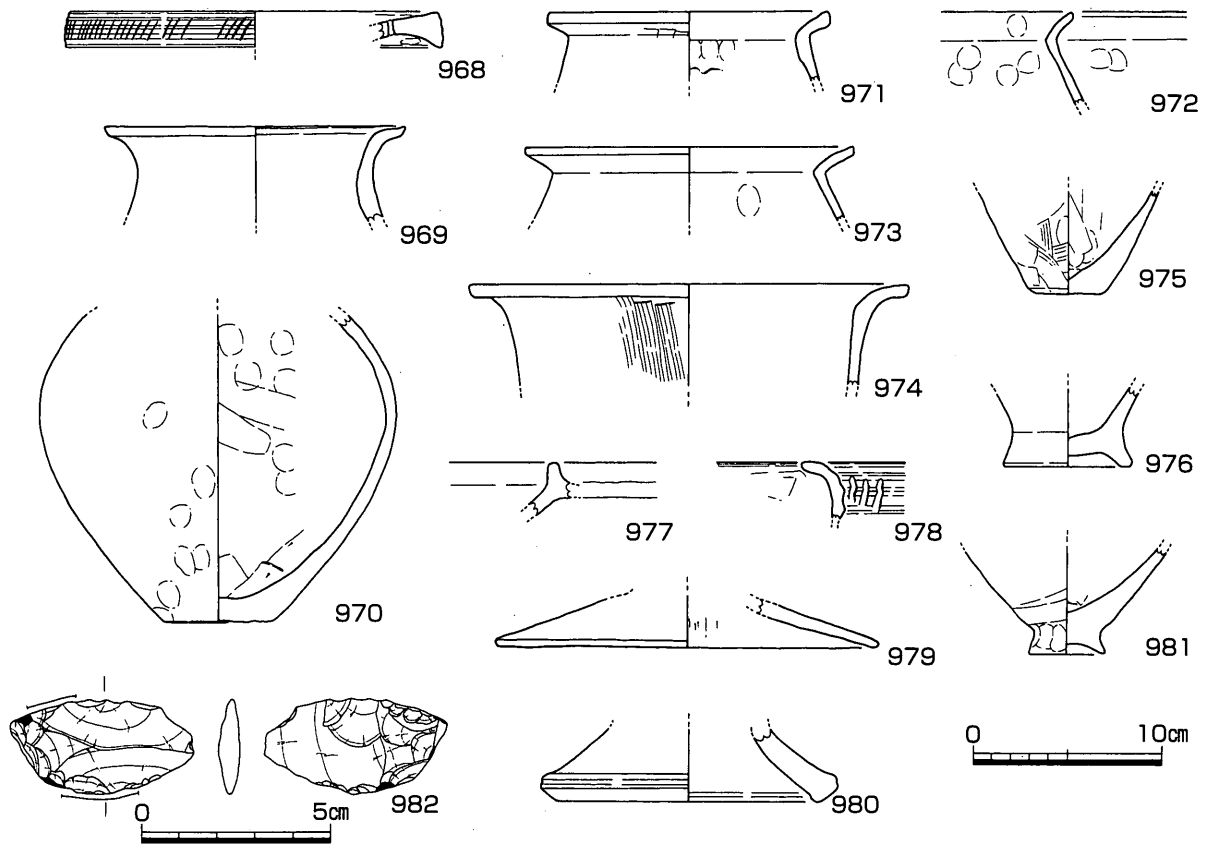
971~974は甕である。971は口縁部の屈曲部が肥厚している。972は口縁部屈曲部付近の内・外面に指押さえが顕著である。973の口縁部は鋭く屈曲する。974の口縁部は如意形で外反する。体部外面にはハケ目を施している。

977~979は高杯としたが、978は鉢になるかも知れない。978の口縁部は大きく内湾しており、外面に凹線を巡らせた後に棒状浮文を貼り付けている。

981は短く突出して上げ底の底部を持つ鉢である。

982は楔形石器で、上下両端に敲打痕があるが截断されていない。石鏃の素材にするつもりなのかも知れない。

以上のように出土遺物は少なく、弥生時代中期と後期の土器が混在している。集石8の正確な構築面は不明であるため層位的に時期を判断することは困難である。従って時期的に新しいほうを採って弥生時代後期中葉頃と考えておく。



第166図 IV区第2面集石8、集石8上部包含層出土遺物（1/4、1/2）

集石9（第167～171図）

調査区の中央部分で、旧F1区南側の集石遺構群に含まれる集石遺構で、集石8の西側に隣接している。保存のため、その上面を検出したにとどまる。集石遺構が群集している箇所位置している。集石8と同様に上面だけで全体の調査を行っていないので、集石遺構の範囲は礫の分布の疎密により判断したが、特に後述する集石10との境は不明瞭な部分が多々ある暫定的な範囲である。

検出部分では全体に盛り上がり乏しく、平面的に礫が集中している。平面形は楕円形であるが、北東部分の端部は土層観察用ベルトの中で収束している。長径は一部復元になるが5.8m、短径5.1mである。端部の標高は12.1～12.2m、頂部は標高12.3mで、高さは10～20cmと低くなっている。礫を全体に検出した部分で掘り込みを停止しているため、端部の標高と集石遺構の高さは暫定的な値である。礫は全体に分布しているが、土層観察用ベルトを挟んで東側が少なくなっている。反対に中心より少し南西部分は特に密集している。北側部分は後述する集石10と接しており、礫の境界は不明瞭である。礫は5～30cm大であるが、10cmほどのものが多い。中心部分と北側部分に大きめの礫が目立つ。礫は砂岩が主体で、花崗岩が少量伴っている。

集石9は断ち割り調査を行っていないので盛土の詳細は不明であるが、その上面は褐色粘質土である。集石9は全体に第1遺構面を形成する褐色～暗褐色砂質土に覆われていた。この層を除去しながら、集石9の礫と盛土である褐色粘質土を検出し、褐色～暗褐色砂質土の下部の茶色系の粘質土層の上面で掘り込みを停止した。暫定的な端部は盛土の褐色粘質土と茶色系粘質土との境界で設定した。下部施設の有無は不明である。

遺物は北側半分で多く出土し、北西部分と土層観察用ベルトより東側で集中して出土した。これに対

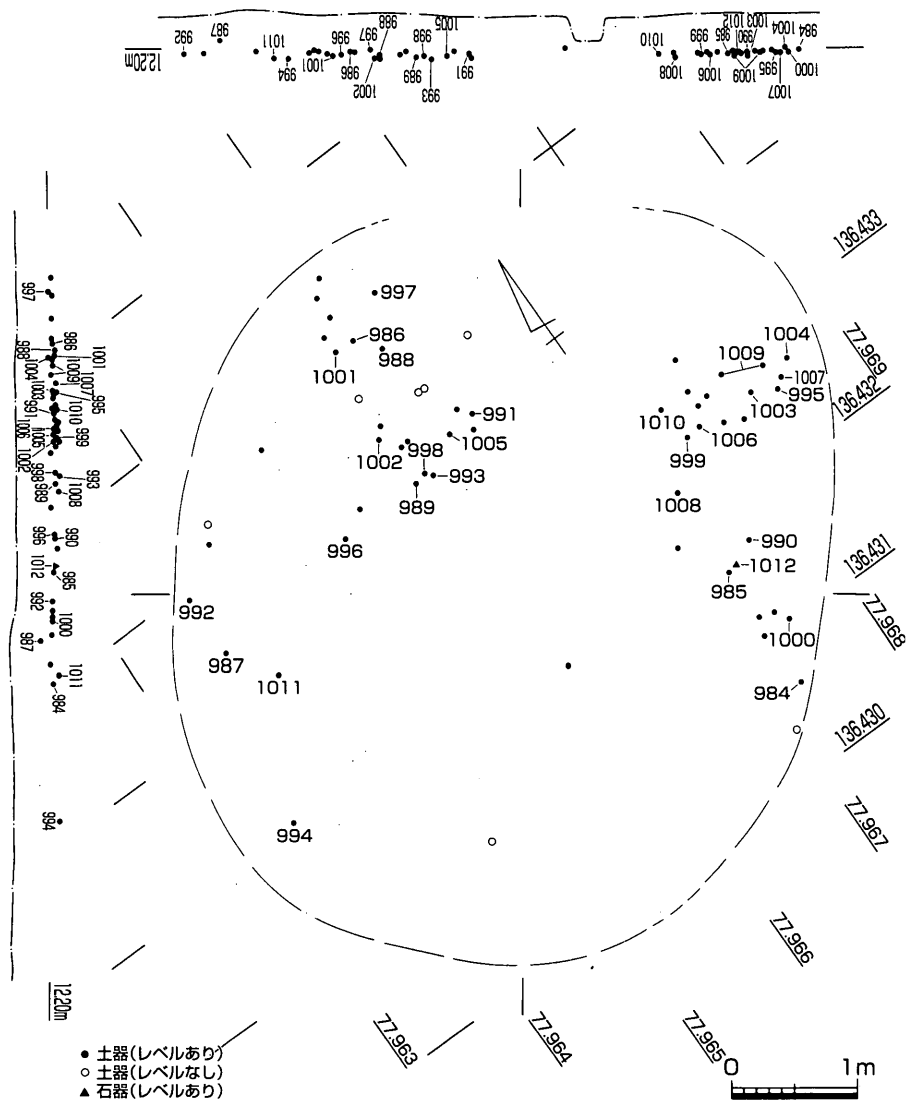


第167図 IV区第2面集石9平・立面図 (1/60)

して南側半分での出土は少なく、特に南西部分では希薄である。器種的には東側部分で高杯・鉢の出土が目立ち、完形に近く復元出来たものが多かった。出土位置の異なる遺物の接合関係は認められなかった。石器は台石が1点出土したのみで、サヌカイト製の石器は出土していない。

983~987は壺である。983の頸部は長く直立している。体部は最大径が中央にあり扁平気味である。外面は頸部にヘラミガキを施し、体部にはハケ目の後にヘラミガキを加えている。頸部内面は縦方向に指でナデている。985は口縁部内面に強く指押さえを行い、端部の内面を強くナデている。986は体部内面に抉るように強くヘラケズリを施している。987は頸部に貼付突帯が2条巡っている。外面は粗いハケ目である。

988~1001は甕である。988は口縁部端部を上方に拡張し、外面に刻み目を施している。990の口縁部は丸みを帯びて開いている。体部は最大径が中央やや上側にあり、外面は太目のタタキの後に下部にはヘラミガキを加えている。内面の下半にはヘラケズリを施している。991の口縁部は長めである。体部上半は大きく膨らみ、外面には細かいハケ目を施す。内面はヘラケズリである。992の口縁部は外反し、端部を僅かに下方に拡張している。体部には内・外面ともに指押さえが顕著で、部分的には内・外面から同時に指押さえを行った結果、器壁が非常に薄くなっている部分がある。994の口縁部は指押さえの



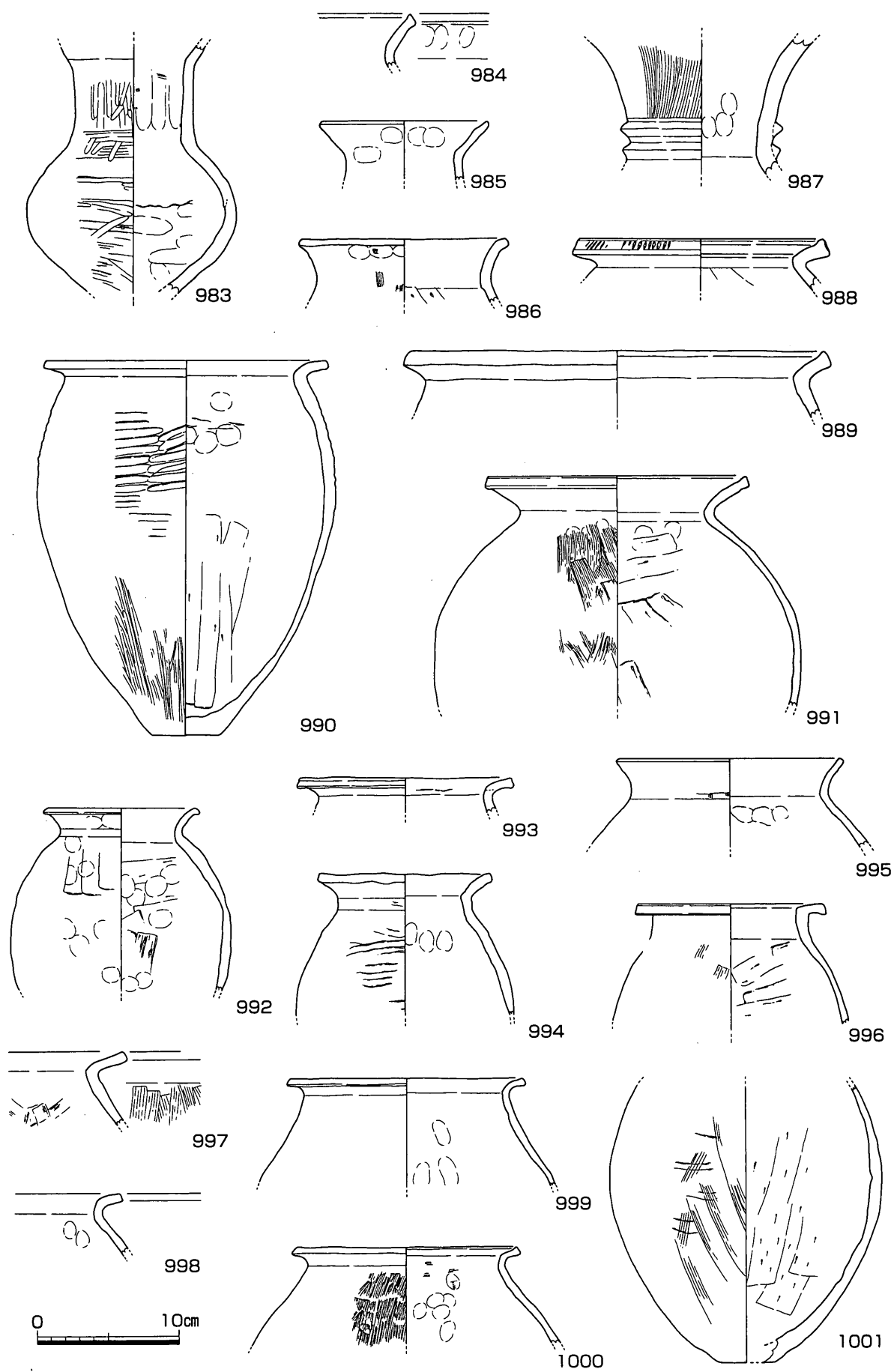
第168図 IV区第2面集石9遺物出土状況平・立面図 (1/60)

ため歪んでいる。体部上半は僅かに湾曲する程度である。外面はタタキの後にナデている。口縁部直下の強いナデのため壺に近い形態になっている。995の口縁部は直線的に立ち上がり、端部には平坦な面を形成している。996の口縁部は真横に開き肥厚している。999・1000は胎土に角閃石を含んでいる。

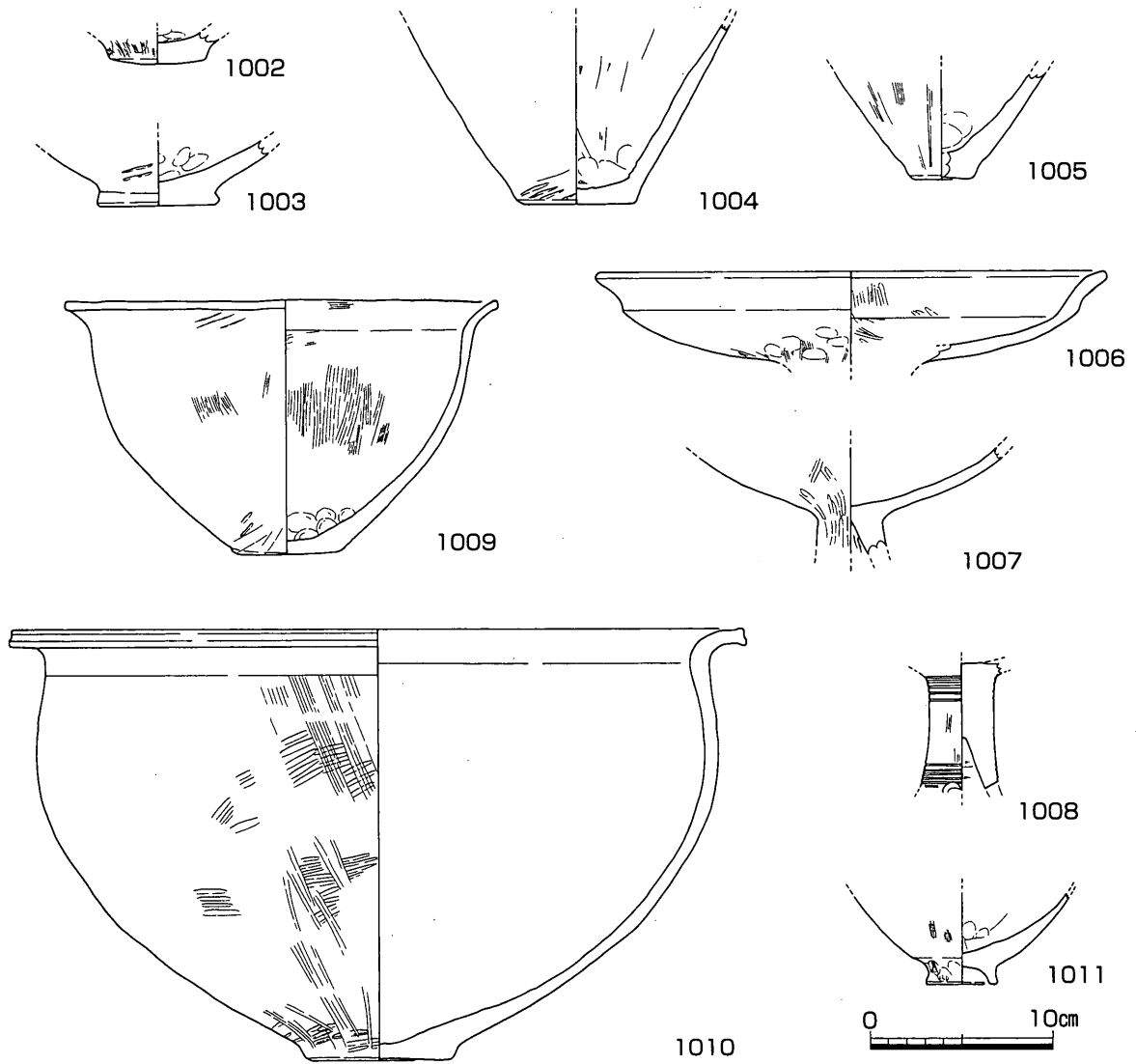
1006～1008は高杯である。1006の杯部は浅く、口縁部は外反している。摩滅気味であるが外面にはハケ目が、内面にはヘラミガキが認められる。1008はヘラ描沈線を2段に巡らせており、円形の透かし穴が現存で1個ある。

1009～1011は鉢である。1009は緩やかに湾曲する体部から口縁部は外反して開く。体部外面の底部付近には僅かにタタキの痕跡が残っている。内面はハケ目の後に下半をナデている。1010は大形の鉢で、口縁部は大きく外反して真横を向く。体部は大きく膨らみ、外面にはタタキの後に上半部には粗いハケ目を施し、下半部にはヘラミガキを加えている。上半部の粗いハケ目は摩滅しているため良く観察できなかったため、あるいは太いヘラミガキかもしれない。底部はやや突出している。1011は短い脚台が付いている。

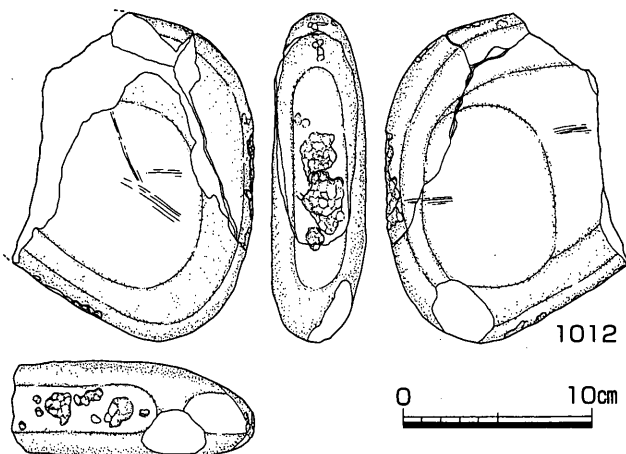
1012は台石である。表裏に線状痕が認められる。側面には敲石のような痕跡があるが、大きさや重量



第169图 IV区第2面集石9出土遺物 (1) (1/4)



第170図 IV区第2面集石9出土遺物 (2) (1/4)



第171図 IV区第2面集石9出土遺物 (3) (1/4)

から敲石としての使用は考えにくい。
 以上の遺物は、弥生時代中期のものが若干含まれ、中には991や995のように古墳時代まで下るものも含まれているが主体は弥生時代後期後半である。



第172図 IV区第2面集石10平・立面図 (1/60)

集石10 (第172~177図)

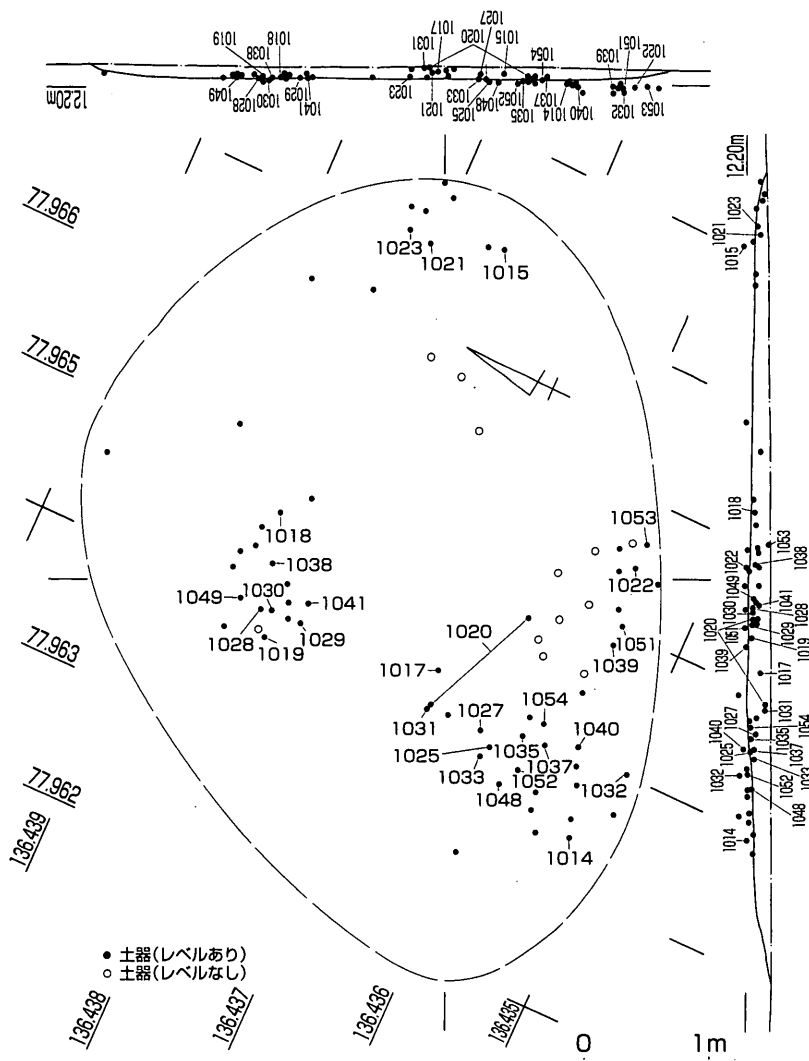
調査区の中央部分で、旧F1区南側の集石遺構群に含まれる集石遺構で、集石10の北側に隣接している。保存のため、その上面を検出したにとどまる。集石遺構が群集している箇所位置している。集石8・9と同様に上面だけで全体の調査を行っていないので、集石遺構の範囲は礫の分布の疎密により判断したが、特に集石9との境は不明瞭な部分が多々ある暫定的な範囲である。

検出部分では全体に盛り上がり乏しく、平面的に礫が分布している。平面形は不整形であるが楕円形に近い。西側部分は北東-南西の土層観察用ベルトより西側には礫が広がっていないことから、このベルト内で収束すると考えられる。長径6.1m、短径4.5mになる。端部の標高は12.0~12.1m、頂部は標高12.2mで、高さは10~

20cmと低くなっている。礫を全体に検出した部分で掘り込みを停止しているため、端部の標高と集石遺構の高さは暫定的な値である。礫は全体に広がっているが、南西部分が少なくなっている。北側部分は後述する集石10と接しており、礫の境界は不明瞭である。礫は5~40cm大であるが、10~15cmほどのものが多い。中心から少し北側に大きめの礫が目立つ。中には40cm×25cm×20cmの直方体の大きな礫も見受けられる。礫は砂岩が主体で、花崗岩が少量伴っている。

集石10は断ち割り調査を行っていないので盛土の詳細は不明であるが、その上面は褐色粘質土である。集石10は全体に第1遺構面を形成する褐色~暗褐色砂質土に覆われていた。この層を除去しながら、集石10の礫と盛土である褐色粘質土を検出し、褐色~暗褐色砂質土の下部の茶色系の粘質土層の上面で掘り込みを停止した。暫定的な端部は盛土の褐色粘質土と茶色系粘質土との境界で設定した。下部施設の有無は不明である。

遺物は中心から少し北側の巨大な礫の周辺部分、南側部分、北東部分の3箇所集中的に出土した。いずれも端部に近い部分である。その他の部分での出土は少ない。破片での出土で完形に復元できるものはない。1020の壺の体部が1.05m離れた箇所から出土した破片と接合した以外は、接合関係は認められなかった。遺物の集中箇所には北東部分を除いて、壺と甕がほぼ同じ数だけ出土しているという傾向が伺える。石器の出土は1点のみである。



第173図 IV区第2面集石10遺物出土状況平・立面図 (1/60)

1013~1023は壺である。1013・1014の頸部は長く、口縁部は緩やかに外反する。1015の頸部は内傾し、口縁部は外反して開く。頸部内面には指押さえが顕著である。体部は大きく膨らみ最大径は中央にあり、外面にはヘラミガキを施す。1016は若干外傾する頸部から口縁部は直線的に開き、端部は下方に拡張して外面に円形浮文を貼り付けている。頸部の外面はハケ目で刻目突帯を貼り巡らせている。1017の頸部内面の下部には板状工具の小口部分が当たった痕跡が多い。外面はヘラミガキでヘラ圧痕文を巡らせている。1018の体部外面のハケ目は粗い。1019は直線的で張りのない体部から、口縁部を短く屈曲させている。体部内面にはヘラケズリを施している。1020の底部は厚く、僅かに平底が残る。1021の体部外面にはハケ目の後にヘラ

ミガキを格子状に施している。1022は体部外面に丁寧にヘラミガキを施す。1023の体部は扁平で横に大きく膨らんでいる。

1024~1033は甕である。1025の口縁部端部は肥厚している。体部外面には一見ハケ目に似たヘラミガキを波状に施している。内面はヘラケズリである。1027は体部上部が肥厚し、内面にはヘラケズリを施している。1029の口縁部は外反し、外面に指押さえを行う。体部の膨らみは強い。1030は口縁部屈曲部内面に強く指押さえを行う。体部はハケ目の後にヘラミガキを加える。1031は口縁部から体部にかけて全体に内・外面ともにハケ目を施すが、幅の狭いハケ目である。1032の口縁部は内・外面からの強い指押さえのため薄くなっている。

1034~1048は壺および甕の底部である。1037の底部外面は抉り取られて上げ底になっている。1039の底部は突出しており、側面にはタタキの後にヘラミガキが認められる。

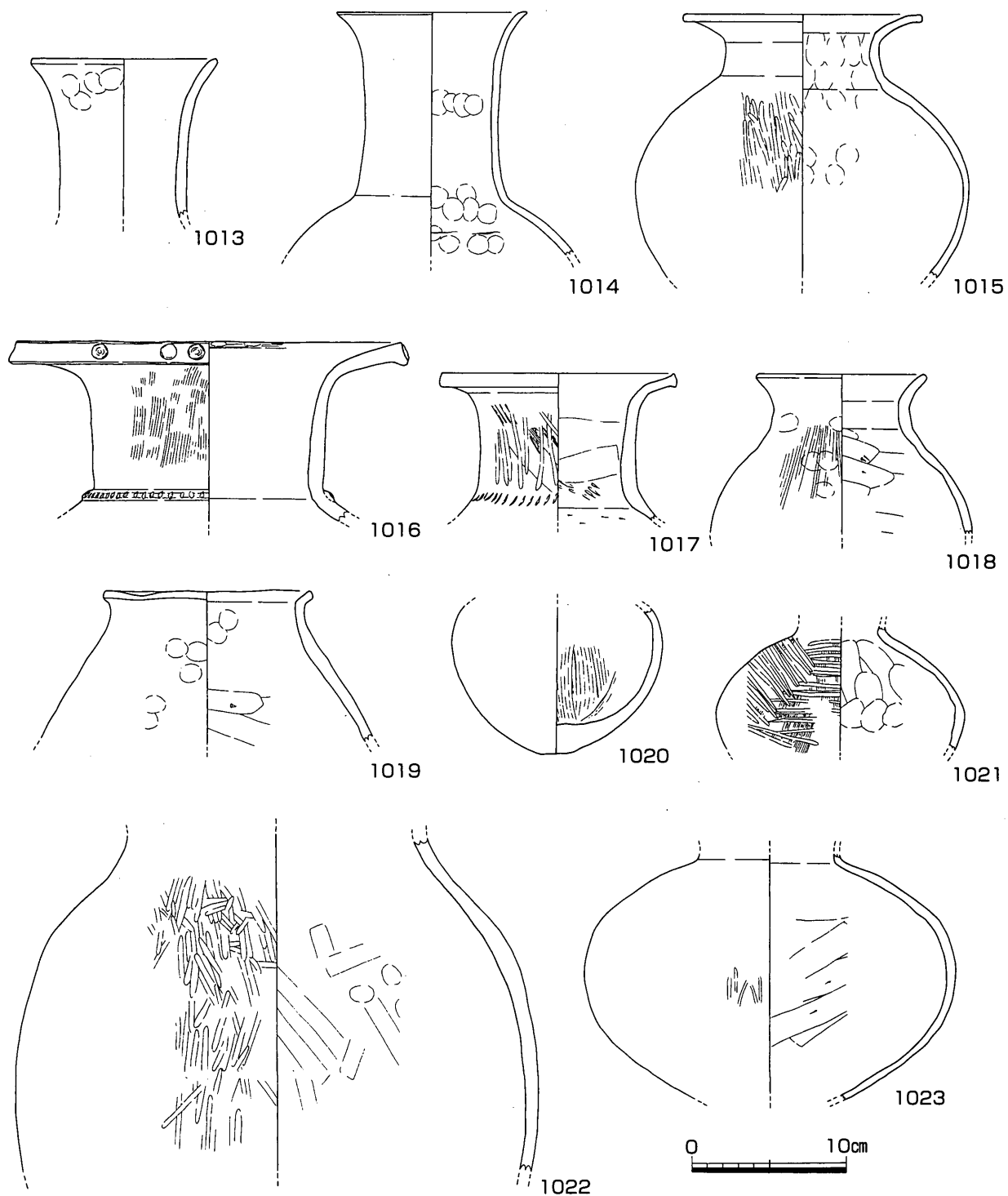
1049~1053は高杯である。1049の杯部は直線的で鋭く屈曲して口縁部になり、口縁部は内・外面を強くナデており、端部は内傾する面をもつ。杯部には内・外面に丁寧にヘラミガキを格子状に施している。1052は脚部外面を板状工具により面取りしている。1053は脚部外面にハケ目の後に下半にヘラミガキを加えている。円盤充填である。

1013~1023は壺である。1013・1014の頸部は長く、口縁部は緩やかに外反する。1015の頸部は内傾し、口縁部は外反して開く。頸部内面には指押さえが顕著である。体部は大きく膨らみ最大径は中央にあり、外面にはヘラミガキを施す。1016は若干外傾する頸部から口縁部は直線的に開き、端部は下方に拡張して外面に円形浮文を貼り付けている。頸部の外面はハケ目で刻目突帯を貼り巡らせている。1017の頸部内面の下部には板状工具の小口部分が当たった痕跡が多い。外面はヘラミガキでヘラ圧痕文を巡らせている。1018の体部外面のハケ目は粗い。1019は直線的で張りのない体部から、口縁部を短く屈曲させている。体部内面にはヘラケズリを施している。1020の底部は厚く、僅かに平底が残る。1021の体部外面にはハケ目の後にヘラ

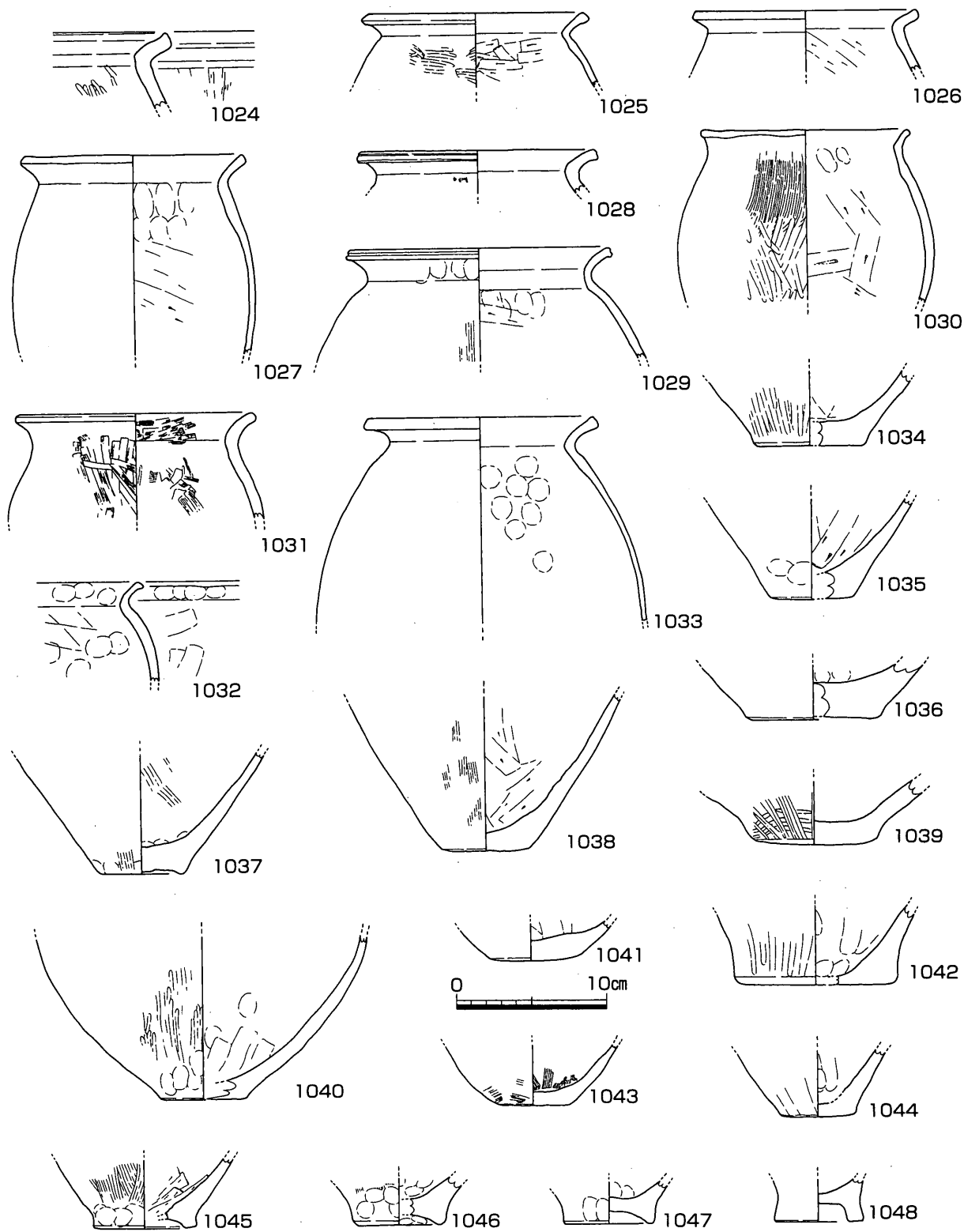
1054は鉢で、体部は僅かに内湾している。外面には指押さえが顕著である。

1055は平基の石鉢である。

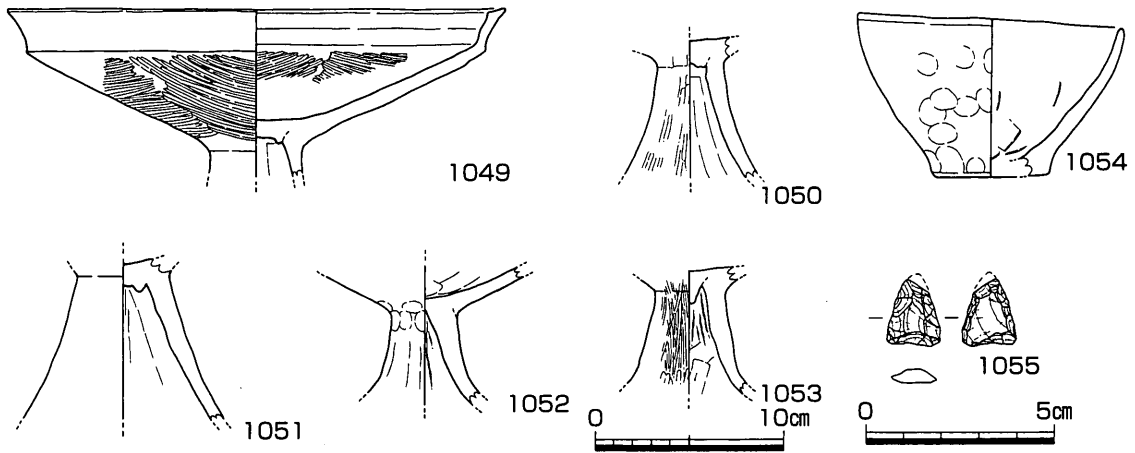
1056~1071は集石10の検出時に出土したもので、明瞭に伴うものではない。1056の口縁部は外反し、体部は内面にヘラケズリを施している。1063の口縁部は短く、外側に向かって屈曲している。口縁部近



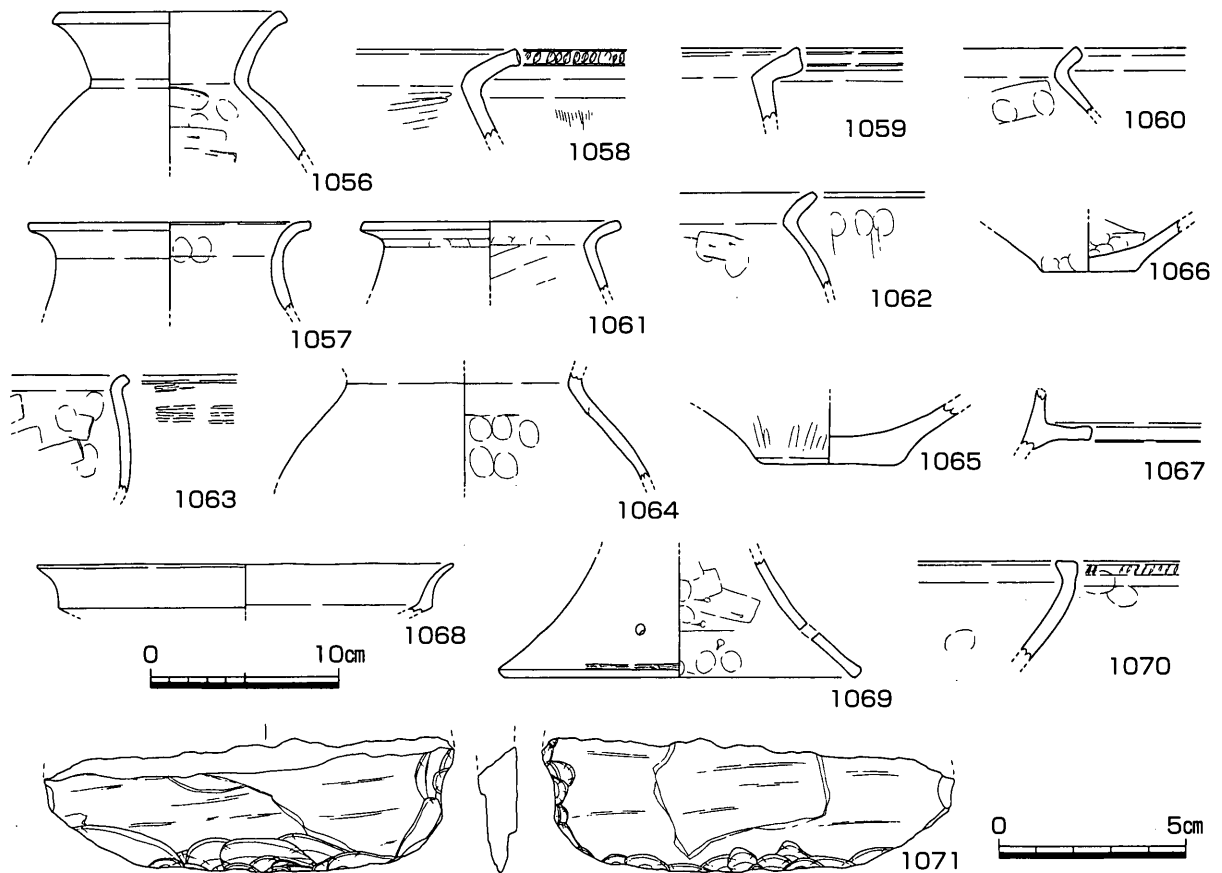
第174図 IV区第2面集石10出土遺物 (1) (1 / 4)



第175图 IV区第2面集石10出土遺物 (2) (1/4)



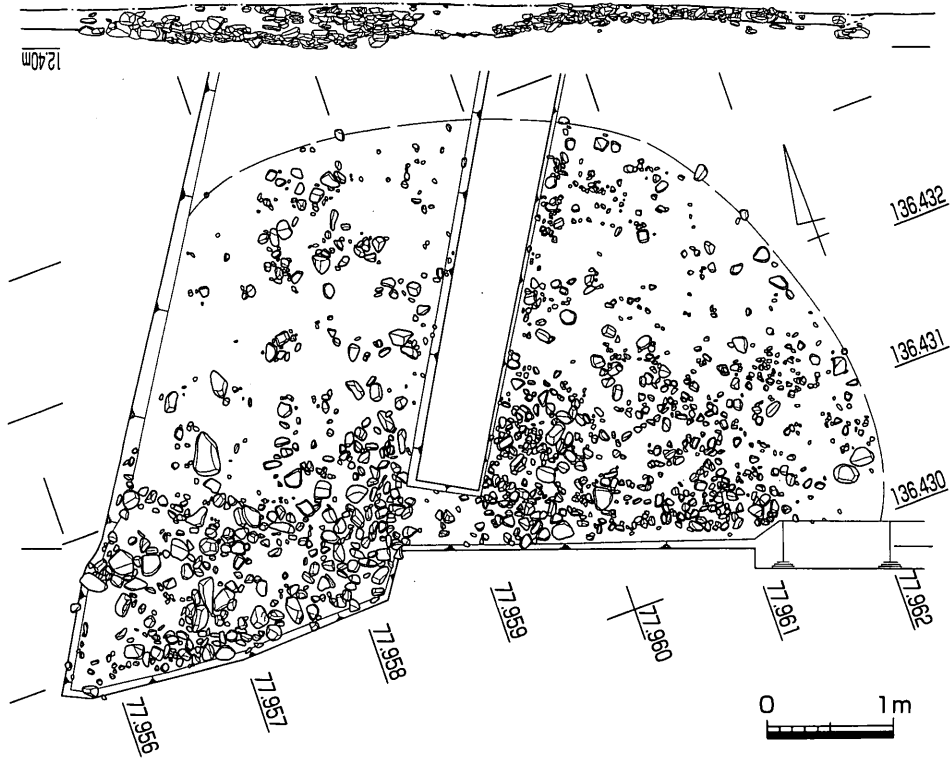
第176図 IV区第2面集石10出土遺物 (3) (1/4、1/2)



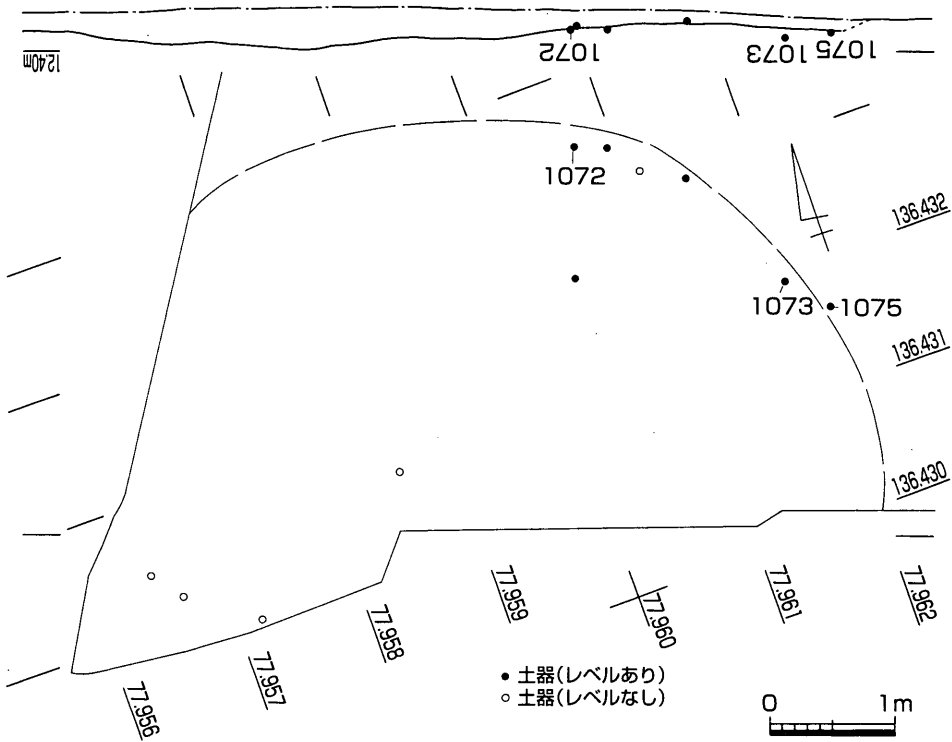
第177図 IV区第2面集石10上部包含層出土遺物 (1/4、1/2)

くの外面にはタタキを施している。外形とタタキの存在から鉢と考えたものである。1071は結晶片岩製の打製石庖丁で、側縁部に抉りを入れている。刃部は両面から作り出している。

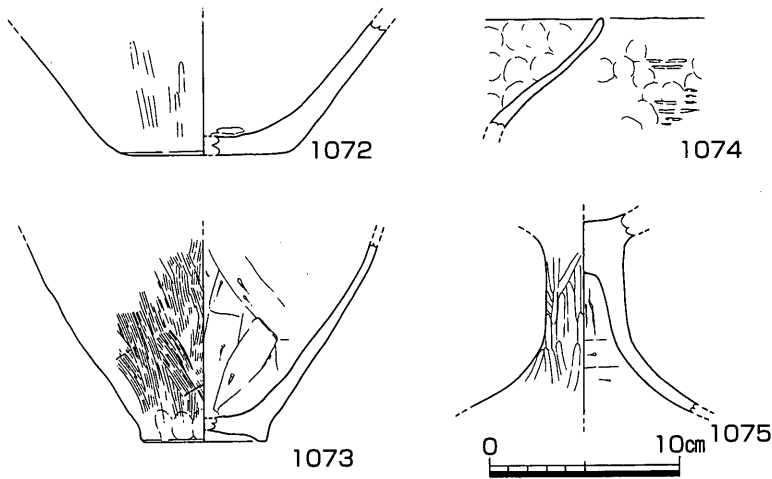
以上の出土遺物から、若干の弥生時代中期中葉の土器が混じるが、弥生時代後期中葉の所産と考えることが出来る。



第178図 IV区第2面集石11平・立面図 (1/60)



第179図 IV区第2面集石11遺物出土状況平・立面図 (1/60)



第180図 IV区第2面集石11出土遺物（1／4）

集石11（第178～180図）

調査区の中央部分で、旧F1区南側の集石遺構群に含まれる集石遺構である。旧F1区南壁際で検出しその南側は調査区外に広がっている。集石9の西側2mのところに位置している。保存のため、その上面を検出したにとどまる。集石遺構が群集している箇所に位置している。集石8～10と同様に上面だけで全体の調査を行って

ないので、集石遺構の範囲は礫の分布の疎密により判断した。

集石11の西側部分の土層観察用ベルトを越えて西側には礫の分布が疎であることから、この土層観察用ベルト内で端部は収束すると考えられる。平面形は検出部分から復元すると直径6.4mの円形になると考えられる。端部の標高は12.1～12.15m、頂部の標高は12.4mで、高さは30～35cmとなっている。礫を全体に検出した部分で掘り込みを停止しているため、端部の標高と集石遺構の高さは暫定的な値である。頂部はすでに第1遺構面でその一部が確認されている。中央の土層観察用ベルトと調査区南壁との交点部分が中心で、その西側部分は低いながら明瞭に盛り上がりを見せている。逆に東側は低くなり平面的になっている。礫は調査区壁際の中央部分は密であるが、端部に向かって少しずつ少なくなっていく。中心部分については一部土層観察用ベルトを除去して下部を確認したが、礫は少なく空白になっていた。礫は5～30cm大であるが、10～15cm大のものが多く、西側部分に大きめの礫が目立っている。礫は砂岩が主体で、花崗岩が少量伴っている。

集石11は断ち割り調査を行っていないので盛土の詳細は不明であるが、その上面は褐色粘質土である。全体に第1遺構面を形成する褐色～暗褐色砂質土に覆われていた。この層を除去しながら、集石11の礫と盛土である褐色粘質土を検出し、褐色～暗褐色砂質土の下部の茶色系の粘質土層の上面で掘り込みを停止した。暫定的な端部は盛土の褐色粘質土と茶色系粘質土との境界で設定した。下部施設の有無は不明である。

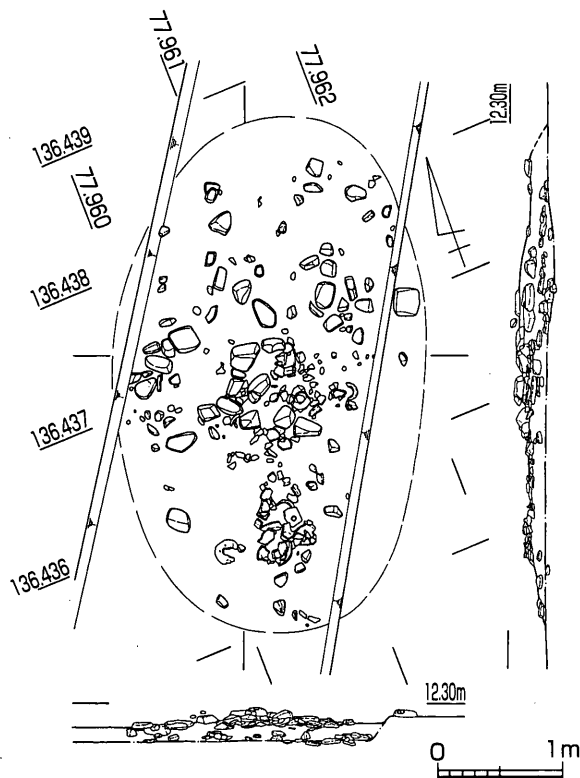
遺物の出土は少なく、頂部と北東部の端部付近で出土している。異なる位置で出土した遺物の接合関係は認められない。

1072は壺の底部、1073は甕の底部である。1073の底部は上げ底で、側面に指押さえを行っている。1074の体部は上部で僅かに内湾している。内・外面に指押さえが顕著で、外面にはタタキを施している。外面にタタキがあることから鉢と考えておく。1075は高杯の脚部で中央部分から開いている。外面にはヘラミガキが丁寧に施され、内面はヘラケズリになっている。

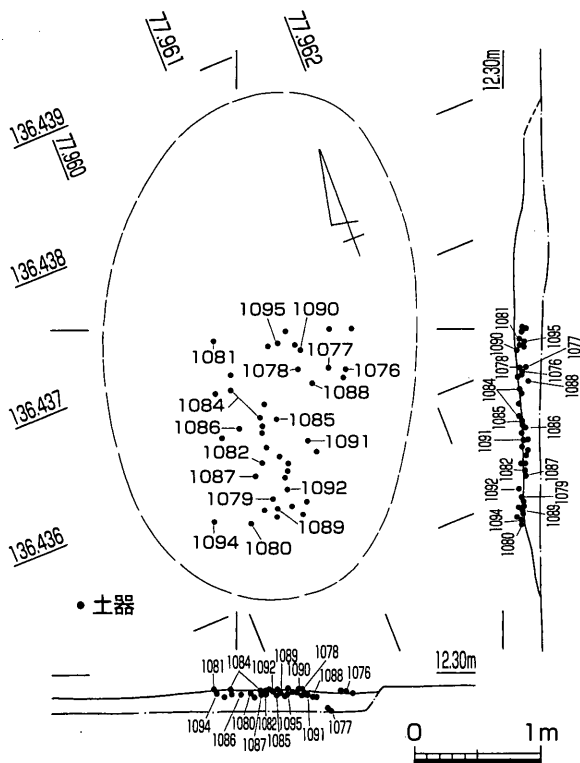
少ない遺物ではあるが、集石11は弥生時代後期中葉ごろと考えられる。

集石12（第181～185図）

調査区の中央部分で、旧F1区南側の集石遺構群に含まれる集石遺構である。集石10の西側に隣接している。保存のため、その上面を検出したにとどまる。集石遺構が群集している箇所に位置している。



第181 図IV区第2面集石12平・立面図 (1/60)



第182図 IV区第2面集石12遺物出土状況平・立面図 (1/60)

集石8~11と同様に上面だけで全体の調査を行っていないので、集石遺構の範囲は礫の分布の疎密により判断した。

東西に土層観察用ベルトがあり、礫はベルトを越えて東西に広がっていない。従って集石12の東西の端部はそれぞれの土層観察用ベルト内で収束していることになる。平面形は両側を土層観察用ベルトに挟まれた長楕円形で、長径4.0m、短径は復元で2.5mになる。端部の標高は12.0m、頂部の標高は12.25mで、高さは25cmとなっている。礫を全体に検出した部分で掘り込みを停止しているため、端部の標高と集石遺構の高さは暫定的な値である。高さはあまりないが、盛り上がりを見せている。中央部分より北側は丸みを帯びているが、南側は平坦になっている。礫の数は他の集石遺構に比べて少なく一応全体に散布しているが、盛土部分が目立っている。礫は5~25cm大であるが、頂部は全体に15~20cm大の礫が多く、端部近くなるほど小さめの礫になる。礫は砂岩が主体で、花崗岩が少量伴っている。

集石12は断ち割り調査を行っていないので盛土の詳細は不明であるが、その上面は褐色粘質土である。全体に第1遺構面を形成する褐色~暗褐色砂質土に覆われていた。この層を除去しながら、集石12の礫と盛土である褐色粘質土を検出し、褐色~暗褐色砂質土の下部の茶色系の粘質土層の上面で掘り込みを停止した。暫定的な端部は盛土の褐色粘質土と茶色系粘質土との境界で設定した。下部施設の有無は不明である。

遺物は集石遺構の規模の割には多く、南半部で出土している。これに対し北半部での出土はない。中央部分は礫に囲まれるように出土し、そこから50cmほど南側では土器のみが集中して出土した。異なる位置で出土した遺物の接合関係は認められない。また器種別の分布には特に特徴は見受けられない。

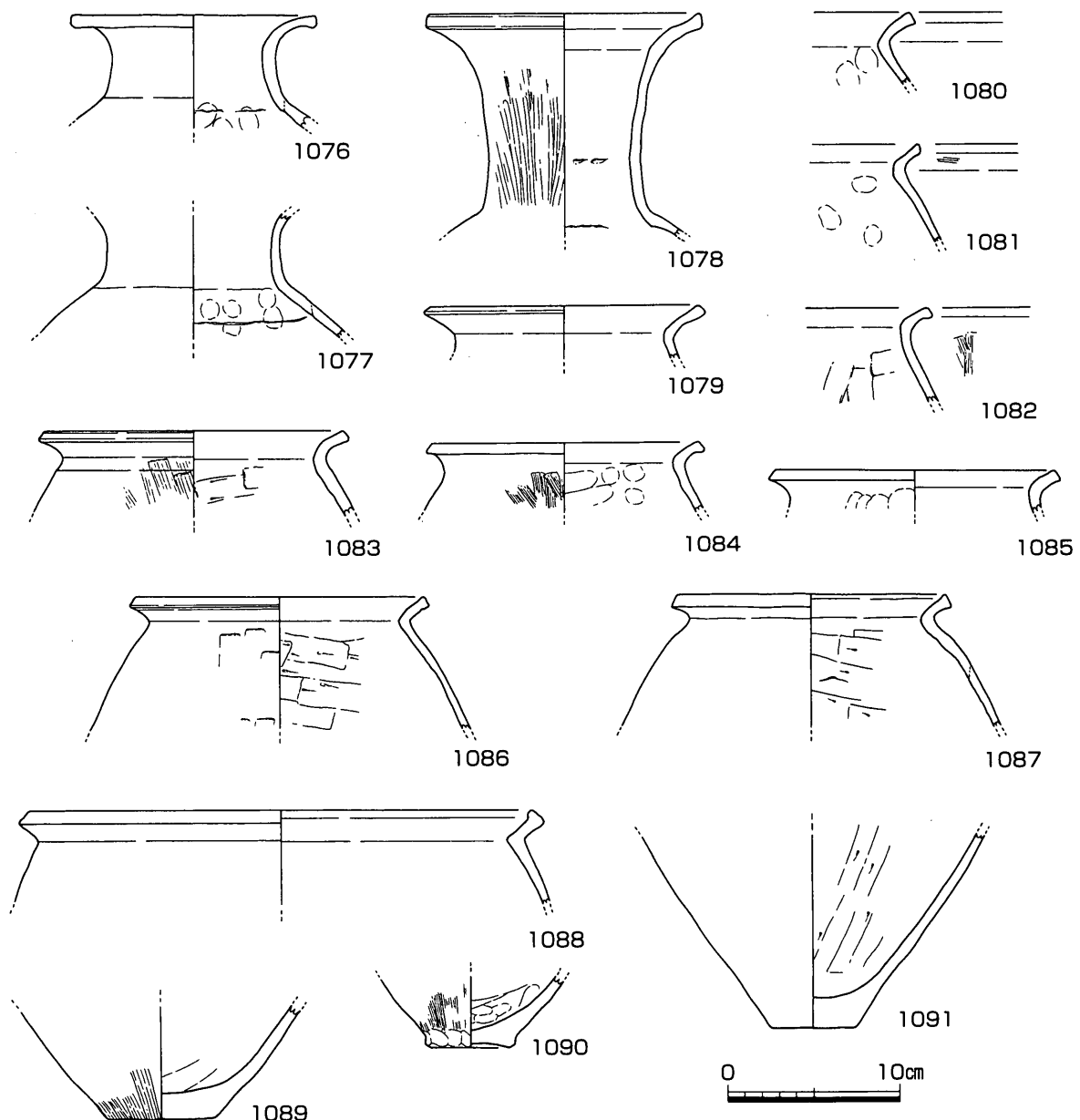
1076~1078は壺である。1976の口縁部は内傾する頸部から外反して開く。1078の頸部は長く、口縁部は端部内面を強くナデている。頸部外面にはハケ目の後にヘラミガキを施している。

1079~1088は甕である。1080の器壁は口縁部端部に向かって厚くなって行く。1083・1086・1087の体部内面はヘラケズリで、口縁部端部は平坦な面になっている。1087の体部上半は膨らんでいる。

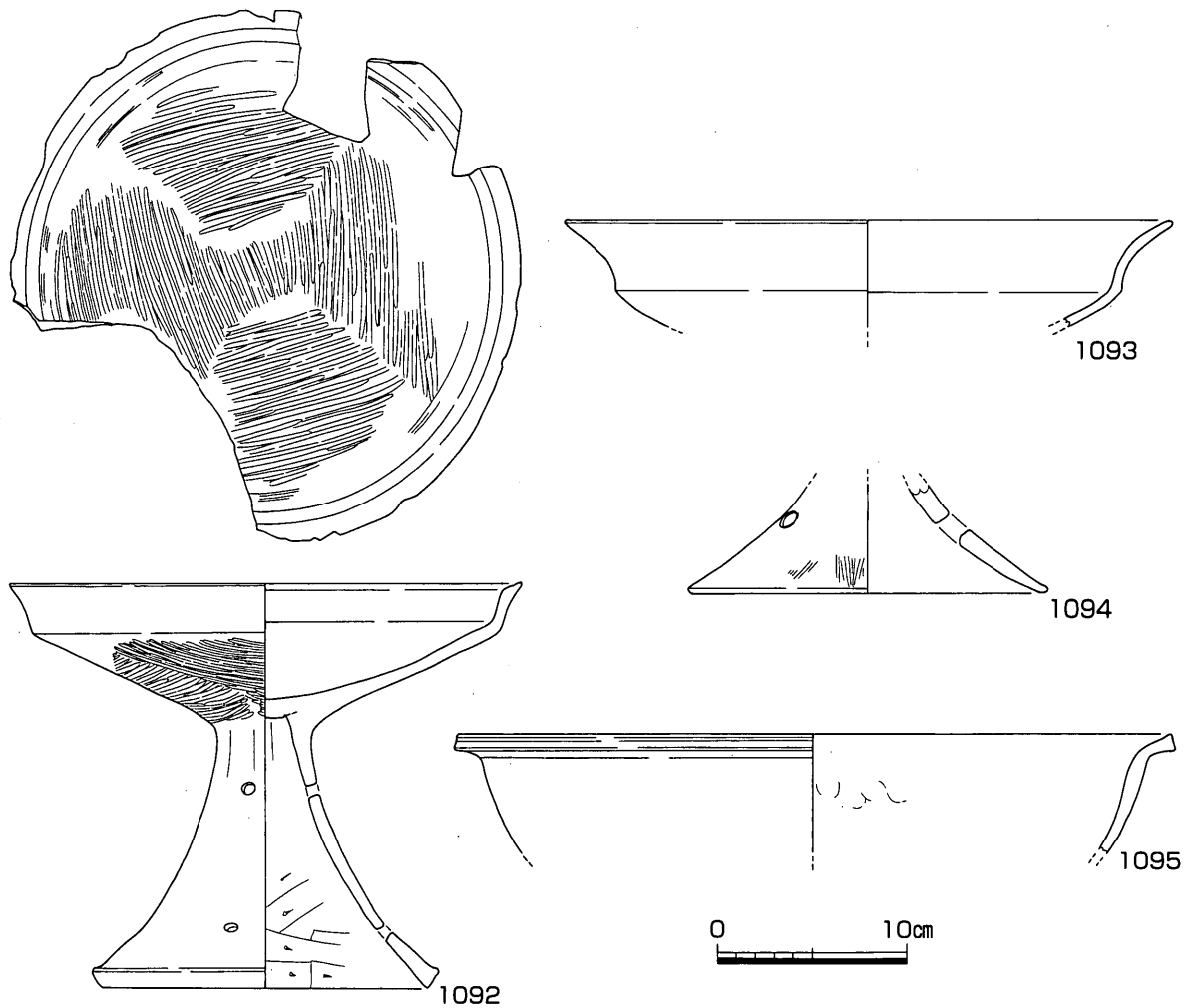
1092~1094は高杯である。1092の口縁部はナデることにより内傾する面を形成している。杯部内・外面にはヘラミガキを格子状に丁寧に施している。脚部は緩やかに外反して開き、端部は肥厚し傾斜する面をもっている。外面はナデ、内面はヘラケズリである。上下2段に円形の透かし穴がある。上段には3個あり、下段には現存で1個ある。1093の口縁部は強く外反している。1094の脚部端部は先細りになっている。4個の円形の透かし穴がある。1095は大形の鉢である。

1096~1101は集石12の範囲内ではないが1 m以内で近接して出土した遺物で、集石12に伴っていた可能性があるものである。1096の壺の頸部には不揃いではあるがヘラ描列点文が巡っている。1097~1100は甕である。1100は口縁部端部に強く指押さえを行っているため、口縁部に凹凸が見られる。1101は鉢で、口縁部直下の外面にタタキが見られる。

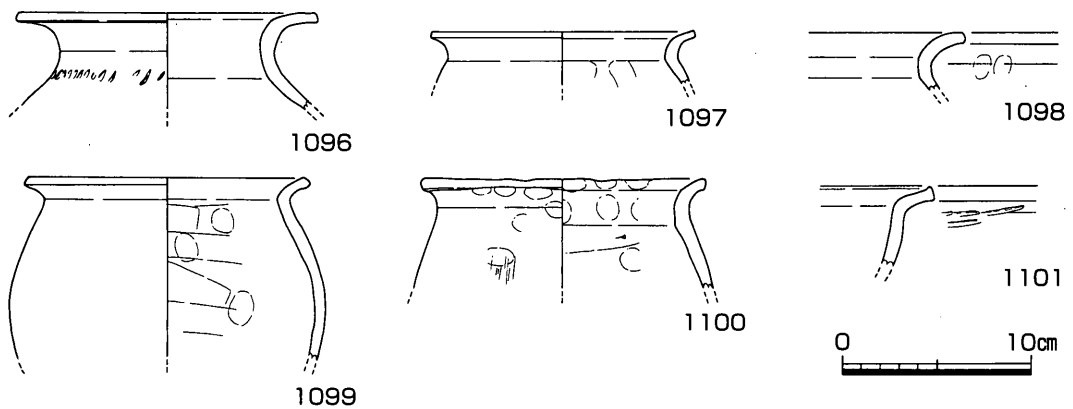
出土遺物から集石12は弥生時代後期中葉の所産と考えられる。



第183図 IV区集石12出土遺物 (1) (1/4)



第184図 IV区集石12出土遺物 (2) (1 / 4)

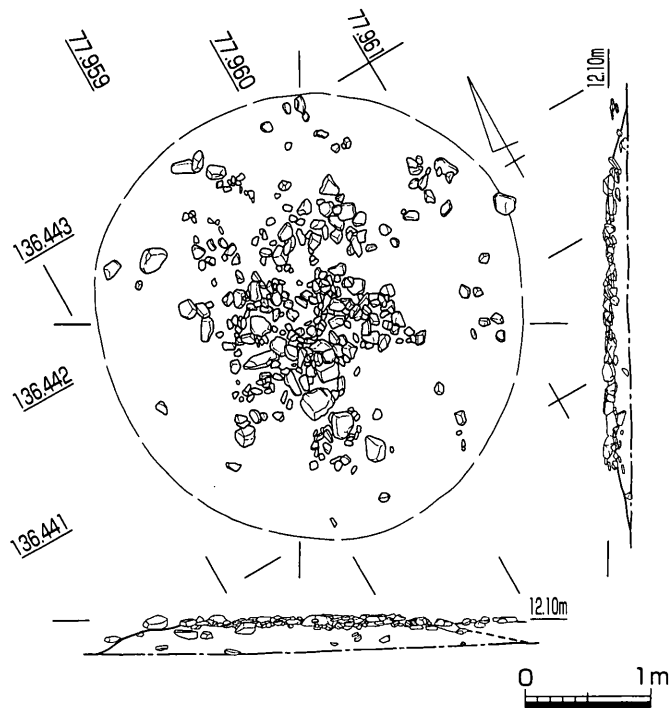


第185図 IV区集石12周辺出土遺物 (1 / 4)

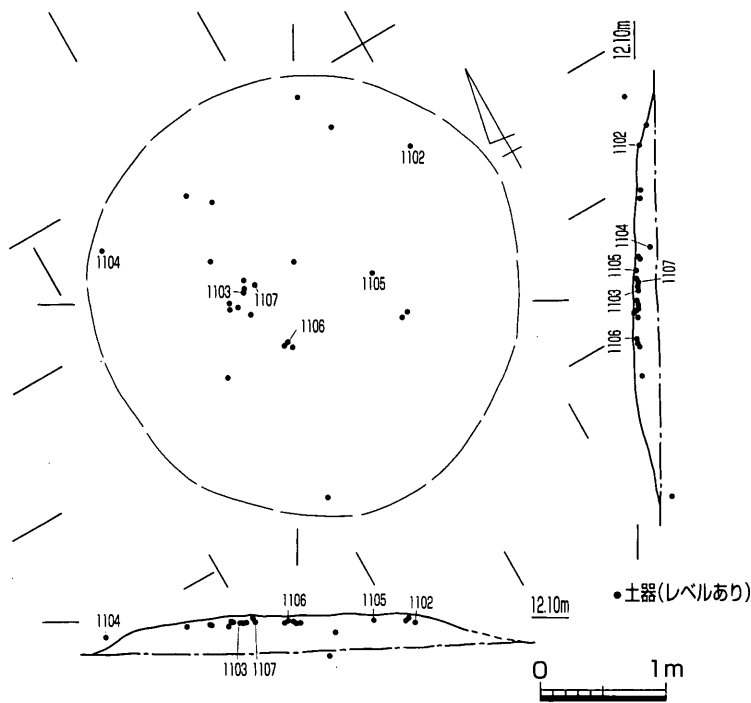
集石13 (第186~188図)

調査区の中央部分で、旧F 1区南側の集石遺構群に含まれる集石遺構である。集石12の北側2mのところに位置している。保存のため、その上面を検出したにとどまる。集石遺構が群集している箇所からは少し離れている。集石8~12と同様に上面だけで全体の調査を行っていない。

平面形は円形で直径3.4mである。端部の標高は11.85~11.9m、頂部の標高は12.15mで、高さは25~



第186図 IV区第2面集石13平・立面図 (1/60)



第187図 IV区第2面集石13遺物出土状況平・立面図 (1/60)

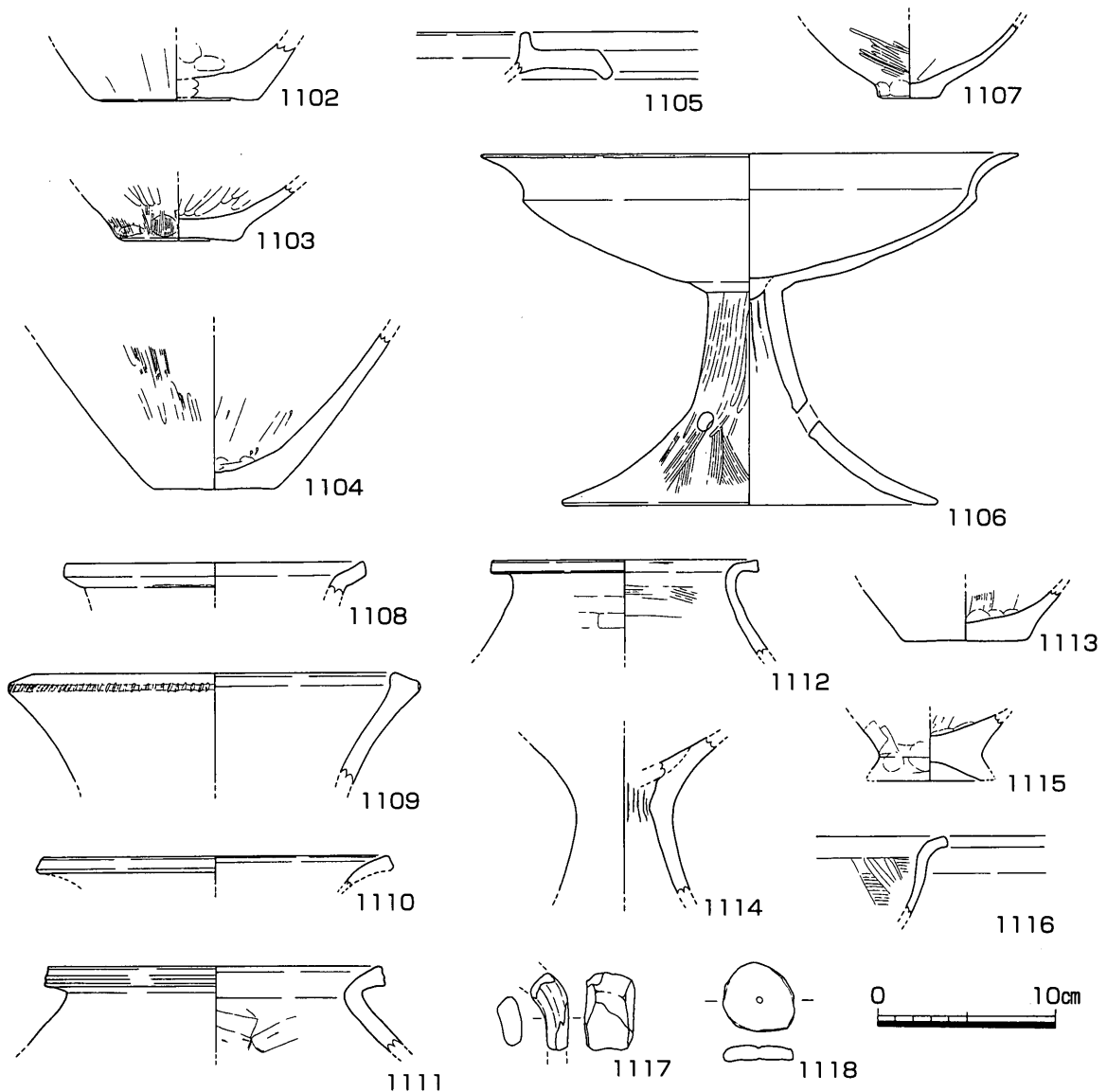
30cmである。礫を全体に検出した部分で掘り込みを停止しているため、端部の標高と集石遺構の高さは暫定的な値である。高さはあまりないが、均整の取れた塚状に盛り上がっている。礫は頂部の中央部分を中心に直径1.5mの円の中に納まるように集中している。端部では少なくなっている。礫は5~25cm大であるが、頂部の南西部分に集石13のなかでは大きめの20cm前後のものが目立っている。礫は砂岩が主体で、花崗岩が僅かに伴っている。

集石13は断ち割り調査を行っていないので盛土の詳細は不明であるが、その上面は褐色粘質土である。全体に第1遺構面を形成する褐色~暗褐色砂質土に覆われていた。この層を除去しながら、集石13の礫と盛土である褐色粘質土を検出した。褐色~暗褐色砂質土の下部の、集石8~12の場合とは異なり茶色系粘質土は堆積してなく、暗灰褐色系の粘質土層の上面で掘り込みを停止した。暫定的な端部は盛土の褐色粘質土と茶色系粘質土との境界で設定した。下部施設の有無は不明である。

遺物は頂部を中心に少量出土している。全体的には北半部に多く、南半部には少ない。頂部やや南側の大きめの礫の集中する部分で、礫に囲まれるように出土している1106の高杯がある。異なる位置で出土した遺物の接合関係は認められない。

1102~1104は壺の底部である。1105・1106は高杯である。1106の口縁部は大きく外反している。端部は先細りになっている。脚部は全体に外反して開き、端部は先細りである。脚部の上半はヘラミガキ、下半はハケ目を施している。円形の透かし穴が3個あるが、いずれも大きさと穿孔された高さが異なっている。円盤充填になっている。

1108~1118は集石13に直接伴うものではないが、端部から1m以内で出土しているものである。



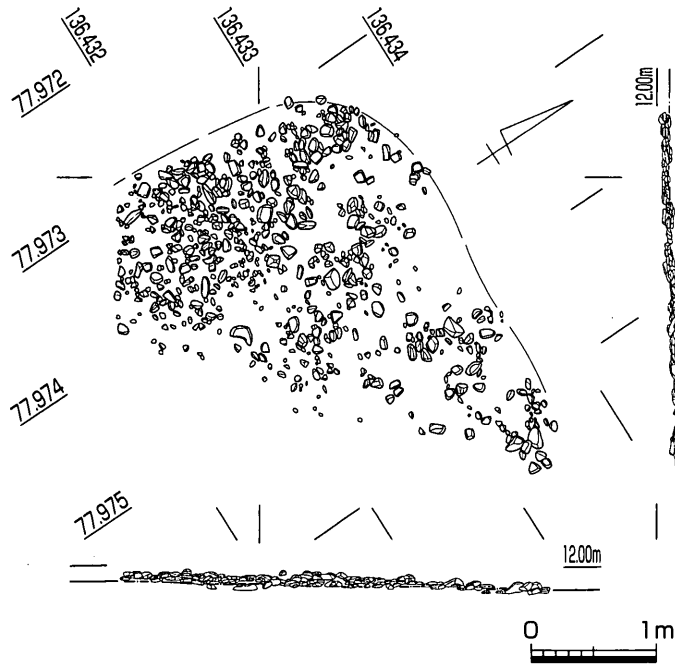
第188図 IV区第2面集石13、集石13周辺出土遺物（1 / 4）

1108・1109は壺である。1109は口縁部端部を内面側に拡張し、外面には刻み目を巡らせている。1110～1112は甕である。1111の体部内面はヘラケズリである。1112の口縁部は真横に開いている。1114は円盤充填の剥離痕が認められる。1115は短い脚台の付く鉢である。1118は紡錘車の未製品で、表裏から穿孔を一部行っているが貫通はしていない。

以上のように出土遺物は弥生時代中期のものと後期のものが混在している。下部まで調査を行っていないので構築面は不明であり、そこからの判断は出来ない。遺物の出土状況を見ると、1106の高杯の出土状況を見ると集石13に本来的に伴うような状況である。したがって近接する集石遺構群の状況と、明らかに後期の所産である集石7との礫の分布状況の類似を併せて考えて、1106の年代観から弥生時代後期後半ごろと考えておく。

集石14（第189図）

調査区の中央部分で、旧F1区南側の集石遺構群に含まれる集石遺構で、集石8の南東部に隣接して



第189図 IV区第2面集石14平・立面図 (1/60)

詰めたような状態である。従って礫が途切れた部分を端部としている。端部の標高は11.8~11.9m、頂部の標高は11.95mである。高さは5~15cmになるが、これは実際には集石遺構を構成する礫の高さである。礫を全体に検出した部分で掘り込みを停止しているため、端部の標高と集石遺構の高さは暫定的

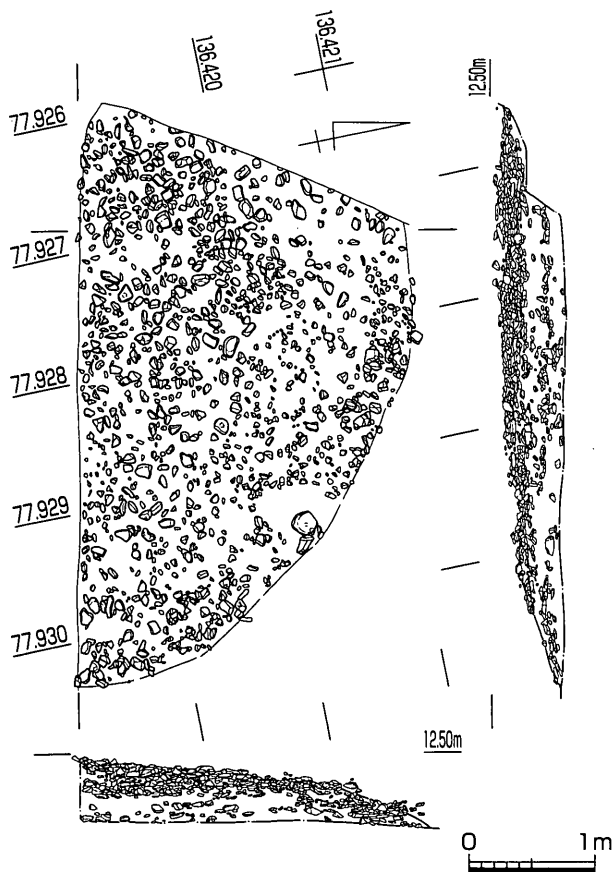
いる。保存のため、その上面を検出したにとどまる。上面だけで全体の調査を行っていないので、集石遺構の範囲は礫の分布の疎密により判断したが、北西部分では集石8と接しているため、不明瞭な部分が多々ある暫定的な範囲となっている。礫の分布状況を見ると確かに集中はしているが、他の集石遺構と比べても形としてのまとまりはあまりなく、積極的に集石遺構とは判断しかねるが、礫が集中しているということで集石遺構に含めておく。

平面形は不整形である。検出部分で南北2.5m、東西4.1mである。明瞭な盛り上がりはなく、平面的に礫を敷き

詰めたような状態である。従って礫が途切れた部分を端部としている。端部の標高は11.8~11.9m、頂部の標高は11.95mである。高さは5~15cmになるが、これは実際には集石遺構を構成する礫の高さである。礫を全体に検出した部分で掘り込みを停止しているため、端部の標高と集石遺構の高さは暫定的な値である。礫は5~15cm大であるが、10cm前後のものが多い。礫は砂岩が主体で、花崗岩が僅かに伴っている。

集石14は断ち割り調査を行っていないので盛土の詳細は不明である。他の集石遺構の盛土と考えられる褐色粘質土は検出されなかった。全体に第1遺構面を形成する褐色~暗褐色砂質土に覆われていた。この層を除去しながら、集石14の礫を検出した。褐色~暗褐色砂質土の下部の茶色系粘質土の上面で掘り込みを停止した。暫定的な端部は被覆土である褐色~暗褐色砂質土を除去して礫を検出し、茶色系粘質土が出た面で設定した。下部施設の有無は不明である。

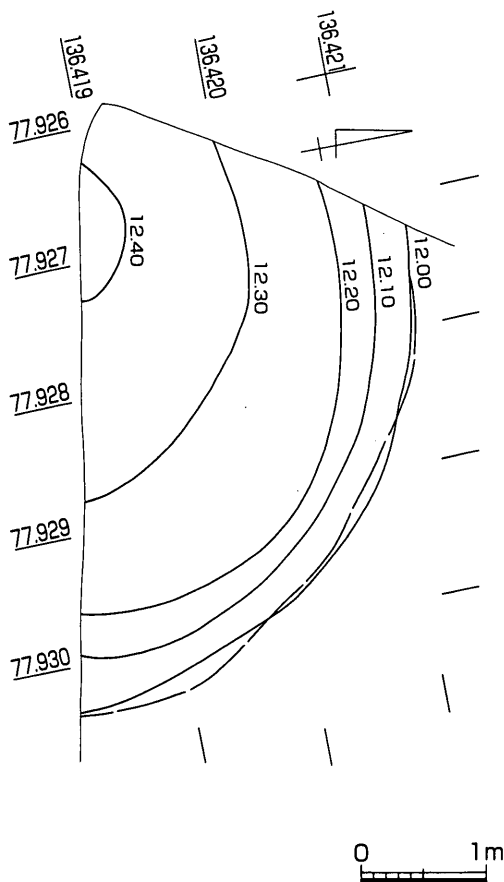
遺物は出土していない。そのため集石14の時期決定は難しい。隣接する集石8~13の埋没状況や検出状況と同じであることから、消極的ではあるが弥生時代後期の所産としておく。



第190図 IV区第2面集石19平・立面図 (1/60)

集石19 (第190~193図)

旧F2区の西橋脚部の南西隅で検出した集石



第191図 IV区第2面集石19測量図 (1/60)

遺構である。大部分は調査区外になり、その一部を検出したにとどまる。検出した部分から復元すると平面形は円形になると考えられ、円形とすると調査区内では全体の1/4に相当する。直径6.0~7.0mほどに復元され、中心部分は調査区南壁の少し外側になる。検出した部分では塚状に盛り上がっている。端部の標高は11.9~12.0m、頂部の標高は12.45mである。中心部分が最も高くなるのであれば、頂部の最も高い標高は未検出部分になる。検出部分での高さは45~55cmである。端部付近がやや急ではあるが、全体に緩やかに盛り上がる。南壁際の部分では東西方向の盛り上がりは端部付近でやや凹凸が認められる。

表面は全体的に礫に覆われているが、調査区南西隅の中心部分付近ほど礫が密になっている。反対に端部と頂部の中腹部分では礫は少なめになっている。礫は5~20cm大であるが、10~15cm大のものが主体となっている。中心部分と端部付近は構成する礫の中では大きめの礫が多い。

しかし特に目立って大きな礫はない。礫は砂岩が主体で、少量の花崗岩を含んでいる。

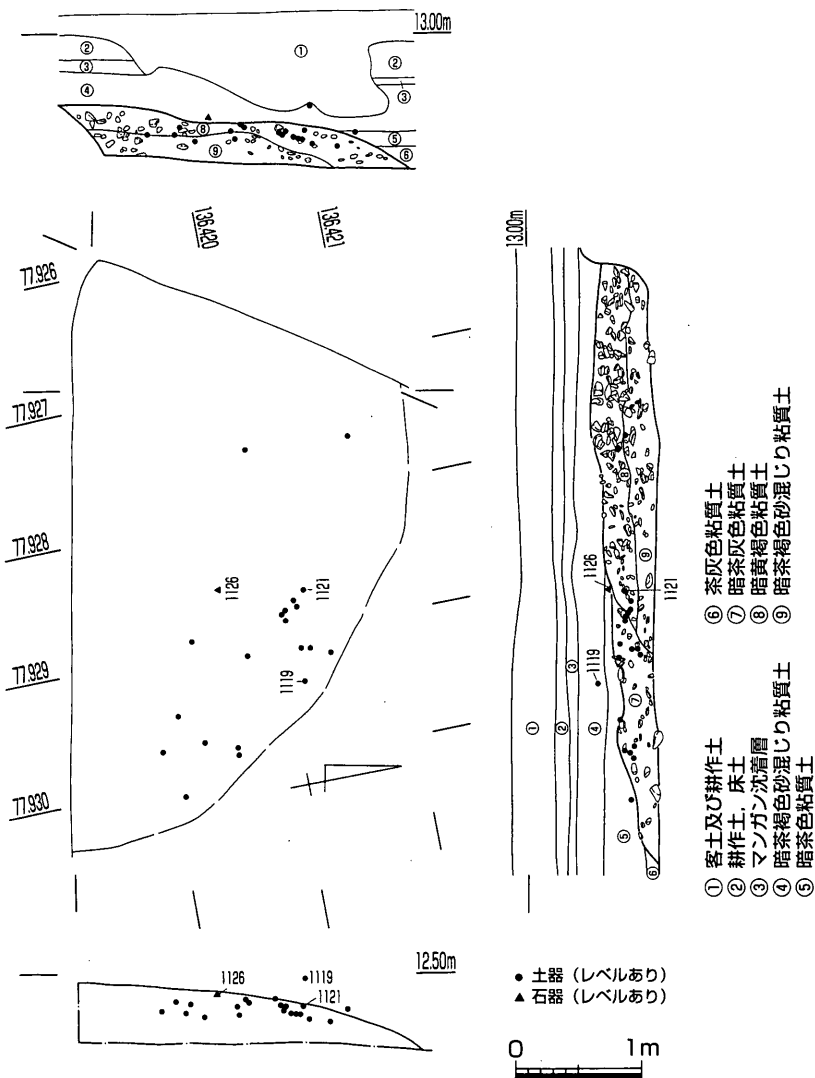
集石19は全体に④暗茶褐色砂混じり粘質土、⑤暗茶色粘質土、⑥茶灰色粘質土に覆われている。これら集石19を覆う土層は、特に④・⑤は周辺で集石遺構が群集する旧F2区の西橋脚部のほぼ全体に堆積し、特に攪乱された様子もなく水平に堆積している。

集石19の構築面は褐色砂混じり粘質土の上面になっている。この面から礫と土を混ぜながら盛り上げている。頂部に行くほど礫が多く、反対に端部に向かうほど土の割合が多くなっている。盛土は大きく上下2層に分かれる。下層は暗茶褐色粘質土、上層は暗黄褐色粘質土になっている。特に上層では礫が多く、暗黄褐色粘質土は礫が崩落しないように充填する役割を担っていたと考えられる。東側部分ではこの上下2層の盛土を横から覆うように暗茶灰色粘質土を盛っている。この土層は集石19の周辺の被覆土の状態からも集石19からの流出土とは考えにくく、盛土の一部と考えられる。丁度この暗茶灰色粘質土を盛りつける部分の斜面部分には遺物が多く出土している。これらの遺物を配置して覆っているようである。この盛土は東側から北側にかけてあり、西側部分にはない。

集石19については全体を調査したが、調査区内では下部遺構は検出されなかった。

遺物は北西から東側部分にかけて出土している。盛土の上層である暗黄褐色粘質土の下部から中ほどにかけて多く出土している。下層盛土の上面近くである。また先述のように上下2層の盛土を横から覆うように暗茶灰色粘質土との境界部分での出土も目立つ。異なった位置で出土した遺物の接合関係は認められなかった。

調査当初のグリッドではグリッド21の西部からグリッド22に相当する。直接、集石19に伴う確証はないが、グリッド21全体で図化した以外のサヌカイト剥片・碎片は総計で199点、330.4gになる。しかし

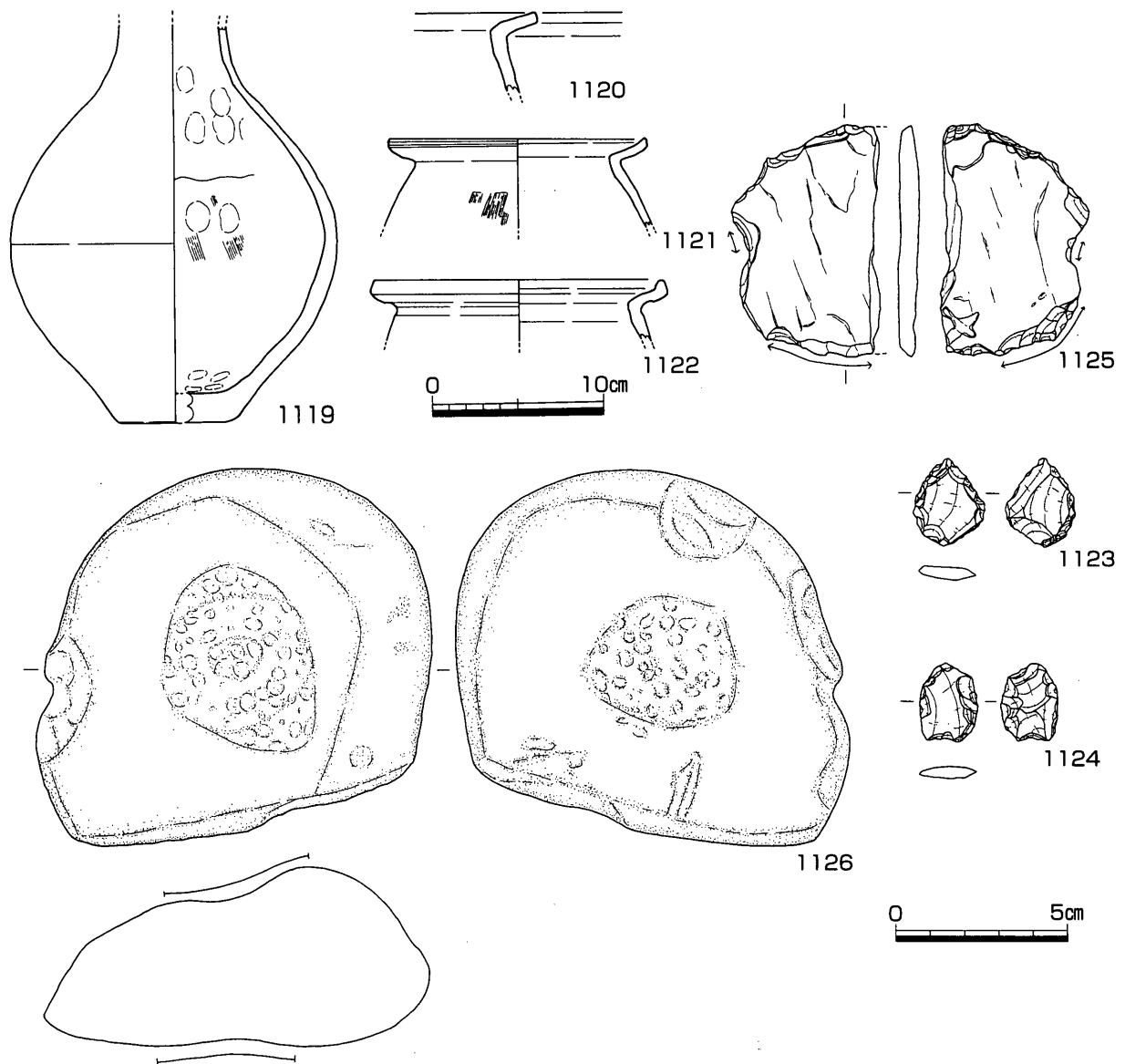


第192図 IV区第2面集石19遺物出土状況平・立面図，土層断面図（1/60）

グリッド21には後述する集石20があるため、参考の値となる。集石19のみのグリッド22では12点、21.8gになる。

集石19に伴い図化出来た遺物は1119～1126である。1119は壺で口縁部は欠損している。頸部は細長く、体部はその最大径が中央部分にある。外面は全体に摩滅しているが、内面には指押さえのほかに一部にハケ目が認められる。1120～1122は甕である。1121は口縁部の内面を強くナデている。体部外面にはハケ目を施している。1122は口縁部端部を上方に拡張している。1123・1124は石鏃の未製品で、1123は凸基に、1124は凹基になると考えられる。両者とも側縁部の調整が完全ではない。1125は結晶片岩製の打製石庖丁で、側縁部には挟りがあり、敲打痕が認められる。1126は凹石で、表裏の中央部分が使用のため窪んでいる。

出土遺物から集石19は弥生時代中期中葉の所産と考えられる。

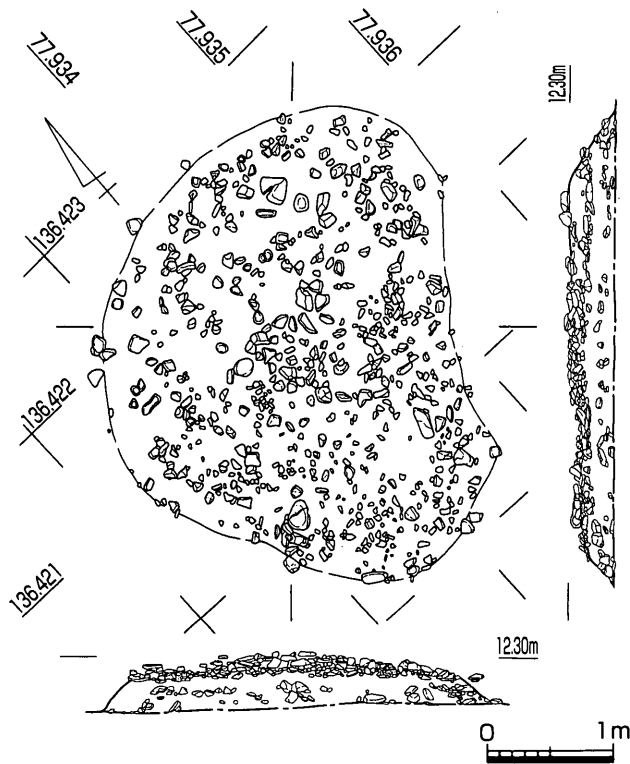


第193図 IV区第2面集石19出土遺物 (1/4、1/2)

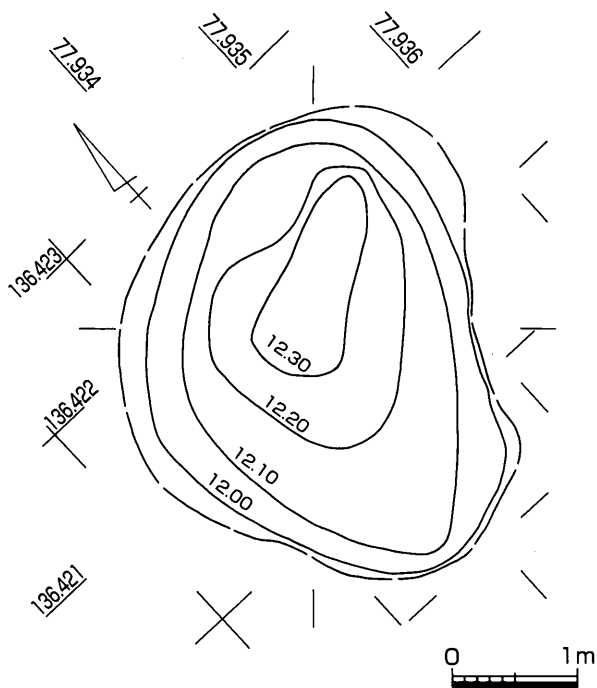
集石20 (第194~197図)

旧F 2区の西橋脚部の南西部で検出した集石遺構で、集石19の東側3mの所に位置している。平面形は不整形で、北-西-南側は丸みを帯びているが、東側は僅かに内湾して抉れているようである。南側部分は突出気味である。南北方向3.6m、東西方向2.8mである。全体に塚状に盛り上がっているが、頂部は丸みがない。端部の標高は11.9~11.95m、頂部の標高は12.3m、高さ35~40cmである。北東部分と北西部分が急になっているが、南側部分は緩やかで平坦に近い部分もある。頂部は南西-北東に細長い平坦地になるが、僅かに北東側が高くなっている。

表面は全体的に礫に覆われているが、中腹部分の礫が少なくなっている。端部は北西部分の礫が少ない。頂部中央部分には直径0.6mほどの円を描くように集中している。礫は5~25cm大で、10~15cm大のものが多く、頂部中心部付近に大きめの礫が多く、端部には拳大のものが目立つ。礫は砂岩が主体で、少量の花崗岩を含んでいる。



第194図 IV区第2面集石20平・立面図 (1/60)



第195図 IV区第2面集石20測量図 (1/60)

は1点だけであるがサヌカイト片の量が多い。

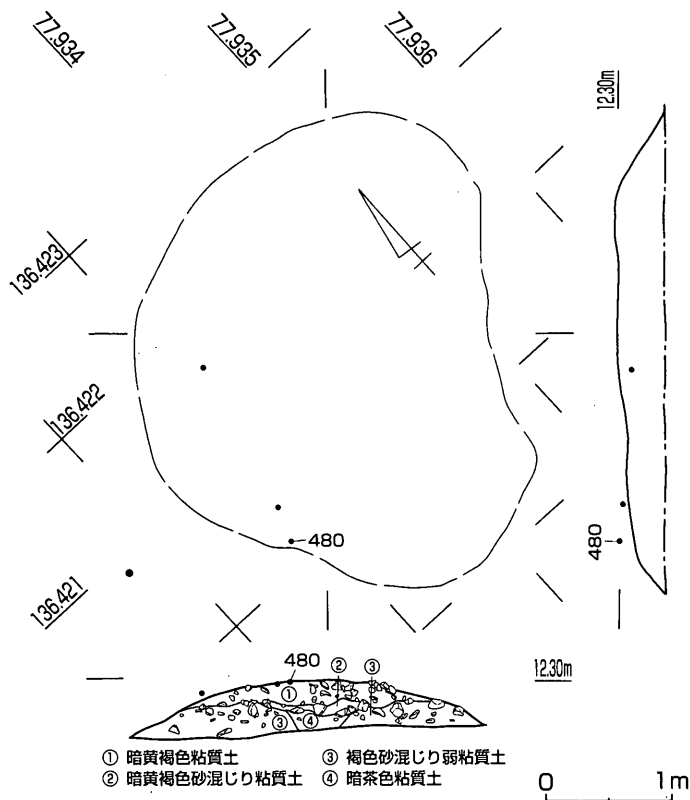
集石20に伴い図化出来た遺物は1127・1128の2点のみである。1127は壺で、口縁部は真横に開いている。端部は僅かに上方に拡張して傾斜する面を作る。内面には半截竹管により斜格子文を施し、3個1単位の穿孔がある。端部外面には3本1単位の棒状浮文が現存で2単位ある。1128は凸基の石鏃であ

集石20は全体に上から暗茶褐色砂混じり粘質土、暗茶色粘質土、明茶褐色粘質土に覆われている。これら集石20を覆う土層は周辺で集石遺構が群集する旧F2区の西橋脚部のほぼ全体に堆積し、特に攪乱された様子もなく水平に堆積している。

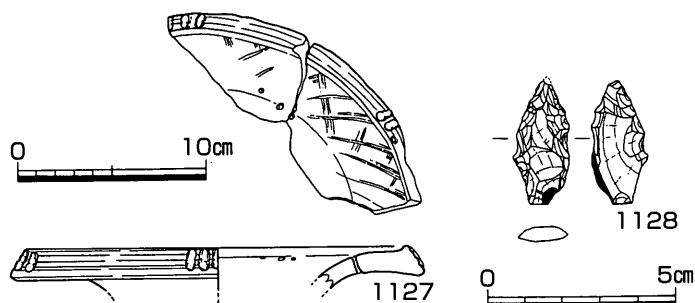
集石20の構築面は褐色砂混じり粘質土の上面になっている。この面から礫と土を混ぜながら盛り上げている。頂部に行くほど礫が多く、反対に端部に向かうほど土の割合が多くなっている。構築面近くでは大部分が土になっている。盛土は基本的には上下2層に分かれる。下層は褐色砂混じり弱粘質土、上層は暗黄褐色粘質土である。下層の中央部分にはブロックのように暗茶色粘質土があるが、土坑などの施設の埋土ではない。上下2層の間に薄く帯状に暗黄褐色砂混じり粘質土が堆積している。この部分には板状の扁平な礫が目立っている。この上下の中間部分と頂部付近に礫が多くなっていて、上層でもその中央部分は土が多い。集石20は全体を調査したが、下部遺構は認められなかった。

遺物の出土は少なく、南西頂部で僅かではあるが集中して出土している。異なった位置で出土した遺物の接合関係は認められなかった。

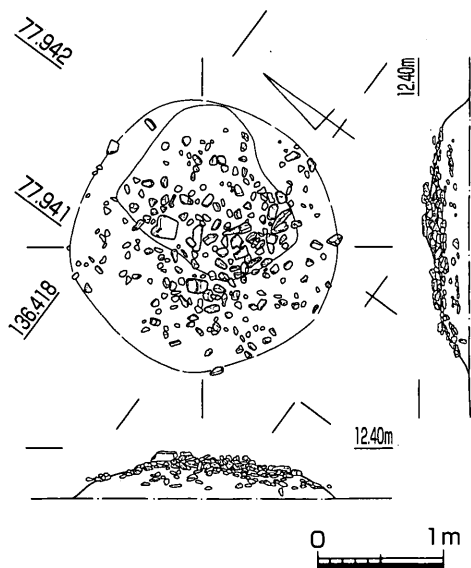
調査当初のグリッドではグリッド15とグリッド21の北東部に相当する。直接、集石20に伴う確証はないが、グリッド15全体で図化した以外のサヌカイト剥片・碎片は総計で344点、448.3gになる。グリッド21では先述の集石19があるため参考値であるが199点、330.4gになる。集石20に伴う石器



第196図 IV区第2面集石20遺物出土状況平・立面図 (1/60)



第197図 IV区第2面集石20出土遺物 (1/4、1/2)



第198図 IV区第2面集石21平・立面図 (1/60)

る。基部付近の調整は雑である。

出土遺物から集石20は弥生時代中期中葉の所産と考えられる。

集石21 (第198~202図)

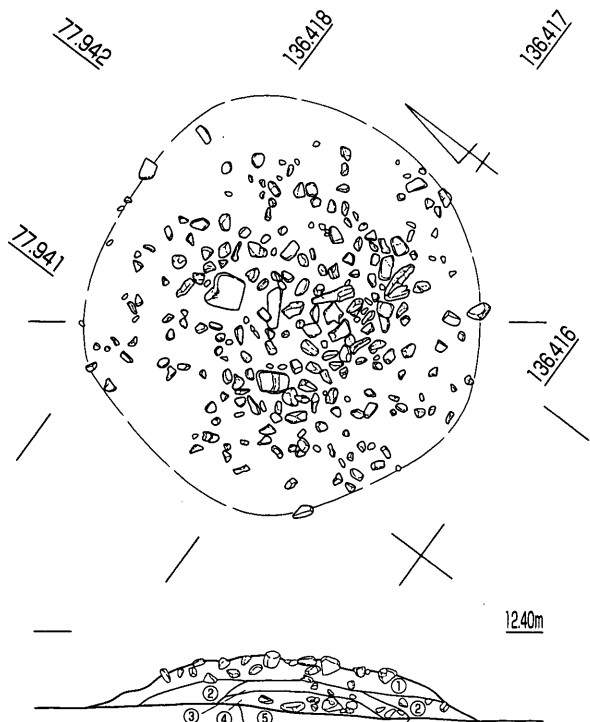
旧F2区の西橋脚部の南壁際中央部分で検出した集石遺構で、集石20の南東6mの所に位置している。平面形は円形で直径2.1mと小規模なものである。全体に塚状に盛り上がり均整の取れた形になっている。端部の標高は12.0m、頂部の標高は12.35m、高さ35cmである。頂部は丸みを帯びているが、南西部分がやや平坦になっている。

頂部は全体に礫に覆われているが、南側のほうが多くなっている。端部に向かうほど礫は少なくなり、端部では礫はほとんど無い。礫は5~20cm大で、頂部中心部分に10~20cm大の礫が集中し、そのまわりに一回り小さい礫が取り囲むようになっている。礫は砂岩が主体で、少量の花崗岩を含んでいる。

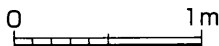
集石21は全体に上から暗茶褐色砂混じり粘質土、暗茶色粘質土、暗茶

色砂混じり粘質土に覆われている。これら集石21を覆う土層は周辺で集石遺構が群集する旧F2区の西橋脚部のほぼ全体に堆積し、特に攪乱された様子もなく水平に堆積している。

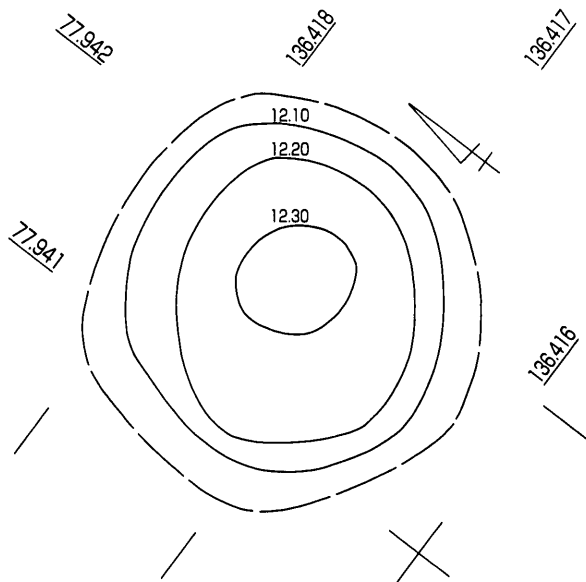
集石21の構築面は褐色砂混じり粘質土の上面になっている。この面から礫と土を混ぜながら盛り上げている。盛土は後述する土坑を覆い隠すように、下から暗茶褐色粘質土、粘土ブロックを含んだ暗褐色粘質土を合わせて20cm重ねている。そしてこの高さにそろえて周囲に硬く締まった暗褐色砂質土を加え、最終的に暗黄褐色粘質土で全体を覆っている。礫は最上層に多く含まれ、さらに最下層である暗茶褐色粘質土に多く含まれる。最下層の礫は10~



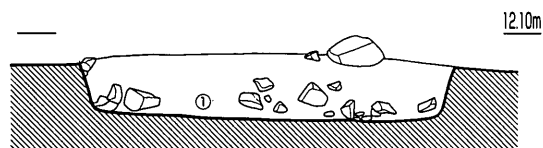
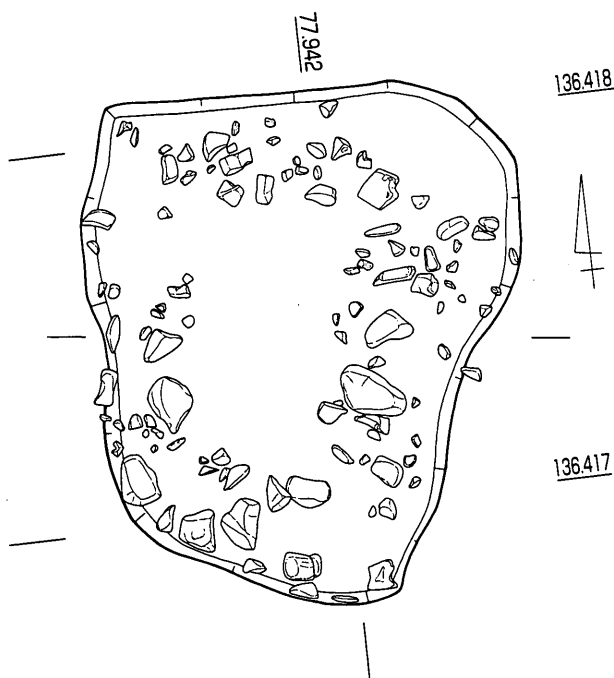
- ① 暗黄褐色粘質土 礫多い
- ② 暗褐色砂質土 固くしまる
- ③ 暗褐色粘質土 暗黄褐色粘土ブロック含む
- ④ 暗茶褐色粘質土 礫多い
- ⑤ 褐色砂混じり粘質土 固くしまる



第199図 IV区第2面集石21平・断面図 (1/40)



第200図 IV区第2面集石21測量図 (1/40)



- ① 褐色砂混じり粘質土 固くしまる

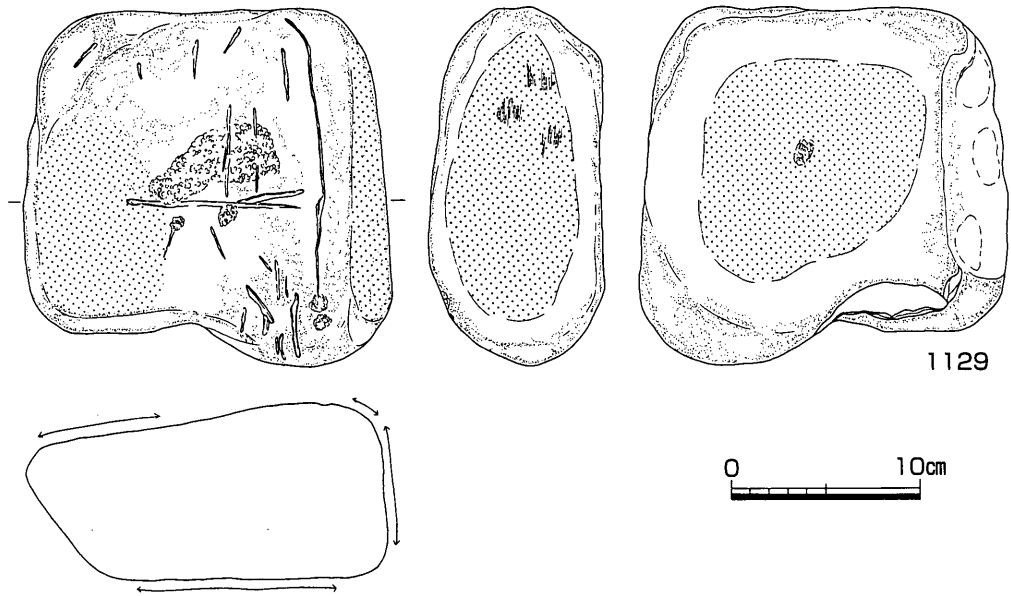


第201図 IV区第2面集石21下部土坑平・断面図 (1/20)

15cm程度の塊石が多くなっている。最上層の下部から中間層部分には礫はほとんど含まれていない。

盛土をすべて除去したところ、構築面である褐色砂混じり粘質土から掘り込まれた土坑を1基検出した。この土坑の上面には最下層の盛土中に含まれる礫が覆っていた。土坑の平面形は長方形であるが、北東部分が丸みを帯びて突出している。長辺1.35m、短辺0.9~1.1mである。しかし深さは17cmと非常に浅く、5~10cm大の礫を含みながら褐色砂混じり粘質土が堆積していた。土坑の掘り込みは急で、底部は平坦になっている。土坑内からの遺物の出土はなかった。この土坑を意識して覆い隠す集石21の盛土があることから、この土坑は集石21に伴うと考えられる。

遺物は1129の台石兼砥石の僅か1点だけである。調査当初のグリッドではグリッド19に相当する。直接、集石21に伴う確証はない



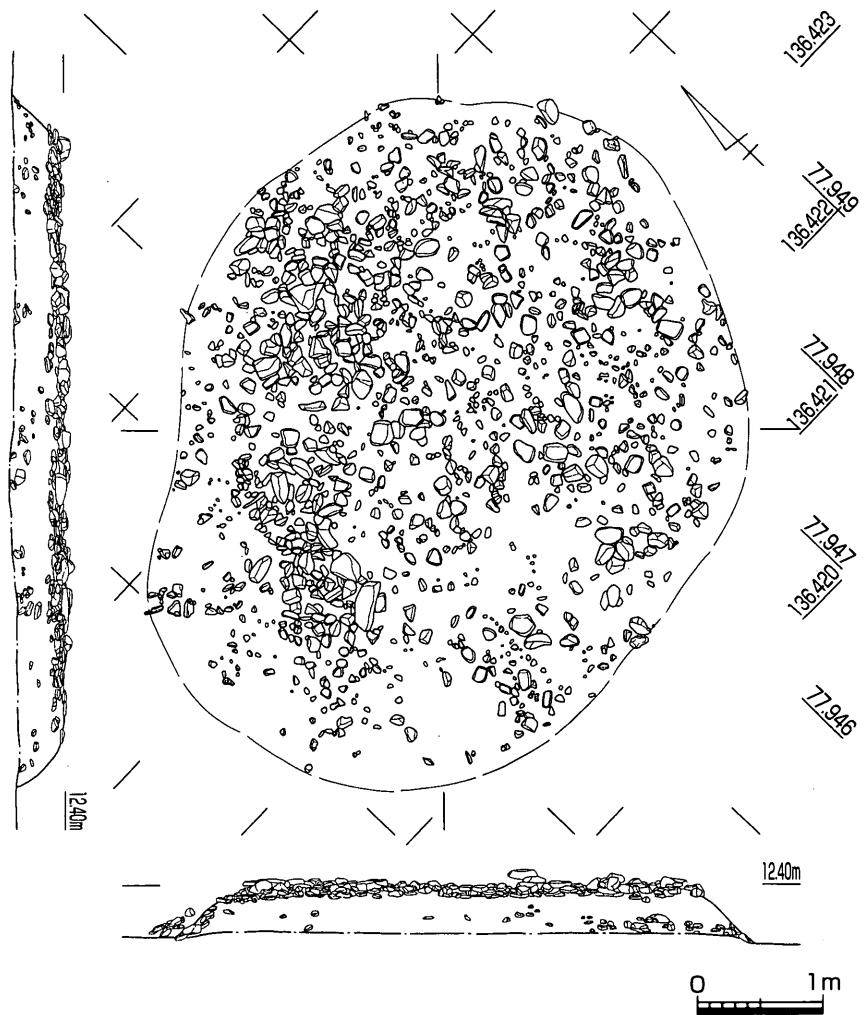
第202図 IV区第2面集石21出土遺物 (1 / 4)

が、グリッド19全体でサヌカイト剥片・碎片は総計で42点、163.9 g になる。

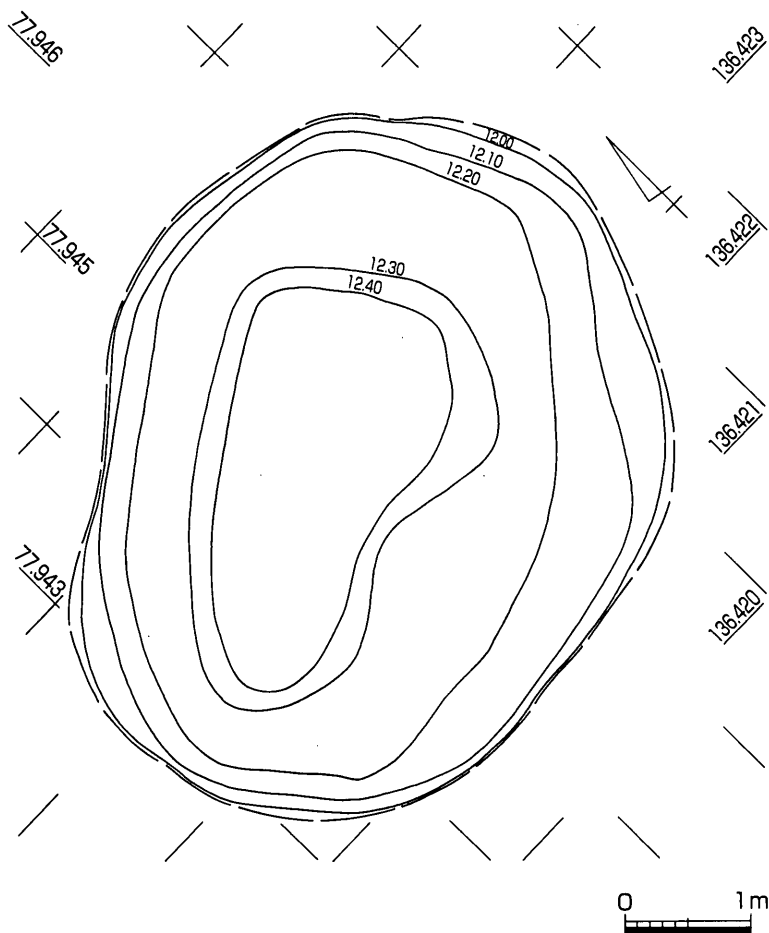
土器が出土していないので時期決定が困難であるが、集石21の構築面と近接する他の集石遺構の構築面が同じで、加えて集石21を被覆する埋土が同じであることから、弥生時代中期中葉と考える。

集石22 (第203~206図)

旧F2区の西橋脚部の中央部分で検出した集石遺構で、集石21の北東3mの所に位置している。平面形は楕円形であるが、北西部分が直線的になっている。長径5.5m、



第203図 IV区第2面集石22平・立面図 (1 / 60)



第204図 IV区第2面集石22測量図 (1/60)

短径4.5mである。全体に塚状に盛り上がり、頂部は平坦であるが端部付近の傾斜は全体的に急になっている。端部の標高は11.95~12.0m、頂部の標高は12.4m、高さ40~45cmである。

頂部は全体に礫に覆われているが、北側のほうが多くなっている。特に北西部分が密集の度合いが強い。中腹部分では礫はほとんど無く、端部では礫は少々ある。礫は5~40cm大で、10~15cm大のものが主体となっている。頂部北西部分に15cm大の礫が集中している。礫は砂岩が主体で、少量の花崗岩を含んでいる。

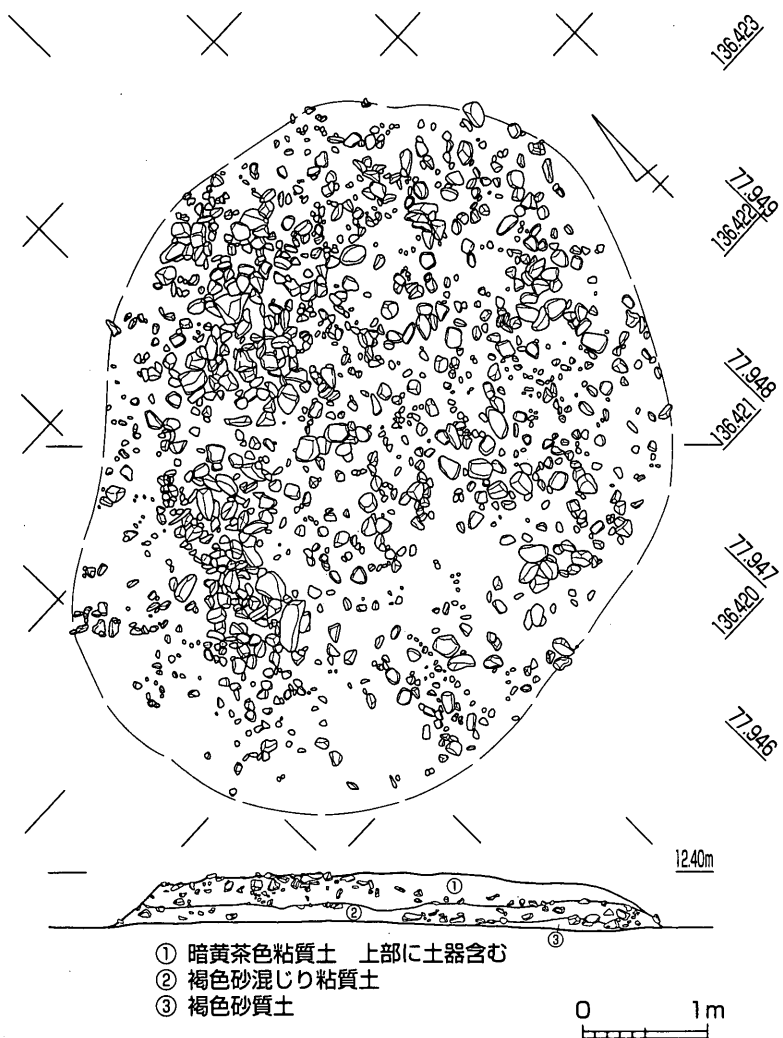
集石22は全体に上から暗茶褐色砂混じり粘質土、暗茶色粘質土、暗茶色砂混じり粘質土に覆われている。これら集石22を覆う土層は周辺で集石遺構が群集する旧F2区の西橋脚部のほぼ全体に堆積

し、特に攪乱された様子もなく水平に堆積している。

集石22の構築面は褐色砂混じり粘質土の上面になっている。この面から礫と土を混ぜながら盛り上げている。盛土は上下2層に大別出来る。下層は褐色砂混じり粘質土であるが、南東部分には構築面直上に褐色砂質土が見られる。上層は暗黄茶色粘質土で、その上部には礫とともに微細ではあるが土器片が混じっている。礫は上層の上部に集中しており、上層下部から下層にかけては土の割合のほうが多い。しかし下層南東側の褐色砂質土付近にはやや礫が集中している。盛土内の礫は上面の礫と特に変わりはない。集石22は全体を調査したが、下部遺構は認められなかった。

集石22は破片ではあるが比較的遺物の出土量が多い。表面の礫の間や礫の下部、盛土上層の上部から出土している。しかし異なった位置で出土した遺物の接合関係は認められない。調査当初のグリッドではグリッド7・8に相当し、僅かにグリッド12・13の北部に及ぶ。直接、集石22に伴う確証はないが、グリッド7全体でサヌカイト剥片・碎片は総計で293点、366.8gになる。しかしグリッド7には後述する集石23・24もその一部が含まれるため、この数値はあくまで参考の数値である。グリッド8では総計381点、316.5gと多くのサヌカイト剥片・碎片が出土している。

1130~1134は壺である。1130の口縁部は外反し、端部に刻み目を施している。1131の口縁部は頸部から鋭く屈曲している。口縁部端部は外側に平坦な面を作り、櫛描波状文を巡らせている。頸部外面はハケ目の後にナデている。1132は口縁部屈曲部の外面に指押さえが顕著である。端部外面にはヘラ描によ



第205図 IV区第2面集石22平・断面図 (1/60)

- ① 暗黄茶色粘質土 上部に土器含む
- ② 褐色砂混じり粘質土
- ③ 褐色砂質土

0 1m

み目の後に凹線を巡らす。端部は内・外面側に拡張している。体部外面にはヘラミガキを施しているが、内面は摩滅している。1143の口縁部は僅かに内湾し、外面に凹線を巡らせたあと爪先により刻み目を加えている。口縁部内面には指押さえが顕著で、端部は内側に拡張している。1144は台付鉢の台部で端部は肥厚している。高杯になるかも知れない。1145の端部は斜めに接地し、外面が肥厚し凹線が巡る。外面は板ナデにより面取りを行った後にヘラミガキを施している。三角形の透かし穴が現存で5個ある。円盤充填の痕跡が認められる。

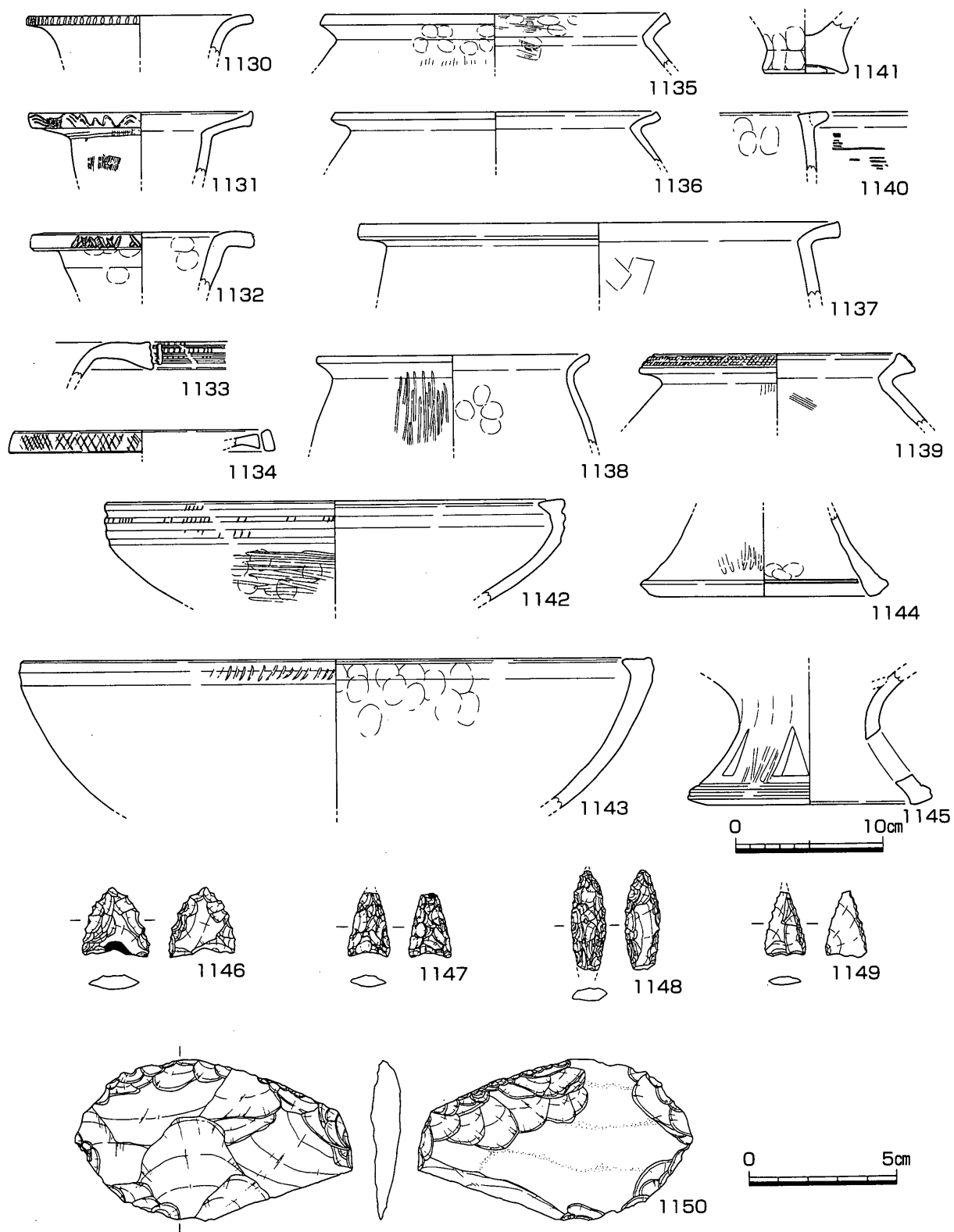
1146~1148は石鏝で、1146・1147は凹基、1148は基部が欠損しているが凸基になると考えられる。1149は石鏝の未製品である。鏝身側縁部の片側に簡単に調整を行っただけの段階である。平基になると考えられる。1150は石庖丁かスクレイパーの未製品で、周縁部に加工を加えているが刃部に相当する部分は欠損している。加工途中にこの部分が欠損したため廃棄したのかもしれない。安山岩製である。

以上の出土遺物から、集石22は弥生時代中期中葉の所産と考えられる。

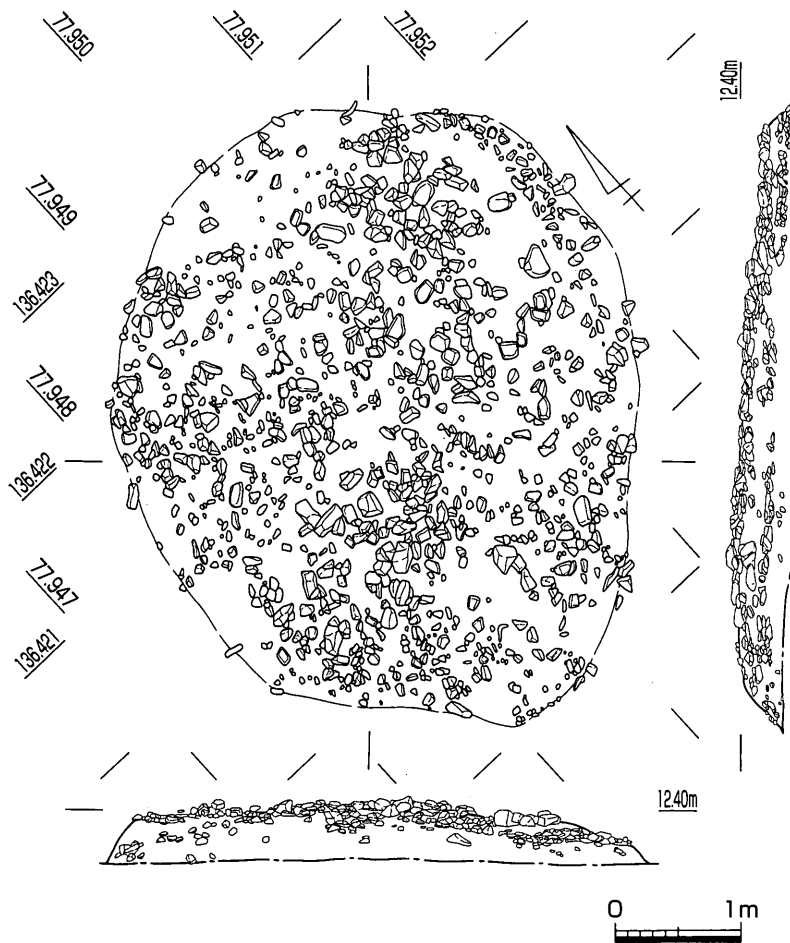
る刻み目を雑ではあるが斜格子状に施している。1133の口縁部は頸部に比べて著しく肥厚している。1134の口縁部端部も肥厚しており、穿孔が現存で1個ある。

1135~1141は甕である。1135は口縁部の内・外面に指押さえが顕著である。1136の体部は薄手である。1138の口縁部は丸みを帯びて屈曲し、体部外面にはやや間隔を開けてヘラミガキを施している。1139は口縁部端部を上下に拡張し、傾斜する面を作っている。刻み目ののちに凹線を巡らせている。体部内・外面にハケ目が僅かに認められる。1140は逆L口縁の甕で、体部外面には櫛描直線文が認められる。1141の底部は上げ底で肥厚している。側面には指押さえが顕著である。

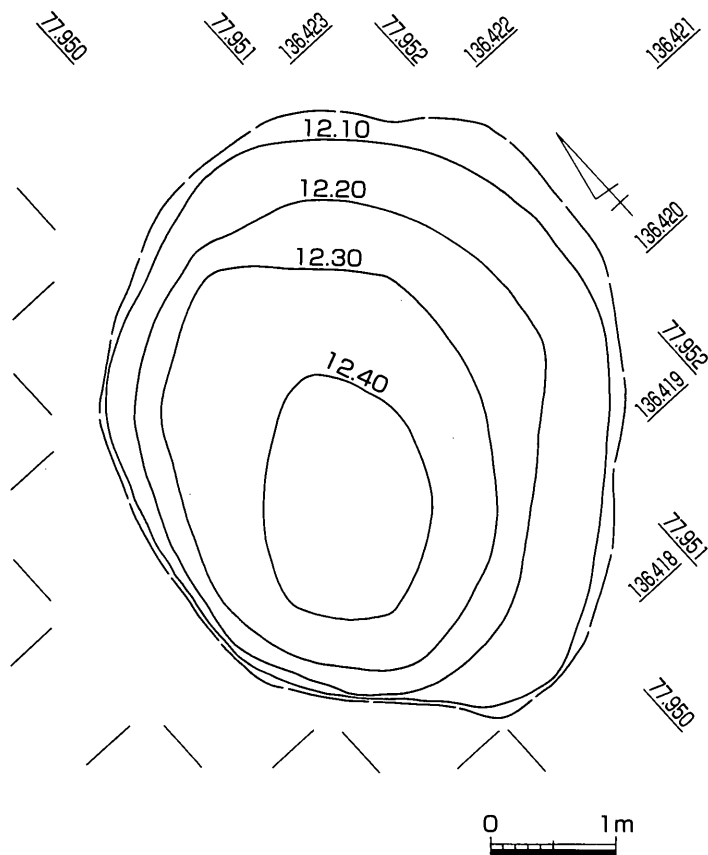
1142~1145は鉢である。1142の口縁部は内湾し、外面には刻



第206图 IV区第2面集石22出土遺物 (1/4、1/2)



第207図 IV区第2面集石23平・立面図 (1/60)



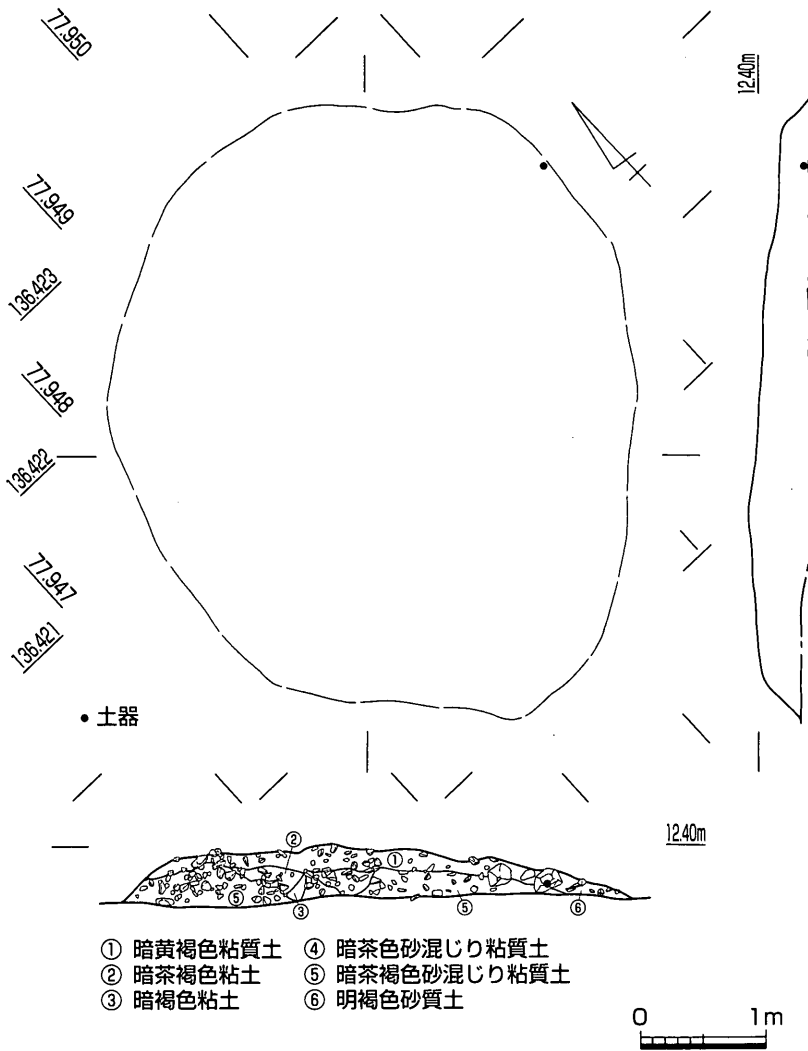
第208図 IV区第2面集石23測量図 (1/60)

集石23 (第207~210図)

旧F2区の西橋脚部の南東部分で検出した集石遺構で、集石22の南東側に隣接している。平面形は円形で、直径4.1~4.6mで北東-南西方向が少し長くなっている。全体に塚状に盛り上がり頂部は平坦な部分が多いが、西から南側にかけての端部付近の傾斜は急になっている。端部の標高は11.95~12.1m、頂部の標高は12.45m、高さ35~50cmである。南東部分の端部が他の部分に比べて高くなっている。

頂部は全体に礫に覆われているが、北西部分がやや希薄になっている。中腹から端部にかけては南側から西側にかけては少ないが、その他の部分は一定量の礫がある。北東部分の端部は拳大の礫が端部に沿って密集していた。また北-東-南側の中腹、標高12.2mの箇所には礫が帯状に巡っている。この上下には礫が少なく土になっている。礫は5~30cm大で、10~15cm大のものが主体となっている。頂部中心から1mぐらい離れた所に集石23では大き目の15cm程度の礫が集中している。礫は砂岩が主体で、少量の花崗岩を含んでいる。

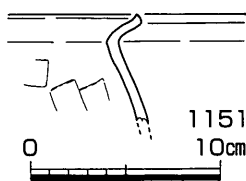
集石23は全体に上から暗茶褐色砂混じり粘質土、褐色砂質土、暗茶色砂混じり粘質土に覆われている。これら集石23を覆う土層は周辺で集石遺構が群集



第209図 IV区第2面集石23遺物出土状況平・立面図、土層断面図 (1/60)

する旧F2区の西橋脚部のほぼ全体に堆積し、褐色砂質土は調査区の東側部分に多いが、特に攪乱された様子もなく水平に堆積している。

集石23の構築面は褐色砂混じり粘質土の上面になっている。この面から礫と土を混ぜながら盛り上げている。盛土は基本的に上下2層に大別出来る。下層部分は暗茶褐色砂混じり粘質土を基本とするが、西側部分に暗茶褐色・暗褐色粘土と暗茶色砂混じり粘質土が不規則に盛られている。一度掘削してから盛ったようであるが、遺構とは考えられないものである。上層は暗黄褐色粘質土であるが、東側の端部には明褐色砂質土が加えられている。礫は上層の下部には少ない。下層は西側部分に礫が多く、東側は少なめであるが20cm大の塊石が



第210図 IV区第2面集石23出土遺物 (1/4)

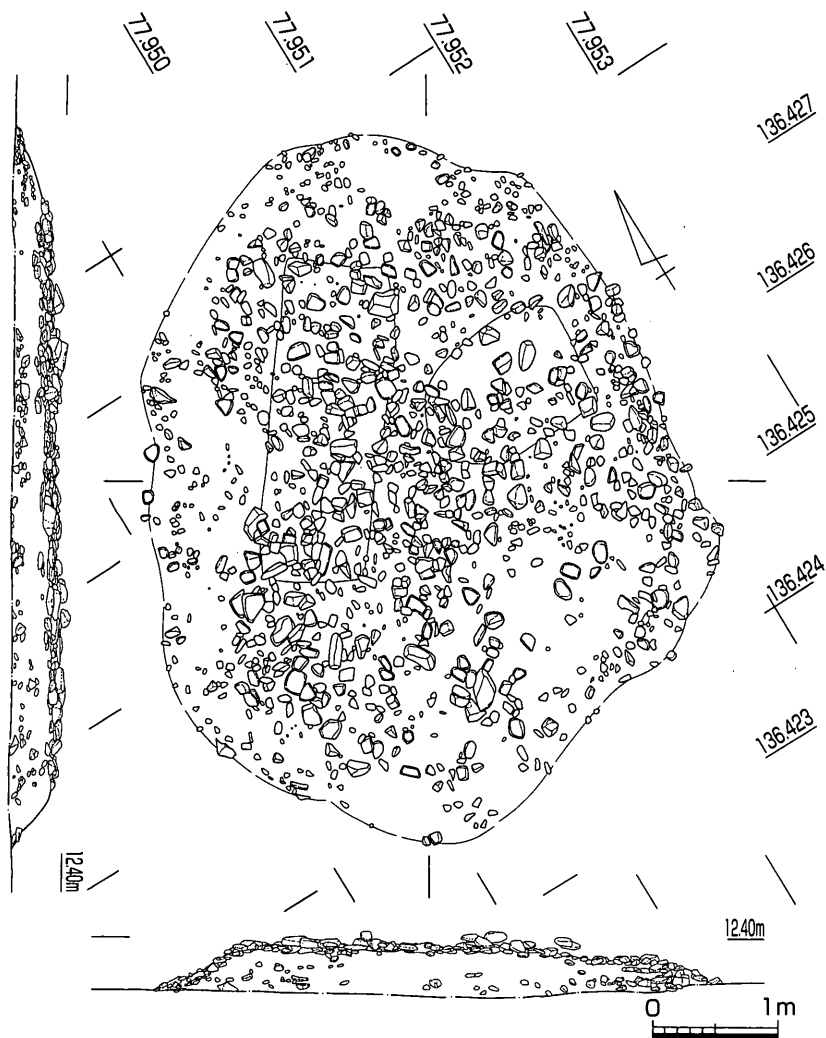
数個混じっている。集石23は全体を調査したが、下部遺構は認められなかった。

集石23は遺物の出土は極めて少ない。細片が僅かに出土したのみで図化出来たものは1点のみである。調査当初のグリッドではグリッド6・7・11・12に相当する。グリッド11には111点、127.1g、グリッド12には53点、148.8gのサヌカイト剥片・碎片が出土している。

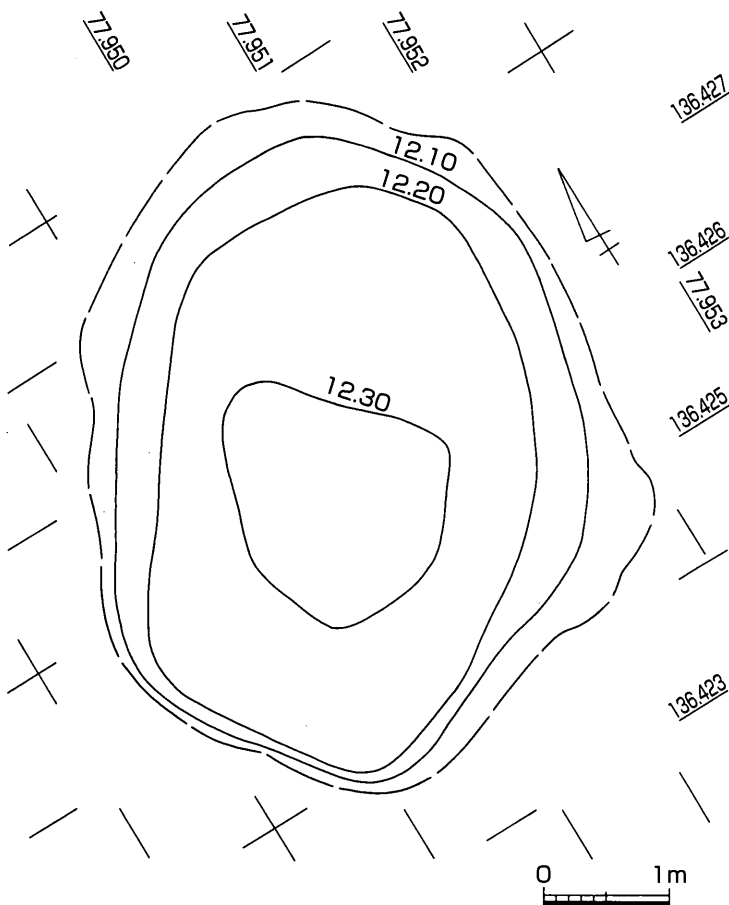
グリッド6には後述の集石24・25があり参考値になるが32点、58.6g、グリッド7も集石23の他に集石22・24があるため参考値になるが293点、366.8gのサヌカイト剥片・碎片が出土している。直接は伴わないが集石23を検出中に、グリッド6から745の大形の勾玉が出土しているのが注目される。

1151は甕で口縁部は内面が丸みを帯びて屈曲している。端部は上方に少し拡張している。全体に摩滅しているが、内面には板ナデの痕跡が認められる。

遺物は極めて少ないが、構築面と埋没状況、1151の遺物から集石23は弥生時代中期中葉の所産と考えられる。



第211図 IV区第2面集石24平・立面図 (1/60)

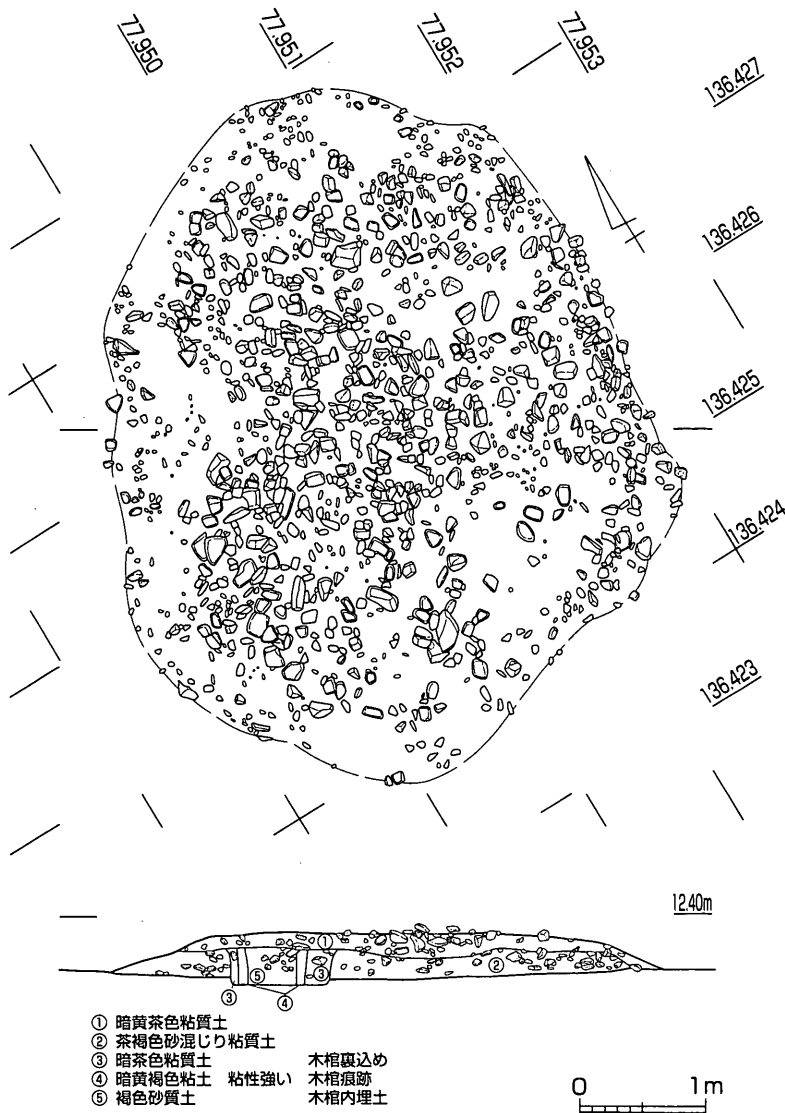


第212図 IV区第2面集石24測量図 (1/60)

集石24 (第211~215図)

旧F2区の西橋脚部の北東部分で検出した集石遺構で、集石23の北側に隣接している。平面形は楕円形であるが、西側部分が直線的になっている。長径5.3m、短径4.2mとなっている。全体に塚状に盛り上がり頂部は平坦な部分が多いが、南西部分の端部付近の傾斜は急になっている。端部の標高は11.95~12.05m、頂部の標高は12.3m、高さ25~35cmである。東側の端部が他の部分に比べて高くなっている。

頂部は全体に礫に覆われているが、南側と北西部分がやや希薄になっている。中腹部分は全体に礫は少ないが、南西部分は頂部から端部にかけての斜面部分全体に礫がある。端部には一定量の礫があり、西側と東側はやや多めになっている。特に南東部~東側にかけては拳大の礫が端部に沿ってきれいに巡っている。礫は5~30cm大で、10~15cm大のものが主体となっている。頂部中心部分には15~20cm大の集石24の中では大きめの塊石が多く、後述する長方形の土坑(SK01)の上部に特に多くなっている。南半部には南北方向に細長い礫が目



第213図 IV区第2面集石24平・断面図 (1/60)

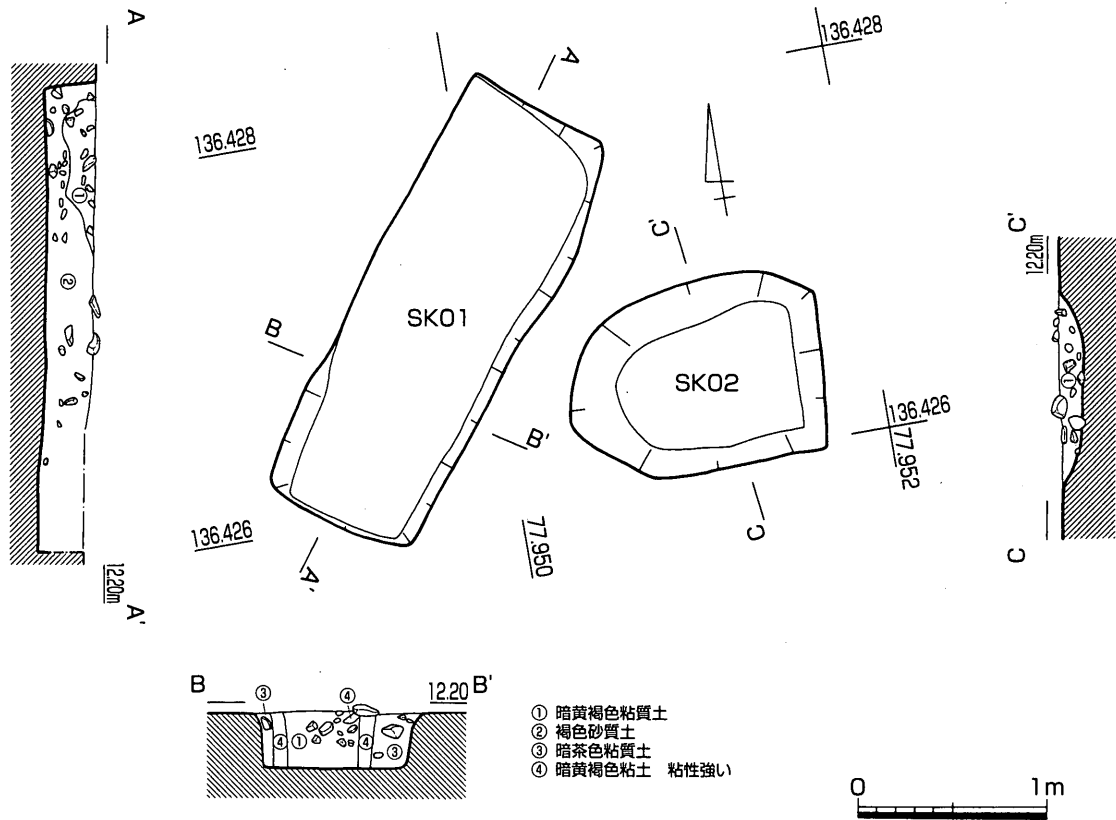
形が長方形で、長辺2.4m、短辺0.9mである。掘り込みは急で、特に北西部分では垂直に掘り込んでい
る。深さは30cmで、底部は平坦で標高が11.85mとなり、集石24の構築面より低くなっている。また主
軸である長辺方向は集石24の主軸方向に一致するが、平面的には集石24の中心より少し西側にずれてい
る。この西側土坑のB-B'部分の土層には幅8cm程度で上下に伸びる、粘性の強い暗黄褐色粘土層が
35cmの間隔で2箇所認められる。この層の間には2~5cm大の細礫を含む褐色砂質土が堆積してい
た。さらにこの層の外側と掘り込み部分の間には暗茶色粘質土が堆積していた。この層を木質の痕跡
と見るならば、外側はその裏込土、内側を埋土と考えられる。これに対して東側の土坑SK02は、平面
形が長方形と楕円形の間形態になっている。西側部分が丸みをもっていて、それ以外は直線的であ
る。東西方向の長辺は1.35m、南北方向の短辺は1.0mである。掘り込み面は全体的に緩やかで、深さは
10~15cmである。埋土は暗黄褐色粘質土の単一層で、2~5cm大の細礫を含んでいた。SK02は東西
方向を主軸と見ると、SK01とSK02の主軸は47°で斜交している。このSK01とSK02は集石24の盛土中か
ら掘り込まれ、上部をさらに盛土で覆われていることから、集石24に伴うものである。しかしSK01と
SK02から遺物は出土していない。SK01に見られた木質部分を木棺の側板部分と考えるならば、SK01は
埋葬施設となり、集石24は墳墓と考えられることになる。これに対してSK02の性格は今のところ不明

立つ。礫は砂岩が主体で、少量の
花崗岩を含んでいる。

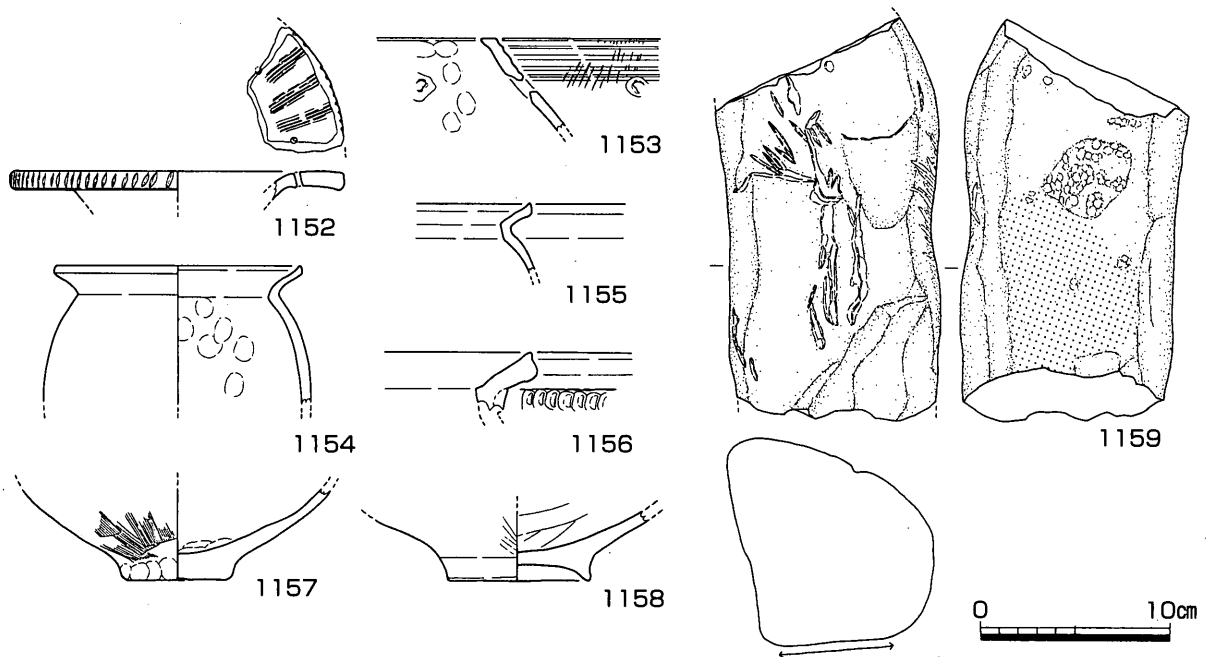
集石24は全体に上から暗茶褐色
砂混じり粘質土、褐色砂質土、暗
茶色砂混じり粘質土に覆われてい
る。これら集石24を覆う土層は周
辺で集石遺構が群集する旧F2区
の西橋脚部のほぼ全体に堆積し、
褐色砂質土は調査区の東側部分に
多いが、特に攪乱された様子もな
く水平に堆積している。

集石24の構築面は褐色砂混じり
粘質土の上面になっている。この
面から礫と土を混ぜながら盛り上
げている。盛土は上下2層に大別
出来る。下層は茶褐色砂混じり粘
質土、上層は暗黄茶色粘質土であ
る。上層、下層とも礫の量は多
く、下層では拳大の塊石や円礫が
目立つ。

盛土の上層を除去した段階で、
下層部分に掘り込んだ土坑を2基
検出した。この2基は東西に並ん
でいる。西側の土坑SK01は平面



第214図 IV区第2面集石24下部遺構 (SK01・02) 平・断面図 (1/40)



第215図 IV区第2面集石24出土遺物 (1/4)

と考えざるを得ないが、SK01と何か関連があるのかも知れない。

遺物は頂部から出土しているが量的には少なく、破片で出土している。異なった位置から出土した遺物の接合関係は認められない。調査当初のグリッドではグリッド1・2・6・7に相当する。集石24のみがあるグリッド2では総計60点、1438gのサヌカイト剥片・碎片が出土している。

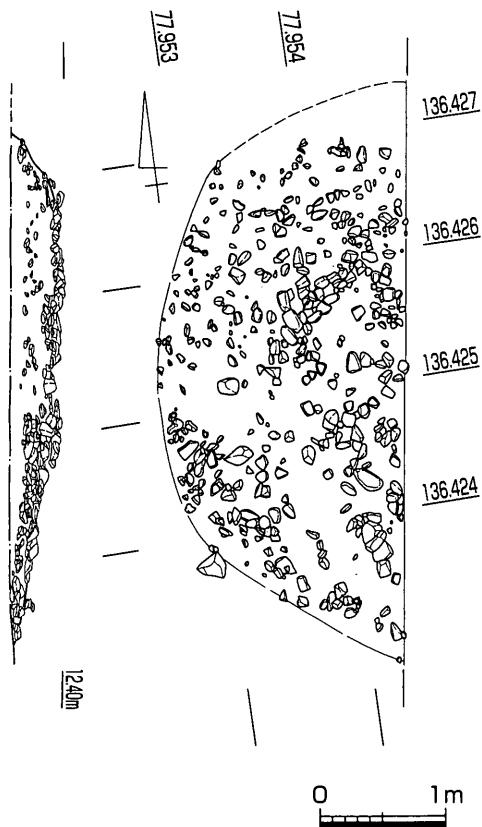
1152・1153は壺である。1152は口縁部内面に櫛描直線文を間隔を開けて放射状に施している。穿孔が現存で2個ある。1153は無頸壺で、口縁部外面には刻み目の後に凹線を巡らせている。端部は内側に拡張し、上面に平坦な面を作る。口縁部下半に焼成後の穿孔が1箇所認められる。1154～1156は甕である。1154・1155は口縁部内面を強くナデているが、1155は口縁部屈曲部内面も強くナデている。1156は口縁部屈曲部の外面に刻目突帯を貼り巡らせている。1157は壺の底部と考えられ、突出する底部の側面には指押さえを行っている。1158は短い脚部から体部は大きく開く。1159は台石兼砥石で、側面には筋状の跡が多く見られる。砥石として使用しているのは1面のみである。

以上の遺物から、1158の時期が不明であるが、その他の遺物の時期と構築面や埋没状況を考えると、集石24は弥生時代中期中葉の所産と考えられる。

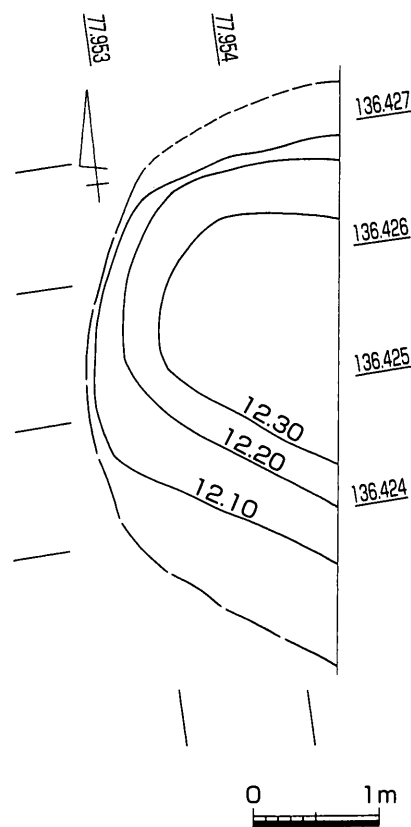
集石25（第216～218図）

旧F2区の西橋脚部の東壁際部分で検出した集石遺構で、集石24の東側に隣接している。

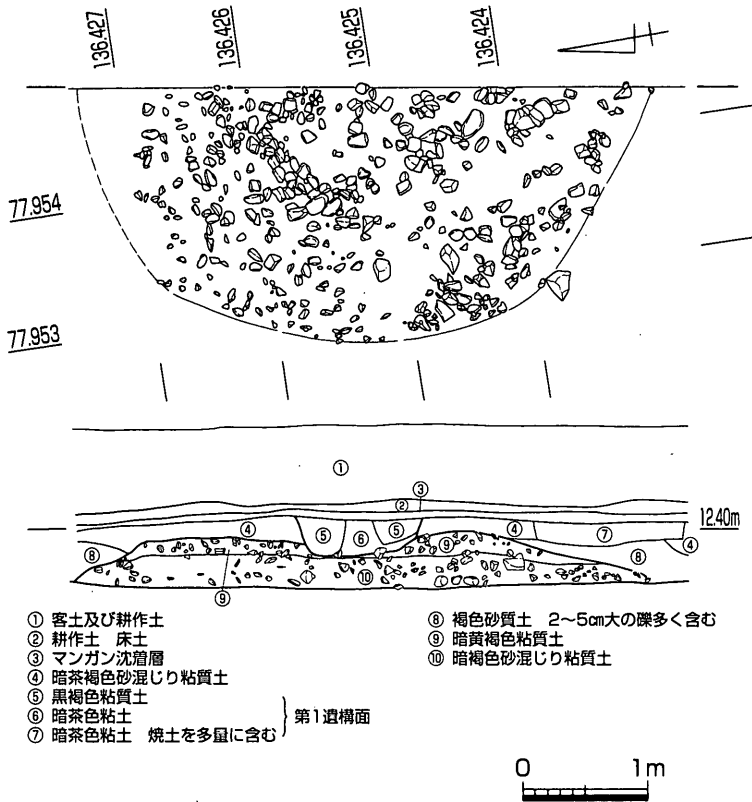
調査区壁際で半分ほどを検出したに留まり、調査区外東側に続いて行く。調査区内では半円形で、復元で直径4.5mの円形になると考えられる。全体に塚状に盛り上がる。頂部は平坦になっているが、若



第216図 IV区第2面集石25平・立面図（1/60）



第217図 IV区第2面集石25測量図（1/60）



第218図 IV区第2面集石25平・断面図 (1/60)

石25の中では大きめの塊石が集中しており、特に頂部の中世遺構による攪乱部分の周囲に密集していることから、本来は頂部にはかなり密集していたものと考えられる。端部の礫は板石が多くなっている。礫は砂岩が主体で、少量の花崗岩を含んでいる。

集石25は全体に上から暗茶褐色砂混じり粘質土、褐色砂質土、暗茶色砂混じり粘質土に覆われている。これら集石24を覆う土層は周辺で集石遺構が群集する旧F2区の西橋脚部のほぼ全体に堆積し、褐色砂質土は調査区の東側部分に多いが、特に攪乱された様子もなく水平に堆積している。

集石25の構築面は褐色砂混じり粘質土の上面になっている。この面から礫と土を混ぜながら盛り上げている。盛土は上下2層に大別出来る。下層は暗褐色砂混じり粘質土、上層は暗黄褐色粘質土である。上層、下層とも礫の量は多く、下層の南側では20cm前後の塊石が目立つ。反対に下層の北側部分の上部は中でも礫は少なく土になっている。集石25は全体を調査したが、調査区内で下層遺構は認められなかった。

集石25に伴う遺物は微細な土器片が少量出土しただけで、図化には至らなかった。調査当初のグリッドではグリッド1・6に相当するが、両者とも他の集石も存在している。比較的集石25の占める割合が大きいグリッド1では総計138点、198.7gのサヌカイト剥片・碎片が出土している。

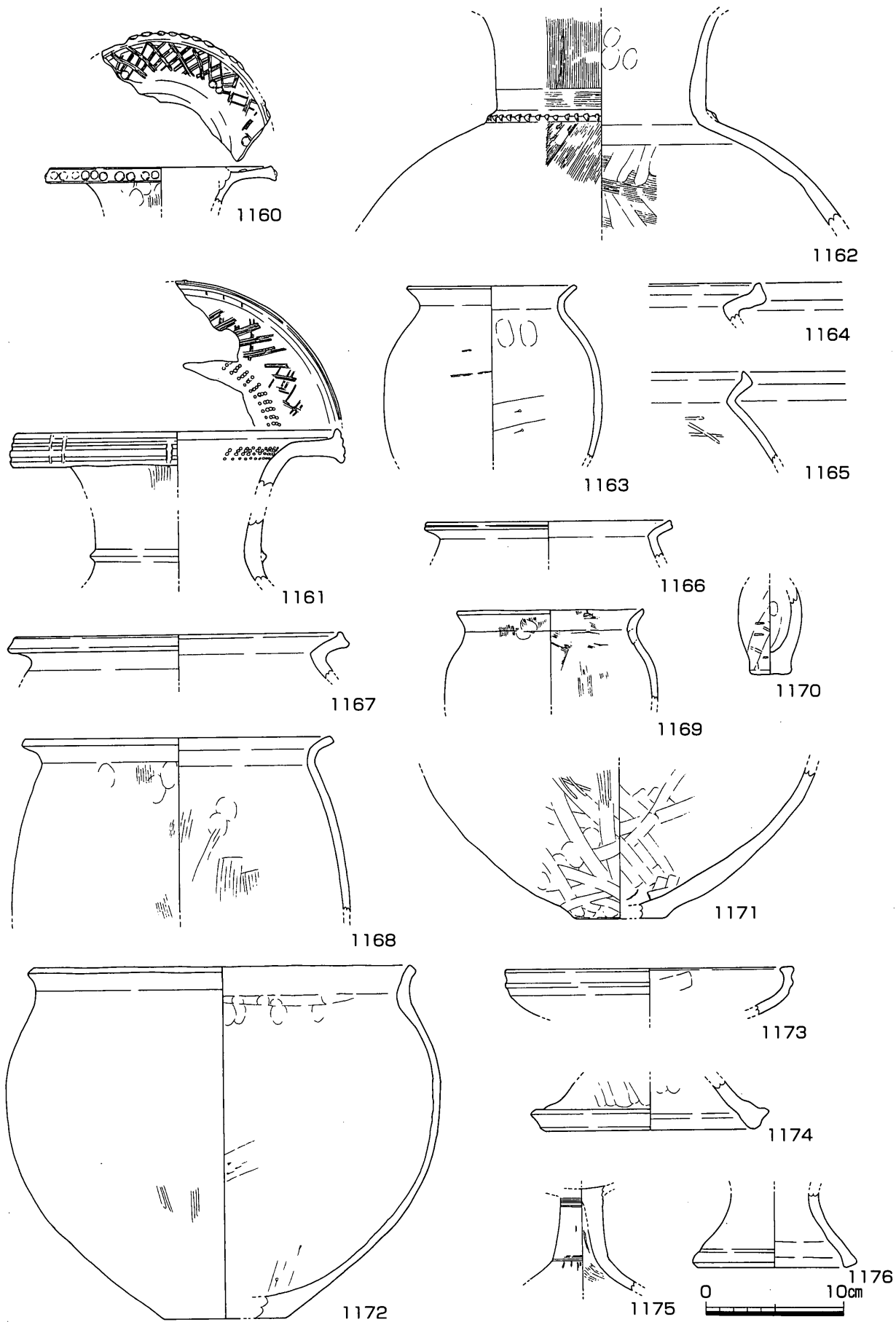
集石25では時期決定が出来る遺物が出土していない。集石25の構築面とその埋没状況が集石19~24と同じであることから、弥生時代中期中葉の所産と考えておく。

(3) 包含層出土遺物 (第219~220図)

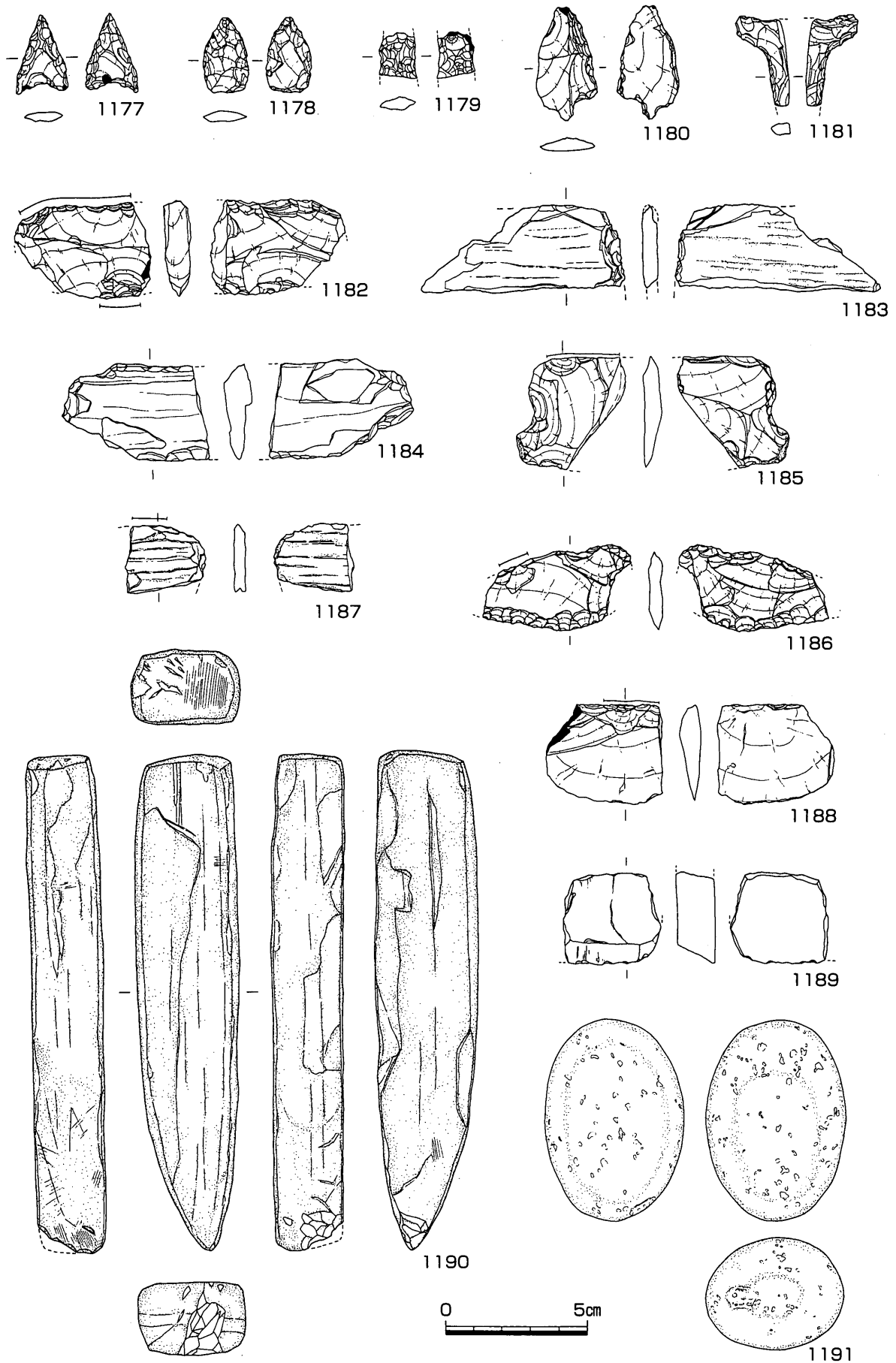
1160~1191は旧F1区の集石遺構部分以外の包含層から出土した遺物である。

干南側のほうが高くなっている。北側の斜面は段になっている部分がある。南側の傾斜は緩やかである。検出部分の頂部中央は第1遺構面の中世の遺構によって壊されており、頂部から15cmほどの深さが抉られている。端部の標高は12.0m、頂部の標高は12.35m、高さ35cmである。

頂部は全体に礫に覆われているが、中央部分が中世の遺構により壊されて空白になっている。また南側が若干希薄になっている。中腹部分の礫は少ないが、特に北西部分は少なく、逆に南西部分は多めになっている。端部も同様に北西部分に礫は少なく、南側は多くなっている。礫は5~25cm大で、10cm前後のものが主体となっている。頂部の調査区壁際中央部分には10~15cm大と集



第219图 IV区第2面包含層出土遺物 (1) (旧F1区) (1/4)



第220图 IV区第2面包含層出土遺物 (2) (旧F 1区) (1/2)

1160～1162は壺である。1160は口縁部内面に半截竹管による斜格子文が施され、突帯の剥離痕が認められる。口縁部端部外面には円形浮文を貼り巡らせている。口縁部外面には指押さえを強く行っている。1161は口縁部端部を上下に拡張し、端部外面に棒状浮文の剥離痕が認められる。また口縁部内面には斜格子文と櫛描列点文を施している。頸部には貼付突帯が巡る。1162の頸部は直立に近く、外面にはハケ目の後に下部を横方向にナデている。刻目突帯が巡っている。体部上半は大きく膨らみ、外面はハケ目、内面はハケ目の後に指でナデている。

1163～1169は甕である。1163の体部外面は摩滅しているが僅かにタタキの痕跡が残る。内面はヘラケズリである。1164・1165・1167は口縁部端部を上方に拡張する。1168・1169は体部の内・外面にハケ目を施す。1169はさらに先細りの口縁部の内・外面にもハケ目を施す。

1170はミニチュア土器の壺と思われる。体部外面にはタタキの後に板ナデを加えている。底部は厚手である。1171は壺の底部で、内・外面に板ナデを細かく施している。

1172は鉢で、口縁部は屈曲は弱い。体部最大径は上半にある。全体に摩滅しているが、外面にはヘラミガキが、内面にはヘラケズリが僅かに認められる。1173～1175は高杯である。1173は口縁部外面に凹線が巡る。1174の脚部は斜めに接地し、端部外面を強くナデている。1175は脚部に上下2段に沈線が巡っている。1176は台付鉢の台部で、端部付近で僅かに内湾している。

1177～1179は石鏃で、1177は凹基、1178は平基である。1180は石鏃の未製品である。1181は石錐。1182は楔形石器。1183～1185は打製石庖丁である。1183の刃部が欠損している。1185は側縁部に抉りがある。1186はスクレイパーで、一見石匙のようであるが、それは側縁部の欠損によるものである。刃部は丁寧加工している。1189は結晶片岩製の扁平片刃石斧の刃部である。1190は結晶片岩製の柱状片刃石斧で、刃部は一部欠損している。基部に抉りは認められないが、僅かに柄の装着痕と考えられる擦痕がある。1191は敲石で片側だけを使用しているが、多用していない。

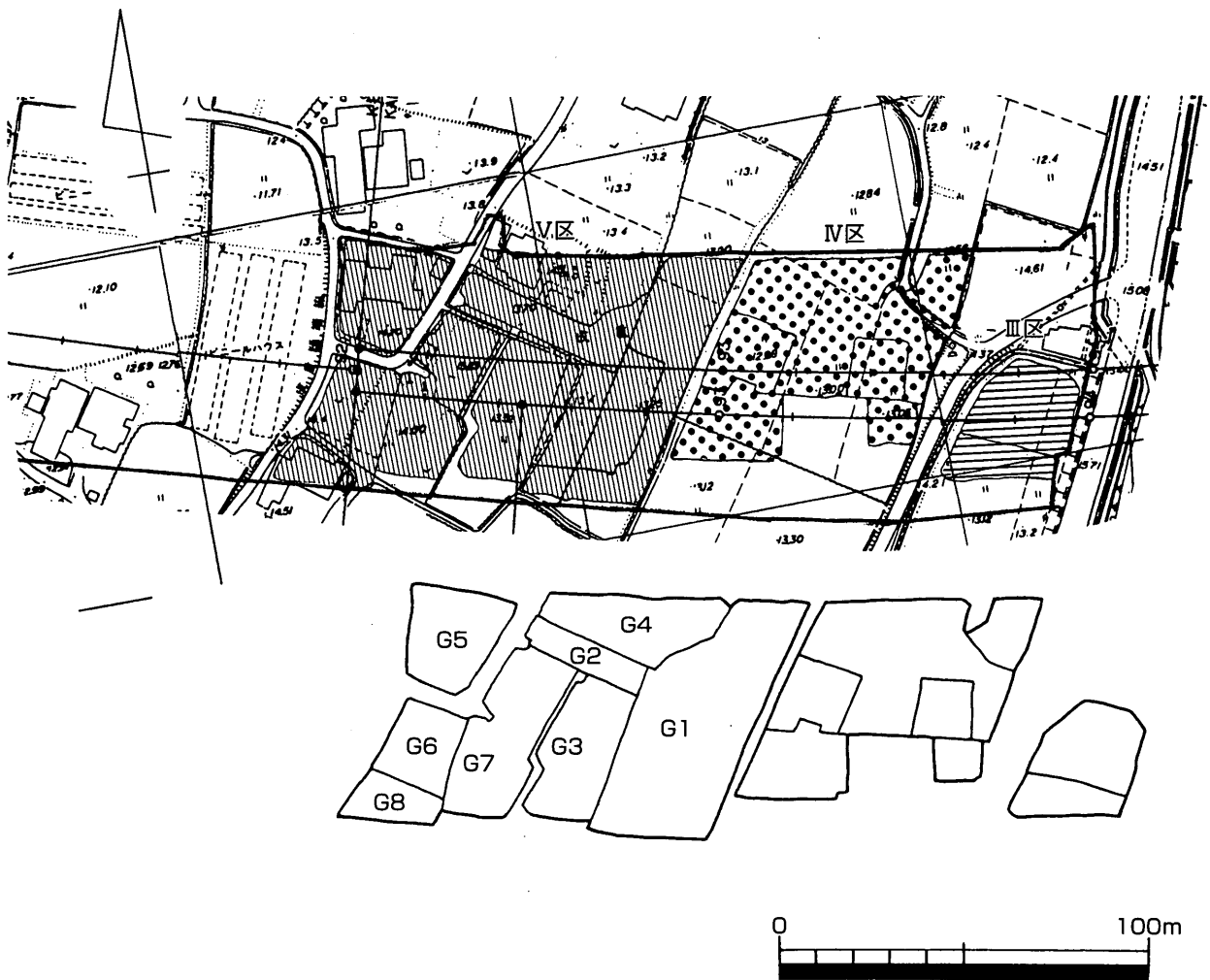
第3節 V区の調査成果

(1) 調査区の概要 (第221～227図)

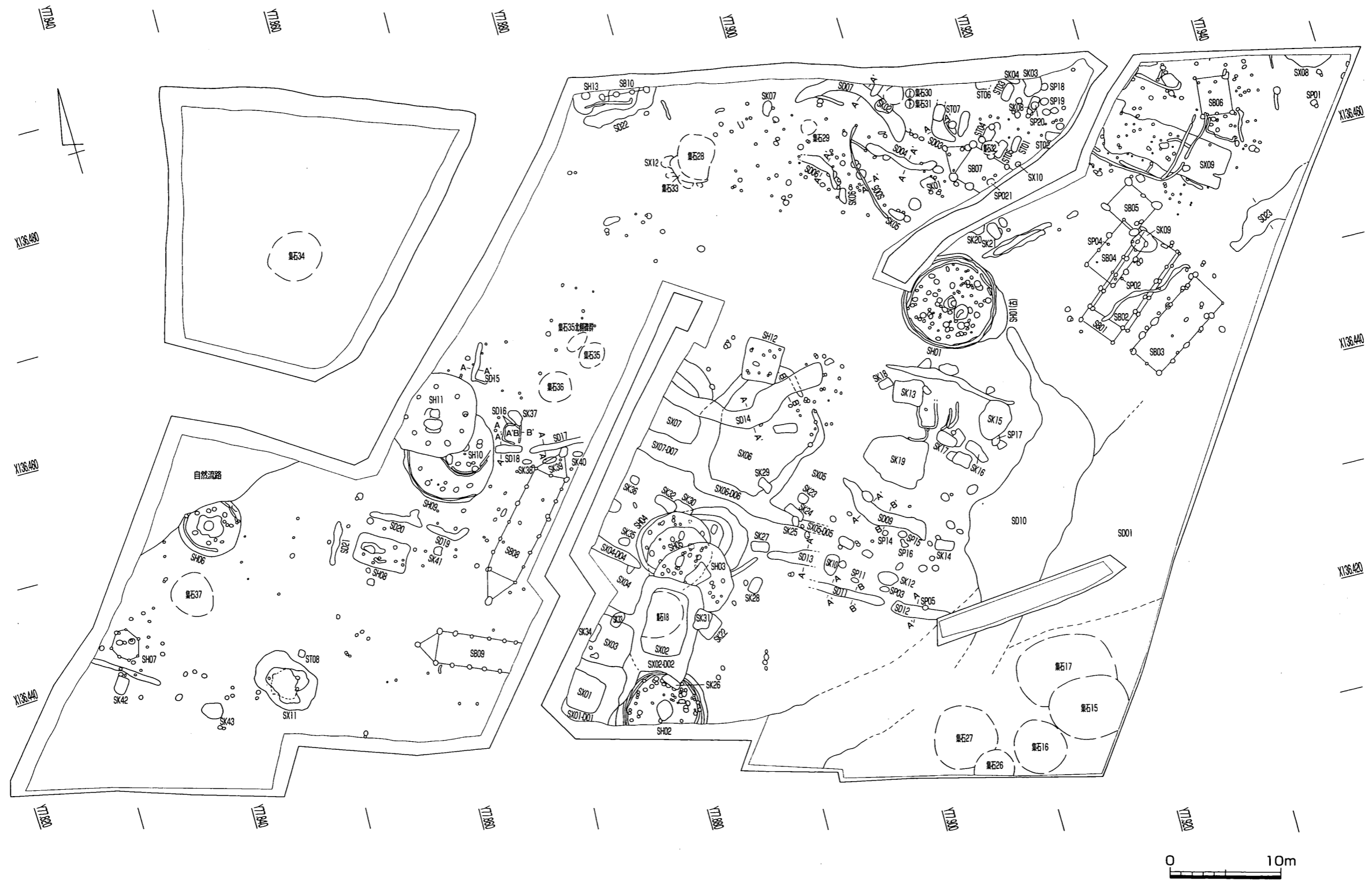
成重遺跡の西端の調査区で、IV区の西側に隣接している。調査区の面積は6,239㎡で広い調査区である。調査当時の調査区ではG1～G8区に相当する。

現地表面は東西方向で、調査区の西端の最も高い部分が標高14.5m、東端の最も低い部分で標高13.0mとなり、西から東に向かって下っている。南北方向はあまり傾斜がなく僅かに北に向かって下る程度である。V区の西側は湊川とその氾濫原になっている。調査区西端の旧G5・6・8区のすぐ西側は河岸段丘崖になっていて、急激に2mほど下がって湊川の河川敷になる。一方、旧G4～8区はこの河岸段丘上にあり、自然堤防状となりこれまでの調査区より一段高くなっている。そしてこの部分から旧G3・1区と東側に向かって緩やかに下って行く。そしてIV区の西端で確認した低地部分に至る。

旧G1・4・5区に相当する調査区北壁部分の土層を検討すると、現地表面の耕作土・床土の直下の洪水による灰色系の砂礫層の上面の、旧G5区では標高13.9m、旧G4区では標高13.5mで近世の遺構面になる。しかし近世の遺構は調査区の西側部分を中心に砂糖竈と土坑、柱穴が少々あるだけで、成重遺跡



第221図 V区新旧調査区割図 (1/2000)



第222図 V区第2面遺構配置図 (1/400)

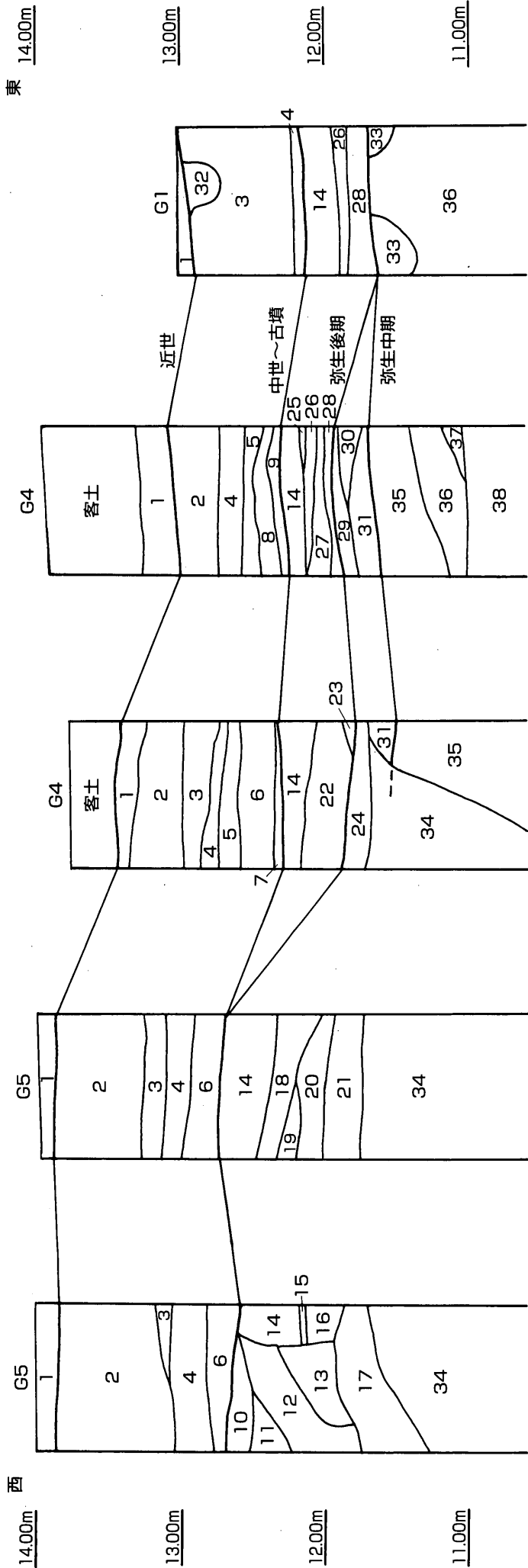
の他の調査区では近世遺構を検出していないため、遺構面としての設定は行わない。

旧G1区では旧G4・5区の近世遺構面を形成する洪水砂礫層である厚く堆積した褐色・明黄褐色砂層の直下の明黄褐色粘質土層の上面の標高12.3mの所で、古墳時代～中世の遺構面を検出している。この古墳時代～中世の遺構面は旧G4区では標高12.3～12.4mの旧G1区とほぼ同質の淡黄茶色粘質土層で検出される。そしてこのまま標高を12.7mほどに上げて旧G5区に至る。この古墳時代～中世の遺構面はその上面を黄褐色系の砂層が堆積しており、旧G1・4・5区にかけて安定した遺構面を形成しており、第1遺構面としている。なお調査当時は、旧G4区ではこの古墳時代～中世の遺構面を弥生時代後期の遺構面と誤認していたため訂正しておく。

旧G1区ではこの第1遺構面から黄褐色砂質土～砂混じり粘質土を挟んで70cmほど下の標高11.6mの黄褐色粘性砂質土層の上面で弥生時代中期～後期の遺構面を検出している。これに対して旧G4区の東側から中央にかけてでは茶黄色系砂混じり粘質土層を挟んで50～60cmほど下の標高11.9mの褐茶色粘質土層の上面で弥生時代後期の遺構面になる。さらにこの層の直下の標高11.7～11.8mの茶黄色粘質土層上面で弥生時代中期の遺構面となる。この弥生時代後期と中期の遺構面は10～20cmの高低差を保ちながら旧G4区の東から中央にかけて存在するが、中央の少し西側で洪水砂礫層により乱れ両者は同一面になる。そして旧G4区西端から12.5m東寄りの部分から西側に向かって、弥生時代後期の遺構面は上昇し、西端では標高12.3mになる。第1遺構面から10cm下で同一面に近くなる。弥生時代中期の遺構面は、後期の遺構面の上昇部分で自然河川あるいは大規模な洪水により壊されているため途切れるが、本来は後期の面とともに上昇して中期と後期が同一面になる可能性が高い。そして旧G5区では10cm程度の高低差しかなかった第1遺構面とも同一の面となり、遺構は少ないが弥生時代中期～中世までが同じ面になる。このように弥生時代後期の遺構面は旧G4区西端から下り、部分的に中期の面と重なりながら旧G1区へ続いて行く。旧G4区の東側から中央にかけての弥生時代後期の遺構面は調査当時と調査概報作成当時と異なり、60cmほど下部に下がることを明記して訂正しておく。

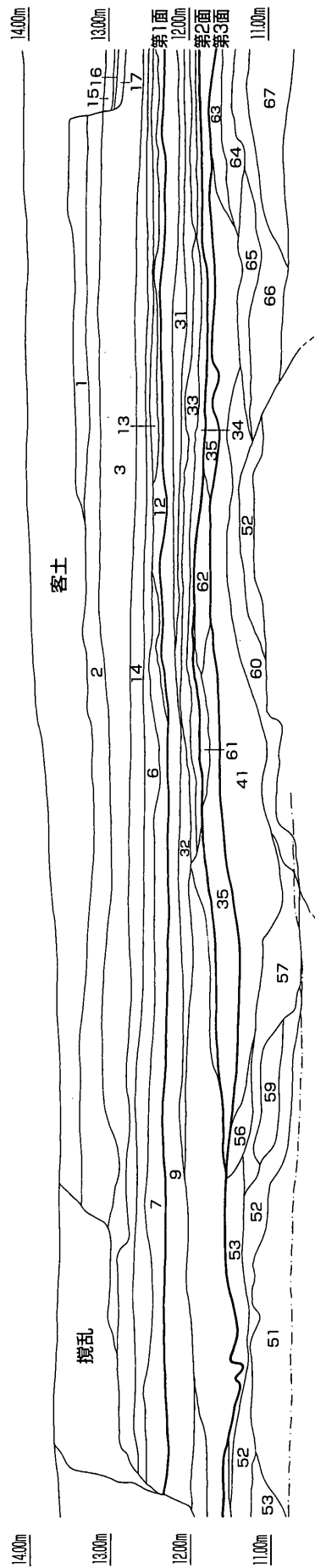
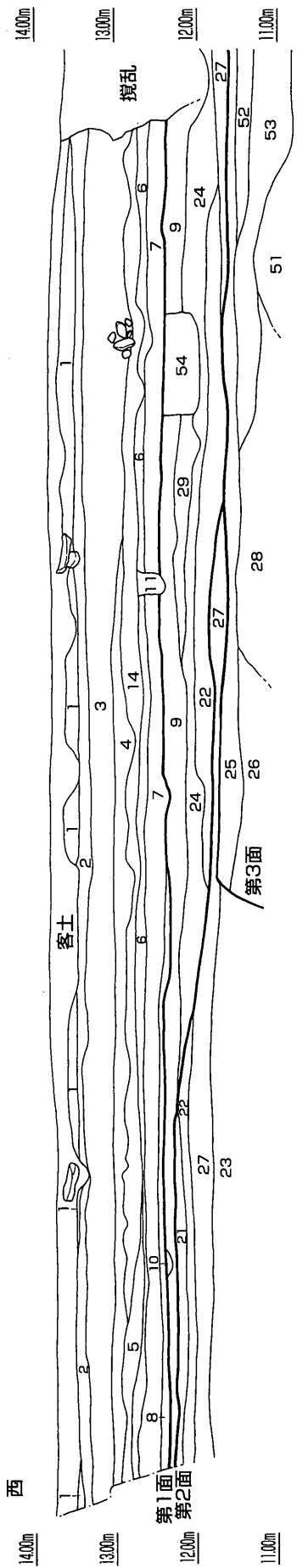
一方、調査区の南北方向であるが調査区西端の旧G5・6・8区の土層図を検討すると、近世の遺構面から下は基本的に洪水砂礫層が厚く堆積している。この部分は古墳時代～中世の遺構は検出されておらず、旧G5区の北側では弥生時代中期・後期の遺構面と同じになる可能性を考えたが、同調査区の北西隅には大規模な洪水による攪乱があり、耕作土下130cmほどは洪水砂が厚く堆積している。この洪水砂層の下部の標高12.4mの部分に安定しほぼ水平に堆積する暗黄茶色粘質土層があり、この面が弥生時代後期の遺構面となる。この面の下部は全体に砂層が堆積しており遺構面はない。旧G5区の北側部分の状況を考えると、この面が弥生時代中期～中世の単一の面になる可能性が高い。この調査区から南側の旧G6・8区ではこの弥生時代後期の遺構面は続き、徐々に高くなりながら中央部分では13.0mまで上がる。旧G6区の北西隅には自然河川があり、この自然河川の南岸部分から弥生時代後期の遺構面の10～15cm下の標高12.8m前後で弥生時代中期の遺構面が確認されて南側に続く。そして旧G8区の南西部分の洪水砂によって両者が壊された結果、幾分標高が下がって同一面になっている。つまり調査区西端の旧G5・6・8区では弥生時代の遺構面は旧G6・8区部分で中期と後期の遺構面が2面に分かれるが、旧G5区では1面になる。そして全体で南から北に向かって徐々に下ってゆく。その差は60cmほどである。

旧G3区西壁部分の南北方向の土層を見ると、耕作土・床土・褐色細砂層の下部の標高13.0mの暗黄褐色砂混じり粘質土～褐色砂質土層の上面で古墳時代～中世の遺構面になる。この面から茶褐色系の粘

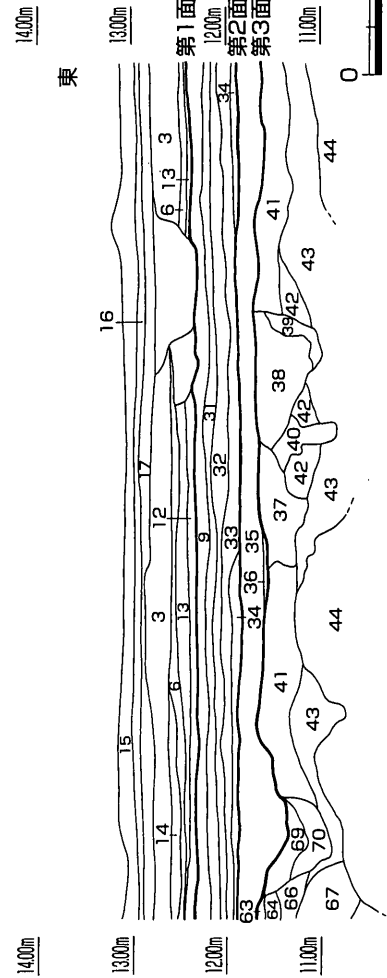


- | | | | | | | | |
|----|-------------|----|---------|----|-------------------|----|--------------|
| 1 | 耕作土 | 11 | 暗灰茶黄色砂礫 | 21 | 濁茶黄色砂礫 | 31 | 暗灰褐色粘質土 包含層 |
| 2 | 濁白灰色砂礫 | 12 | 暗黄色砂 | 22 | 暗灰黄色砂混じり粘質土 | 32 | 暗褐色砂混じり粘質土 |
| 3 | 暗茶白黄色砂 | 13 | 暗灰黄色砂礫 | 23 | 暗茶黄色砂礫 | 33 | 茶褐色砂混じり粘質土 |
| 4 | 濁黄色砂 | 14 | 淡黄茶色粘質土 | 24 | 暗灰黄色砂礫と暗茶灰色粘質土の互層 | 34 | 砂礫 中期の遺構面を露す |
| 5 | 暗黄褐色砂質土 | 15 | 淡黄茶色砂質土 | 25 | 暗茶黄色砂混じり粘質土 | 35 | 暗灰黄色微砂混じり粘質土 |
| 6 | 暗褐色粘質土 | 16 | 淡灰茶色砂質土 | 26 | 濁茶黄色砂混じり粘質土 | 36 | 淡茶色砂質土 |
| 7 | 暗黄褐色粘質土 | 17 | 暗茶黄色砂 | 27 | 濁茶黄色砂質土 | 37 | 褐茶色砂質土 |
| 8 | 暗褐色砂 | 18 | 淡茶色砂礫 | 28 | 明褐色粘質土 | 38 | 砂礫 |
| 9 | 淡黄褐色砂混じり粘質土 | 19 | 黄暗茶色砂 | 29 | 灰茶色砂混じり砂質土 | | |
| 10 | 暗灰茶黄色砂質土 | 20 | 濁茶黄色細砂礫 | 30 | 黄茶色砂礫混じり粘質土 | | |

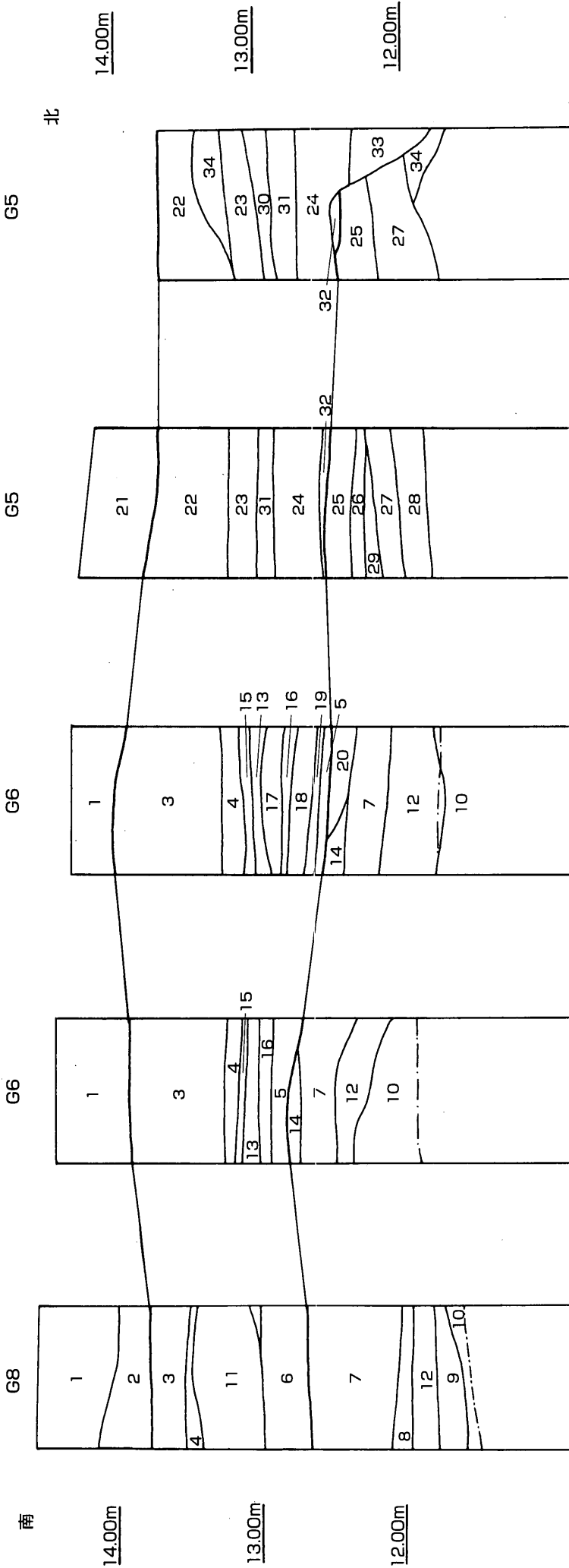
第223図 V区 (旧G1.4.5区) 北壁土層柱状図 (1/40)



- 1 耕作土
- 2 暗茶色砂混じり粘質土
- 3 暗茶色砂礫
- 4 潮灰黄色砂質土
- 5 暗灰黄色砂質土
- 6 暗黄褐色砂質土
- 7 暗黄褐色砂質土
- 8 暗黄褐色砂質土
- 9 淡黄褐色砂混じり粘質土
- 10 暗褐色粘質土
- 11 記載なし
- 12 淡黄褐色砂混じり粘質土
- 13 淡茶色砂礫
- 14 潮黄色砂
- 15 旧耕作土
- 16 潮灰色砂混じり粘質土
- 17 暗茶褐色砂混じり粘質土
- 18~23 記載なし
- 24 暗灰黄色砂混じり粘質土
- 25 暗灰褐色粘質土
- 26 暗灰黄色微砂混じり粘質土
- 27 暗灰黄色砂礫と暗茶灰色粘質土の互層
- 28 暗黄白色砂礫
- 29 淡茶黄色粘質土
- 30 記載なし
- 31 暗茶黄色砂混じり粘質土
- 32 潮茶黄色砂質土
- 33 潮茶黄色砂質土
- 34 明褐色粘質土
- 35 潮茶灰色粘質土
- 36 潮茶灰色粘質土
- 37 暗茶灰色砂混じり粘質土
- 38 暗茶灰色粘質土
- 39 潮茶黄色砂質土
- 40 暗茶黄色粘質土
- 41 茶黄色砂質土
- 42 潮黄色砂
- 43 暗茶黄色砂
- 44 暗黄白色砂礫
- 45~50 記載なし
- 51 淡茶黄色砂
- 52 潮茶黄色砂質土
- 53 灰茶色砂混じり粘質土
- 54 黄褐色粘質土
- 55 記載なし
- 56 灰褐色砂質土
- 57 淡黄褐色砂混じり粘質土
- 58 淡黄褐色砂質土
- 59 灰褐色砂質土
- 60 淡茶色砂質土
- 61 灰茶色砂混じり粘質土
- 62 黄茶色砂礫混じり粘質土
- 63 淡黄褐色砂質土
- 64 潮茶黄色砂混じり砂
- 65 潮茶黄色砂混じり粘質土
- 66 潮黄色砂
- 67 潮黄色砂
- 68 暗茶黄色砂
- 69 暗黄褐色砂質土
- 70 暗茶黄色砂質土



第224図 V区 (旧G4区) 北壁土層図 (1/80)

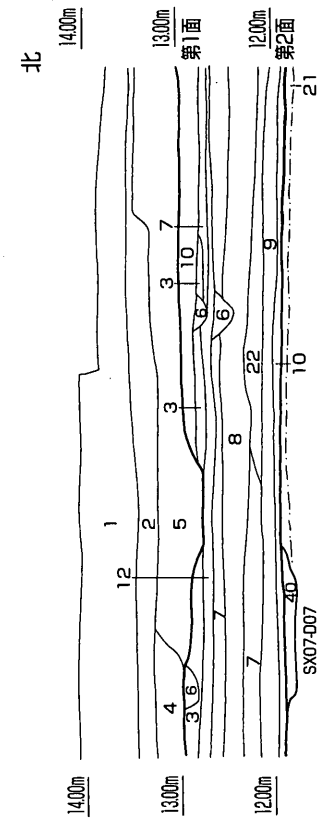
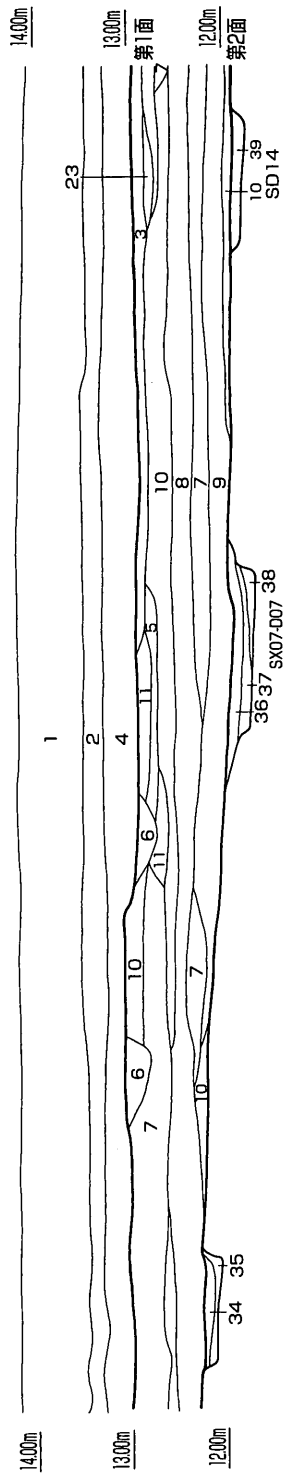
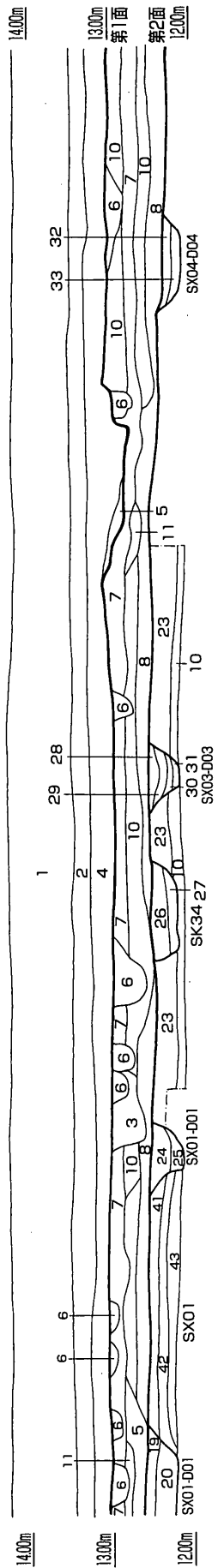


- 1 暗茶白色砂礫
- 2 暗黒灰色砂礫
- 3 暗茶黄色砂礫
- 4 暗茶黄色砂混じり粘質土
- 5 暗褐灰色砂混じり粘質土
- 6 暗黄色砂
- 7 灰黄色砂混じり粘質土
- 8 淡黄褐色砂礫混じり粘質土
- 9 茶黄色砂礫
- 10 暗黄色砂礫
- 11 暗灰色砂混じり粘質土
- 12 暗茶黄色砂混じり粘質土
- 13 褐黄色粘質土
- 14 黄褐色砂質土
- 15 淡黄茶色砂
- 16 淡褐茶色粘質土
- 17 暗茶灰黄色砂
- 18 暗黄色砂
- 19 暗黄色砂混じり粘質土
- 20 灰茶色砂礫混じり粘質土
- 21 耕作土
- 22 砂礫
- 23 濁灰黄色砂混じり粘質土
- 24 濁灰黄色砂礫
- 25 暗黄茶色粘質土
- 26 淡灰茶色砂質土
- 27 淡灰茶色砂質土
- 28 暗灰黄色砂礫
- 29 淡灰茶色砂質土
- 30 暗灰黄色砂質土
- 31 暗黄色砂
- 32 暗茶色粘質土
- 33 淡黄茶色砂
- 34 暗灰黄色砂質土



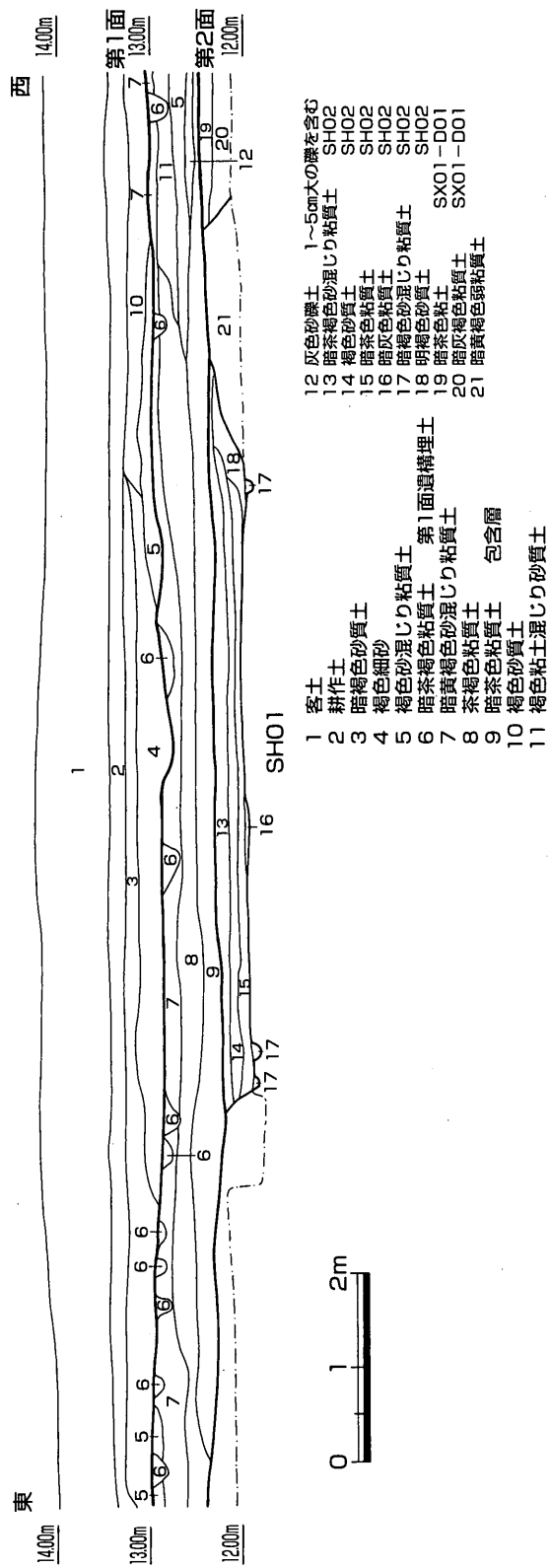
第225図 V区 (旧G5・6・8区) 西壁土層柱状図 (1/40)

南



- | | | |
|---------------|---------------|----------|
| 1 客土 | 16 暗灰色粘質土 | SX03-D03 |
| 2 耕作土 | 17 暗褐色砂混じり粘質土 | SX04-D04 |
| 3 暗褐色砂質土 | 18 暗褐色砂質土 | SX04-D04 |
| 4 褐色細砂 | 19 暗褐色粘質土 | SX07-D07 |
| 5 褐色砂質土 | 20 暗褐色砂質土 | SX07-D07 |
| 6 暗褐色砂混じり粘質土 | 21 暗褐色砂混じり粘質土 | SX07-D07 |
| 7 暗褐色砂質土 | 22 暗褐色砂混じり粘質土 | SD14 |
| 8 茶褐色粘質土 | 23 茶色粘質土 | SX01 |
| 9 褐色粘質土 | 24 暗褐色砂質土 | SX01 |
| 10 褐色砂質土 | 25 暗褐色砂混じり粘質土 | SX01 |
| 11 褐色砂混じり粘質土 | 26 暗褐色粘質土 | SX01 |
| 12 灰色砂混じり粘質土 | 27 暗褐色砂混じり粘質土 | SX01 |
| 13 暗褐色砂混じり粘質土 | 28 暗褐色粘質土 | SX01 |
| 14 褐色砂質土 | 29 暗褐色粘質土 | SX01 |
| 15 暗褐色粘質土 | 30 褐色砂混じり粘質土 | SX01 |
| | 31 褐色砂質土 | SX03-D03 |
| | 32 暗褐色粘質土 | SX04-D04 |
| | 33 暗褐色砂混じり粘質土 | SX04-D04 |
| | 34 暗褐色粘質土 | SX07-D07 |
| | 35 褐色砂混じり粘質土 | SX07-D07 |
| | 36 暗褐色粘質土 | SX07-D07 |
| | 37 暗褐色砂混じり粘質土 | SX07-D07 |
| | 38 褐色砂質土 | SD14 |
| | 39 暗褐色粘質土 | SX07-D07 |
| | 40 暗褐色粘質土 | SX07-D07 |
| | 41 暗褐色粘質土 | SX01 |
| | 42 暗褐色粘質土 | SX01 |
| | 43 暗褐色砂混じり粘質土 | SX01 |

第226図 V区 (旧G3区) 西壁土層図 (1/80)



第227図 V区 (旧G3区) 南壁土層図 (1/80)

質土・砂質土を挟んで50～100cm下の暗黄褐色弱粘質土層、茶色粘質土層の上面で弥生時代の遺構面になる。この弥生時代の遺構面は南側では標高12.5mであるが北側は標高11.9mとなり、60cmほど南から北に向かって下っている。ここからそのまま北側に延長した旧G 4区の北側部分の成果と矛盾しない。

以上のことから、弥生時代の遺構面は厳密には10～20cmの高低差で中期と後期が分かれるが、場所によっては同一面になる。東西方向では湊川の河岸段丘と自然堤防部分の高地部分から東側に向かって下っている。南北方向は南から北に向かって下っている。東西の地形は現地表に反映しているが、南北方向は反映していない。この弥生時代中期と後期の遺構については、土質の識別が困難であることも含めて全体に下げ気味で遺構検出を行い、同じ面で検出している。従って本報告では正確な遺構面ではなく、検出面という意味で第2面という語を使用している。

(2) 弥生時代の遺構・遺物

SH01 (第228～257図)

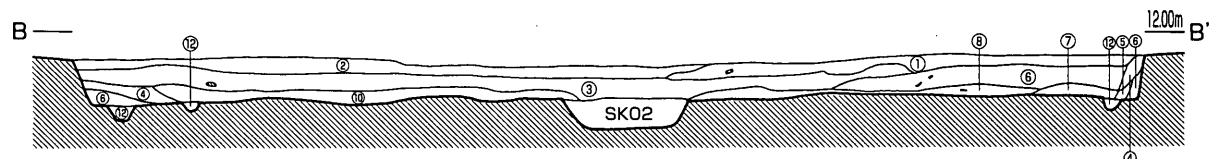
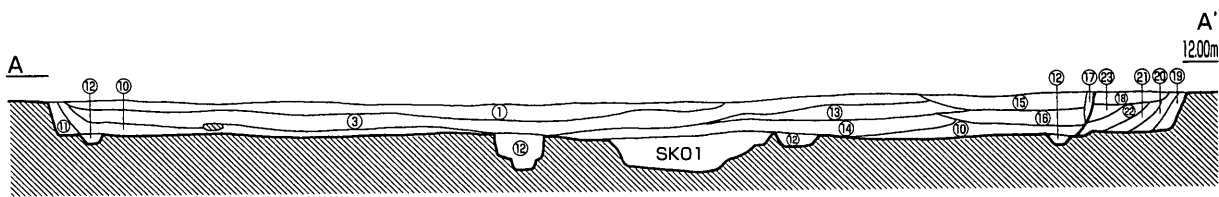
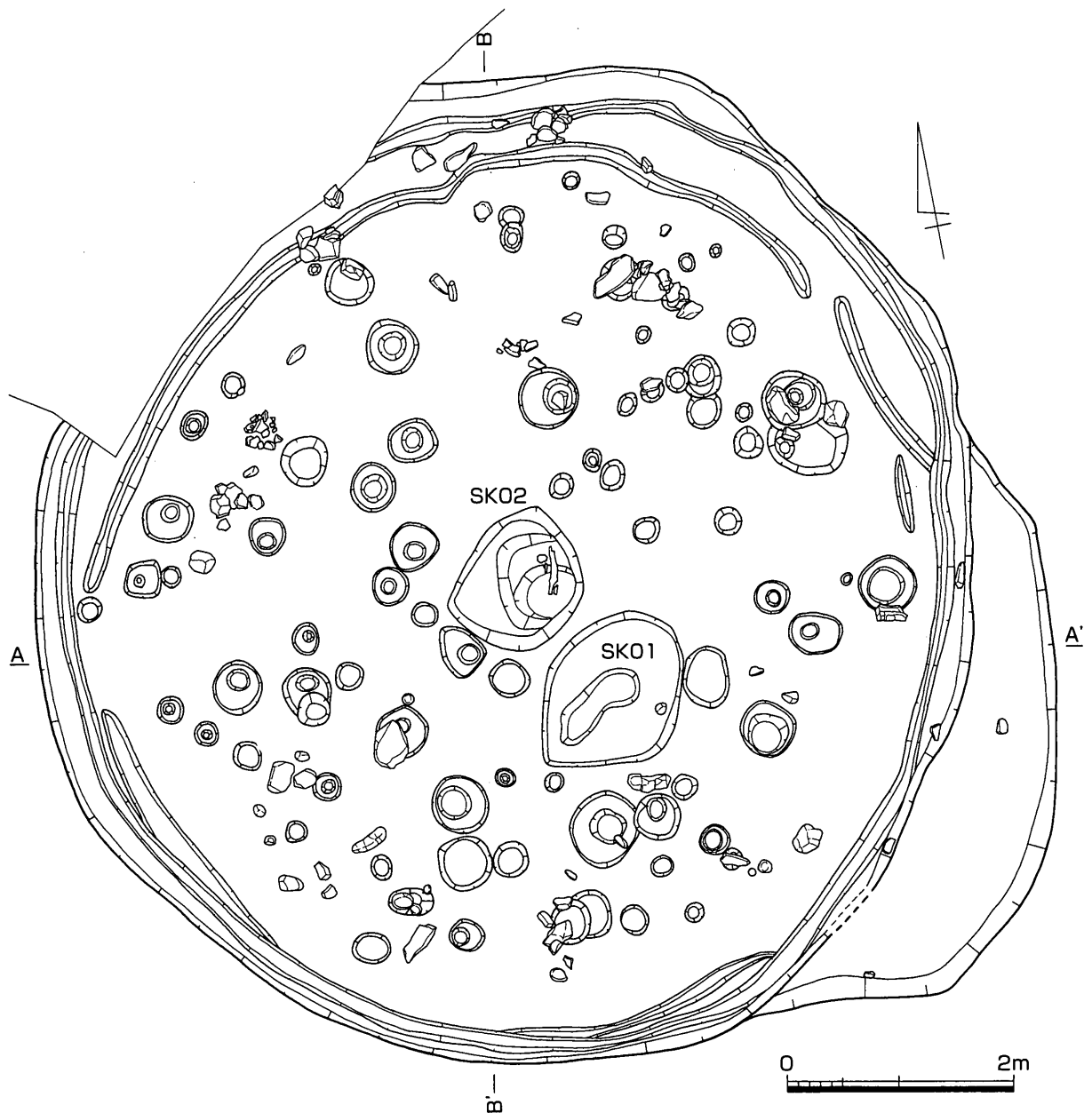
調査区中央やや東寄りの旧G 1区で検出した竪穴住居である。北西部分が僅かに調査区外になっている。平面形は直径8.5～8.8mの円形である。床面に前後関係を持つ壁溝が2条、土坑が2基あることから、この竪穴住居は建て替えが行われていることが分かる。従って検出時の平面形と規模は建て替え後のものである。壁面の掘り込みは直線的で傾斜が急な部分が多い。検出面から床面までは30cm前後の深さがある。

古い段階のものは、直径7.5mの円を描く壁溝をもつ。壁溝は幅10～20cm、深さは10cm弱で、埋土は褐色粘性微砂質土の単一層である。壁溝は部分的に途切れており、特に南東部分は途切れた部分の形状から、竪穴住居の外側に向かうようである。この部分の竪穴住居の外側には突出した部分があるが、底部には壁溝や柱穴などは検出されていない。この部分の掘り込みはSH01とよく似ているが、埋土を見ると斜めに堆積していて、最終段階のSH01によって壊されていることが分かる。古い段階のSH01であった可能性は高い。この壁溝の内側1.0～1.4mのところ、直径4.8mの円周に乗る柱穴が6基あり、柱間は2.6m前後である。主柱穴と考えられる。主柱穴は直径25～60cmの円形で、20cm程度の柱痕が認められる。深さは20～30cmで褐色粘性微砂質土の埋土をもつ。この主柱穴の円周の内側で、円周の中心からはずれた南東部に土坑 (SK01) がある。土坑 (SK01) の平面形は楕円形であるが、西側が直線的になっている。長径1.65m、短径1.25m、深さ25cmである。炭化物を多量に含んだ黒色の砂質土が多く堆積している。この土坑の埋没後の最上層に薄い焼土層が認められる。後述するようにSH01は最終的には焼失しており、この焼失時にはすでに土坑 (SK01) は埋没していた古い段階のものであることが分かる。

新しい段階では、直径8.0mの円を描く壁溝をもつ。古い段階の壁溝より外側にあり、北西部分は調査区外になる。壁面の下場から10～20cm程度離れているが、部分的に接している箇所もある。壁溝は幅10～20cm、深さは10cm弱で、埋土は褐色粘性微砂質土の単一層である。規模的には古い段階のものと大差はない。壁溝の内側1.1m前後で直径5.6mの円周に乗る柱穴6基と、壁溝の内側0.9mで直径5.9mの円周に乗る柱穴6基の2群がある。いずれもこの6基の柱穴が主柱穴と考えられる。直径5.6mの円周上の柱穴は、平面形は円形で、柱間2.7～3.0m、柱穴の直径20～50cmで中には15～20cm程度の柱痕が認められるものがある。深さは20～30cmで褐色粘性微砂質土の埋土をもつ。これに対して直径5.9mの円周上の柱穴は、平面形は円形で、柱間2.8～3.4m、柱穴の直径20～40cmで中には15cm程度の柱痕が認められるものがある。深さは20～30cmで褐色粘性微砂質土の埋土をもつ。この2群の主柱穴の円周の内側の中央には土坑 (SK02) がある。土坑 (SK02) の平面形は隅丸方形で、長辺1.2m、短辺1.0m、深さ40cmである。東側部分の底部は一段低くなっている。炭化物を多量に含む黒色の砂質土・砂混じり粘質土が多く堆積している。また一段低い部分では炭化材が出土している。この土坑 (SK02) は2群の主柱穴群に共通して伴うものである。

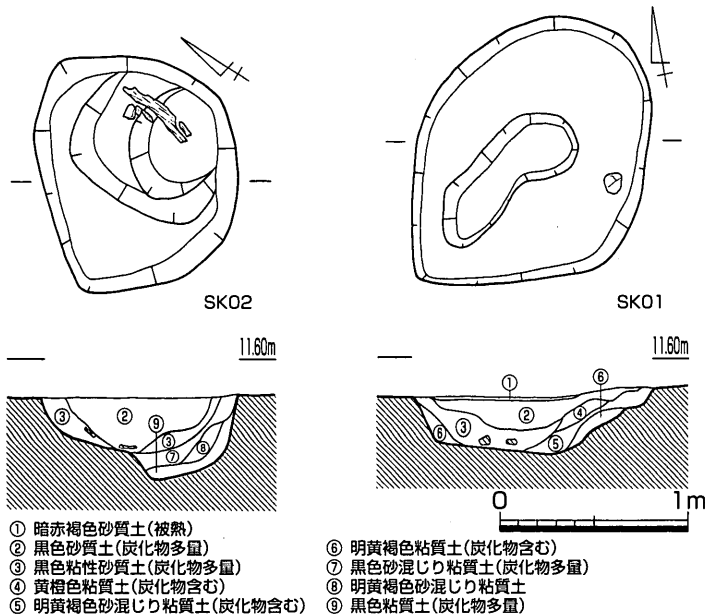
SH01は最終的には焼失している。床面の壁面から2m以内の部分に炭化した柱材が検出された。この炭化材は南西部分に多い。また土坑 (SK02) の北西部分の床面が集中的に焼けている。南側と東側の床面は部分的に焼けている。

住居全体の埋土はにぶい黄褐色系の砂混じり粘土が主体となり、床面近くには炭化物が多く見られる。埋土に大きな乱れはなく、水平に堆積している部分が多い。

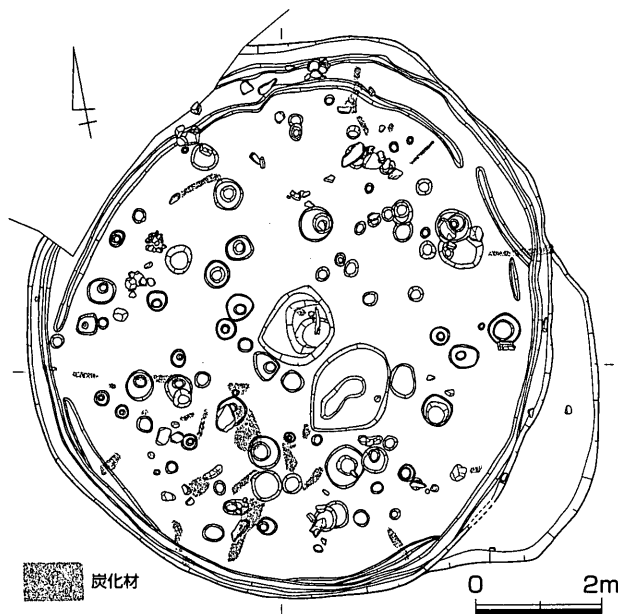


- | | | | |
|----------------|----------------|---------|-----------------|
| ① にぶい黄褐色微砂混り粘土 | ⑨ 黒色微砂質土 | 炭化物多く含む | ⑩ 褐色微砂混り粘土 |
| ② 褐色微砂混り粘土 | ⑩ にぶい黄褐色粘性微砂質土 | 炭化物多く含む | ⑪ にぶい黄褐色微砂混り粘質土 |
| ③ にぶい黄褐色微砂混り粘土 | ⑪ 褐色粘性微砂質土 | 炭化物多く含む | ⑫ 褐色微砂混り粘質土 |
| ④ 暗褐色微砂混り粘質土 | ⑫ にぶい褐色微砂混り粘質土 | 炭化物多く含む | ⑬ 黄褐色微砂混り粘質土 |
| ⑤ 黒色微砂混り粘質土 | ⑬ 黒褐色微砂混り粘質土 | 炭化物多く含む | ⑭ にぶい黄褐色微砂混り粘質土 |
| ⑥ にぶい黄褐色微砂質土 | ⑭ にぶい褐色微砂混り粘土 | 炭化物多く含む | ⑮ 褐色微砂混り粘質土 |
| ⑦ にぶい黄褐色微砂混り粘土 | ⑮ 暗褐色微砂混り粘土 | 炭化物多く含む | ⑯ 黄褐色微砂混り粘質土 |
| ⑧ 黒褐色微砂混り粘質土 | ⑯ にぶい赤褐色微砂混り粘土 | 炭化物多く含む | ⑰ 褐色微砂混り粘質土 |
| | | | ⑱ 炭化物多く含む |
| | | | ⑲ 壁溝 |
| | | | ⑳ 被熱赤化部分 |

第228図 V区第2面SH01平・断面図 (1/60)



第229図 V区第2面SH01内SK01・02平・断面図 (1/40)



第230図 V区第2面SH01炭化材出土状況 (1/120)

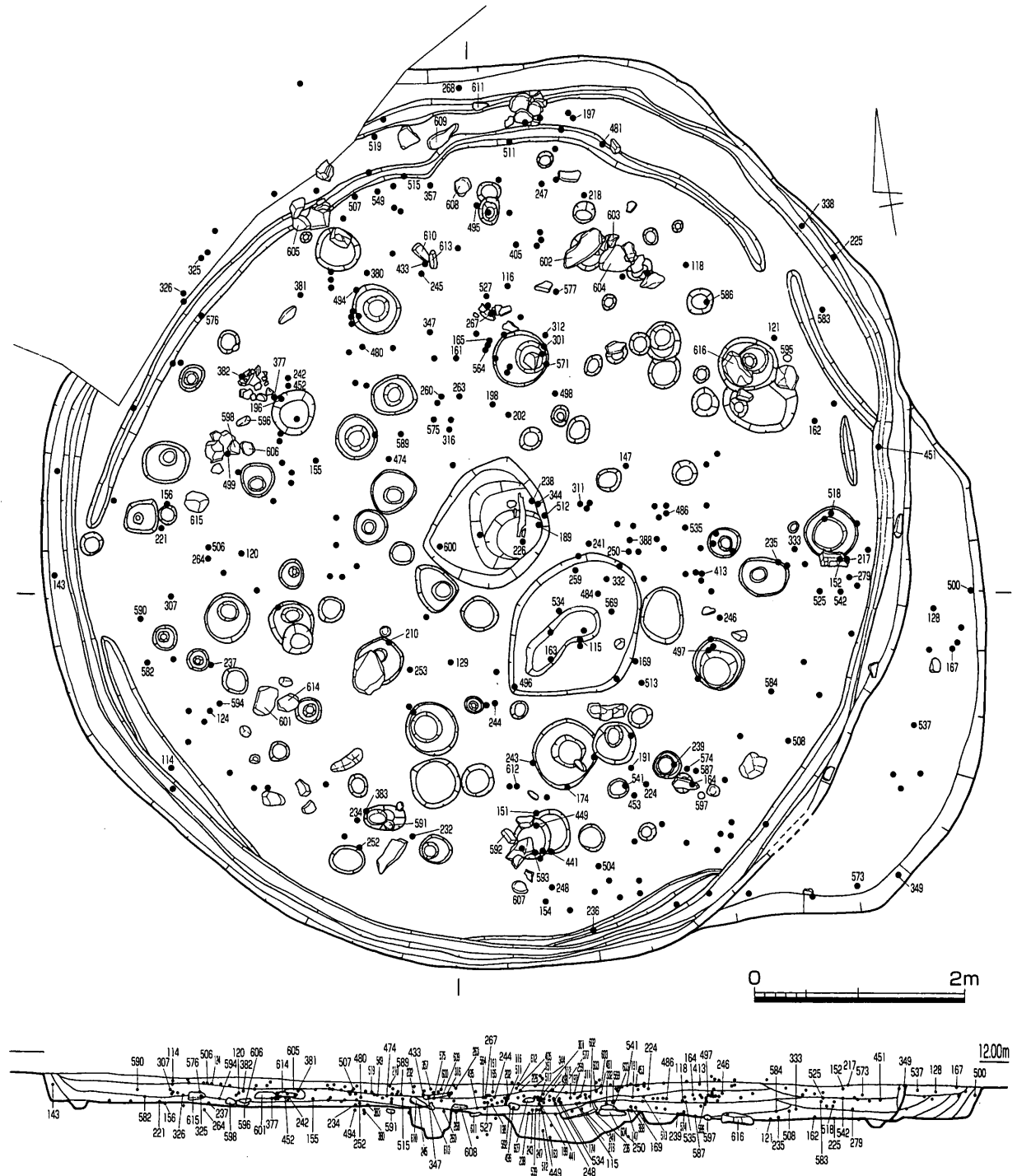
サヌカイト剥片・碎片は住居中央の土坑 (SK01・02) の周辺に集中していることが分かる。またグリッド33~35と直線状の北側の空間も多くなっているが、この部分の両側には台石と砥石が多く出土しており、作業場の一つと考えられる。またこれらのグリッド部分は最終段階の主柱穴の間の空間になっている。石鏃・楔形石器などの大多数の小形の石器やサヌカイト剥片は、住居床面から15cmほど上の部分の住居埋土の中央部分での出土が多い。これに対して台石・砥石などの大形の石器は床面での出土が多くなっている。

1~25は壺である。1の口縁部は直線的に開いている。体部上半部にかけて粗いハケ目を施してい

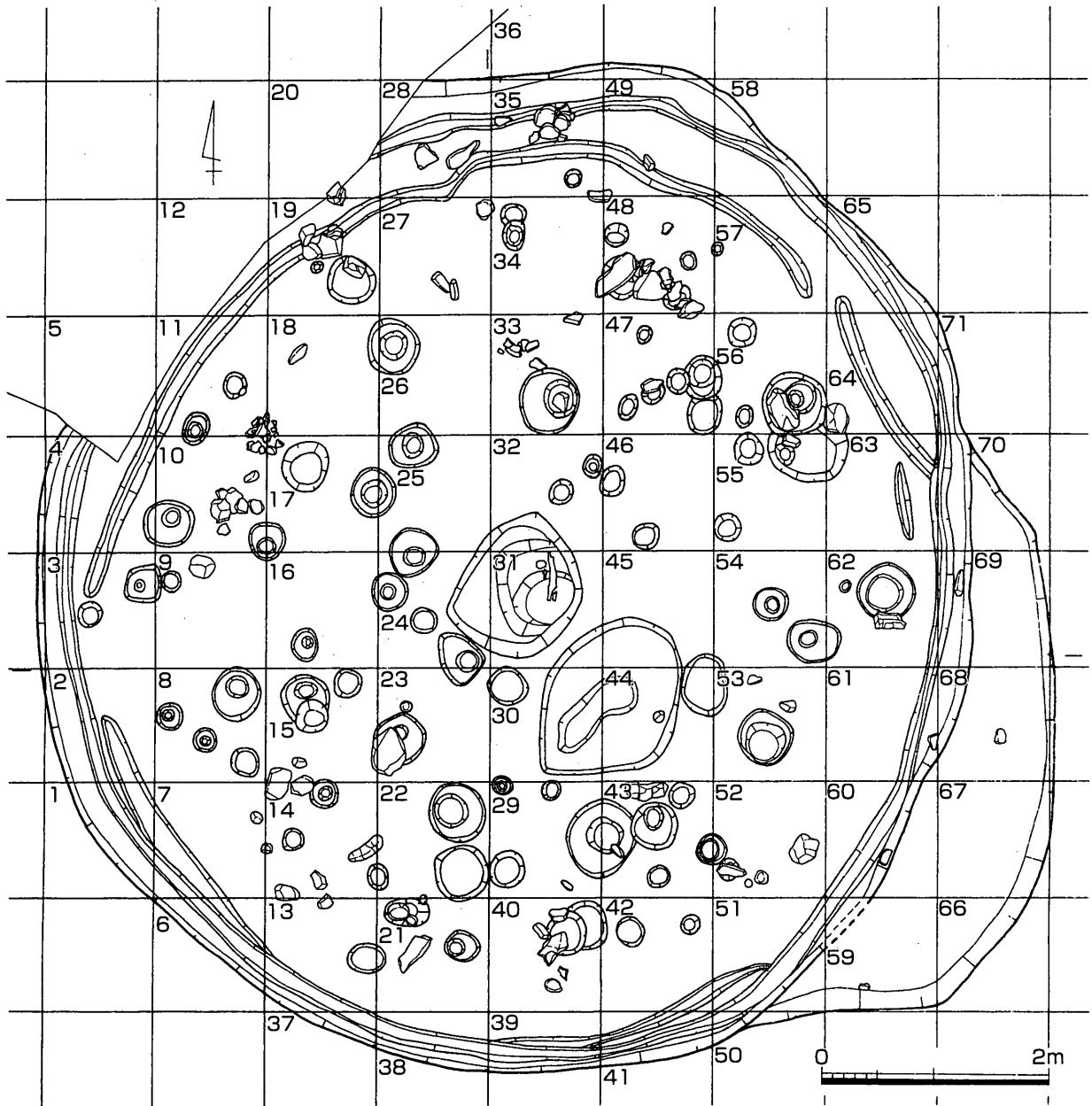
以上のように、SH01は内側の壁溝の段階→外側の壁溝+直径5.6mの円周に乗る主柱穴段階→外側の壁溝+直径5.9mの円周に乗る主柱穴段階のように3段階で外側に拡張していることになる。

SH01からは土器、紡錘車とともに夥しい量のサヌカイト製の石器・石器未製品・剥片・碎片、敲石、砥石、台石が出土している。サヌカイト製の石器・石器未製品は454点あり、重量にすると1250.8gである。サヌカイト剥片・碎片では実に5668点、重量にすると5200.13gにのぼる。製品を含めてサヌカイトの総重量は6450.93gである。住居の掘り込みを開始した当初からサヌカイト片が多く出土した。そのため住居全体に1m方眼を組んでグリッドを設定して遺物の取上げを行った。サヌカイト剥片・碎片的分布を見ると、100点を超える量が出土しているのはグリッド15・25・29・32・33・34・35・43・45・54である。またグリッド22が91点、グリッド42が99点といずれも100点に近い量が出土している。グリッド取上げが出来なかったものでは、住居の南東1/4部分で390点、北東1/4部分で476点出土しているのに対して、残りの1/4部分がそれぞれ100点台の出土である。サ

る。2～4は口縁部内面に斜格子文を施しているが、2・4は口縁部端部を上下に拡張し、穿孔が認められる。5～9は口縁部および頸部外面に刻目突帯を巡らせている。6は大きめの穿孔が現存で1個ある。10は直線的に開く口縁部の外面に貼付突帯を巡らせた後に棒状浮文を貼り付けている。11の頸部の刻目突帯は指頭で連続的に押さえ付けている。14は口縁部端部を上方に拡張している。頸部の刻目突帯は爪による細かい刻み目である。体部内・外面にはハケ目を施している。15～17は無頸壺である。15は外面に刻目突帯を巡らせている。16は口縁部を強くナデて直立させている。貼付突帯の上部に現存で穿孔が1個ある。17の口縁部南部は内傾する面をもつ。内面にはハケ目の後にヘラミガキを施している。



第231図 V区第2面SH01石器分布図 (1/60)



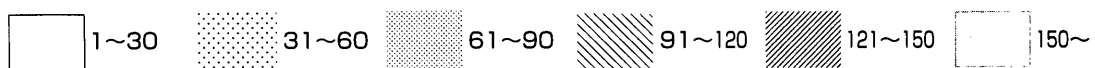
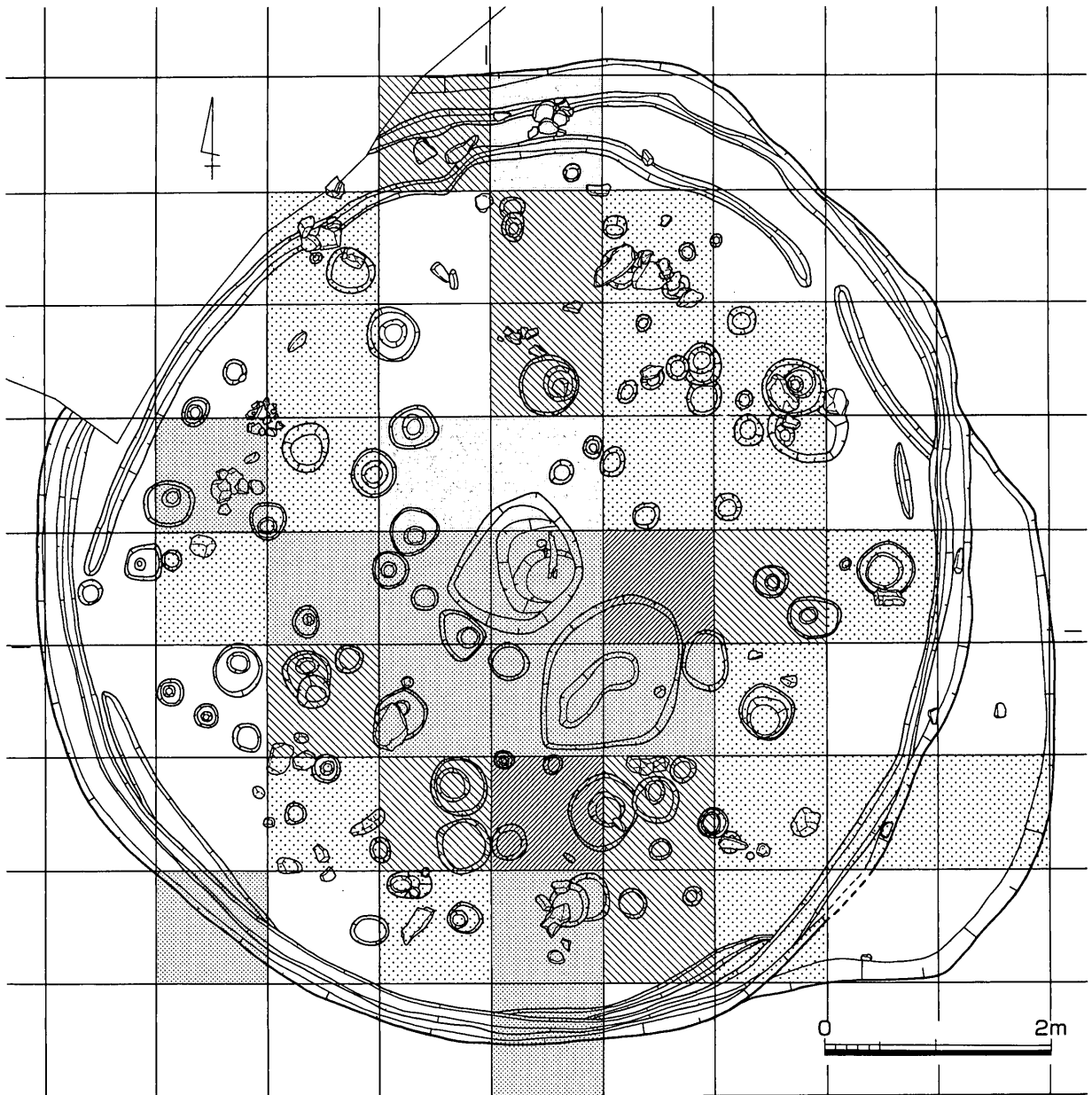
第232図 V区第2面SH01グリッド番号図 (1/60)

グリッド	剥片数	グリッド	剥片数	グリッド	剥片数	グリッド	剥片数	グリッド	剥片数
1	15	16	84	31	73	46	49	61	18
2	14	17	43	32	161	47	36	62	48
3	23	18	59	33	104	48	33	63	23
4	14	19	51	34	110	49	25	64	16
5	0	20	6	35	168	50	0	65	2
6	63	21	55	36	6	51	58	66	10
7	30	22	91	37	0	52	45	67	35
8	15	23	71	38	20	53	41	68	18
9	55	24	78	39	76	54	102	69	6
10	73	25	171	40	68	55	60	70	3
11	25	26	21	41	16	56	52		
12	10	27	56	42	99	57	15		
13	9	28	94	43	116	58	6		
14	38	29	133	44	84	59	18		
15	118	30	81	45	125	60	32		

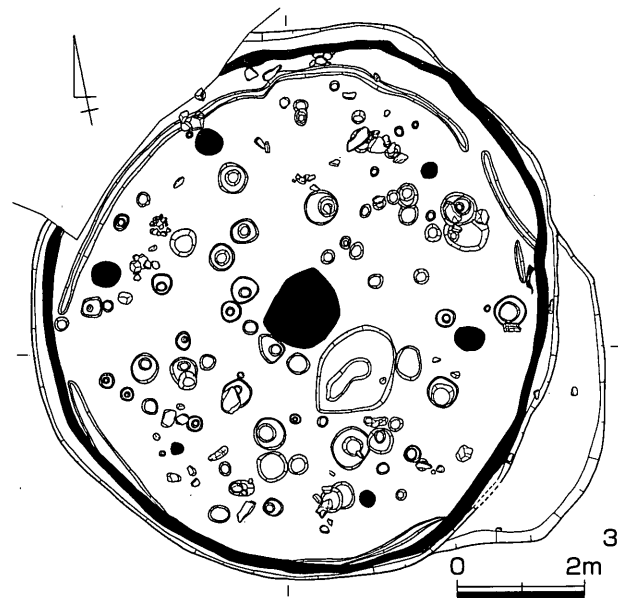
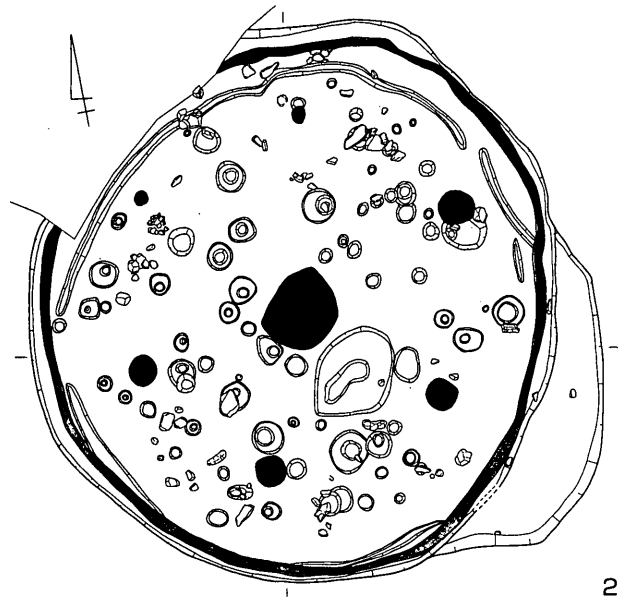
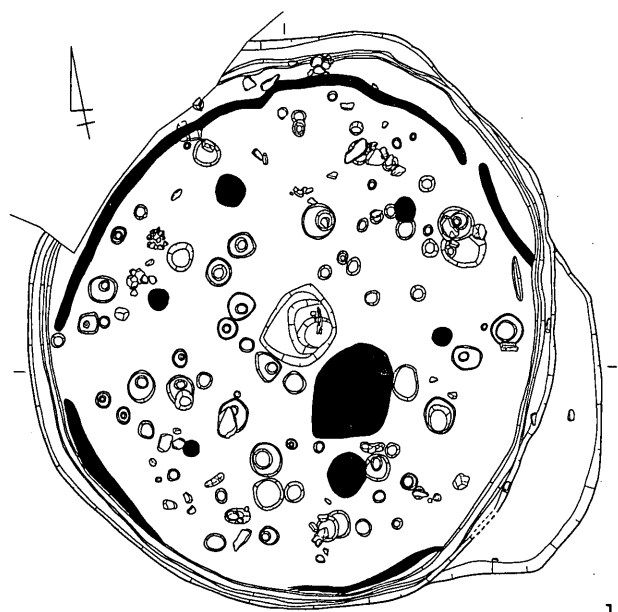
第1表 V区第2面SH01グリッド別剥片出土量一覧

18・19の口縁部は直線的に立ち上がる。23～25は体部の破片で、櫛描波状文および櫛描直線文が認められる。

26～55は甕である。26は口縁部内面を強くナデている。体部上半の膨らみは弱く、外面にはハケ目の後に間隔を開けてヘラミガキを加えている。28は口縁部端部外面に刻み目の後に凹線を巡らせている。29・30は口縁部端部を上方に拡張し傾斜する面を作っている。口縁部屈曲部外面に刻目突帯を巡らせているが、29は指頭圧痕で、30は爪先により刻み目を作っている。31の口縁部端部外面には凹線を深く巡らせている。32・34・36～40は口縁部端部を上方に拡張している。35は口縁部内面と屈曲部直下を強くナデている。体部は厚手である。36も口縁部屈曲部直下の内面を強くナデている。体部内・外面にはハケ



第233図 V区第2面SH01剥片出土量分布図 (1/60)



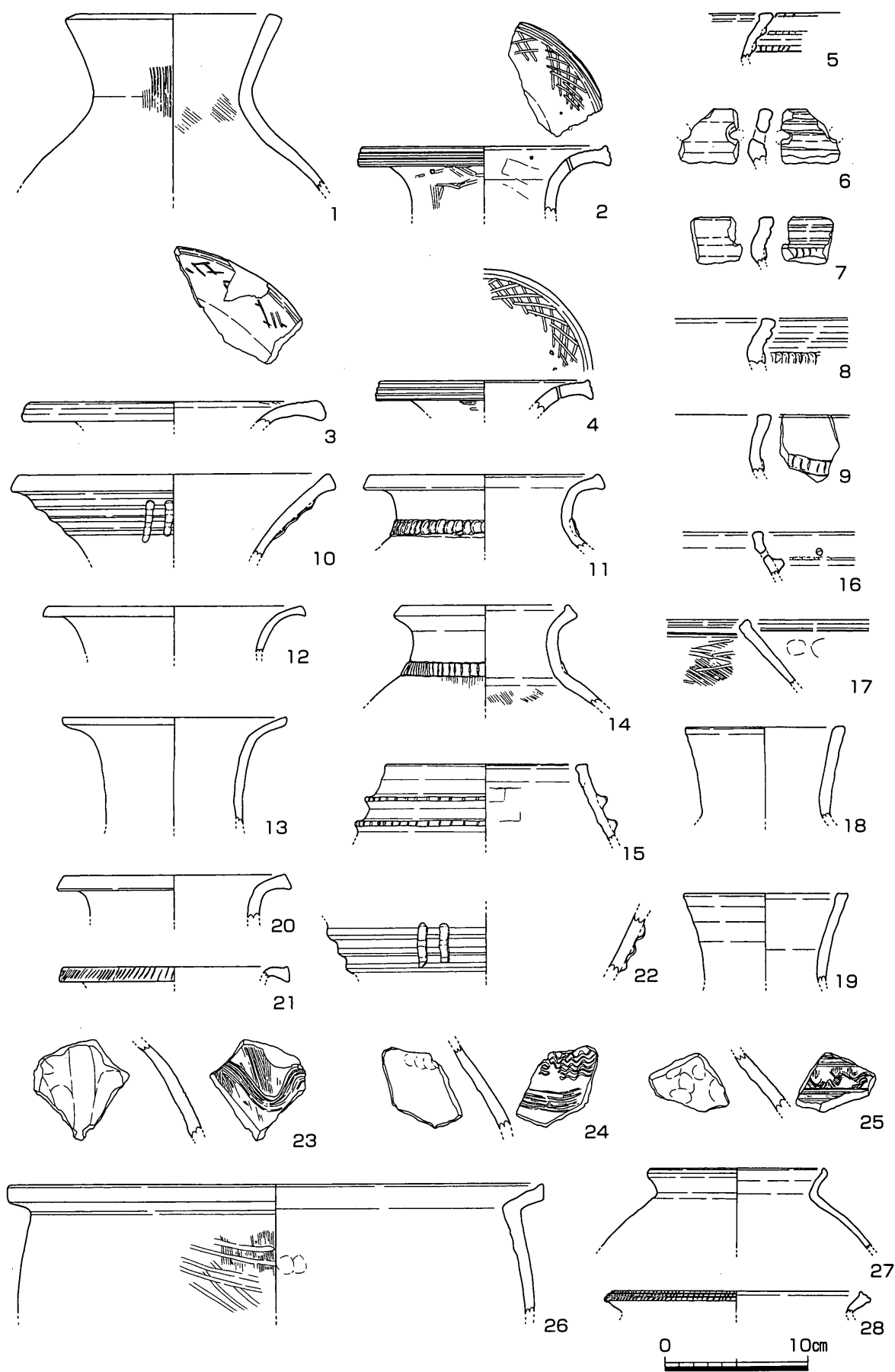
第234図 V区第2面SH01変遷図 (1/120)

目を施している。41は口縁部端部外面に細かい凹線を巡らせている。42~48は全体に薄手の作りになっている。45は口縁部外面が肥厚して丸みを帯びている。47の口縁部は極端に薄くなっている部分がある。49~51の口縁部は鋭く屈曲し、端部を上方に拡張している。また口縁部内面を強くナデている。52の口縁部は丸みを帯びて僅かに外反して開く。体部外面にはヘラミガキを施している。53の口縁部も丸みを帯びて屈曲し外反している。54は口縁部端部を上方に拡張している。

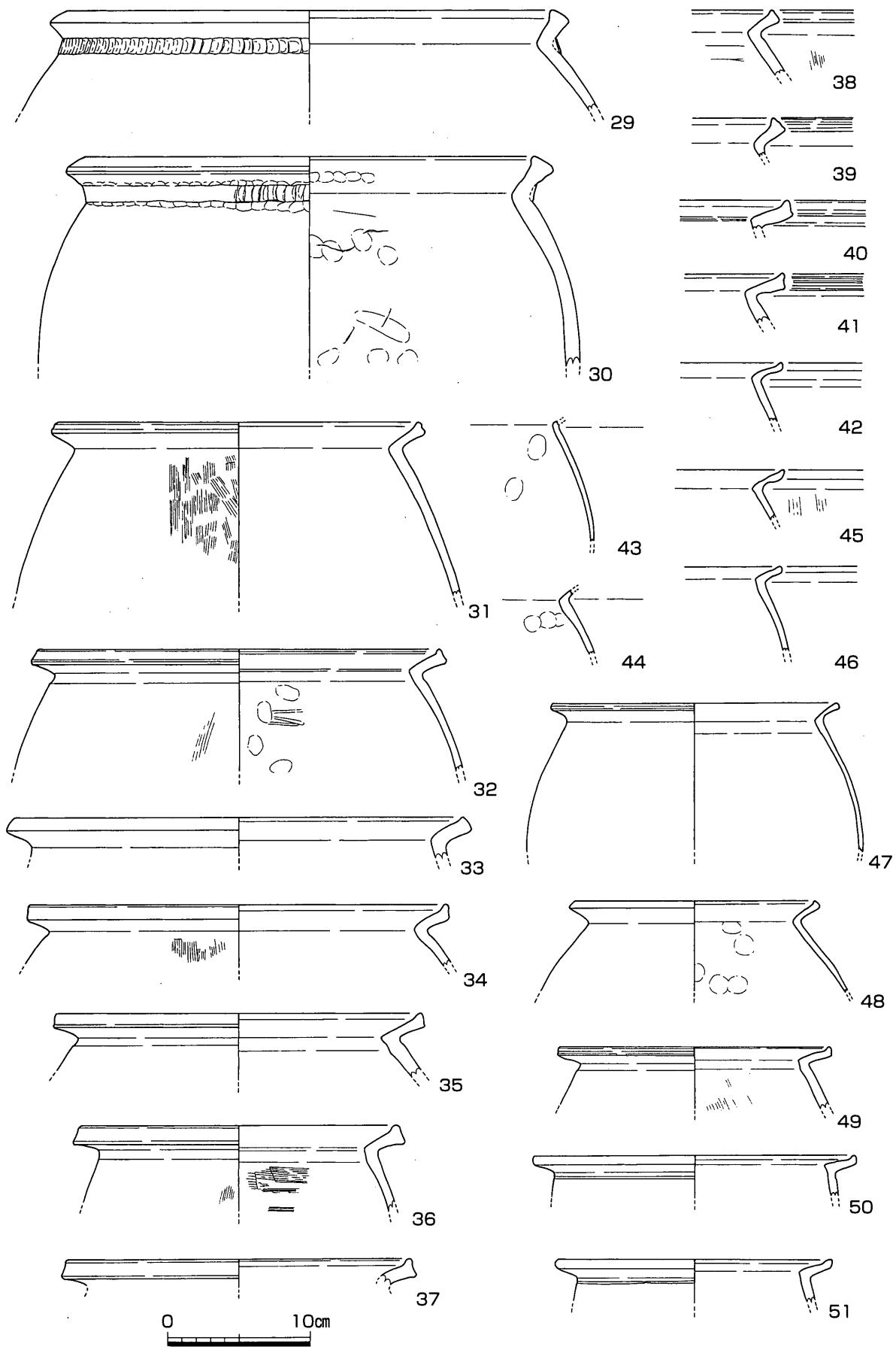
56~73は壺および甕の底部である。57~63の外面にはヘラミガキが施されている。58は内面にヘラケズリを施し、体部下半に焼成後の穿孔が1箇所認められる。65・68・72・73は短い脚台が付く。70の底部は突出している。

74は高杯で口縁部は真横に開き、内面に突帯が巡る。口縁部端部外面には斜格子文が巡っている。78も体部の立ち上がりが弱く浅くなることから高杯と考える。口縁部端部は内側に拡張し、上面に円形浮文を現存で8個貼り付けている。75~77・79は鉢である。75・76は口縁部端部を内・外面方向に拡張し、端部外面に刻み目を施している。内湾する口縁部の外面には刻み目の後に凹線を巡らせている。77は口縁部端部上面を強くナデており、体部外面にはヘラミガキを施している。79の口縁部の湾曲は弱い。外面には低く潰れたような刻目突帯を巡らせている。80・81は高杯の脚部、82・83は台付鉢の台部と考えられる。82の台部は内湾して端部はしっかりと接地している。83の端部は斜めに接地し、外面には凹線が巡る。方形の透かし穴が現存で1個ある。

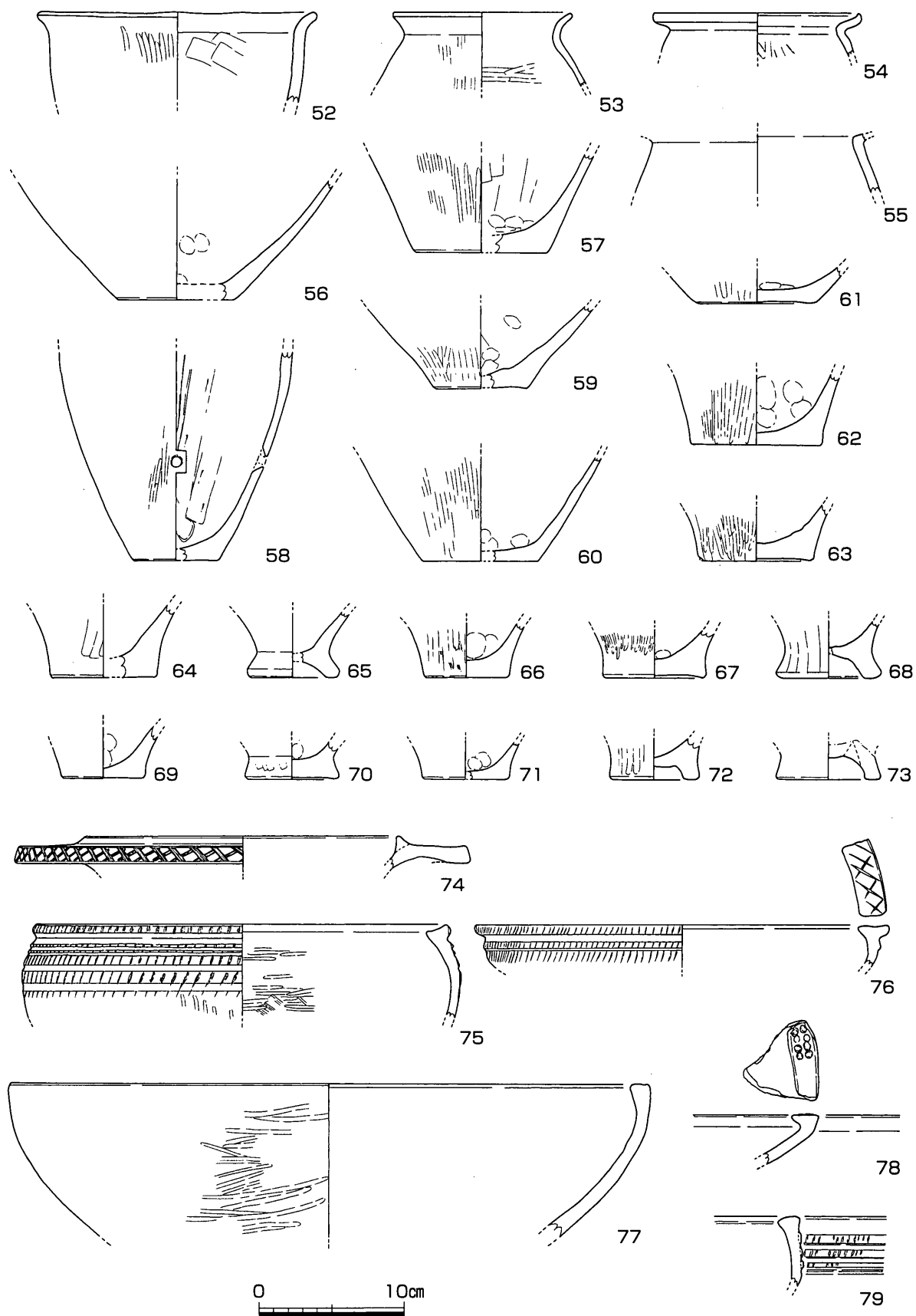
85~99は紡錘車で、ヘラミガキ調整が認められたり、文様の一部が残るなど土器の



第235图 V区第2面SH01出土遗物(1)(1/4)



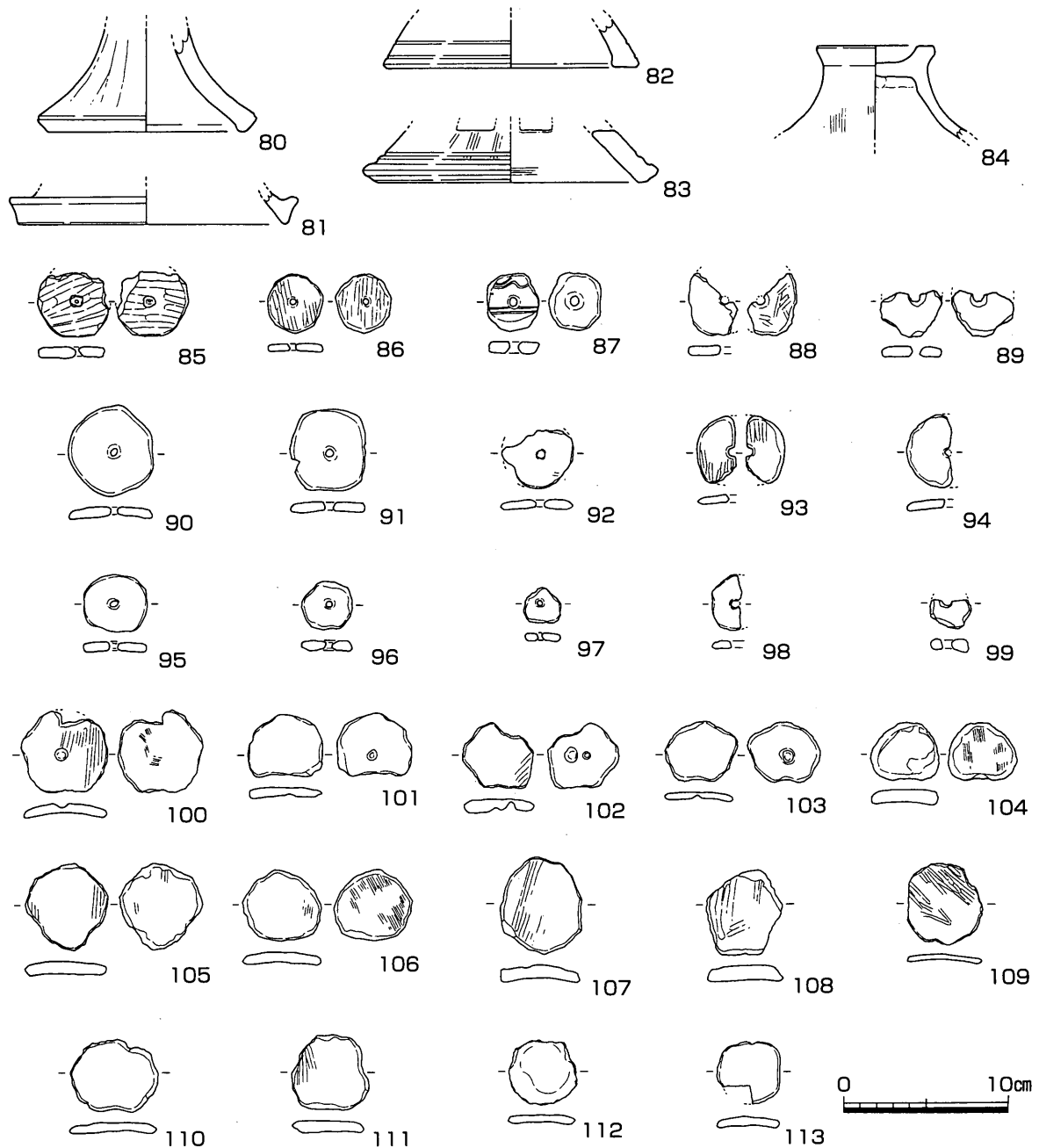
第236图 V区第2面SH01出土遗物(2)(1/4)



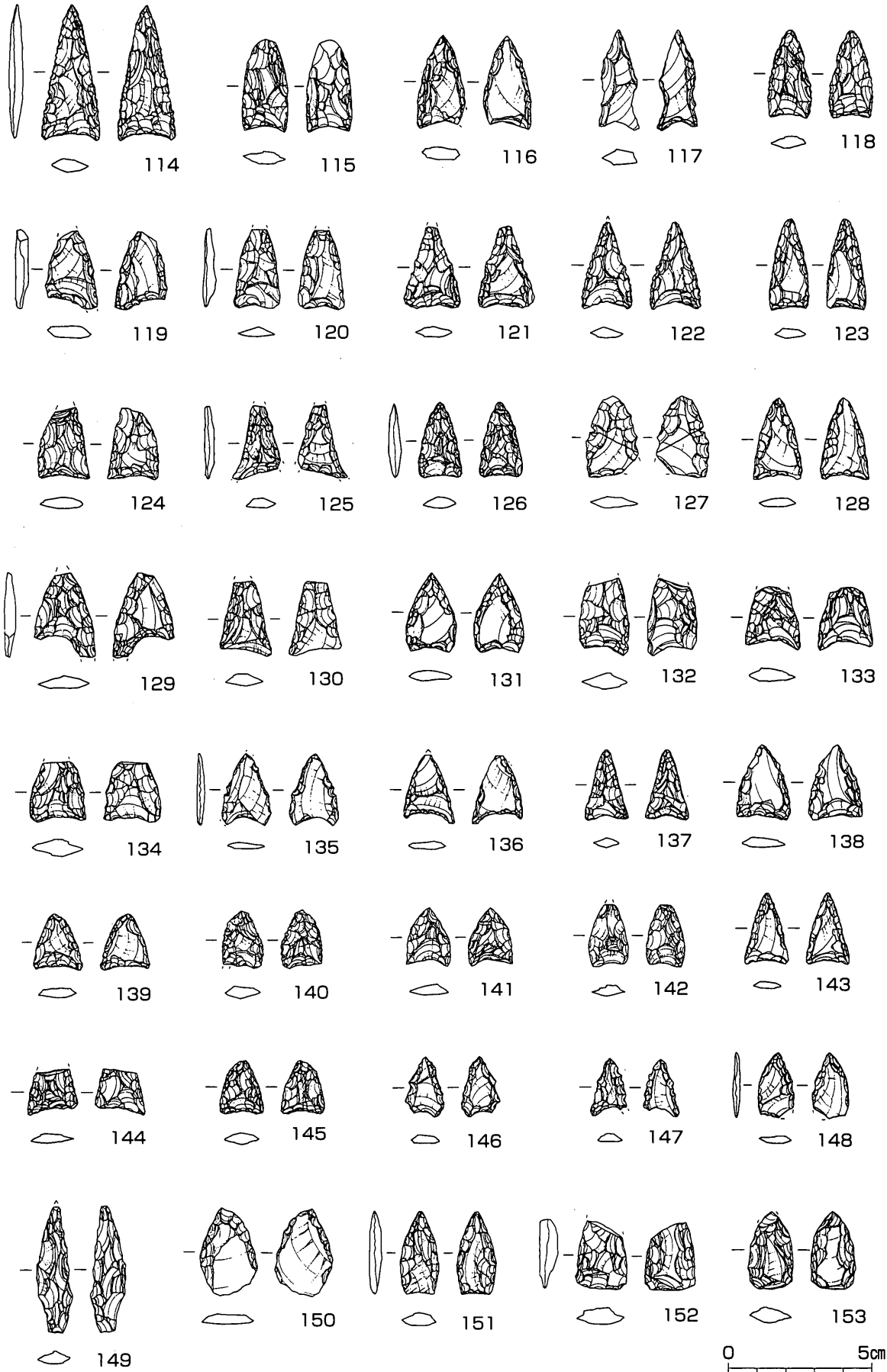
第237图 V区第2面SH01出土遗物 (3) (1/4)

体部を転用している。100～113は紡錘車の未製品である。100～103は穿孔途中で、102は穿孔の痕跡が2箇所認められる。104～113は外形を整えた段階である。周囲の角の部分を取って丸みを出しているが、まだ打ち欠いた部分の角が残っているものが多い。

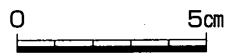
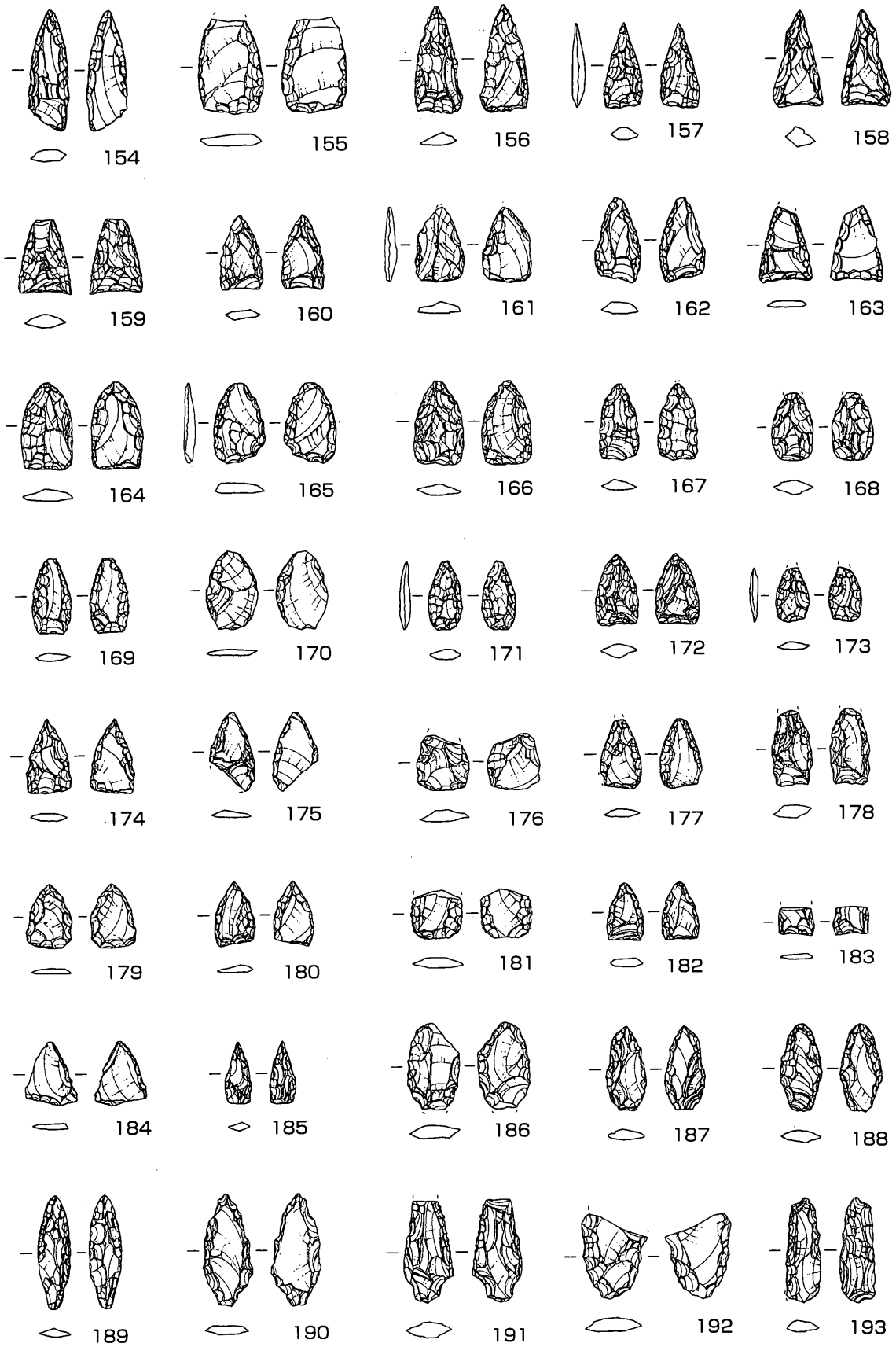
114～303は石鏃である。114～147・307・322は凹基である。114の鏃身は長く、側縁部は丁寧に調整している。115の先端部は、裏側が薄く欠損して鋭さがない。117は鏃身の中央よりやや下側がくびれている。調整を施していない部分があり、未製品かもしれない。119・129・130・132・133・136・144・146の基部は不揃いである。125は基部の両端部は欠損しているが、基部中央部は大きく抉れている。135・136・138・139は鏃身に主要剥離面が残っている。143の側縁部は直線的である。



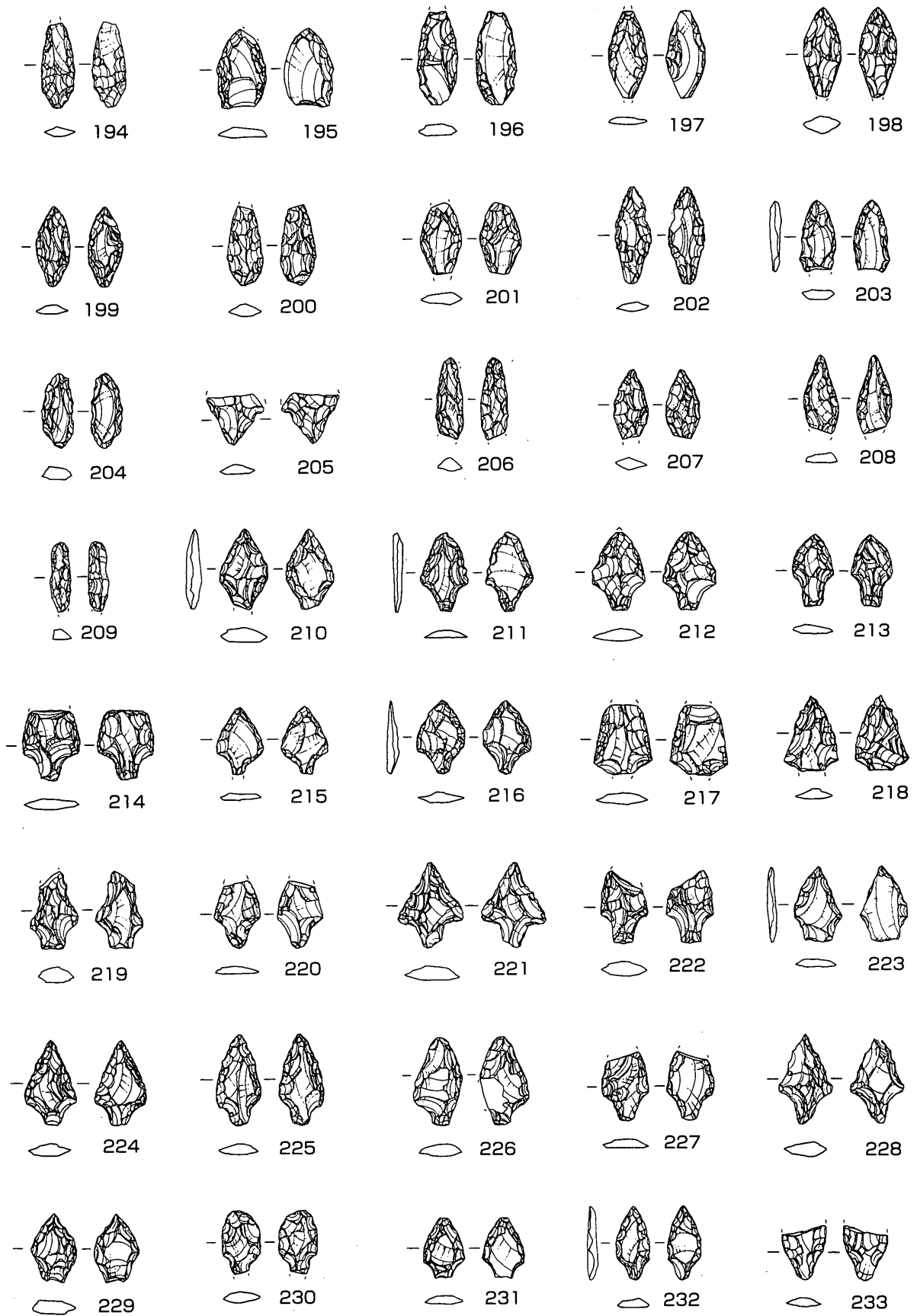
第238図 V区第2面SH01出土遺物 (4) (1 / 4)



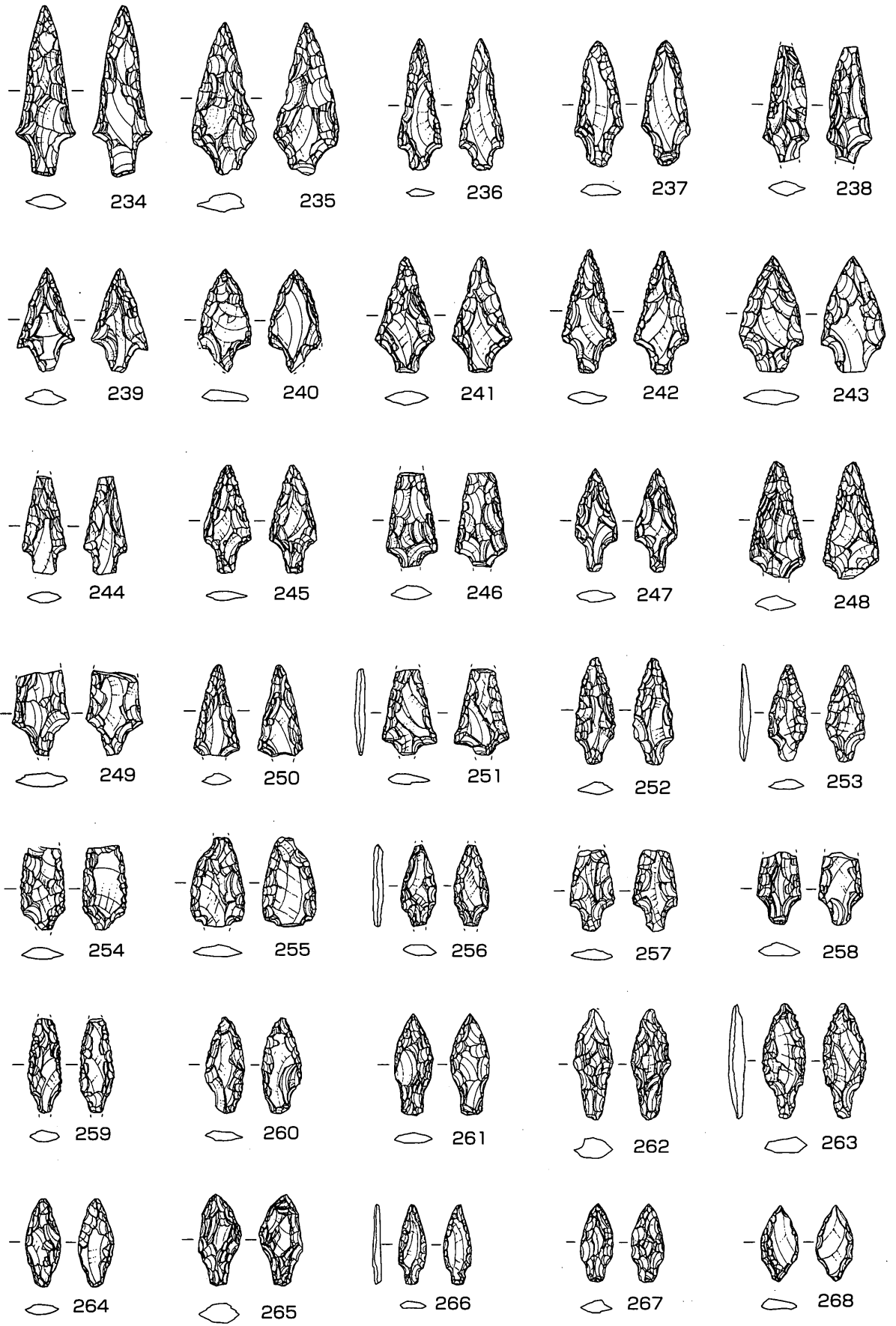
第239图 V区第2面SH01出土遺物 (5) (1/2)



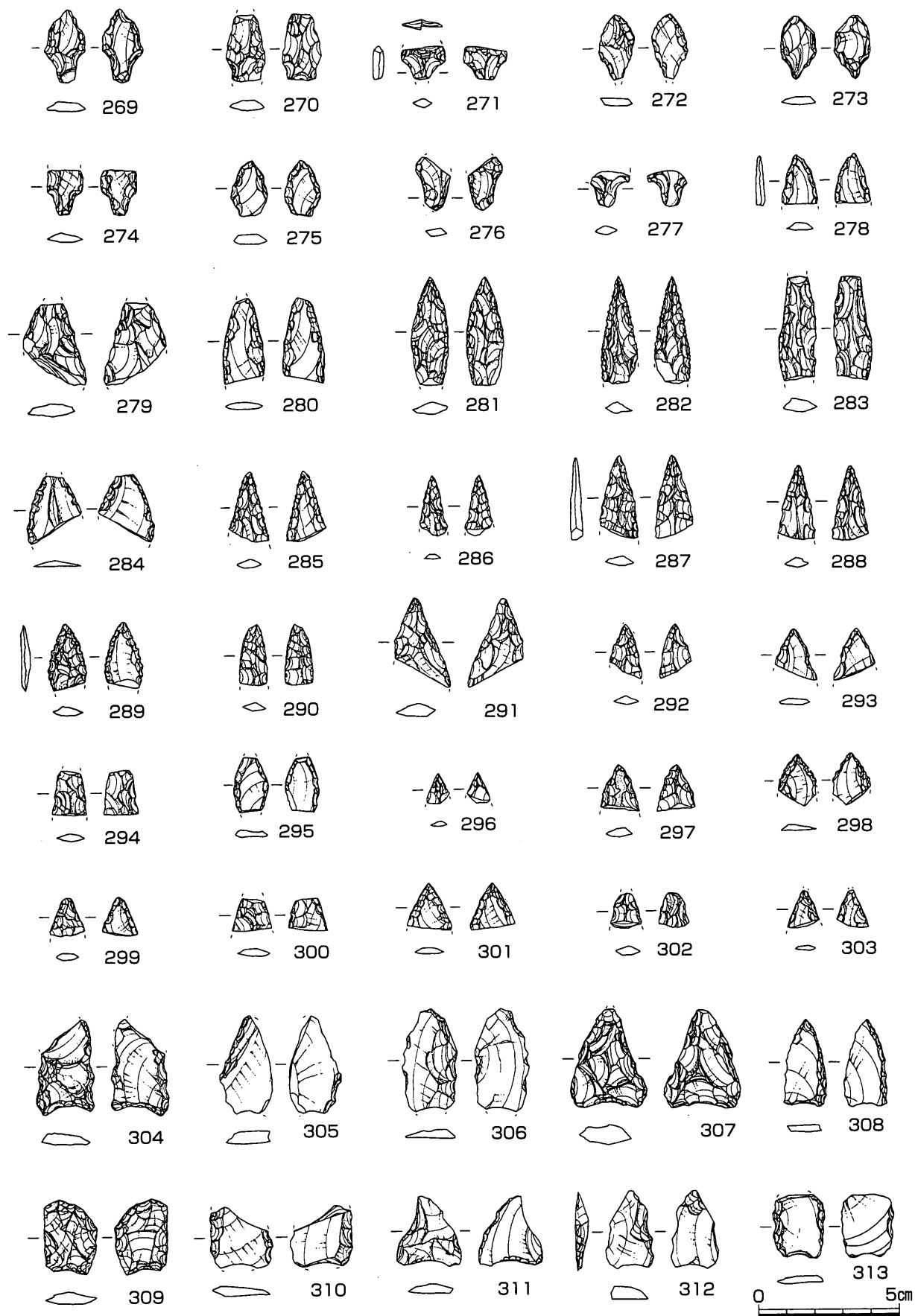
第240图 V区第2面SH01出土遺物 (6) (1/2)



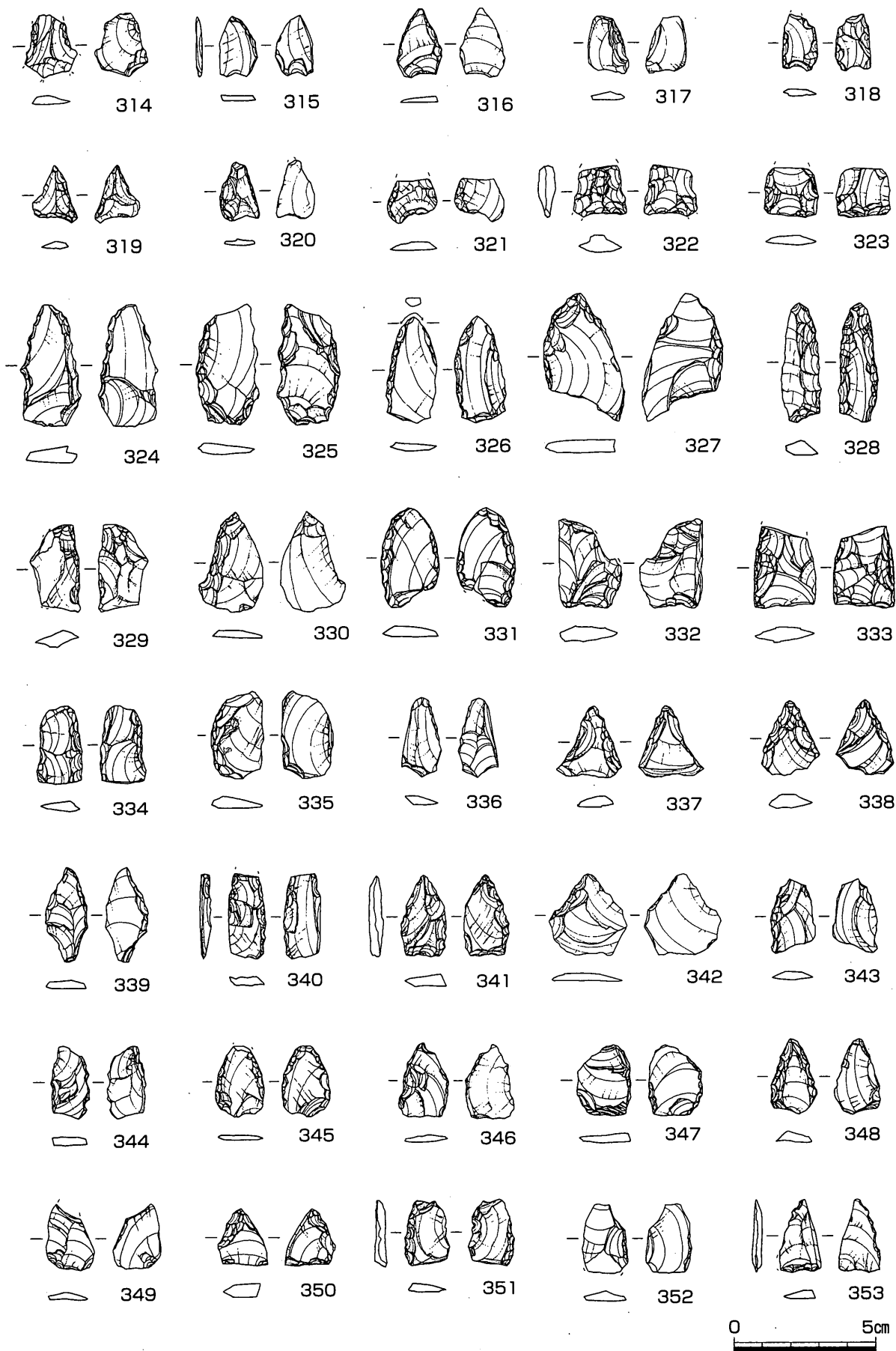
第241图 V区第2面SH01出土遺物(7)(1/2)



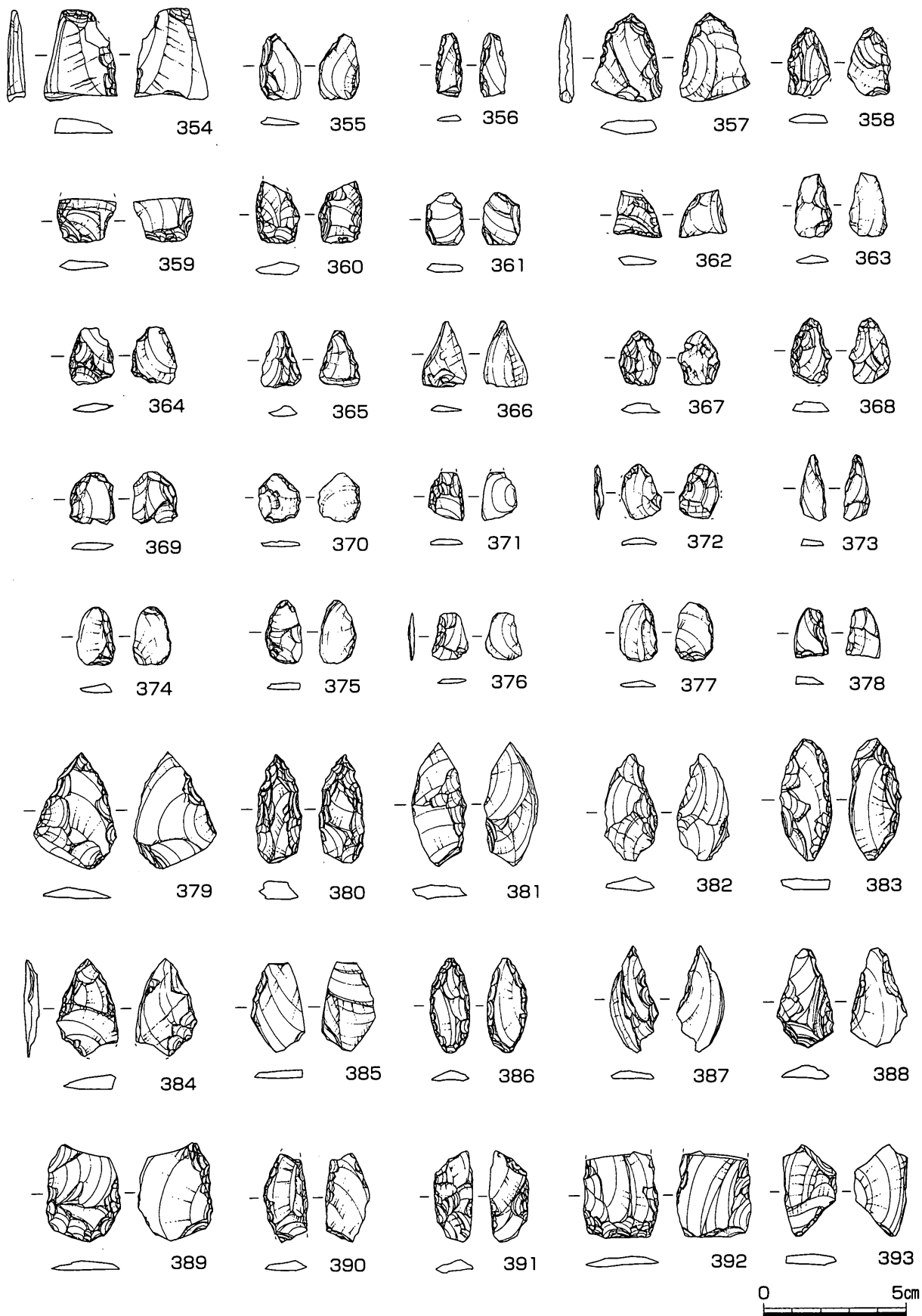
第242图 V区第2面SH01出土遺物 (8) (1/2)



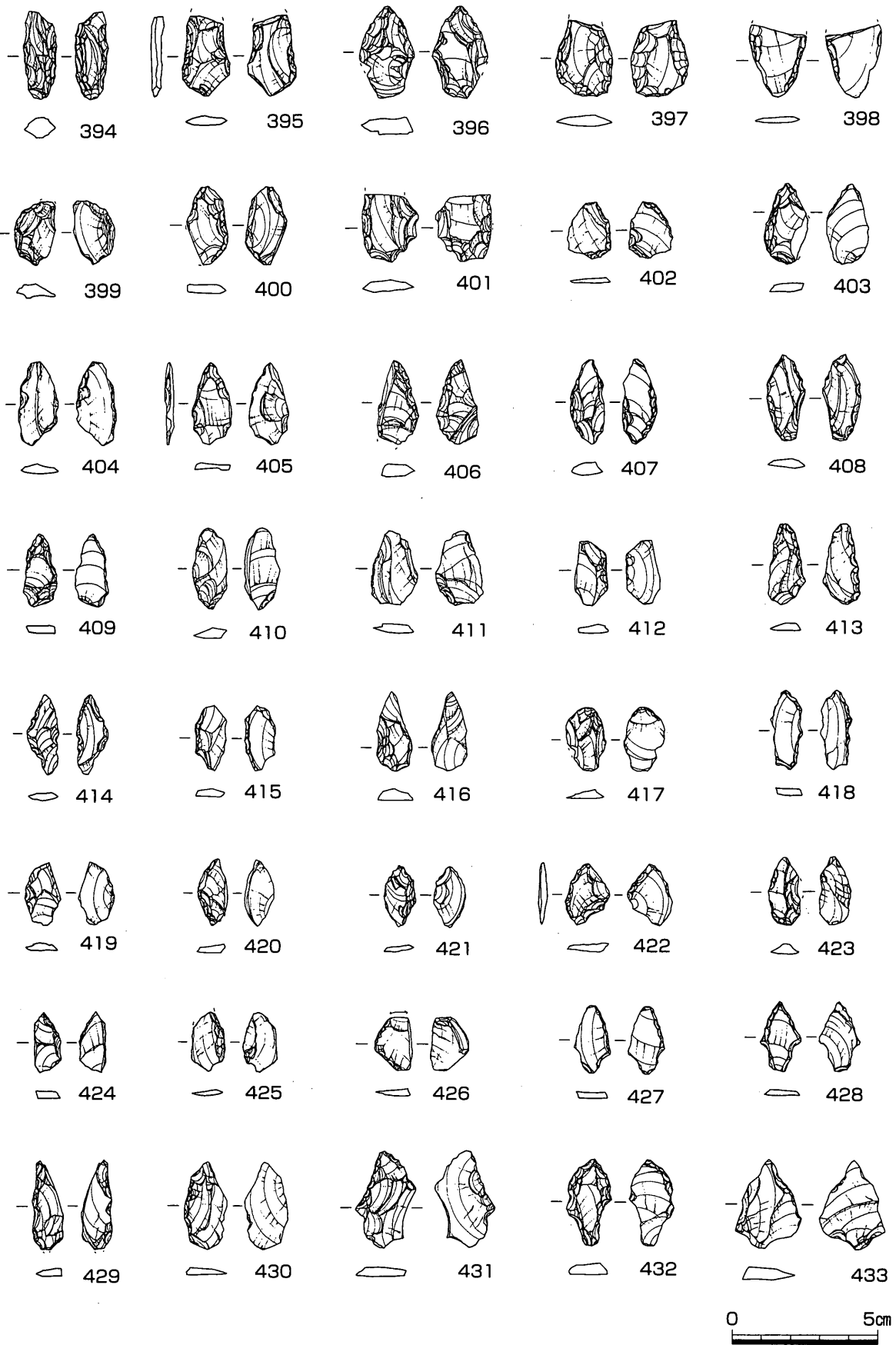
第243图 V区第2面SH01出土遗物 (9) (1/2)



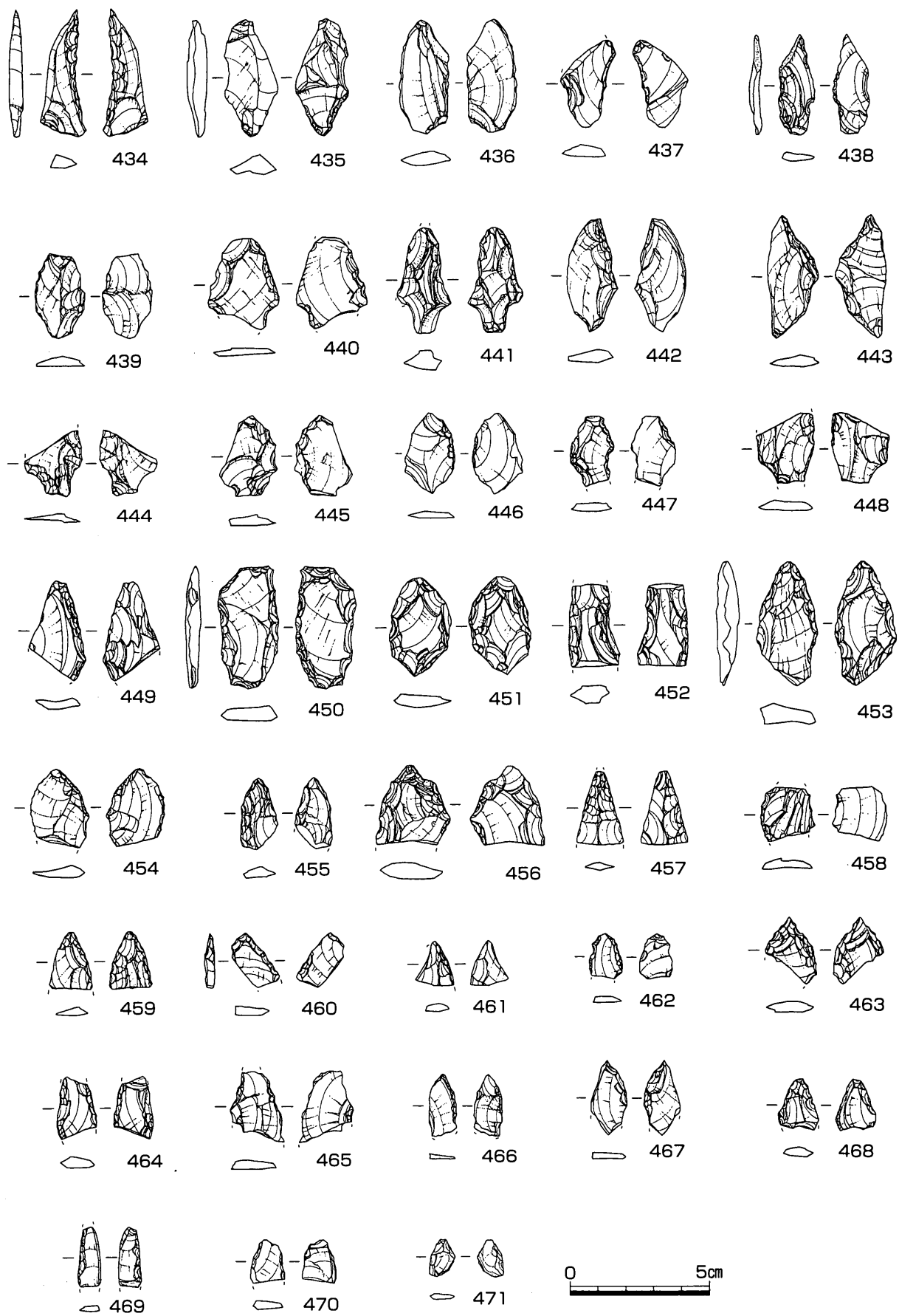
第244图 V区第2面SH01出土遗物 (10) (1/2)



第245图 V区第2面SH01出土遺物 (11) (1 / 2)



第246图 V区第2面SH01出土遗物 (12) (1/2)



第247图 V区第2面SH01出土遗物 (13) (1/2)

148・150～185・195は平基である。148・150・154・165・170は一応、平基にしたが微妙である。171のようなタイプは凸基のほうが良いかもしれない。152は鏃身に凹凸が残っている。155の鏃身は幅広で、主要剥離面を残している。158の先端付近の側縁部が突出している部分がある。170は片側の側縁部下部に未調整の部分があり、未製品かもしれない。184は未製品としたほうが良さそうである。185は基部が欠損したものを再加工している。

186～190・192～194・196～209・386は凸基である。189の鏃身は細長い。193の基部には一部に硬い自然面が残り、この部分を利用して凸基に仕上げているようだが、半分は欠損している。203・207～209は基部が欠損しているが、鏃身下部の形状から凸基になると判断したものである。205の基端部は鋭利に尖っている。209は先端部が丸みを帯び、あるいは石錐かもしれない。

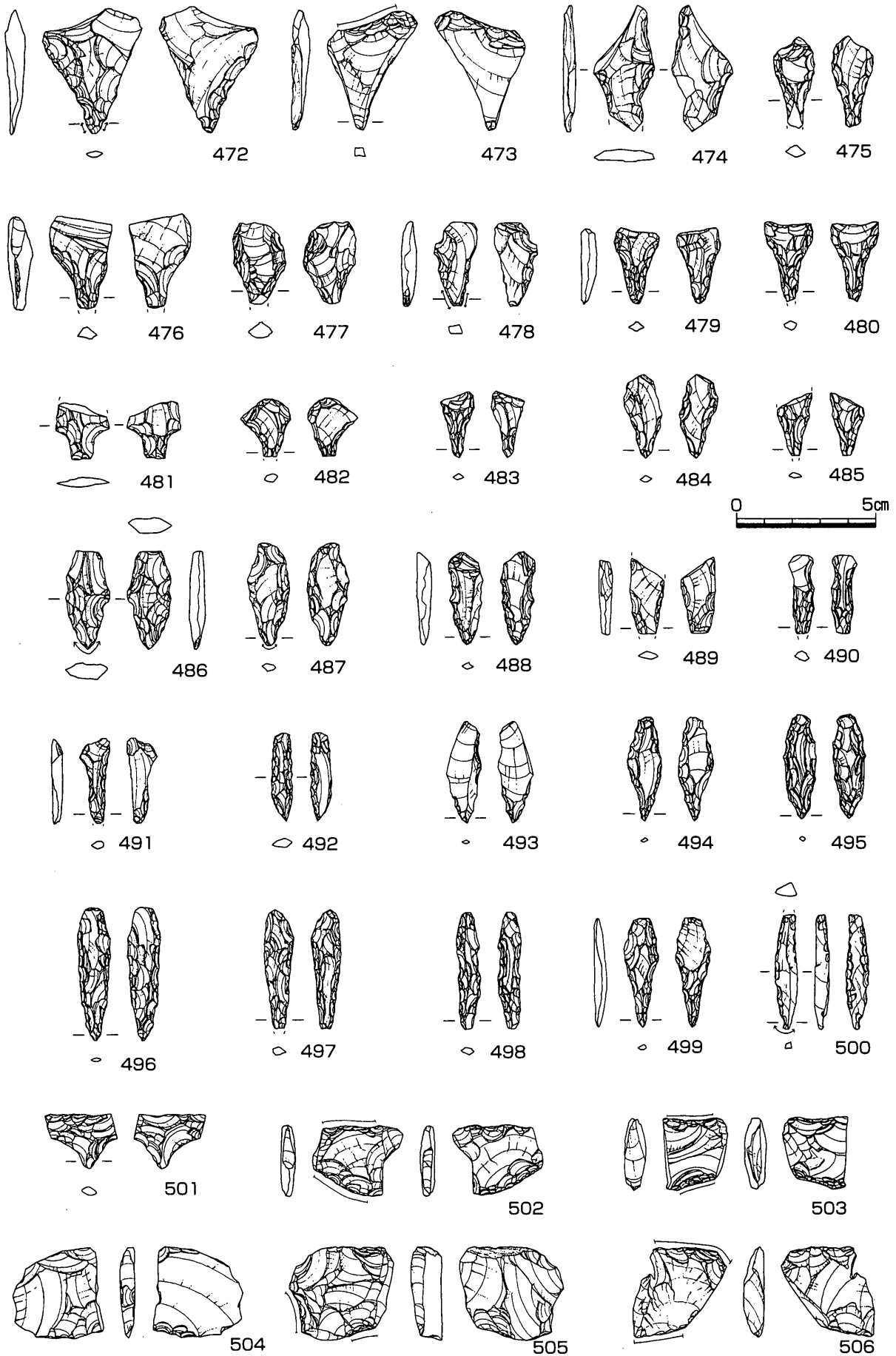
191・210～277は凸基有茎式である。219の鏃身下部は突出しているが左右不揃いである。229・264・268・270・272・275の茎部の作り出し部分はやや不明瞭である。234・236・237の鏃身は細長く、丁寧に加工している。239の基端部は不揃いであるが、茎部の作り出しは鋭い。242の鏃身側縁部には細かく調整を施し、鋸歯状になっている。262の茎部は長く、鏃身とほぼ同じ長さである。

278～303は基部および鏃身の下半が欠損しているものである。281～283は凸基になる可能性が高い。

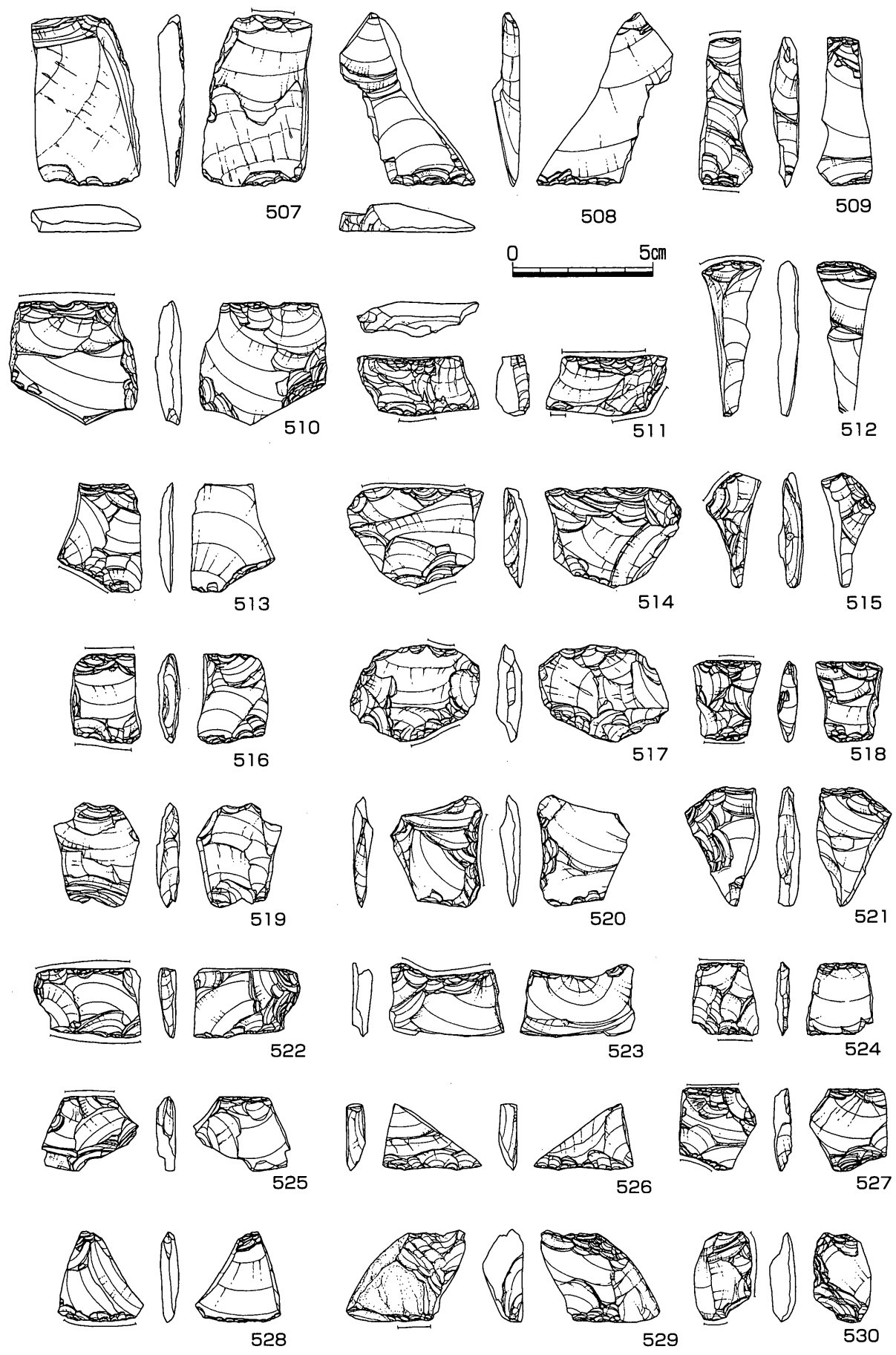
184・304～306・308～321・323～385・387～471は石鏃の未製品である。304～306・308～321は凹基の石鏃になると考えられる。304は基部と鏃身下半部は仕上げているが、上半部の加工途中で折れたため放棄したものであろう。309は先端部の形状をまだ整えていない。323～338・340～378・392は平基の石鏃になって行くと考えられる。326の先端部には僅かに研磨痕が認められる。327は片側の側縁部と先端部の形を整えた段階である。基部の大きく突出している箇所は今後、除去する予定であったと考えられる。333・341は製品に近いが、側縁部の調整が完全ではない。352・355・361・363・366・369・373～378は剥片の一部に僅かに調整を加えただけの段階で、素材剥片の形状を残している。379～385・387～391・393～426は凸基の石鏃になって行くものと考えられる。380は基部以外の調整は終わっている。387は側縁部一部に調整を行っているが、素材剥片の表面は凹凸があり、石鏃の素材にはあまり向いていない。394は先端部の形状をまだ整えていない。396は側縁部と基部の調整が不十分である。製品と考えても良いかもしれない。410～412・415・417～419・421・424・425は剥片の一部に僅かに調整を加えただけの段階で、素材剥片の形状を残している。426の先端部には弱い研磨痕が認められる。339・427～433・435～448は凸基有茎式になると考えられる。430は凸基になるのかもしれない。438の先端部付近の側縁部にはまだ自然面が残っている。441は製品に近いが、側縁部の調整が不十分である。443はあるいは有茎式にならないかもしれない。446は素材剥片の形状を残している。有茎式にならないかもしれない。434・449～471は製品の形態が不明なものである。450の基部は凸基になるのか凸基有茎式になるのか不明である。先端部の形状はまだ整えていない。463・464は製品の可能性がある。

472～501は石錐である。472・473は逆三角形の先端部を錐部にしてしている。481は凸基有茎式の石鏃の茎部に似ているが、角度のある、抉るような剥離で作り出していることから石錐と考えた。493は素材剥片の先端部だけを加工して石錐にしてしている。495～498・500はつまみ部と錐部の境が不明瞭である。501は横長のつまみ部を持っている。472・478・486・487・500の錐部には摩滅痕がある。

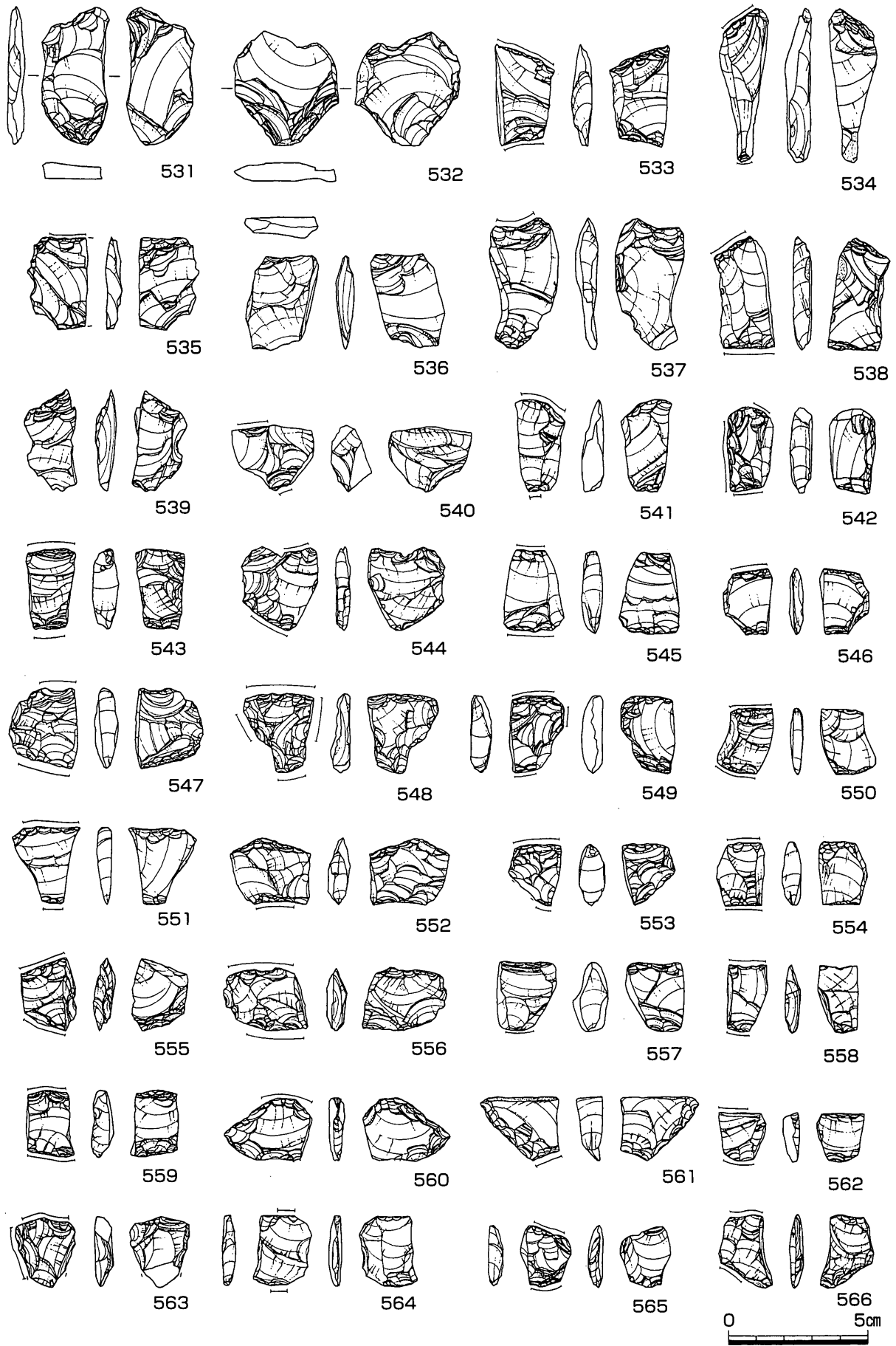
502～573は楔形石器である。504・521・531・532・536・539・570は敲打痕が認められない。509・566は截断面に両極打撃の痕跡が認められる。519は敲打痕は認められないが、下部は打撃時の振動により段状に剥がれ落ちている。529・573は片面に自然面を残している。532は下部の突出した部分は自然面になって



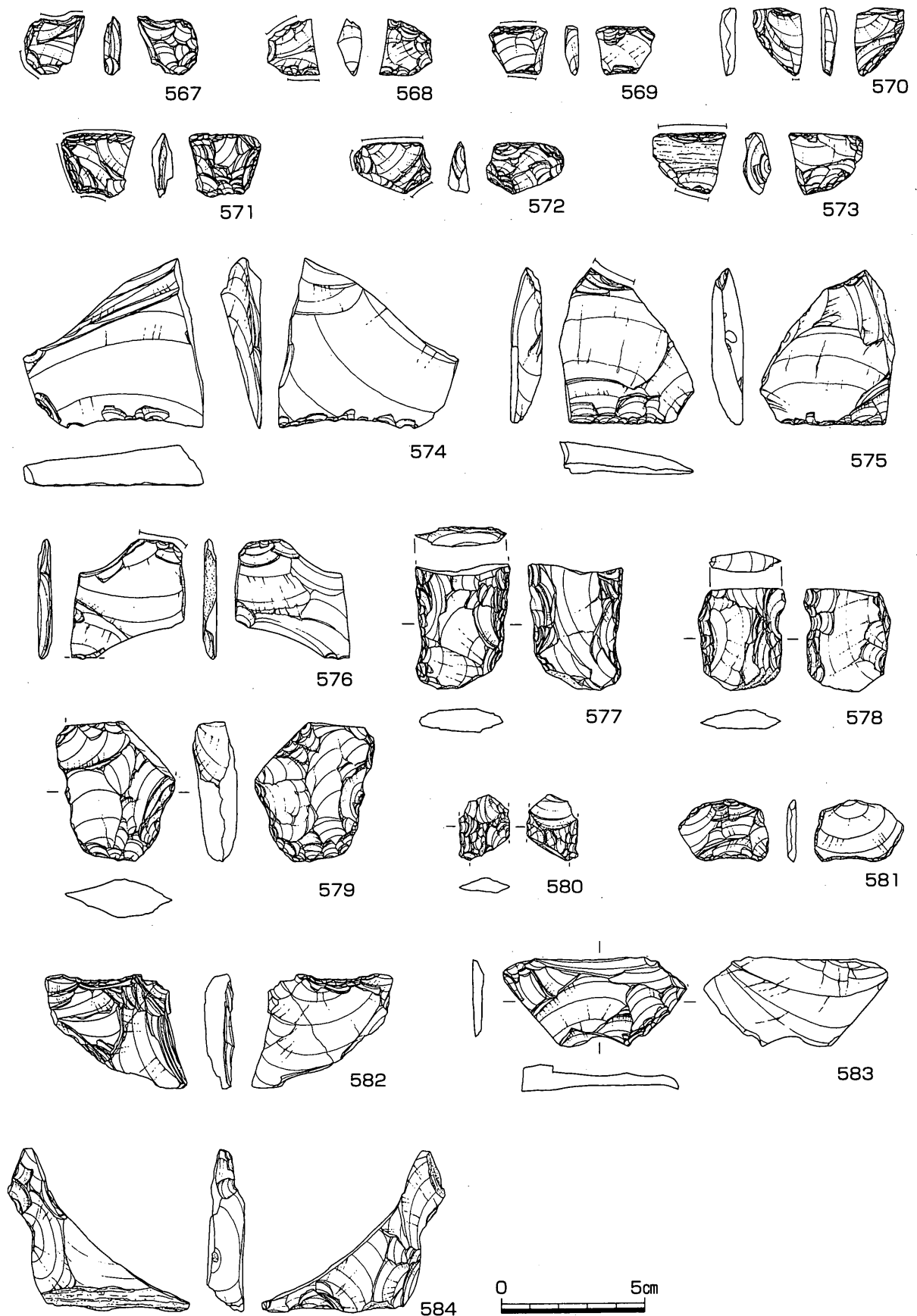
第248图 V区第2面SH01出土遺物 (14) (1/2)



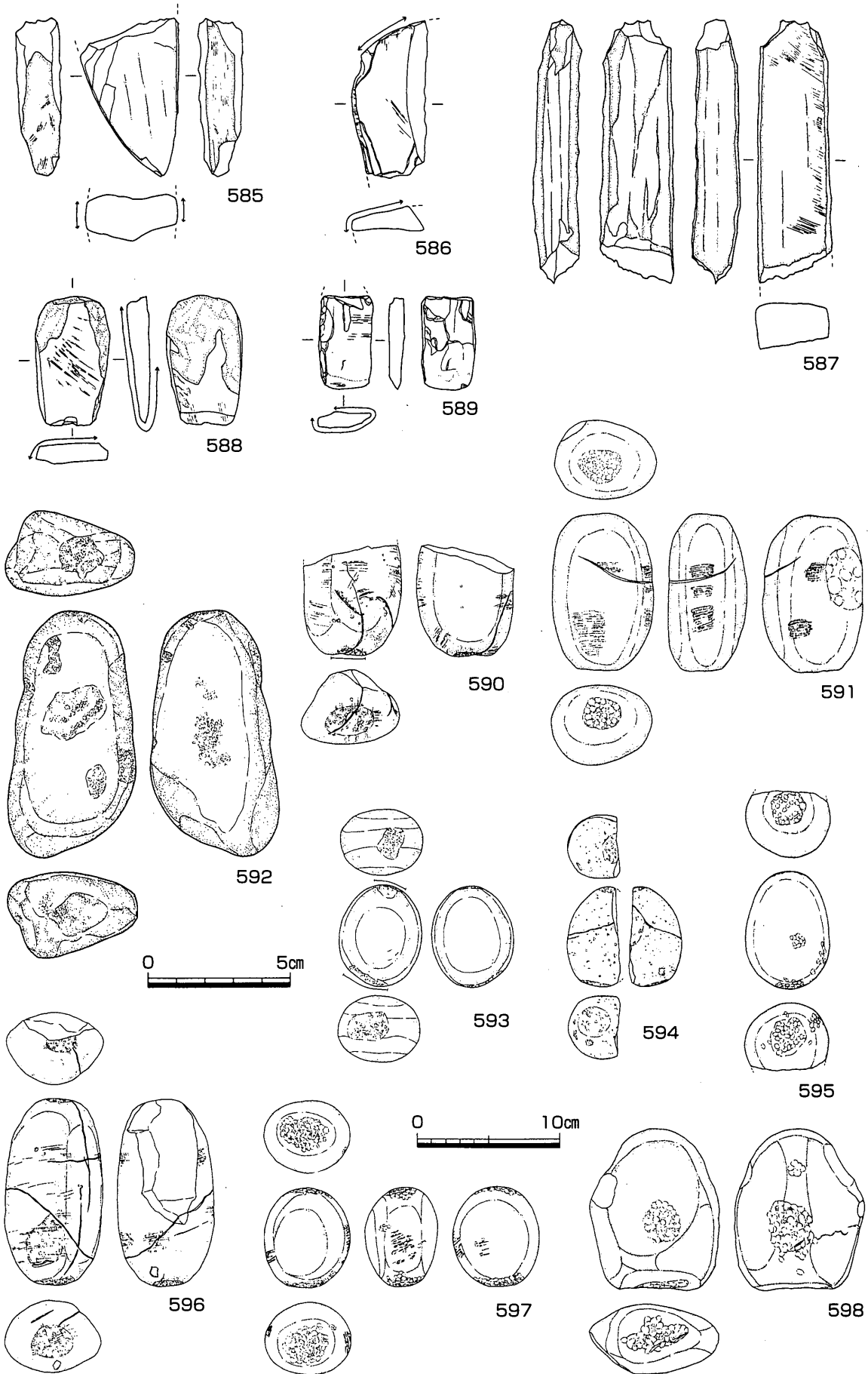
第249图 V区第2面SH01出土遺物 (15) (1 / 2)



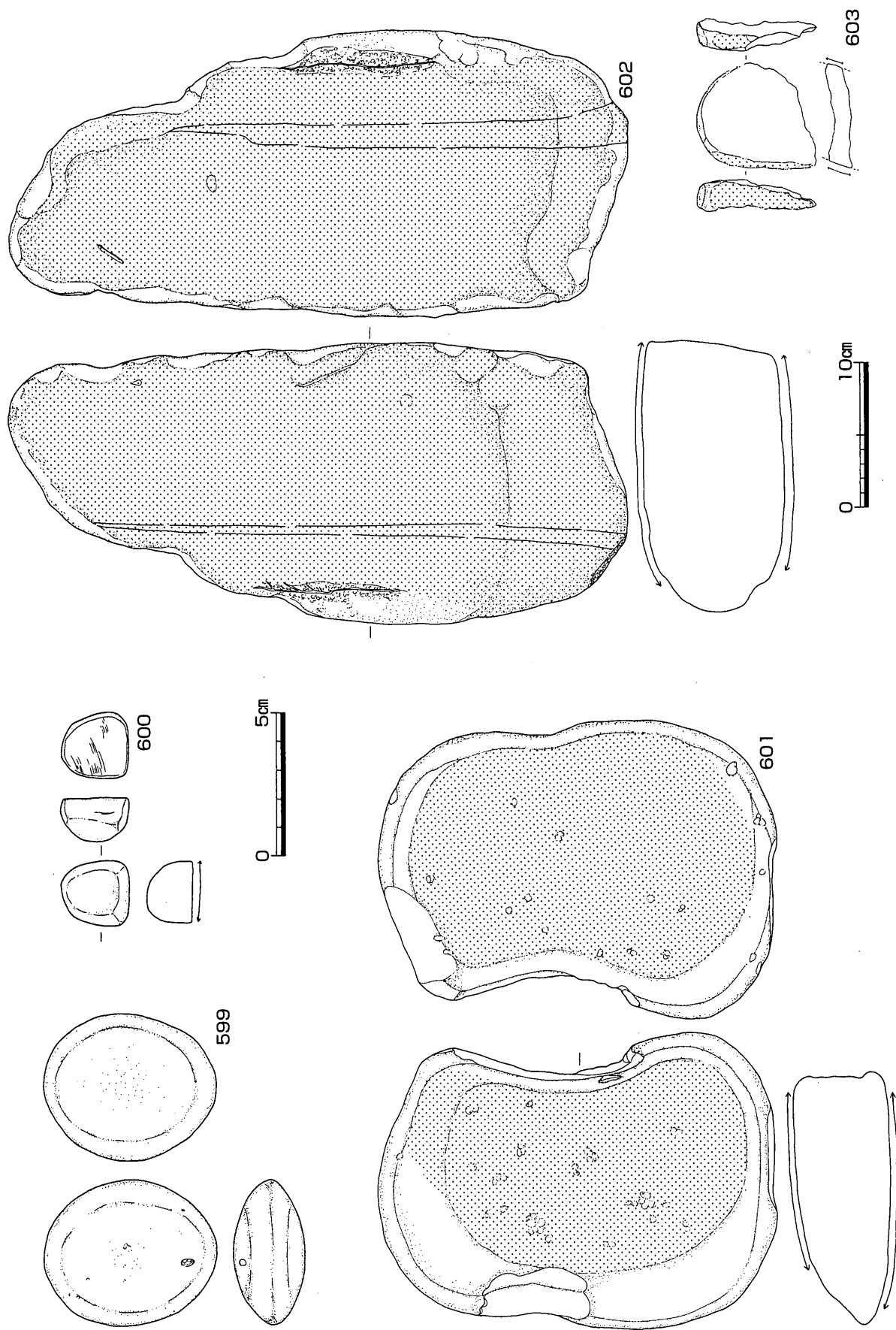
第250图 V区第2面SH01出土遗物 (16) (1/2)



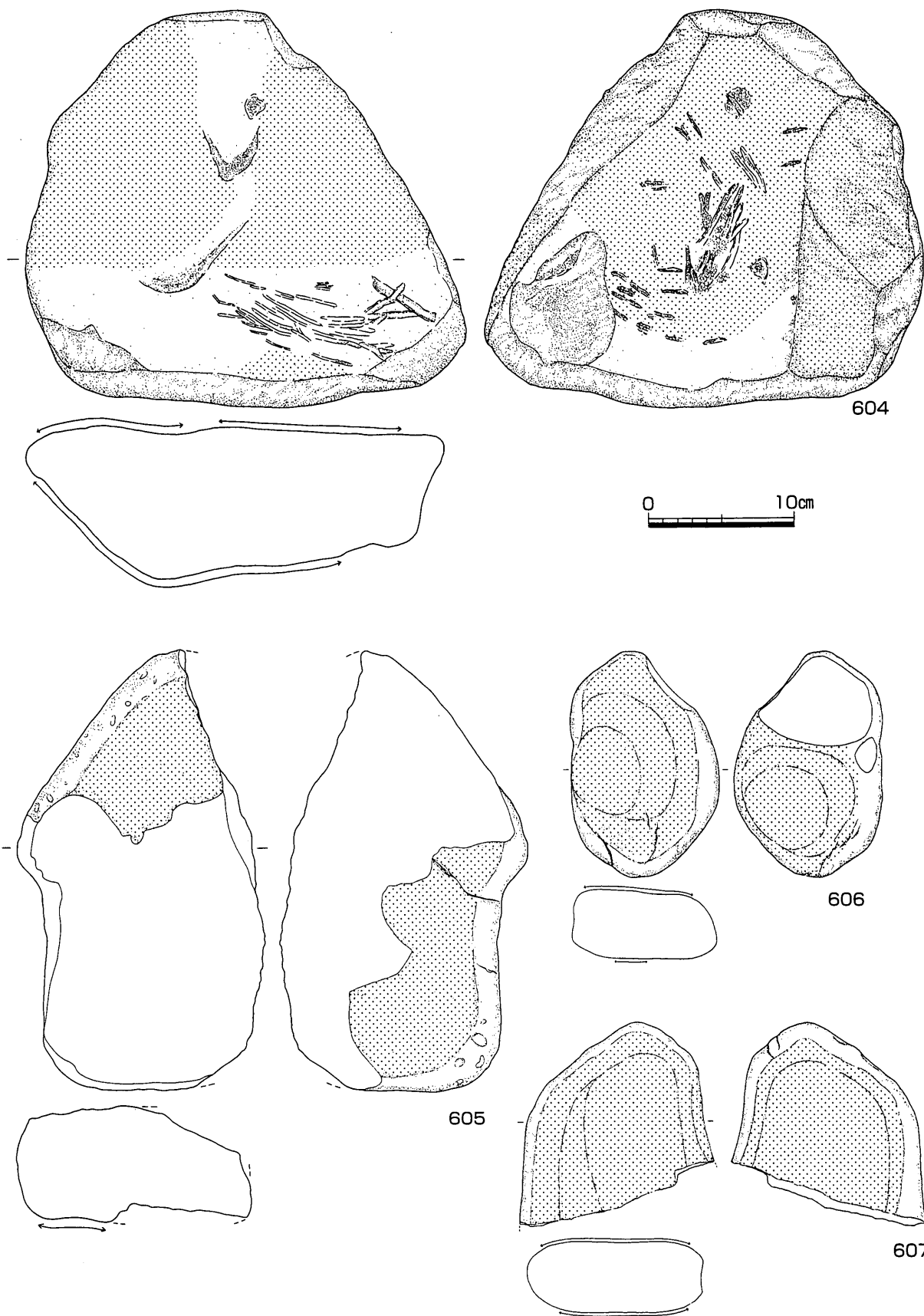
第251图 V区第2面SH01出土遺物 (17) (1/2)



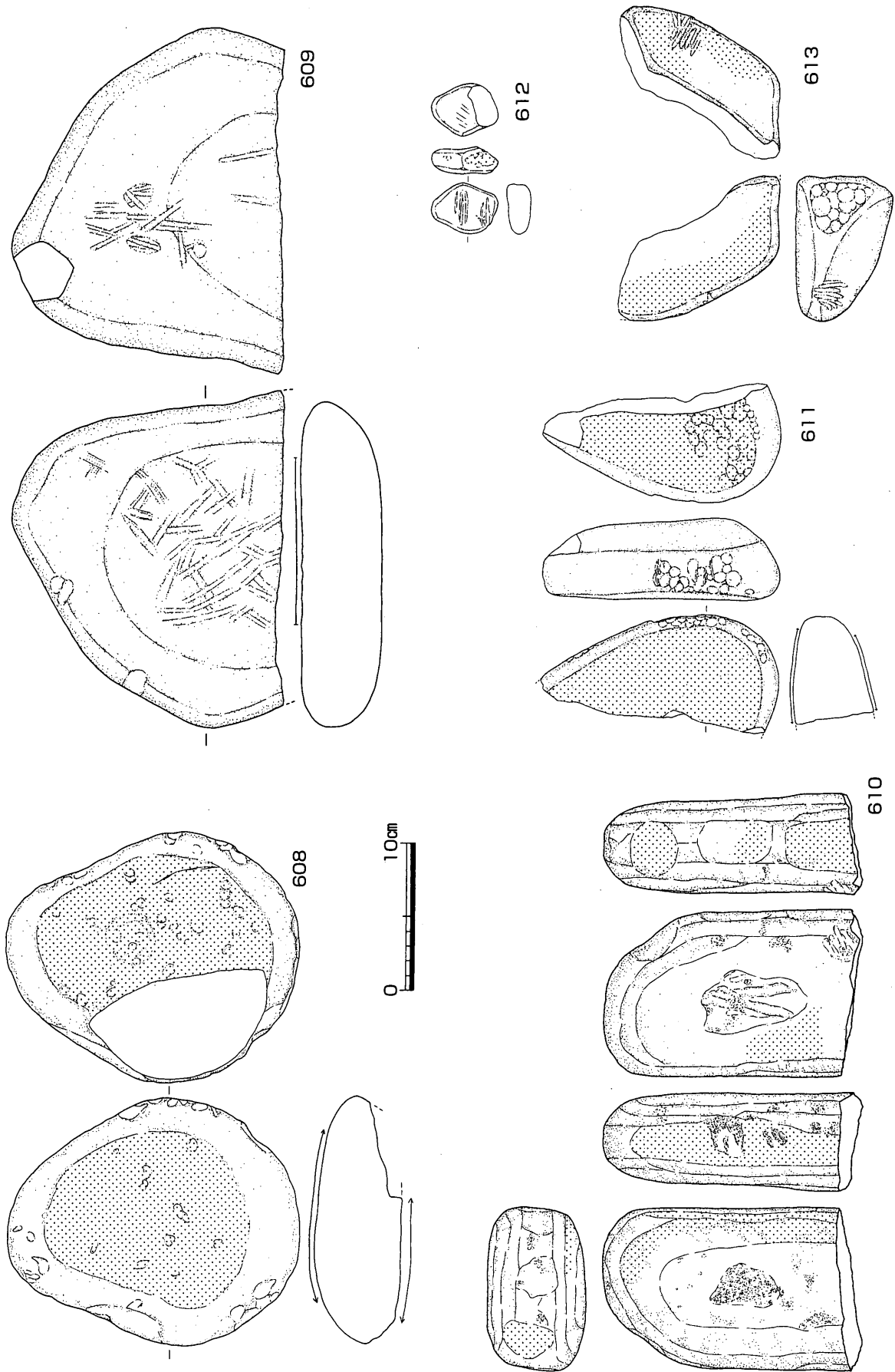
第252图 V区第2面SH01出土遺物 (18) (1/2、1/4)



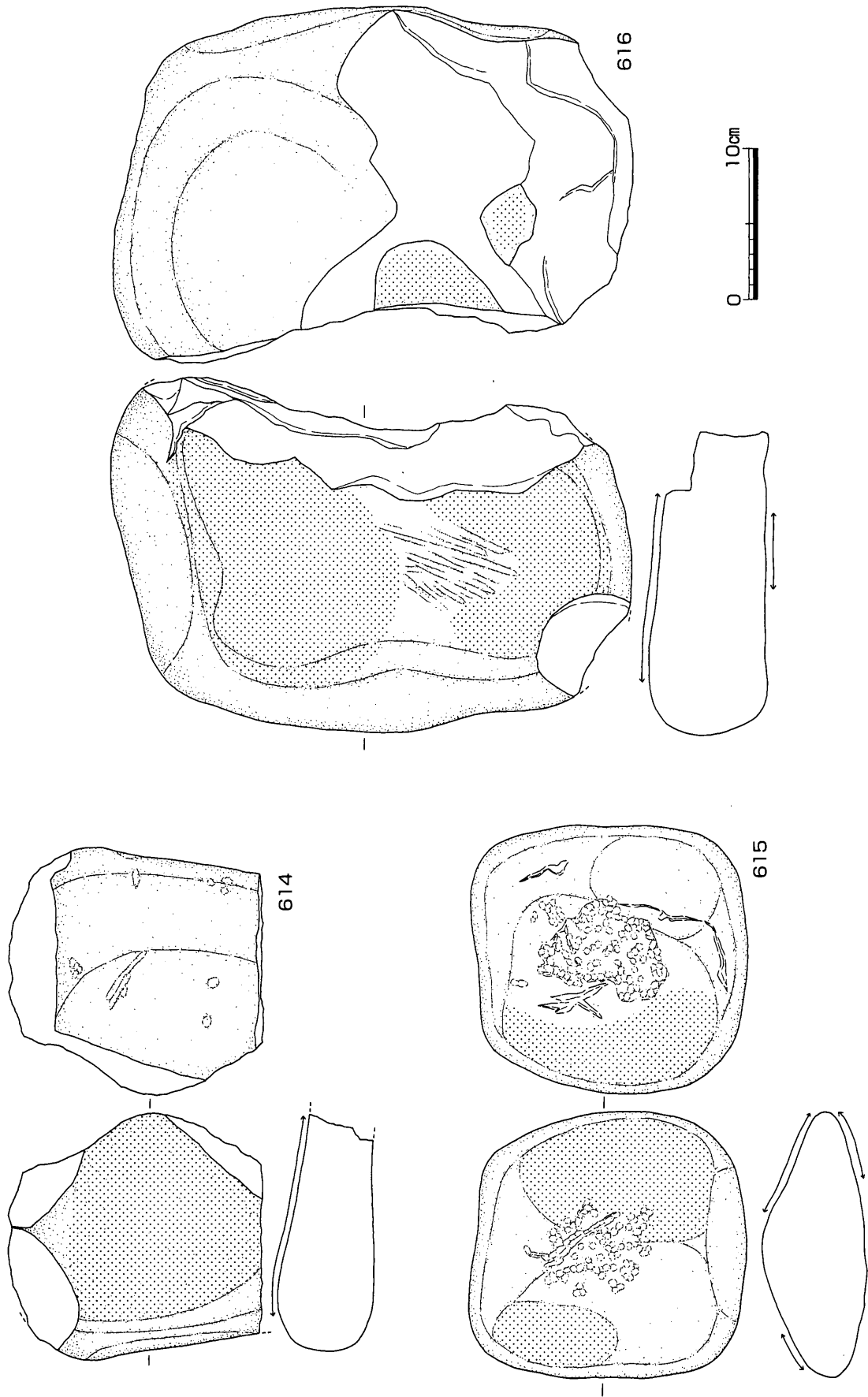
第253图 V区第2面SH01出土遺物 (19) (1/2、1/4)



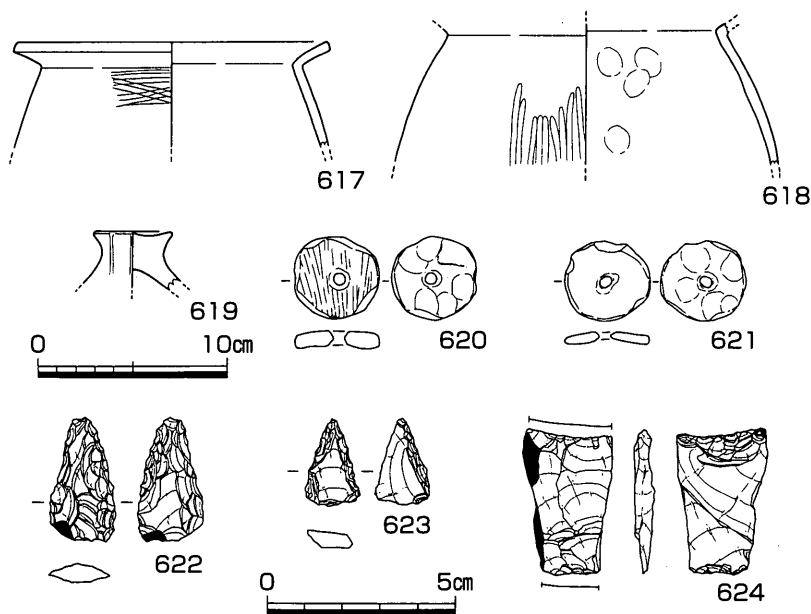
第254图 V区第2面SH01出土遺物 (20) (1 / 4)



第255图 V区第2面SH01出土遗物 (21) (1/4)



第256图 V区第2面SH01出土遺物(22)(1/4)



第257図 V区第2面SH01 (古) 出土遺物 (1 / 4、1 / 2)

いる。敲打痕は認められないが、特に下半の縁辺部が細かく剥がれ落ちた剥離面が多くあることから、楔形石器と考えたものである。548は4側縁に敲打痕があり、方向を変えながら打撃を行っていたことが分かる。

574～576はスクレイパーである。574の刃部への調整は少なく、素材の鋭い縁辺を利用している。575は刃部に丁寧に調整を加えている。

577～580は石槍である

が、578～579は欠損した未製品である。

584は横長剥片石核の欠損したものと考えられる。

585～587は柱状片刃石斧、588・589は扁平片刃石斧でいずれも結晶片岩製である。585は両側が割れている。587は刃部・基部とも欠損している。扱いは認められない。588は基部の上半部を中心に研磨されていない。

590～598は敲石である。591は上下両端を使用している。また中央部分の各面に見られる擦痕状のものは、実際に手に握った部分に相当するため、使用時の手擦れの痕跡と考えられる。598は下部の敲打部分は窪んでいるが不明瞭で、あるいは自然の窪みかもしれない。表裏中央部分には明瞭な敲打痕がある。凹石に分類したほうが良いかもしれない。砂岩製である。

599・600は安山岩製の磨石である。600の片面は使用により平らになっている。

601～608は砥石である。602は両面とも使用しているが、両面ともに帯状に研磨痕が続いている。604は筋状の痕跡が多いが、これは比較的新しい段階の傷である。

609～616は台石である。いずれもこの石の上で打撃を伴う作業を行った痕跡が認められる。また611・613～616は砥石としても使用している。612は小形である。614は被熱のため赤変している箇所がある。

以上のように多量の石器、石器未製品、剥片、碎片が出土していることから住居内で石器を製作していることが分かる。器種としては石鏃の製作を主として行っている。72点とこれも多い出土となった楔形石器は、石鏃の素材を得るための石核と考えられる。台石の上で敲石を使用して楔形石器を打撃して素材剥片を得ていたと考えられる。また石錐は、石庖丁が出土していないため、未製品を含めて出土した土製紡錘車に穿孔する道具として使用していたと考えられる。

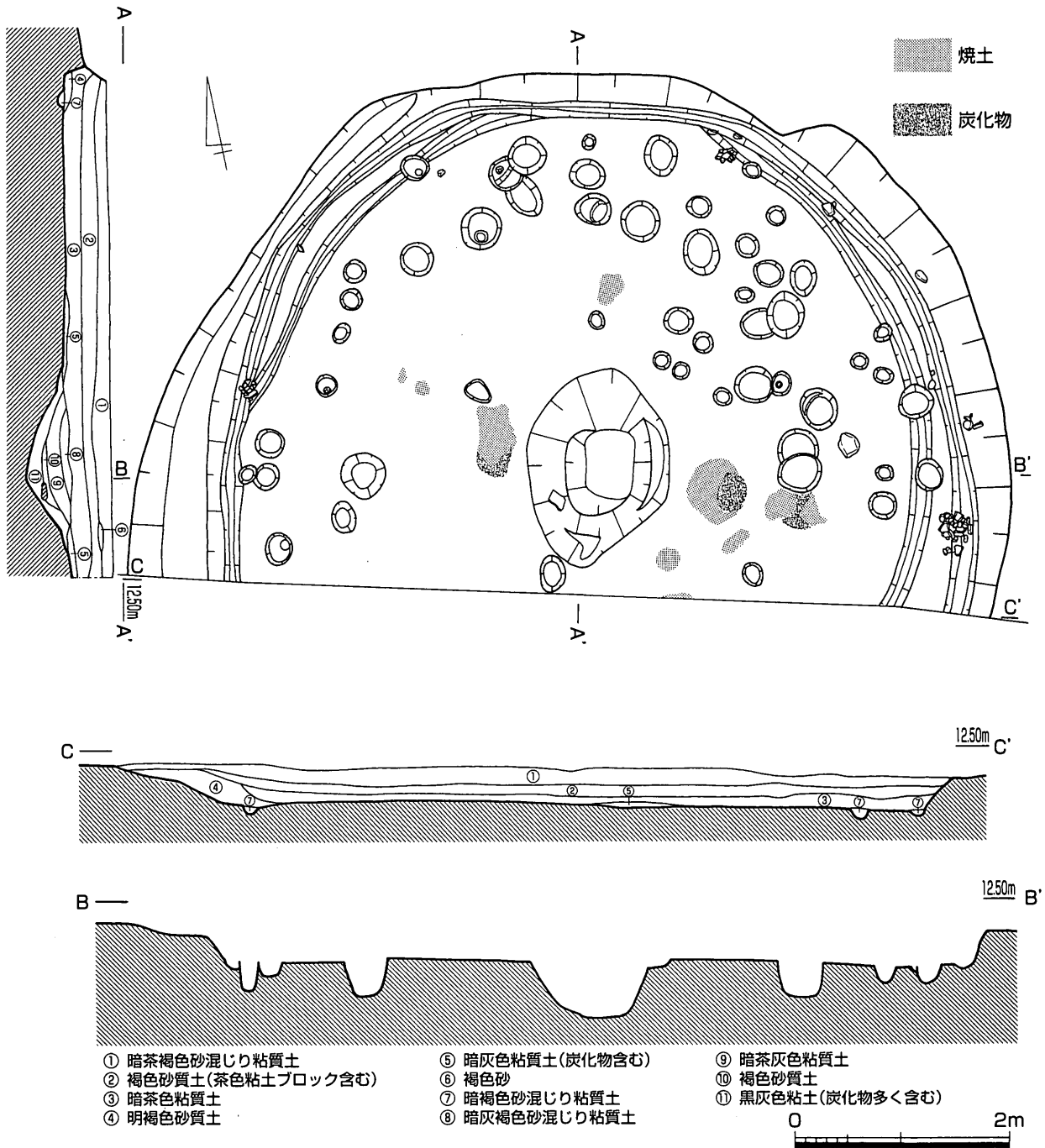
出土遺物から、SH01は古段階・新段階を含めて弥生時代中期中葉の所産である。

なお、617～624は南東部分で外側に突出した部分で出土した遺物である。617・618は甕である。617は体部外面にハケ目を、618はヘラミガキを施している。619は蓋である。620・621は紡錘車である。622は

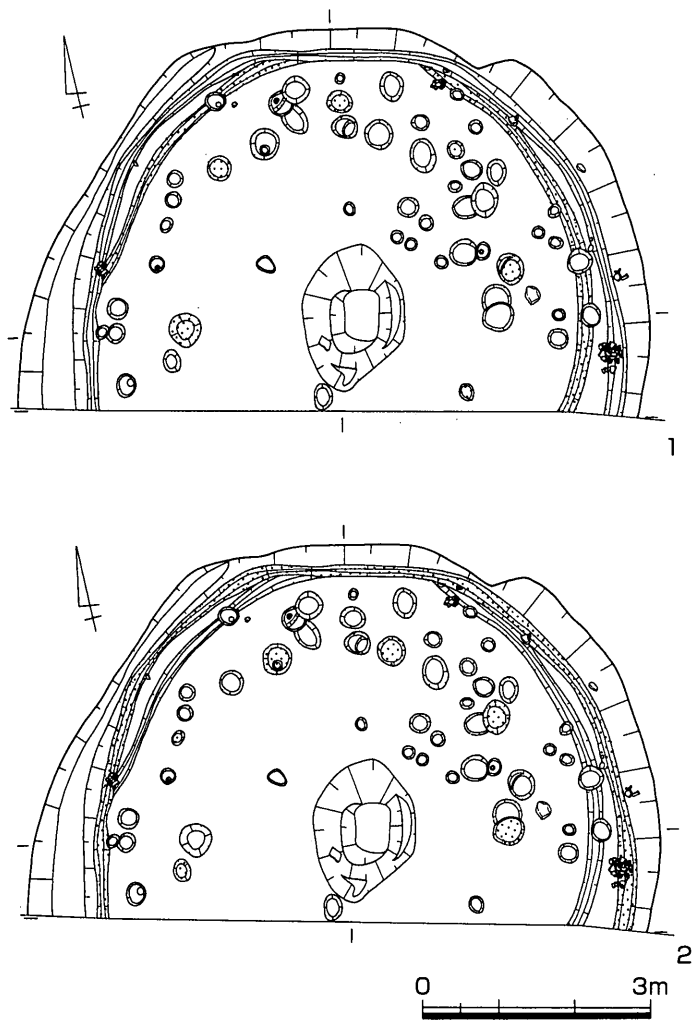
平基の石鏃、623は平基の石鏃の未製品である。624は楔形石器である。

SH02 (第258~264図)

調査区の南壁際中央部分の、旧G3区で検出した竪穴住居である。住居の南側1/3ほどが調査区外になっている。また北東部をSK26とSX02-D02によって壊されている。SK26の掘り込みは床面まで達していなかったため、SH02の床面は良好に残っていた。またSX02-D02も壁面を僅かに削る程度で



第258図 V区第2面SH02平・断面図 (1/60)



第259図 V区第2面SH02変遷図 (1/100)

あった。平面形は直径8.2mの円形である。床面に前後関係のある壁溝が2条巡っていることから、この竪穴住居は建て替えが行われていることが分かる。壁面の掘り込みは、北西～西側部分では段になりテラス状の部分形成している。他の部分では直線的に掘り込んでいる。検出面から床面までは30cm前後の深さがある。

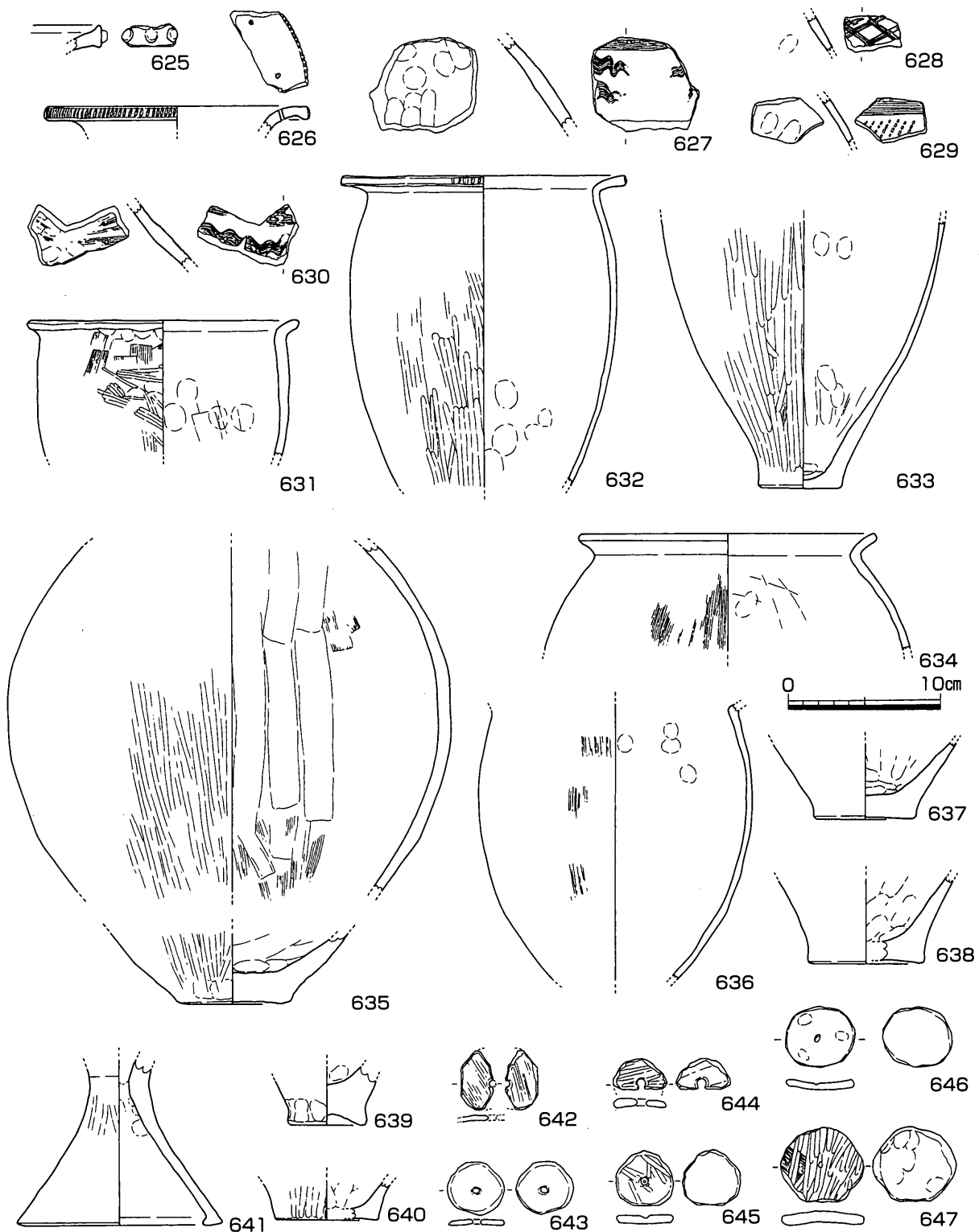
古い段階のものは直径6.2mの円を描く壁溝をもつ。壁溝は幅5～20cm、深さは10cm程度で、埋土は暗褐色砂混じり粘質土の単一層である。この古い段階の壁溝は北側と西側で、新しい段階の壁溝と重なっている。壁溝の内側0.5～1.0mのところ、直径4.5mの円周に乗る柱穴が6基ある。調査区外の部分にあと2基あると考えられ、全体の復元で8基の柱穴が巡り、主柱穴と考えられる。この主柱穴と壁溝との間隔は北側部分ほど狭くなっている。主柱穴は直径20～40cmの円形で、深さ

30cm前後である。埋土は暗褐色砂混じり粘質土の単一層である。

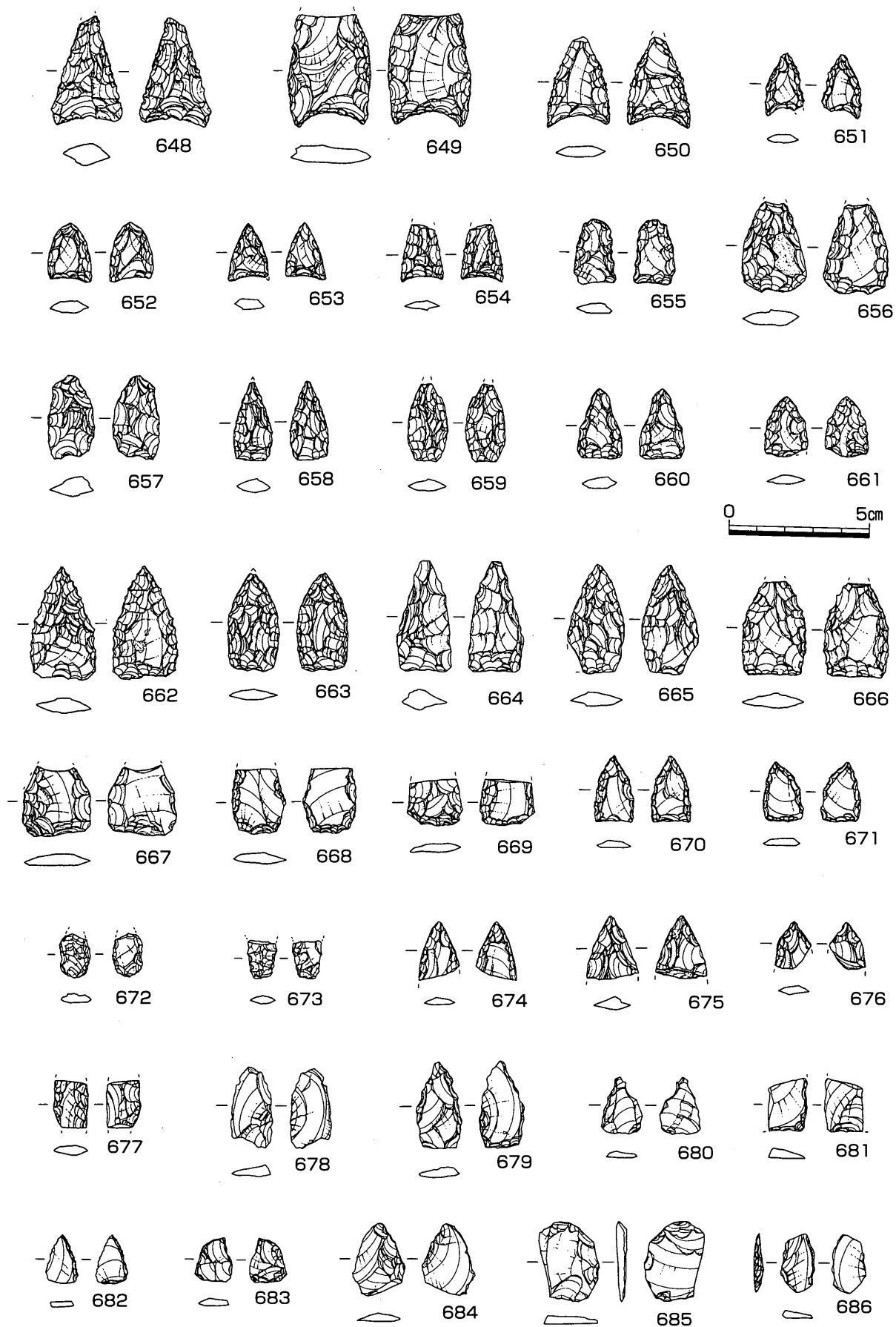
新しい段階のものは直径7.0mの円を描く壁溝をもつ。壁溝は幅5～25cm、深さは10cm程度で、埋土は暗褐色砂混じり粘質土の単一層である。この新しい段階の壁溝は住居の壁の下場に接している。この壁溝の内側0.6～1.2mのところ、直径4.6mの円周に乗る柱穴が6基あり、同様に調査区外の部分にあと2基あると考えられ、全体の復元で8基の柱穴が巡り、主柱穴と考えられる。東側の部分ほど主柱穴と壁溝の間隔が開いている。主柱穴は直径15～40cmの円形で、深さ30cm前後である。埋土は暗褐色砂混じり粘質土の単一層である。東側の2基の主柱穴は前後関係をもつ柱穴があり、この2基のみ柱の建て替えを行っているようである。

壁溝が新旧の2条あるのに対して、住居中央には土坑は1基である。土坑は平面形が楕円形であるが南東部分が直線的になっている。長径1.85m、短径1.35m、深さ45cmである。掘り込みは北側から西側にかけては緩やかであり、東側と南側は段になっている。土坑の下層には炭化物を多く含む黒灰色粘土が堆積していた。この土坑の東西部分の住居床面には炭化物が堆積しているとともに、焼けて赤変している部分がある。

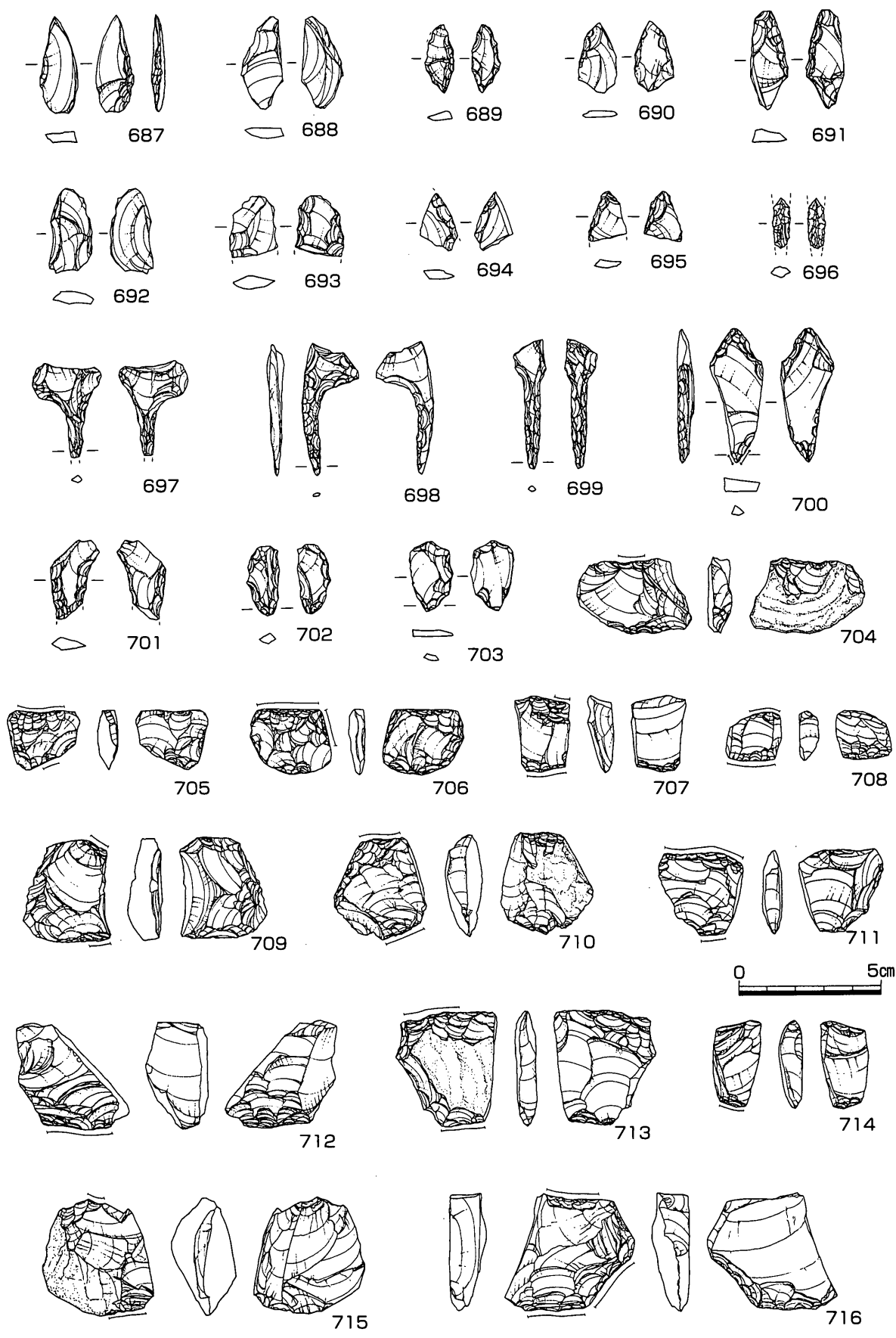
住居全体の埋土は暗茶～褐色系の粘質土、砂質土で、床面近くには炭化物が堆積している部分があ



第260图 V区第2面SH02出土遗物 (1) (1/4)



第261图 V区第2面SH02出土遗物(2)(1/2)



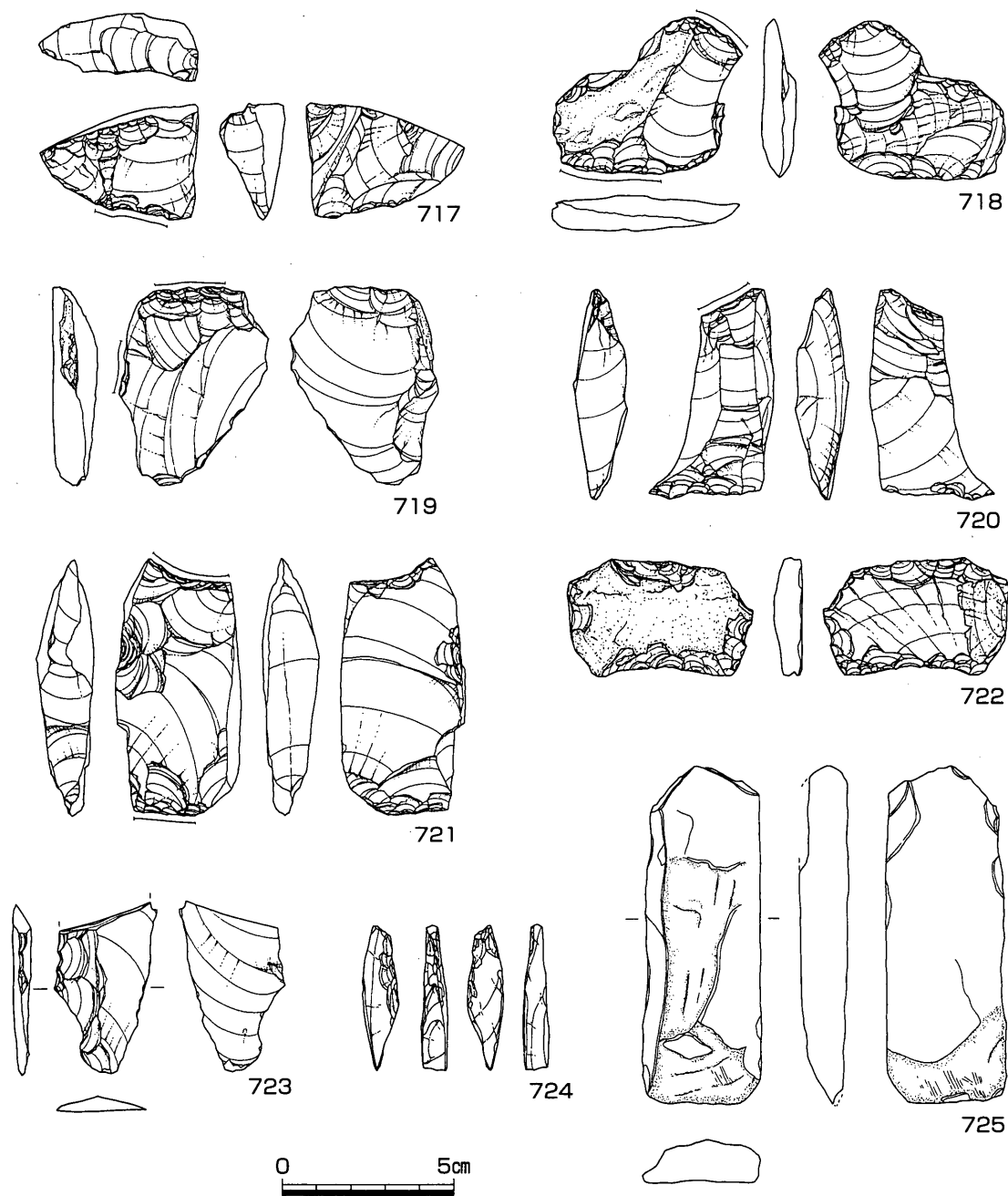
第262图 V区第2面SH02出土遗物 (3) (1/2)

る。埋土は水平に堆積しており大きな乱れはない。

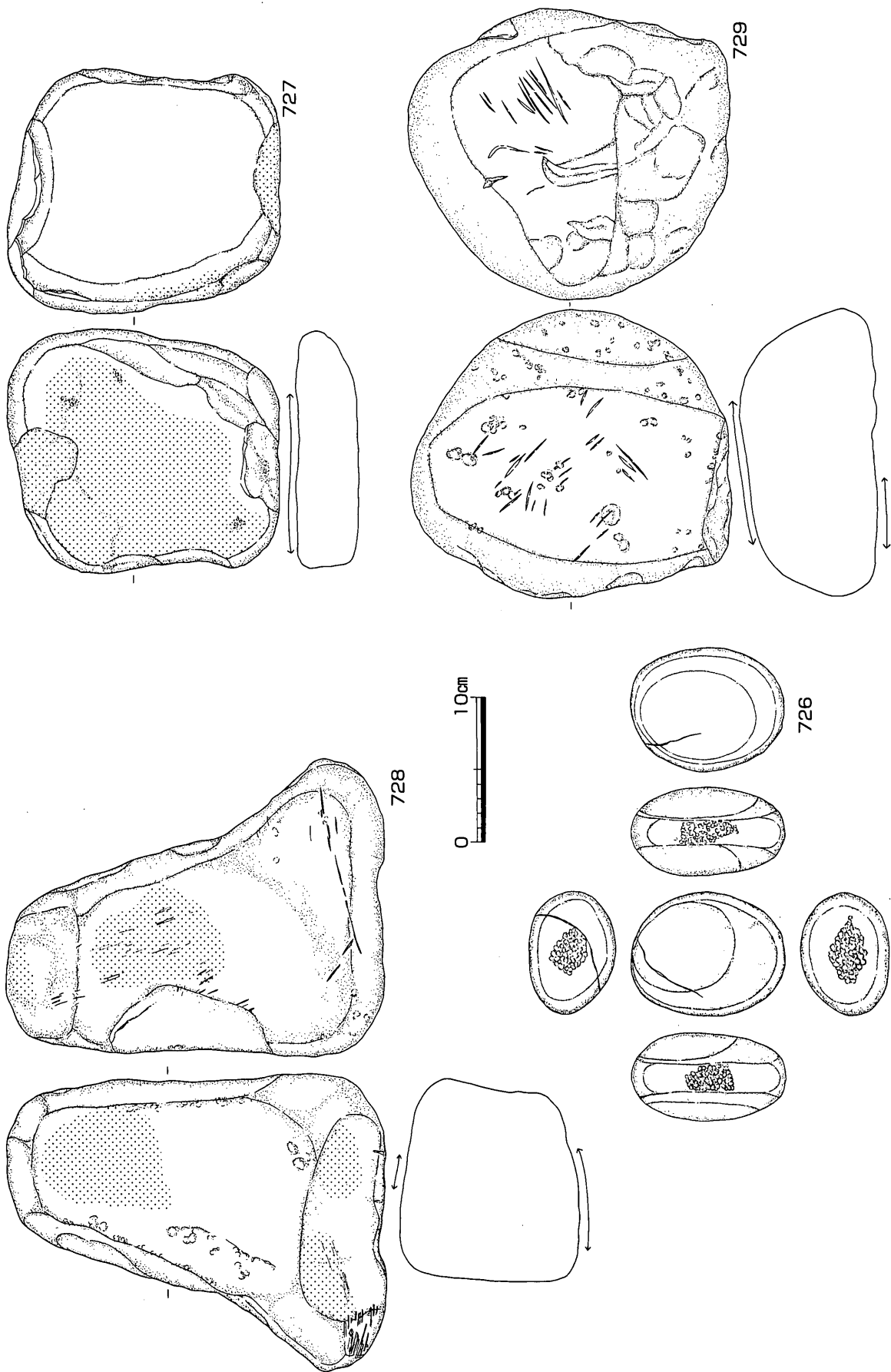
遺物は床面上に堆積している暗茶色粘質土層の上部を中心に出土している。土器・石器が出土しているが、土器に比べて石器のほうが出土量が多い。石器はサヌカイト製のものが大部分であるが、サヌカイトに似た黑色安山岩の使用が目立つ。

625～630は壺であるがいずれも細片である。625は口縁部端部外面に円形浮文を貼っている。626は外反して真横に開く口縁部の端部外面には刻み目を施している。穿孔が現存で2個ある。627・630は櫛描直線文と櫛描波状文がある。629は櫛描直線文の下に櫛描列点文を巡らせている。

631～634は甕である。631の口縁部は外反して端部を丸く収める如意形で、口縁部外面には指押さえが顕著である。体部外面にはハケ目の後にヘラミガキを加えている。632の口縁部は体部に比べると肥



第263図 V区第2面SH02出土遺物 (4) (1/2)



第264图 V区第2面SH02出土遺物 (5) (1 / 4)

厚している。端部には刻み目を施している。体部外面はハケ目の後にヘラミガキを加えている。633は体部外面にはヘラミガキを丁寧に施している。634の体部上半は膨らんでいる。

635～640は壺および甕の底部～体部である。635の体部と底部は直接は接合しなかったが同一個体と考えられるものである。体部最大径は中央にあり、外面にはヘラミガキを施し内面には広範囲に板ナデを施している。底部は突出している。639の底部は肥厚し上げ底である。

641は高杯の脚部で、直線的に開き端部は内側に拡張している。

642～647は紡錘車で、このうち645～647は穿孔途中の未製品である。

648～677は石鏃である。648～657は凹基である。649の基部は強く湾曲する。652・654の基部は不揃いである。656・657の基部の湾曲は弱い。658～671は平基である。659は鏃身の最大幅は中央にある。661・663・666は鏃身の下半部が直線的になっている。662の調整剥離は全体的に彫りが深く凹凸が目立つ。672は不明瞭だが凸基と考えられる。673は凸基有茎式の基部と考えられる。674～677は基部が欠損している。

678～695は石鏃の未製品である。678はほぼ素材剥片のままであるが、凹基になりそうである。680～685は平基になると考えられる。684も素材剥片の形状を残している。686～690は凸基になると考えられる。688は僅かに調整を施しただけで、素材剥片の形状を残している。689は調整はかなり進んでいるが、鏃身側縁部の片側がまだである。691は凸基有茎式になるものである。茎部の形は明瞭になってきている。

696～703は石錐である。696～699は細長い錐部をもつ。698の錐部は湾曲している。700の錐部には摩滅痕が認められる。702・703は石鏃に似るが端部に角度のある剥離を行って先端部を作り出していることから石錐に分類している。

704～721は楔形石器である。704の表側の大部分には自然面が残っている。706は上部とそれに交わる辺に敲打痕が認められる。710は表側に自然面が残り、710・712は両面共に両極打撃時の、剥がれるような剥離痕が顕著である。714・721は截断面に両極打撃の痕跡が認められる。716は回転させながら打撃を加え、截断した部分にもそこを上にして打撃を加え敲打痕を残している。

722はスクレイパーとしたが、打撃を加える前の楔形石器かもしれない。723は石鏃の未製品にしては大きすぎるので、刃器としたものである。724は楔形石器の残片を利用した小型方柱状片刃石斧である。鑿先のような形状である。刃部と下半部の側縁を研磨している。サヌカイト製である。725は結晶片岩製の扁平片刃石斧で、刃部には使用痕と考えられる擦痕が部分的に認められる。

726は敲石で、上下両端と両側面を使用している。727は砥石、728・729は楔形石器を分割する際に使用した台石と考えられ、線状の痕跡が残っている。728は砥石としても使用している。

SH02もサヌカイトの剥片・碎片が多量に出土している。また石核として使用したと考えられる楔形石器や石鏃の未製品が量的に出土していることから、SH01ほどではないが、住居内で石器を製作していたことが分かる。出土土器からSH02は弥生時代中期中葉の所産である。

SH03 (第265～267・276図)

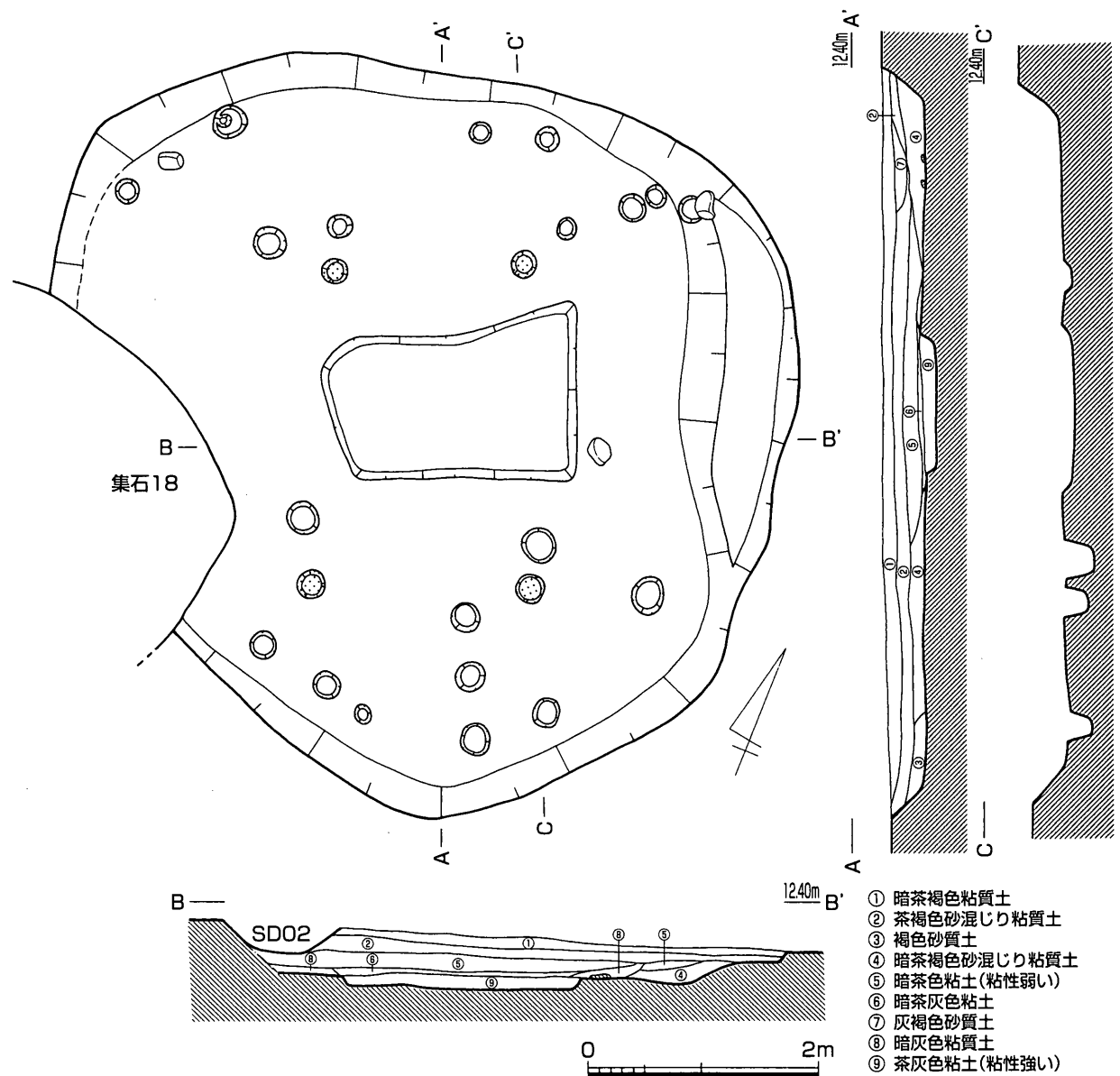
調査区の中央部分の南寄り、旧G 3区で検出した竪穴住居で、SH02の北側6mのところの位置している。南西部分をSX02-D02と集石18に壊されている。平面形は円形と方形の中間形態で、西側と南東側が突出気味である。円形とすれば直径6.5mになる。壁面の掘り込みは比較的緩やかである。また

北東部分は2段に掘り込まれ、テラス状の部分がある。検出面から床面までは35cmの深さがある。

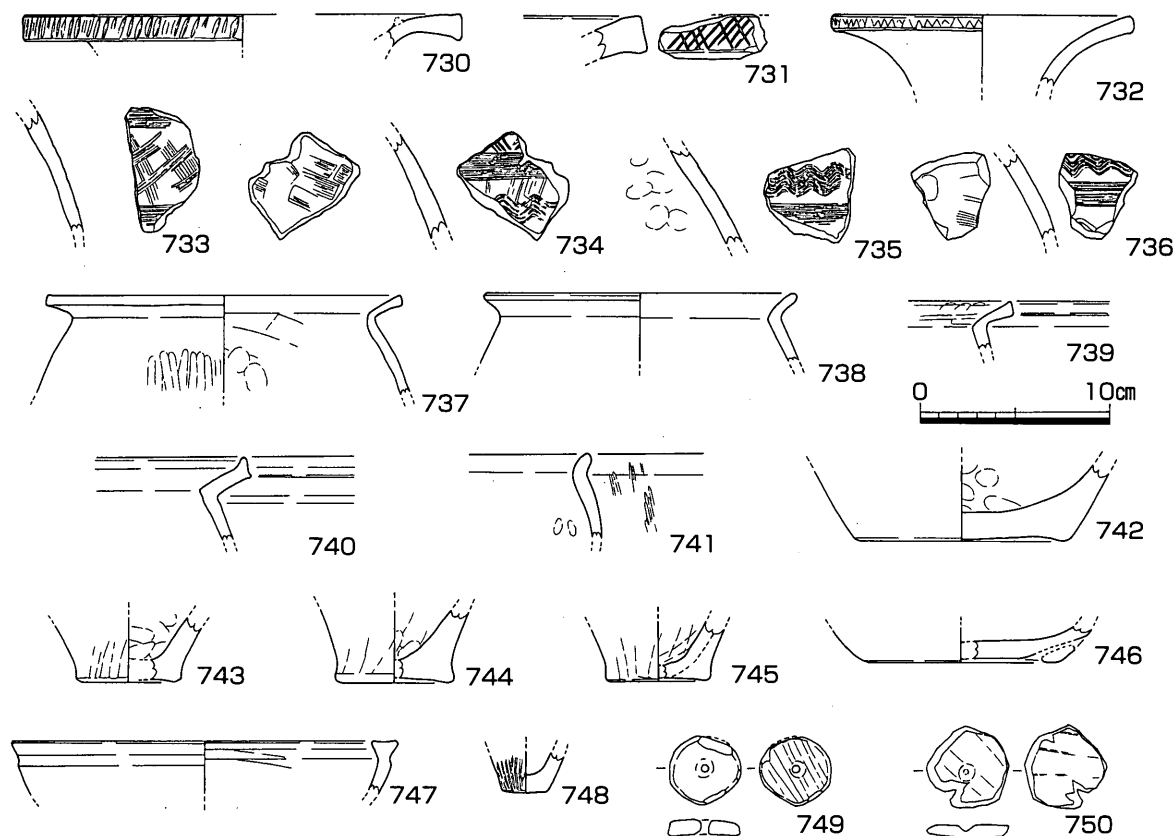
床面では壁溝は検出されなかった。中央部にはやや不整形であるが長方形の土坑がある。長辺2.2m、短辺1.2~1.5m、深さ10cmである。土坑の底部は平坦で浅い。埋土は粘性の強い茶灰色粘土の単一層である。この土坑を挟んで、土坑の方向に合う東西、南北方向の4基の柱穴が主柱穴と考えられる。柱間は東西が1.7~1.9mで南側のほうが若干広がっている。南北は2.8mである。東西方向の南側の2基の柱穴のすぐ北側にそれぞれ柱穴があり、この柱穴のほうが主柱穴になる可能性もあるが、この2基の柱穴を想定すると西側の南北方向の柱がより大きくずれるため、当初の柱穴を主柱穴と考える。土坑の北側の部分の住居の床面が2箇所焼けていたが、範囲は狭い。

住居全体の埋土は上半は暗茶褐色~茶褐色粘質土が中心であるが、下半は粘性の強い暗茶色粘土が主となる。また土坑の上面には暗茶灰色粘土が堆積している。これらの層は基本的に水平に堆積している。

遺物は住居の埋土の中ほどで多く出土しているが、全体的に細片が多い。



第265図 V区第2面SH03平・断面図(1/60)



第266図 V区第2面SH03出土遺物(1)(1/4)

730~736は壺である。730は口縁部内面に突帯が1条巡っている。端部外面には刻み目を施している。732の口縁部は外反し、端部外面には鋸歯文が巡っている。733~736は壺の体部の破片である。いずれも外面に櫛描による文様を加えている。

737~741は甕である。737の口縁部屈曲部の内面は丸みを帯びている。体部外面にはヘラミガキを施している。740は口縁部端部を上方に拡張し、端部外面を強くナデている。741の口縁部は短く体部から僅かに屈曲する程度で、端部は丸く収めている。体部外面にはヘラミガキを施している。

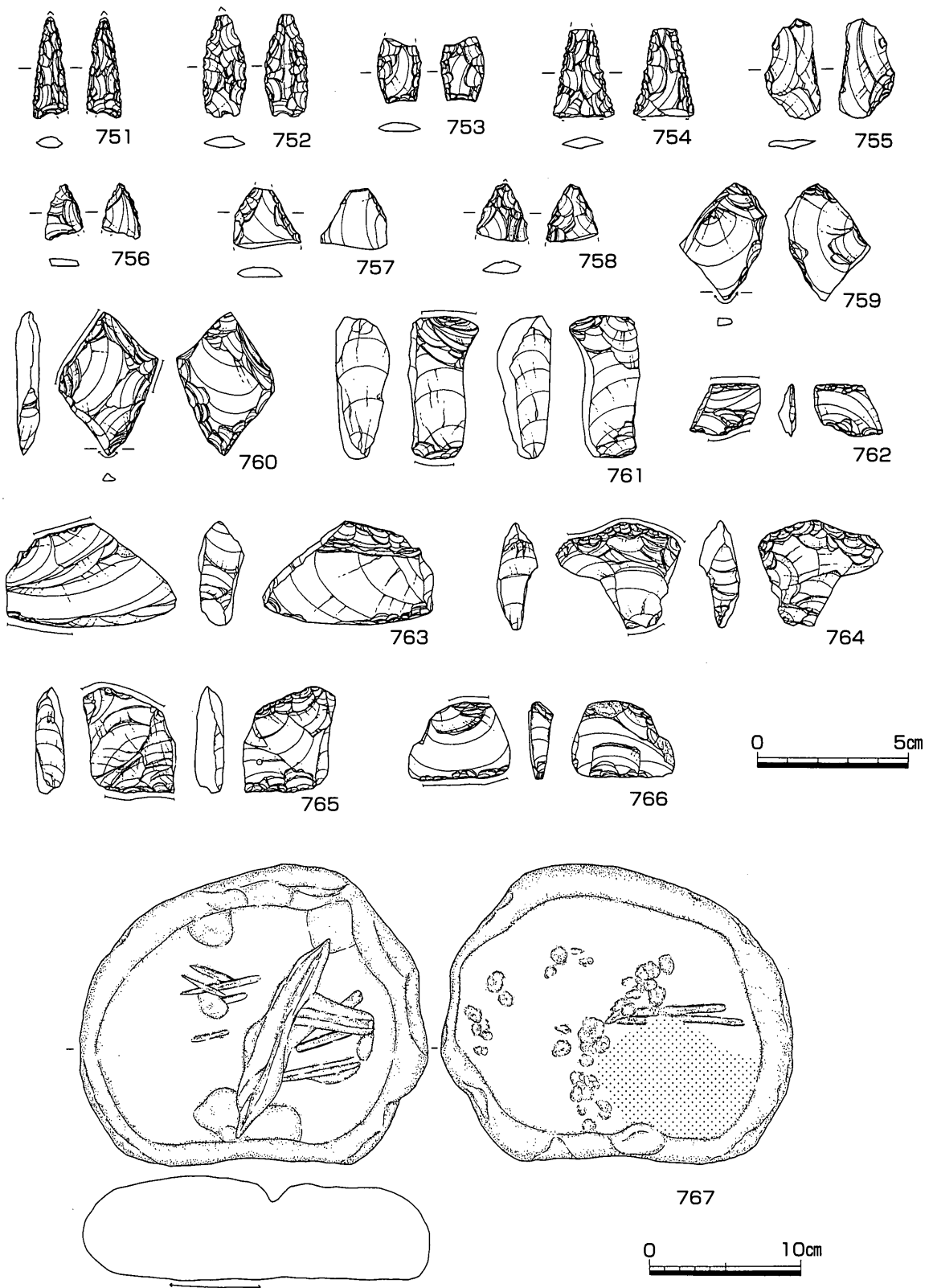
742~746は壺および甕の底部である。743はSH03の下部で検出した後述するSH05との境部分での微妙な位置からの出土である。ここで報告したが、あるいはSH05のものかもしれない。746は幅広の底部の側面から底部に向かって斜めに穿孔が施されている。

747は鉢でその形態から台部が付く可能性が高い。口縁部は端部を内・外面に向かって拡張し、上面を強くナデている。748はミニチュア土器で外面には櫛状工具で調整している。749は紡錘車、750は紡錘車の未製品で穿孔途中である。

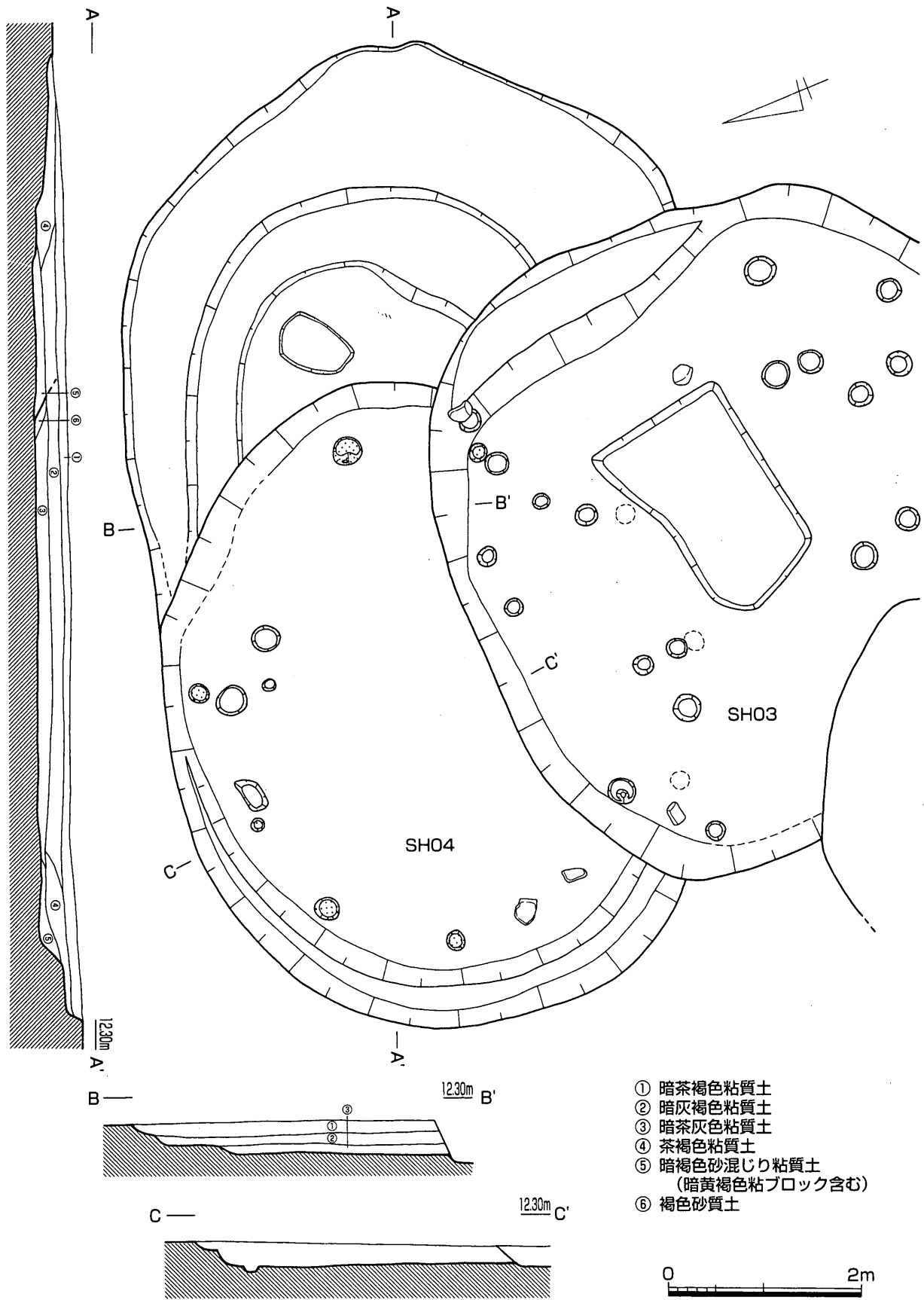
751~754は石鏃である。751は凹基で鏃身は細長く、側縁部の調整は丁寧である。752の基部は凹基と平基の中間形態である。基部の調整は不十分である。753・754は平基である。

755~758は石鏃の未製品である。755は凸基、756は凹基になると考えられる。758は製品に近いが側縁部で調整の及んでいない部分がある。

759・760は石錐で、錐部に摩滅痕が認められる。759の錐部は未調整であるが、剥片の鋭利な部分をそのまま錐部にしたと考えられる。760は楔形石器を転用しているため、つまみ部の側縁部に敲打痕がある。



第267图 V区第2面SH03出土遗物(2)(1/2、1/4)



第268図 V区第2面SH04平・断面図 (1/60)

761～766は楔形石器である。763は截断面に両極打撃の痕跡が認められる。764は両側とも打撃により力がうまく抜けなかったためか、剥離面には凹凸が目立つ。

767は砥石であるが、部分的に台石としても使用している。

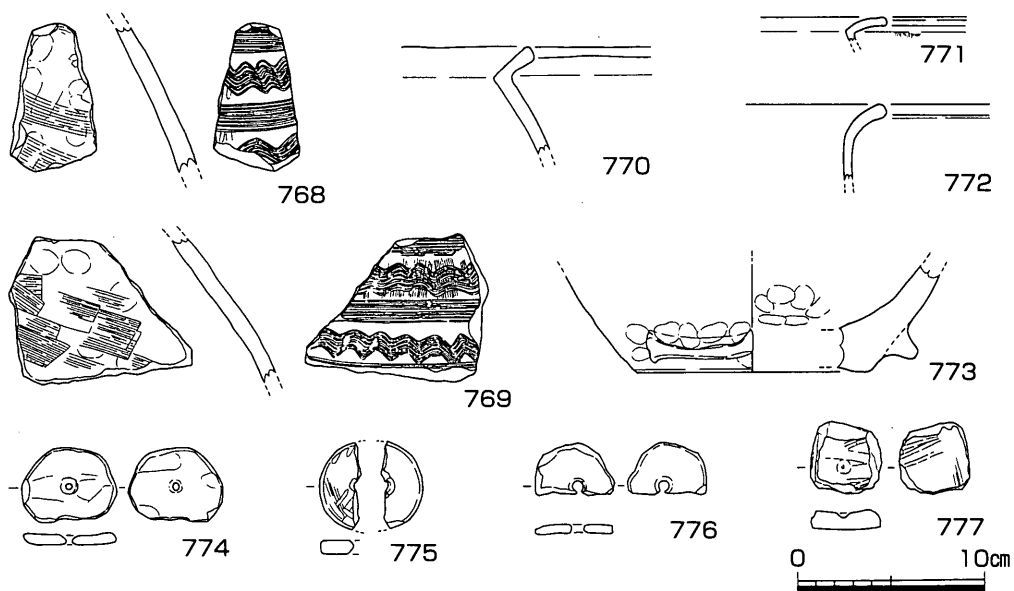
以上の出土遺物から、SH03は弥生時代中期中葉の所産と考えられる。

SH04（第268～271・276図）

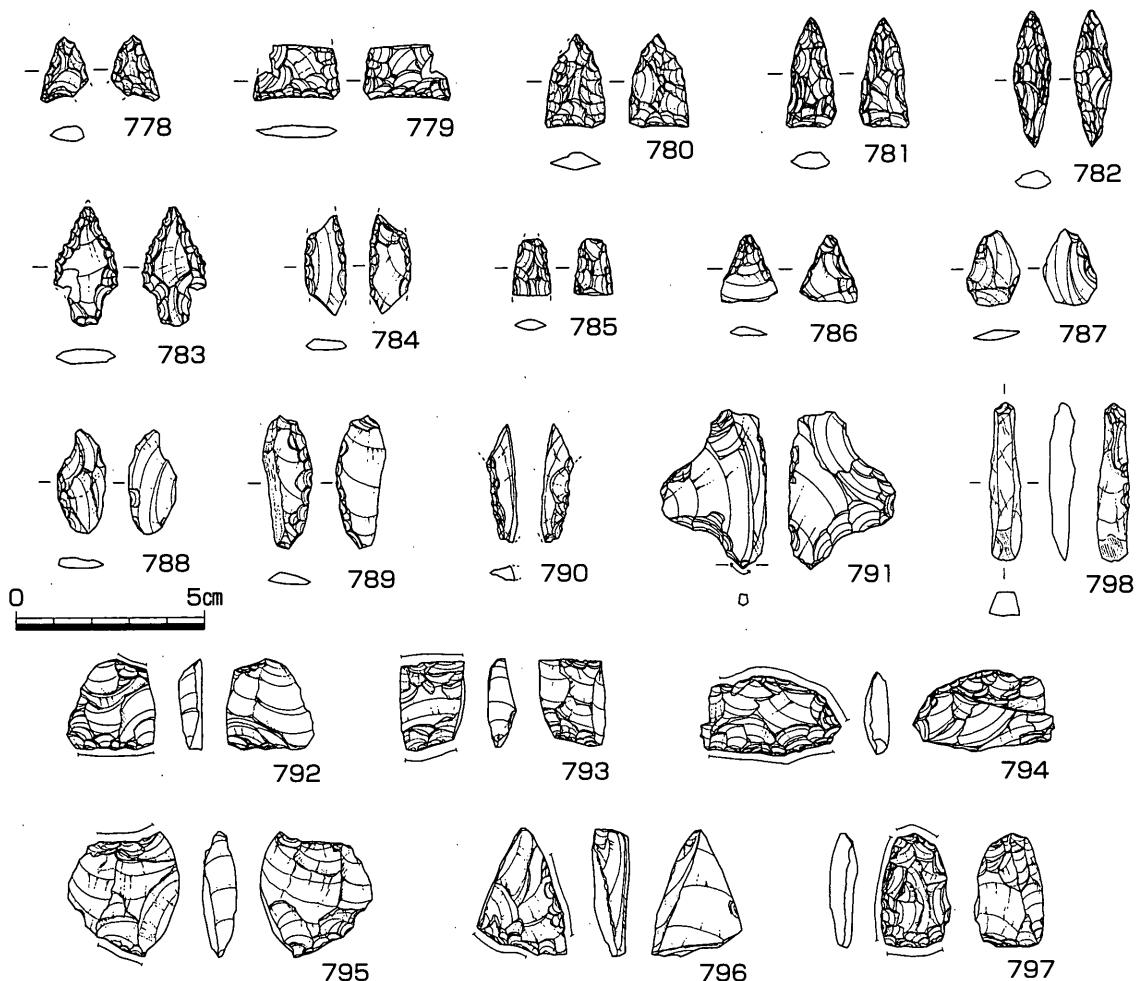
調査区の中央部分の南寄り、旧G3区で検出した竪穴住居で、SH03と重なりあうがSH03より前に建てられているため、南側の部分が壊されている。平面形は円形であるが、南北方向が短く扁平な感じを受ける。検出出来た東西方向から復元すると、直径は6.7mである。壁面の掘り込みは北側から西側にかけて2段になり、テラス状の面を形成している。また東側部分には3段に掘り込まれた円形の部分がある。この部分とSH04の東側部分との境界部分を検出することが出来なかったため、調査当時はこの部分もSH04の一部と考え東西に長い楕円形の住居と考えていた。土層A-A'でも、SH04の東側の壁の掘り込みを示す部分を分層出来なかった。しかし後にSH03に残されたSH04の柱穴の痕跡を確認したことを含めた主柱穴の配置から、ここに示すような円形の住居が妥当と考えた。検出面から床面までの深さは35cmである。

床面では壁溝と土坑は検出されなかった。壁の下場から5～20cmほど離れた位置で、直径5.2mの円周に乗る柱穴が5基あり、これが主柱穴と考えられる。この主柱穴の円周をSH03部分に展開してみると、SH03部分の北東隅の柱穴がSH04のものと考えられ、さらにあと3基がSH03部分で復元できる。SH04部分での復元を含めて11基の主柱穴が考えられる。主柱穴は直径10～30cmの円形で、深さは10～20cm、埋土は暗茶灰色粘質土の単一層である。

住居全体の埋土は暗茶褐色～暗茶灰色粘質土で水平に堆積している。SH04の東側の部分はSH04の埋土と酷似している。土坑状のものは検出されたが柱穴は検出されていない。SH04の建て替え以前のものとも考えられようが、柱穴の痕跡がSH03・04部分でも見つからないことからその性格は不明である。この部分から遺物は出土していない。



第269図 V区第2面SH04出土遺物（1）（1／4）



第270図 V区第2面SH04出土遺物 (2) (1/2)

SH04からの遺物の出土は少ない。特に土器は細片が少量出土しただけである。

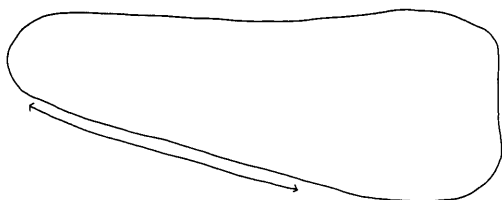
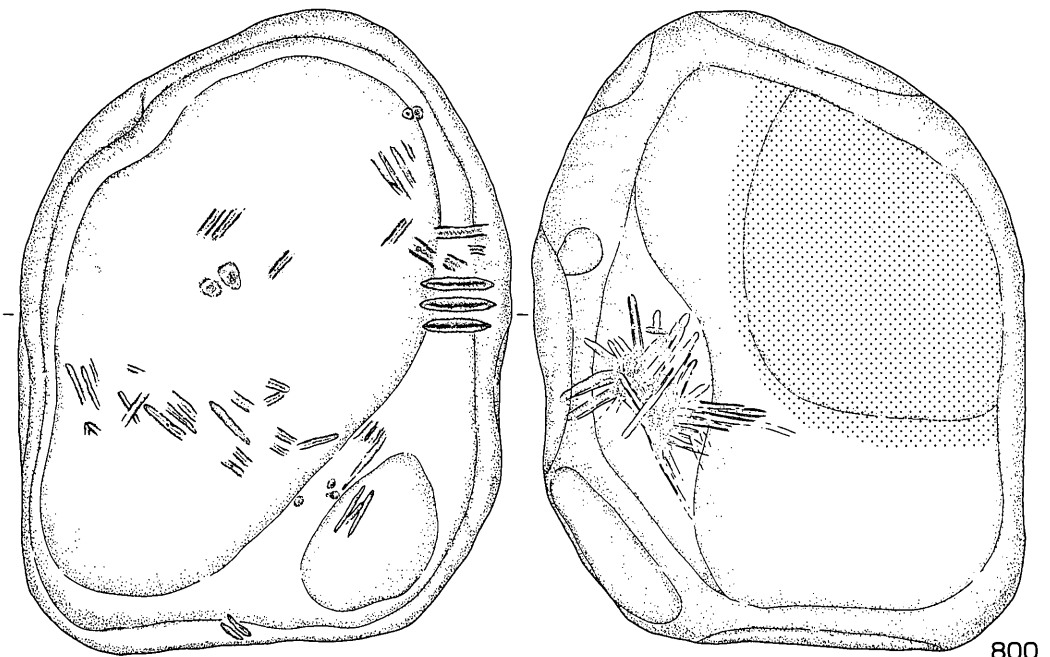
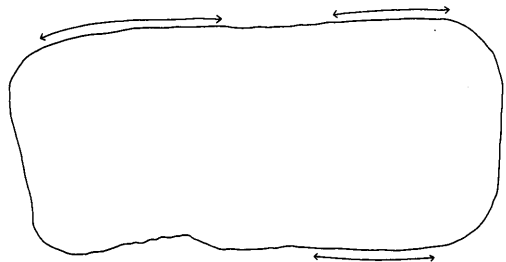
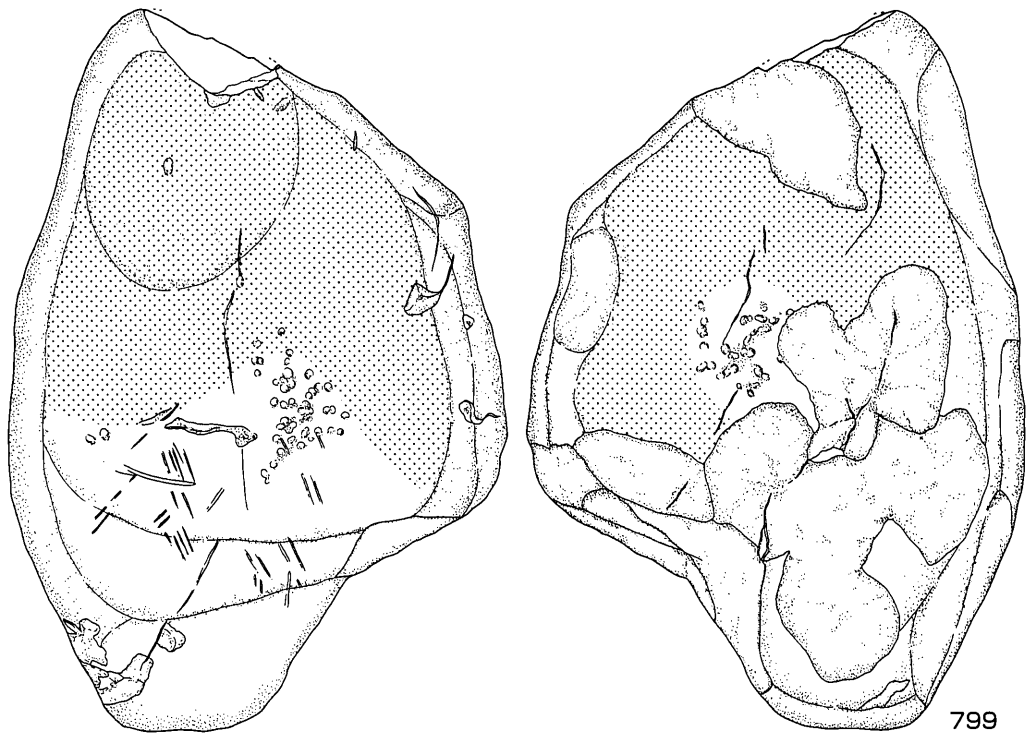
768・769は壺の体部で、外面に櫛描直線文と櫛描波状文を施している。770～772は甕である。770の口縁部は鋭く屈曲する。772は細片であるが、口縁部は体部から丸みを帯びて屈曲する如意形で、端部は丸く収める。あるいは壺かもしれない。773は壺の底部と考えられ、底部側面に把手状の突起がある。底部は厚手である。774～776は紡錘車、777は穿孔途中の紡錘車の未製品で、全体にまだ角張っている。

778～785は石鏃である。778は凹基で、基部が強く湾曲している。779～781は平基であるが、いずれもほんの僅かではあるが湾曲している。782は凸基である。石錐にも似るが、特に傾斜の急な剥離を行っておらず、同じような剥離が鏃身側縁部に施されていることから石鏃と判断した。783は凸基有茎式である。鏃身の側縁部は鋸歯状に凹凸が目立つ。

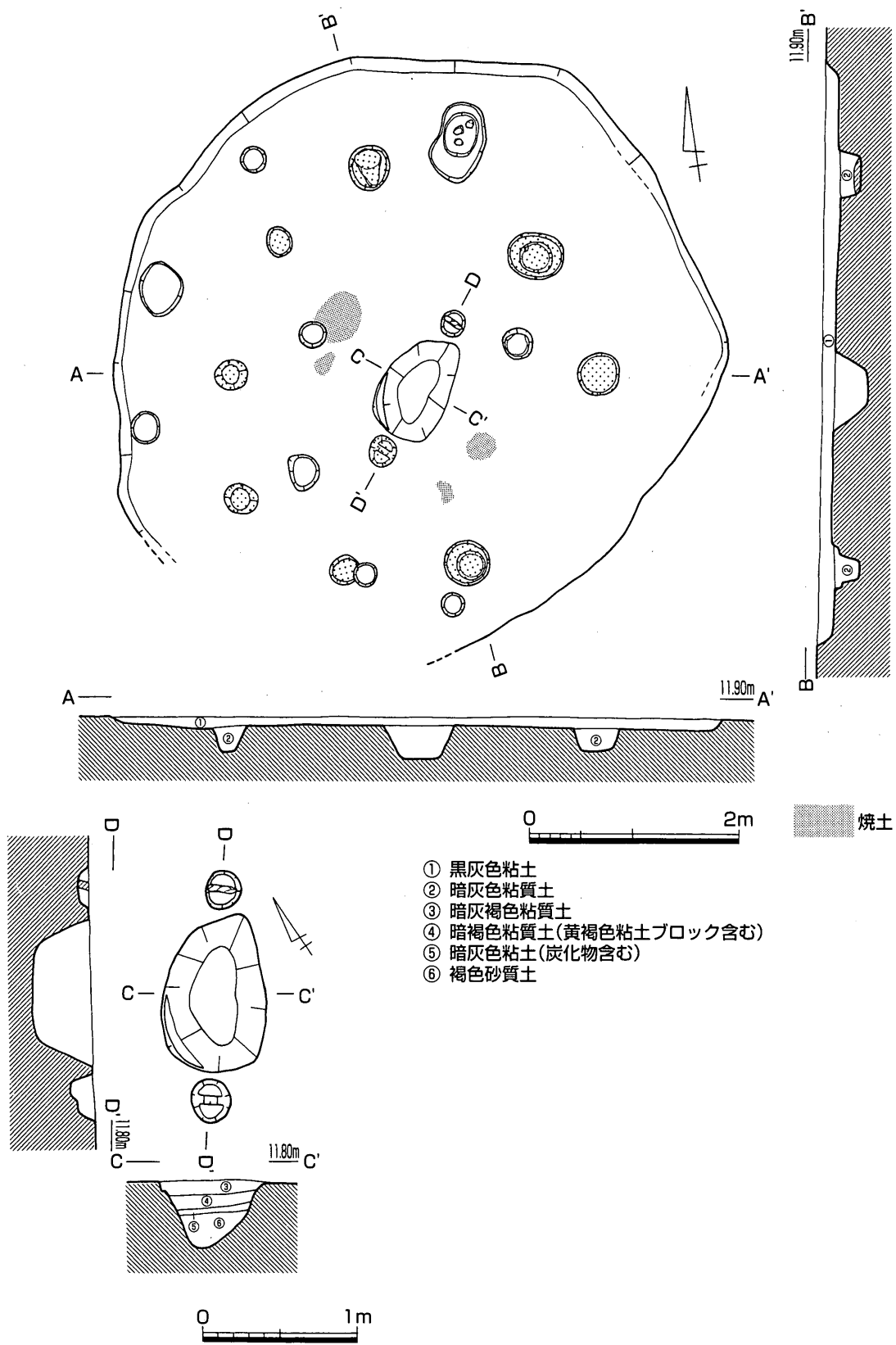
786～789は石鏃の未製品である。787は素材剥片に僅かに調整を加えた段階である。789は片側の側縁部にはまだ自然面を残している。

790・791は石錐である。790の錐部は縦方向に欠損している。791の錐部には摩滅痕が認められる。つまみ部は片側が突起のようにになっている。

792～797は楔形石器である。796は截断面の縁辺に敲打を行っている。797は3箇所にて敲打痕が認められる。



第271图 V区第2面SH04出土遺物(3)(1/4)



第272図 V区第2面SH05平・断面図 (1/60)、SH05内土坑平・断面図 (1/40)

798は楔形石器の残片を利用した小型方柱状片刃石斧で、両側面が楔形石器の截断面になっている。鑿先のような形状で、刃部の両面と基部の一部を研磨している。サヌカイト製である。SH02で出土した724に酷似している。

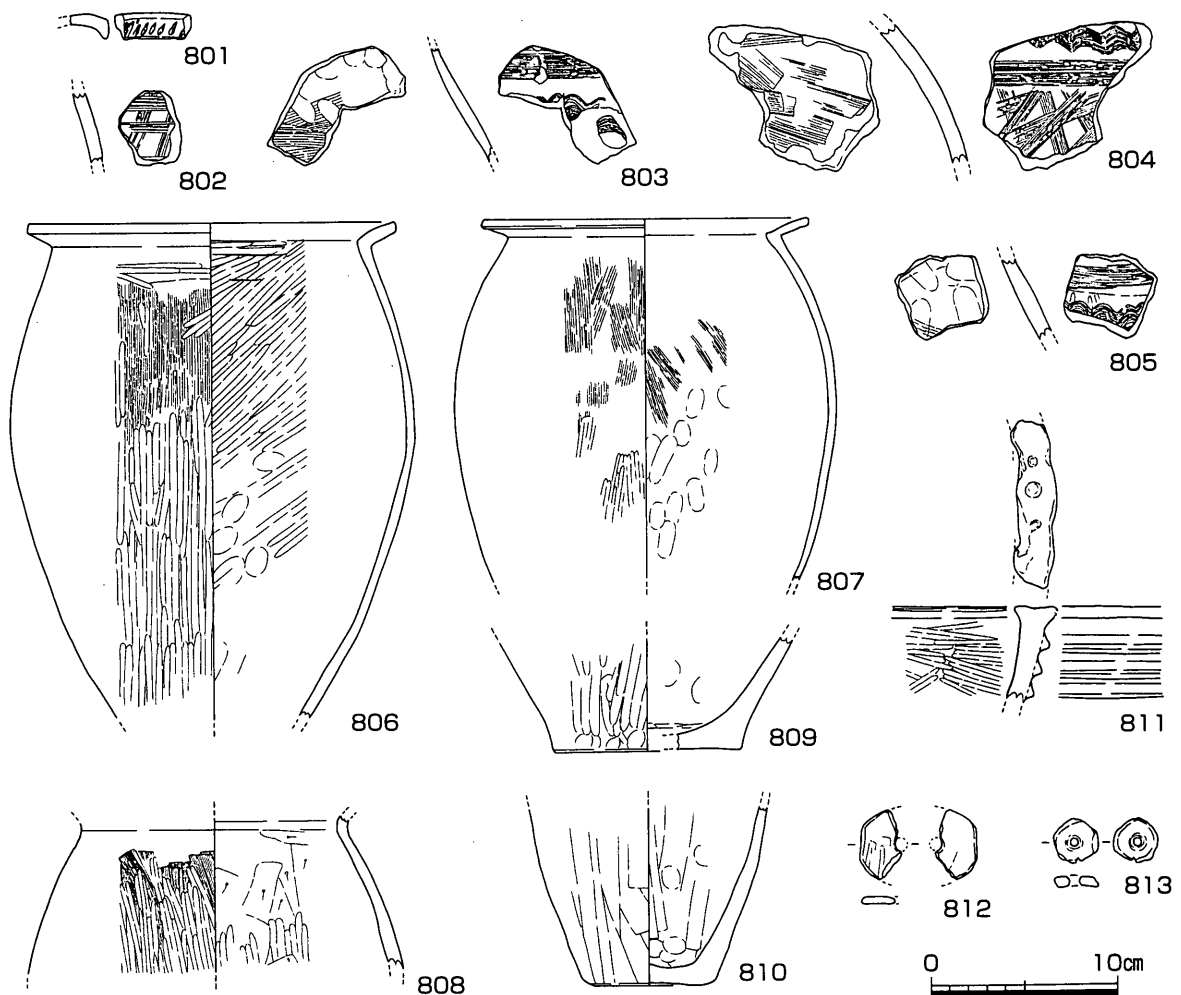
799・800は台石兼砥石で、台石としての使用頻度が高い。

以上の出土遺物から、SH04は弥生時代中期中葉の所産と考えられる。

SH05 (第272~276図)

調査区の中央部分の南寄り、旧G 3区で検出した竪穴住居で、SH03・04と重なりあうため、その上部は壊されていたが床面は良好に残っていた。しかし南西部分は壁面の立ち上がりも残っていない。平面形は直径6.0mの円形であるが、直線的な部分も多く多角形のような形状である。上部が削平されているため壁面は僅かしか残っていない。また検出面から床面までは深いところでも10~15cmしか残っていない。

床面には壁溝は巡っていない。中央部の土坑を中心に、直径3.5mの円周に乗る柱穴が8基あり、主柱穴と考えられる。南東部分にももう1基あった可能性が高い。主柱穴は直径20~50cmの円形で、直径20cm程度の柱痕が認められたものもある。深さは20cm前後である。埋土は暗灰色粘質土の単一層で



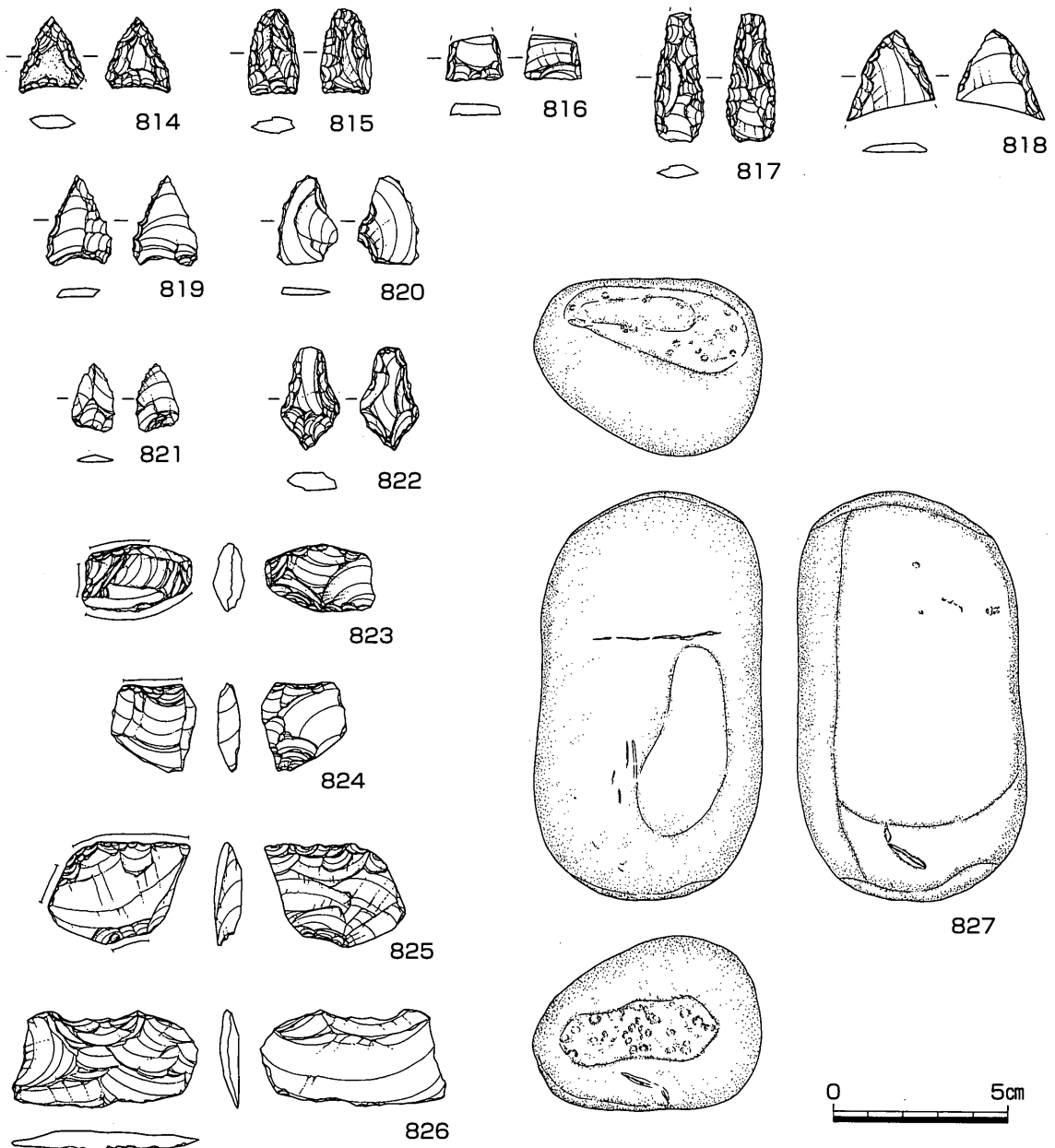
第273図 V区第2面SH05出土遺物 (1) (1/4)

ある。北側の支柱穴の一つから根石のような状態で板石が出土した。この石は自然のままで石器にはなっていない。

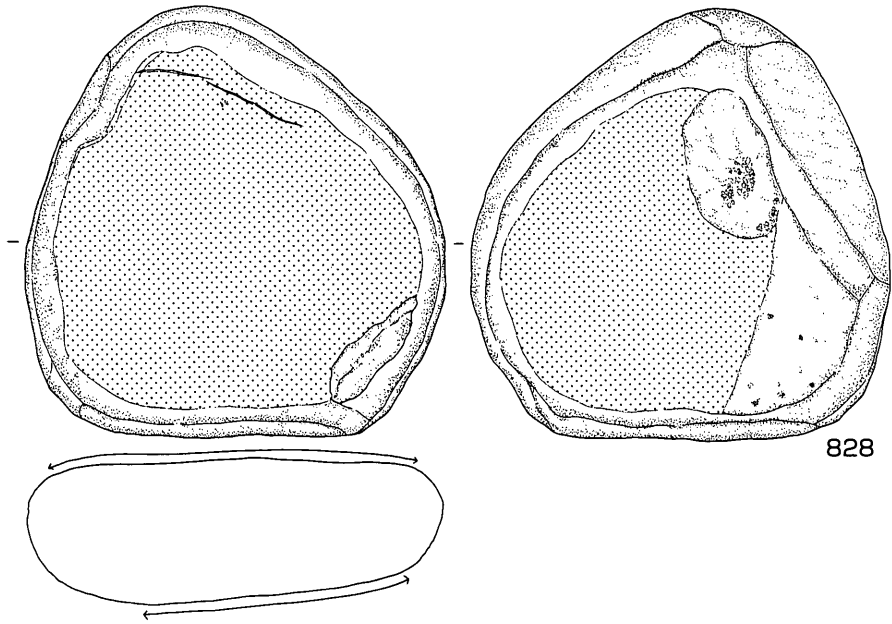
中央部には平面形が楕円形の土坑がある。長径1.0m、短径0.65m、深さ40cmである。この土坑の最下層には褐色砂質土が堆積しているが、その上層には炭化物を含む暗灰色粘土が薄く堆積している。そしてこの土坑の長径側の両端部に接するように柱穴が2基認められる。両者とも直径25cmの円形で、深さは10~15cmと浅いものである。北側の柱穴から砥石(829)が立ったような状態で出土した。この柱穴の50cmほど東側の柱穴からも砥石(828)が出土している。土坑の周辺の床面は焼けている部分がある。

上面が削平されているため、住居全体の埋土は黒灰色粘土層のみが残っていた。

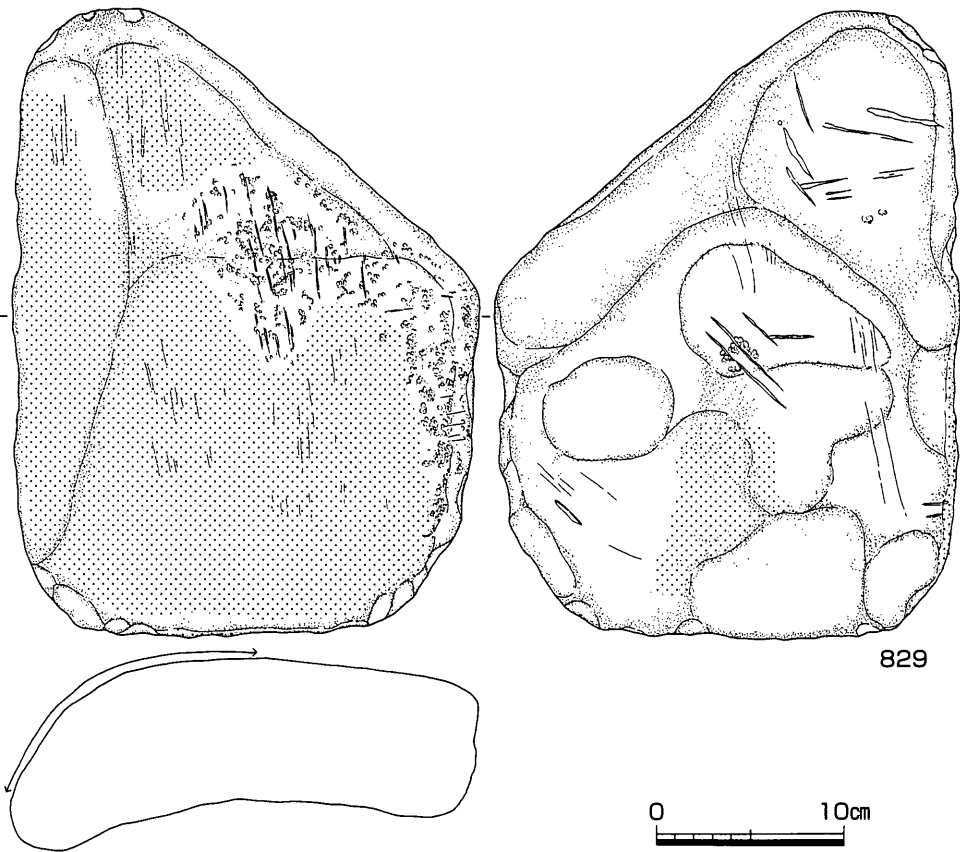
遺物の出土量は全体に少ない。土器は細片が目立つが中には接合するものもある。



第274図 V区第2面SH05出土遺物(2)(1/2)



828



829



第275图 V区第2面SH05出土遺物 (3) (1 / 4)

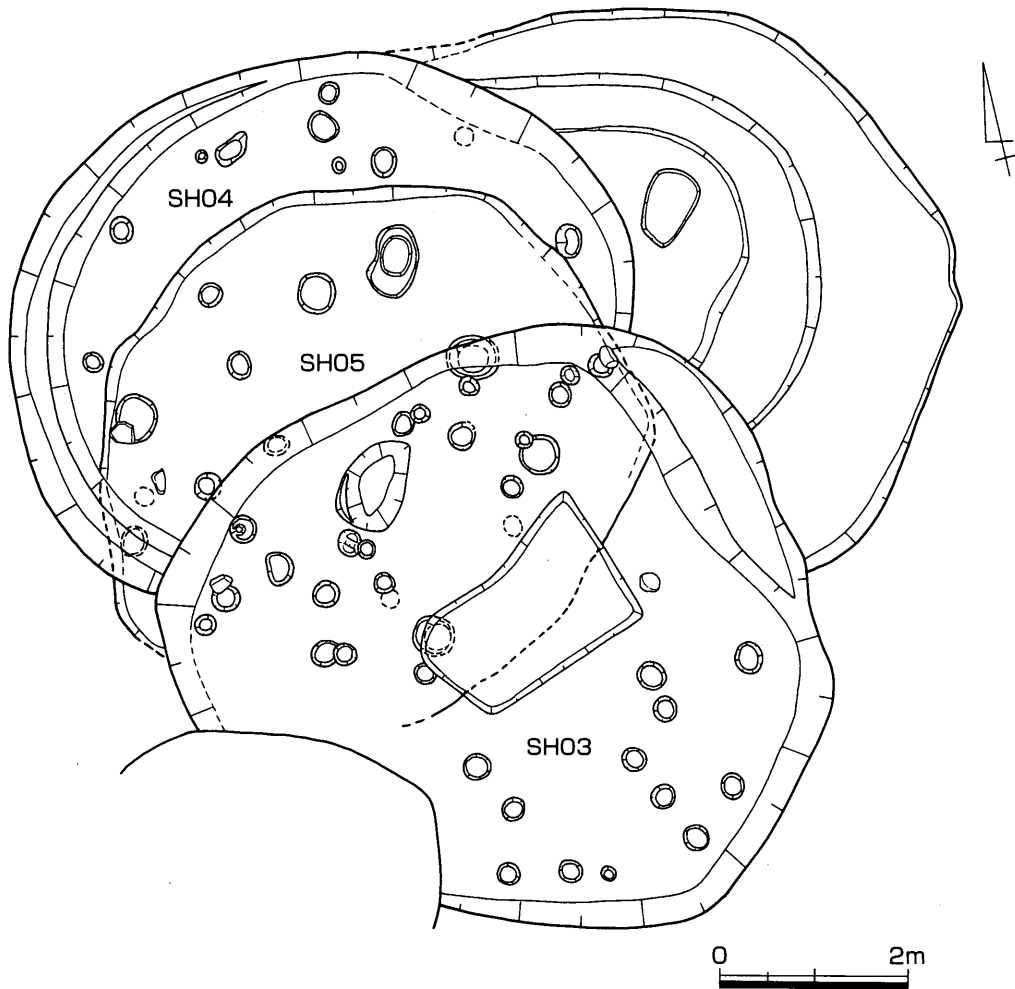
801～805は壺である。801は口縁部で端部には刻み目を施している。802～805は体部の破片で、いずれも外面に櫛描による文様を施している。804は櫛描波状文、櫛描直線文を施し、その下にやや雑に斜格子文を施している。

806～810は甕である。806の口縁部は鋭く屈曲し、体部に比べて肥厚している。体部最大径は中央やや上にあり、外面にはハケ目の後に下半部にヘラミガキを丁寧に施している。内面も丁寧にヘラミガキを施している。807は南側の支柱穴から出土したものである。口縁部は鋭く屈曲し、内面を強くナデている。体部最大径は中央やや上にあり、外面はハケ目の後に下半部にヘラミガキを加えている。内面はハケ目の後にナデている。808は口縁部が欠損している。体部外面には木目の細かいハケ目の後にヘラミガキを施し、内面にはヘラケズリの後にヘラミガキを加えている。しかしこのヘラケズリは弱く砂粒が僅かに動いている程度である。あるいはハケ目が摩滅したものかもしれない。810は底部からの体部の立ち上がりは急であり、内・外面ともに板ナデである。通常の甕にしては違和感がある。

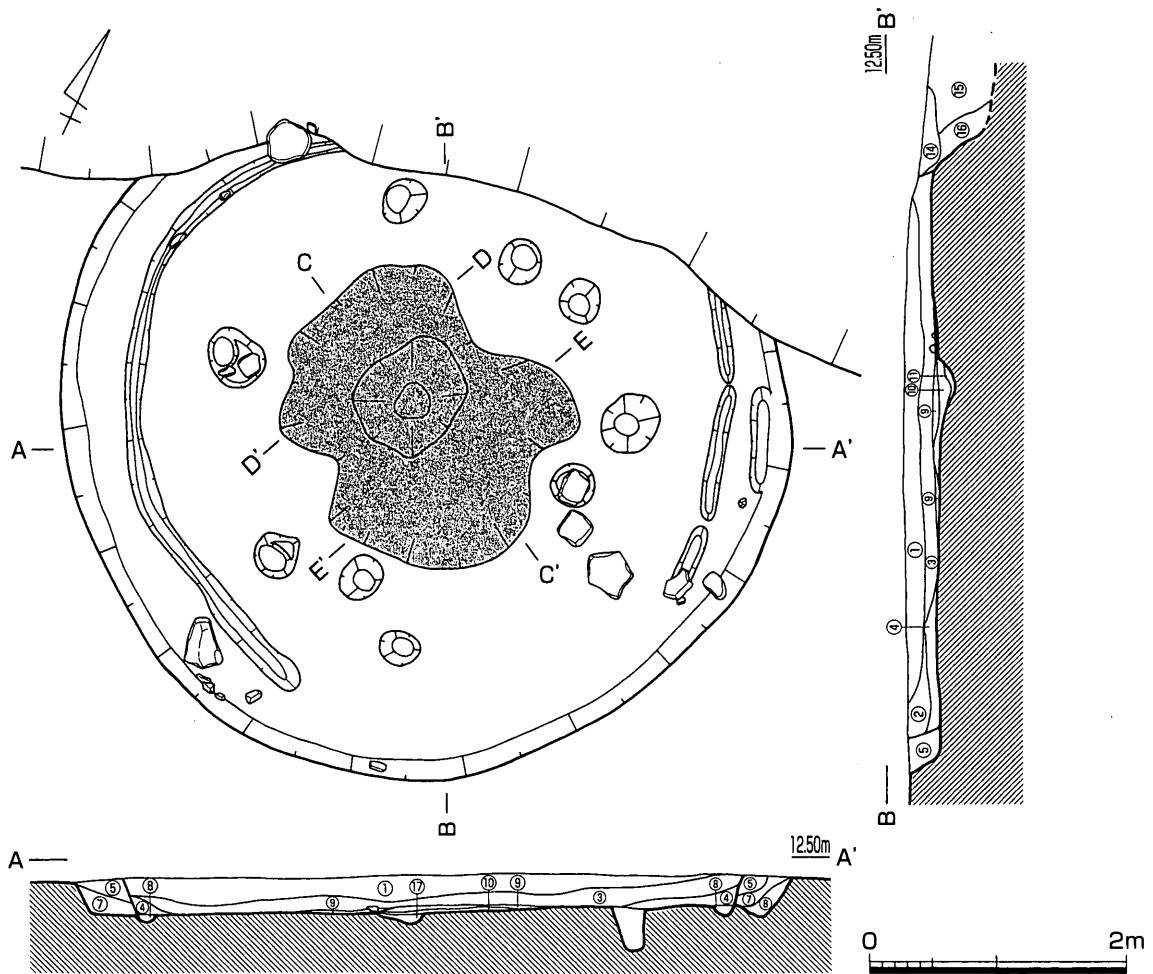
811は鉢で口縁部端部を内・外面側に拡張している。上面には円形浮文の剥離痕が認められる。外面には貼付突帯を巡らせ、内面にはヘラミガキを丁寧に施している。

812・813は紡錘車である。813は小形である。

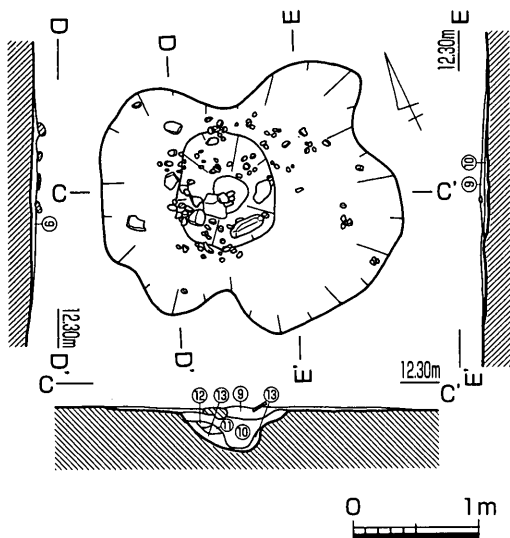
814～817は石鏃である。814は凹基であるが、鏃身には自然面が残っている。815～817は平基である。



第276図 V区第2面SH03・04・05配置図 (1/80)



- | | |
|----------------|--------------------|
| ① 淡灰茶色砂礫混じり粘質土 | ⑩ 黒色粘質土(炭化物層) |
| ② 淡茶灰色砂質土 | ⑪ 黒色粘質土(⑩より炭化物少ない) |
| ③ 淡茶色砂混じり粘質土 | ⑫ 濁灰黄色砂質土(炭化物含む) |
| ④ 淡灰茶色砂質土 | ⑬ 濁暗黒色砂質土 |
| ⑤ 濁灰茶色砂質土 | ⑭ 淡濁茶色砂礫混じり粘質土 |
| ⑥ 灰茶色礫混じり粘質土 | ⑮ 淡黄茶色砂 |
| ⑦ 淡黄茶色砂質土 | ⑯ 淡黄茶色砂礫混じり粘質土 |
| ⑧ 茶黄色砂質土 | ⑰ 濁暗黒色砂質土 |
| ⑨ 褐灰茶色砂混じり粘質土 | |
- } 自然流路



第277図 V区第2面SH06平・断面図(1/60)、SH06内土坑平・断面図(1/60)

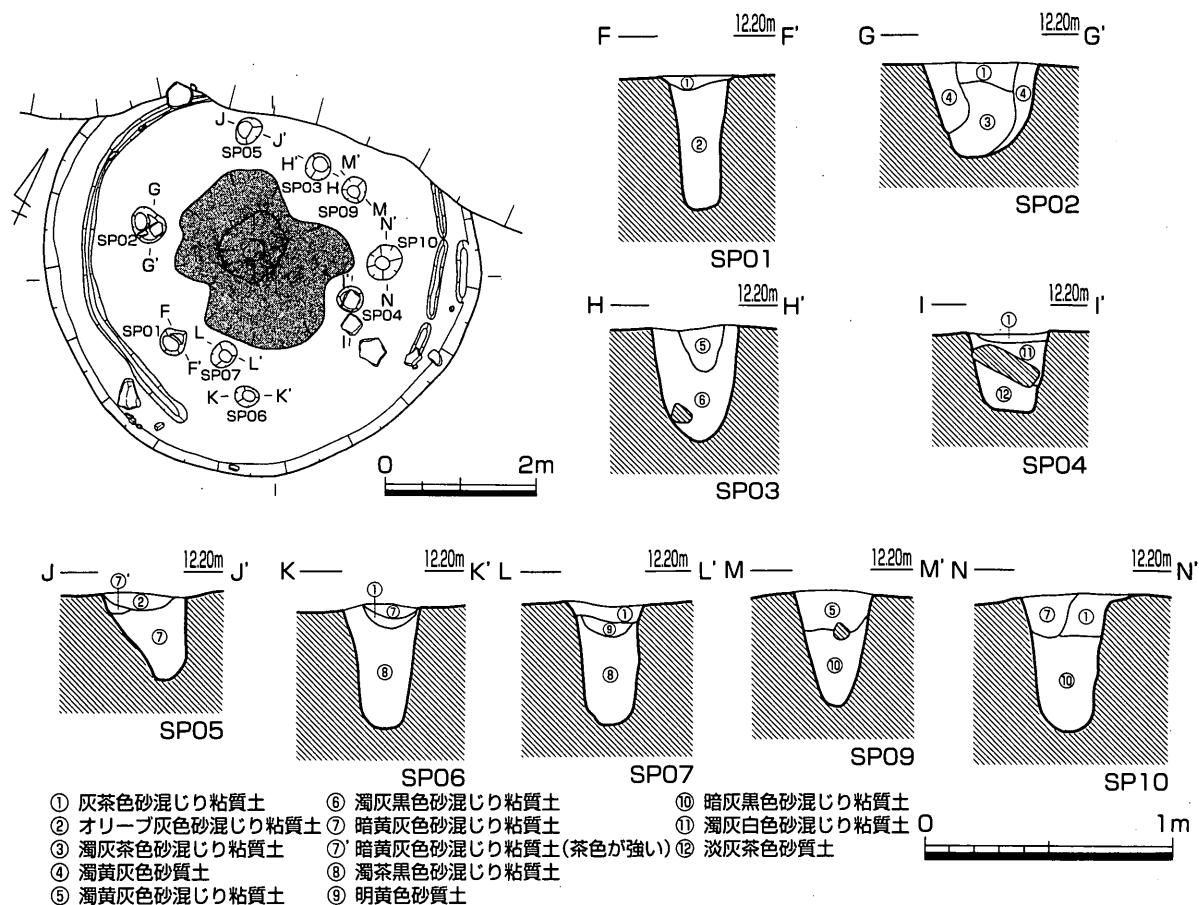
815の先端部は鋭さに欠ける。鍔身には凹凸が目立つ。817は細長く、基部は未調整である。818～821は石鍔の未製品である。820・821は素材剥片に僅かに調整を加えただけの段階である。822は石錐である。錐部は角度のある剥離で作り出している。つまみ部は下部が幅広になっている。823～825は楔形石器である。823・825は3辺に敲打痕が認められる。826はスクレイパーである。素材剥片の鋭い縁部をそのまま刃部に利用しており、僅かに調整を加えている。827は敲石で、上下両端を使用している。828・829は砥石である。828は表裏全体を使用している。829は楔形石器の打撃によるものと考えられる線状の痕跡があり、台石としても使用している。

以上の出土遺物から、SH05は弥生時代中期中葉でも古い段階の所産と考えられる。

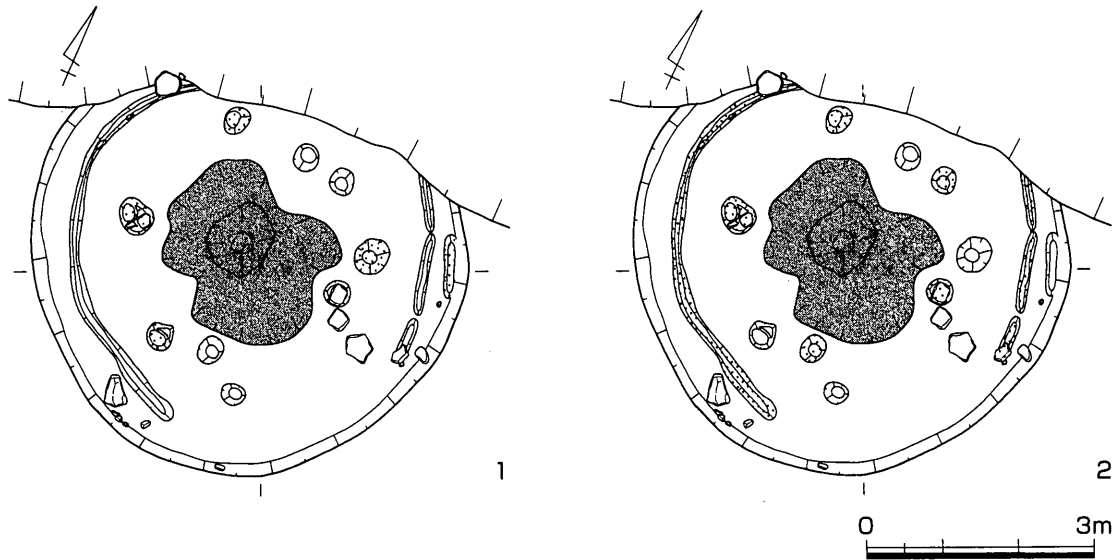
SH06 (第277～286図)

調査区西端中央部分の、旧G 6区で検出した竪穴住居である。北側部分を自然流路によって壊されている。平面形は直径5.7mの円形である。壁溝が2条あることと、住居埋土の土層からこの住居は建て替えが行われていることが分かる。壁面の掘り込みは斜めである。検出面から床面までは25cmの深さがある。

床面には外側と内側に壁溝が2条あるが、外側の壁溝は東側で0.8mほどが検出されたにすぎない。一方、内側の壁溝は直径4.7mの円を描くが、南東部分には巡っていない。住居埋土の土層によると、内側の壁溝のほうが新しい段階である。新しい段階の壁溝は幅10～20cm、深さ5～10cmで、埋土は茶黄色砂質土の単一層である。この壁溝の内側50～90cmのところ、直径3.0mの円周に乗る柱穴が5基



第278図 V区第2面SH06内SP断面図 (1/30)



第279図 V区第2面SH06変遷図 (1/100)

あり、主柱穴と考えられる。主柱穴は直径30cm前後の円形で、深さは30～50cm、埋土は灰色系の粘質土が中心である。

古い段階の壁溝は僅かな部分しか検出されていない。主柱穴と考えられる柱穴が直径3.0mの円周に乗って4基ある。南東部分には検出されなかった。また北西部分の2基は新しい段階の主柱穴と共有している。主柱穴は直径40～50cmの円形で、深さは50cm、埋土は灰色系の粘質土が中心である。

住居床面の中央には土坑が1基ある。平面形は楕円形と隅丸方形の中間形態である。楕円形とすると長径0.9m、短径0.75m、深さ30cmである。土坑の底部は狭く、東側の掘り込みは不整形である。土坑には炭化物が厚く堆積している。この土坑の周囲は浅く皿状に窪み、炭化物を含んだ褐灰茶色砂混じり粘質土が石や土器細片とともに堆積している。土坑から中のものをかき出した際に床面が抉れて窪んだと考えられる。

住居全体の埋土は茶色系の粘質土で、特に大きな乱れもなく堆積している。SH06は大幅な建て替えではなく、壁の内側に土を盛って壁を作り直した感があるが、この盛土は砂質土で斜めに堆積している部分が多く強度に難がある。しかし共有する主柱穴があるなど小規模な改築であったと考えられる。

遺物は中央土坑付近で多く出土している。紡錘車と砥石の出土が目立っている。

830～833・841・842は壺である。830の口縁部端部は肥厚し、内面に指押さえを施している。831の口縁部は短く屈曲し、端部は丸く収める。頸部には幅広の刻目突帯を巡らせている。832は口縁部に2個1単位の穿孔があり、端部外面には刻みを施している。

834～838は甕である。834は如意形口縁の甕と考えたが、あるいは壺になるかもしれない。836・837は短く外反する如意形口縁で、内面にハケ目を施している。体部は内面にヘラミガキを施し、外面はハケ目で836はさらにヘラミガキを加えている。

843～852は紡錘車で、土器片を利用しているためハケ目やヘラミガキの見られるものが多い。853は形を整えた段階の未製品である。

854～863は石鏃である。854～856は凹基である。854の鏃身は細長く、基部は強く湾曲する。857～859は平基である。857は基部下半部が直線的である。858は鏃身の最大幅が中央部にある。860はやや幅

広であるが、凸基有基式の基部と考える。

864～870は石鏃の未製品である。864は製品に近いがまだ形が整っておらず、側縁部の調整も不十分である。867も製品に近いが先端部が調整途中である。869・870は素材剥片に僅かに調整を加えた段階である。

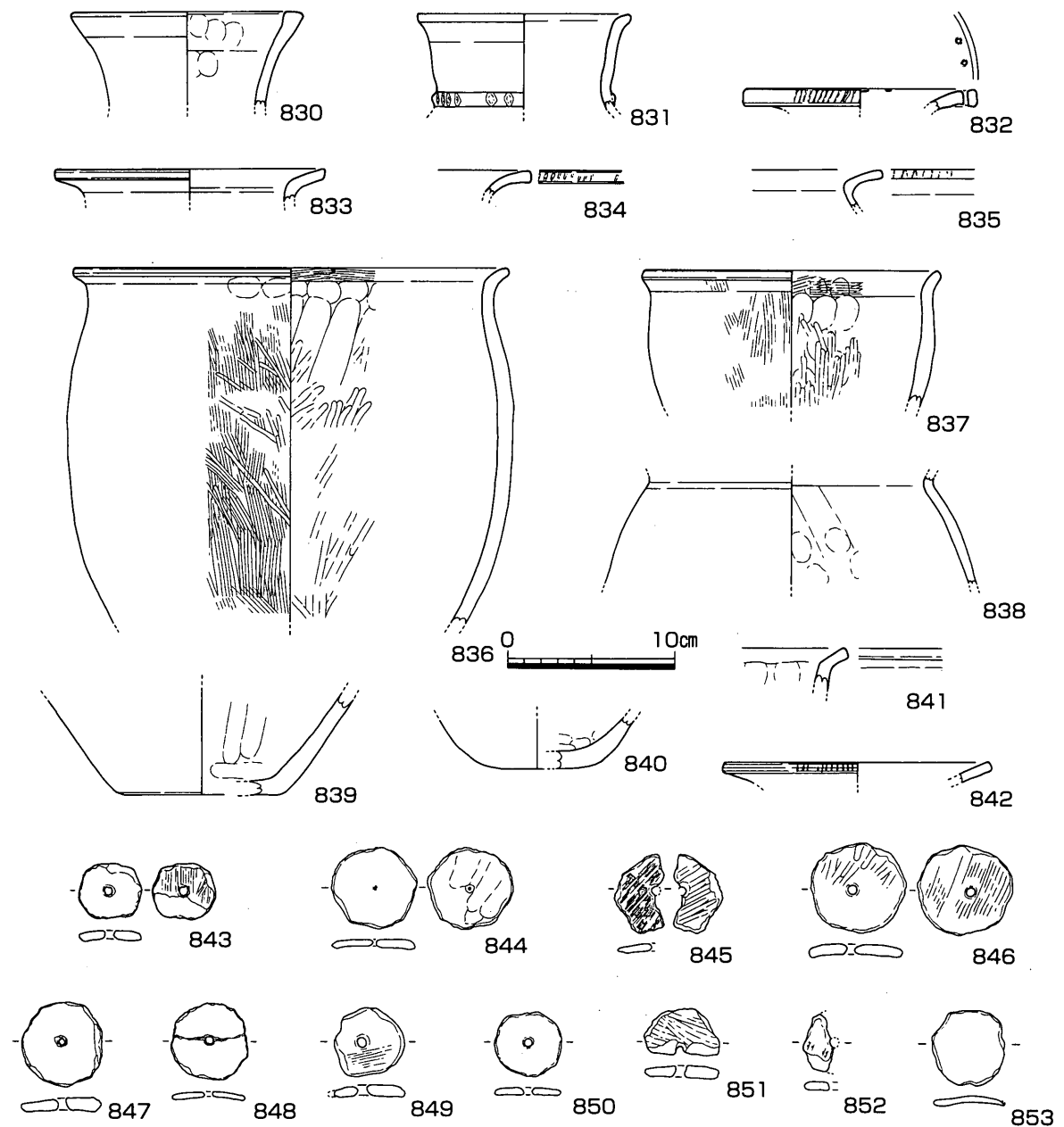
871～874は石錐である。873・874は角度のある剥離で錐部を作り出している。

875～883は楔形石器である。875・877は交わる2辺に敲打痕が認められる。882は截断面に両極打撃の痕跡が認められる。

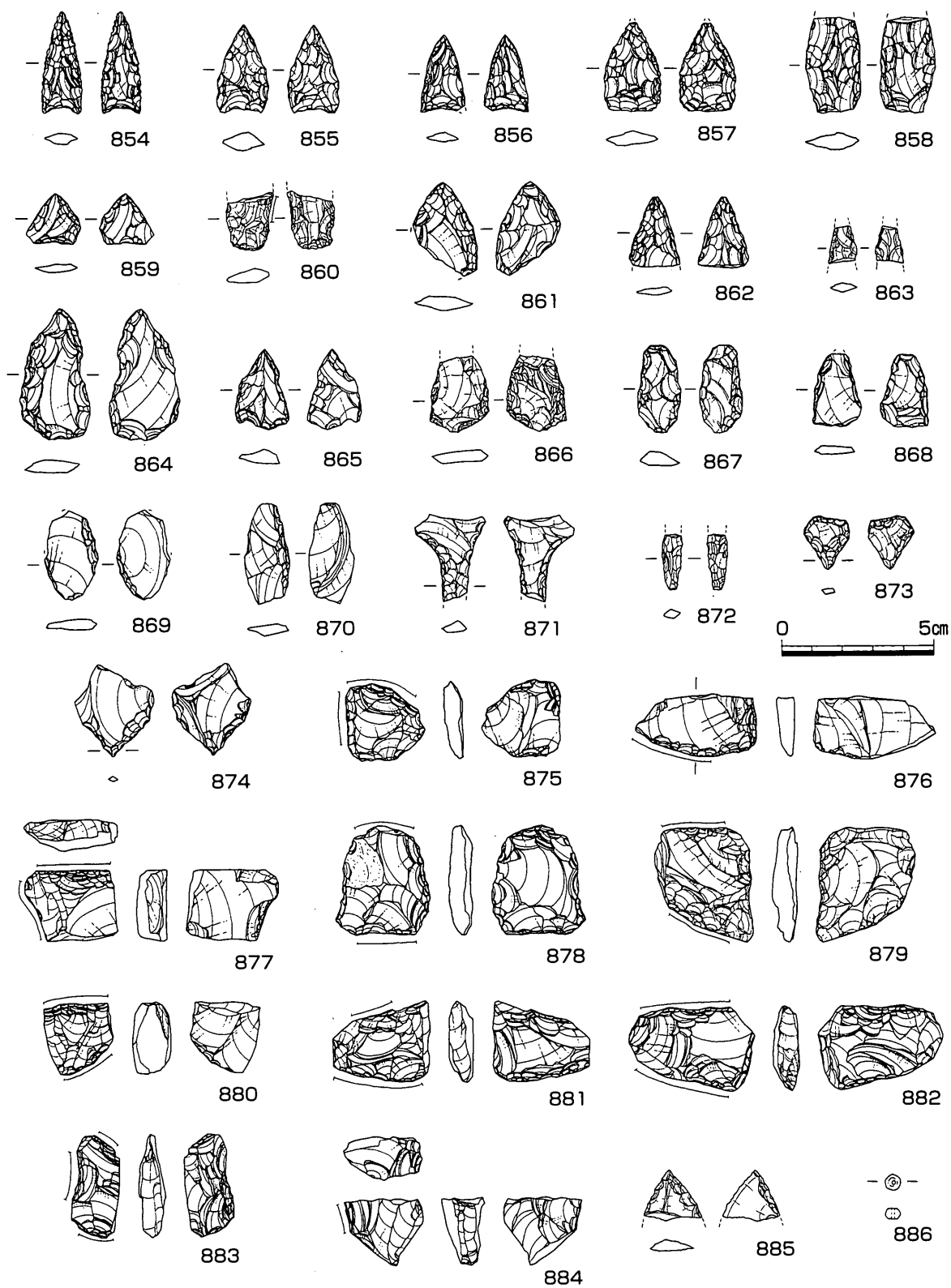
884は黒色安山岩製の縦長剥片石核である。作業面側から打面調整を行っている。

885は柱穴から出土した石鏃の未製品である。

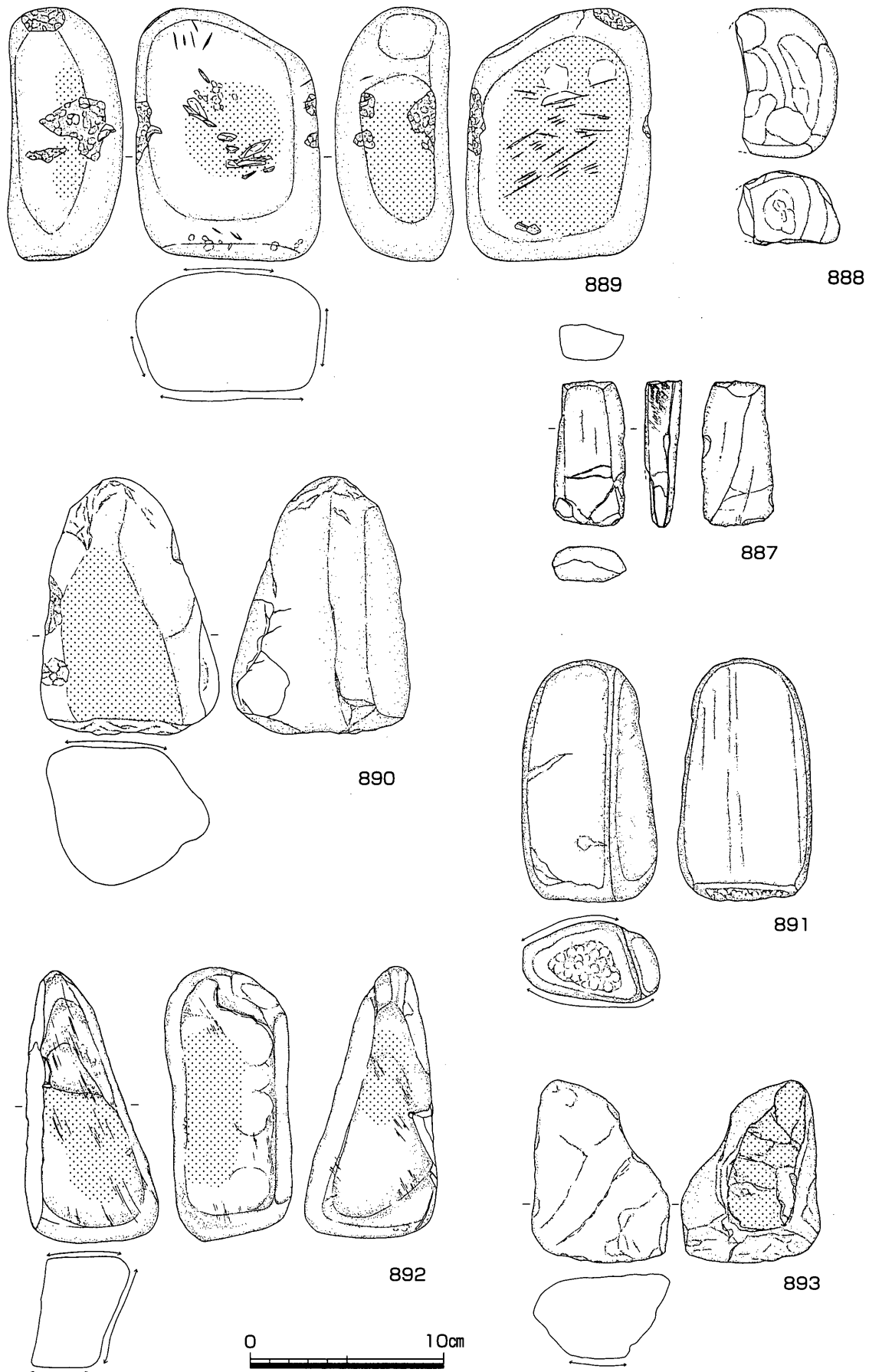
886はガラス製の小玉である。SH06直上の包含層から出土しているもので、直接伴うものではない



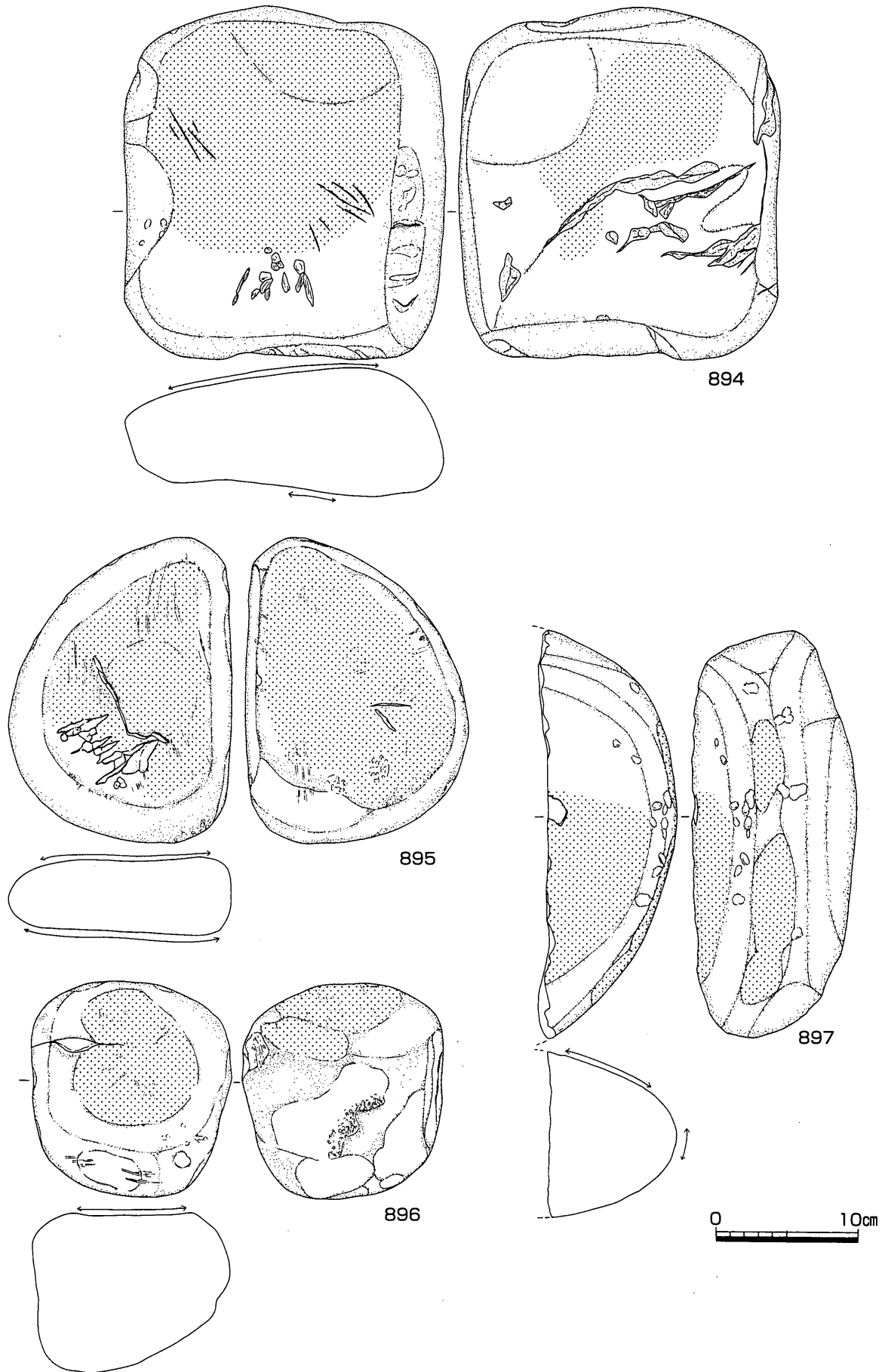
第280図 V区第2面SH06出土遺物 (1) (1/4)



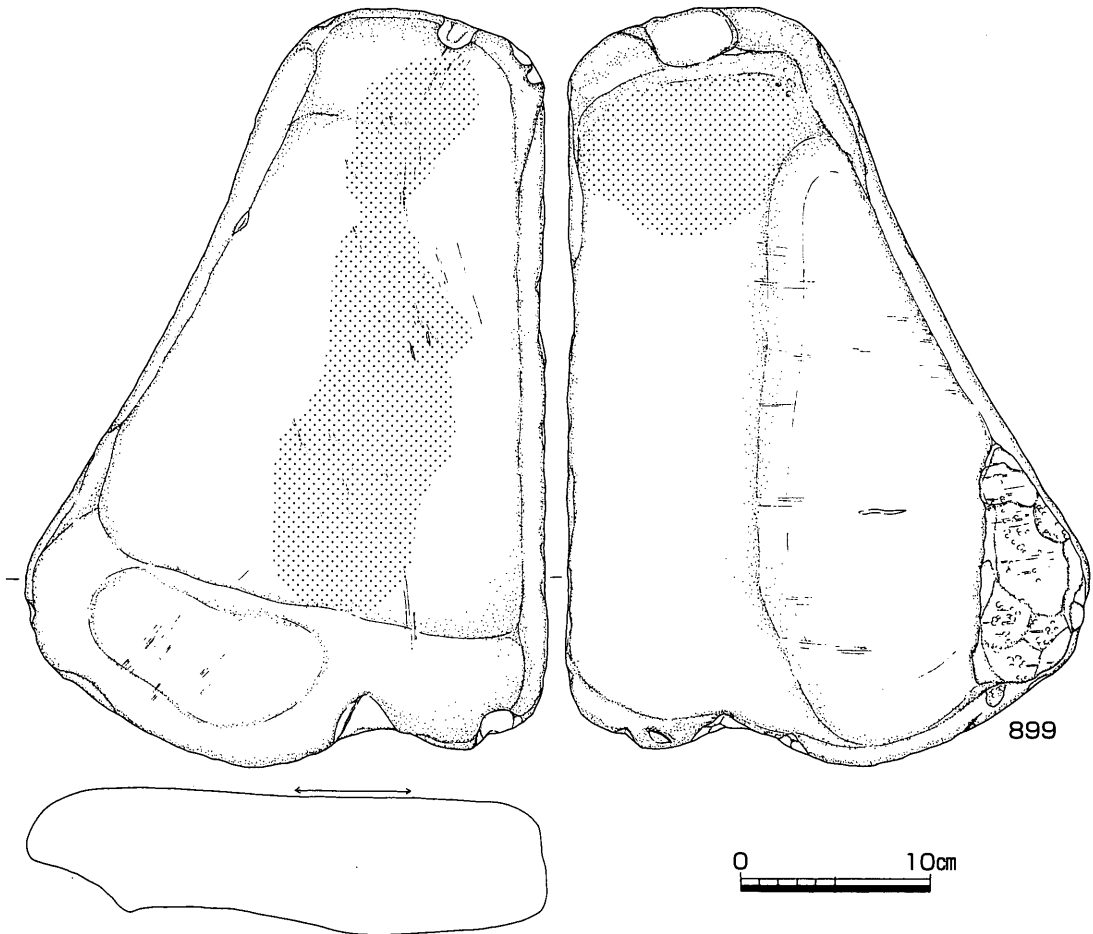
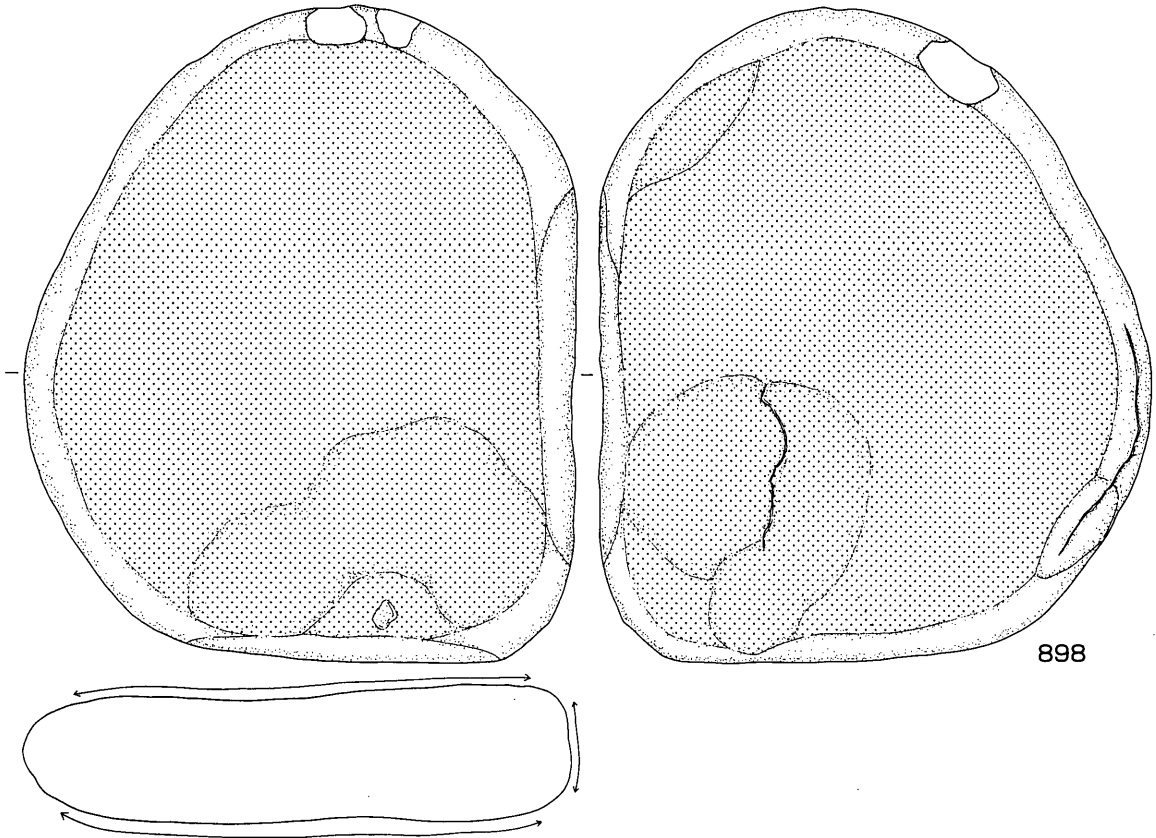
第281图 V区第2面SH06出土遗物(2)(1/2)



第282图 V区第2面SH06出土遗物(3)(1/3)

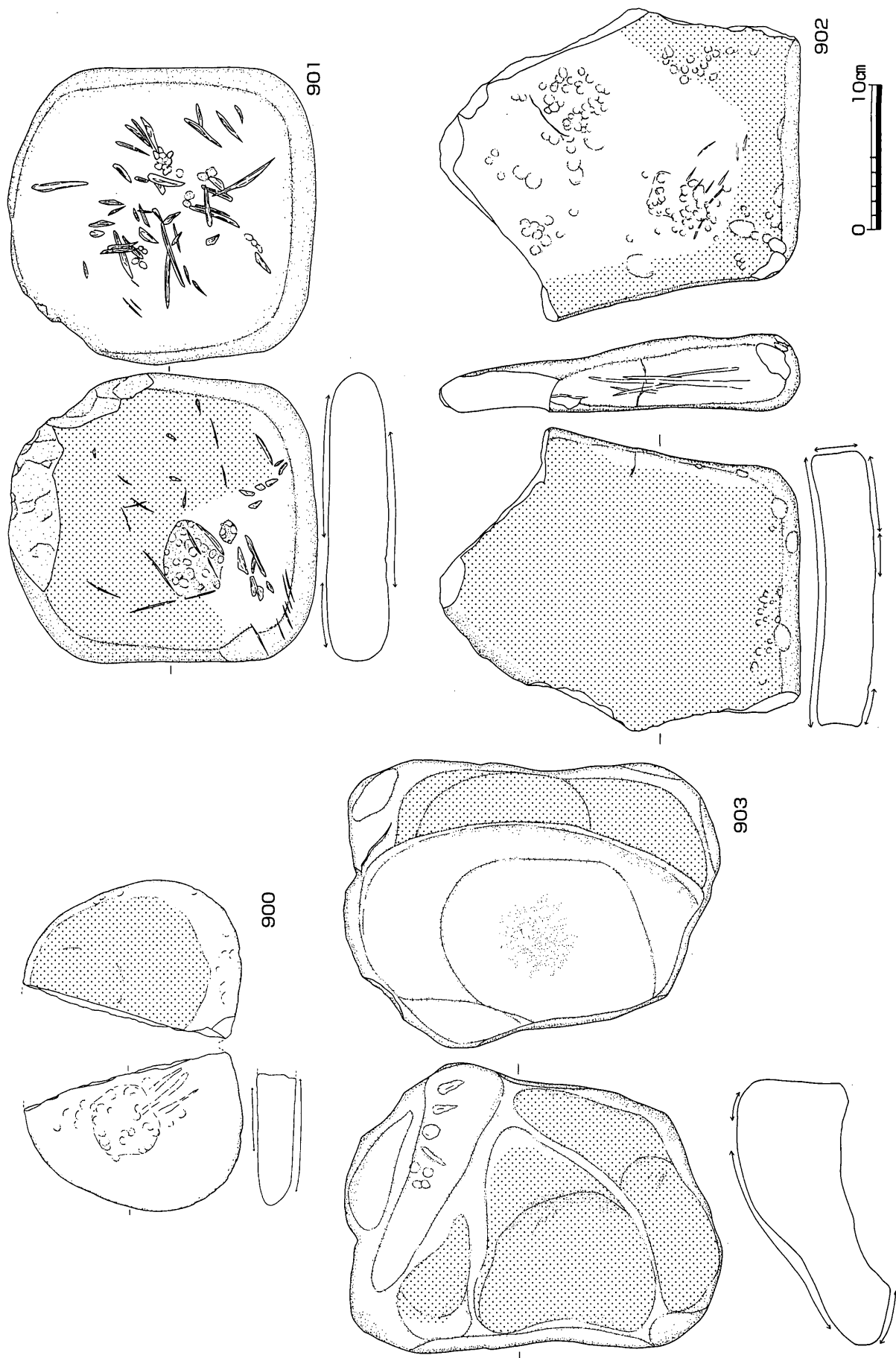


第283图 V区第2面SH06出土遗物(4)(1/4)

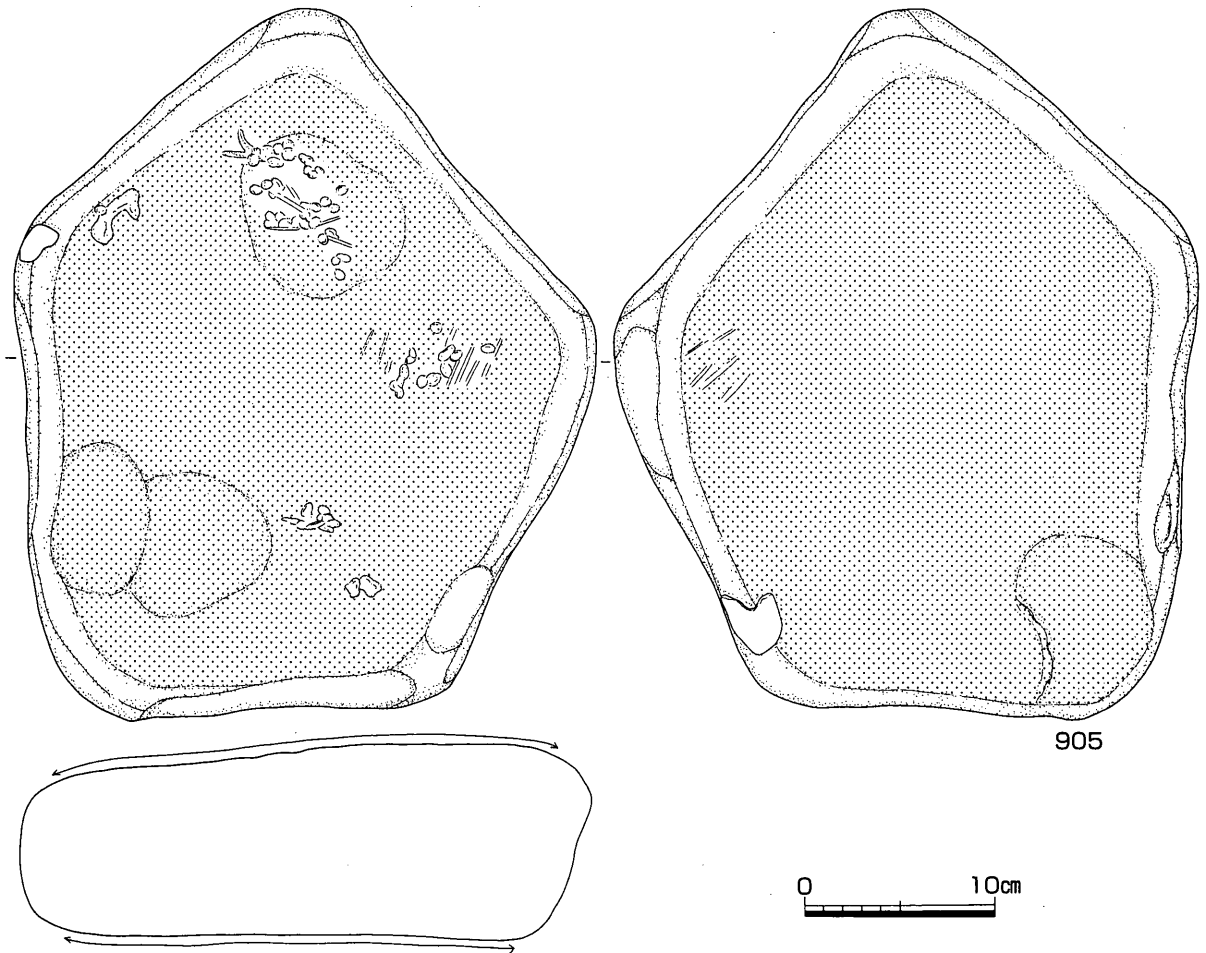
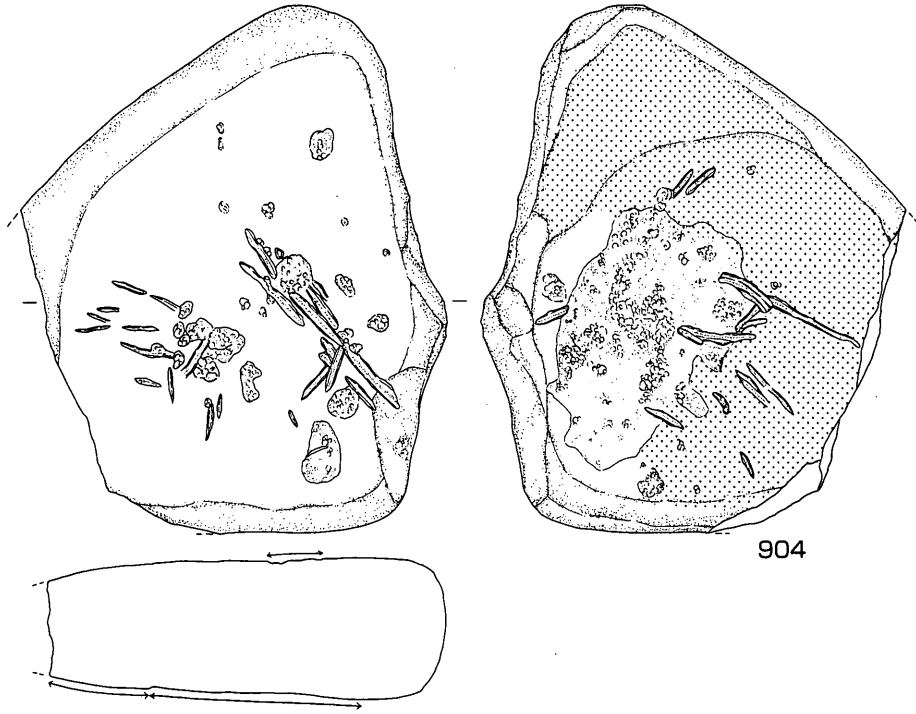


0 10cm

第284图 V区第2面SH06出土遺物(5)(1/4)



第285图 V区第2面SH06出土遺物 (6) (1 / 4)



第286图 V区第2面SH06出土遺物(7)(1/4)

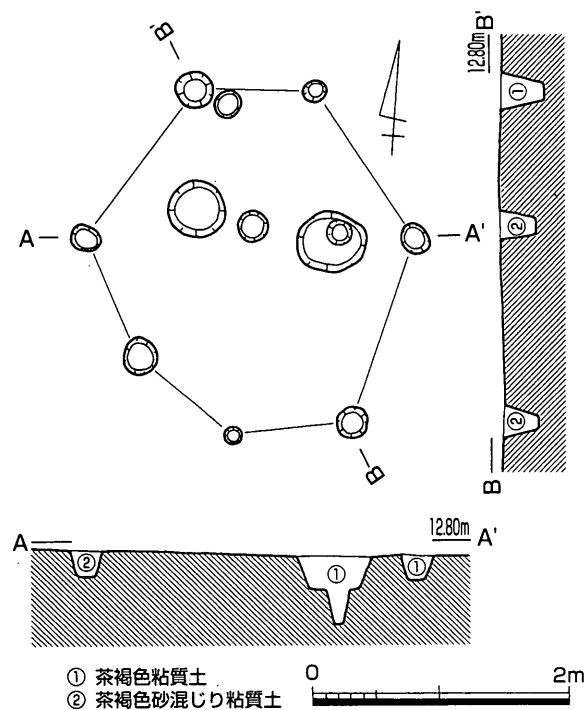
が、本来は伴っていた可能性が高いのでここで報告しておく。

887は扁平石斧で刃部は鋭くないが両刃である。柱状片刃石斧の欠損品を転用しており、割れた部分を部分的に研磨して再生している。

889～899は砥石である。891は敲石を兼ねている。895は両面とも使用頻度が高く、研磨部分は光沢をもつようである。897は側面部も使用しており、被熱して赤変している。898の研磨は弱い。899は部分的に台石にも使用している。

900～905は台石であるが、いずれも部分的に砥石としても使用している。901は楔形石器の分割に使用したのか、線状の痕跡が目立つ。904は線状の痕跡と窪みがあり、被熱して赤変している。905は砥石としての使用頻度も高い。

以上の出土遺物から、SH06は弥生時代中期前葉～中葉の所産と考えられる。



第287図 V区第2面SH07平・断面図 (1/60)

構の時期から考えると、弥生時代中期中葉頃が想定される。

SH08、SD19・20・21 (第288～291図)

調査区西側やや南寄りの、旧G7区で検出した竪穴住居である。平面形は長方形で、長辺4.8m、短辺2.8m、検出面から床面までは10～20cmの深さがある。

床面には壁溝は巡っていない。住居の中軸ライン(A-A')から60cmほど南西方向にずれた位置で、中軸に平行して柱穴が1.5mの間隔で3基並んでいる。住居の形状からみてこれが主柱穴になると考えられる。主柱穴は直径25cmの円形で、深さは15cmである。埋土は暗褐色灰色粘質土と茶灰色粘質土である。

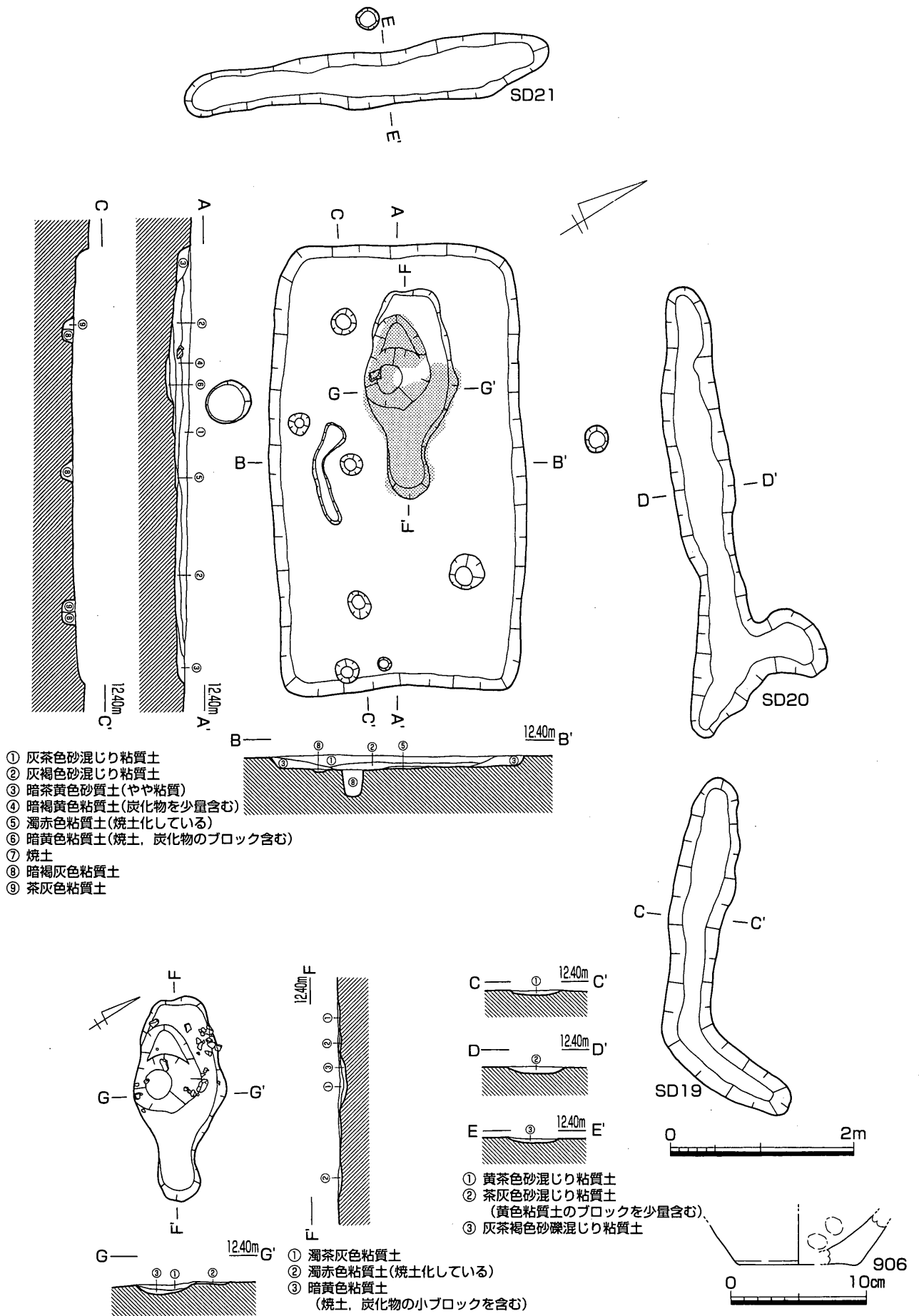
住居の西半部には土坑が1基ある。平面形は楕円形で長径1.0m、短径0.7m、深さ10cmである。土坑

SH07 (第287図)

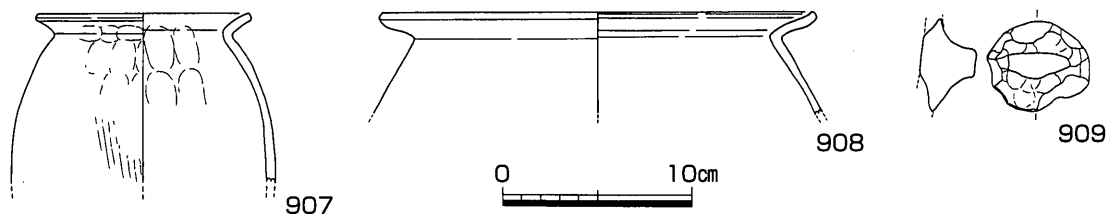
調査区西端のやや南寄りの、旧G6区で検出した竪穴住居である。壁面はなく柱穴のみの検出となった。直径2.6mの円周に乗る柱穴が7基あり、主柱穴と考えられる。主柱穴は直径10～30cmの円形で、深さは20～35cmである。埋土は茶褐色粘質土および茶褐色砂混じり粘質土の単一層である。この主柱穴の内側の中央に柱穴があるが、SH07を構成するものか否かは不明である。

壁溝や土坑はなく、柱穴のみで構成されている。立地場所はSH06と大差なく、付近の堆積状況からもあまり削平は考えにくい。壁面の痕跡が全くなかったことから、元々壁面を持たない平地式の住居の可能性がある。規模から見ても仮設的な小屋のようなものかもしれない。

遺物は全く出土していないことから、詳細な時期は不明であるが、柱穴の掘り込み面と周辺の遺



第288図 V区第2面SH08・SD19・20・21平・断面図、SH08内土坑平・断面図(1/60)、SD20出土遺物(1/4)



第289図 V区第2面SH08出土遺物(1)(1/4)

の西側の掘り込みは段になり、テラス状の面を形成している。土坑の下層には暗黄色粘質土が堆積しており、焼土と少量の炭化物ブロックを含んでいる。この土坑の周囲が床面より一段下がっているが、これは土坑の周囲で作業を行ったり、土坑の中のものをかき出すときに出来た窪みと考えられる。この部分には炭化物と焼土が広がっていた。

住居全体の埋土は灰茶色～灰褐色砂混じり粘質土が中心となっている。

また、SH08の西側と北側を取り囲むように溝(SD19～21)が断続的に巡っている。しかし南側と東側にはない。特にSD20・21はSH08に平行して1.5m離れた位置にあり、SH08を意識した規則的な配置と考えられ、SH08に付随した溝と考えたい。しかしSD19はSD20の延長上にあるが、端部がSH08とは反対の北側に屈曲して収束することから、SH08とは無関係かもしれない。しかしSD20の東端部付近もSD19と同様に北側に分岐している部分があるので、何か関連があるのかもしれない。SD19～21は幅60cm前後、深さは5cm程度と浅い。埋土はいずれも単一層である。溝出土の遺物はSD20から壺の底部(906)だけである。

SH08からの遺物の出土は少ない。土器は特に少なく、石器もサヌカイト製の小形の石器は少なく、敲石や砥石類が多い。

907・908は甕である。907の口縁部内面は丸みを帯びて屈曲し、端部は丸く収める。体部は上部の内・外面に指押さえを行い、さらに外面にはヘラミガキを施している。908の口縁部は鋭く屈曲し、内面を強くナデている。909は把手であるが、正確な器種は不明である。

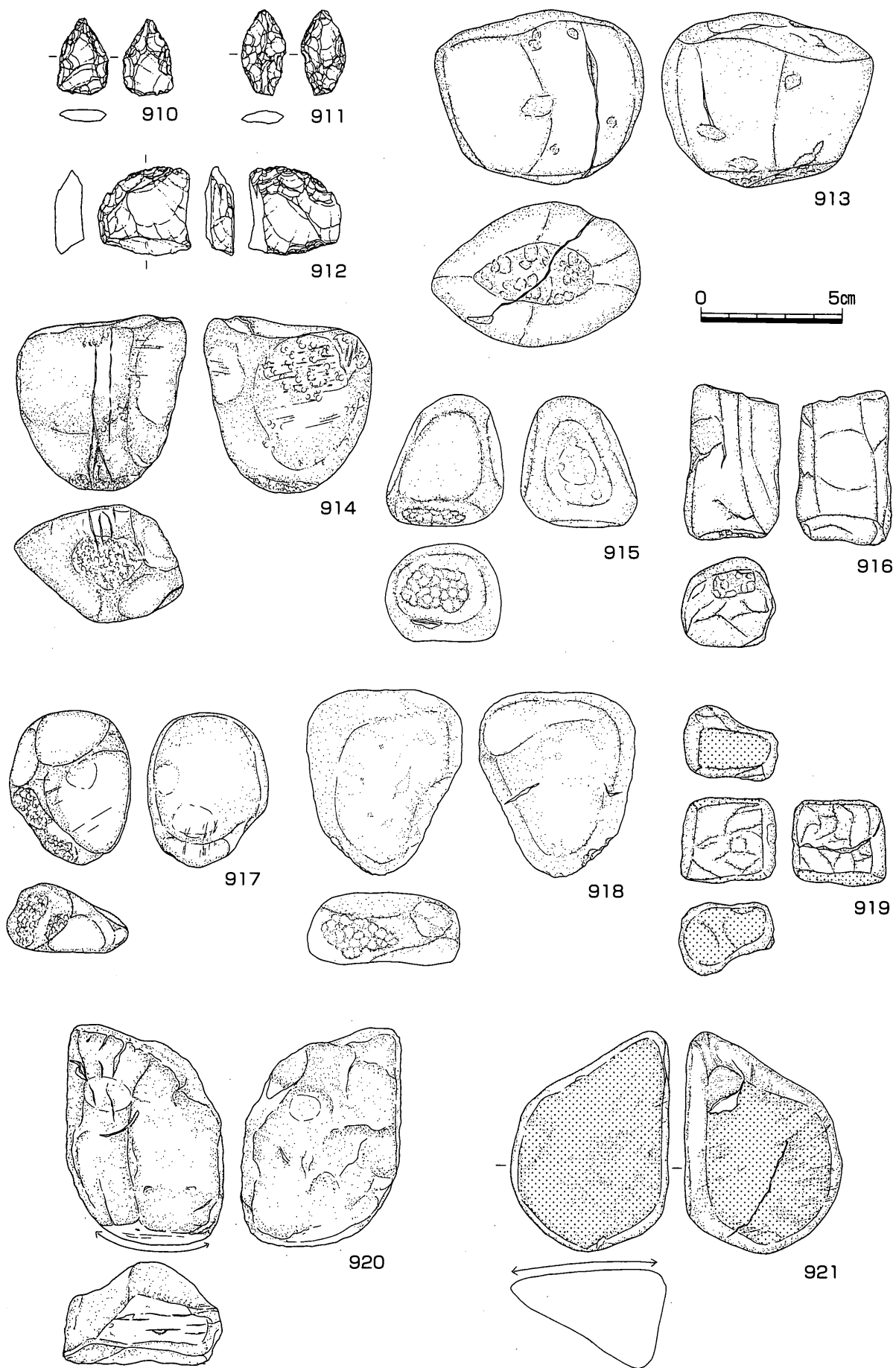
910は平基、911は凸基の石鏃である。911は鏃身の下半は均整がとれていない。912は楔形石器であるが、敲打痕は認められない。913～918は敲石である。914は花崗岩製であるほかは、砂岩製である。919・920は磨石である。920は握って指が当たる部分が摩滅している。921～924は砥石である。923は細かい擦痕が見られる。925は台石である。926は安山岩製の石鏃である。中央部分の幅は狭くなり、側縁部は丁寧に調整している。

以上の出土遺物から、SH08は弥生時代中期中葉の所産と考えられる。

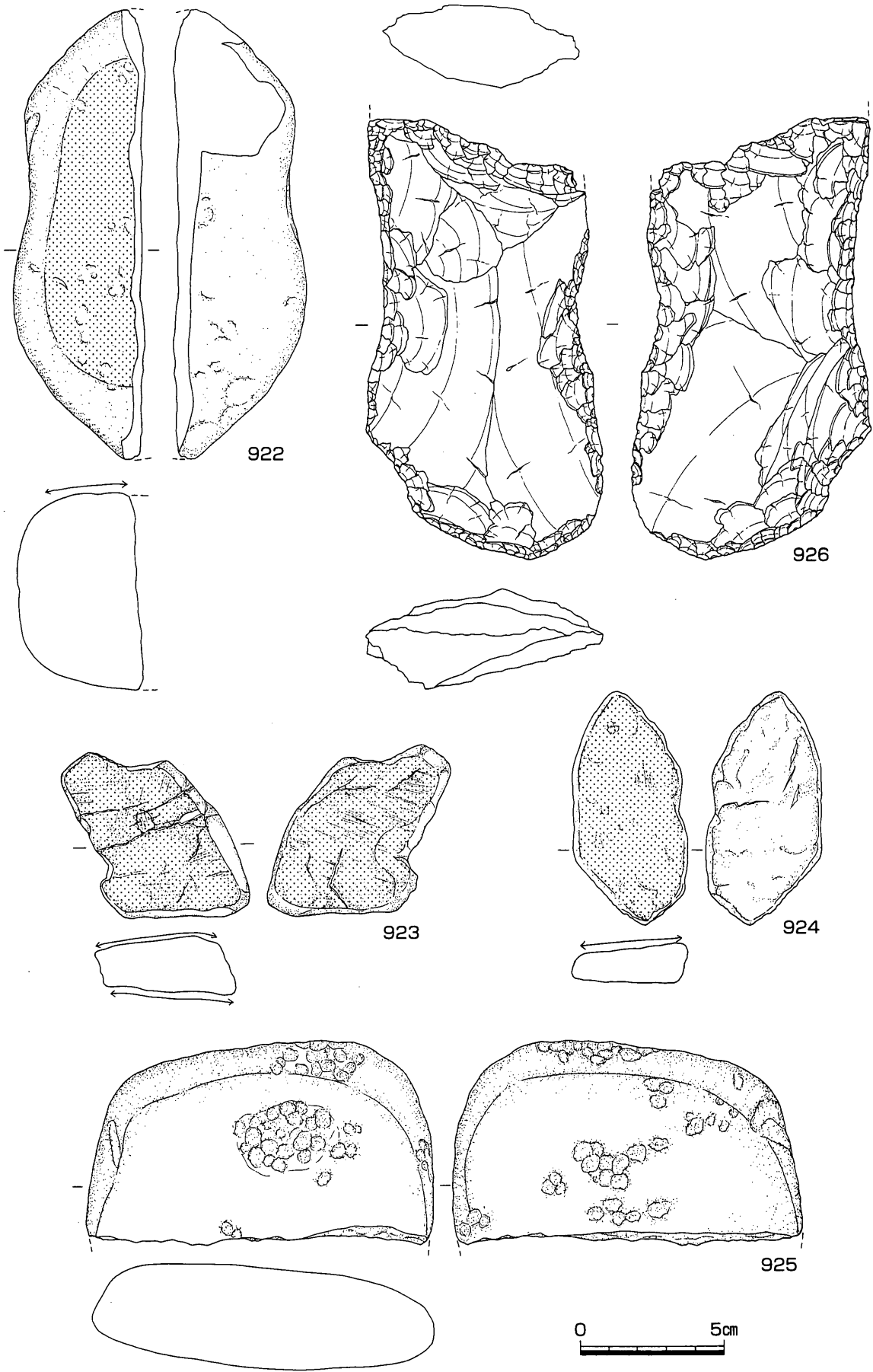
SH09 (第292～299・311図)

調査区西側やや中央部の、旧G7区の西壁際で検出した竪穴住居である。後述するSH10・11と重なっており、SH09の北東部分はこのSH10・11によりその上部を壊されているが、床面は削平されながらも残っていた。平面形は直径8.0～8.5mの円形であるが、北東部分が一部不整形になり、僅かに突出している部分がある。壁面の掘り込みは直線的であるが、僅かに段になる部分がある。検出面から床面までは45cmの深さがあり、比較的残りは良い。

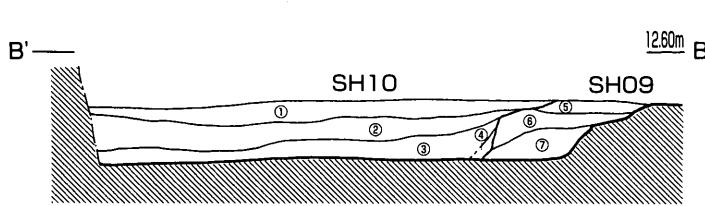
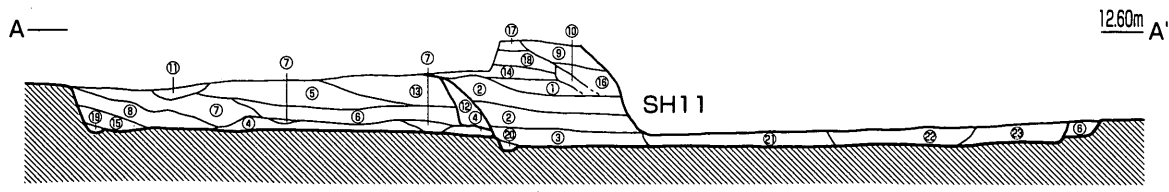
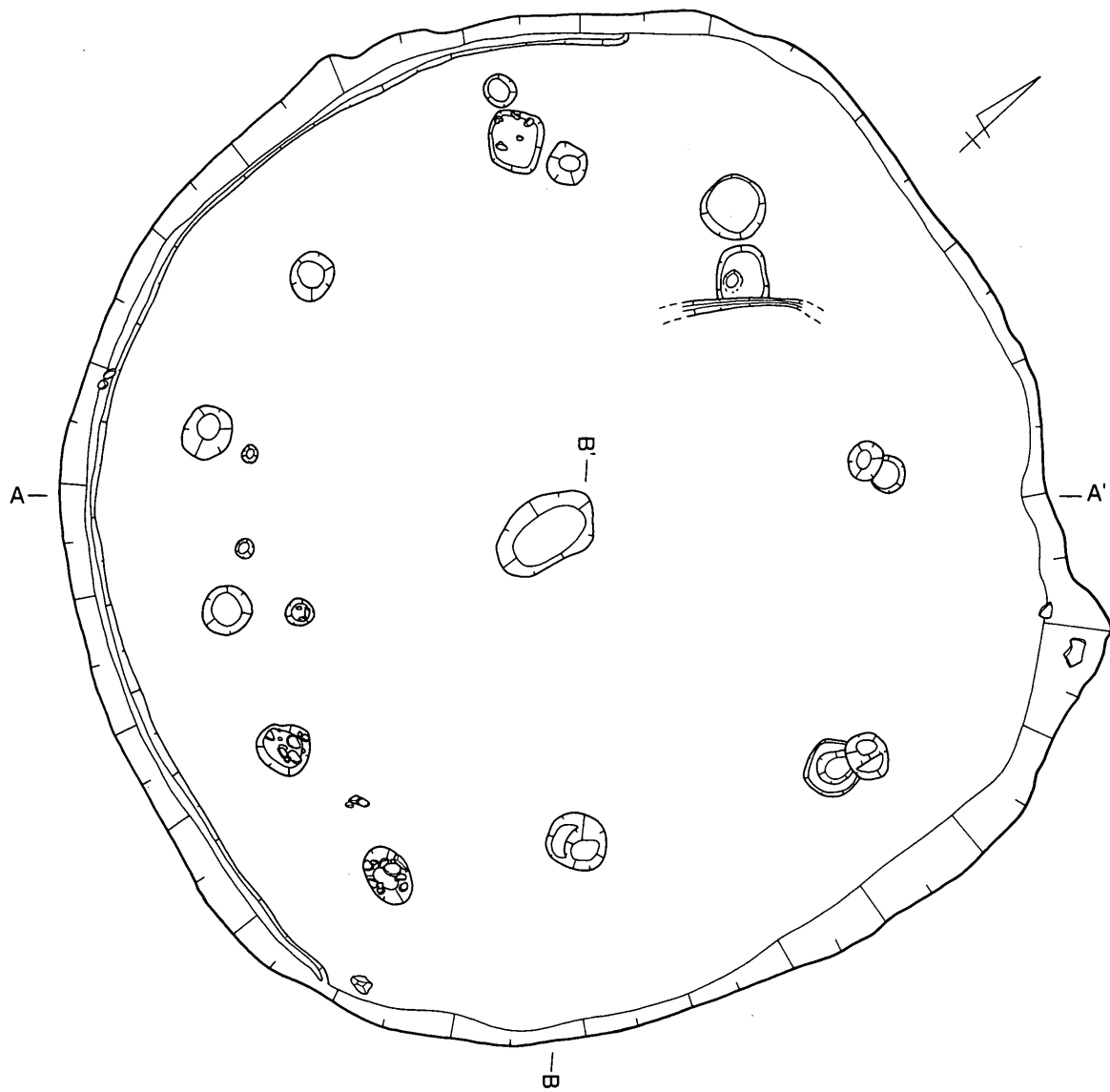
北西から南側にかけて、壁面の下場に接して壁溝が巡っている。これに対して反対側には巡っていない。壁溝は直径8.0mの円周に乗っている。幅10cm前後、深さは5cmで浅いものである。埋土は淡茶黄



第290图 V区第2面SH08出土遗物 (2) (1/2)

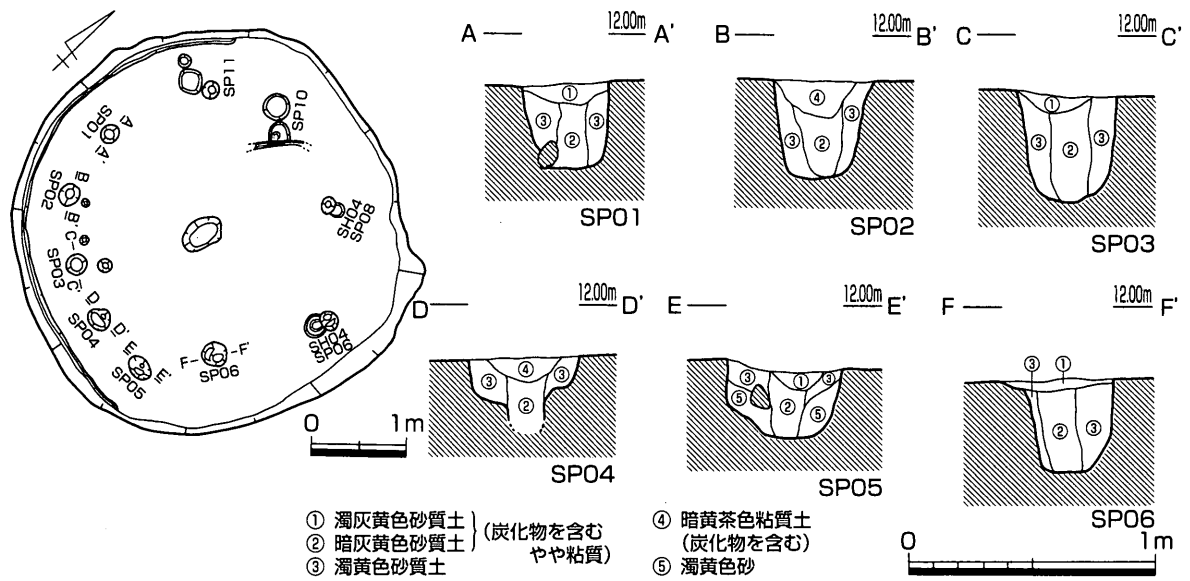


第291图 V区第2面SH08出土遗物(3)(1/2)

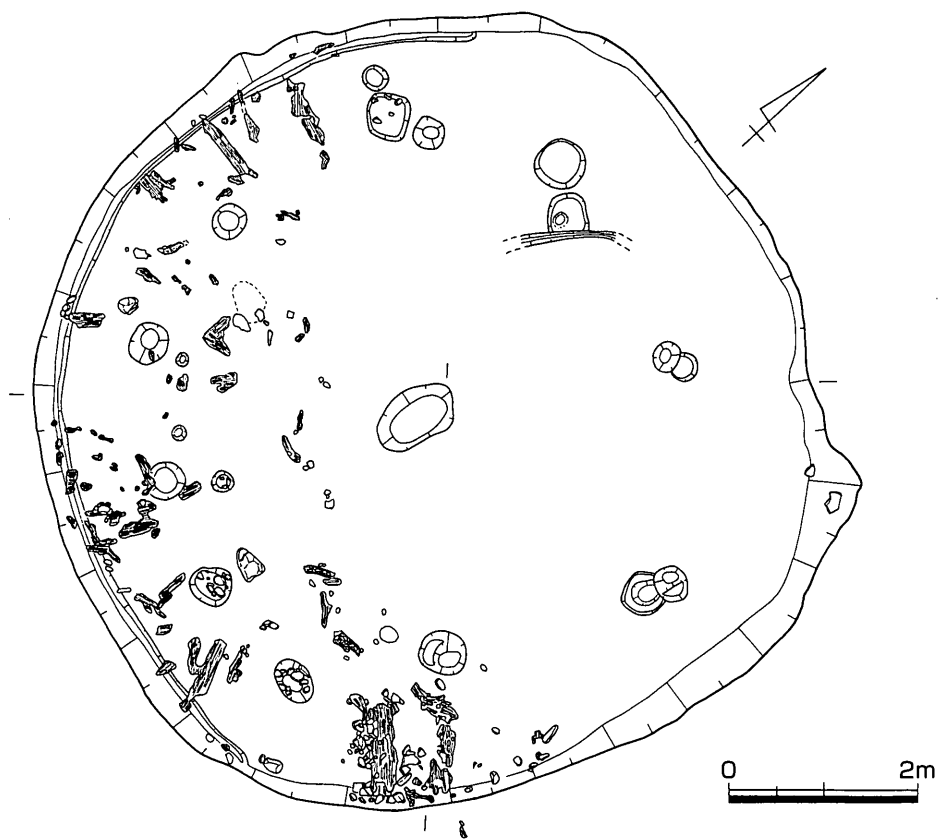


- | | | |
|---|--------------------|-------------------------------------|
| ① 灰茶色砂礫混じり粘質土 SH10
(明黄茶色粘質土のブロックを少量含む) | ⑦ 淡黄茶色粘質土 SH09 | ⑭ 淡灰茶色微砂混じり粘質土 SH10 |
| ② 褐茶色砂礫混じり粘質土 SH10 | ⑧ 茶黄色粘質土 SH09 | ⑮ 濁黄灰色微砂混じり粘質土 SH10 |
| ③ 灰褐茶色粘質土 SH10 | ⑨ 褐暗茶色砂混じり粘質土 SH10 | ⑯ 褐茶色砂礫混じり粘質土 SH10 |
| ④ 濁茶黄色粘質土 (炭化物を含む) SH10 | ⑩ 茶色砂質土 SH10 | ⑰ 淡灰茶色粘質土 SH10 |
| ⑤ 淡黄茶色砂礫混じり粘質土 SH09 | ⑪ ④より炭化物少ない SH09 | ⑱ 淡茶黄色粘質土 SH10 |
| ⑥ 淡黄茶色粘質土 SH09 | ⑫ 茶色砂礫混じり粘質土 SH10 | ⑳ 灰茶色粘質土 SH10 |
| | ⑬ 淡茶色砂礫混じり粘質土 SH10 | ㉑ 黄灰暗茶色粘質土 SH10 |
| | | ㉒ 灰暗茶色粘質土 SH10
(茶黄色粘質土の小ブロックを含む) |
| | | ㉓ 灰褐茶色粘質土 SH10 |

第292図 V区第2面SH09平・断面図 (1/60)



第293図 V区第2面SH09内SP断面図 (1/30)



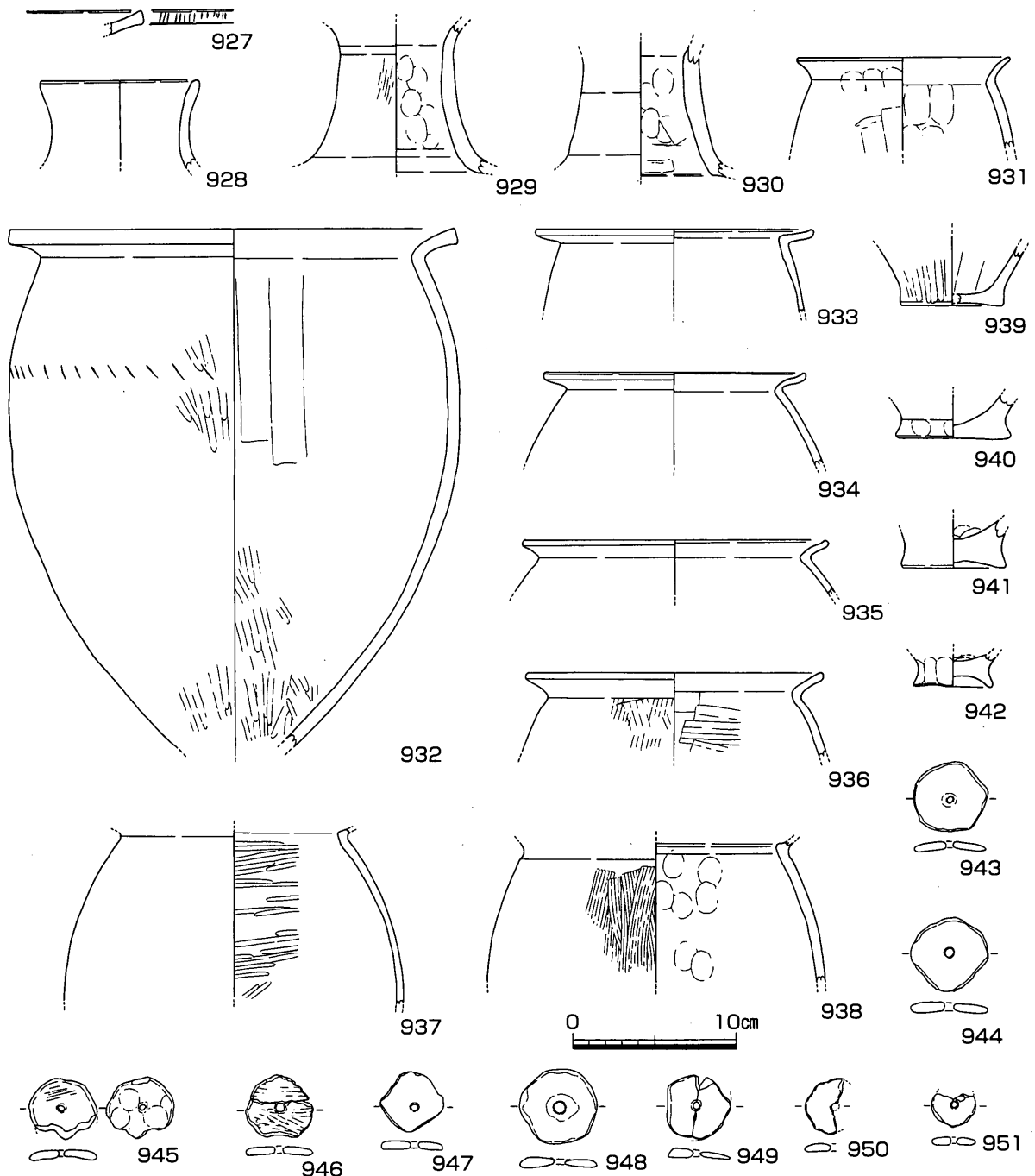
第294図 V区第2面SH09遺物・炭化材等出土状況図 (1/80)

色粘質土の単一層である。壁面の下場から内側に80cmほどの位置に、直径6.0mの円周に乗る柱穴が10基あり、支柱穴と考えられる。このうち2基が円周の少し内側になる。支柱穴は直径30~50cmの円形で、深さは30~40cmである。断面では暗灰黄色砂質土の柱跡を確認している。

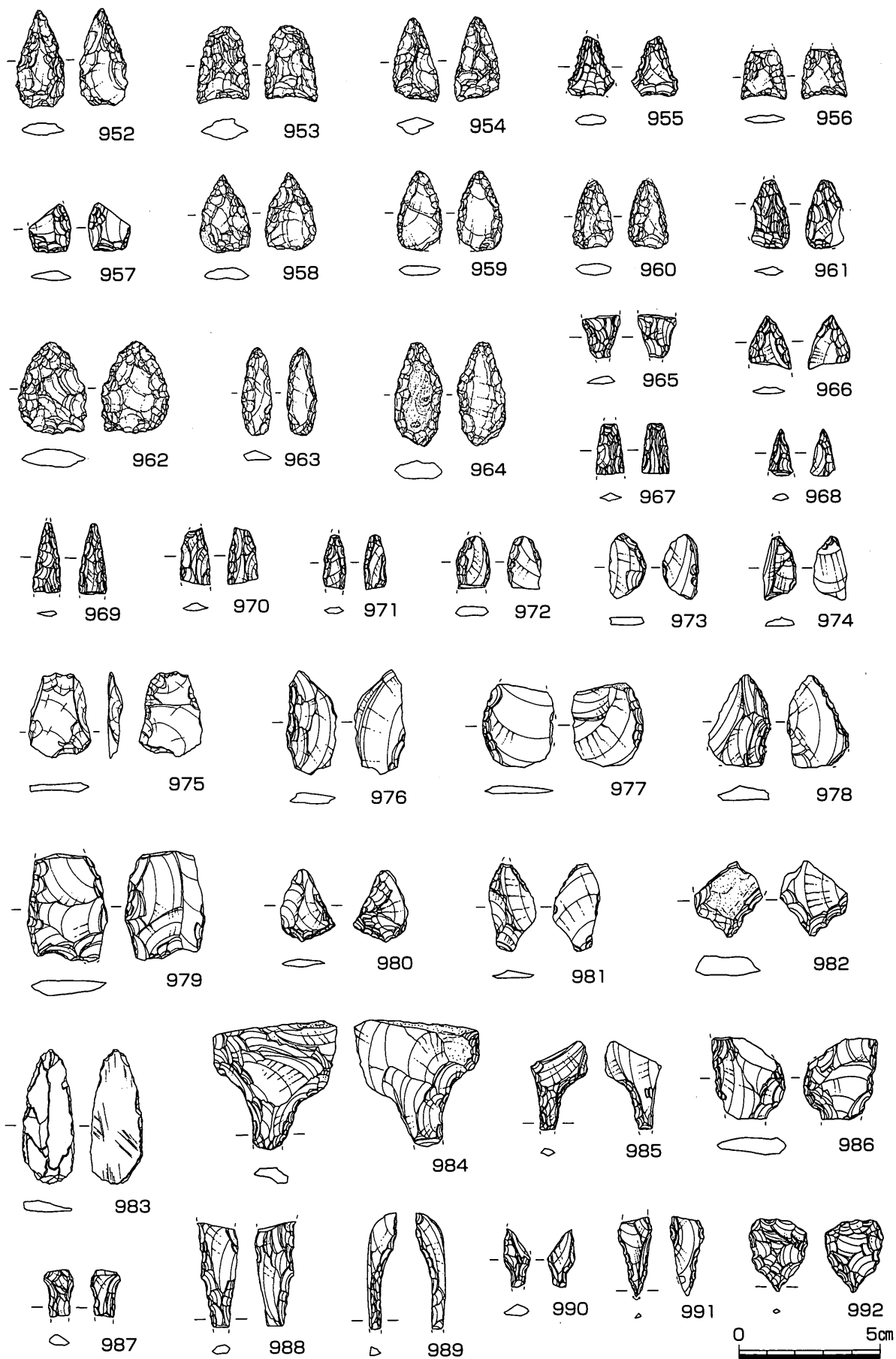
中央部分には土坑が1基ある。平面形は楕円形で、長径0.9m、短径0.55m、深さ28cmである。埋土は濁灰黄色系の砂質土と思われる。

SH09は焼失しており、西側半分の壁際では焼け落ちた炭化材が多数出土している。しかし床面は焼けていない。東側半分はSH10・11により削平されたため、炭化材が検出されなかったと考えられる。

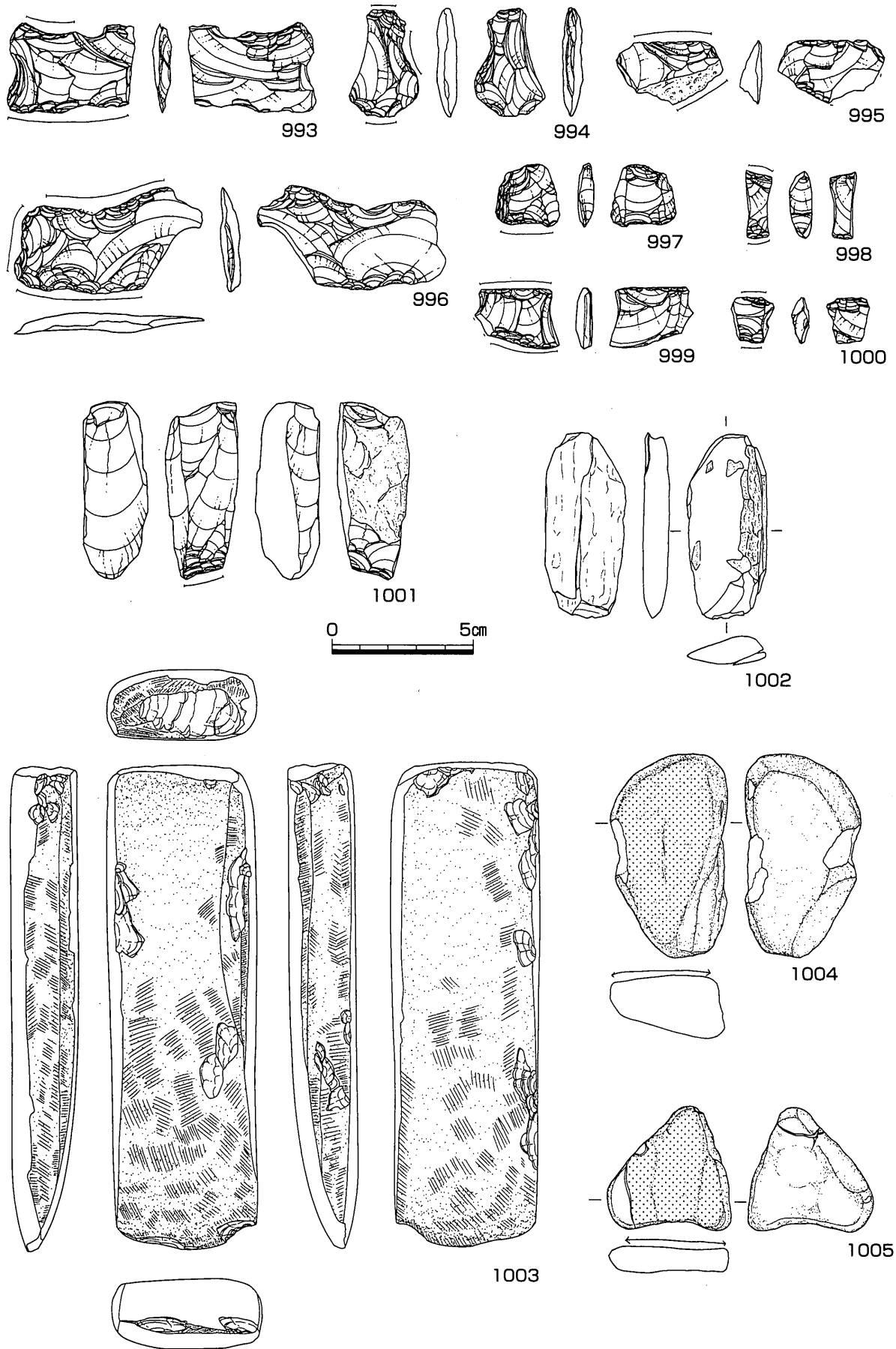
SH10・11と重なっている関係で十分に土層観察ベルトが設定出来なかった部分があるが、確認できた



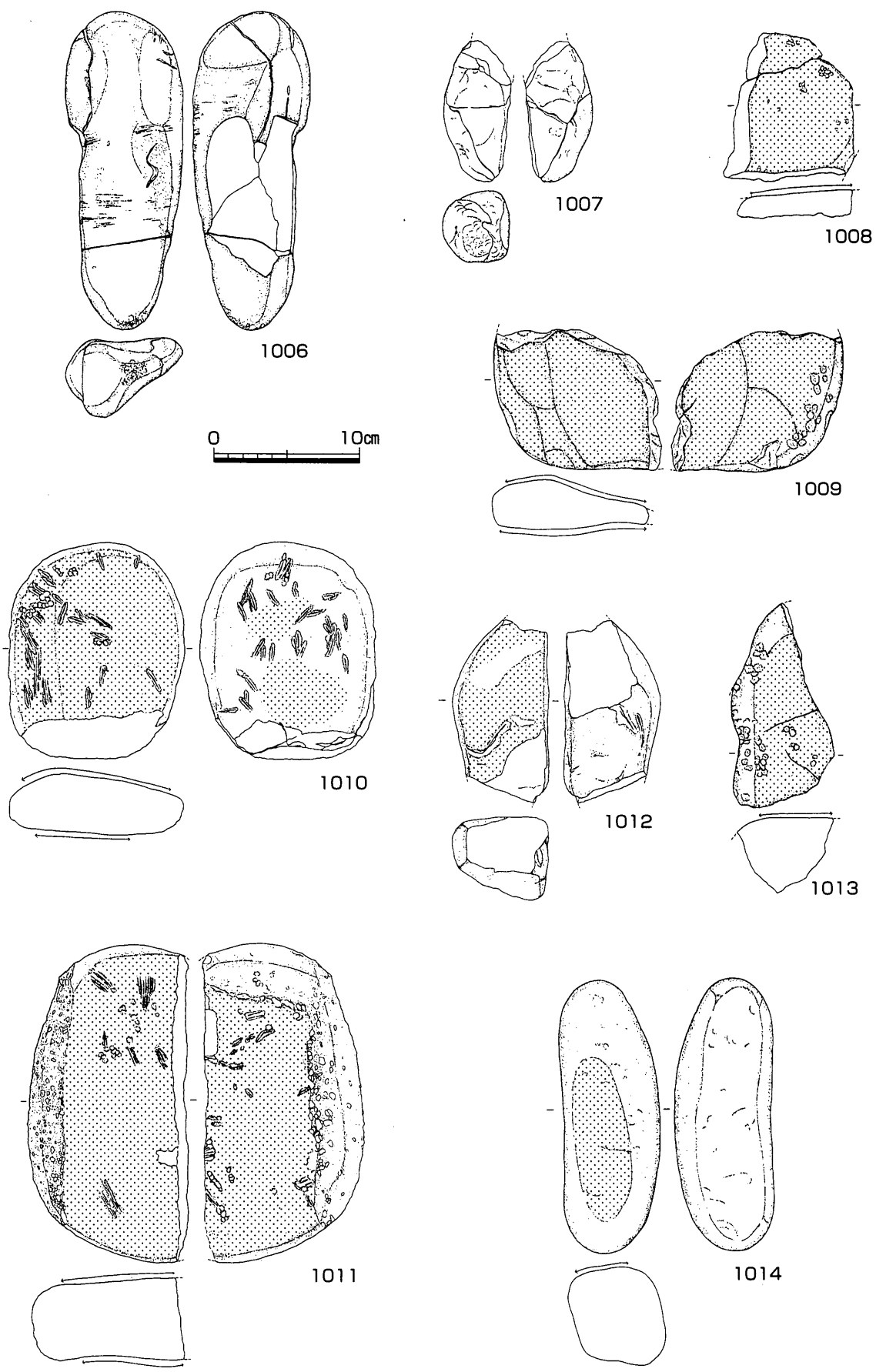
第295図 V区第2面SH09出土遺物 (1) (1/4)



第296图 V区第2面SH09出土遗物 (2) (1/2)



第297图 V区第2面SH09出土遗物 (3) (1/2)



第298图 V区第2面SH09出土遺物(4)(1/4)

部分ではSH09の埋土は淡黄茶色粘質土が主体となっている。

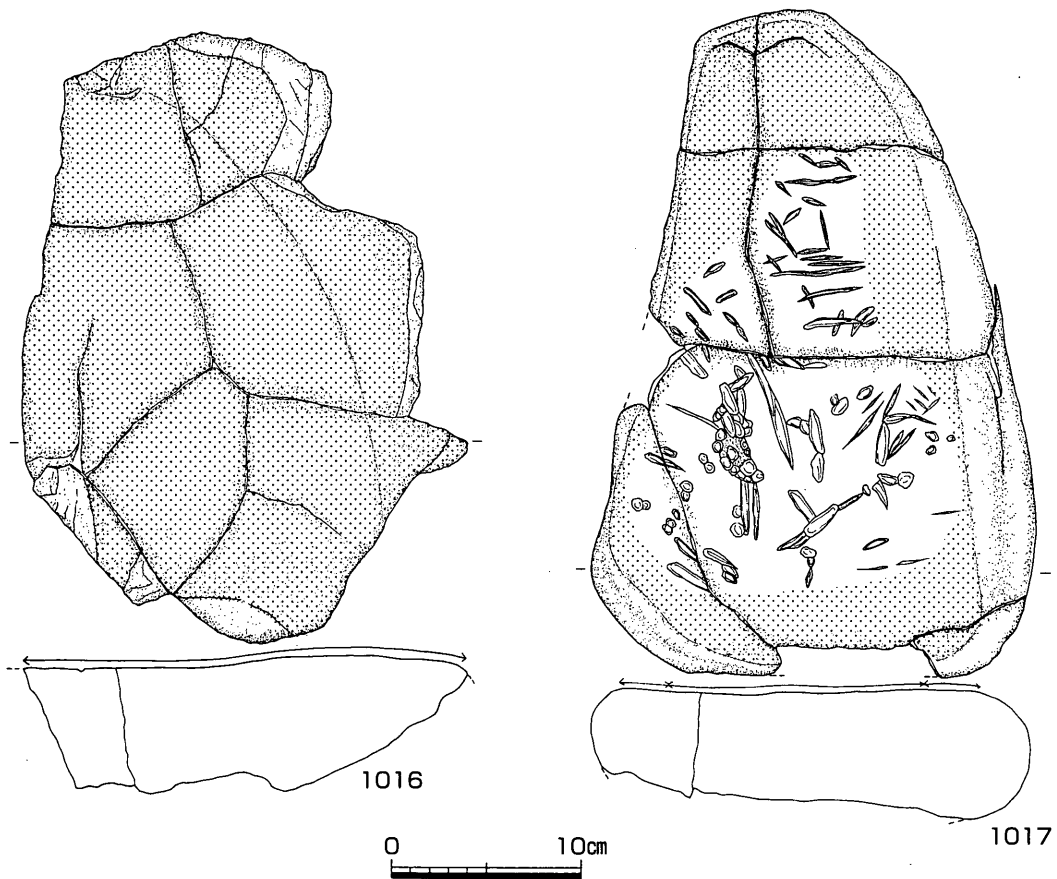
遺物は主に西側半分の削平を受けていない部分で出土した。土器の出土量より石器のほうが多くなっている。

927～930は壺である。929・930は口縁部が欠損しているが、頸部は細く内傾している。頸部内面には指押さえが目立つ。

931～938は甕である。931の口縁部は外反して端部は先細りになる。口縁部屈曲部の外面には指押さえを施す。胎土に結晶片岩を含んでいる。932の口縁部は端部に向かって肥厚している。体部は最大径が上半にある。外面は摩滅しているがヘラミガキが認められる。また上半部にはヘラ圧痕文を巡らせている。内面は下半部にヘラミガキを施す。933～935の口縁部は鋭く屈曲し、内面を強くナデている。936の口縁部は直線的に開く。体部にはハケ目を施すが、ハケ目原体の跡がよく残る。胎土に結晶片岩を含んでいる。937は体部内面に間隔の開いたヘラミガキを施している。

943～951は紡錘車である。943・944・946・947・949はきれいな円形になっておらず、直線的な部分が多い。

952～971は石鏃である。952～956は凹基である。952・954の基部は僅かに湾曲する程度である。957～963は平基である。958は鏃身下部から基部にかけて一部に自然面が残っている。959の鏃身には主要剥離面が残っている。961は鏃身の主軸と基部がずれている。963の基部は確かに平らであるが、全体の形態としては凸基に近い。964は凸基で、鏃身の表裏には自然面と主要剥離面が残っている。965は凸基有茎式の茎部である。



第299図 V区第2面SH09出土遺物(5)(1/4)

972～982は石鏃の未製品である。973・974・976は素材剥片に僅かに調整を加えた段階である。982は凸基有茎式になると考えられるが、自然面側の基部にはまだ調整が加えられていない。

983は結晶片岩製の磨製石鏃である。磨製石斧の破片を利用し、破片の側縁部に調整を施して石鏃にしている。

984～992は石錐である。987のつまみ部は小さい。991は錐部先端部に摩滅痕が認められる。992は角度のある剥離によって錐部を作り出している。

993～1000は楔形石器である。993・994は側縁部が打製石庖丁の抉りのようになっている。あるいは転用したのかもしれない。996は3辺に敲打痕がある。998は截断面に両極打撃の痕跡が認められる。

1001は楔形石器をそのまま縦長剥片石核としたものである。

1002は扁平石斧で刃部は両刃になっている。柱状片刃石斧の欠損品を利用している。基端部には柱状片刃石斧時の研磨面が残っている。結晶片岩製である。

1003は大形の扁平片刃石斧である。刃部は部分的に欠損している。基端部はあまり丁寧には作っておらず、研磨も部分的である。使用時のものとは考えにくい擦痕が多数認められる。

1004・1005・1008～1014・1016・1017は砥石である。1008・1012・1013は被熱して赤変している。1009はよく使い込んだため側縁に向かって薄くなっている。1010は砥石として使用しているが線状の痕跡が認められる。1011は両面とも非常によく使い込んでいる。1014は敲石のような形状であるが、端部には敲石の痕跡はなく、片面を砥石として使用している。1016・1017は被熱して赤変しており、割れている。1017は台石としても使用している。

1006・1007は敲石である。1006は手に握った時の手擦れ痕がある。

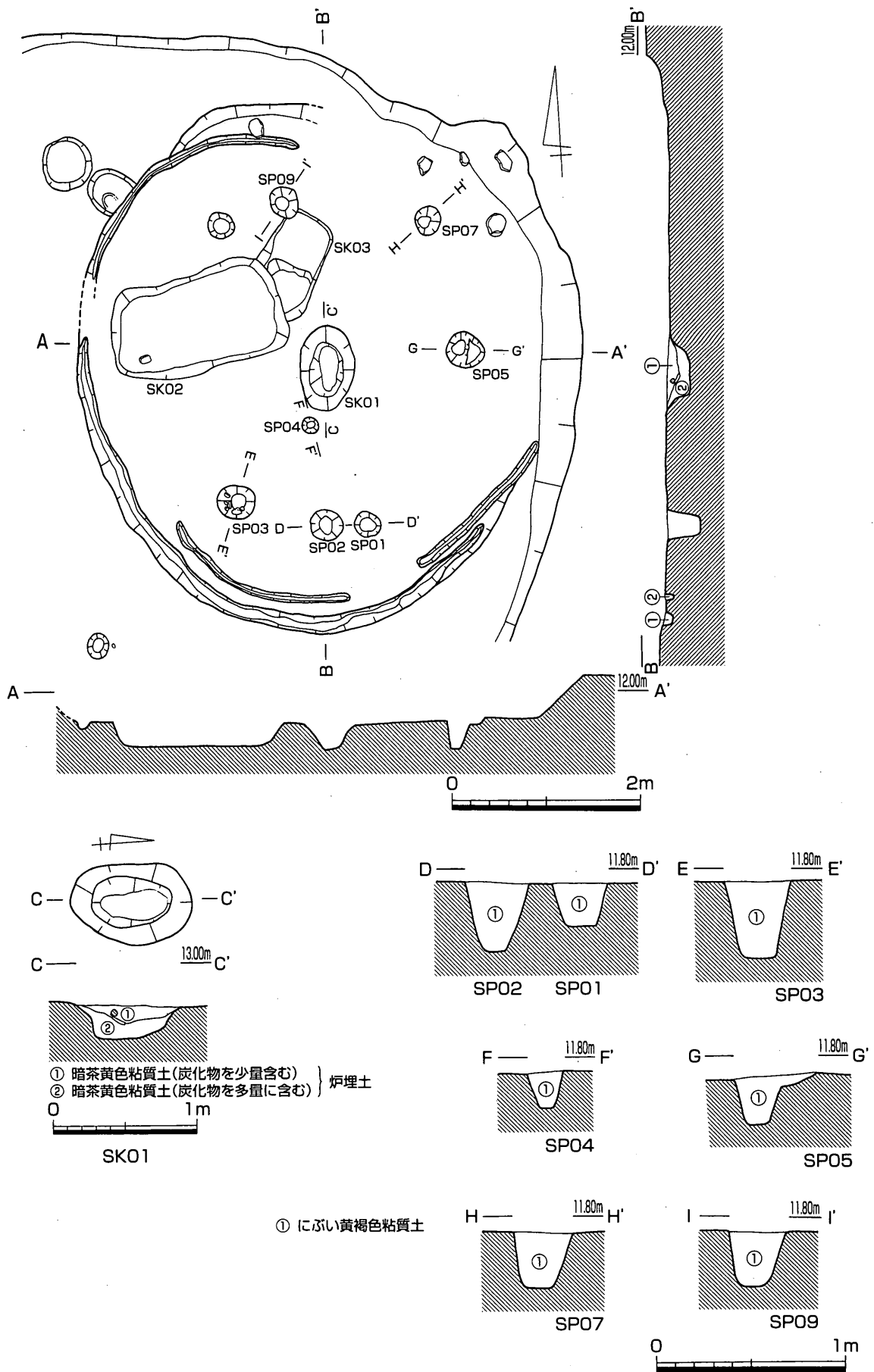
以上の出土遺物から、SH09は弥生時代中期中葉の所産と考えられる。

SH10（第300～304・311図）

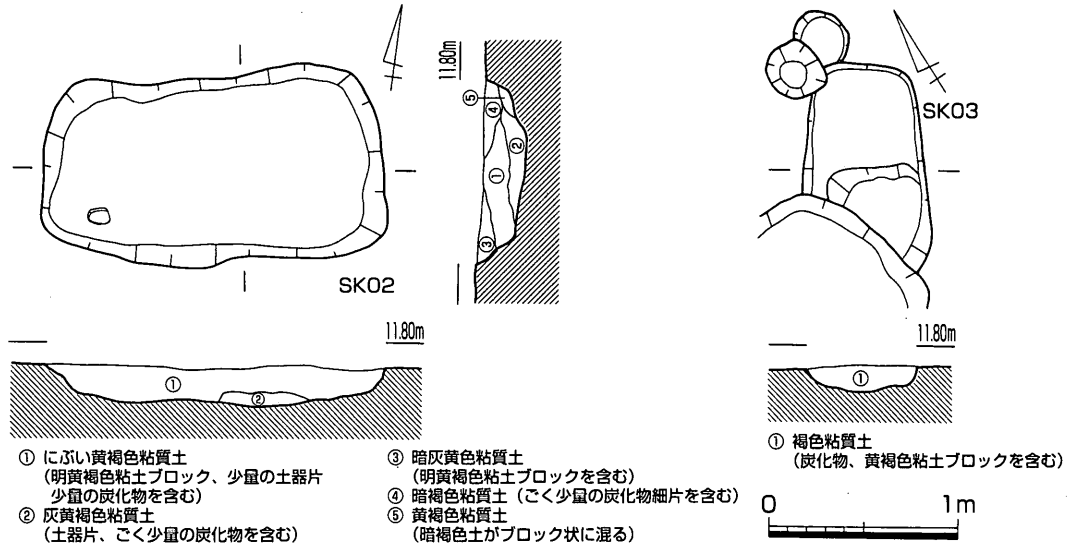
調査区西側やや中央部の、旧G7区の西壁際で検出した竪穴住居である。SH09・11と重なっており、SH09を壊し、SH11に壊されている。SH09の埋没後に、SH09の北東部に掘り込んでいる。平面形は直径5.5mの円形である。当初、SH09の埋土との識別が出来なく、SH09の掘り込み途中で検出したため、上部は平面的に検出出来なかった。SH09の土層観察ベルトB-B'（第292図）によると、壁面の掘り込みは段になり、上部は緩やかに掘り込んだ後に急傾斜になる。検出面から床面までの深さは45cmである。北東部の壁はSH09と重なっている。

床面には壁溝が2条巡っているが、両者とも北東部分にはない。内側のものは直径4.6mの円周に乗るが、住居の南側のみで検出された。外側のものは直径4.8mの円を描く。幅10～20cm、深さ5cm、埋土は灰茶色粘質土の単一層である。外側の壁溝の内側90cmのところ、直径3.4mの円周にのる柱穴が5基あり、主柱穴と考えられる。主柱穴は直径25～40cmの円形で、深さ25～40cmである。埋土は、にぶい黄褐色粘質土の単一層である。この5基の主柱穴以外にも、円周に乗る柱穴が4基ある。壁溝が2条あり、後述する土坑が3基あることから、この円周上で主柱穴の建て替えを行っていたと考えられる。

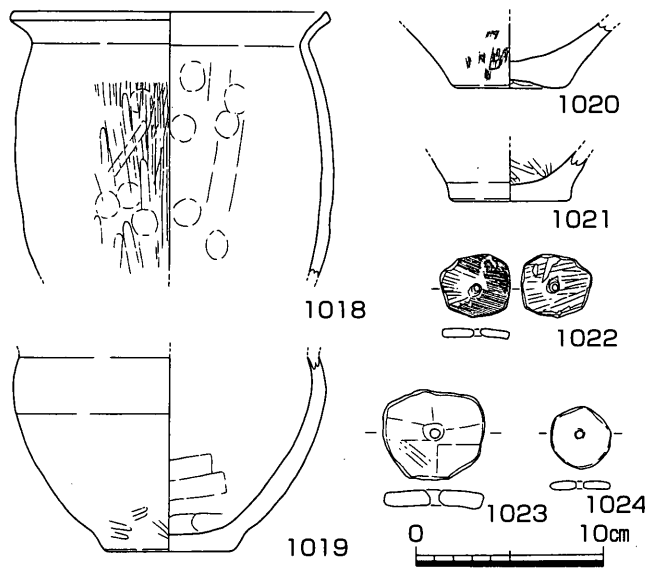
住居の中央部に1基と、北西～西側に2基の合計3基の土坑がある。中央部の土坑（SK01）は、平面形は楕円形である。長径0.85m、短径0.55m、深さ25cmである。僅かに段を形成して掘り込んでいる。埋土は暗茶黄色粘質土であるが、下部には炭化物が多量に堆積していた。西側の土坑（SK02）の



第300図 V区第2面SH10平・断面図 (1/60)、SH10内SK01平・断面図 (1/40)、SH10内SP断面図 (1/30)



第301図 V区第2面SH10内SK02・03平・断面図 (1/40)



第302図 V区第2面SH10出土遺物 (1) (1/4)

平面形は長方形である。長辺1.8m、短辺0.9~1.0m、深さ20cmである。掘り込みは緩やかで、埋土はにぶい黄褐色粘質土が主体となっている。全体に少量の炭化物を含んでいる。北西部の土坑 (SK03) は南西部分をSK02により壊されている。平面形は長方形で、検出部分での長辺は1.0m、短辺0.6m、深さ15cmである。掘り込みは緩やかで、底面の南側は一段低くなっている。埋土は褐色粘質土の単一層である。

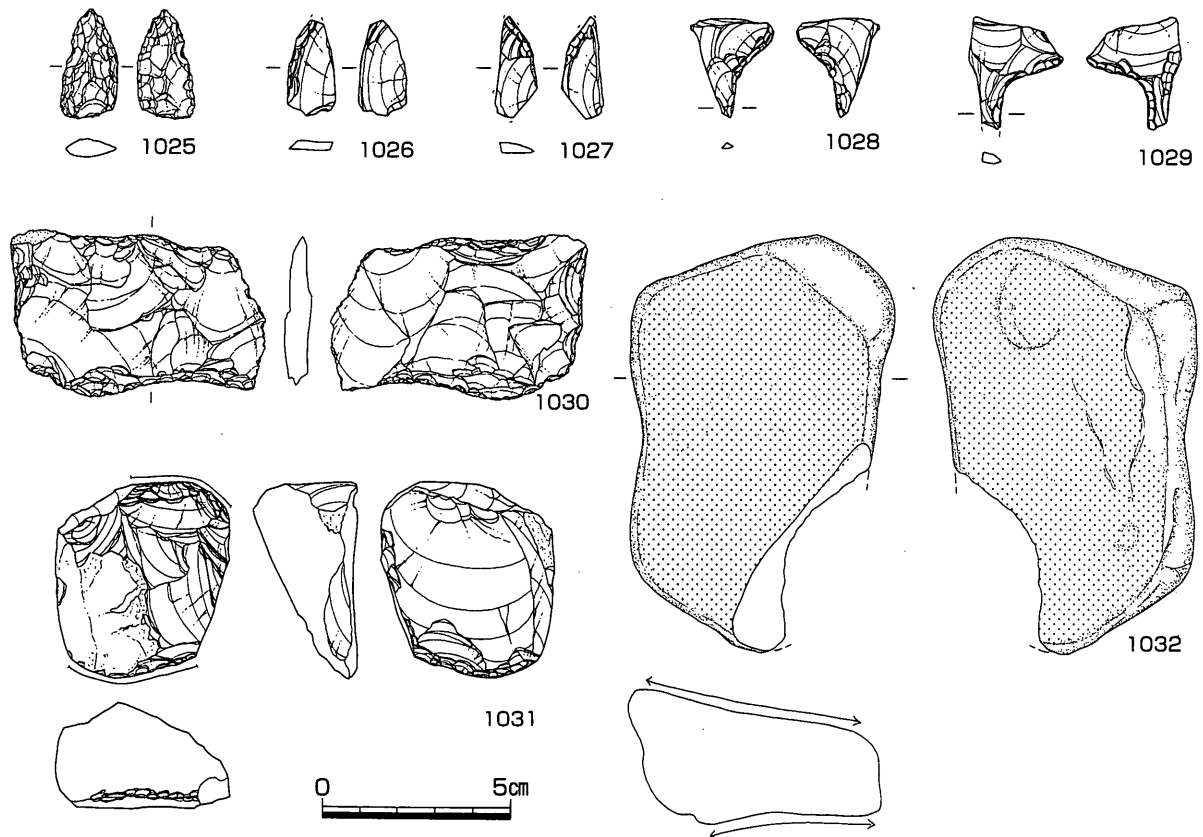
住居全体の埋土は灰褐色系の粘質土が主体となっている。基本的に水平に堆積し、特に大きな乱れもない。

出土した遺物は少ない。砥石や台石は住居の北東部での出土が多かった。SH10は

その上部を一部SH09と同時に掘削したため、一部SH10の遺物がSH09に混入した可能性はある。

1018は甕である。口縁部は僅かに外反し、開き方は弱い。体部には膨らみがなく、外面はハケ目の後にヘラミガキを施している。1019~1021は壺および甕の底部~体部である。1019の底部は突出している。1020は上げ底である。1022~1024は紡錘車である。

1025は平基の石鏃であるが、基部は斜めになっている。1026・1027は石鏃の未製品である。1028・1029は石錐である。1030は打製石庖丁である。背部の一部に自然面が残る。刃部は両面から作り出し、内湾している。側縁部は片側のみ調整している。1031は楔形石器である。表面に自然面を残し、裏側には主要剥離面を残す。母岩から分割した初期の段階で、上部はまだ厚みを残している。1032~1034・1037は砥石である。1037は台石としても使用している。1035・1036は台石である。1036は凹石に近いが、両面



第303図 V区第2面SH10出土遺物(2)(1/2)

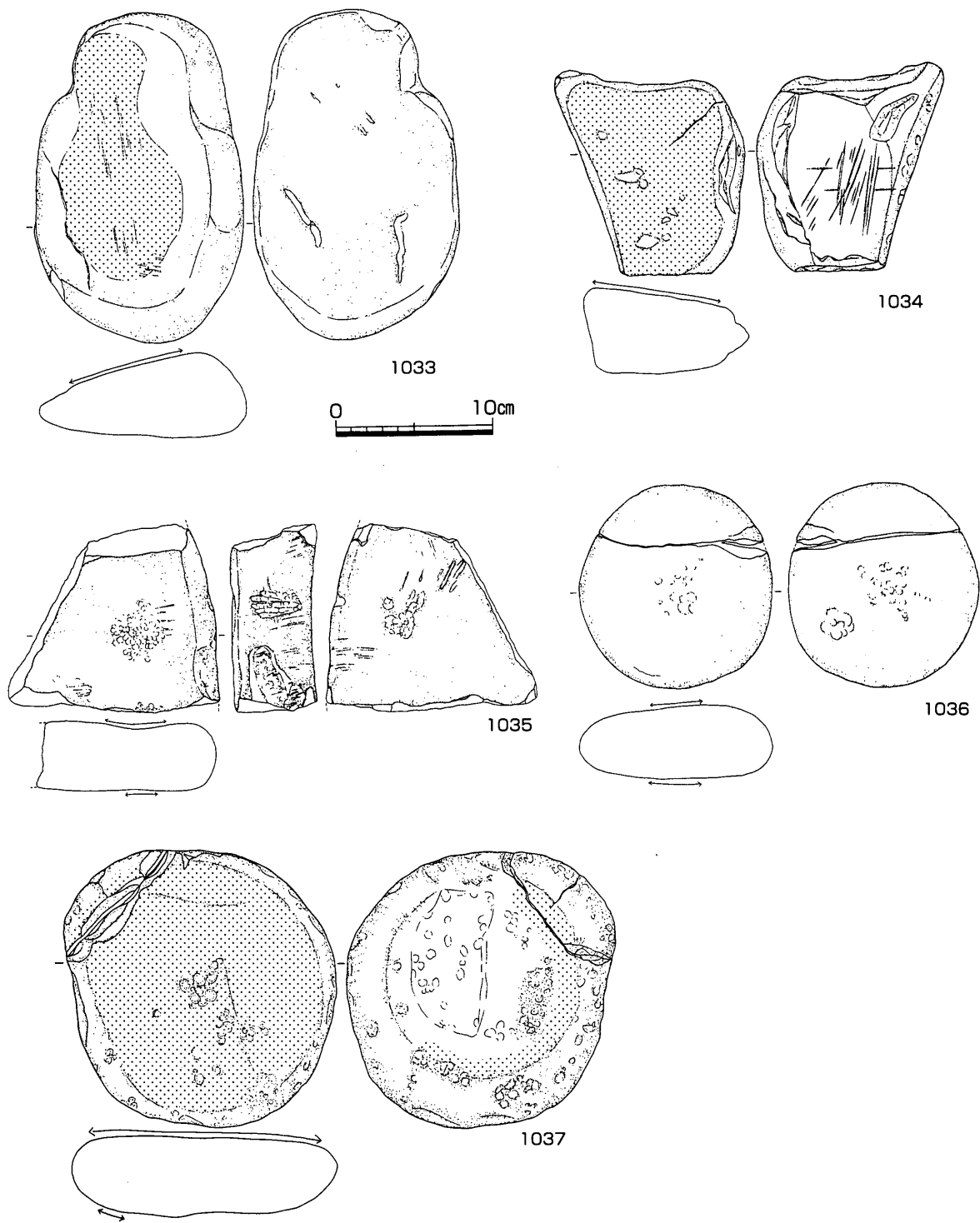
とも中央部は平坦である。直接、手に持つには大きいので台石に分類した。
 以上の出土遺物から、SH10は弥生時代中期中葉の所産と考えられる。

SH11 (第305~311図)

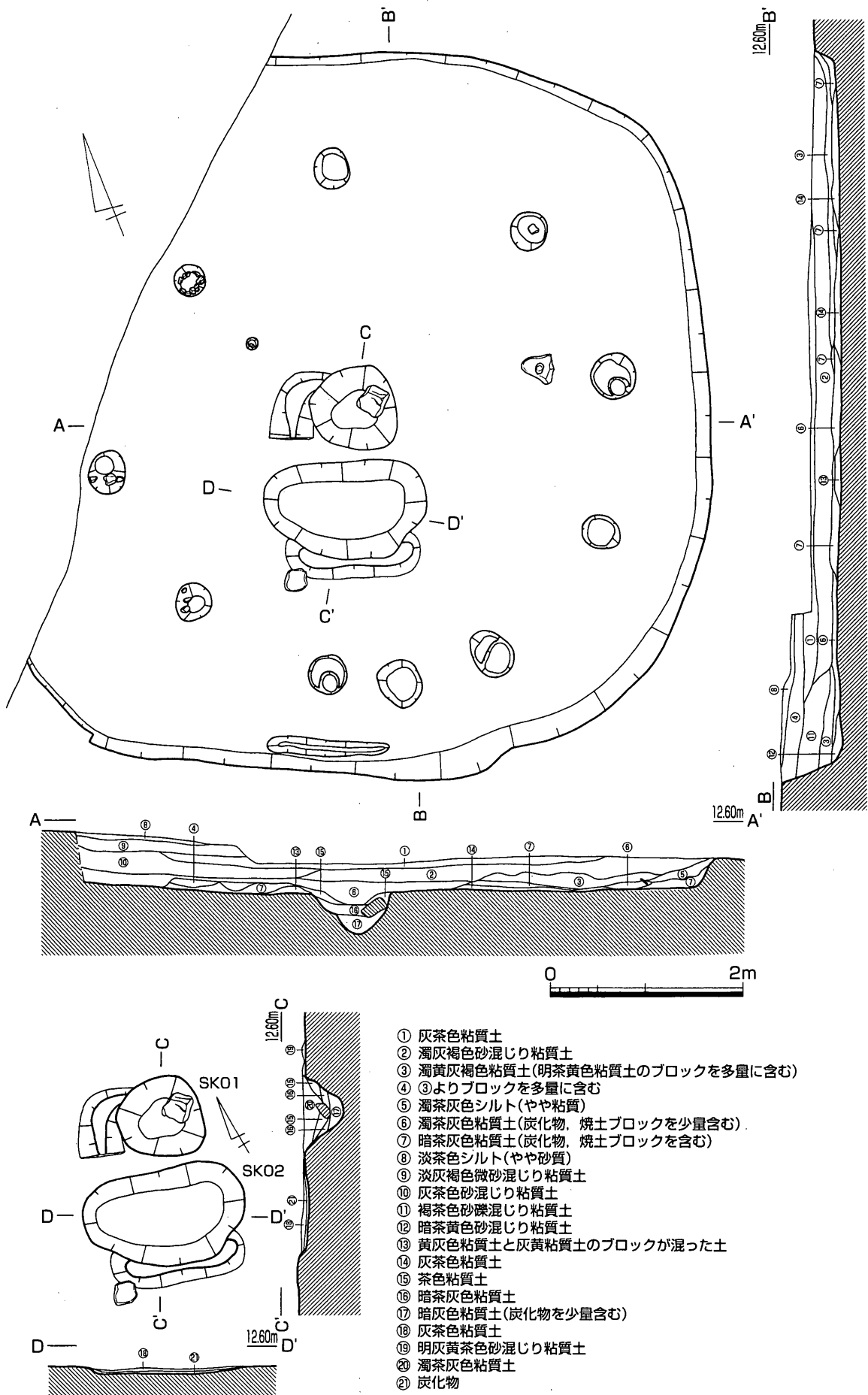
調査区西側やや中央部の、旧G7区の西壁際で検出した竪穴住居である。SH09・10と重なっているが、両者の埋没後に建てられている。西側部分は調査区外になっている。平面形は隅丸方形である。南北方向で7.9m、東西方向は検出部分で6.5mであるが、東西方向も南北方向と同じ長さになりそうである。壁面の掘り込みは直線的である。検出面から床面までは残りの良い部分で60cmの深さがある。

壁溝は南側で1.3mほどの長さが検出されたにとどまる。幅15cm、深さ5cmである。壁面から内側に0.6~1.3mのところ、直径5.2mの円周に乗る柱穴が9基あり、主柱穴と考えられる。主柱穴は直径40cm前後の円形で、深さ20~45cmである。柱痕が確認出来たものもある。

中央部分には南北に並んで土坑が2基ある。中央部分の土坑(SK01)は、平面形は直径0.9mの円形であるが、直線的な部分もある。深さは40cmほどである。暗茶灰色系の粘質土が堆積している。炭化物や焼土は検出されていない。土坑内から砥石(1083)が出土している。この土坑の西側には8cmほどの盛り上がりのある土手状のものが見られる。黄灰色粘質土と灰黄色粘質土を混ぜた土で出来ている。この土手を覆うようにその西側には炭化物と焼土を含む暗茶灰色粘質土が堆積している。南側の土坑(SK02)は平面形が楕円形で、長径1.7m、短径1.0mであるが、深さは5cmと浅いものである。掘り込みも緩やかで、浅い皿状になっている。底部には全体に炭化物が堆積していた。この土坑の南側に

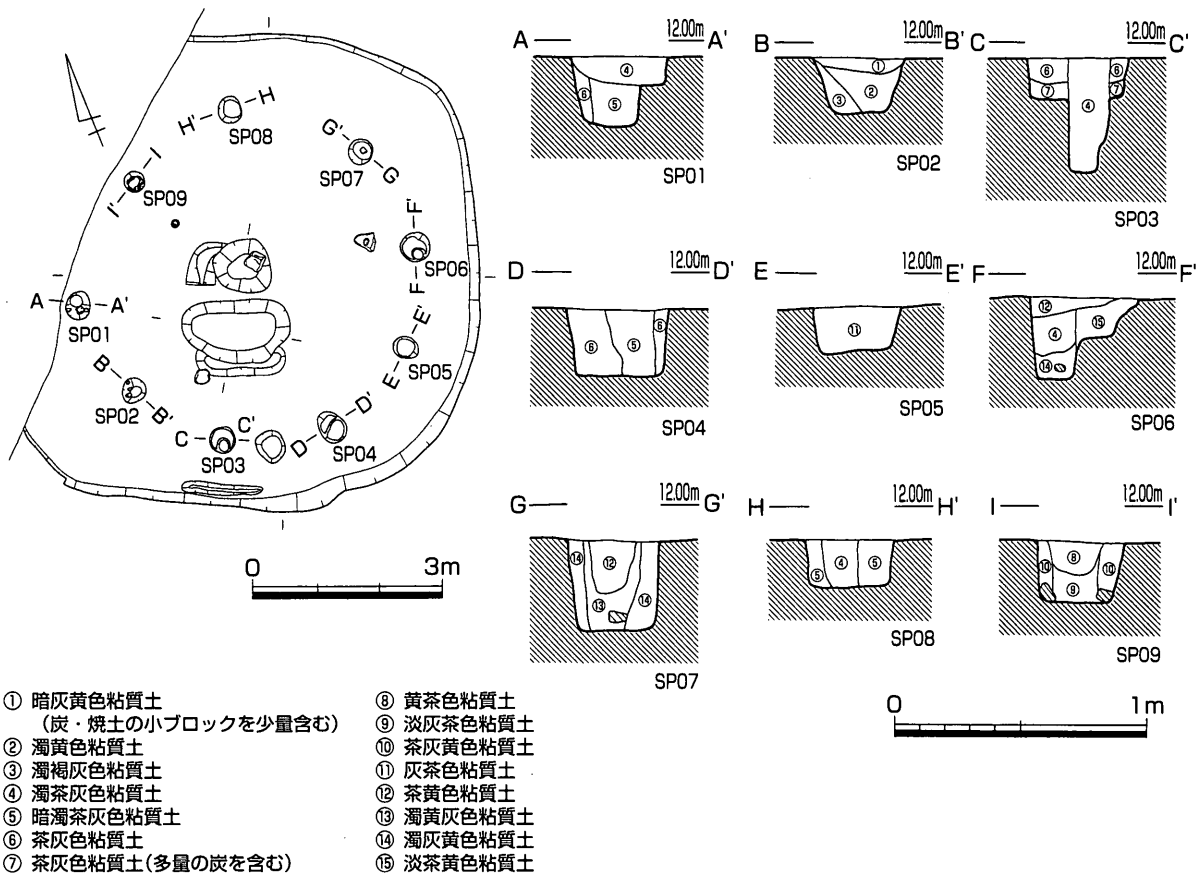


第304図 V区第2面SH10出土遺物(3)(1/4)

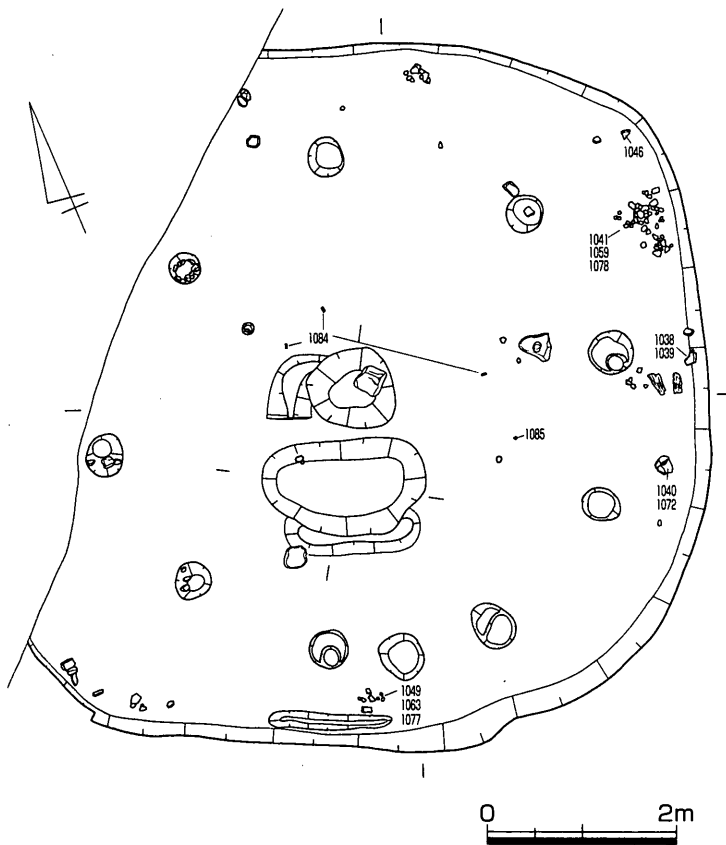


- ① 灰茶色粘質土
- ② 濁灰褐色砂混じり粘質土
- ③ 濁黄灰褐色粘質土(明茶黄色粘質土のブロックを多量に含む)
- ④ ③よりブロックを多量に含む
- ⑤ 濁茶灰色シルト(やや粘質)
- ⑥ 濁茶灰色粘質土(炭化物、焼土ブロックを少量含む)
- ⑦ 暗茶灰色粘質土(炭化物、焼土ブロックを含む)
- ⑧ 淡茶色シルト(やや砂質)
- ⑨ 淡灰褐色微砂混じり粘質土
- ⑩ 灰茶色砂混じり粘質土
- ⑪ 褐茶色砂礫混じり粘質土
- ⑫ 暗茶黄色砂混じり粘質土
- ⑬ 黄灰色粘質土と灰黄粘質土のブロックが混った土
- ⑭ 灰茶色粘質土
- ⑮ 茶色粘質土
- ⑯ 暗茶灰色粘質土
- ⑰ 暗茶灰色粘質土(炭化物を少量含む)
- ⑱ 灰茶色粘質土
- ⑲ 明灰黄茶色砂混じり粘質土
- ⑳ 濁茶灰色粘質土
- ㉑ 炭化物

第305図 V区第2面SH11平・断面図(1/60)、SH11内SK01・02平・断面図(1/60)



第306図 V区第2面SH11内SP断面図 (1/30)



第307図 V区第2面SH11遺物出土状況 (1/80)

も10cmほどの盛り上がりを見せる土手状のものがある。この土手の南側にも、SK01の場合と同様に、土手を覆うように炭化物と焼土を含む暗茶灰色粘質土が堆積している。これら2基の土坑の周囲の床面には炭化物が広がっており、さらに土坑からかき出したものが堆積している部分もある。

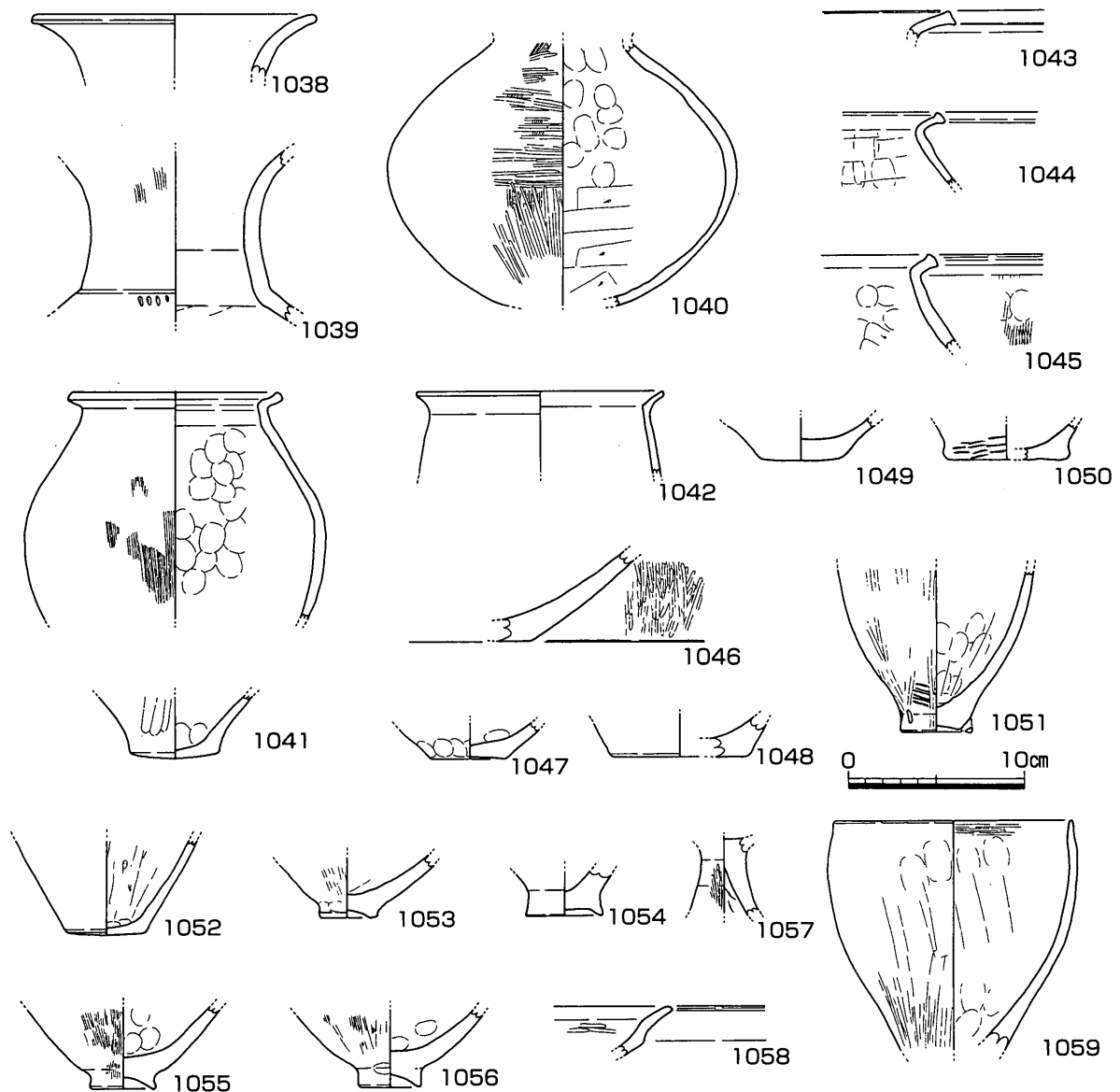
平面的には捉えられなかったようだが、断面B-B'によると、南側の部分で住居の埋土が再掘削されたか、内側に土を盛って修復しているような感じである。すると標高12.0mの部分に修復後の床面を考えると出来る。断面A-A'でも貼床

して修復した状況が伺え、同様に標高12.0mの部分に床面を考えることが出来る。修復しているとする
と、SK02のほうが新しいものと考えられ、下部の床面段階ではその一部だけが残ったため浅くなっ
ているのかも知れない。住居全体の埋土は濁灰褐色砂混じり粘質土が主体となっている。

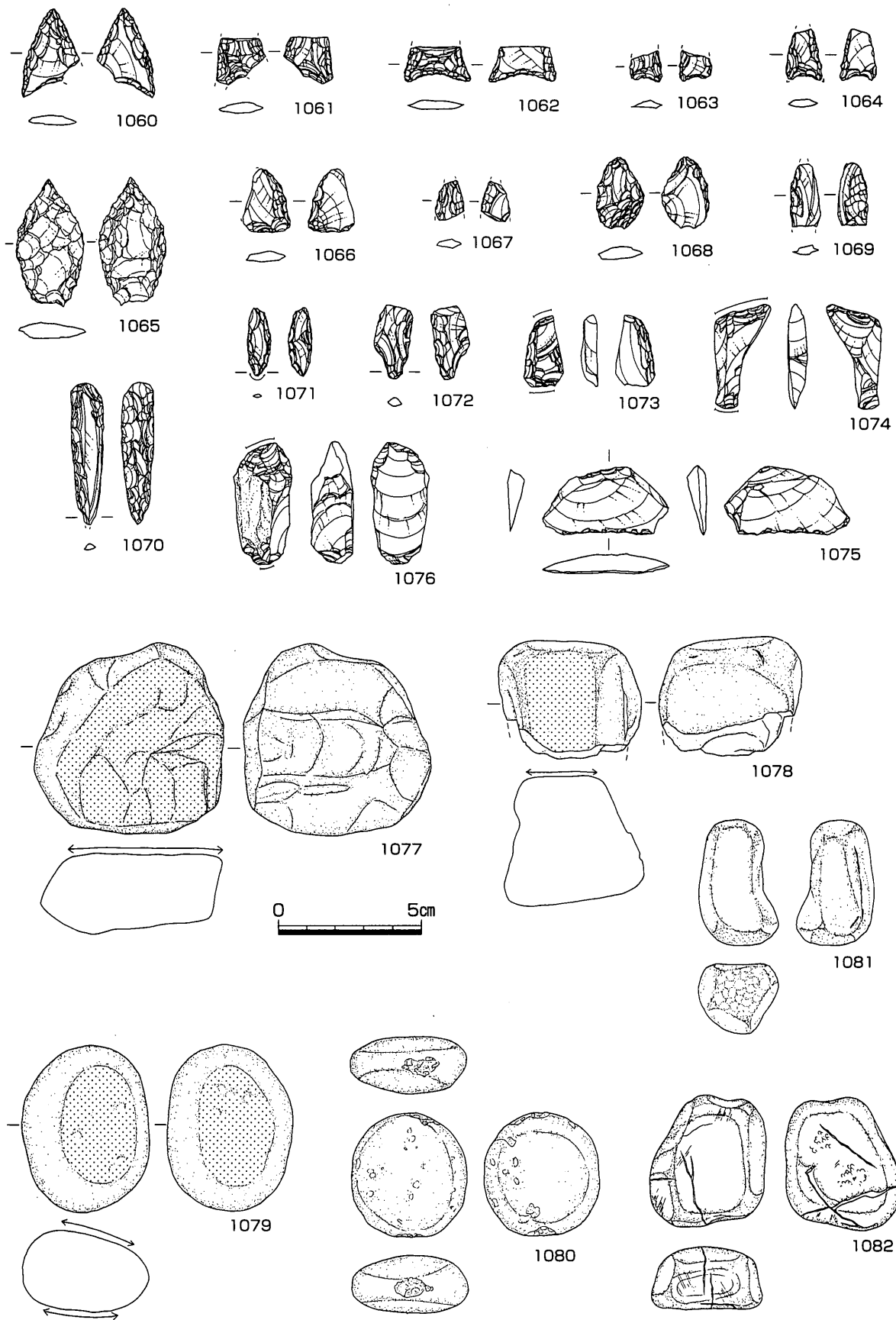
遺物は壁面の周囲で出土している傾向がある。また中央の土坑SK01の北側部分の床面直上で管玉と
小玉が出土している。

1038～1040は壺である。1039の頸部は長く少し内傾している。口縁部は欠損しているが外反してい
る。頸部には列点文を巡らせている。隣接して出土している1038は、接合はせず、やや色調が異なるが
形態的には似ているため、あるいは同一個体になるかも知れない。1040は扁平な体部のみであるが、最
大径は中央にある。外面にはハケ目の後にヘラミガキを施し、内面下半にはヘラケズリを施す。胎土に
角閃石を含んでいる。

1041～1045は甕である。1041の口縁部は短く、内面を強くナデている。体部は最大径が上部にある。
下半は欠損しているが、外面にはハケ目の後に下半部にヘラミガキを施している。内面には指押さえが



第308図 V区第2面SH11出土遺物 (1) (1/4)



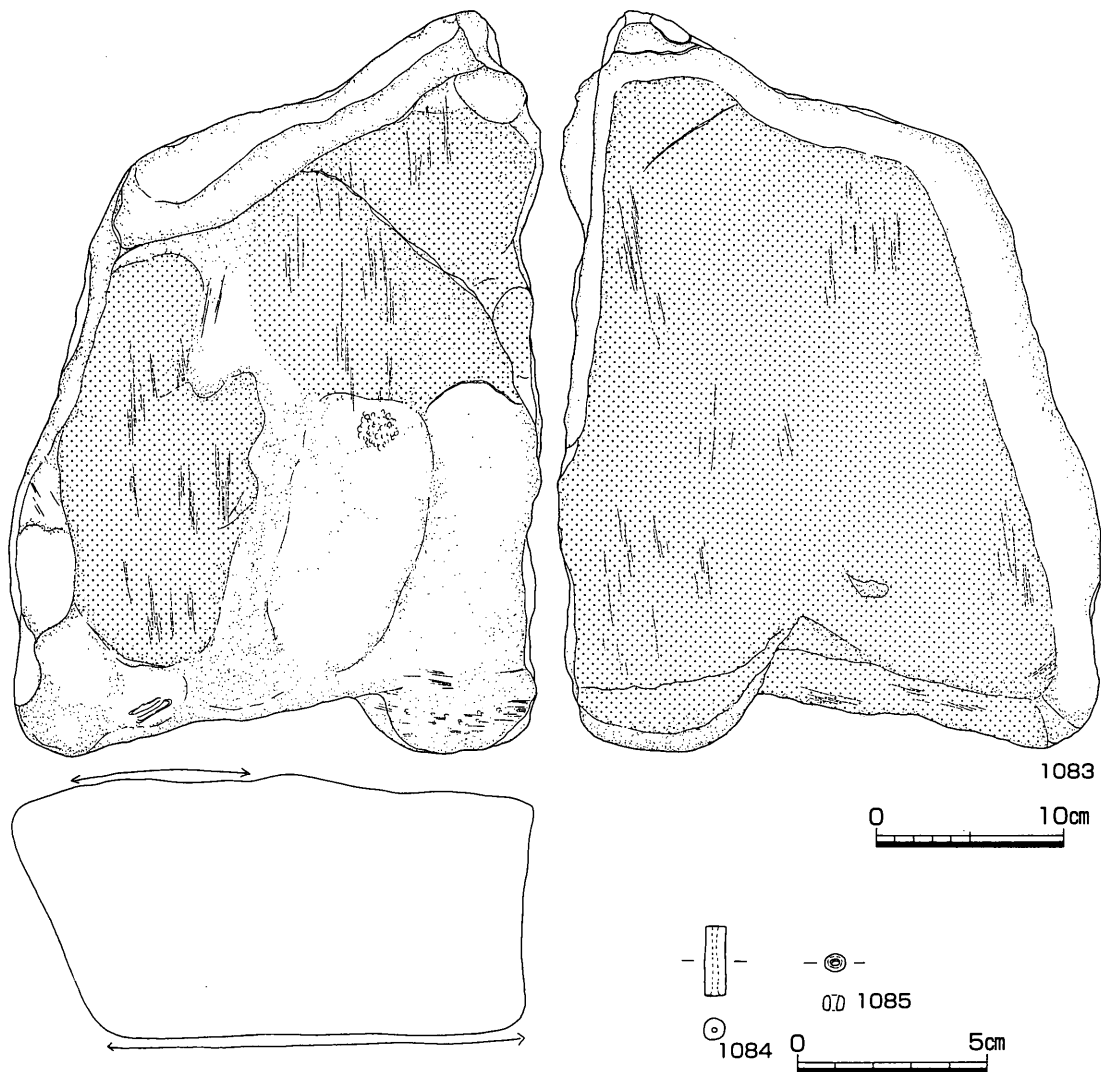
第309图 V区第2面SH11出土遗物(2)(1/2)

顕著である。胎土に角閃石を含んでいる。1044は口縁部端部を上下に拡張している。1045は口縁部端部を上方に拡張している。体部上半は直線的で、外面にはハケ目を、内面にはヘラケズリを施している。

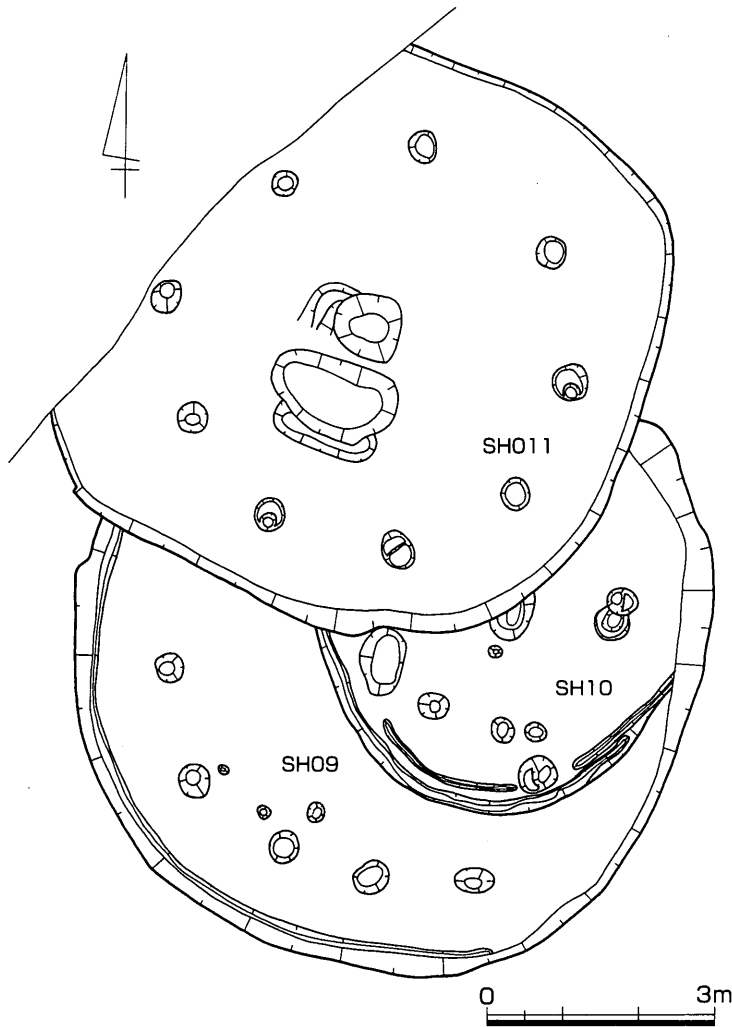
1046～1052は壺および甕の底部である。1051は体部外面に僅かにタタキと考えられる凹凸が認められ、その後にヘラミガキを施している。底部は上げ底で、側面には2個1単位の穿孔が向かい合った位置にある。甕と考えたが、あるいは1059のような器種かもしれない。

1053～1056は鉢の底部と考えられ、いずれも短い脚台が付いている。1057・1058は高杯である。1059は体部からそのまま口縁部は直立し、端部は先細りになっている。口縁部の内面にはハケ目を施している。体部外面はハケ目である。体部の立ち上がりの傾斜は強いが、鉢と考えておく。

1060～1066は石鏃である。1060～1064は凹基で、いずれも基部は湾曲の度合いが強い。1065・1066は平基である。1065は鏃身の最大幅は中央部にある。基部には一部突出している部分がある。1066は鏃身の片側の側縁部が欠損している。1067～1069は石鏃の未製品である。いずれも側縁部の調整が途中である。1070～1072は石錐である。1070・1071は錐部とつまみ部の境が不明瞭である。1071の錐部には摩滅痕が認められる。1073・1074・1076は楔形石器である。1074は断面面に両極打撃の痕跡が認められる。1076は柱状で全体に厚みがある。



第310図 V区第2面SH11出土遺物(3)(1/4、1/2)



第311図 V区第2面SH09・10・11平面図（1／100）

1077～1079・1083は砥石である。1077～1079はいずれも使用頻度は高くないようである。1080～1082は磨石である。1080の両端部は敲石のようであるが、敲打痕のように抉れてはおらず、平坦で摩滅している。被熱して赤変している。

1084は碧玉製の管玉、1085はガラス製の小玉である。

以上の出土遺物から、SH11は弥生時代後期中葉の所産と考えられる。

SH12（第312図）

調査区中央の旧G3区で検出した竪穴住居である。平面形は正方形に近く、南北方向3.8m、東西方向3.3mである。壁面の掘り込みは急である。検出面から床面までは20cmの深さがある。

床面には壁溝は巡っていない。北側の壁面から1.1m内側に、東西方向に柱穴が3基並んでいる。また南側の壁面から0.8m内側に、同様に東西方向に柱穴が3基並ぶ。この南北1間×東西2間が主柱穴と考えられる。この南北1間は1.9mであるが中央部分はやや狭くなっている。東西2間の柱間は1.0mで合計2.0mになる。主柱穴は直径20～30cmの円形で、深さ10～15cmである。埋土は暗茶褐色粘質土の単一層である。

主柱穴の間の部分に、長径0.6m、短径0.3m、深さ5cmの楕円形の浅い土坑がある。全体に焼土が堆積していた。北側の主柱穴の中央部分を中心に炭化物と焼土が広がっていた。また住居の東側の主柱穴の間で、長さ45cmの直方体の大きな石が1個あった。石器ではないため、おそらく腰掛として使用していた可能性がある。

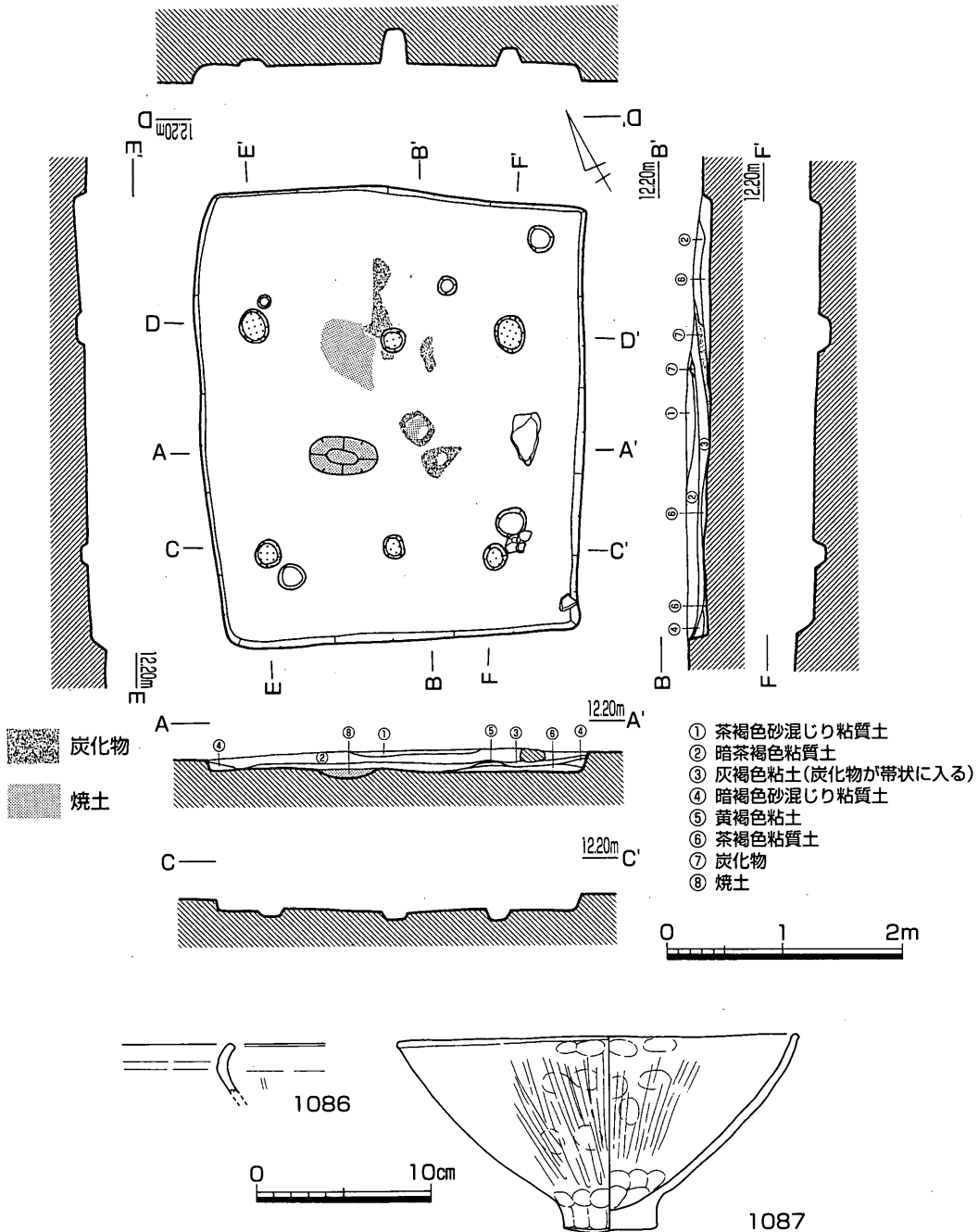
住居全体の埋土は、上部は茶褐色～暗茶褐色の粘質土が中心で、下部は部分的に炭化物が帯状に入る灰褐色粘土が中心になる。住居内では炭化物や焼土が比較的多く見られるが、特に柱材が焼けて倒れて

いるような状況はない。

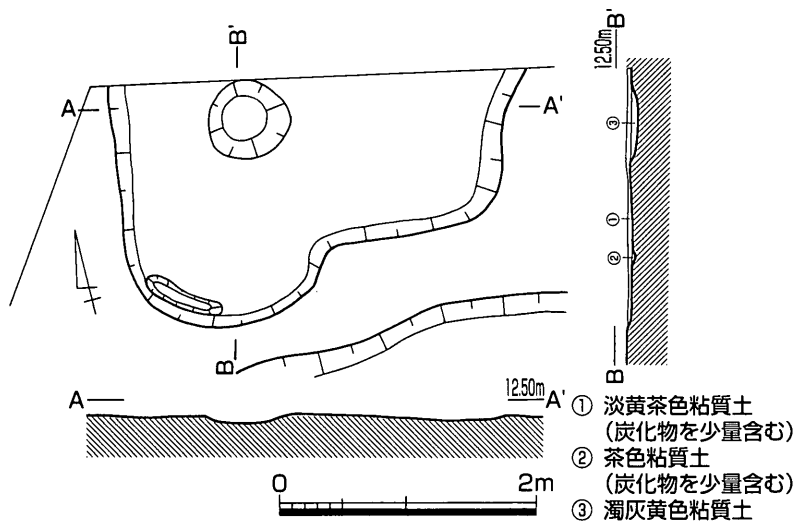
遺物の出土は極めて少ない。土器のみで石器は出土していない。

1086は甕の口縁部の細片である。1087は鉢で、体部は大きく開いてそのまま口縁部に至る。口縁部は外面を強くナデている。体部は内・外面共にヘラミガキを施している。底部は突出し、内面と側面には指押さえが顕著である。

出土遺物から、SH12は弥生時代後期中葉の所産と考えられる。



第312図 V区第2面SH12平・断面図(1/60)、出土遺物(1/4)



第313図 V区第2面SH13平・断面図 (1/60)

SH13 (第313図)

調査区北側際の中央やや西寄りの、旧G4区の北西隅で検出した竪穴住居である。平面形は不整形で、方形の隅の部分が高く突出している。北側は調査区外になっている。全体の規模は不明であるが、検出した部分で東西3.0m、南北1.3m、突出した部分で南北2.0mである。検出面から床面までは5cm程度で残りは悪い。

床面には突出した部分に、長さ0.6mほどの短い壁溝がある。また調査区壁際に直径65cmの柱穴

が1基あるほかは柱穴は検出されていない。住居全体の埋土は淡黄茶色粘質土の単一層である。

遺物は出土していない。南側に隣接して弥生時代後期の溝、SD22と同一面で検出していることから、SH13も弥生時代後期の所産と考えておく。

SB01 (第314図)

調査区東端の中央部、旧G1区で検出した掘立柱建物跡である。梁間1間×桁行6間で、建物の主軸方位はN-51°-Eである。建物の平面形は長方形で、桁行の長さが目立つ。梁間1間で北東側は3.7m、南西側は3.5mとなり、南西側に向かって徐々に狭くなっている。桁行は6間で9.8mになり、建物面積は梁間を平均で3.6mとすると35.3㎡≒10.7坪になる。柱穴の平面形は直径20~40cmの円形で、柱痕が確認されたものもある。埋土は暗茶褐色粘質土の単一層である。

建物の柱穴SP01から1088が、SP02からは1089の遺物が出土している。1088は甕で、底部には短い脚台が付き、側面には指押さえを行っている。1089は石鏃の未製品である。

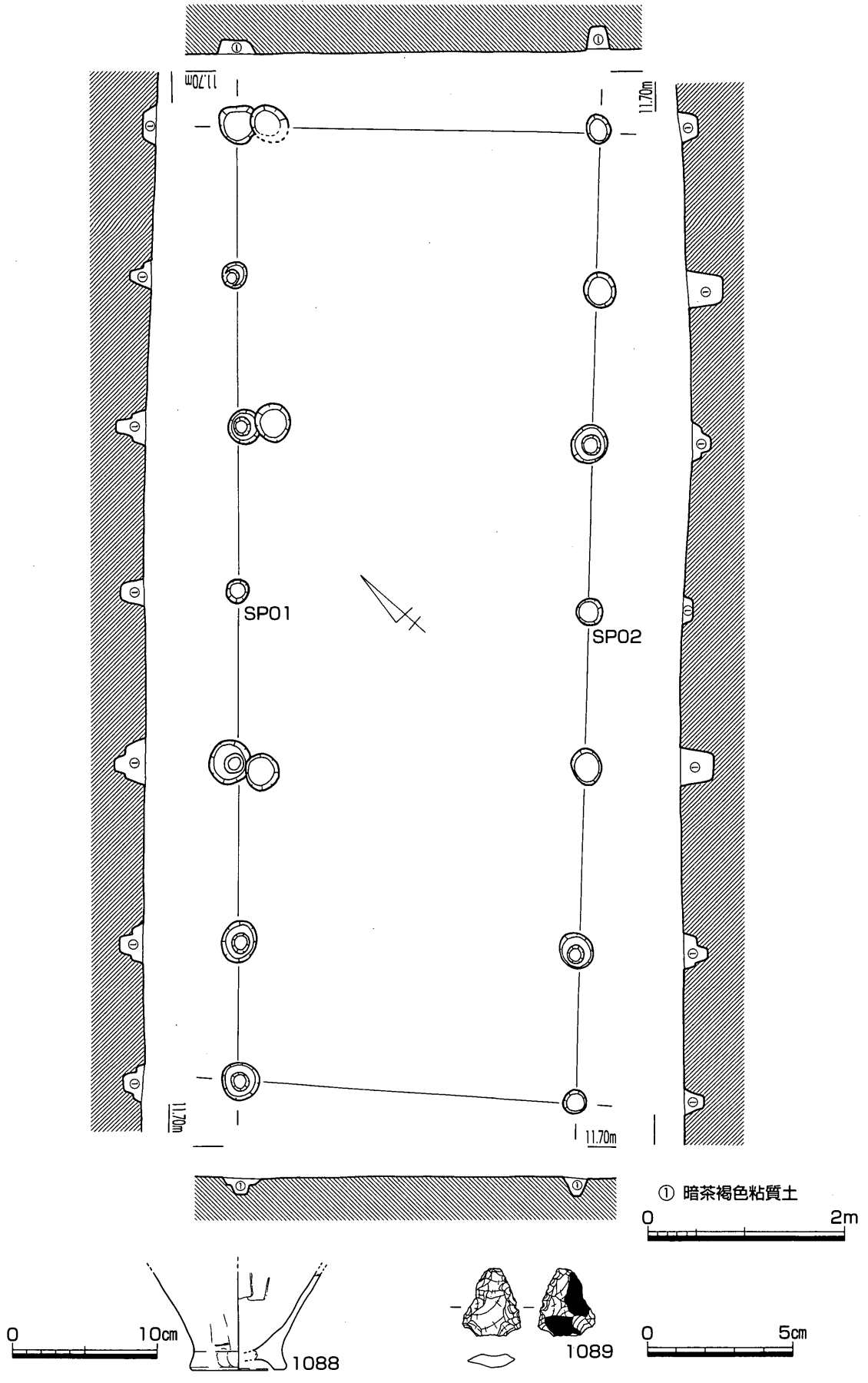
出土遺物と検出面から考えて、SB01は弥生時代中期中葉の所産と考えられる。

SB02 (第315図)

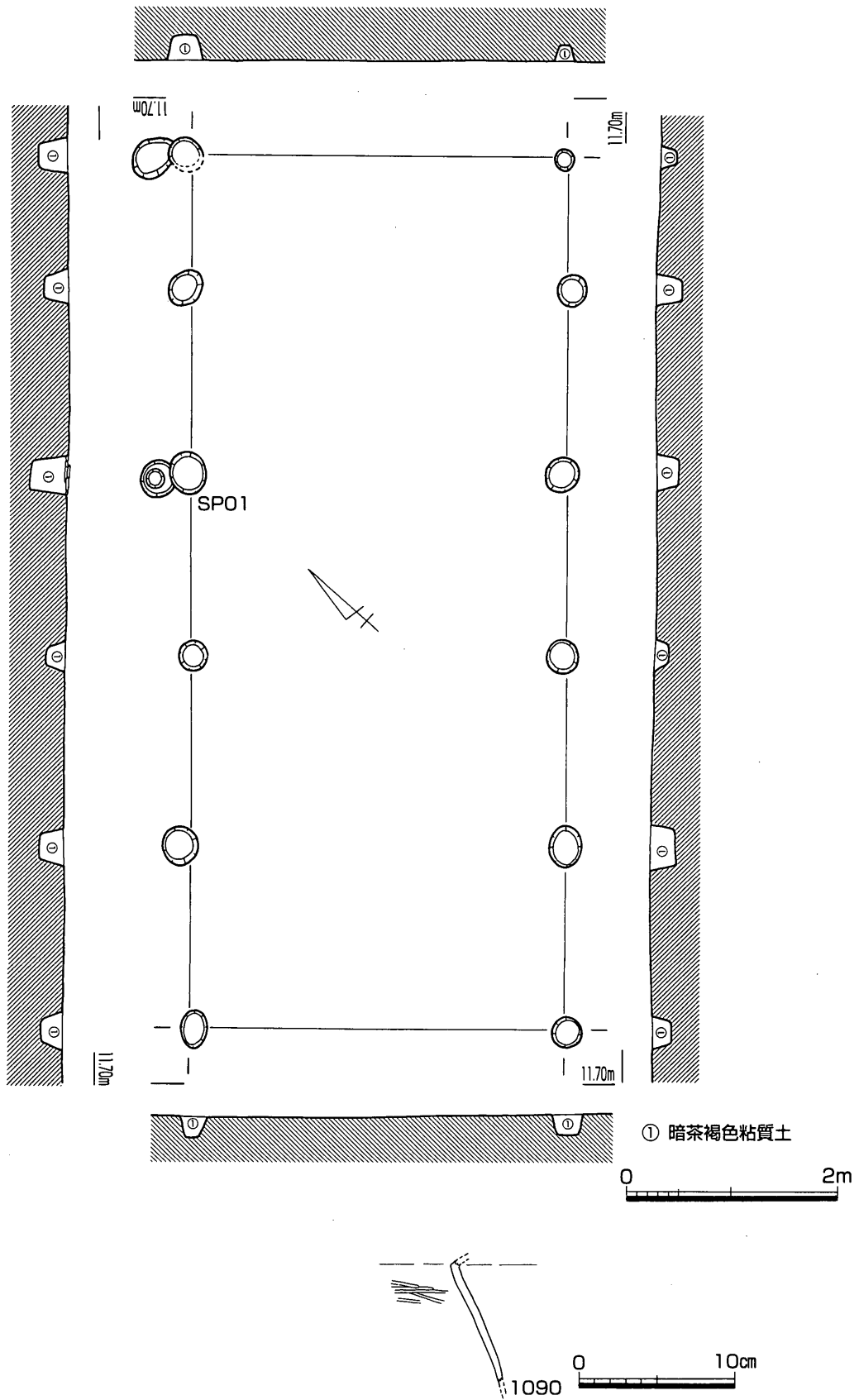
調査区東端の中央部、旧G1区で検出した掘立柱建物跡で、SB01と重なっており、SB01が全体に南東側に40cmほど平行移動した位置にある。梁間1間×桁行5間で、建物の主軸方位はN-50°-Eである。建物の平面形は長方形で、梁間1間で3.6m、桁行5間で8.3m、建物面積は29.9㎡≒9.1坪である。柱穴の平面形は直径20~35cmの円形で、一部楕円形に近いものもある。埋土は暗茶褐色粘質土の単一層である。

建物の柱穴SP01から1090の遺物が出土している。1090は甕であるが口縁部は欠損している。体部外面はナデ、内面はヘラミガキを施している。

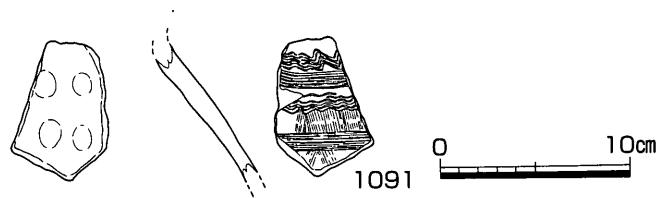
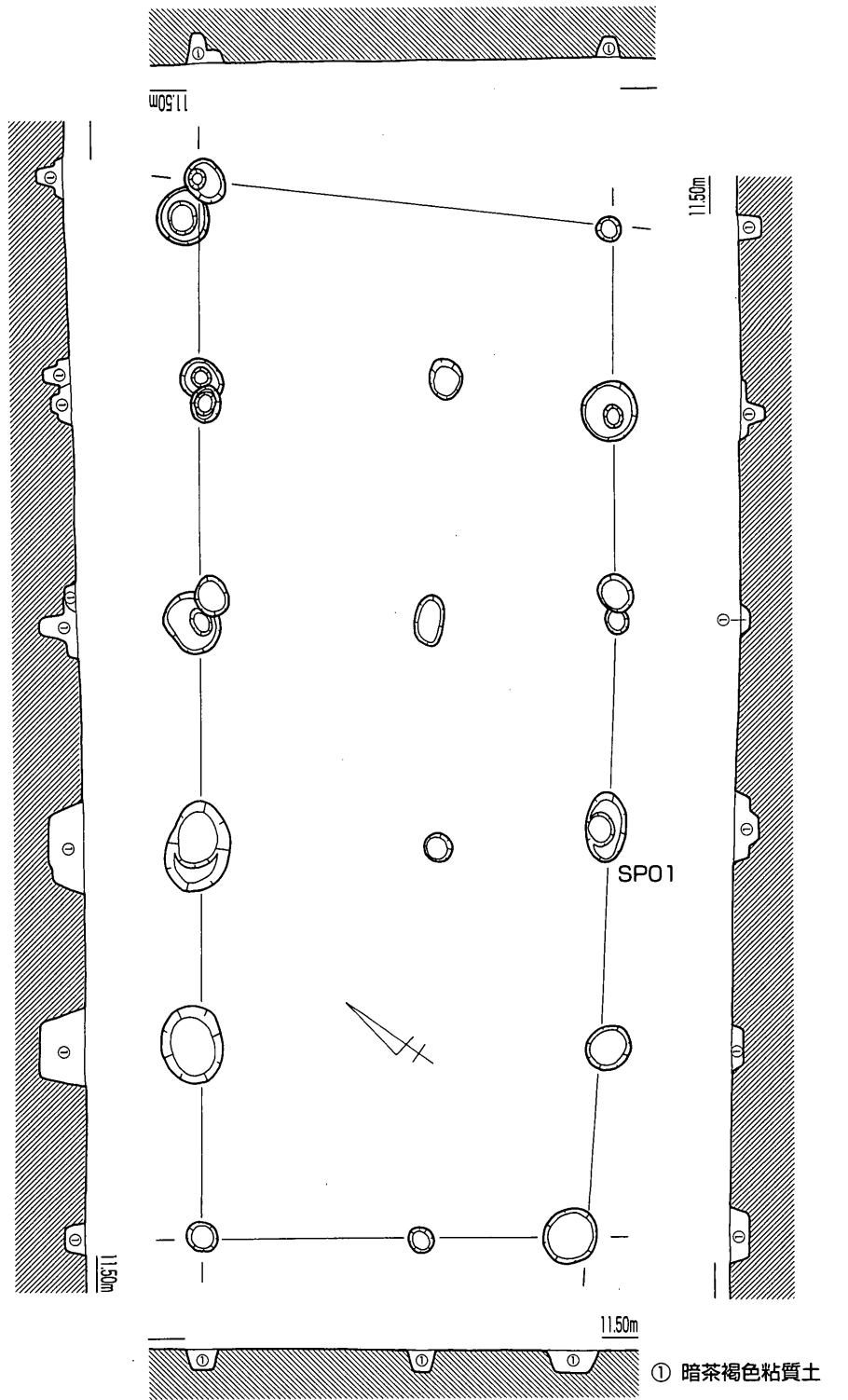
出土遺物と検出面から考えて、SB02は弥生時代中期中葉の所産と考えられるが、柱穴の前後関係からSB01より後出するものである。



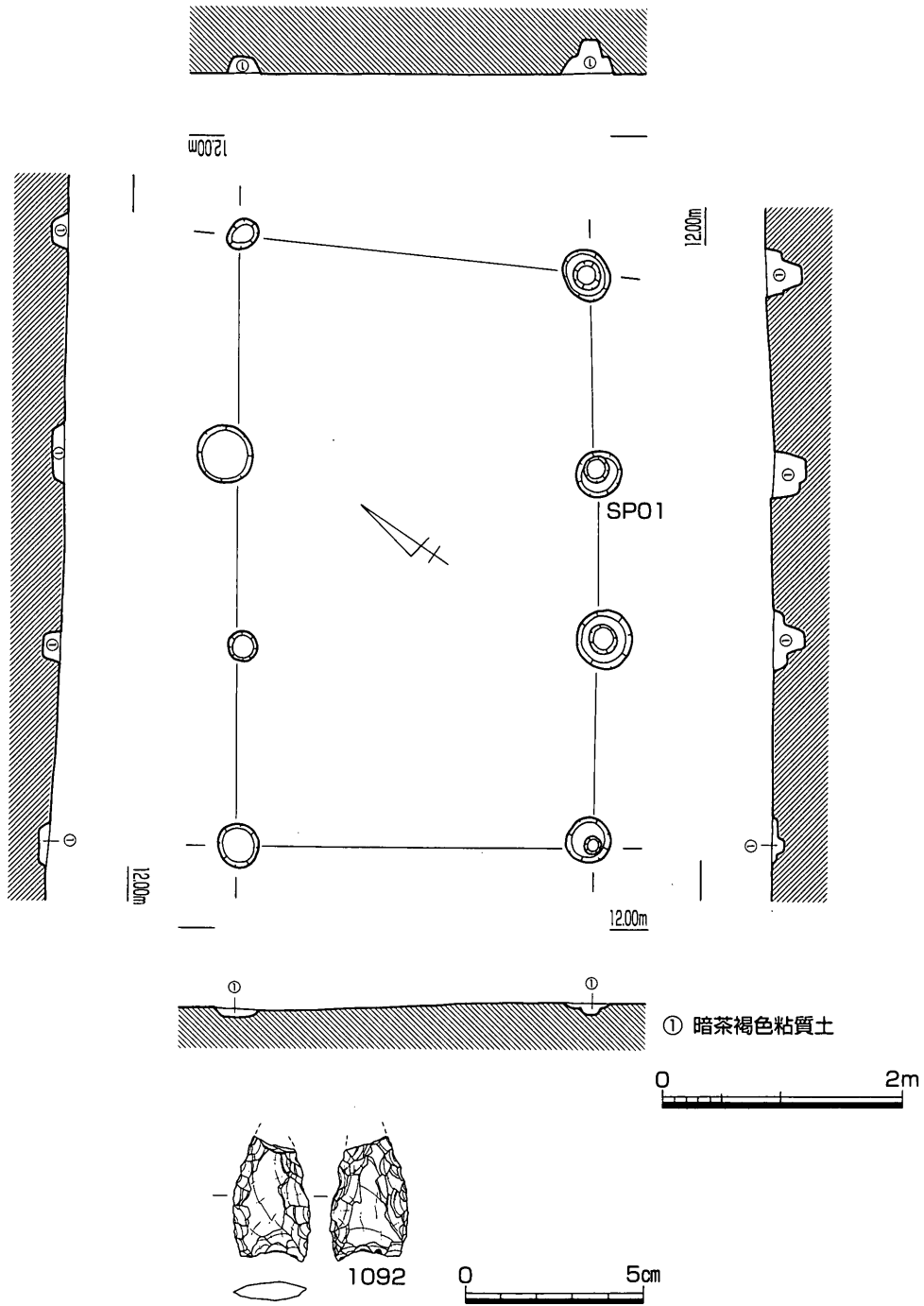
第314图 V区第2面SB01平·断面图 (1/60)、SP01·02出土遺物 (1/4、1/2)



第315図 V区第2面SB02平・断面図 (1/60)、SP01出土遺物 (1/4)



第316図 V区第2面SB03平・断面図 (1/60)、SP01出土遺物 (1/4)



第317図 V区第2面SB04平・断面図(1/60)、SP01出土遺物(1/2)

SB03 (第316図)

調査区東端の中央部、旧G1区で検出した掘立柱建物跡で、SB01・02の南東2m弱のところに隣接している。梁間2間×桁行5間で、建物の主軸方位はN-56°-Eである。最も北東の梁間列と、南西から2列目の梁間列の中間の柱穴は検出されなかった。最も北東の梁間は揃っていない。この左側の柱穴に接して下側に柱穴があり、この柱穴を採用すると右側の柱穴と揃う。しかし他の桁行の間隔から考えてあえて不揃いになるほうの柱穴を採用した。桁行がずれていると考えれば、下のほうの柱穴になる。また梁間列は全体に左右の柱間に50cmの差がある。

建物の平面形は長方形で、梁間2間で3.5mであるが南西端が少し狭くなる。桁行5間で南東側が8.3m、北西側が8.7mである。建物面積は桁行の平均を採用すると29.8㎡≒9.0坪である。柱穴の平面形は直径20~50cmの円形であるが、一部楕円形のものもある。埋土は暗茶褐色粘質土の単一層である。

建物の柱穴SP01から1091の遺物が出土している。1091は壺の体部で、6条1単位の櫛描波状文と櫛描直線文を施している。

出土遺物と検出面から考えて、SB03は弥生時代中期中葉の所産と考えられる

SB04 (第317図)

調査区東端の中央部、旧G1区で検出した掘立柱建物跡で、SB01・02の北西のところに隣接している。梁間1間×桁行3間で、建物の主軸方位はN-56°-Eである。最も北東の梁間は不揃いである。建物の平面形は長方形で、梁間1間で3.0m、桁行3間で北西側が5.0m、南東側が4.8mである。建物面積は桁行の平均を採用すると14.7㎡≒4.5坪になる。柱穴の平面形は直径20~45cmの円形である。一部、柱痕の確認されたものがある。埋土は暗茶褐色粘質土の単一層である。

建物の柱穴SP01から1092の遺物が出土している。1092は凹基の石礎で、基部は不揃いである。

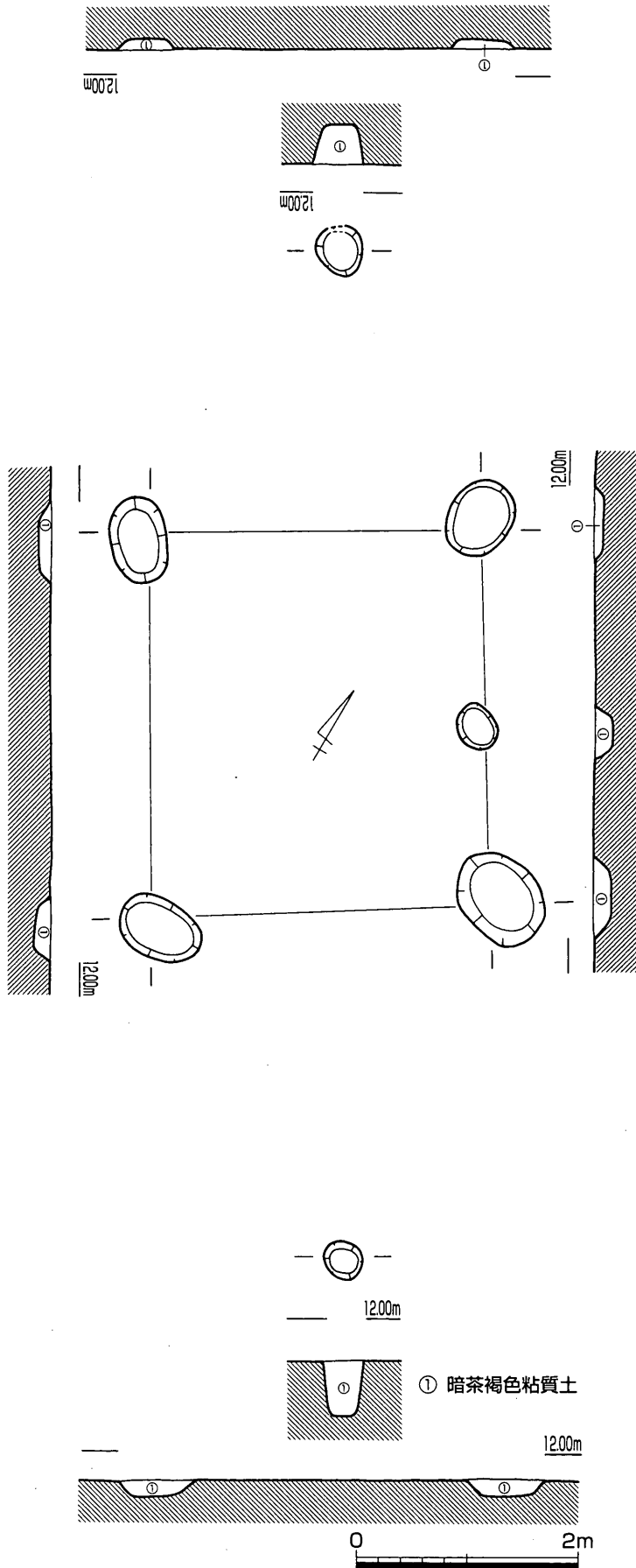
出土遺物から時期は決定しがたいが、検出面とSB01~SB03と建物の主軸方位が近似することから、SB04は弥生時代中期中葉の所産と考えておく。

SB05 (第318図)

調査区東端の北寄り、旧G1区で検出した掘立柱建物跡で、SB04の北東のところに隣接している。梁間1間×桁行2間で、建物の主軸方位はN-30°-Wである。西側の桁行列の中央の柱穴は検出されなかった。建物の平面形は正方形に近い。梁間1間で3.0m、桁行2間で3.4m、建物面積10.2㎡≒3.1坪である。柱穴の平面形は長径40~80cmの楕円形である。埋土は暗茶褐色粘質土の単一層である。

また南北の梁間列の中央部から、桁行に平行方向に北に2.5m、南に3.0m延長した部分に柱穴が1基ずつある。建物から距離があるが配置としては棟持柱に近い。しかし建物の規模から考えると棟持柱が付随するとは考えにくい、一応図示しておく。この2基の柱穴は平面形が直径30~40cmの円形で、埋土は暗茶褐色粘質土の単一層である。

柱穴からの遺物の出土はない。従って時期決定は困難であるが、検出面と消極的ではあるがSB04と建物主軸が直交すること、また周辺の遺構の時期などから、SB05は弥生時代中期中葉と考えておく。



第318図 V区第2面SB05平・断面図 (1/60)

SB06 (第319図)

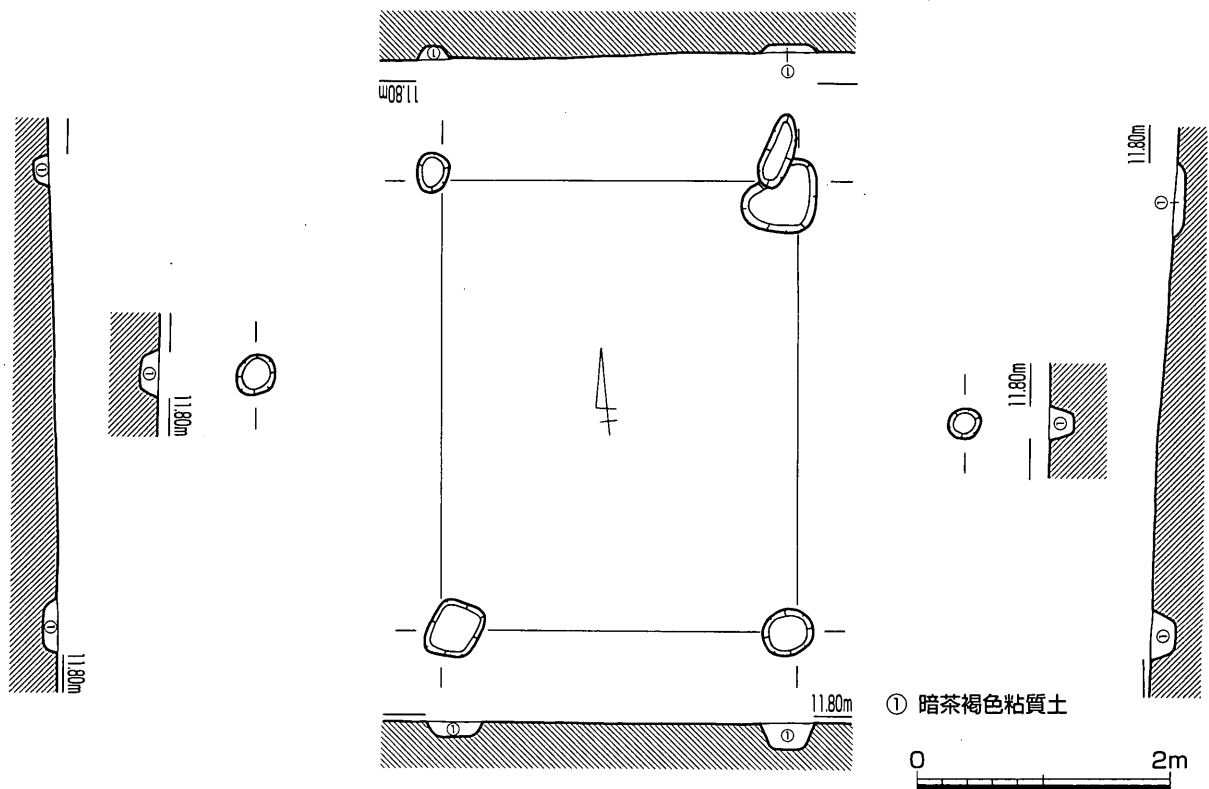
調査区北東隅の調査区北壁際の、旧G1区で検出した掘立柱建物跡である。梁間1間×桁行1間で、建物の主軸方位はN-6°-Eである。梁間1間で2.8m、桁行1間で3.5m、建物面積9.8㎡≒3.0坪である。柱穴の平面形は円形と方形で、円形のもの直径20~30cm、方形のものは1辺40~50cmである。埋土は暗茶褐色粘質土の単一層である。

また、それぞれの桁行列の中央部分の東西方向の延長に、桁行列から1.4m離れて柱穴が1基ずつある。この柱穴は建物の隅の柱穴からいずれも2.1m離れているという規則性をもつ。この柱穴は平面形が直径30cm前後の円形で、埋土も建物と同じ暗茶褐色粘質土の単一層である。建物の桁行側にあることから棟持柱とは考えにくい。この建物の一部とすると六角形の建物になるか。六角形の建物とすると建物の主軸方位はN-80°-Wで、建物面積は14.7㎡≒4.5坪になる。

柱穴からの遺物の出土はない。時期決定は困難であるが、検出面と周辺遺構の時期からSB06は弥生時代中期中葉の所産と考えておく。

SB07 (第320図)

調査区北側の中央部の、旧G4区で検出した掘立柱建物跡である。建物の南東部分は調査区外になるため全体の規模は不明であるが、検出部分で梁間1間×桁行2間以上である。建物の主軸方位はN-43°-Wである。建物の平面形は長方形で、梁間は1間で3.3m、桁行は2間以上で検出部分では4.1mになる。全体の建物面積は不明である。柱穴の平面形は直径60cm前後の円形で、すべての柱穴で柱痕が認められた。柱



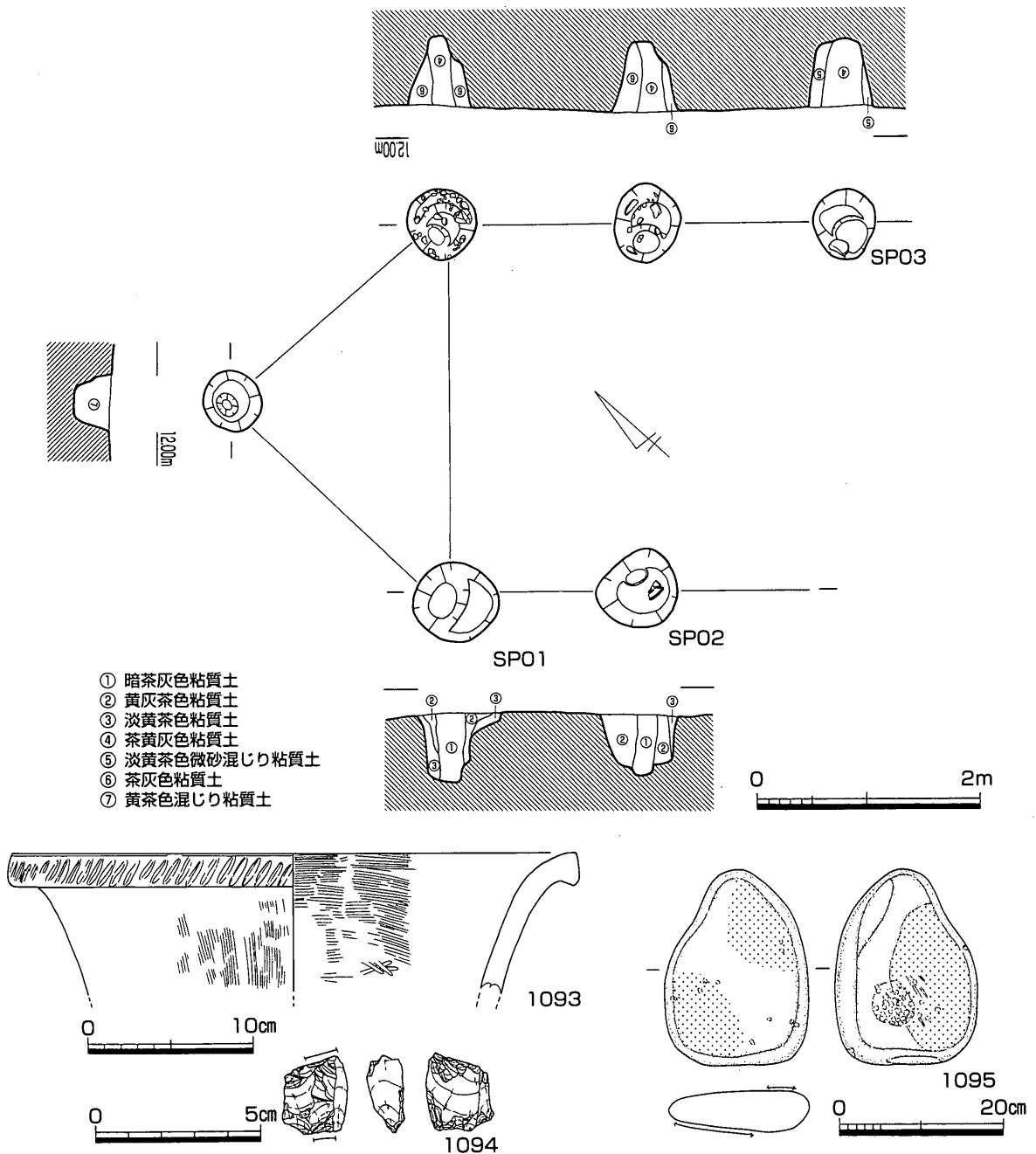
第319図 V区第2面SB06平・断面図 (1/60)

穴の多くは5cm前後の礫が出土しているが、柱の支えとしたのであろう。

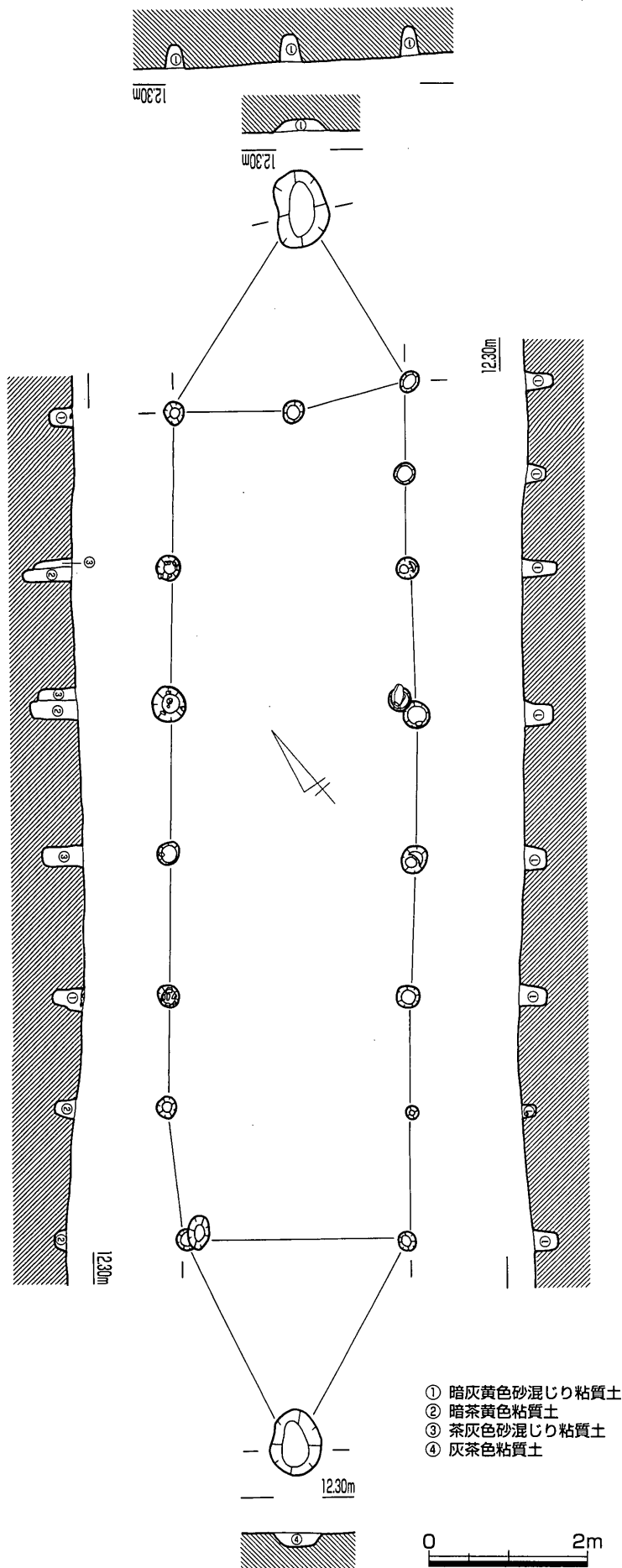
端の梁間列の中央から北西に2.0mの位置に、柱穴が1基ある。この柱穴は平面形が直径40cmの円形で黄茶色砂混じり粘質土の単一層である。またこの柱穴は端の梁間列の両柱穴からともに2.5mの距離にあり、規則的な配置になっている。これらのことからこの柱穴はSB07の棟持柱と考えられる。

建物の柱穴SP01から1094、SP02から1093、SP03から1095の遺物がそれぞれ出土している。1093は壺で、口縁部端部を下方に拡張し、端部外面に刻み目を施している。内・外面ともにハケ目を施している。頸部内面には僅かにヘラミガキが認められる。1094は楔形石器である。1095は砥石兼台石である。

以上の出土遺物から、SB07は弥生時代中期中葉の所産と考えられる。



第320図 V区第2面SB07平・断面図 (1/60)、SP01~03出土遺物 (1/4、1/2、1/8)



第321図 V区第2面SB08平・断面図 (1/80)

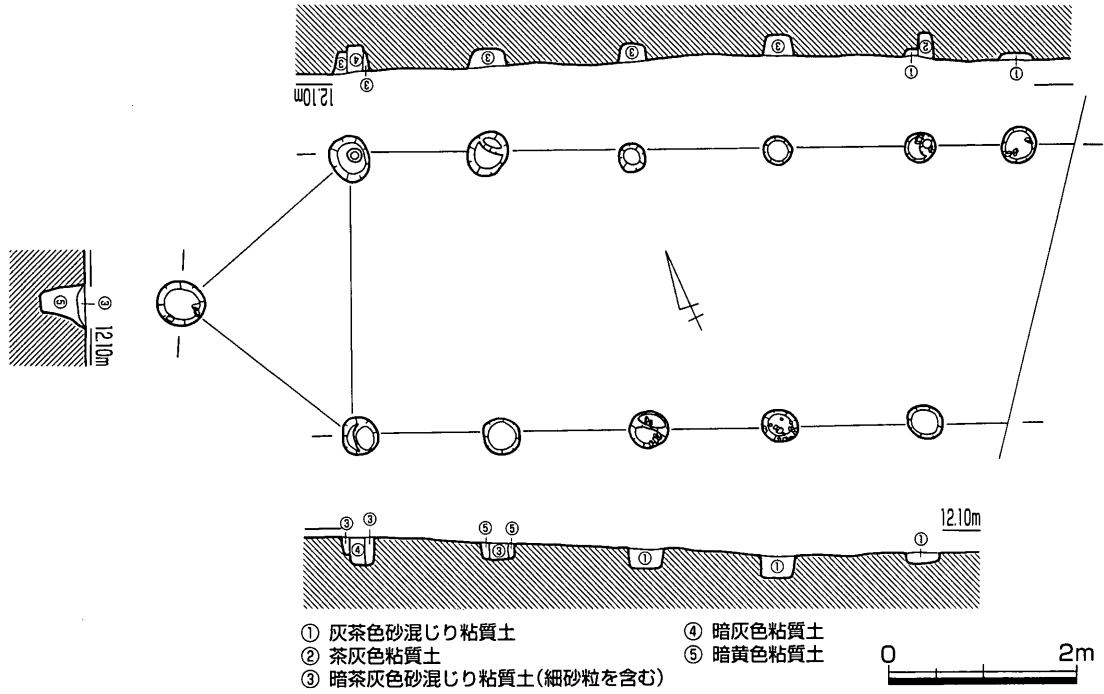
SB08 (第321図)

調査区西側の中央部の、旧G7区の東壁際で検出した掘立柱建物跡である。梁間2間×桁行7間で、建物の主軸方位はN-40°-Eである。南西端の梁間列の中央の柱穴は検出されていないが、あるいは梁間1間のものと考えたほうが良いのかもしれない。これに対して北東端の梁間列はその中央部分に柱穴があるが、梁間列は揃っていない。また北西側の桁行列では柱穴が1基検出されなかった。

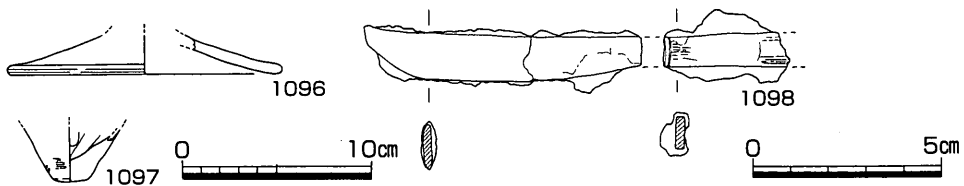
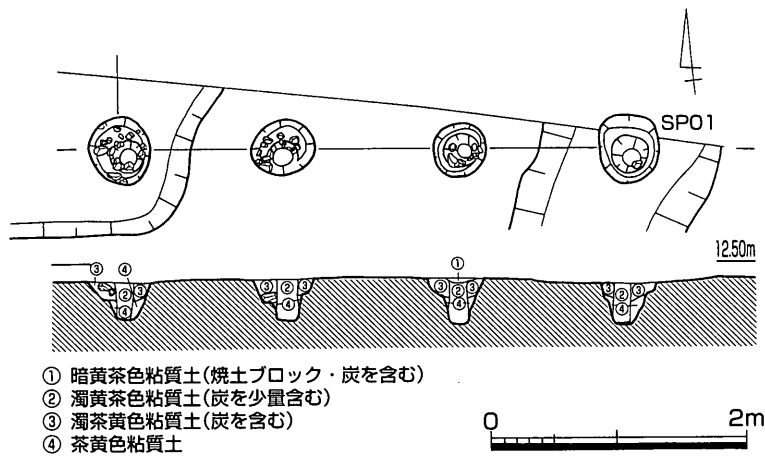
建物の平面形は長方形で、桁行の長さが目立つ。梁間2間で3.0mであるが、南西端の梁間列の幅は2.8mと狭くなっている。桁行7間で北西側が10.2m、南東側が10.6mである。建物面積は桁行の平均を採用すると31.2㎡≒9.5坪である。柱穴の平面形は直径15~40cmの円形で、埋土は暗灰黄色砂混じり粘質土が主体となっている。

両端の梁間列の中央部分から2.4m離れたところに土坑状の柱穴がそれぞれ1基ずつある。両端の梁間列の角の柱穴からいずれも同じ2.8mの距離にあり、規則的な配置になっている。長径80cmほどの楕円形の柱穴で、建物の柱穴に比べて大きい。この柱穴はSB08の棟持柱と考えたい。

柱穴からの遺物の出土はない。時期決定は困難であるが、検出面と周辺遺構の時期からSB08は弥生時代中期中葉の所産と考えておく。



第322図 V区第2面SB09平・断面図 (1/80)



第323図 V区第2面SB10平・断面図 (1/60)、SP01出土遺物 (1/4、1/2)

SB09 (第322図)

調査区西側の南寄り、旧G7区の東壁際で検出した掘立柱建物跡である。建物の東側は調査区外になり、全体の規模は不明である。梁間1間×桁行5間以上で、建物の主軸方位はN-67°-Wである。建物の平面形は長方形で、梁間は1間で2.9m、桁行は5間以上で検出した部分で7.6mである。全体の建物面積は不明である。柱穴は直径20~40cmの円形で、柱痕が認められたものもある。埋土は暗茶~灰茶色系の粘質土が中心である。

西端の梁間列の中央部分から西側に1.8mの位置に柱穴が1基ある。平面形は直径40cmほどの円形で、埋土は暗黄色粘質土が中心である。西端の梁間列の柱穴からいずれも1.4m離れている。SB09の棟持柱と考えられる。

柱穴からの遺物の出土はない。時期決定は困難であるが、検出面と周辺遺構の時期からSB09は弥生時代中期中葉の所産と考えておく。

SB10 (第323図)

調査区北端やや西寄りの、旧G4区の北西隅で検出した掘立柱建物跡である。北側は調査区外になり、全体の規模は不明である。桁行部分のみを検出している。梁間1間以上×桁行3間で、建物の主軸方位はN-85°-Wである。桁行は3間で4.0m、梁間の検出部分は0.6mにすぎない。建物面積等は不明である。柱穴は直径40~50cmの円形で、いずれも柱痕が認められた。また5cm前後の礫が出土しているが、柱の支えとしたのであろう。

建物の柱穴SP01から1096~1098が出土している。1096は高杯の脚部で直線的に開いており、端部は丸く収める。1097は甕の底部で、外面にタタキと思われる僅かな凹凸がある。1098は刀子で、茎部には木質が残っている。

以上の遺物からSB10は弥生時代後期でも前葉以降と考えられる。このSB10の廃絶後に弥生時代後期のSH13が建てられているが、SH13は明瞭な遺物が出土していない。従ってSB10はSH13以前の弥生時代後期でも前葉以降と考えられる。

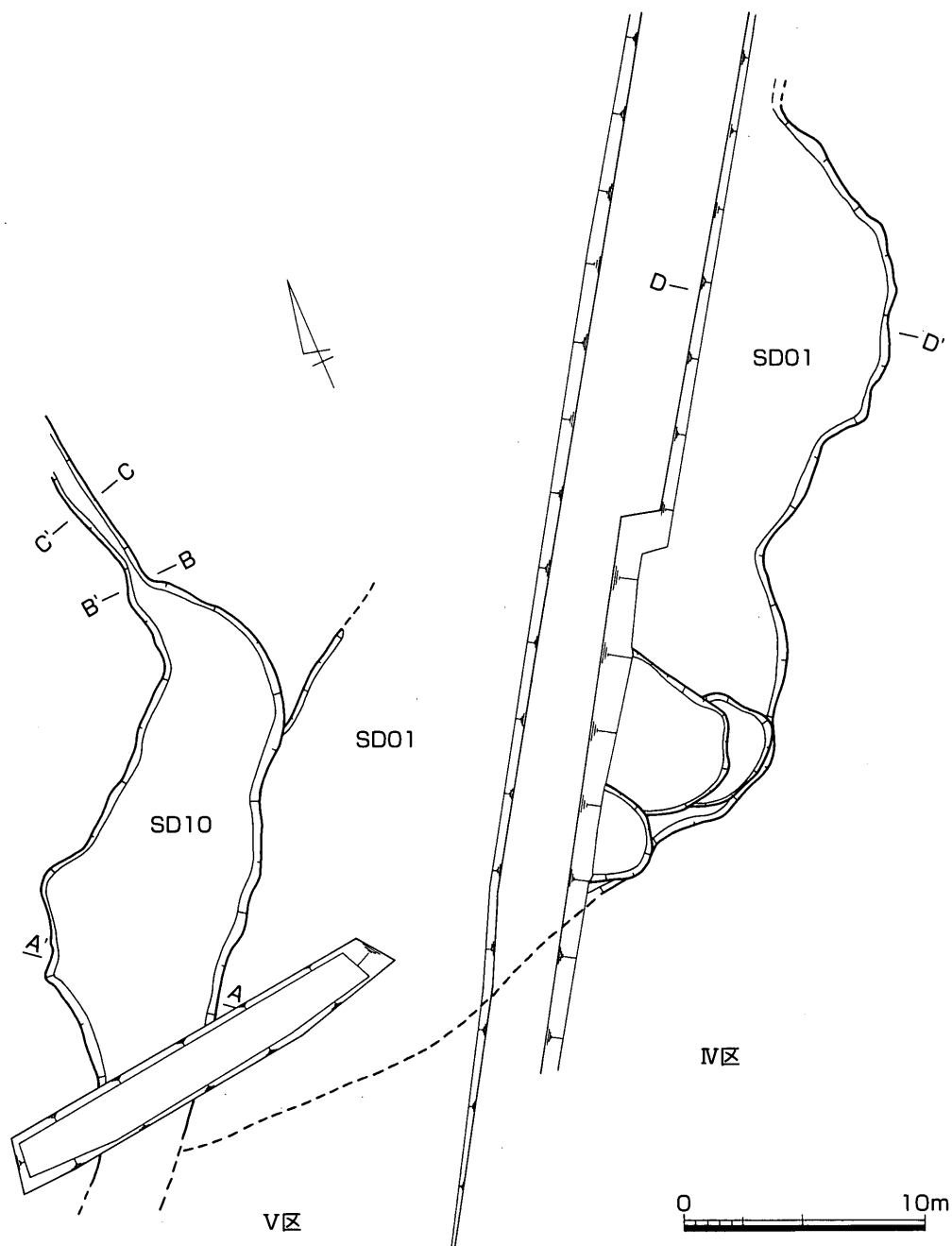
SD01 (第324~326図)

調査区の東端の旧G1区で検出した溝である。IV区SD01と同じものである。調査区境の現有の水路を挟んで東側のV区に続いている。V区南東部の旧G1区の調査区南壁部分から北東方向に流れ、調査区境の水路のあるベルトが中心にくるように、ベルトに沿ってそのまま北東方向に抜けている。V区ではその南東部分が検出されたことになる。V区部分の中央付近でSD10に壊されている。調査区の北側と南側部分では不明瞭となる。

V区で検出された部分では幅10.2mで、IV区部分を併せると幅18mほどになる。トレンチの掘削により下部を確認して遺物の出土する部分までの掘り込みで止めている。その深さは35cmである。掘り込み部分はなだらかで自然流路と考えられるが、調査時のままSDとして報告している。下層には茶褐色粘質土が堆積し、上層部分は基本的には埋没後の窪み状の部分にあたる。

IV区部分の所見から、SD01は弥生時代中期中葉には埋没している。遺物は埋没後の最上層の窪み部分で僅かに出土している。細片を含めて中期中葉の遺物と後期の遺物が混在している。

1099は壺である。体部最大径は上半にあり、上部の膨らみは大きい。頸部と体部の境目部分の外面に

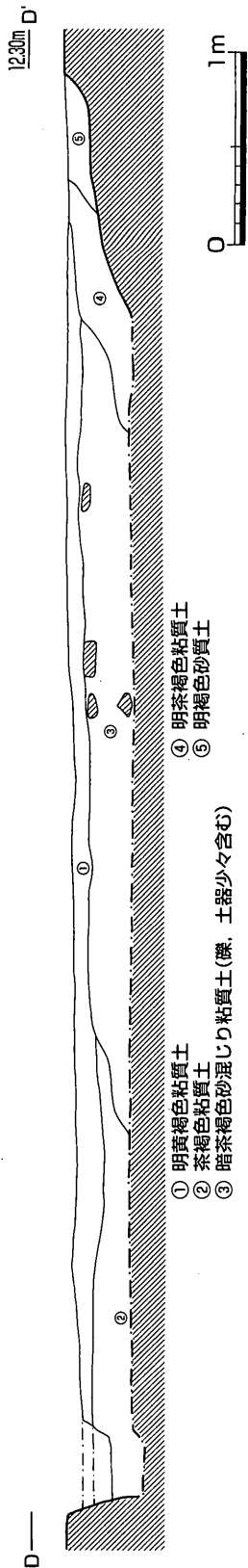


第324図 V区第2面SD01・10平面図 (1/300)

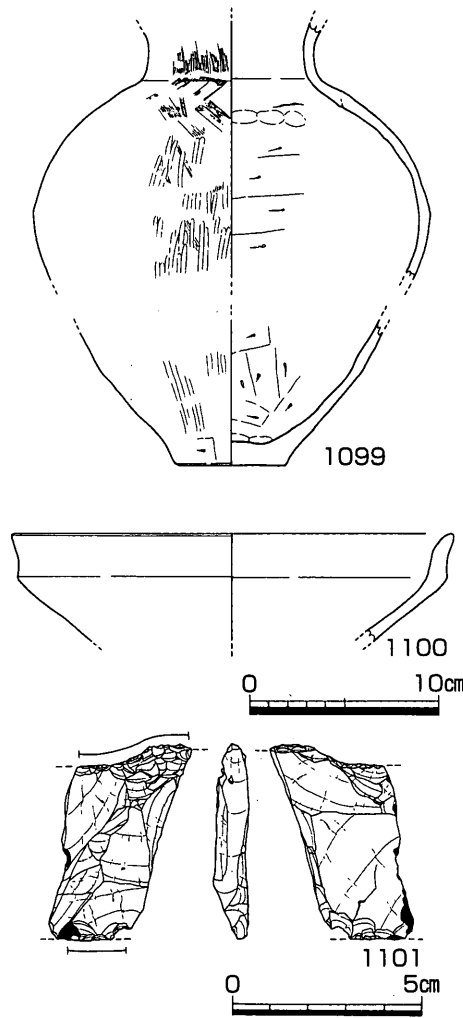
はハケ目工具の角が当たった跡が多く残っている。体部外面はハケ目の後にヘラミガキを施し、内面にはヘラケズリを施している。底部の側面にもヘラケズリが認められる。1100は高杯で、口縁部は鋭く屈曲し、僅かに外反して立ち上がる。口縁部外面を強くナデているが、全体に摩滅している。1101は楔形石器で、截断面には後に截断面から剥離を加えている。

SD02 (第327図)

調査区北側の中央部分の旧G 4区で検出した溝である。ほぼ南北方向に伸びる全長2.5mの短い溝である。掘り込みは緩やかで、幅0.75m、深さは12cmである。埋土は黄茶色砂混じり粘質土の単一層である。

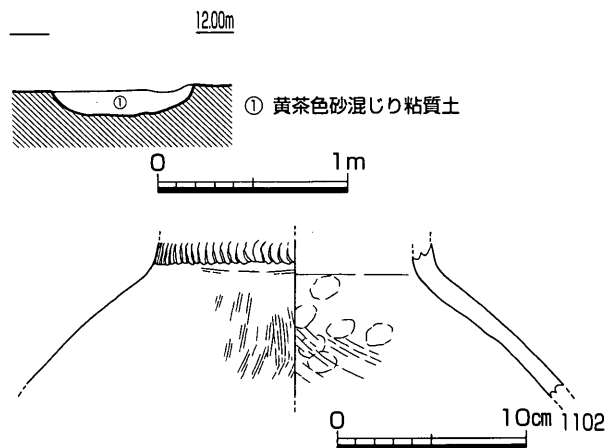


第325図 V区第2面SD01断面図(1/40)



第326図 V区第2面SD01出土遺物(1/4、1/2)

あり一段深くなっている部分がある。埋土は暗茶色砂混じり粘質土の単一層である。遺物は出土していない。

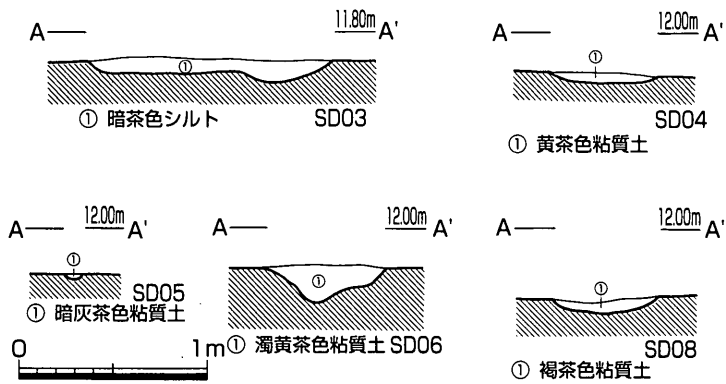


第327図 V区第2面SD02断面図(1/40)、出土遺物(1/4)

遺物の出土量は少ない。1102は壺で、頸部には刻目突帯が巡っている。体部は上部のみであるが大きく膨らむようである。外面にはハケ目を施し、内面にも僅かであるがハケ目を施している。

SD03 (第328図)

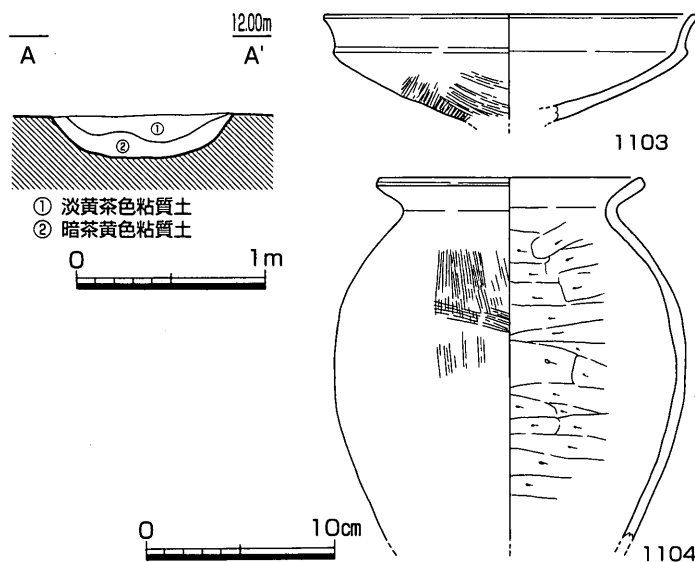
調査区北側の中央部分の旧G4区で検出した溝で、SD02の西側に隣接している。全体にL字形に東側に向かって屈曲している。調査区内で4mほど検出されたが、北側の延長は不明瞭である。この北側の部分は後述するST07によって壊されているため、どの部分でSD03は収束するのか不明である。幅は0.6~1.6m、深さは10cm前後で浅い。溝の底部は部分的に凹凸が



第328図 V区第2面SD03~06・08断面図 (1/40)

SD04 (第328図)

調査区北側の中央部分の旧G 4区で検出した溝で、SD03の西側3mのところに位置している。北西-南東方向の全長6.5mの溝で、全体的に不整形で幅は0.3~0.8mで一定していない。深さは5cm前後で非常に浅い。断面は浅い皿状で、埋土は黄茶色粘質土の単一層である。遺物は出土していない。



第329図 V区第2面SD07断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4)

SD05 (第328図)

調査区北側の中央部分の、旧G 4区の中央部で検出した溝である。SD04の西側2~5mのところに位置している。全長9.8mで南北方向に弓状に長く伸びている。幅は0.05~0.2mと狭く、深さも5cm前後である。埋土は暗灰茶色粘質土の単一層である。遺物は出土していない。

SD06 (第328図)

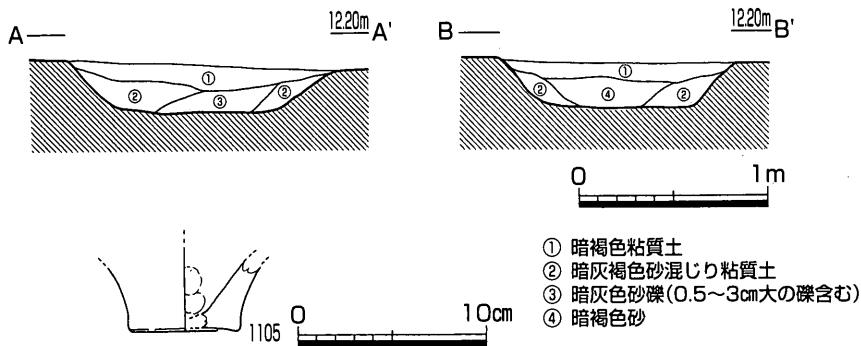
調査区北側の中央部分の、旧G 4区の中央部で検出した溝である。

SD05の西側2mのところに位置している。北西部分は不明瞭になる。検出部分での全長は4.5mで湾曲している。南側端部付近が極端に狭くなっている。SD04と似た形状である。幅は0.2~0.9m、深さ20cmである。掘り込みは全体的には緩やかであるが、急な部分もあり底部も一段低くなることもある。埋土は濁黄茶色粘質土の単一層である。遺物は出土していない。

SD07 (第329図)

調査区北端中央部分の、旧G 4区の調査区北壁際で検出した溝である。北側部分の一部が調査区外になるが、ほぼ全体を検出出来ている。一部を後述するSD08とSK02に壊されている。全長11.8mほどで南北方向から西に向かって屈曲している。幅は0.9~1.4m、深さ22cmで、掘り込みは全体に緩やかである。埋土は上下2層に分けられ、乱れはなく堆積している。下層には暗茶黄色粘質土が、上層には淡黄茶色粘質土が堆積している。

遺物の出土は少ない。1103は高杯である。口縁部は外面に稜を形成して外反しながら立ち上がる。内面は剥離・摩滅しているが、外面にはヘラミガキを格子状に施している。1104は甕である。口縁部屈曲部内面は丸みを帯びており、直線的に開く。体部最大径は中央にある。外面にはハケ目を施し、内面は



第330図 V区第2面SD09断面図(1/40)、出土遺物(1/4)

幅は0.55m、深さは8cmで掘り込みは全体に緩やかである。埋土は褐色粘質土の単一層である。遺物は出土していない。

SD09 (第330図)

調査区中央部やや東寄りの、旧G1区で検出した溝である。全長は9.3mで、緩やかに蛇行しながら北西-南東方向に伸びている。幅は1.2~1.5mで、北側が少し広がる。掘り込みは直線的な部分が多く、深さは25cmである。上層は全体に暗褐色粘質土が堆積しているが、下層は暗褐色砂が堆積している部分がある。

遺物の出土量は少ない。1105は甕の底部である。底部は若干上げ底になっている。内面には指押さえを行っている。

SD10 (第324・331~343図)

調査区の南東部の、旧G1区で検出した溝である。SH01の南東2m弱のところから始まり、8mほどそのまま南下した後に南西方向に向きを変える。向きを変えた後にそのまま22m進んだ部分で不明瞭になる。検出した部分の全長は約30mになる。不明瞭になる部分ではSD01と重なり、SD01を壊している。また不明瞭になった部分の南側一帯には、集石群(集石15~17・26・27)がある。SH01付近の南北方向の部分は、幅0.5~1.0mで、深さ15~25cmである。南西方向に屈曲した後の部分は、幅5.5~8.7mと広がる。深さは30~52cmである。掘り込みは全体に緩やかで、西側が部分的に段状になるところがある。最大幅付近では底部の状況から、SD10の中で西側から東側に流れが変わっている。その後全体に黄茶褐色粘質土が堆積し、最終的には茶灰色粘質土と黄褐色粘質土が堆積して埋没する。SDとして報告しているが、SD01と同様に自然流路に近い。

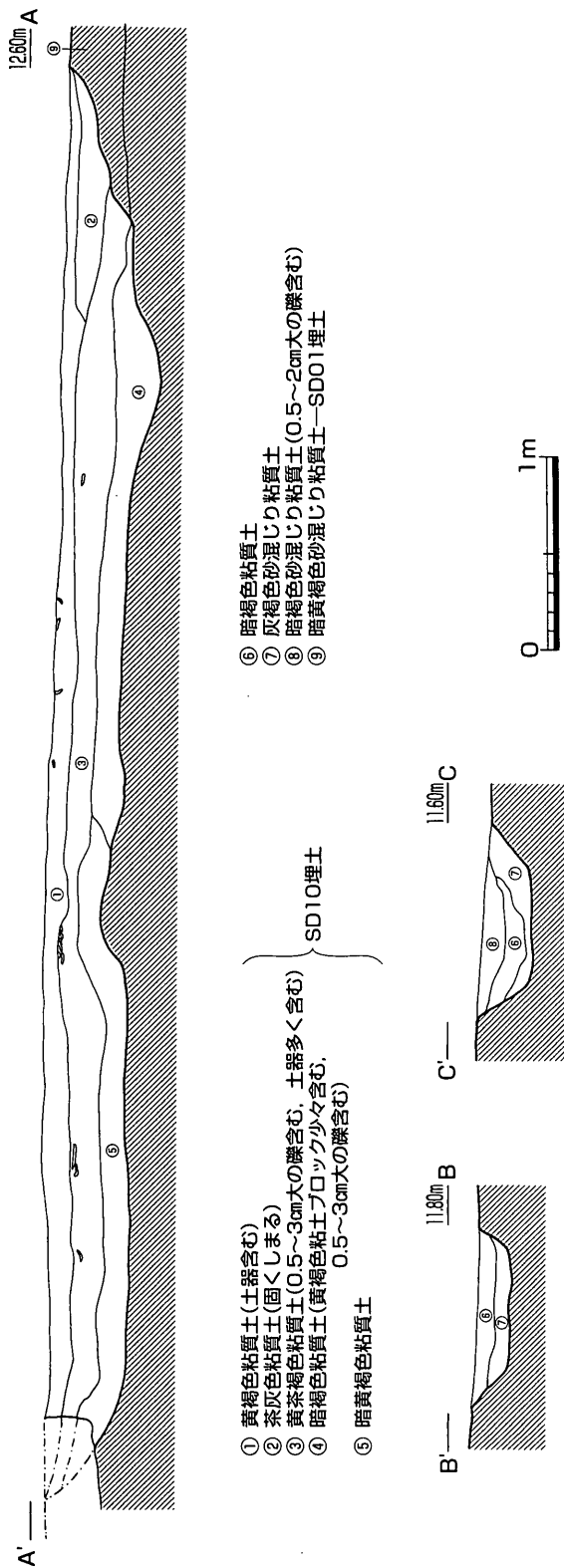
遺物は多量に出土している。最も多く出土したのは上から2層目の黄茶褐色粘質土の上部で、全体で6箇所の集中部分があった。特に南西方向に屈曲して幅が広がった部分と、南側のトレンチの少し北側部分で集中して出土している。逆に中央部の東側からの遺物の出土は少ない。次に最上層での出土が多くなっている。また北側の幅の狭い部分での遺物の出土は少ない。

1106~1151は壺である。1106の頸部は直立し、外面にはヘラミガキを施している。体部最大径は中央にあり、外面にヘラミガキを施している。底部中央部分は薄くなっている。1107は直立する頸部から口縁部は大きく横に開く。口縁部端部外面には竹管文が巡っている。頸部は内・外面にヘラミガキを丁寧に施し、口縁部外面にもヘラミガキを加えている。体部は最大径が中央にあり、扁平気味である。外面

全体にヘラケズリになっている。

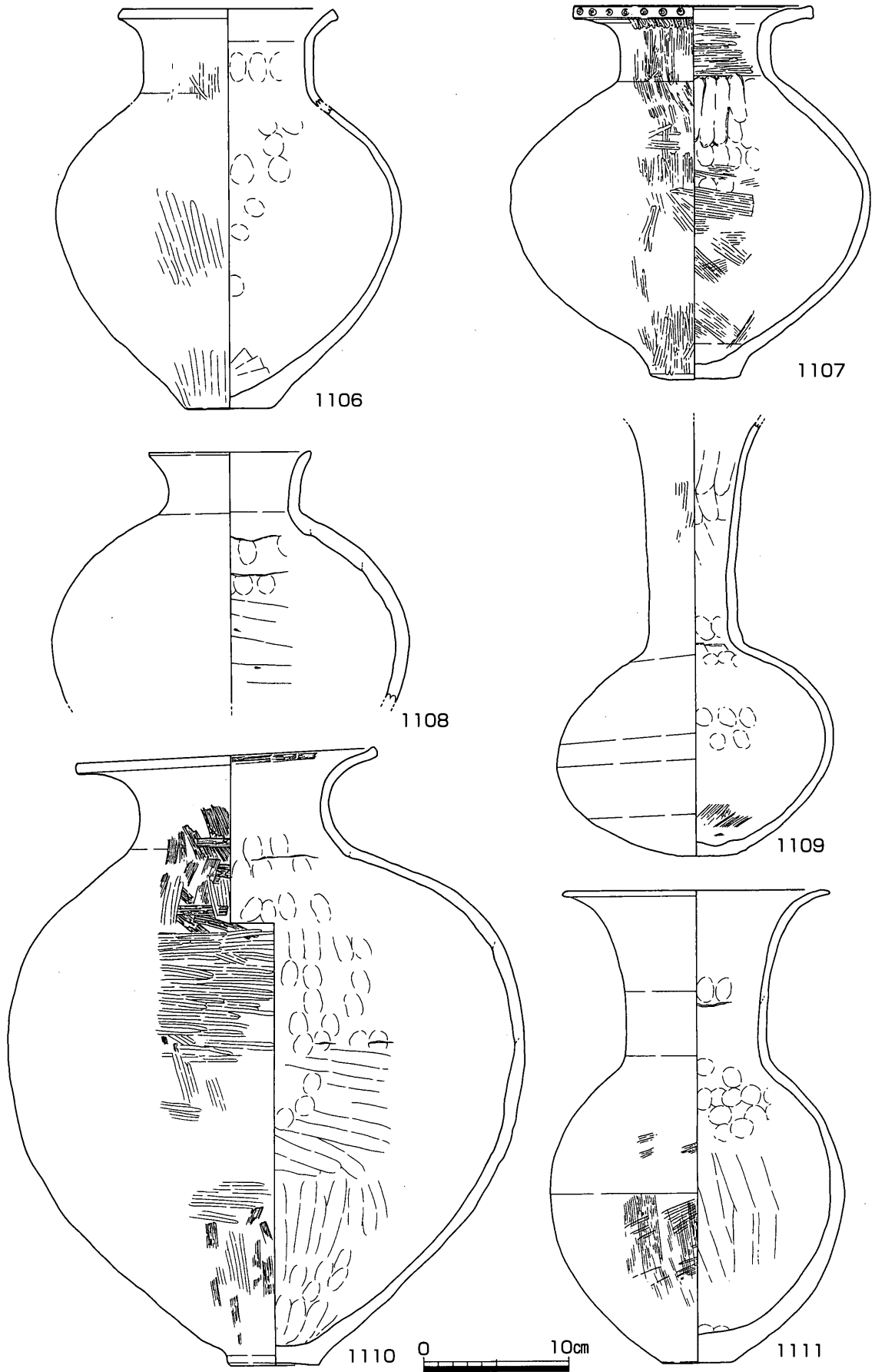
SD08 (第328図)

調査区北端中央部分の、旧G4区の調査区北壁際で検出した溝である。北側は調査区外になり、調査区内では南西方向に1mほど伸びて収束す

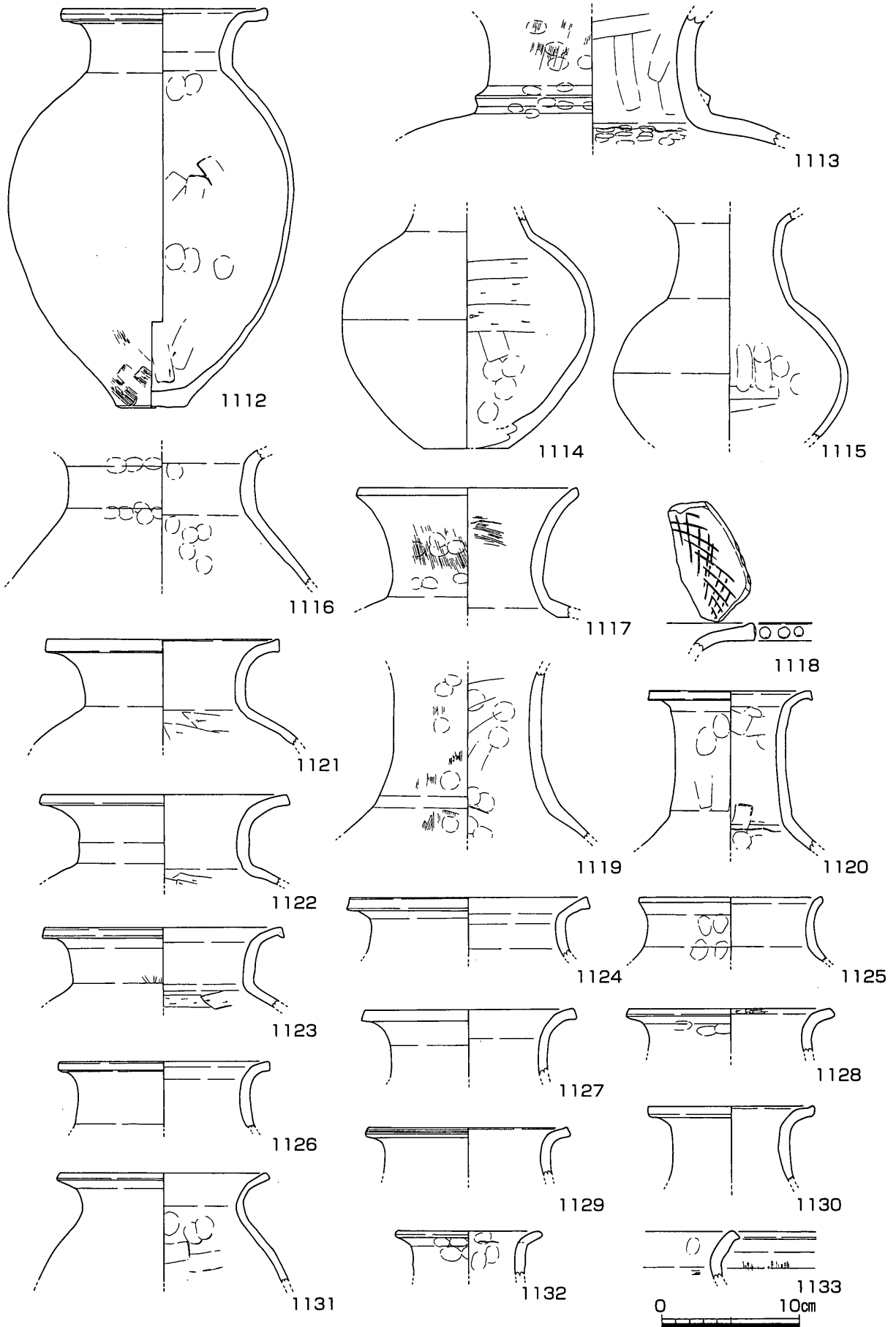


第331図 V区第2面SD10断面図 (1/40)

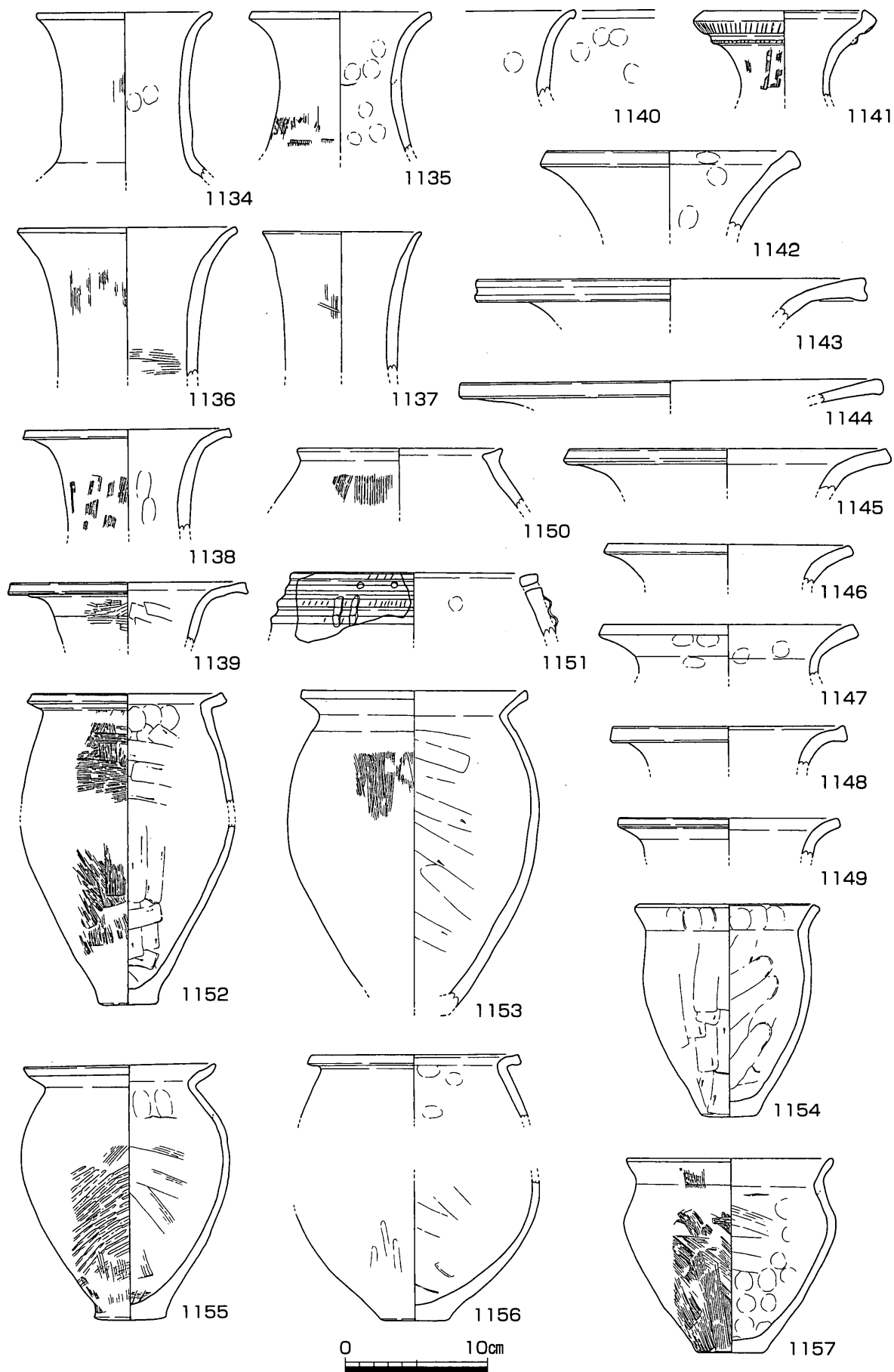
には全体にヘラミガキを施し、内面の上部には指ナデを、中央~下部にはハケ目を施している。低部は突出している。1108は僅かに外傾する頸部からそのまま口縁部に至り、端部は先細りになる。体部は大きく膨らみ、外面は摩滅しているが、内面にはヘラケズリを施している。1109の頸部は細長く、外面は摩滅しているが僅かにヘラミガキが認められる。内面は指でナデている。口縁部は欠損しているが、頸部からそのまま緩やかに開くものと思われる。体部は最大径が中央にあり扁平になっている。外面は全体に摩滅しているが、内面の下部にはハケ目を施している。底部は不安定な平底である。1110は大形の壺であるが口縁部から体部上半部が歪んでいる。頸部から口縁部にかけて全体に外反している。口縁部内面にはハケ目を施している。体部最大径は中央部にあり、外面はハケ目の後にヘラミガキを施し、内面は指押さえと指ナデによって仕上げている。1111の口縁部は頸部から緩やかに外反し、端部は先細りになっている。体部は球形でタタキの後にハケ目を加えている。内面は指押さえと板ナデである。底部は厚手である。1112は外傾する頸部から口縁部は真横に開き、内面を強くナデている。体部最大径は中央にあり、上部の膨らみは弱い。底部付近の外面にはハケ目が認められる。1113は頸部に貼付突帯を巡らせている。頸部屈曲部の内面には指押さえが顕著である。1114の体部は球形で、内面にヘラケズリを施している。1115の体部はやや扁平で、最大径は中央にある。1116は頸部と口縁部の屈曲部の内・外面に指押さえが顕著である。1117は頸部から口縁部にかけて全体に外反している。内・外面にはハケ目を施している。1118の口縁部内面には斜格子文が施され、端部外面には円形浮文を貼り巡らせている。1119・1120の頸部は細長く直立している。1120の口縁部は外反し、端部を下方に拡張している。1121~1124・1126~1130・1132の口縁部は頸部から大きく外反して横に開いている。1121~1123の体部内面にはヘラケズリを施している。1123・1124は口縁部端部を下方に拡張してい



第332图 V区第2面SD10出土遗物 (1) (1/4)



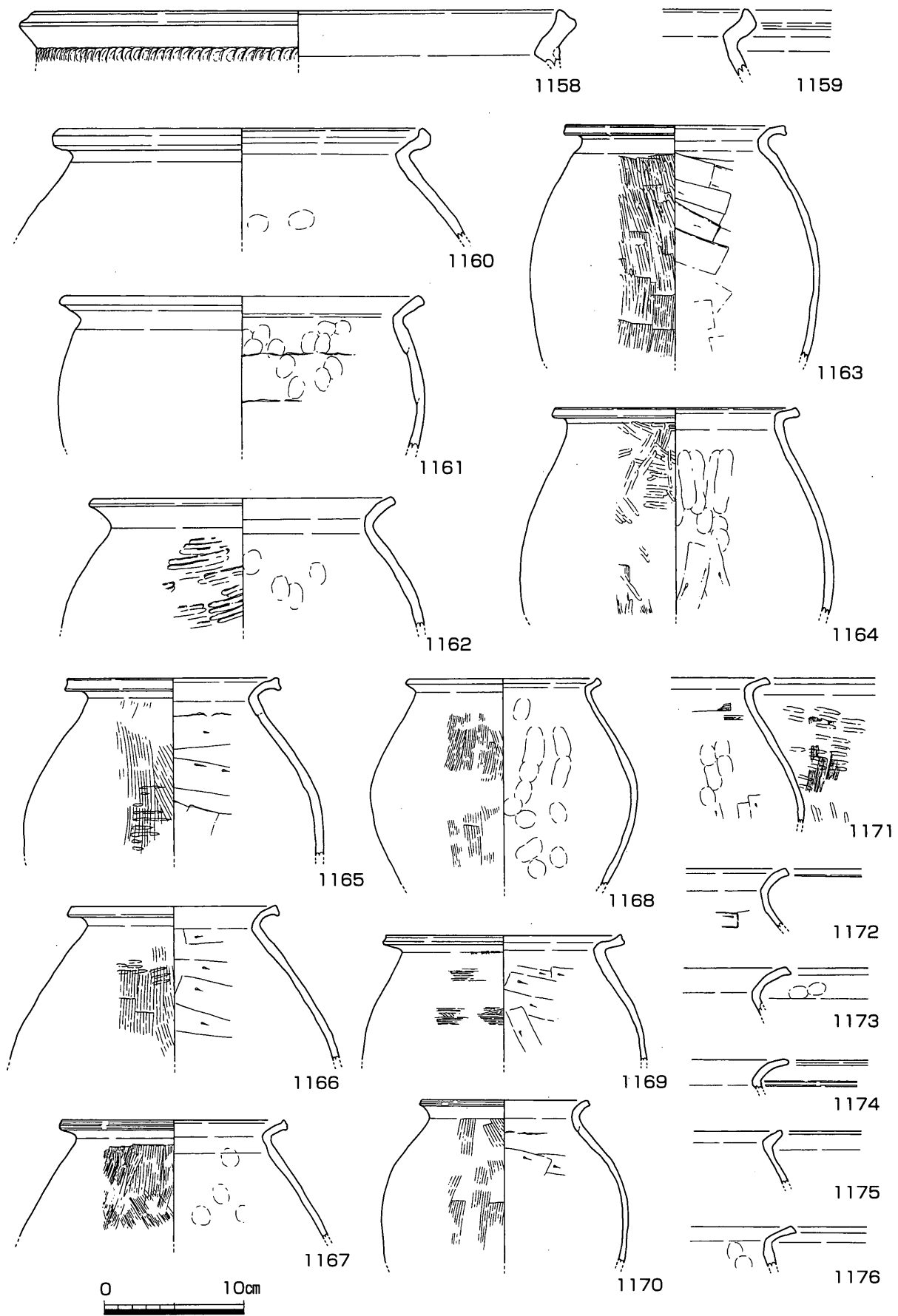
第333图 V区第2面SD10出土遗物(2)(1/4)



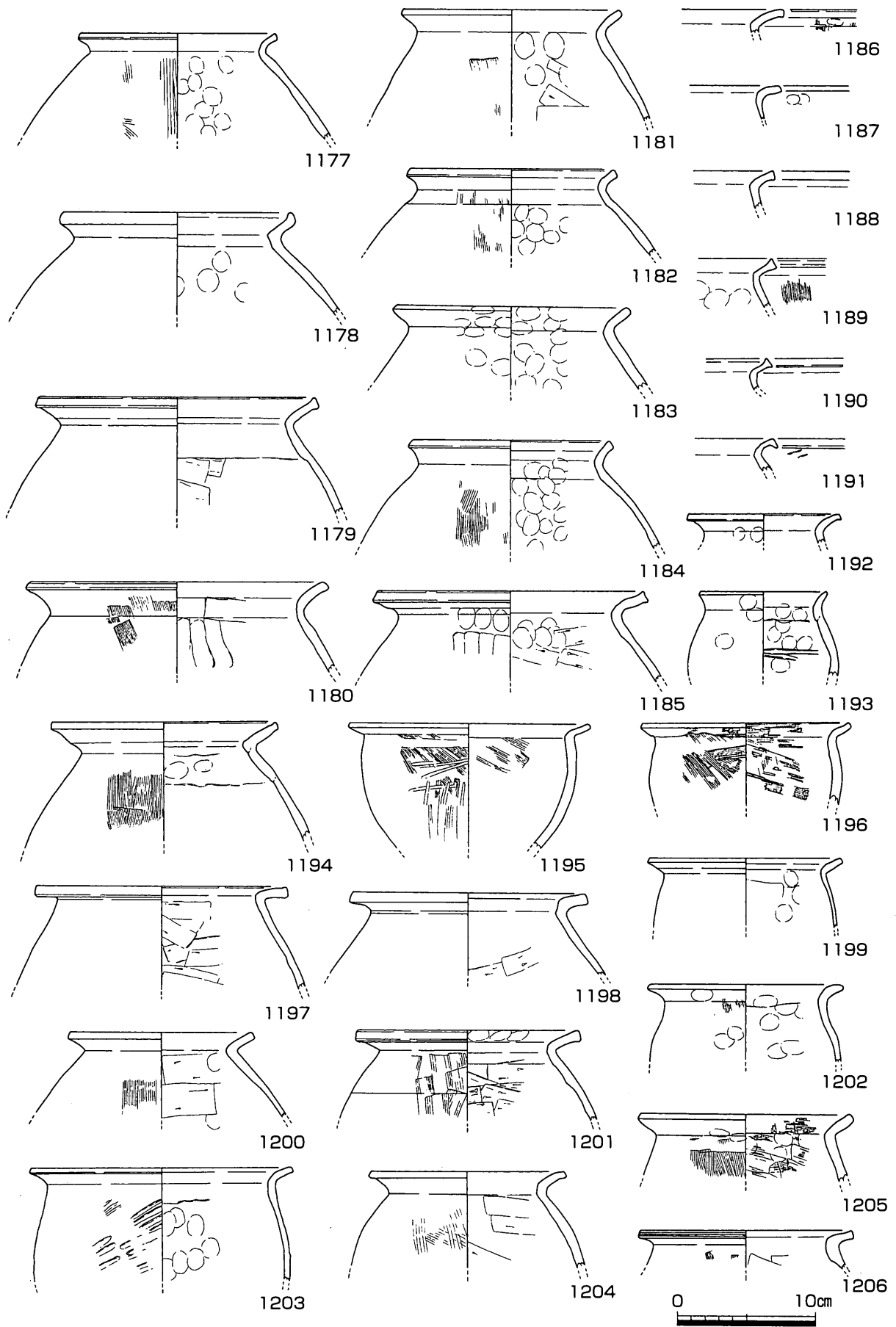
第334图 V区第2面SD10出土遗物 (3) (1/4)

る。1130は口縁部内面を強くナデている。1125は外反する頸部からそのまま口縁部に至り、口縁部端部は先細りになる。1131の口縁部は外傾する頸部から僅かに屈曲して直線的に開く。頸部は薄手になっている。1133は口縁部外面を強くナデている。また端部を下方に拡張している。1134～1138の口縁部は細長く直立する頸部からそのまま外反して開く。頸部外面は1137にヘラミガキが見られる他は、ハケ目を施している。1139の口縁部は外傾する頸部から大きく開くが、外面を強くナデて端部は下方に拡張している。1141は口縁部端部を内側に拡張している。外面には刻目突帯を巡らせている。1143～1149は口縁部のみであるが、いずれも横に大きく開いている。1143は端部外面に凹線を巡らせている。1150・1151は無頸壺である。1150は口縁部端部を外面側に大きく拡張し、内傾する面を作っている。体部外面にはハケ目を施している。1151は口縁部外面に刻み目を施している。口縁部直下には2個1単位の穿孔がある。また刻目突帯を巡らせた後に棒状浮文を貼り付けている。

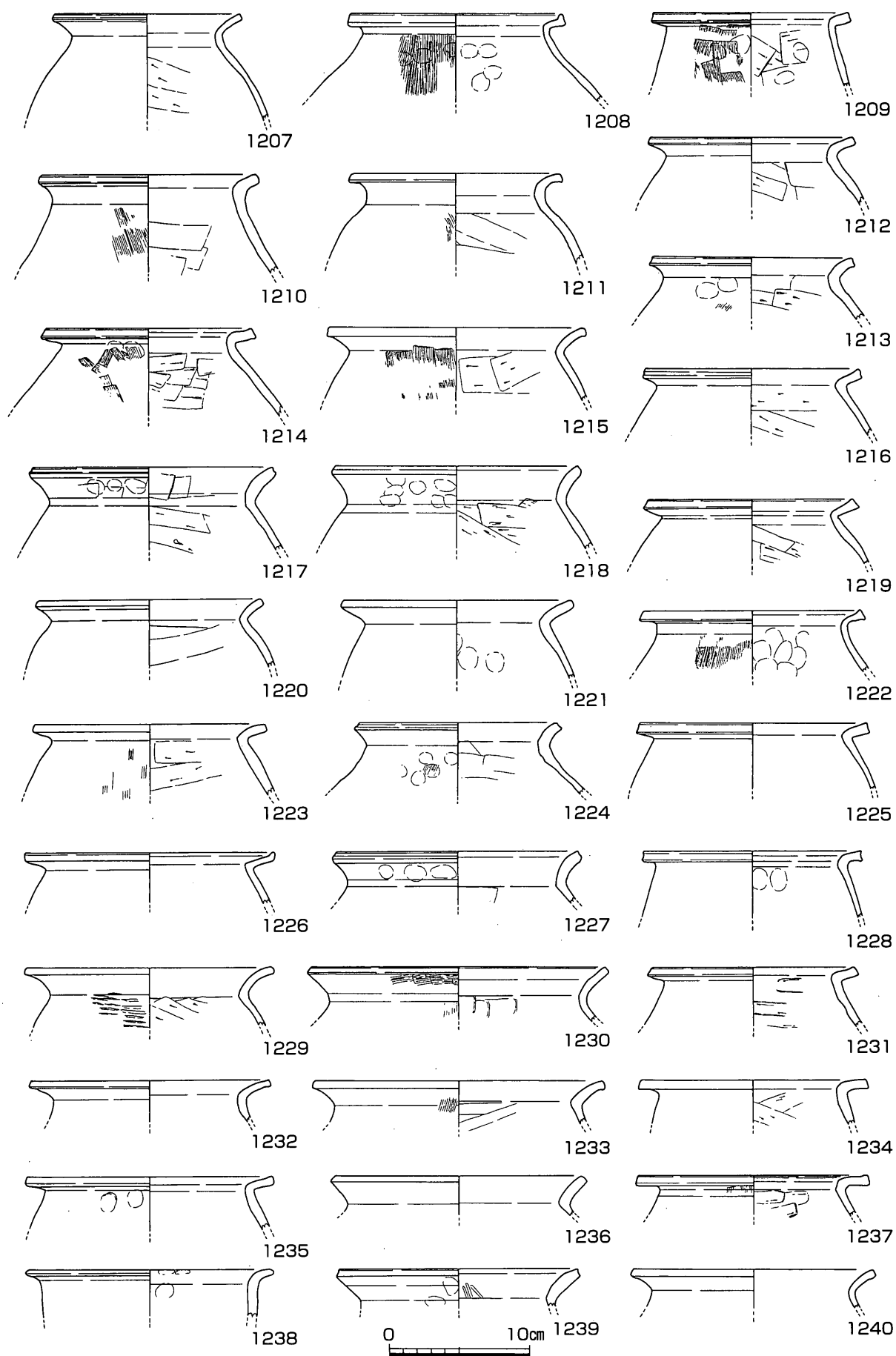
1152～1252は甕である。1152の口縁部は体部に比べて肥厚している。体部の最大径は中央にあるが、全体に膨らみは弱い。外面には全体にハケ目を施し、内面はヘラケズリである。1153は体部最大径が上半部にある。内面にヘラケズリは弱く部分的に砂粒が動く程度である。1154の口縁部は直線的に立ち上がり、内・外面には指押さえが顕著である。体部は外面にヘラケズリを施し、内面には指で強く抉るようにナデている。1155は口縁部内面を強くナデており、端部は先細りになる。体部は最大径が上半部にあり、外面はタタキの後に部分的にハケ目を施している。内面にもハケ目を施している。底部は厚い。1156は上部と下部は接合しなかったが同一個体と考えられる。1157の口縁部は直線的に立ち上がり、体部は最大径が上半にあり強く張っている。外面は全体に丁寧にハケ目を施し、内面には指押さえが顕著である。1158は口縁部屈曲部の外面に指押さえによる刻目突帯を巡らせている。1159・1160は口縁部端部を上方に拡張している。1161は体部内面に粘土の接合痕が残り、接合痕付近には指押さえが顕著である。1162は体部外面にタタキを施している。1163の口縁部は大きく外反して真横に開く。体部外面には重ねるようにハケ目を施した後に部分的にヘラミガキを加えている。内面は板ナデであるが部分的に僅かに砂粒が動いている。1164の口縁部は短いが鋭く屈曲している。体部外面にはハケ目の後にヘラミガキを施している。内面にはヘラケズリが見られる。胎土に角閃石を含んでいる。1165・1166の口縁部は外反して横に開く。体部外面はタタキの後にハケ目を施し、内面にはヘラケズリを施す。1167は口縁部屈曲部直下の内面を強くナデている。胎土に角閃石を含んでいる。1168の体部最大径は上半にある。胎土に角閃石を含んでいる。1169の口縁部屈曲部内面は丸みを帯びている。また口縁部内面を強くナデている。1170の口縁部は全体に外反している。1171は体部外面にタタキの後にハケ目を施し、最後に下半にヘラミガキを加えている。1178は口縁部端部を上方に拡張している。1179の口縁部端部は上下に拡張している。1180の口縁部は全体に外反している。体部内面は指で強くナデている。1182～1184は全体に指押さえが顕著で、1182と1184は胎土に角閃石を含んでいる。1185の口縁部屈曲部内面は丸みを帯びており、端部は平坦である。体部外面には横方向に連続的に板ナデを施している。内面にはヘラケズリを強く施している。1191の口縁部端部は下方に大きく拡張している。1193は体部内面に指押さえが顕著で、板状工具の小口部分による沈線が認められる。1194は口縁部端部を強くナデている。体部の粘土の接合部分が段になり薄くなっている。1195の口縁部は直線的に開く。体部は丸みが強い。外面には粗いハケ目の後にヘラミガキを加えている。あるいは鉢になるのかもしれない。1196は口縁部から体部にかけて内・外面とも全体にハケ目を施している。1197の口縁部は真横に開く。1198は口縁部屈曲部内面を強くナデている。1199の体部は非常に薄くなっている。1201は口縁部内面に指押さえを行っている。ま



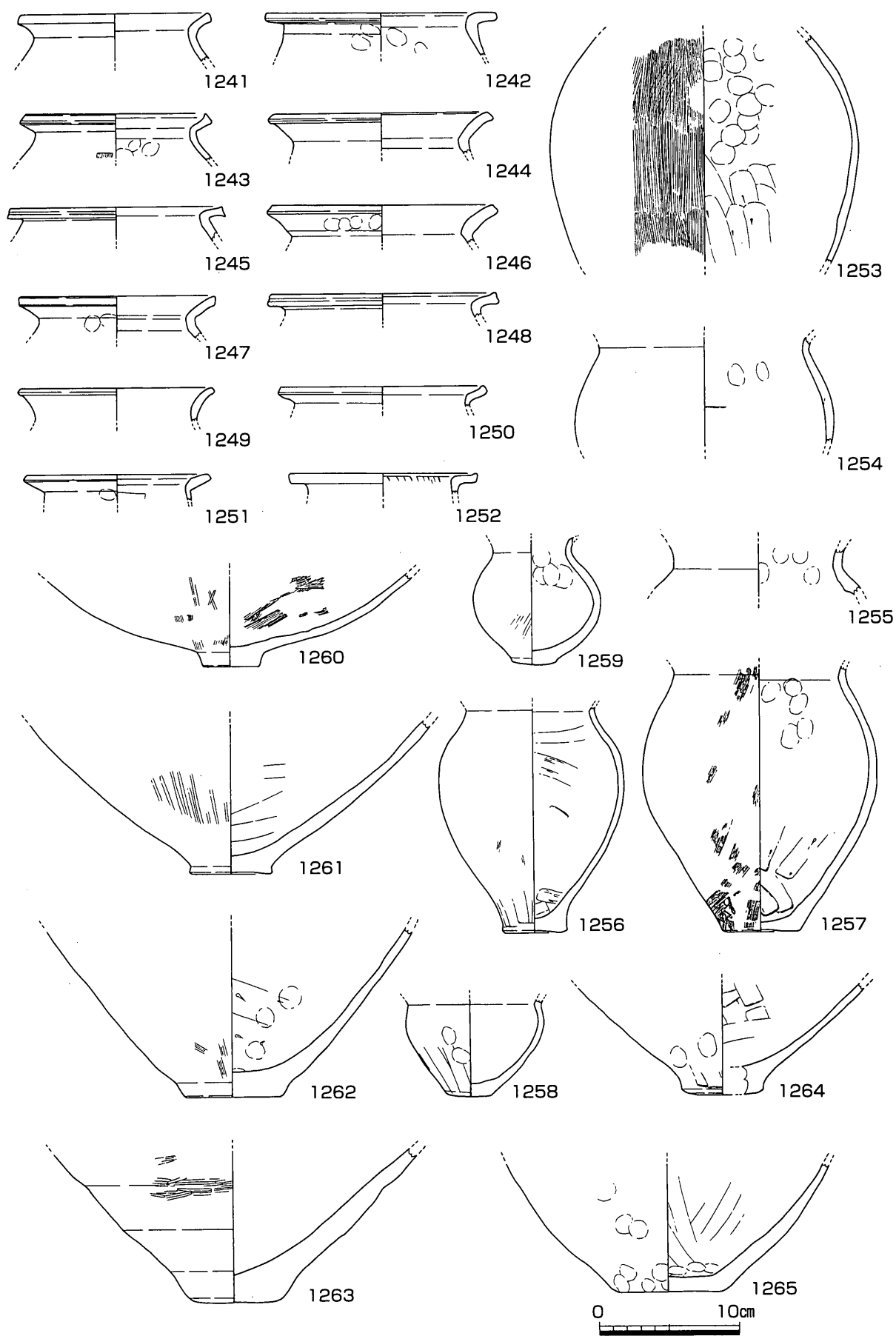
第335图 V区第2面SD10出土遗物(4)(1/4)



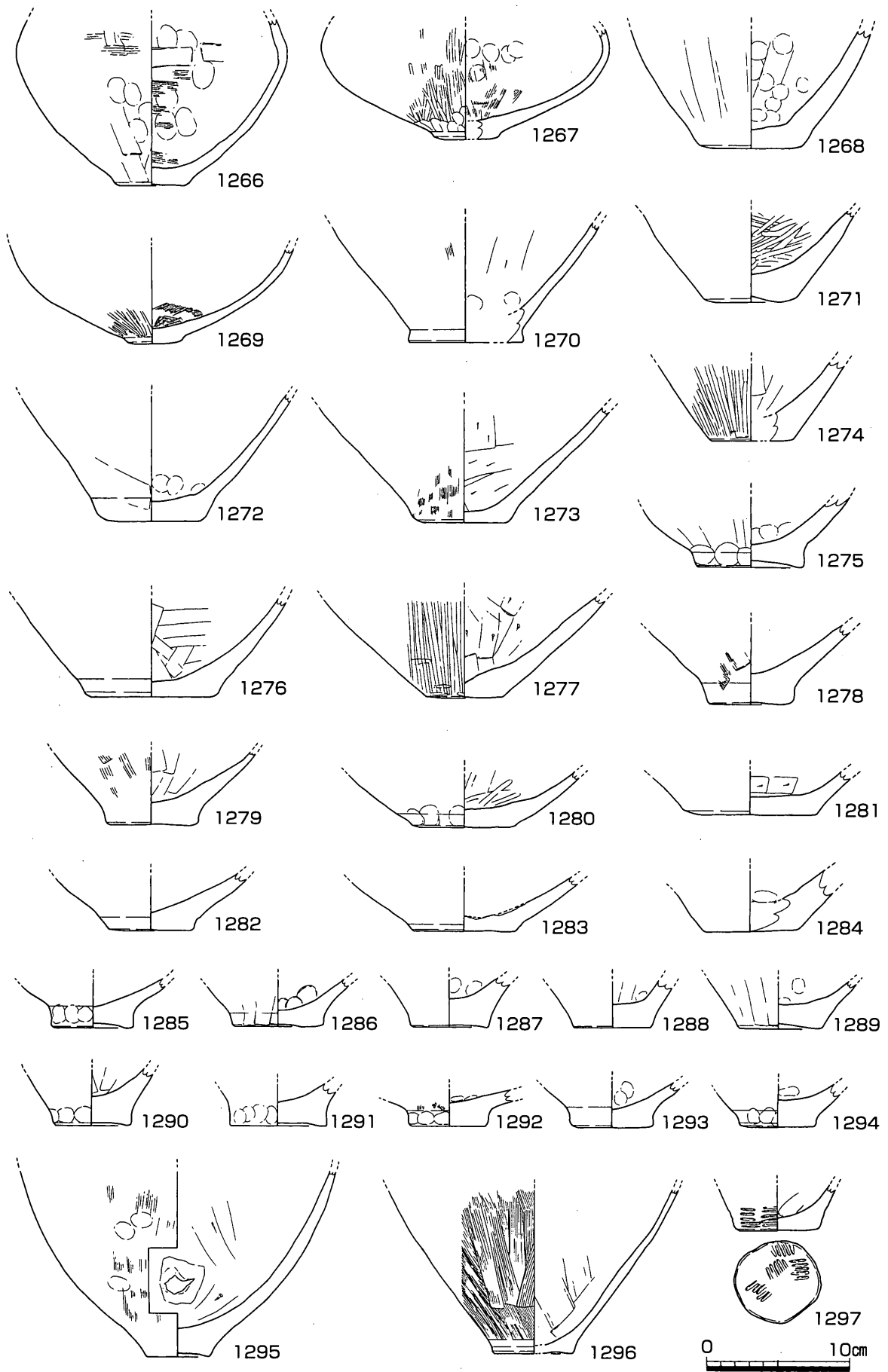
第336图 V区第2面SD10出土遺物(5)(1/4)



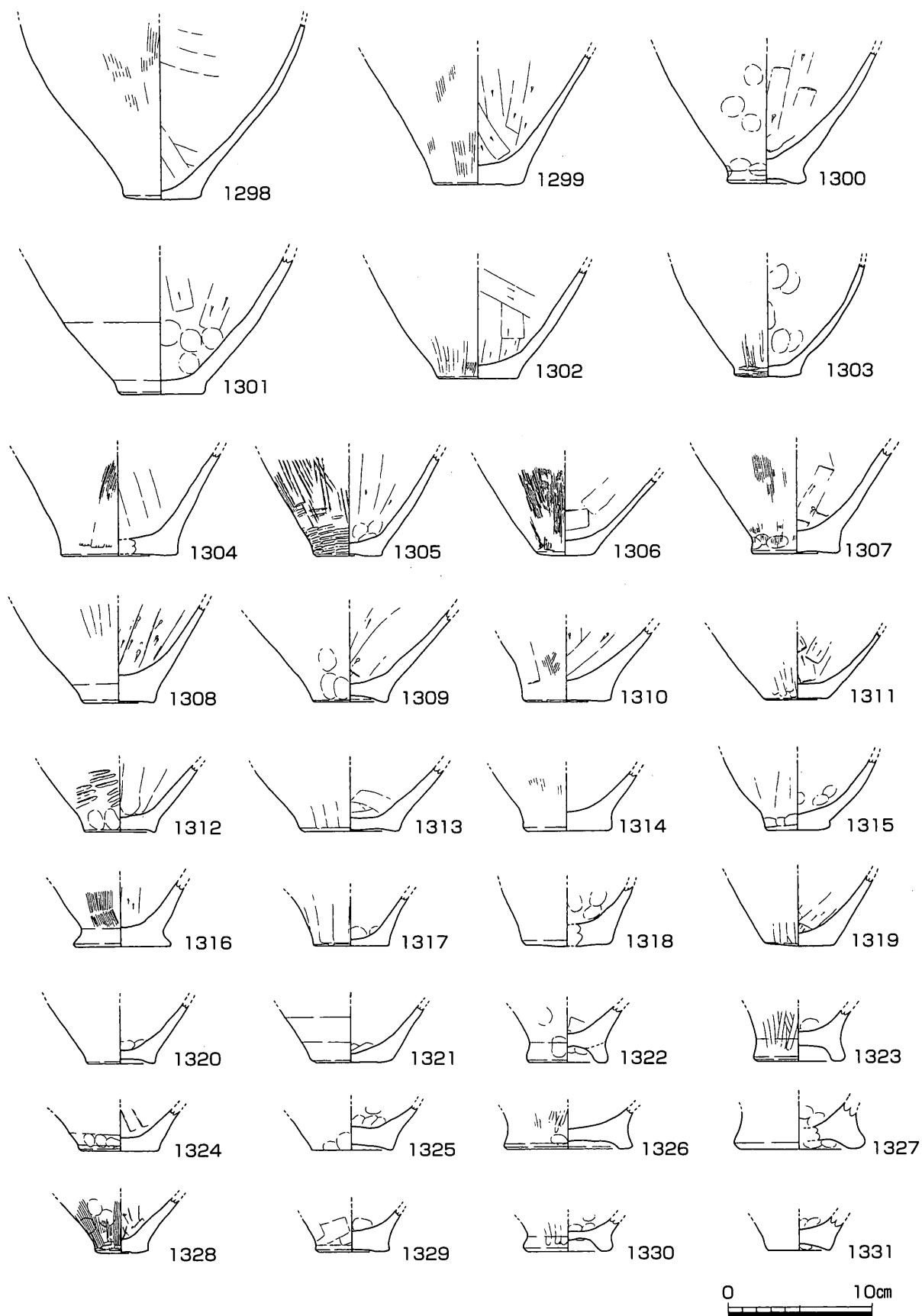
第337图 V区第2面SD10出土遺物 (6) (1/4)



第338图 V区第2面SD10出土遺物(7)(1/4)



第339图 V区第2面SD10出土遗物(8)(1/4)



第340图 V区第2面SD10出土遗物 (9) (1/4)

た体部内面のヘラケズリは非常に強く、器面が抉れている。1202の口縁部は全体に外反し肥厚している。1203は体部外面に太いタタキを施している。1205は体部とともに口縁部内面にもハケ目を施している。1208は口縁部端部を上方に大きく拡張している。1214は口縁部内面を強くナデている。1222は口縁部の内・外面を強くナデている。体部外面にはハケ目の後に上部を横方向にナデている。胎土に角閃石を含んでいる。1224・1225ともに口縁部は体部に比べて厚くなっている。1226の口縁部は鋭く屈曲し、端部を上方に拡張している。1229は体部外面にタタキを施している。1230は口縁部の外面にハケ目を施し、内面は強くナデている。1228・1234・1237・1242・1245・1248・1252の口縁部は真横に開いている。1238は如意形の口縁部である。1243は口縁部端部を上方に拡張している。1253は体部外面には丁寧にハケ目を施している。胎土には角閃石を含んでいる。1256・1257の体部最大径は上半にある。1258は甕としたが、あるいは鉢になるかもしれない。

1259～1331は壺および甕の底部・体部である。1259は壺で、体部は球形である。1260・1261・1263・1264・1269・1270・1278・1285・1292～1294・1315・1316の底部は突出している。1267の体部は扁平で、外面にヘラミガキを施している。1272は胎土に結晶片岩を含んでいる。1271・1275・1285・1289～1291・1295・1300・1309・1320・1325・1331の底部は上げ底である。1297は底部外面にもタタキを施している。1305は体部外面にタタキの後に粗いハケ目を施し、内面はヘラケズリになっている。底部外面にはハケ目を施している。1322・1323・1326・1327・1330の底部には短い脚台が付いている。

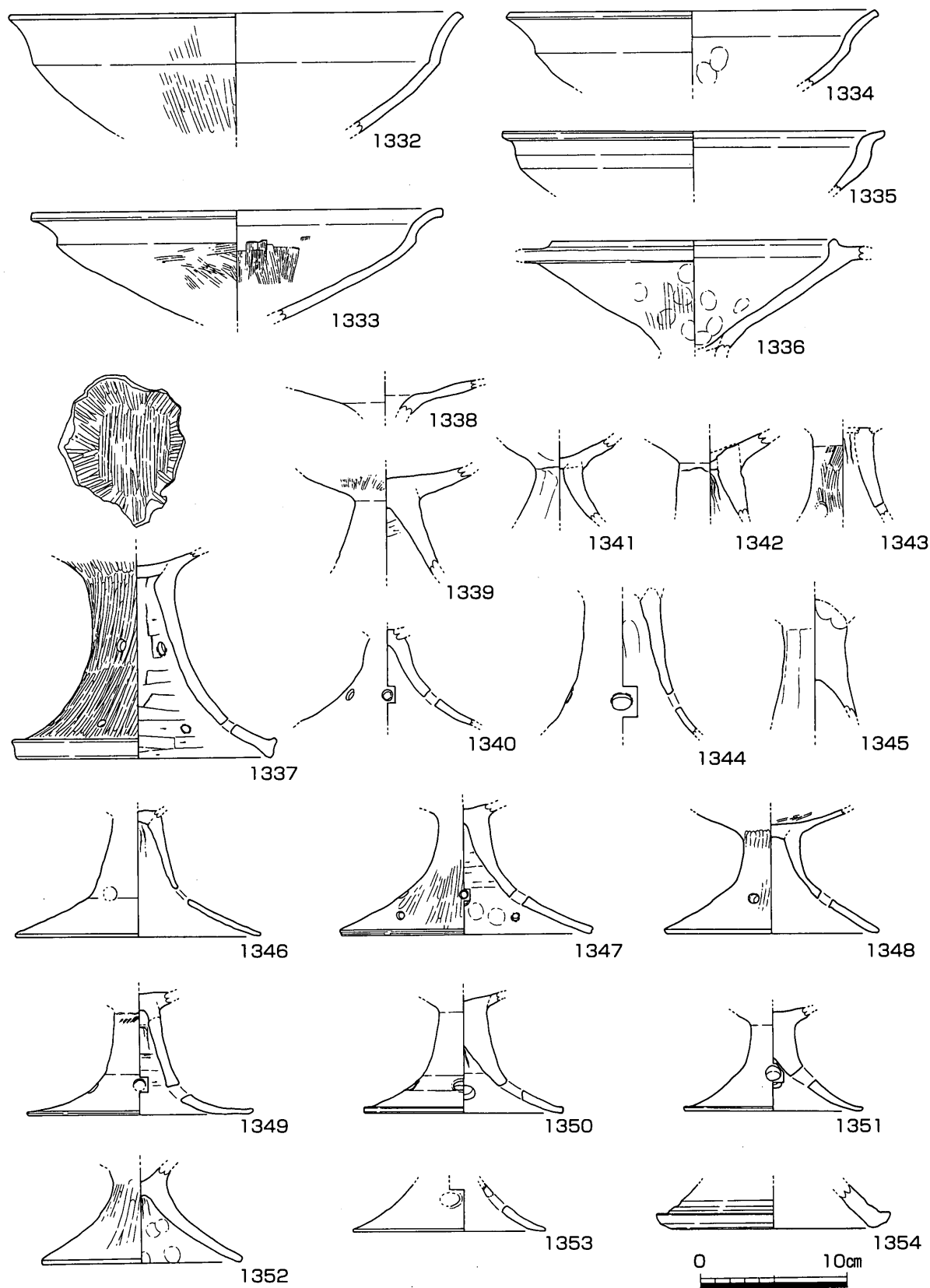
1332～1354は高杯である。1332～1334の口縁部は外反している。1333の杯部は内・外面ともにハケ目を施している。1335は杯部が屈曲して立ち上がった後に、口縁部は短く横に開いている。1337の脚部は全体に外反し、端部を上下に拡張している。外面には丁寧にヘラミガキを施し、内面はヘラケズリである。上下2段に透かし穴があり、上段は5個、下段には現存で3個、復元で6個の透かし穴がある。杯部の内面にも丁寧にヘラミガキを施している。杯部と脚部の接合は円盤充填である。胎土には角閃石を含んでいる。1338と1342には円盤充填の剥離痕がある。1346～1348の脚部は下半が直線的に開いている。1349の脚部は強く外反し、接地面が広がっている。1352の脚部は全体に直線的である。

1355～1366は鉢である。1355～1359・1361～1364の口縁部は体部から屈曲して開いている。1355の底部は突出している。1361の口縁部の屈曲の度合いは弱く、緩やかに外反している。1362は口縁部をナデることにより僅かに屈曲させている。端部は先細りである。1364の口縁部屈曲部の内面は鋭く、端部は上方に拡張している。体部外面は摩滅しているが、内面にはヘラミガキを施している。1360は口縁部端部を外面に拡張させて、上面に幅広の面を作り斜格子文を施している。外面には刻み目を加えている。1365の体部は直線的で、口縁部端部はそのまま先細りになる。体部外面にはタタキを施している。1366の体部は緩やかに内湾してそのまま口縁部に至り、端部は先細りになる。体部外面には全体にヘラミガキを施している。底部には短い脚台を作り出し、側面に指押さえを行っている。1367は台付鉢の台部である。1368はミニチュアの鉢で、底部は上げ底になっている。

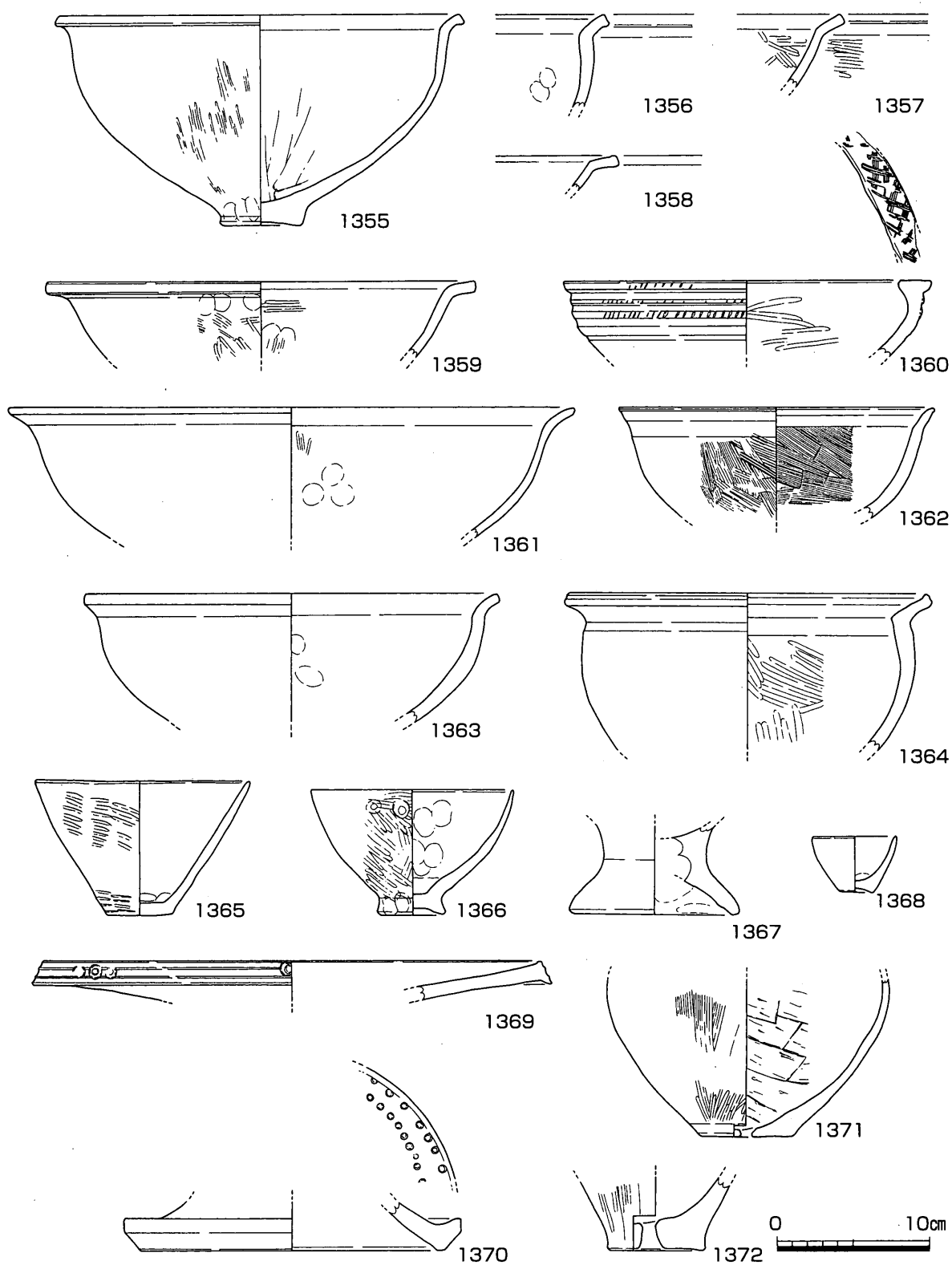
1369は器台の口縁部で、直線的である。口縁部端部を上下に拡張し、外面には3個1単位の円形浮文を貼り付けている。1370は器台の脚部と考えられるが、あるいは高杯か台付鉢の台部になるかもしれない。端部は上方に拡張し、斜めに接地している。外面には竹管文を2列巡らせている。

1371・1372は甌である。1371は甌としたが、底部穿孔の壺と考えたほうが良いかもしれない。体部外面はハケ目の後にヘラミガキを施し、内面は全体にヘラケズリになっている。

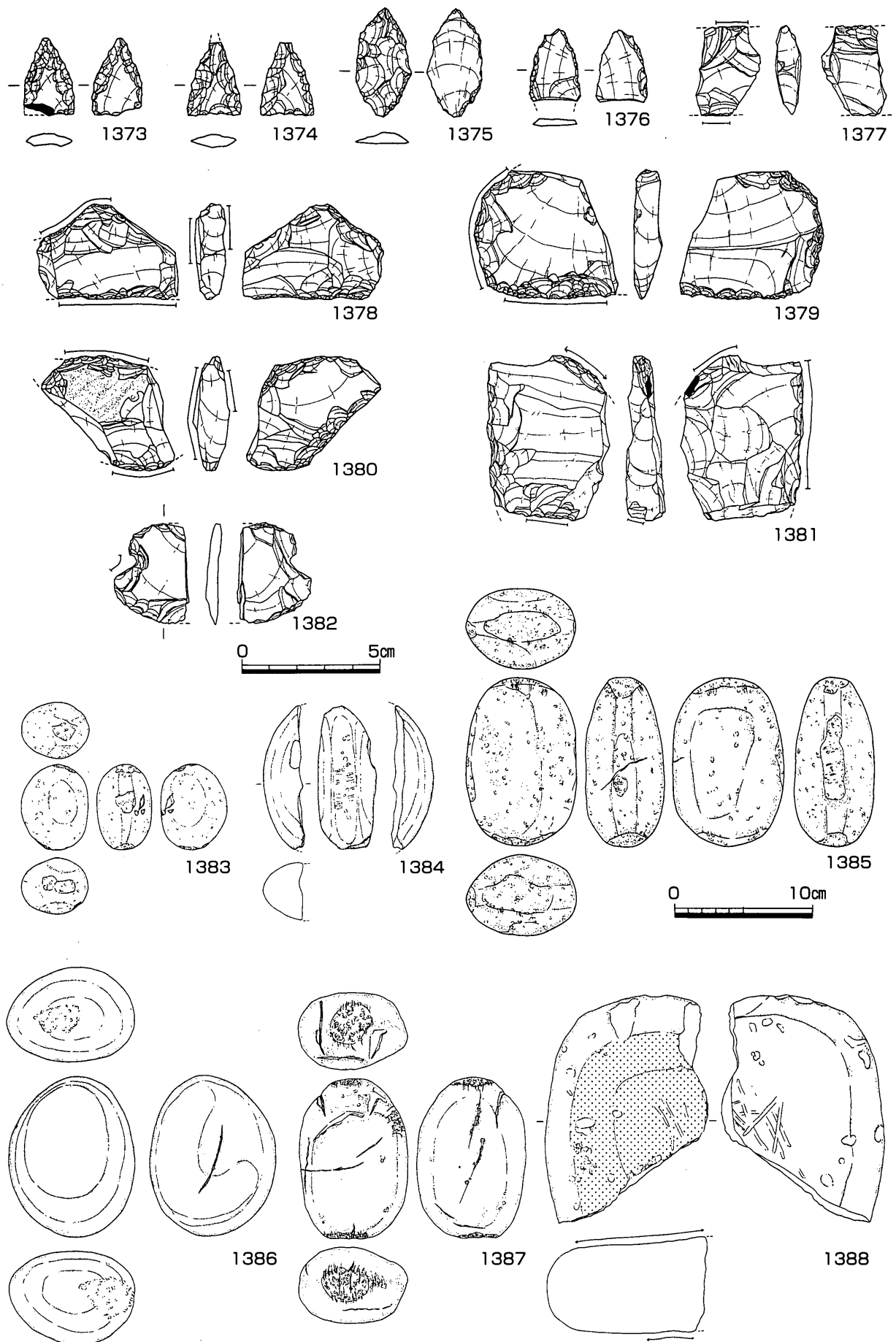
1373・1374は平基の石鉢である。1375・1376は石鉢の未製品である。1375は凸基になるもので、鉢身の



第341图 V区第2面SD10出土遗物 (10) (1 / 4)



第342图 V区第2面SD10出土遗物 (11) (1 / 4)



第343图 V区第2面SD10出土遺物 (12) (1/2、1/4)

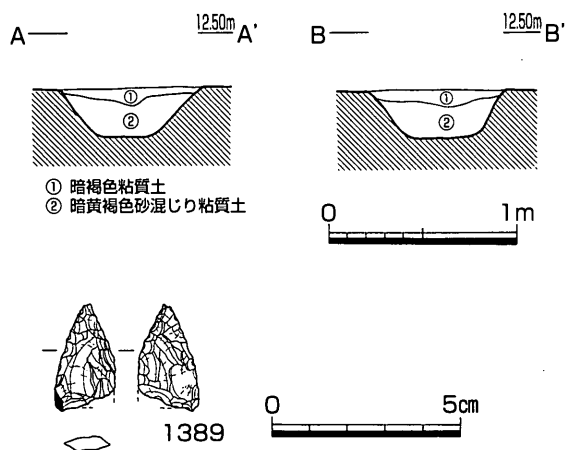
片側だけと、側縁部の一部を調整した段階である。

1377～1381は楔形石器である。1378・1380は截断面の両側縁にも敲打痕が認められる。1379は90°回転させながら使用したために、敲打痕と截断面が隣り合った2辺に認められる。

1382は打製石庖丁である。側縁部には抉りが施されている。

1383～1387は敲石である。1385と1387は打撃した痕跡が顕著である。1385は上下両端部に加えて、両側面も使用している。1386の打撃に使った痕跡は弱い。1388は台石兼砥石で、部分的に被熱して赤変している。

以上の出土遺物から、SD10は弥生時代後期中葉を中心とする時期である。

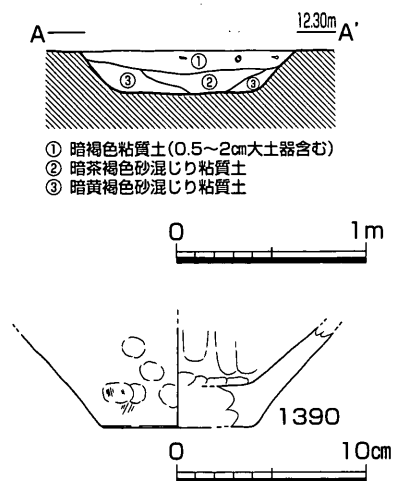


第344図 V区第2面SD11断面図(1/40)、出土遺物(1/2)

SD11 (第344図)

調査区南東部の、旧G1区南西側で検出した溝である。北西-南東方向に直線的に伸びるが、北西端は不明瞭になる。全体に均整のとれた形で、検出部分での全長は6.3mになる。幅0.72m、深さ24cmで、掘り込みは直線的になっている。埋土は下層に暗黄褐色砂混じり粘質土が厚く堆積している。

遺物の出土量は少ない。1389は石鏃であるが基部の大部分が欠損している。基部の残存部分が僅かに湾曲していることから、凹基になるものと思われる。土器は細片が少量出土したにとどまる。



第345図 V区第2面SD12断面図(1/40)、出土遺物(1/4)

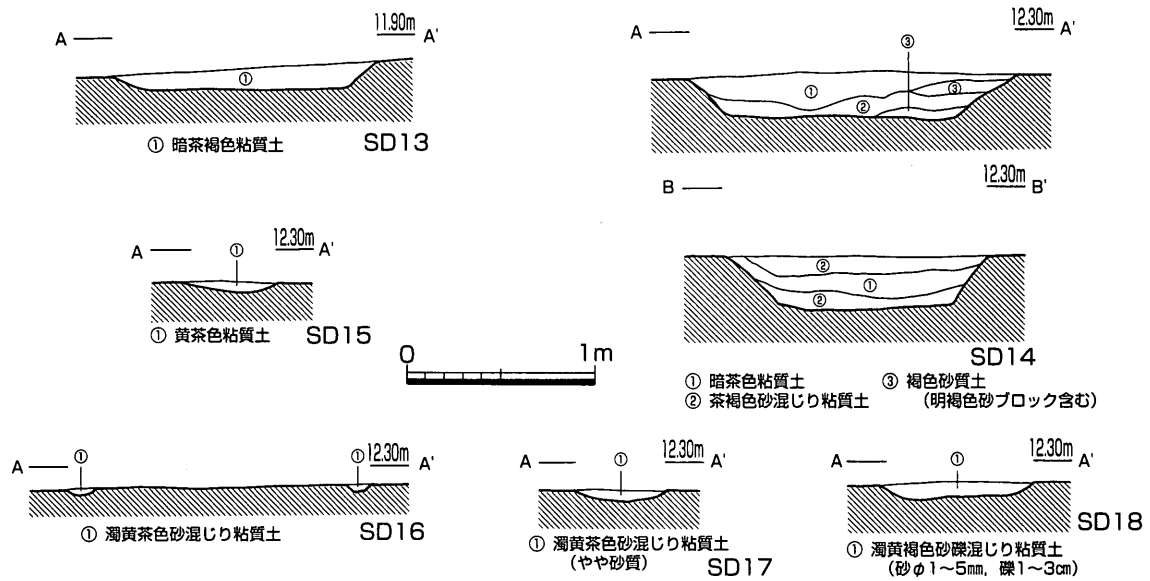
SD12 (第345図)

調査区南東部の、旧G1区南西側で検出した溝である。SD11の南東0.8mのところ隣接する。SD11の延長上にあり、同じく北西-南東方向に直線的に伸びる。南東端の部分はトレンチによって削られているが、全長は5.5m前後と考えられる。幅は0.8～1.1mで、北東側ほど幅が広くなる。深さは22cmで掘り込みは直線的である。埋土は暗褐色系の砂混じり粘質土である。

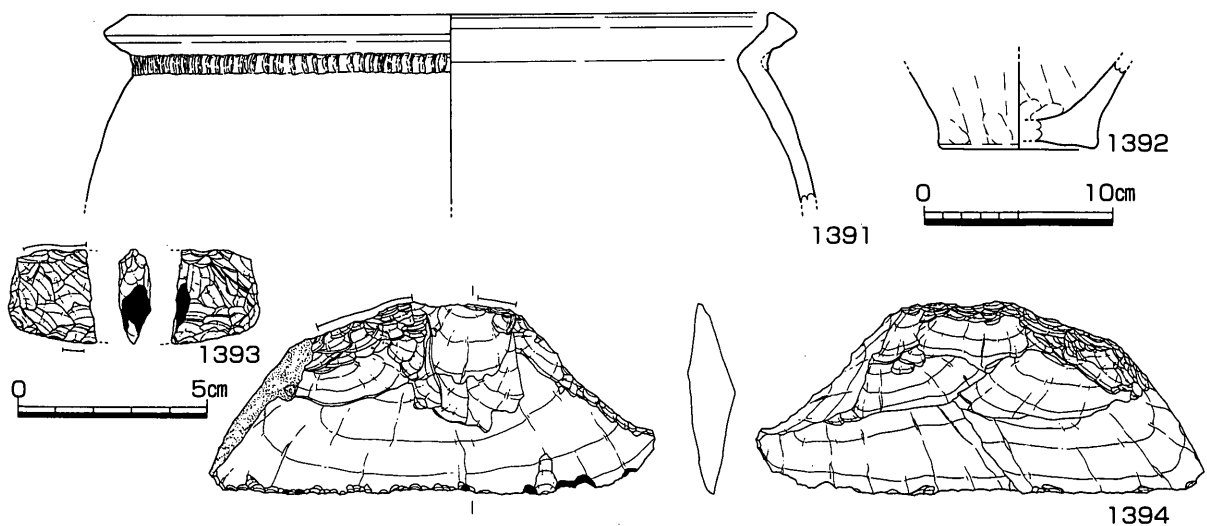
遺物の出土量は少なく、上層から少量出土している。1390は壺の底部と考えられる。底部内面には指押さえが顕著である。

SD13 (第346図)

調査区中央やや南寄りの、旧G3区で検出した溝である。直線的に北西-南東方向に伸びるが、南東端は不明瞭になっている。検出部分で全長3.8m、幅0.7～1.4mで、南東部分の幅が広がっている。深さは15cm前後と浅く、埋土は暗茶褐色粘質土の単一層である。遺物は出土していない。



第346図 V区第2面SD13~18断面図 (1/40)



第347図 V区第2面SD14出土遺物 (1/4、1/2)

SD14 (第346・347図)

調査区中央部の、旧G 3区で検出した溝である。その中央部分でS字状に屈曲している。西側の延長は西側の旧G 7では検出されていないことから、SD14の西端は旧G 3区と旧G 7区の調査区境の中で収束している。検出部分の全長は16.2mほどである。幅は1.4~2.3mで、屈曲部分の幅が広がっている。掘り込みは直線的であるが、南側で傾斜の急な部分が多い。深さは20~30cmで、埋土は暗茶~茶褐色の粘質土が中心であるが、部分的に褐色砂質土が堆積している。

遺物の出土量は少なく、土器はすべて細片である。1391は甕で、口縁部端部を上方に拡張して、外側に傾斜する面を作っている。頸部外面には刻目突帯を巡らせている。全体にナデている。1392は甕の底部と考えられ、上げ底である。1393は楔形石器で、両面とも全体に剥離面が多い。1394はスクレイパーである。刃部は剥片の鋭利な部分をそのまま利用して、微細な調整を加えている。上部には弱い敲打痕が認められ、側縁部には自然面を残している。

SD15 (第346図)

調査区西側の中央部の、旧G7区で検出した溝である。SH11の東側に隣接している。北東から南西方向に3.5mの部分で南東方向に直角に屈曲し、急激に幅を狭めながら1.2m伸びて収束する。全長は4.7mになる。幅は0.3~0.5m、南東に屈曲した部分の幅は0.1~0.15mである。全体に掘り込みは緩やかで、深さは5cm前後しかない。埋土は黄茶色粘質土の単一層である。遺物は出土していない。

SD16 (第346図)

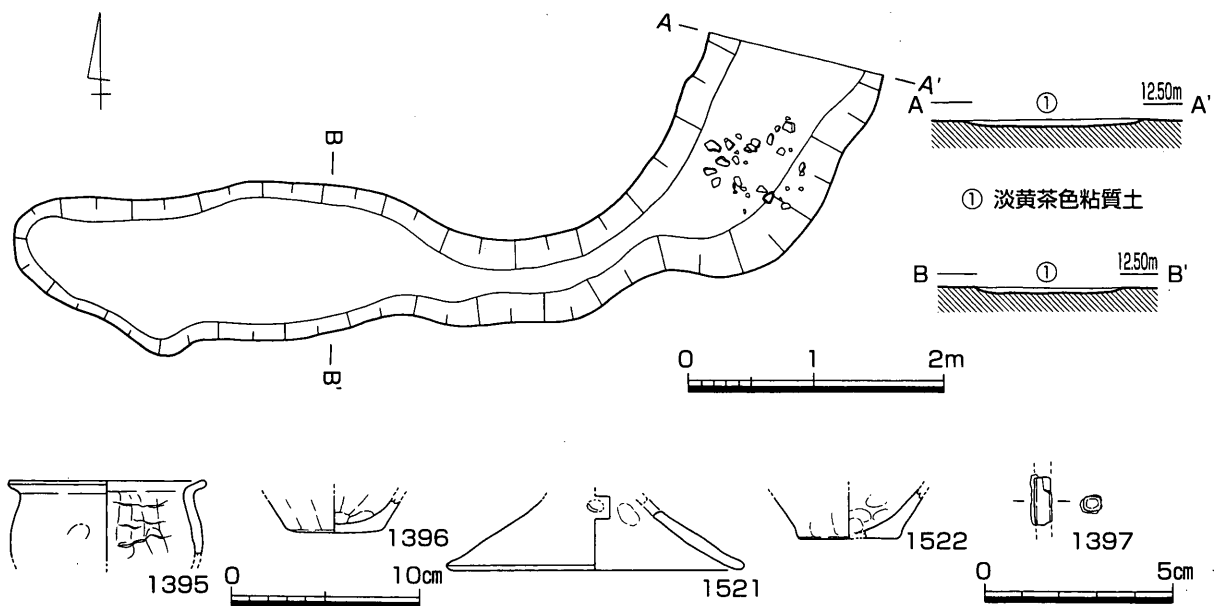
調査区西側の中央部の、旧G7区で検出した溝である。SH09・10の東側に隣接し、SD15の南4.5mのところを位置している。1.5m四方に方形に巡るが、南東部分が途切れている。また北側の一部をSK37により壊されている。幅は全体に0.1m前後と狭く、深さも2cmしかない。掘り込みは急傾斜の部分が多く、埋土は濁黄茶色砂混じり粘質土の単一層である。方形に巡る溝の内側には特に遺構は検出されていない。規則的な形状から、他の遺構の一部かもしれない。遺物は出土していない。

SD17 (第346図)

調査区西側の中央部の、旧G7区で検出した溝である。東西方向に直線的に5.0m伸びている。幅0.5m前後、深さ10cm前後である。掘り込みは緩やかで、埋土は濁黄茶色砂混じり粘質土の単一層である。遺物は出土していない。

SD18 (第346図)

調査区西側の中央部の、旧G7区で検出した溝である。SD17の西側に隣接し、SD17の延長上にある。溝の西側はSH09・10に壊されている。検出部分で全長2.5m、幅0.5~0.8m、深さ10cm前後である。掘り込みは緩やかで、埋土は濁黄褐色砂礫混じり粘質土の単一層である。遺物は出土していない。



第348図 V区第2面SD22平・断面図 (1/60)、出土遺物 (1/4、1/2)

SD22 (第348図)

調査区北壁際の、旧G 4区の西側で検出した溝である。北側の部分は調査区外になるため全体の形状と規模は不明である。溝は調査区北壁から2.0m南下した後に西側に向かって屈曲し、5.3m伸びて収束する。調査区内での全長は7.3mになる。幅は0.6~1.4mで、屈曲部付近が狭くなっている。掘り込みは全体に緩やかで、特に北壁から1~2m部分の南側の傾斜が緩くなっている。深さは5cmと浅く、埋土は淡黄茶色粘質土の単一層である。

遺物の出土は少ない。1395は甕で、口縁部は直線的に開く。体部内面には粘土の接合痕が多数残っている。1396は甕の底部である。1397は鉄鏝の基部である。1521は高杯の脚部、1522は甕の底部と考えられる。

SD22は弥生時代後期でも前葉以降のSB10の廃絶後に、SB10のもっとも東側の柱穴を壊して掘削されている。従ってSD22はSB10より新しく、出土遺物からも弥生時代後期中葉~後半の所産と考えられる。

SD23 (第349~350図)

調査区東壁際の、旧G 1区で検出した溝である。SD01の埋没後の低地部分に掘削されている。東側部分は調査区外で、その延長はIV区で検出していないことから、IV区との調査区境の部分で収束していると考えられる。検出した部分で、全長5.8m、幅0.6~2.5mで、西端付近が不整形になっている。掘り込みは急な部分が多い。深さは40~50cmで、埋土は暗褐色粘質土の単一層である。

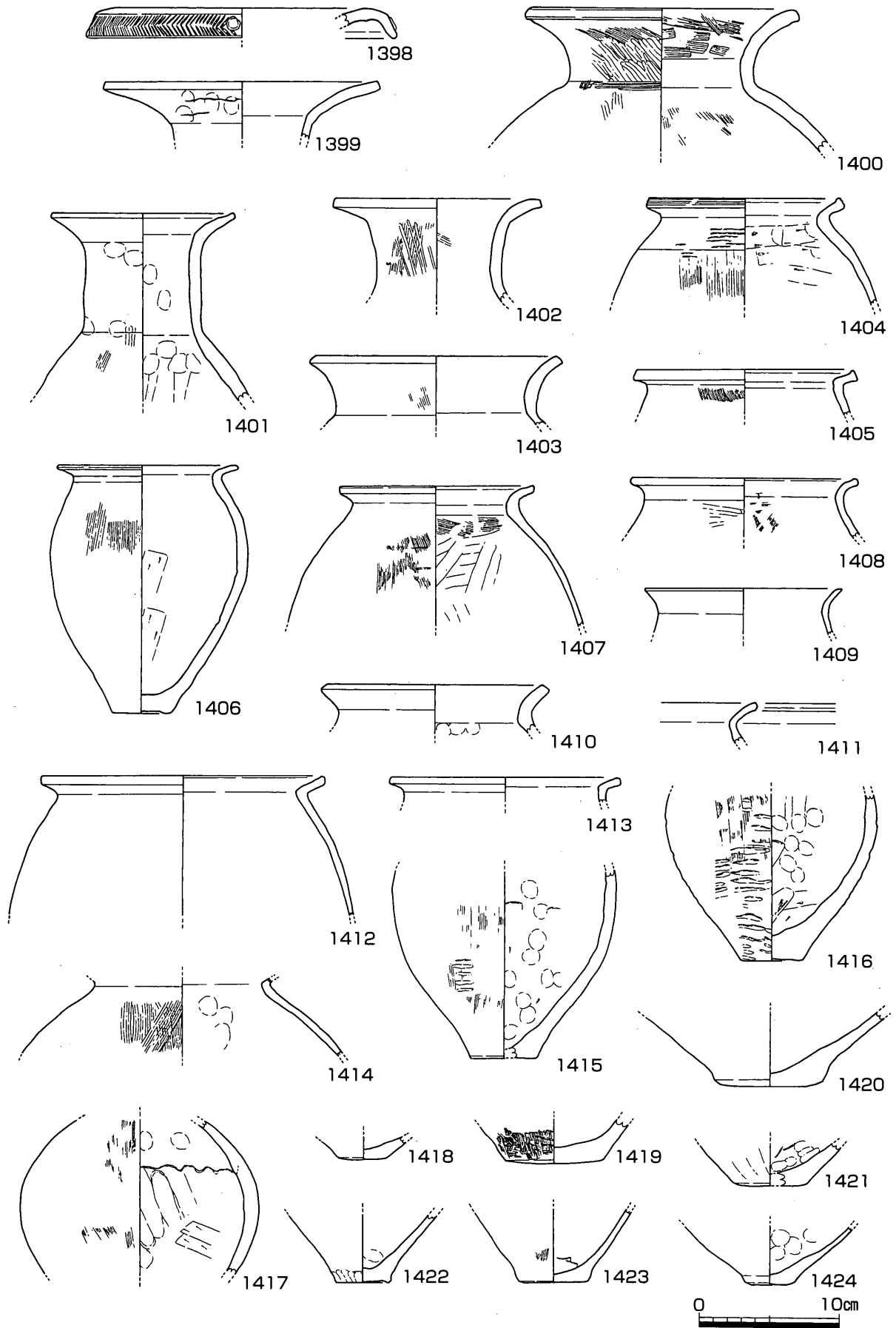
遺物は溝の規模の割には多く出土している。溝の掘り込み面から10cmほど下の部分での出土が多い。遺物は土器が大多数で、僅かに石器が出土している。

1398~1402は壺である。1398の口縁部は外反して下方を向く。外面には羽状に刻み目を施した後に円形浮文を貼り付けている。1399の口縁部は長く、直線的に開いている。1400の口縁部は頸部から外反して開いている。外面はハケ目の後にヘラミガキを施し、内面はハケ目である。また体部と頸部の境部分の外面には横方向にヘラミガキを施している。1401の口縁部は、直立した細長い頸部から直線的に開き、端部を強くナデている。体部上半は張りがない。1402は頸部から外反してそのまま口縁部に至る。外面にはハケ目の後にヘラミガキを施している。

1404~1416は甕である。1404は口縁部を僅かに上方に拡張している。体部は外面にタタキの後にハケ目を施している。内面にはヘラケズリを施している。1405は胎土に角閃石を含む。1406の口縁部屈曲部内面は丸みを帯びており、端部は先細りになる。体部は最大径が上半にあり、外面はハケ目を施している。内面は下半にヘラケズリを施している。1407は口縁部の屈曲部が肥厚している。体部上半は膨らみ、外面にはハケ目を施す。内面は上部にハケ目が認められるほかは、ヘラケズリになっている。1414は体部外面に細かいハケ目を施している。胎土に角閃石を含んでいる。1415・1416ともに体部外面は太いタタキの後にハケ目を施しているが、1416のタタキは大部分が残っている。1416の底部は厚く、内面にヘラケズリを施している。

1417は壺の体部で球形である。内面の中央は指でナデているが、下半はヘラケズリである。1418~1424は壺および甕の底部である。

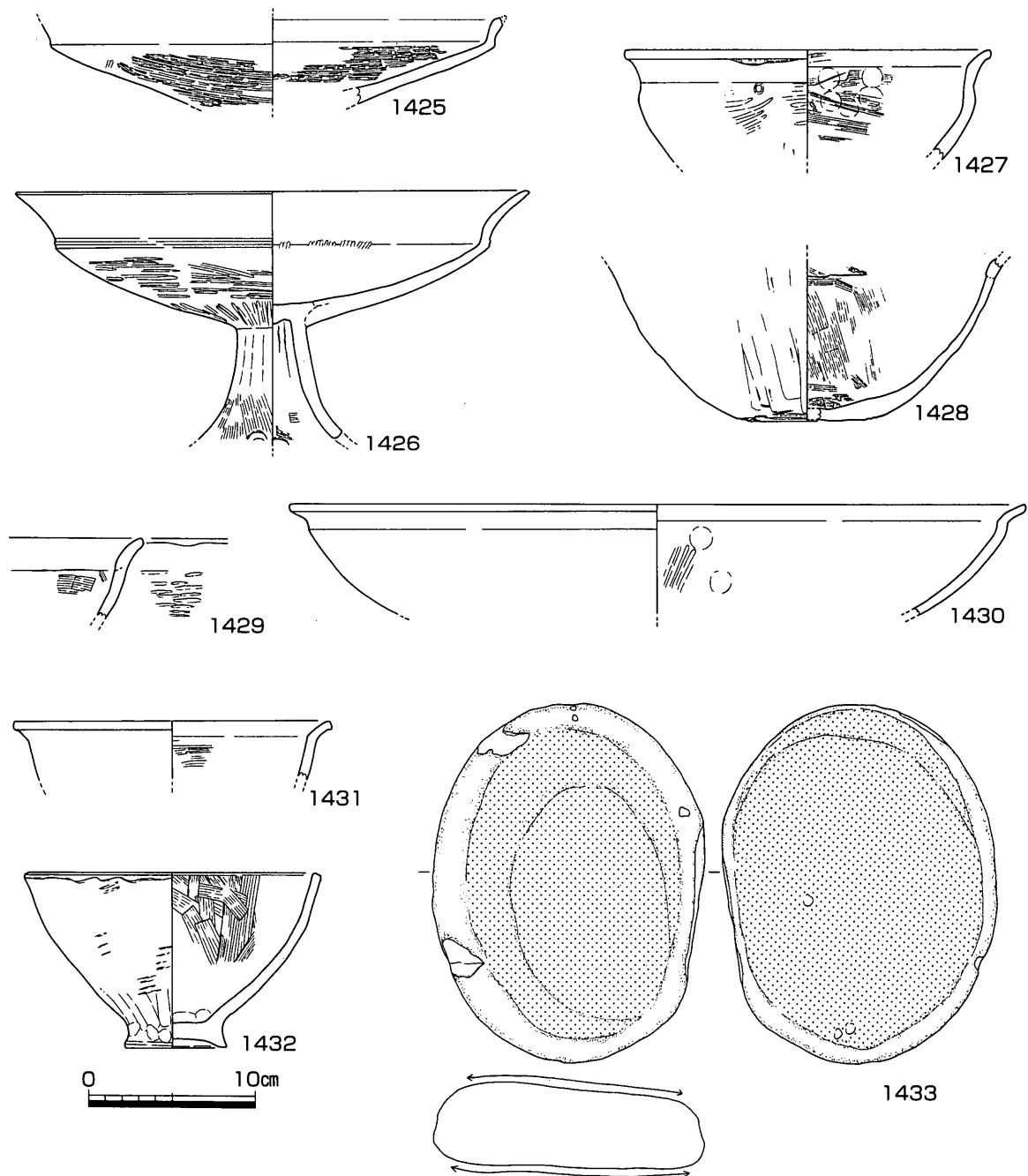
1425・1426は高杯である。1425の口縁部は外面に稜を形成して立ち上がる。杯部は内・外面とも丁寧にヘラミガキを施している。胎土に角閃石を含んでいる。1426の口縁部は外反している。杯部内面は摩



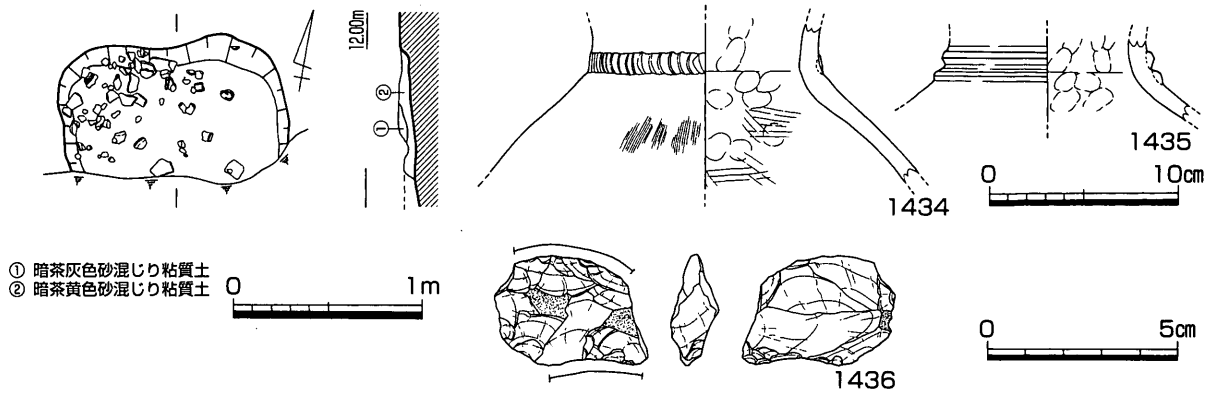
第349图 V区第2面SD23出土遗物(1)(1/4)

減しているが、外面とともにヘラミガキを施している。脚部は上部に板ナデで面取りを行い、下半にはハケ目を施す。現存で2個の透かし穴がある。杯部と脚部の接合は差し込みである。

1427～1432は鉢である。1427は口縁部外面を強くナデている。体部との境目には竹管文が現存で1個認められる。体部の上半はタタキ、下半はヘラケズリで、外面全体は粗い。内面にはハケ目を施している。1428も体部外面はヘラケズリである。体部付近にはタタキが認められる。内面はハケ目である。1429の口縁部の外反は弱い。体部外面にはタタキを施している。1432の口縁部は屈曲せず、体部からそのまま口縁部に至る。体部は内湾し、外面にはタタキの後に板ナデを施している。内面は下半が摩滅しているが、ハケ目である。



第350図 V区第2面SD23出土遺物 (2) (1 / 4)



第351図 V区第2面SK01平・断面図(1/40)、出土遺物(1/4、1/2)

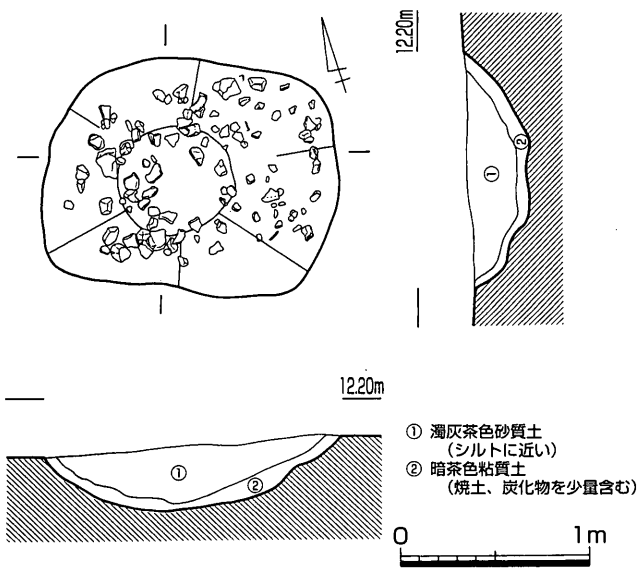
1433は砂岩製の砥石で、両面を使用している。

以上の遺物から、SD23は弥生時代後期中葉の所産である。

SK01 (第351図)

調査区北側の中央部分の、旧G4区で検出した土坑である。平面形は隅丸長方形に近い。南側は攪乱により削られているため、全体形は不明である。北側は少し内湾している。東西方向は1.2m、南北方向は検出された部分で0.65~0.75mである。掘り込みは緩やかで、深さは10cmと浅くなっている。埋土は暗茶灰色と暗茶黄色の砂混じり粘質土である。

1434・1435は壺である。1434は頸部に刻目突帯を巡らせている。体部外面にはハケ目を施し、内面には粗いハケ目を施している。1435は頸部に貼付突帯を2条巡らせている。内面には指押さえが顕著である。1436は楔形石器である。



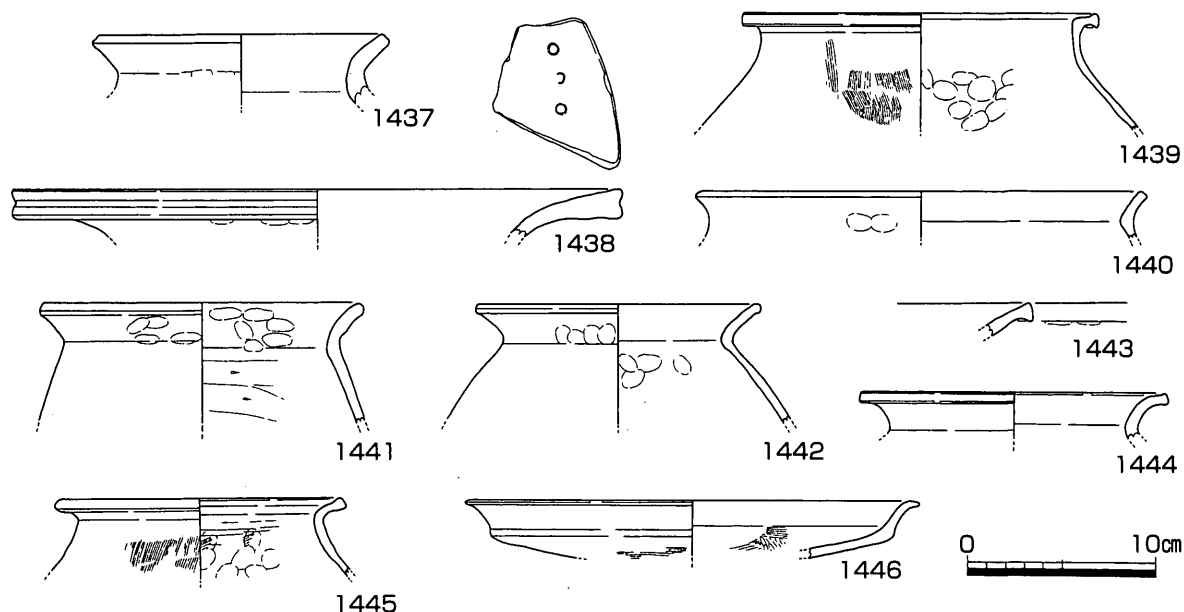
第352図 V区第2面SK02平・断面図、遺物出土状況図(1/40)

SK02 (第352~353図)

調査区北壁際の中央部分の、旧G4区で検出した土坑である。平面形は隅丸長方形で、長辺1.55m、短辺1.2mである。掘り込みの傾斜は全体に緩やかで底部は狭く、播鉢状になっている。深さは35cmで、上層の濁灰茶色砂質土には拳大の礫と土器を含んでいる。

1437・1438は壺である。1438の口縁部は真横に開き、内面に竹管文を施している。1439~1445は甕である。1439の口縁部は鋭く屈曲して真横に開き、内面を強くナデている。端部は上下に拡張している。体部上半は直線的で、外面に細かいハケ目を施している。内面は指押さえである。胎土には角閃石を含んでいる。

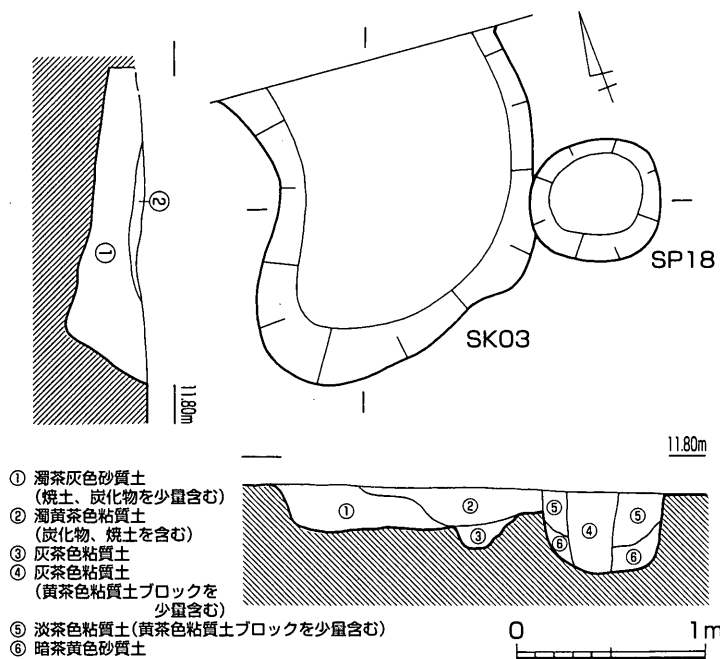
1441は口縁部の内・外面に指押さえが顕著である。体部内面にはヘラケズリを施す。1445の口縁部端部は肥厚している。体部外面にはハケ目を施し、内面の上部にもハケ目が見られ



第353図 V区第2面SK02出土遺物 (1 / 4)

る。胎土には角閃石を含んでいる。1446は高杯で、口縁部は浅い杯部から外反して立ち上がる。杯部は内・外面共にヘラミガキを施している。胎土には角閃石を含んでいる。

以上の出土遺物から、SK02は弥生時代後期後半の所産と考えられる。



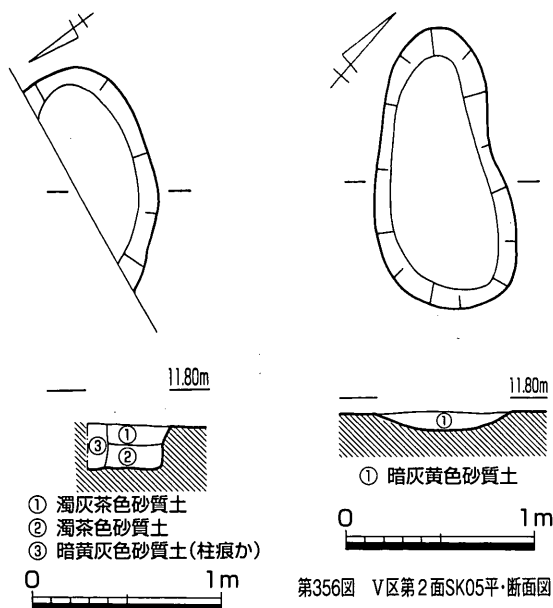
第354図 V区第2面SK03・SP18平・断面図 (1 / 40)

105 40cmあり、柱痕が確認された。淡茶色粘質土と暗茶黄色砂質土で裏込めとしている。遺物は出土していない。

SK03・SP18 (第354図)

調査区北壁際の中央部やや東寄りの、旧G4区で検出した土坑である。北側部分は調査区外になるため、全体の形と規模は不明である。東側部分をSP18により僅かであるが壊されている。平面形は不整形で、南北方向の検出部分は1.6m、東西部分は1.35mである。掘り込みは直線的で、底部は北側に向かって上がっている。深さは40cmで、上部には炭化物と焼土を含む濁黄茶色粘質土が堆積している。焼土の塊も出土している。下部にも炭化物と焼土が少量含まれている。微細な遺物が少量出土している。

SP18は直径0.65mの円形で、深さは



第355図 V区第2面SK04平・断面図(1/40)

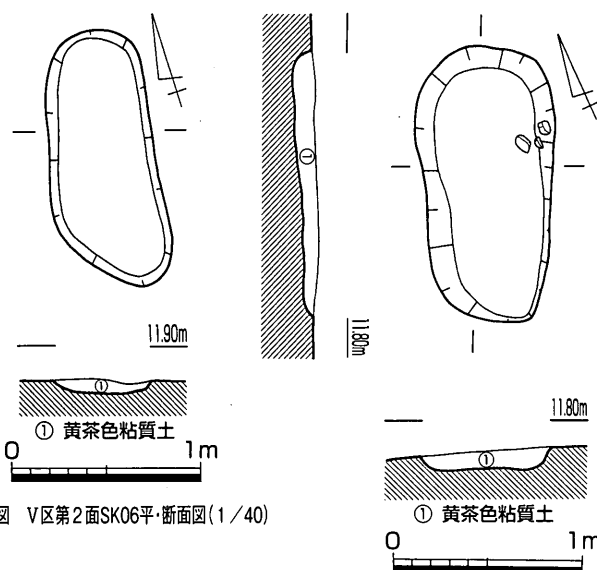
第356図 V区第2面SK05平・断面図(1/40)

SK04 (第355図)

調査区北壁際の中央部やや東寄りの、旧G4区で検出した土坑である。SK03の西側に隣接している。北側部分は調査区外になるため、全体の形と規模は不明である。平面形は楕円形になると考えられ、長径1.1m、短径は検出部分で0.4m、深さは24cmである。掘り込みは急で垂直に近く、埋土は壁際で柱痕のような暗黄灰色砂質土が堆積している。遺物は出土していない。

SK05 (第356図)

調査区北側の旧G4区で検出した土坑である。平面形は長楕円形で、長径1.4m、短径0.6~0.7m、深さ10cmである。掘り込みは緩やかで、埋土は暗灰黄色砂質土の単一層である。微細な遺物が少量出土している。



第357図 V区第2面SK06平・断面図(1/40)

第358図 V区第2面SK07平・断面図(1/40)

SK06 (第357図)

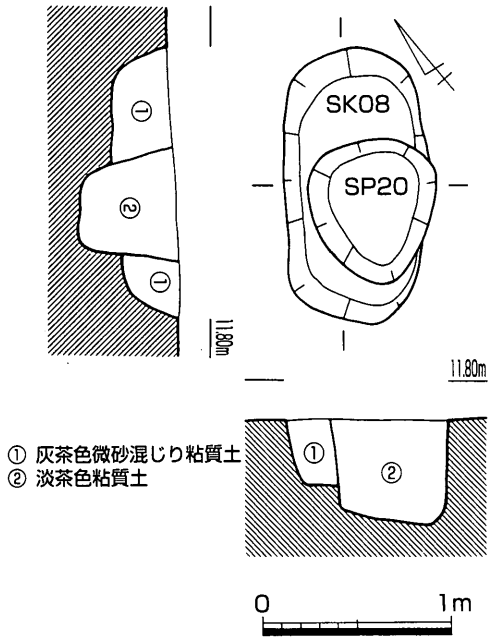
調査区北側の旧G4区で検出した土坑である。平面形は隅丸方形に近いが、南側が突出している。長辺1.3m、短辺0.55m、深さ10cmである。全体に浅く、掘り込みも緩やかである。埋土は黄茶色粘質土の単一層である。微細な遺物が少量出土している。

SK07 (第358図)

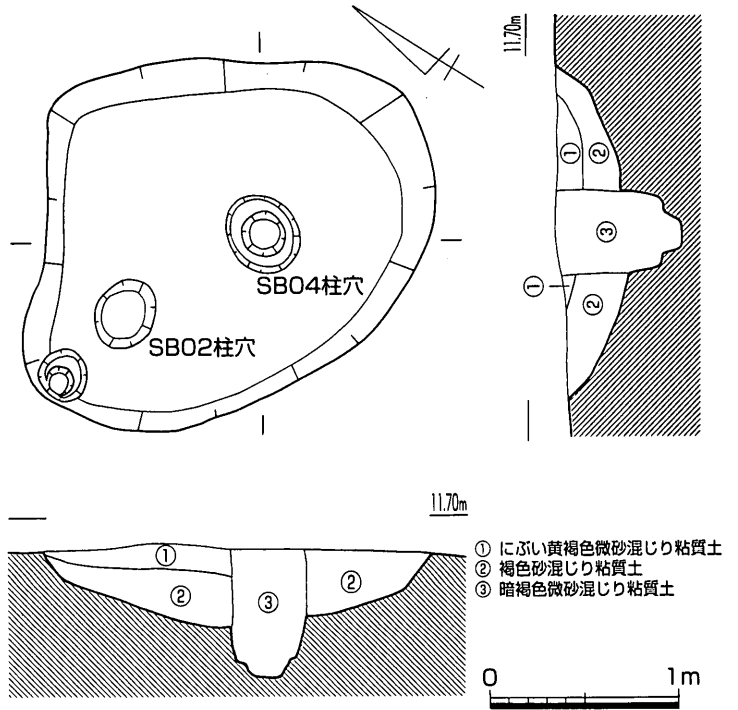
調査区北側の旧G4区で検出した土坑である。平面形は隅丸の長方形で、長辺1.4m、短辺0.6~0.7mで南側が若干狭くなっている。掘り込みは南東部分が急になっている。深さは10cmで、埋土は黄茶色粘質土の単一層である。微細な遺物が少量出土している。

SK08 (第359図)

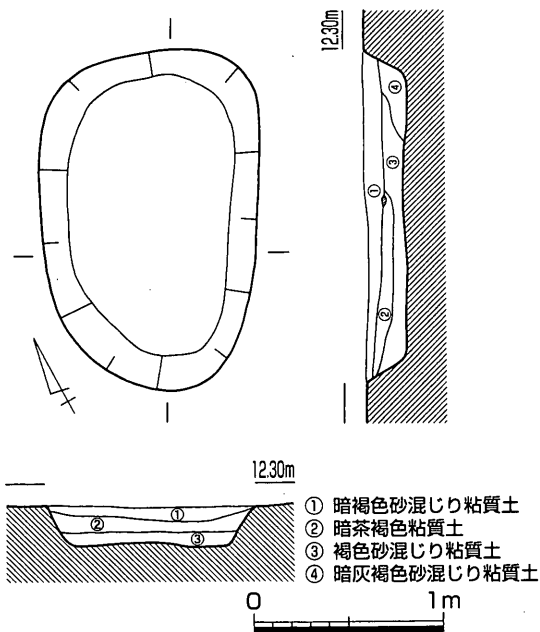
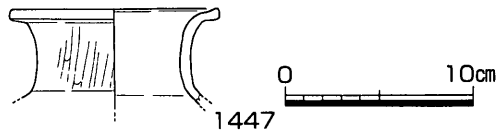
調査区北側部分の東寄り、旧G4区で検出した土坑である。SK03の南側に隣接している。SK08の中央部分はSP20により壊されている。平面形は長方形であるが、北側は丸みを帯びている。長辺1.4m、短辺0.7mである。掘り込みは東側が急になっており、深さは30cmである。埋土は灰茶色微砂混じり粘質土の単一層である。微細な遺物が少量出土している。



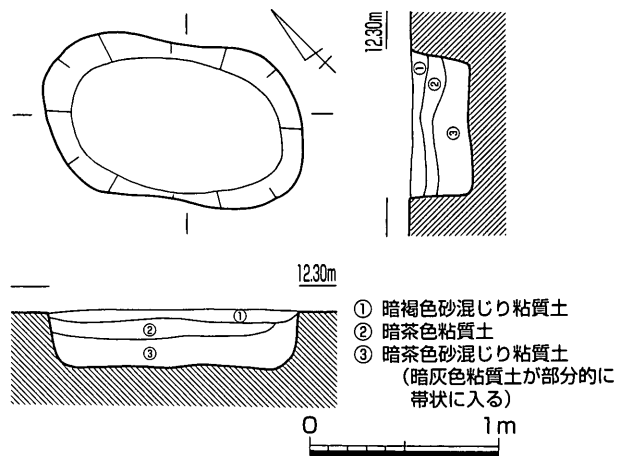
第359図 V区第2面SK08・SP20平・断面図(1/40)



第360図 V区第2面SK09平・断面図(1/40)、出土遺物(1/4)



第361図 V区第2面SK10平・断面図(1/40)



第362図 V区第2面SK11平・断面図(1/40)

SK09 (第360図)

調査区東側のやや北寄りの、旧G1区で検出した土坑である。平面形は不整形で北側部分は角張っているが、南側は丸みを帯びている。南北方向は1.9m、東西方向2.5mである。掘り込みは緩やかで、底部は少し凹凸がある。深さは40cmで、埋土は下層に褐色砂混じり粘質土が堆積し、上層はにぶい黄褐色砂混じり粘質土が堆積している。SK09の埋没後に中央部分にSB04の柱穴が、西側にはSB02の柱穴が掘削されている。

遺物の出土は少ない。1447は土坑の最上部で出土しており、本来的にSK09に伴っていたかは確証に乏しい。外反する頸部から屈曲して口縁部に至り、口縁部は内面を強くナデている。頸部外面にはヘラミガキを施している。

SK10 (第361図)

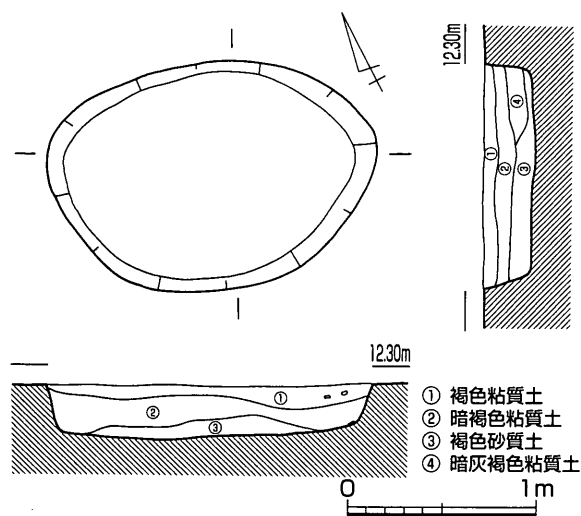
調査区南側のやや東寄りの、旧G1区で検出した土坑である。平面形は隅丸長方形と楕円形の間形態で、南側ほど丸みが強い。長辺1.8m、短辺1.15mである。掘り込みは直線的で、底部は平坦である。深さは20cmあり、埋土は暗褐色系の粘質土が主体となっている。微細な遺物が少量出土している。

SK11 (第362図)

調査区南側のやや東寄りの、旧G1区で検出した土坑で、SK10の北側1mのところに位置している。平面形は隅丸の長方形であるが、北西部分が丸みを帯びている。長辺1.35m、短辺0.8mである。掘り込みは急で垂直に近く、底部は平坦である。深さは30cmあり、埋土は暗褐～暗茶色の粘質土が中心で、下層の暗茶色粘質土層には暗灰色粘質土が帯状に入る部分がある。微細な遺物が少量出土している。

SK12 (第363図)

調査区南側のやや東寄りの、旧G1区で検出した土坑で、SK10の東側4mのところに位置している。平面形は楕円形で、長径1.7m、短径1.2mである。掘り込みは急であるが、とくに北東部分は垂直に近い部分がある。底部は平坦である。深さは30cm弱で、下層には褐色砂質土が堆積している。微細な遺物が少量出土している。

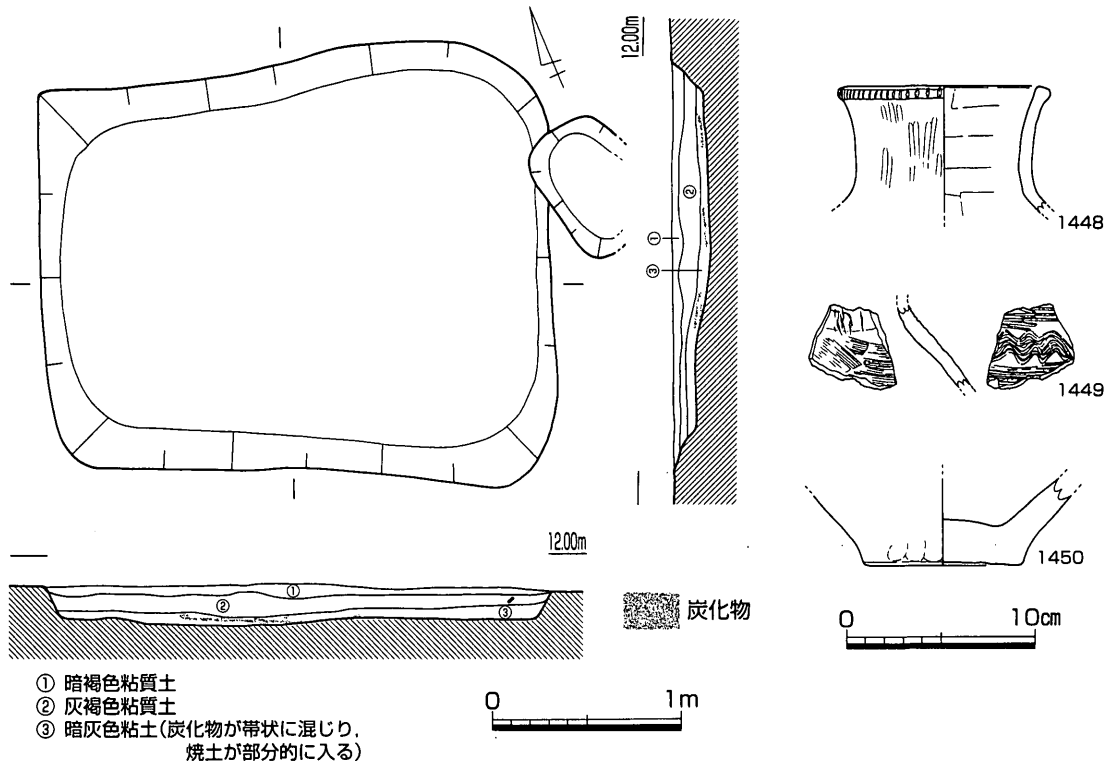


第363図 V区第2面SK12平・断面図 (1/40)

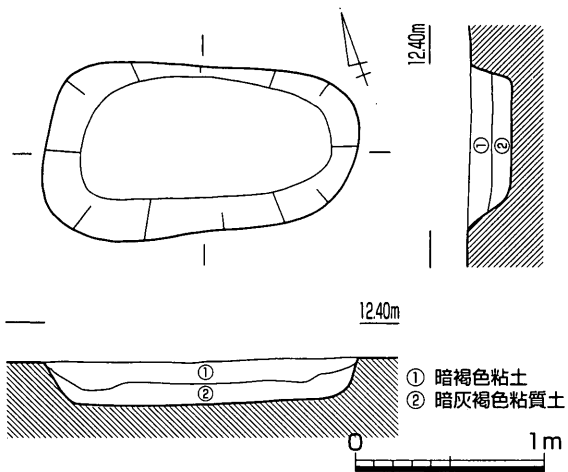
SK13 (第364図)

調査区中央部のやや東側の、旧G1区で検出した土坑である。平面形は幅広の長方形で、長辺2.7m、短辺2.0~2.2mである。掘り込みは南側部分で僅かに段状になっているほかは直線的である。底部は中央部分が少し窪んでいる。深さは20cmで、最下層の暗灰色粘土層には炭化物が帯状に堆積している部分があり、さらに焼土が混じっている。

遺物は3点図化した。全体に量は少ない。1448~1450は壺である。1448は口縁部端



第364図 V区第2面SK13平・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4)



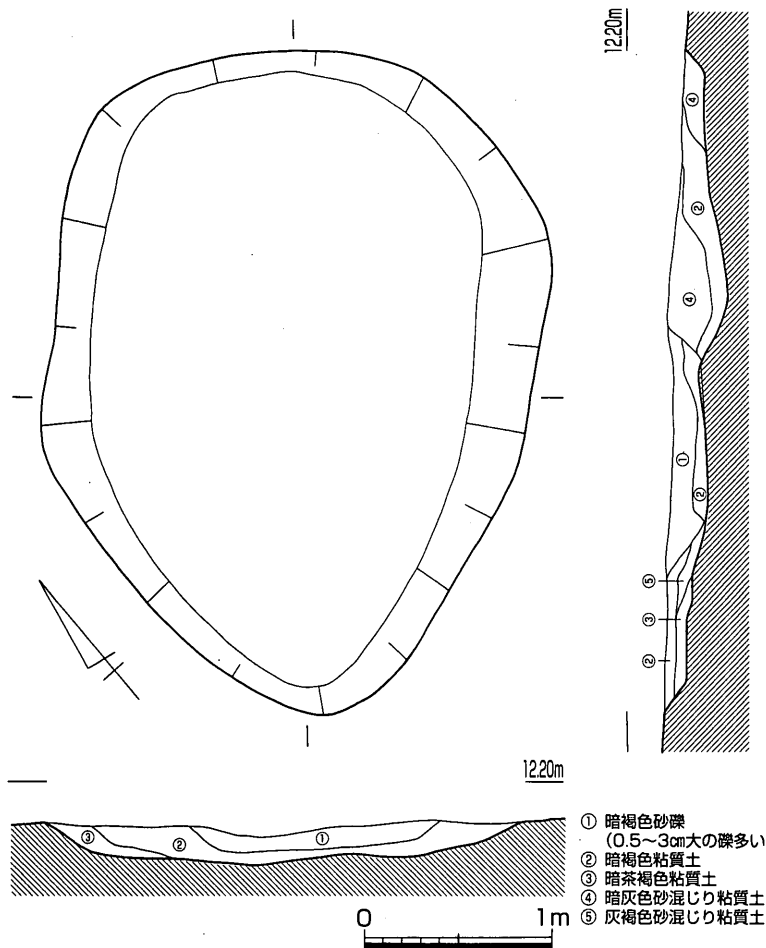
部外面に刻み目を巡らせ、外面にはヘラミガキを施している。1449は体部で、半截竹管による沈線の下に、櫛描波状文と櫛描直線文を施している。

以上の出土遺物から、SK13は弥生時代中期中葉の所産と考えられる。

第365図 V区第2面SK14平・断面図 (1/40)

SK14 (第365図)

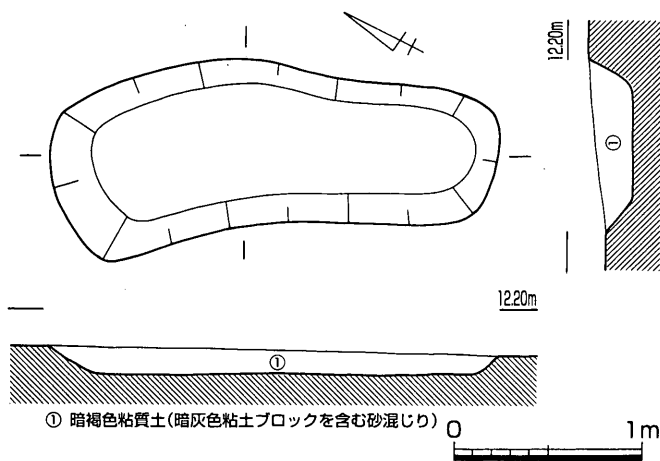
調査区南側のやや東寄りの、旧G1区で検出した土坑である。平面形は隅丸の長方形で、長辺1.6m、短辺0.9mである。掘り込みは直線的で、北東部分は急で垂直に近い。底部は平坦である。深さは20cmで、埋土は上下2層が水平に堆積している。上層は暗褐色の粘土である。微細な遺物が少量出土している。



SK15 (第366図)

調査区中央部のやや東側の、旧G1区で検出した土坑である。平面形は隅丸の長方形と楕円形の間形態で、南西部分の丸みが強くなっている。長辺3.3m、短辺2.5mである。掘り込みは緩やかで、底部には凹凸があり南西部分は浅く、逆に北東部分が低くなっている。深さは10~30cmで、平面的な大きさの割には浅くなっている。埋土は暗褐色粘質土が主体となっている。平面的には検出できなかったが、土層断面を検討すると、埋没後に中央部分を再掘削していることが分かり、この部分には暗褐色砂礫土が堆積している。微細な遺物が少量出土している。

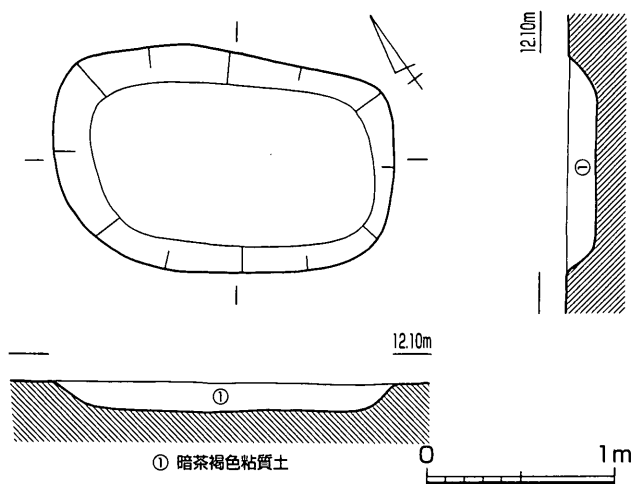
第366図 V区第2面SK15平・断面図 (1/40)



SK16 (第367図)

調査区中央部のやや東側の、旧G1区で検出した土坑で、SK15の南側に隣接している。平面形は長方形で、長辺2.3m、短辺0.8~0.9mと細長くなっている。掘り込みは緩やかで、底部は平坦である。深さは10~20cmで、埋土は暗褐色粘質土の単一層である。微細な遺物が少量出土している。

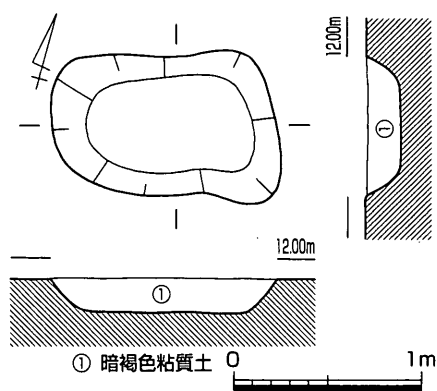
第367図 V区第2面SK16平・断面図 (1/40)



SK17 (第368図)

調査区中央部のやや東側の、旧G1区で検出した土坑で、SK16の北東側に隣接している。平面形は長方形で、長辺1.8m、短辺1.1mである。掘り込みは直線的であるが緩やかで、底部は平坦である。深さは15cmで、埋土は暗茶褐色粘質土の単一層である。微細な遺物が少量出土している。

第368図 V区第2面SK17平・断面図(1/40)



SK18 (第369図)

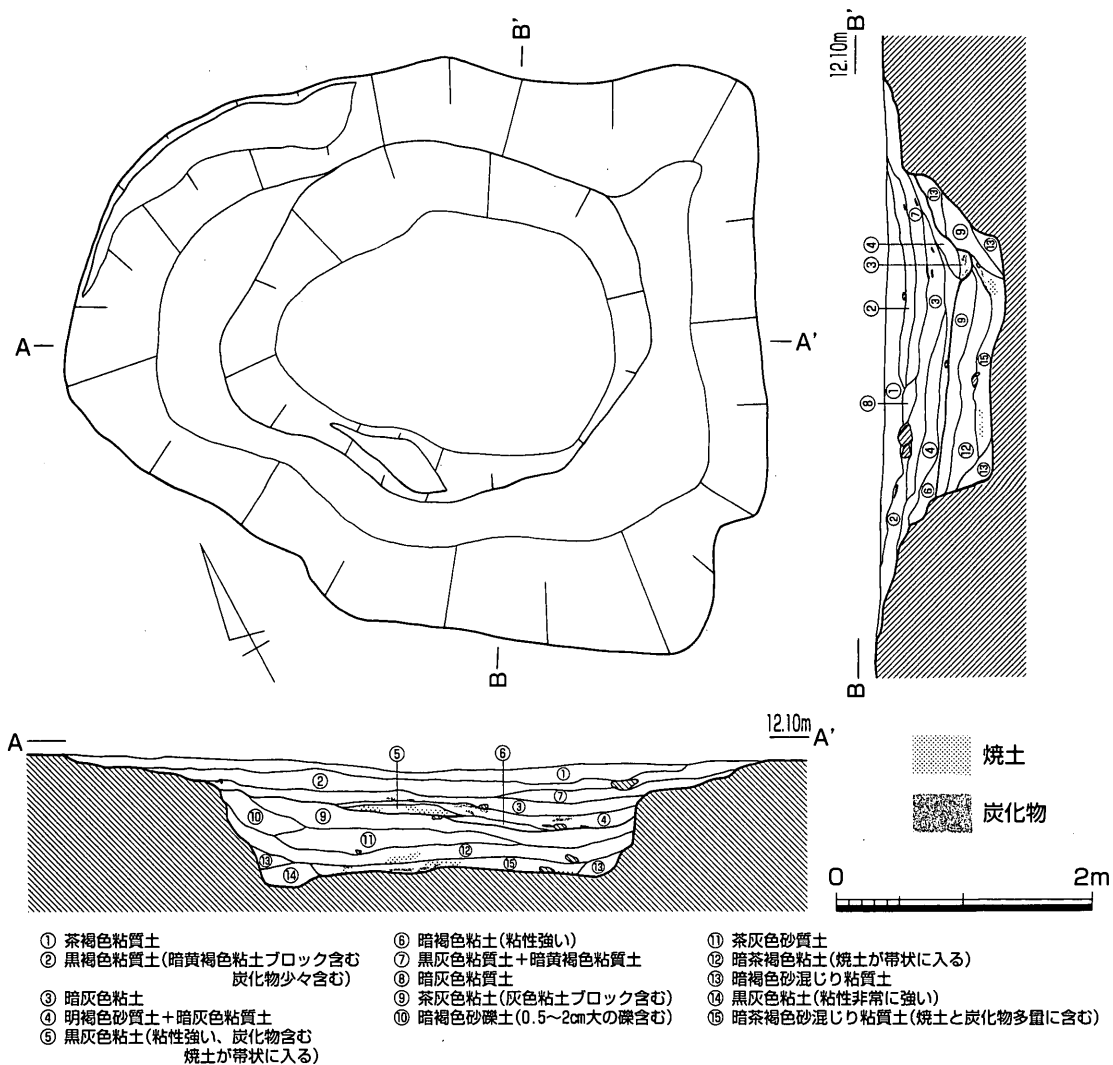
調査区中央部のやや東側の、旧G1区で検出した土坑で、SK13の北西側に隣接している。平面形は長方形であるが、南東隅が突出している。長辺1.2m、短辺0.7mである。掘り込みは直線的で、深さは18cm、埋土は暗褐色粘質土の単一層である。微細な遺物が少量出土している。

第369図 V区第2面SK18平・断面図(1/40)

SK19 (第370~372図)

調査区中央部のやや東側の、旧G1区で検出した土坑で、SK13の南側3mのところの位置している。平面形は方形であるが、北西部は丸みを帯びて南東部に比べて狭くなっている。長辺(A-A'方向)5.5m、短辺(B-B'方向)4.2mである。緩やかに10~20cmの深さでテラス状の面を形成した後に60cm近く急激に落ち込んでいる。下部の落ち込み部分の掘り込みは凹凸があり、段になる部分もある。一方で南側部分のように垂直に近い掘り込みになっている部分もある。検出面から底部までの深さは0.9~1.0mある。底部は北東部分が全体に低く、また掘り込みの下端部分が深くなる傾向がある。

埋土は底部から40cmほど上の⑨茶灰色粘土層までの下層と、そこから上部の上層とに大別出来る。最下層の暗茶褐色砂混じり粘質土層には炭化物と焼土が多量に含まれている。底部も部分的に焼けており、火を焚いた痕跡がある。その上部の暗茶褐色粘質土層にも焼土が帯状に含まれている。そして下層の上部には灰色粘土ブロックを含む茶灰色粘土が堆積しているが、この層は下層を埋め戻した土と考えられる。同様に、上層の下部にも炭化物と焼土が帯状に含まれる粘性の強い黒灰色粘土と、暗褐色粘質土が堆積している。そしてそのテラス状になる部分まで埋まった後に、全体に黒褐色粘質土と茶褐色粘質



第370図 V区第2面SK19平・断面図(1/40)

土で埋めている。以上のことから、SK19は大きく2回に分けて火を使う行為を行っていたことが分かる。

このSK19の付近にはSD09などの溝が南北にそれぞれあり、この溝に挟まれた部分に埋土に炭化物と焼土を含むSK13がある。またSK13とSK19を結ぶように細い水路のような溝があると同時に、土坑が集中している。このSK19を中心とした部分は火を使用する作業を行った場所の可能性が高い。

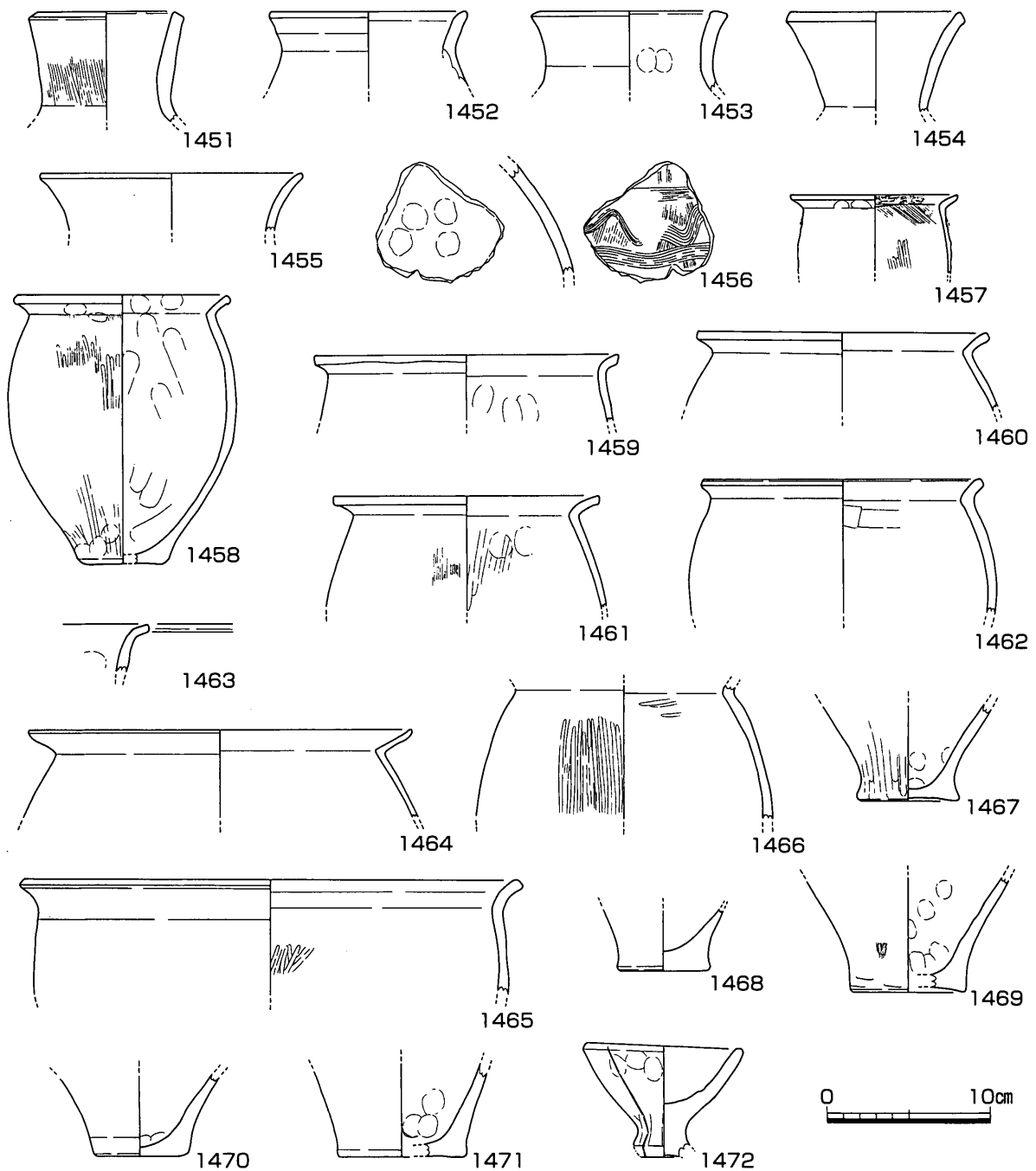
遺物は土器・石器ともに出土しているが、主に上層から出土している。

1451~1456は壺である。1451の頸部から口縁部にかけては全体に外傾している。外面にはハケ目を施している。1456の外面には櫛描直線文と櫛描波状文を施しているが、下部の櫛描直線文は少し蛇行している。1457~1466は甕である。1457は口縁部内面にハケ目を施し、体部内面の下半にはヘラミガキを施している。1458の体部最大径は中央にあり、外面にはヘラミガキを施している。1461は体部内面にヘラミガキを施している。1463は壺の口縁部にしては薄いので甕に分類した。1464は全体に薄手である。1465は緩やかに外反する如意形口縁で、体部内面にはヘラミガキを施している。1472は低い脚台の付く小型の鉢で、体部は若干内湾している。しかし下部をつまみと見れば蓋になる可能性がある。

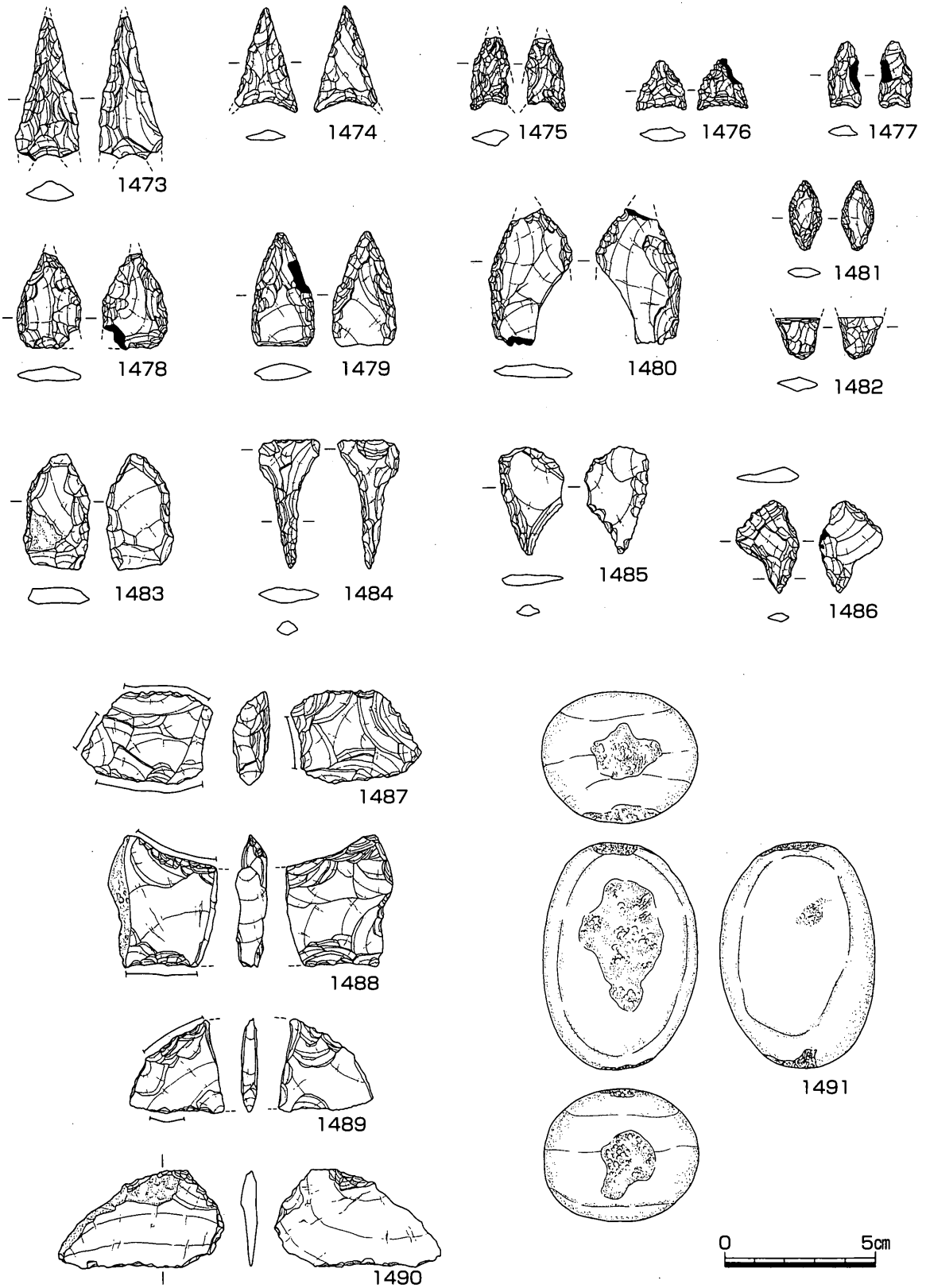
1473~1477は凹基の石鏃である。1473の鏃身は長い。逆に1476の鏃身は短く幅広である。1478・1479

は平基の石鏃である。1478の鏃身下半は丸みを帯びている。1481は凸基、1482は凸基有茎式の基部である。1483は石鏃の未製品である。1484～1486は石錐である。1485は角度のある剥離によって錐部を作り出している。1487～1489は楔形石器である。1487は両面とも両極打撃の痕跡を良く残している。1488は片側の側縁部に自然面を残している。1490はスクレイパーで、刃部は剥片の鋭い部分を利用し、僅かに調整を加えている。裏面には主要剥離面を残している。1491は敲石である。上下両端に加えて、片側側面を使用している。

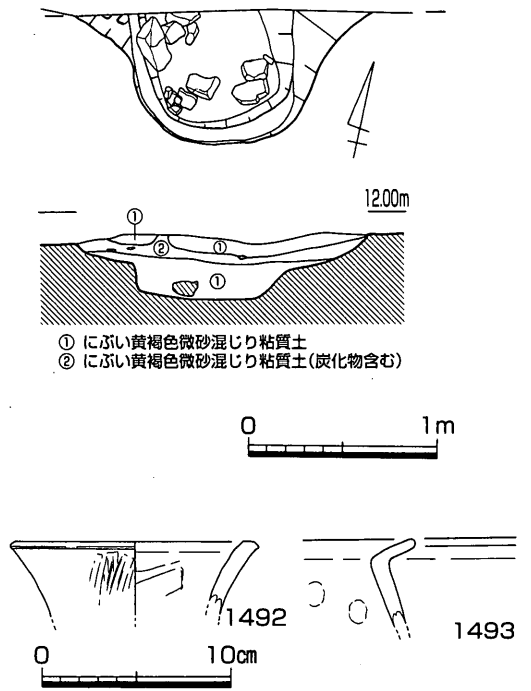
以上の出土遺物では、1459と1465が少し古い時期の特徴を残しているが、全体に見ればSK19は弥生時代中期中葉の所産と考えられる。



第371図 V区第2面SK19出土遺物(1)(1/4)



第372图 V区第2面SK19出土遗物 (2) (1/2)



第373図 V区第2面SK20平・断面図(1/40)、出土遺物(1/4)

SK20 (第373図)

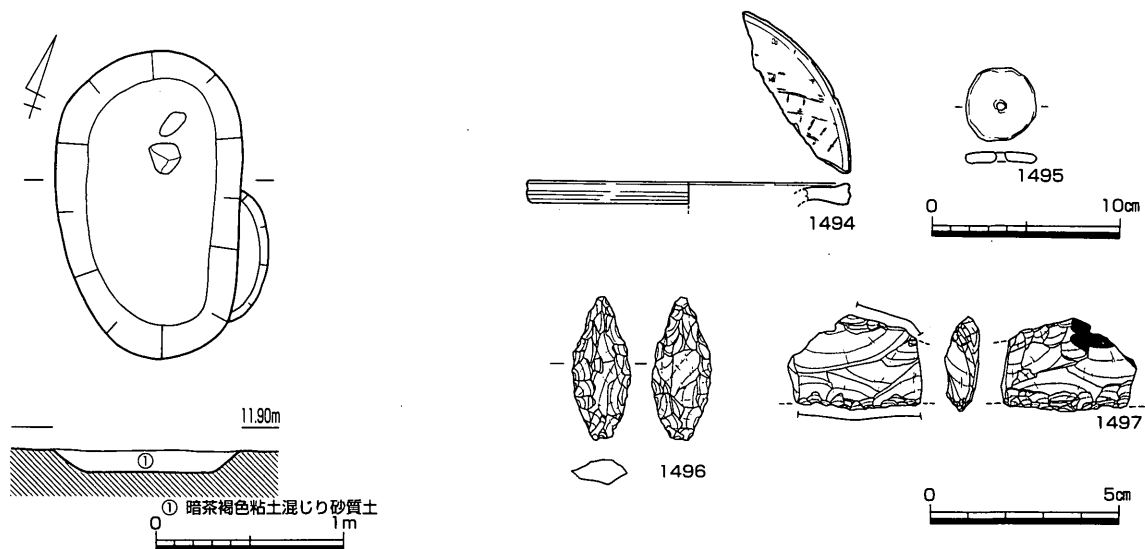
調査区北側のやや東寄りの、旧G1区の西壁際で検出した土坑である。北側部分は調査区外になるため、全体の形状と規模は不明である。平面形は不整形で、南側は方形に近いが、北側の壁際では広がっている。検出した部分の南北方向は0.65m、東西方向は1.0~1.5mになる。掘り込みは段になり、テラス状の部分形成している。全体の深さは30cmであるが、一段低くなっている部分は15cmの深さである。全体的にはにぶい黄褐色微砂混じり粘質土が堆積しているが、一段低くなっている部分には炭化物が含まれている。

出土した遺物は少ない。1492は壺の口縁部で、僅かに外反している。外面にはハケ目を施している。1493は甕で、口縁部は直線的である。

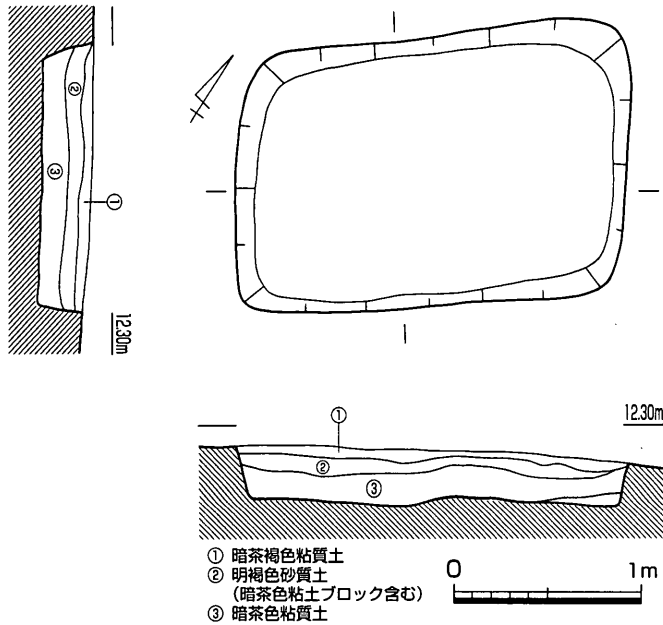
SK21 (第374図)

調査区北側のやや東寄りの、旧G1区の西壁際で検出した土坑である。SK20の東側に隣接している。平面形は楕円形で、長径1.6m、短径1.0mである。掘り込みは緩やかで、底部は平坦である。深さは10cmで、埋土は暗茶褐色砂混じり粘質土の単一層である。

1494は壺で、口縁部端部を上方に拡張している。内面には摩滅しているが斜格子文が認められる。1495は紡錘車である。1496は凸基の石鏃である。1497は楔形石器で、下部には細かい剥離面が顕著である。



第374図 V区第2面SK21平・断面図(1/40)、出土遺物(1/4、1/2)



第375図 V区第2面SK22平・断面図 (1/40)

SK22 (第375図)

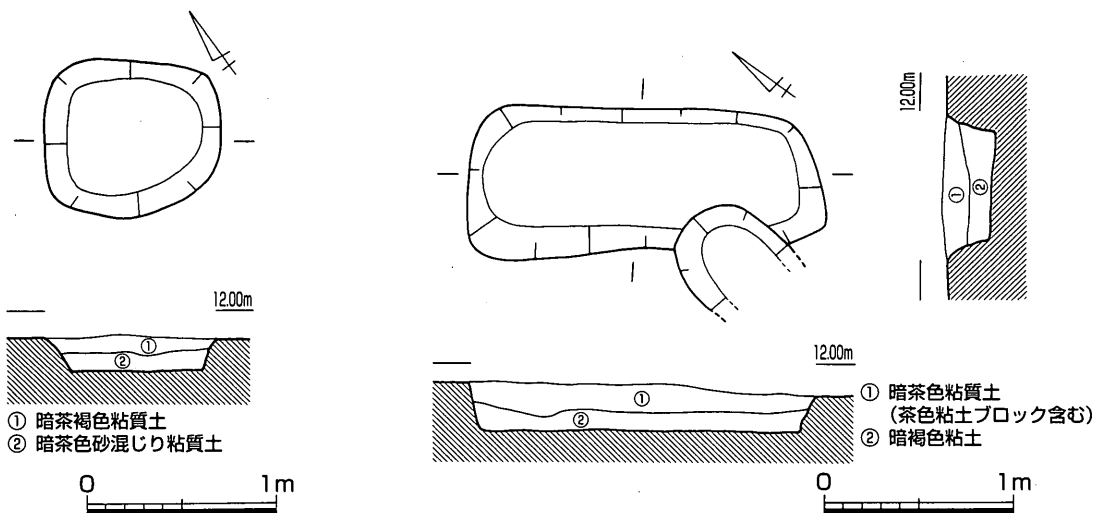
調査区南側中央の、旧G 3区で検出した土坑である。図示はしていないが、北西部分をSK31によって壊されている。平面形は長方形で、均整のとれた形になっている。長辺2.1m、短辺1.4mである。掘り込みは急で、北東部分と南側部分では垂直に近くなっている。底部の西側は少し低くなっている。深さは25cmで、埋土の中層には暗茶色粘土ブロックを含む明褐色砂質土が堆積している。微細な遺物が少量出土している。

SK23 (第376図)

調査区中央部の旧G 3区で検出した土坑である。平面形は方形であるが、南側の部分が丸くなっている。一辺0.8~0.9m、深さ20cmである。掘り込みは直線的で、掘り込みの下端部分は角張っている。埋土は暗茶褐色粘質土と暗茶色砂混じり粘質土が水平に堆積している。微細な遺物が少量出土している。

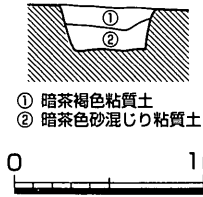
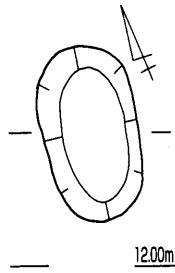
SK24 (第377図)

調査区中央部の旧G 3区で検出した土坑で、SK23の南西側に隣接している。南側は部分的にSK25によって壊されている。平面形は長方形で、長辺1.9m、短辺0.8mである。掘り込みは急で、東側部分は垂直に近い部分がある。深さは25cmで、埋土の下層は暗褐色粘土、上層は茶色粘土ブロックを含む暗茶色粘質土が堆積している。微細な遺物が少量出土している。



第376図 V区第2面SK23平・断面図 (1/40)

第377図 V区第2面SK24平・断面図 (1/40)



- ① 暗茶褐色粘質土
- ② 暗茶色砂混じり粘質土

第378図 V区第2面SK25平・断面図(1/40)

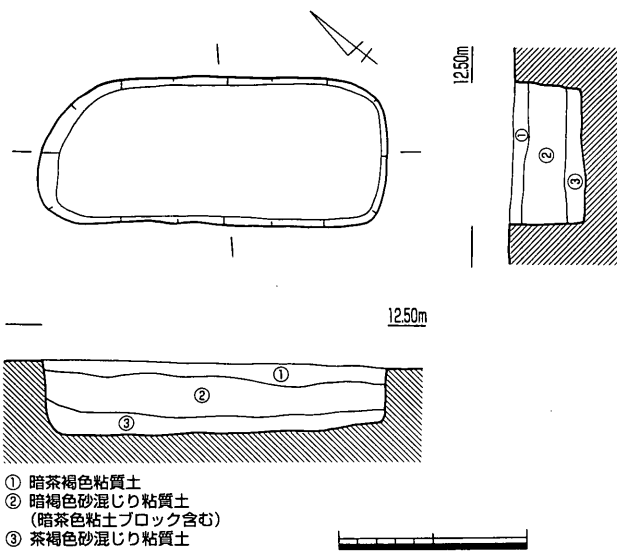
SK25 (第378図)

調査区中央部の旧G 3区で検出した土坑で、SK24と一部が重なっている。平面形は楕円形で、長径0.85m、短径0.5mである。掘り込みは急で、底部は平坦である。深さは20cmで、埋土は暗茶色系の粘質土である。微細な遺物が少量出土している。

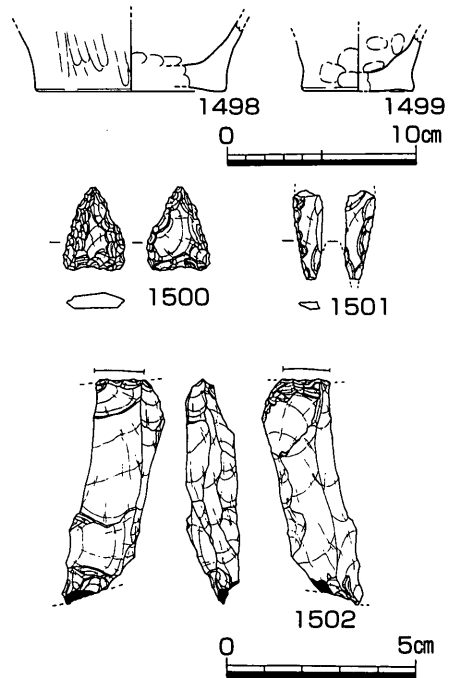
SK26 (第379図)

調査区南側中央部の、旧G 3区で検出した土坑で、SH02と重なりSH02の埋没後に掘削されている。平面形は長方形で、長辺1.8m、短辺0.8mである。掘り込みは急で、垂直に近いところが多い。底部は平坦であるが、北西部分が少し低くなっている。深さは40cmで、埋土は暗茶褐色系の粘質土が中心になっている。

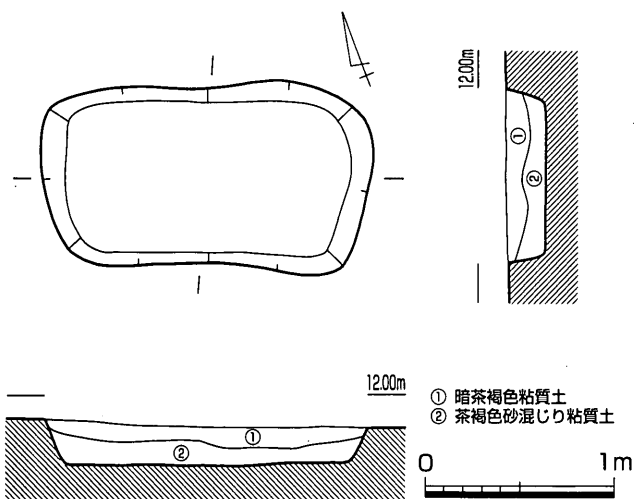
遺物は少量出土しているが、SH02の埋没後に掘削されているため、あるいはSH02からの混入とも考えられる。1498・1499は壺および甕の底部である。1500は凹基の石鏃、1501は石錐の錐部である。1502は楔形石器で、両極打撃の痕跡が顕著である。分割が進んだ残核のような状況である。



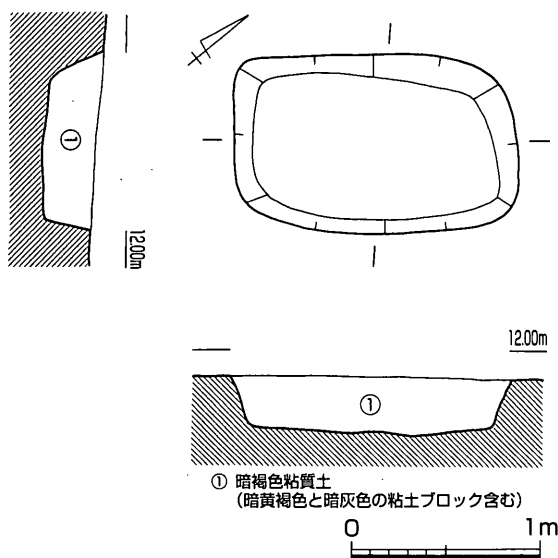
- ① 暗茶褐色粘質土
- ② 暗褐色砂混じり粘質土
(暗茶色粘土ブロック含む)
- ③ 茶褐色砂混じり粘質土



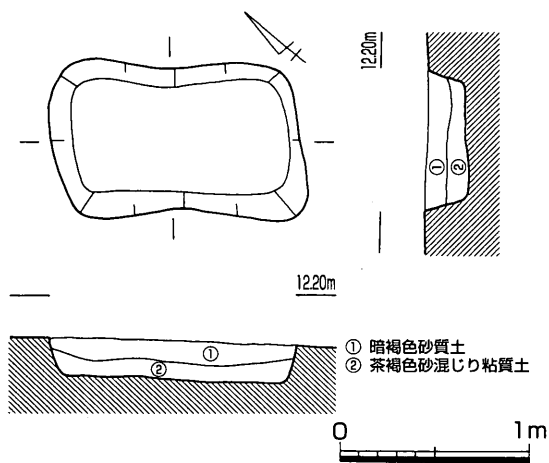
第379図 V区第2面SK26平・断面図(1/40)、出土遺物(1/4、1/2)



第380図 V区第2面SK27平・断面図 (1/40)



第381図 V区第2面SK28平・断面図 (1/40)



第382図 V区第2面SK29平・断面図 (1/40)

SK27 (第380図)

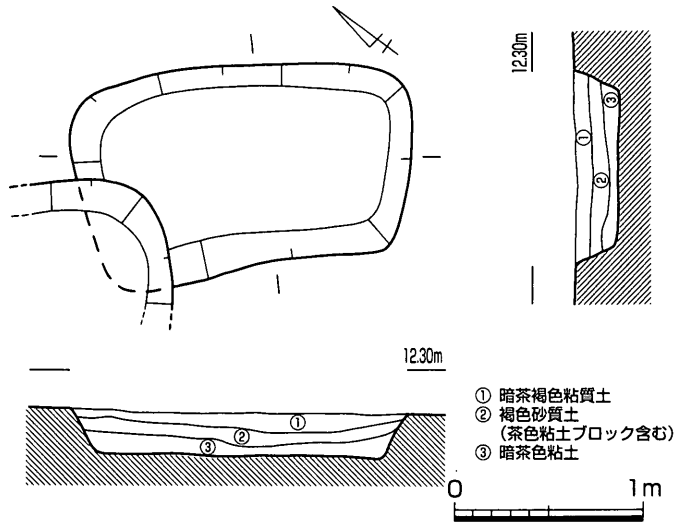
調査区中央部の旧G 3区で検出した土坑で、SK25の西側3mのところに位置している。平面形は長方形で、長辺1.7m、短辺0.9mである。掘り込みは直線的で、底部は平坦である。深さは20cmで、埋土は暗茶褐色粘質土と茶褐色砂混じり粘質土である。遺物は出土していない。

SK28 (第381図)

調査区南側中央の、旧G 3区で検出した土坑で、SK27の南側2.5mのところに位置している。平面形は長方形で、長辺1.5m、短辺0.9mである。掘り込みは直線的で、底部はやや凹凸がある。深さは30cmで、埋土は暗褐色粘質土の単一層である。埋土には暗黄褐色と暗灰色の粘土ブロックを含んでおり、一度に埋め戻した状況である。遺物は出土していない。

SK29 (第382図)

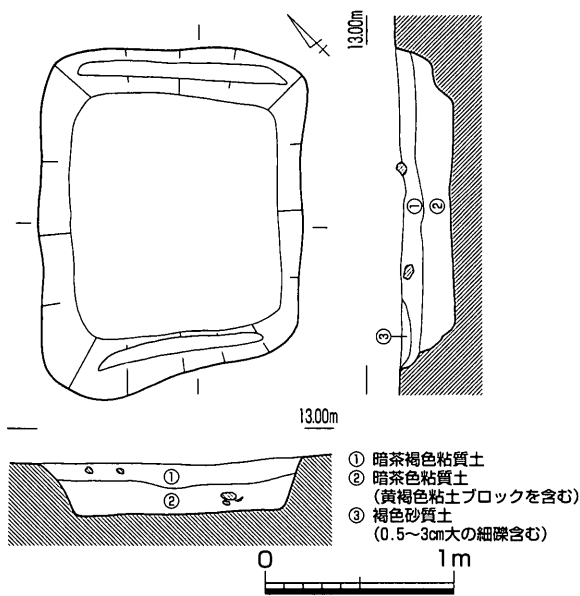
調査区中央部の旧G 3区で検出した土坑である。平面形は長方形であるが、中央部分が少し狭くなっている。長辺1.3m、短辺0.8mである。掘り込みは直線的で急になっている。深さは20cmで、埋土は暗褐色砂質土と茶褐色砂混じり粘質土である。遺物は出土していない。



第383図 V区第2面SK30平・断面図 (1/40)

SK30 (第383図)

調査区中央部の旧G 3区で検出した土坑で、SH04と重なっておりSH04の埋没後に掘削されている。また北西の隅の部分にSK32によって壊されている。平面形は長方形で、長辺1.8m、短辺1.0mである。掘り込みは直線的で、底部は平坦である。深さは22cmで、埋土は中層に茶色粘土ブロックを含む褐色砂質土が堆積している。SK22の埋土と埋没状況が同じになっている。微細な遺物が少量出土している。



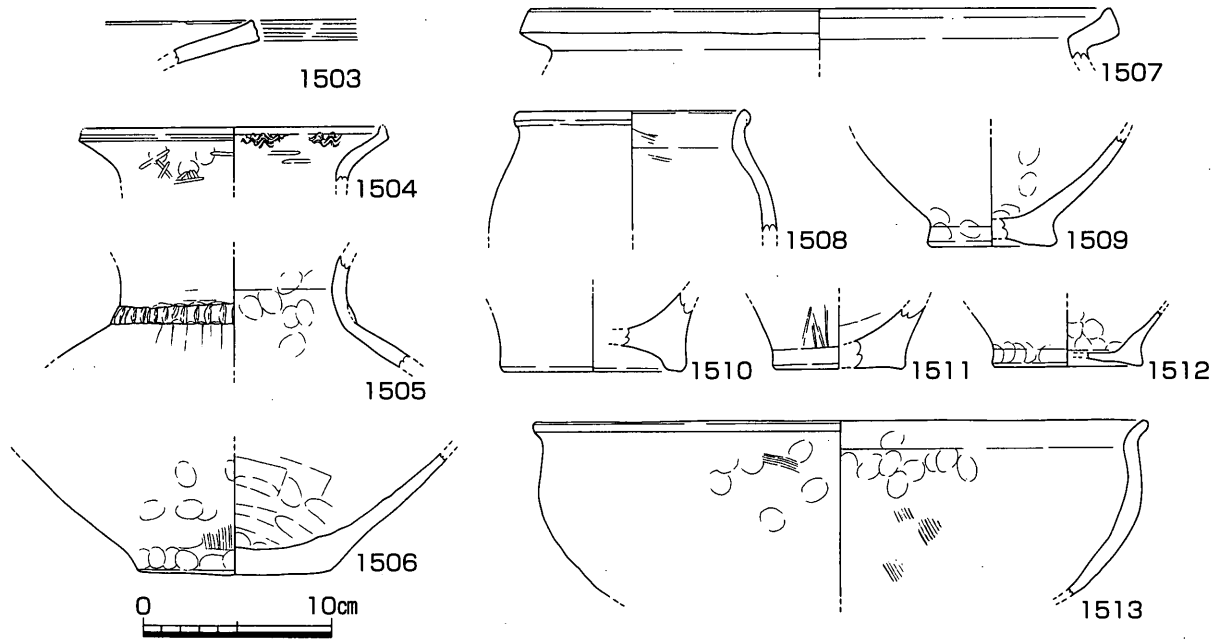
第384図 V区第2面SK31平・断面図 (1/40)

SK31 (第384~385図)

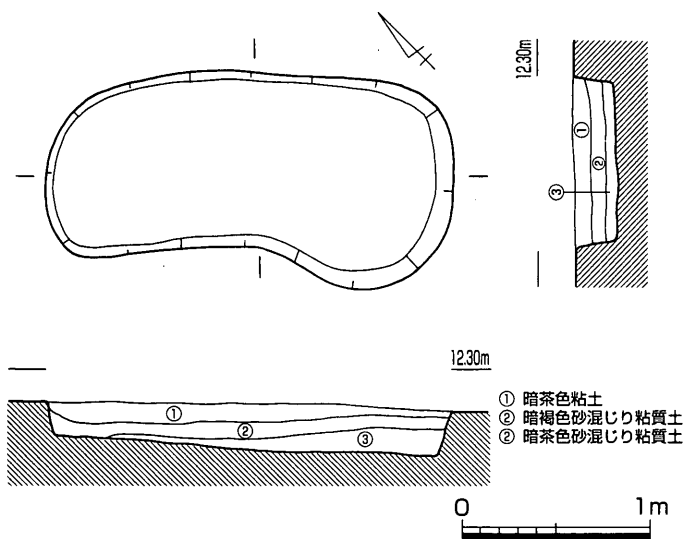
調査区中央部の旧G 3区で検出した土坑である。平面形は幅広な長方形であるが、南西部分が斜めになっている。長辺は1.6~1.9m、短辺は1.4mである。長辺部分の掘り込みは直線的であるが、短辺側は段になっている。底部は平坦になっている。深さは30cmで、埋土の下層には黄褐色粘土ブロックを含む暗茶色粘質土が堆積している。

1503~1506は壺である。1504は口縁部端部を上方に拡張している。内面には櫛描波状文を施している。外面にはヘラミガキを施している。1505は頸部に刻目突帯を貼り巡らせている。1506は底部内面付近を指でナデている。1507・1508は甕である。1508の

口縁部は僅かに外反するが直立に近く、端部を外側に肥厚させている。1509~1512は甕の底部と考えられる。1509の底部は突出して上げ底になっている。鉢の底部になるかもしれない。1510は短い脚台が付き、1512は薄く、上げ底である。1513は鉢で、体部中央部分が厚くなっている。内・外面に僅かにハケ目が認められる。



第385図 V区第2面SK31出土遺物 (1/4)



第386図 V区第2面SK32平・断面図 (1/40)

SK32 (第386図)

調査区中央部の旧G 3区で検出した土坑で、SK30と重なっている。平面形は隅丸の長方形で、南側の隅が丸みを帯びて突出している。長辺2.1m、短辺0.9~1.1mである。掘り込みは急で、長辺部分は垂直に近くなっている。底部は北西から南東に向かって緩やかに下がっている。深さは25cmで、埋土は暗茶~暗褐色系の粘質土である。微細な遺物が少量出土している。

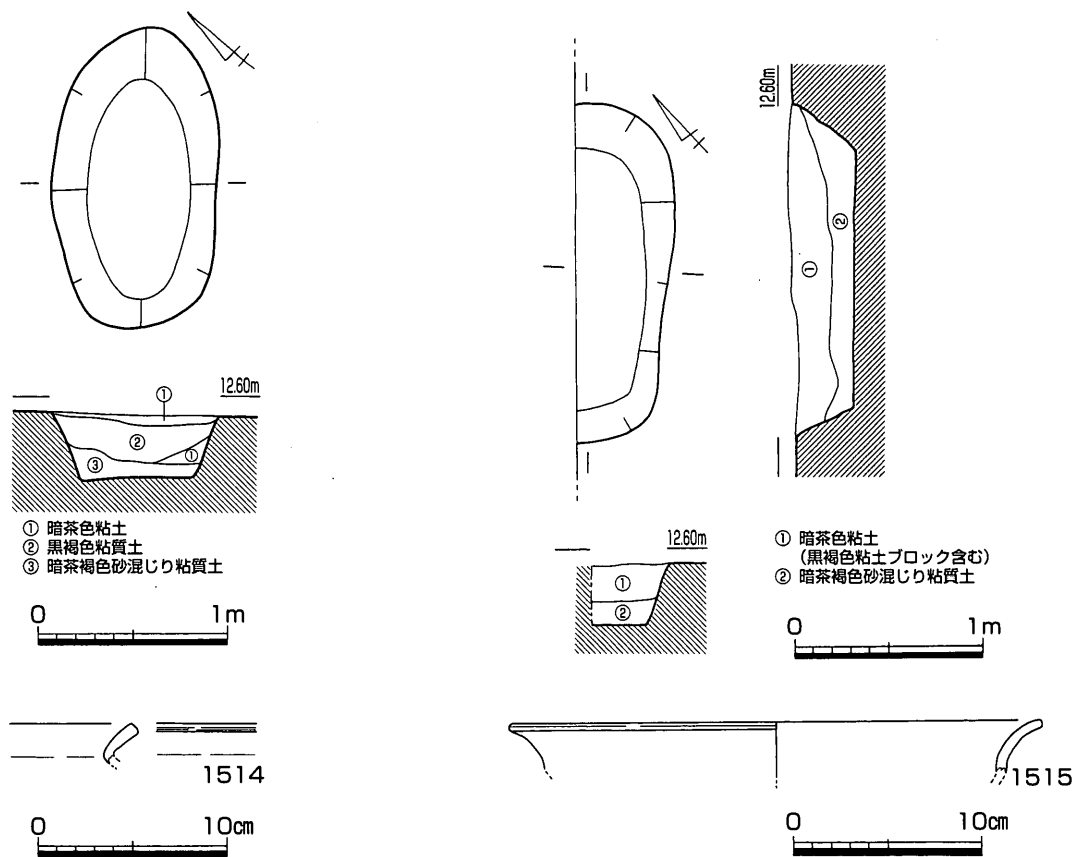
SK33 (第387図)

調査区南側のやや西寄りの、旧G 3区で検出した土坑である。平面形は楕円形で、長径1.5m、短径0.9mである。掘り込みは直線的になっている。深さは35cmで、埋土の中層部分には黒褐色粘質土が堆積している。

遺物は少量出土している。1514は甕の口縁部で、内・外面をナデているが、摩滅気味である。

SK34 (第388図)

調査区南側のやや西寄りの、旧G 3区西壁際で検出した土坑で、SK33の西側に隣接している。西側



第387図 V区第2面SK33平・断面図(1/40)、出土遺物(1/4) 第388図 V区第2面SK34平・断面図(1/40)、出土遺物(1/4)

部分は調査区外になり、全体の形状と規模は不明である。平面形は検出した部分から考えると、隅丸の長方形になると考えられ、長辺1.7m、短辺は検出した部分で0.5mである。掘り込みは直線的で、底部は平坦になっている。深さは30cmで、埋土の上層には黒褐色粘土ブロックを含む暗茶色粘土が堆積している。

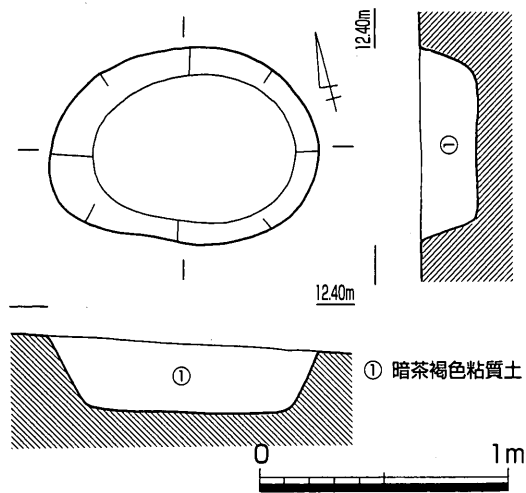
遺物は少量出土している。1515は高杯の口縁部で、全体に強く外反している。全体に摩滅している。出土遺物から、SK34は弥生時代後期中葉頃の所産と考えられる。

SK35 (第389図)

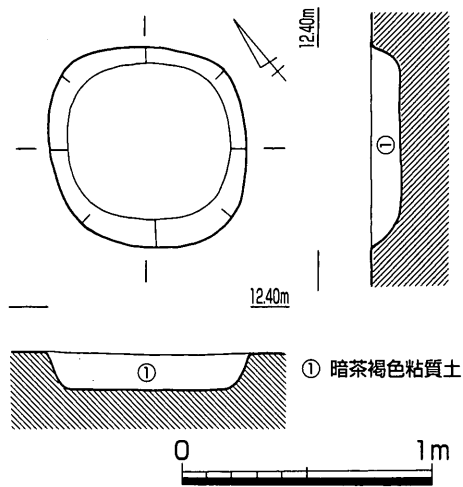
調査区中央部の、旧G3区西壁際で検出した土坑である。平面形は楕円形で、長径1.1m、短径0.75mである。掘り込みは西側部分のほうが緩やかである。深さは25cmで、底部は西側から東側に向かって少し下っている。埋土は暗茶褐色粘質土の単一層である。微細な遺物が少量出土している。

SK36 (第390図)

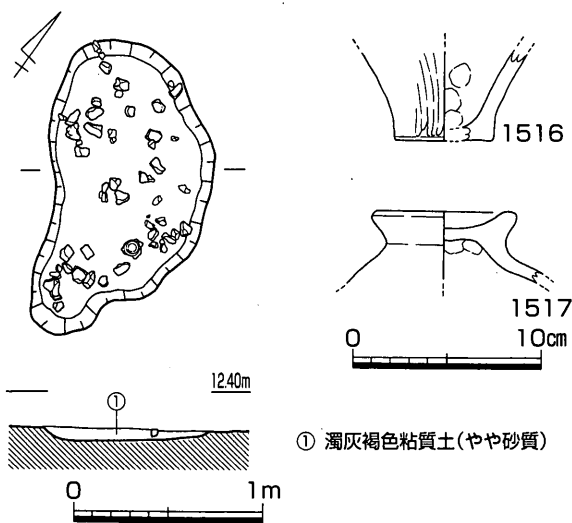
調査区中央部の、旧G3区西壁際で検出した土坑で、SK35の北東5mのところに位置している。平面形は隅丸方形で、一辺0.75mである。掘り込みは北東部分が急になっている。深さ15cmで、埋土は暗茶褐色粘質土の単一層である。微細な遺物が少量出土している。



第389図 V区第2面SK35平・断面図(1/30)



第390図 V区第2面SK36平・断面図(1/30)

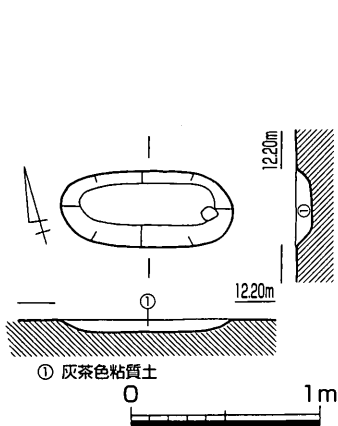


第391図 V区第2面SK37平・断面図(1/40)、出土遺物(1/4)

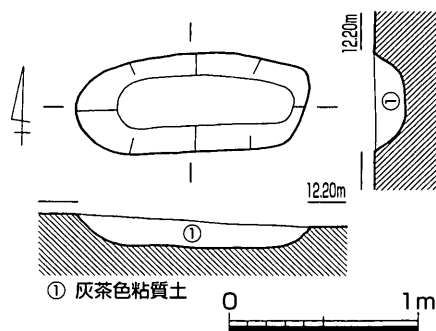
SK37 (第391図)

調査区西側の中央部の、旧G7区で検出した土坑である。平面形は不整形で南西部分が突出している。北東-南西部分で1.5m、北西-南東方向で0.8m、突出した部分は幅0.4mである。掘り込みは全体に緩やかで、深さは6cmと浅い。埋土は濁灰褐色粘質土の単一層である。

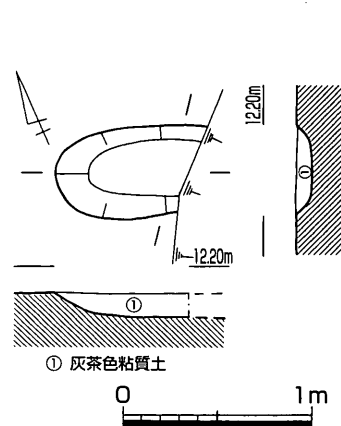
拳大の礫と共に土器が出土しているが、量は少ない。1516は甕の底部で、外面にヘラミガキを施している。1517は蓋で、つまみ部は窪んでいる。



第392図 V区第2面SK38平・断面図(1/40)



第393図 V区第2面SK39平・断面図(1/40)



第394図 V区第2面SK40平・断面図(1/40)